

---

# いつか見た虹の向こう側

宙埜ハルカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか見た虹の向こう側

### 【Nコード】

N2967Q

### 【作者名】

宙埜ハルカ

### 【あらすじ】

社会人一年生の美緒は、自分が提案した結婚記念日デートで姉夫婦を事故で亡くした。そのため美緒は、姉夫婦の忘れ形見である拓都の母親になろうと決意し、仕事と子育てに翻弄されながらも、一生懸命生きていた。そして3年後、拓都の小学校の入学式の時、拓都の担任だと紹介された人を見て、驚愕した。その人は、美緒がシングルマザーとして生きて行こうと決意した時まで恋人だった人だった。

## #01：いきなりシングルマザー（前書き）

新連載を始めました。どうぞよろしくお願いします。

## #01：いきなりシングルマザー

それは三月の始めの日曜日。

私のふとした閃きひらめきが自分自身も周りの人々の人生も大きく変えてしまふ切っ掛けになるなんて、この時はまだ気付くはずもなかった。

私、篠崎美緒シノザキミオは社会人になって約一年。念願の県職員の公務員に合格した時は、今までの苦勞が報われた気がした。早くに父を亡くし、苦勞した母がいつも言っていた事、「女も一生続けられる仕事を持たないといけないよ。何か資格を取ったり、男の人と同等の評価をしてもらえる仕事に就かなきゃ」と。そんな母の苦勞を見て来た私と姉は、母の言葉をしっかり胸に刻み、成長した。

姉は高校卒業後、看護専門学校を出て、看護師になった。私は、地元国立大学に進学し、公務員を目指した。公務員なら男女の差は無い。そして、念願がなつて最初の辞令が下つたのは、実家から車で3時間の山と海に囲まれたK市にある県の出先機関。生まれて初めての家族と離れての一人暮らしに、最初は戸惑つたものの、地方故の住民の人のよさに触れるに従い、そこでの生活にも慣れていった。

車で3時間の距離なので、ほとんどの週末実家へ帰って過ごしていた私は、3月始めの金曜日の夜、いつものように車で実家へ帰つた。そしてのんびりと過ごして、職場のあるK市に帰ると言う日曜日の朝、何気なくリビングのカレンダーを見た。

そのカレンダーの3月22日の所に大きく花丸がしてあった。何の印だろうとしばらく考えて、思い出した。そうだ、姉、篠崎美那シノザキミナと義兄拓海タクミンの結婚記念日だ。

姉は看護師として働いていた頃、入院患者だった義兄、拓海と出逢つた。義兄の猛烈なアプローチの末、二人は付き合い始めた。そ

の頃まだ大学生だった義兄が卒業間近になった頃、姉が妊娠している事に気づき、義兄の卒業と同時に結婚し、義兄は婿養子として篠崎の家に同居してくれるようになった。母と姉夫婦と可愛い甥、そして私の5人の幸せな家族が出来上がった。その幸せは永久では無いものの何十年かは続くものと信じていた。だが、その5人家族の幸せはたった4ヶ月で終わりを告げた。長年の無理が祟ったのか、母はくも膜下出血で倒れ、帰らぬ人となった。両親共にこんなに早く別れなければいけない自分の運命を恨んだりもしたが、大好きな姉家族と一緒に居られる事が、私を癒してくれた。

そんな姉夫婦の結婚した日が、3月22日だった。それこそ、義兄の大学の卒業式の後すぐの事だった。

しばらくカレンダーを見ていた私は、姉達の結婚記念日が土曜日である事に気づいた。

姉達は結婚記念日と言っても特に何をする訳でもなく、夕食が少し豪華になるぐらいの事。

そんな事を考えていた私は、ふと閃いた。

今年は私のお休みの日だから、甥の拓都タクトの面倒をみて、姉達を二人きりでデートさせてあげよう……。

それは、ものすごくいい考えだと思った。姉達はいつも拓都と3人で出かけているから、二人きりで出かける事はまず無い。たまにはいいんじゃないか……拓都も私に懐いているし、1日ぐらい親と離れても大丈夫なはず。もう3歳の拓都は結構しっかりしているし……。

そう思うとすぐに庭先で洗濯物を干している姉の所へ行った。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんたちの結婚記念日ってさ、今年は土曜日だから、私がつづ君を見てるから、二人でデートしておいでよ」  
振り返った姉は、私の提案を聞くととても嬉しそうな顔をした。

「美緒、いいの？ 嬉しい。結婚してから、すぐ拓都が生まれちゃったから、デートってしてないの」

そんな事は傍で見えていたから分かっている。姉の喜ぶ顔を見て、私はとても満足した。

その日はたっ君とお弁当を持って公園へ行こう。私もたっ君と過ごす一日を考えて、嬉しい気持ちで一杯になった。

しかし、私の運命と言うものはとことん不幸のオンパレードらしい。

3月22日は思い描いた通りの青空になった。桜はまだ咲いていなかったけれど、ポカポカ陽気の春らしい日だった。

姉達もいろいろと計画を立てていたみたいで、喜々として出かけて行った。明日も休みだから、遅くなってもいいよ。と送り出した。それから、たっ君と二人でサンドイッチを作って、ジュースとお茶を持ち、近くにある大きな芝生公園へ出かけた。ここには遊具もあり、散策できる散歩道もある。

二人でのんびりとその公園で一日を過ごし、午後4時前に自宅に帰って来た。その後、おやつを食べたり、テレビを見たり、夕食の用意をして食べ終えた頃、私の不幸の運命を告げる電話が鳴り響いた。

その電話は警察からだった。

姉夫婦の乗る車が事故にあったと、今市民病院に運ばれたと、告げていた。

私は警察の人が他に何を喋っていたのか聞こえていなかった。

ただ、姉達が事故にあつて市民病院にいると言う事だけ頭に残り、電話を切ると行かなきゃと言う気持ちだけが、私を動かした。

取るものもとりにあえず、たっ君を連れて市民病院まで車を走らせる。

どうぞ、無事で……そればかりを祈りながらも、心の中を徐々に覆い尽くすドス黒い得体のしれないものを取り除く事が出来ない。怖い。心の底から怖いと思った。不意に母の倒れた日の事を思い出した。

あの日、母は職場の倉庫で倒れていたらしい。その日はたまたま倉庫で一人作業をしていたため、気付くのが遅そかった。母の職場の人から電話をもらい、救急車で市民病院へ運んだと告げられた。あの日と同じ市民病院へ無事を祈りながら車を走らせる。これは、デジャブ？考えちゃいけないと思いつつも、浮かんでくるのはあの日病院に着いて見た母の白い顔……。

お母さん、お姉ちゃんたちを連れて行かないで……。

私が二人のデートなんて提案しなければ……。

どんなに悔やんでも、もう遅い。

どうぞ、無事で……。

鼻の奥がツーンとなり、涙がたまり始める。泣いちゃいけない。

泣くような運命を引き寄せてはいけない。

ぼやけ始める視界をぬぐうように瞬きをして、きつと唇を噛んだ。後ろの席のチャイルドシートに乗せた拓都がやけに静かだと思つたら、居眠りをしている。今日は一日お外で遊んで、疲れたのだろう。この子のためにもお姉ちゃん、お義兄さん頑張つて！

病院について、眠っている拓都を抱っこして救急の処置室へ行く  
と担当の医師が俯いたまま首を振った。

「残念ながら、二人とも即死でした」

ナニライツテイルノ？

これは夢？

私は拓都を抱いたまま、受け入れがたい現実に意識を手放した。

気づくと白い天井が見えた。一瞬どこにいるのか、何をしていたのか、私は誰なのか……なにも思い出せなかった。そして次の瞬間意識の中に恐ろしい現実が津波のように押し寄せた。

意識が戻った事に気づいた看護師が覗き込む。

「美緒ちゃん、大丈夫？」

あ、この人は、お姉ちゃんが結婚前に市民病院で働いていた時のお友達だ。

「はい。あの、たつ君は？」

「隣のベッドで寝てるわよ」

ニコツと笑った看護師の目に悲しみが見えた。

「あの……お姉ちゃんは？」

看護師は一瞬息をのんだような表情をして、伏せ目がちに静かに告げた。

「美那は……お姉さんとお兄さんは……残念だったわね」

やはり、現実なんだ……。

誰かに何言ってるの？ 夢でも見たの？ と言って欲しい。

こんな現実受け入れると？ 両親も姉もみーんな、私を置いて行っちゃった。でも、私はその時気付いた。隣のベッドに眠る小さな命の存在に。私は23歳のこの時まで肉親が側にいてくれた。でも、この子は3歳にして、親を亡くし、唯一の肉親はこの私だけ……しつかりしなきゃ。拓都のために。

それから、お葬式を終えるまで、どのように過ごしたかはつきり記憶にない。ただ、親戚は元々付き合いが無かったけれど、近所の



人達とは姉がしつかり付き合いをしてくれてお陰で、ずいぶん助けられた。特にお隣のおばさんは家族のように親身になって手伝ってくれた。

何もかもが済んで、実家で拓都と二人きりになった時、それまで拓都も私も少しも泣かずに来た事を思い出した。私はいいが、このまだ両親が恋しい小さな甥が、泣く事もせず、わがままも言わず、この数日間を過ごしてきたかと思うと、不憫で切なくなった。

姉達が事故を起こしたあの日、病院で目覚めた拓都と共に遺体安置室で姉夫婦と対面した時、拓都は「お父さんとお母さん、どうして寝てるの？」と聞いた。私は何の答も用意しなかったため、その時、思いついたままを言ってしまった。

「寝てるんじゃないくてね、体の中の魂だけお空に行っちゃったの。魂が無い体はもう眼を覚まさないのよ。お祖母ちゃんとお祖父ちゃんがね、淋しいからどうしても来てほしいって、たっ君のお父さんとお母さんを連れに来たのよ。これからはお空の上からたっ君を見ていてくれるって。たっ君にはお姉ちゃんがいるから大丈夫でしょねっ」

そんな説明を拓都が理解したかどうかわからない。でも、拓都はコクリと頷いて、私の手を握った。私はそんな拓都を抱き締めずにはいられなかった。でも、私のこの言葉が私と拓都の涙腺の出口を完全に塞いでしまった。その時はそれと気づかずにはいたけれど……。

私は拓都と二人きりになった時、これからの二人の人生の決意について話した。

「たっ君、二人きりになっちゃったけど、お姉ちゃんがずっと傍にいるから大丈夫だからね。たっ君と私は家族であり、相棒なの。こ

れから二人がとても良い相棒になるための合言葉を教えてあげる。  
これから、お姉ちゃんはたっ君の事、拓都って呼ぶ。たっ君はお姉  
ちゃんの事、ママって呼んで。そうすれば、二人はとってもいい相  
棒で良い家族になれるの。できるよね？」

拓都は頷きながら「わかった」と言った。

その日から私はシングルマザーになった。

## #02：不幸のトラップ

あの事故の日から3月いっぱい休みを取り、葬儀の後片づけを済ますと拓都を連れて、職場のあるK市へ引き上げた。実家の管理は隣のおばさんが引き受けてくれた。

拓都はまだ3歳だ。両親を亡くしたばかりなのに、彼の住む環境まで変えてしまうのは、正直辛かった。しかし、そんな事も言っていられない。すぐに保育園探しに奔走し、役所での種々の手続きをした。

なんとか保育園も見つかり、4月から登園できる事になった。

「拓都、今日から拓都はこの保育園で1日遊ぶのよ。ママは、お仕事へ行かないと、拓都もママもご飯が食べられなくなっちゃうの。どうしても、お仕事しないといけないの。夕方になったら、必ず迎えに来るから、保育園の先生の言う事を聞いて、いい子にしているね」

拓都は理解したのかどうか、神秘的顔をして頷いた。

その日、拓都は保育園の片隅で一日泣いていたらしい。親が死んでも出なかつた涙が、こんな形で出るとは思わなかつた。それも、子供らしくない泣き方で……。

泣き叫ぶでもなく、ただ、一人膝を抱えて、先生がいろいろ誘いかけても、ただ首を振るだけで、ずっと泣き続けていたと……。

そして、私が迎えに行った時、やっと、安心した笑顔を見せて泣きやんだ。

先生から今日の様子を聞いて、愕然とした。そりゃ〜すぐに保育園になれるとは思ってはいなかつたけど、その泣き方に驚いた。そんな泣き方をする子じゃなかつたのに……。

「拓都、保育園は嫌だった？ 誰かに意地悪された？」  
優しく拓都に語りかけると、拓都は首を横に振った。

「マ、ママは、僕を置いてお空に行かない？」

その小さな問いかけに、私は心臓を鷲づかみにされたような痛みを感じた。そして、今まで出る事の無かった涙が頬を伝うのもかわず、拓都を抱きしめた。

「拓都、何言ってるの。ママは、ずっと拓都和一緒にいるって言ったじゃない。拓都和ママは相棒でしょ？ 相棒は嘘をつかないの。昼間はお仕事があるから、傍にいられないけど、ママもお仕事がんばるから、拓都も保育園でいっぱい遊んで、いっぱいお友達を作ってほしいの。夕方になったら、必ず迎えに行くから。絶対だから」

「うん。わかった」

小さな天使は泣き笑いのような顔をして、頷いた。

拓都にこんな思いをさせていたなんて……まだまだ拓都との絆の儂さが、私の胸を締め付けた。

新米ママと拓都との生活は、どちらも相手の様子を伺い、緊張しながらの毎日だったと思う。それでも、すこしづつそんな毎日に慣れていった。

そんな頃、ちよつと気を抜いた時、私の方が風邪をひいて熱を出してしまった。こんな時、頼る人の無い私達は、本当に困ってしまった。仕方なく仕事を休んでいる間、保育園も休ませた。何かあった時に頼れる人を見つけておかなくちゃ、このママゴトのような親子ごっこはすぐに破綻してしまうだろう。そんな焦りにも似た気持ち<sup>ナ</sup>をだかえていた時、保育園のお迎えの時に同じシングルマザーの成<sup>ナ</sup>川由香里に声をかけられた。

「篠崎さん。篠崎さんってこの街の人じゃないんでしょ？ 知り合  
いとか友人とか頼れる人いるの？ 母子家庭だと大変な事、多いで  
しょ」

そう言っつてニツコリ笑った由香里は、子供を2人抱えた母子家庭  
だ。それでも、いつも颯爽として、アネゴ肌の頼りになる人と言う  
噂はこの人の笑顔を見た時、素直に信じられた。

私が驚いた顔で頷くと彼女は話を続けた。

「あのね、この保育園で母子家庭の人達と助け合いの会を作ってい  
るの。会と言っつても堅苦しいものじゃ無く、お友達仲間みたいな感  
じで、病気とか仕事の都合とかで送り迎えできない時とかに助けあ  
ったり、集まっつて愚痴を言い合っつたりとかね。そんな感じなの。篠  
崎さんもどうかと思っつて。篠崎さんっつてまだ若いでしょ。大変なん  
じゃないかと思っつてたの。」

私はこの言葉に、今まで張りつめていた物が緩み、思わず涙がこ  
ぼれた。

「う、嬉しいです。助かります。この間も私が熱を出した時、どう  
しようかと思っつていたの……。本当に誘っつて貰っつて嬉しい。ありが  
とう。」

こぼれる涙を隠すように頭を下げた。そんな私の肩を、由香里さ  
んはポンポンと叩いた。

後から聞いた話だと、保母さんが私の様子を見て、切羽詰まっつて  
いると感じて、由香里さんに声をかけてくれたらしい。こんな時、  
本当に一人で生きてるんじゃないっつて実感する。周りのみんなに支  
えられてるんだっつて……。

シングルマザーになるまでは、頭では分かっつていても、実感はし  
ていなかった。変にプライドがあっつて、人に頼りたくないっつて言う

思いもあつたから。今は、困った時は素直に助けを求めようと思う。そして、人が困っている時は、自分の出来る限りの事をしてあげようと、心から思えるのだった。

そんな風に私と拓都は保育園の3年間を、まわりの人々に助けられながら、徐々に親子らしく成長していった。そして、拓都が年長になった頃、小学校は実家のある県庁所在地のT市へ戻ろうと考え始め、職場に移動願いを出していた。

卒園の頃、実家のあるT市の県庁舎への辞令が下りた。それから、あわただしく母子家庭の会の人達とお別れ会をし、引越しの準備に追われた。拓都は保育園のみんなと一緒に小学校へ行けるものと思っていたから、少し反抗して泣いていたが、仕方のない事と理解しているらしく、それ以上は何も言わなかった。私はそんな拓都が少し不憫になったが、ただ、「ママが一緒だからね」と抱きしめて言うのが精一杯だった。

あわただしく引越しし、実家での生活が再び始まった。この家にいると姉達を思い出す。でも、拓都の入学準備や私の仕事の引き継ぎなど忙しさに、思い出に浸る暇も無かった。

いよいよ入学式当日、桜は散りかけだったけれど、とても良いお天気で、拓都の新しい門出を祝うようだった。

拓都も私もスーツを着て、手を繋いで校門をくぐる。校門には「虹が丘小学校入学式」と書いた大きな看板が立ててあった。その前に拓都を立たせ、写真を撮る。ハラハラと舞う桜の花びらもいい感じに写ったかな？

やっぱり春色のスーツの人が多いな、などと入学式に集まって来た父兄の服装をチェックする。この小学校は私の母校だ。校舎も遊具もあの頃のまま、少し小さく感じるけれど……。

体育館の入口で受付をする。今年の1年生は5クラスあって、拓

都は1年3組だった。

6年生の子たちが新1年生を、クラス別の席まで誘導する。保護者はその後ろにクラス別に席が設けられていた。入学式の式次第と校歌を書いたプリントをもらい、1年3組の保護者席に座る。拓都が心配そうに後ろを振り返っている。私の顔を見つけると、ホッとした顔をして、前を向いた。

全部の席が埋まった頃、入学式が始まった。

まず、校長先生のお話し。優しいような笑顔の体の大きな50代ぐらいの男の人が壇上上がった。目じりを下げて新1年生を見渡す。「新1年生の皆さん、ご入学おめでとう」と、校長先生の長過ぎず、短過ぎないお祝いの言葉が体育館に響いた。

そして、新1年生の担任の紹介。

舞台の下の、皆の前に5人の男女が並んだ。

「1年1組、長嶋恵子先生」  
ナガシマケイコ

40代ぐらいのふくよかなベテランの女性教諭が優しい笑顔で一歩前に出て頭を下げた。

「1年2組、中島美穂先生」  
ナカジマミホ

20代後半ぐらいだろうか？まだ若い少し頼りなげに見える細身の女性教諭が、同じように一歩前に出て頭を下げた。

「1年3組、守谷慧先生」  
モリヤケイ

その名前を聞いたとたん、私は凍りついた。

長身の整った顔立ちの20代男性教諭。

名前を告げられたとたん、周りが少しざわついたけれど、私の耳には何も聞こえなかった。ただ、その男性教諭の姿に釘付けになった。

……ケイ……なぜ、あなたがここに……。

そこに立っていたのは、3年前の私がシングルマザーになる瞬間まで恋人だったその人だった。

運命ってやつは、こちらが少し幸せを感じ始め油断していると、容赦なく不幸へたたき落とす。いったい私をどこまで不幸にしたら気が済むの。

運命のいたずらなのか、目の前の避けようもない不幸のトラップに、私は身を委ねるしかなかった。



### #03：出逢い

モリヤケイ  
守谷慧……彼と出逢ったのは、私が大学3年の4月だった。

新入生の彼は、私の所属する折り紙同好会の新入生説明会に来ていた。折り紙同好会は大変地味な活動のサークルだったから、彼のような人目を惹く男子が来るのが珍しかった。

彼を初めてみた時、正直、芸能人かモデルかと思う程の綺麗な顔にしばらく見惚れてしまった。

憂いを含んだ二重の切れ長の目とすつと通った鼻筋、知的な額にかかる少し明るめのふんわりとした髪、そして形のいい薄い唇はどこか淋しさと冷たさを感じさせた。それでも、彼の綺麗な顔立ちと雰囲気は誰の目も惹きつけずにいられなかった。マジマジと見ていたせいか、こちらを見た彼と目があつた。ここで目を逸らしたら、変に勘違いされてもいけないと思い、笑顔を返した。そんな私に驚いたような顔をして、彼の方から目線を逸らした。

冷やかして来ただけだろうと思っていた彼が、入会した時は驚いた。彼の入会はその気の無かった女の子たちをも入会させた。その年は、いつもの年より約2倍の新規入会数になった。まあ、名前だけと言う子も多いので、おそらく彼も名前だけの入会で、サークル活動への参加はそれほど熱心じゃないだろうと、誰もが思っていた。

「ねえ、今年は1年生の入会、多いわね」

新入生説明会が終わった時、一応会長の私は入会申込の用紙をまとめながら、高校の時から友達で、同じくこの同好会の副会長をしている本郷美鈴ホンゴウミズスに声をかけた。

「守谷効果だね」

クスツと笑いながら、美鈴は返す。

「この中に真面目に参加して、1年以上続く子がいるかなあ〜」  
私は、守谷効果で例年より多い新入生の入会に戸惑いを感じていた。

「まあ、3分の1でも残ればいいんじゃない？」

美鈴はのんきに答える。

「本当に折り紙好きの人がいてくれればね」

私は一抹の不安を感じながら、この地味なサークルが、細々でもいいから続いて行ってくれる事を願っていた。

折り紙同好会は週一度、空き教室を使って活動している。活動と言っても、集まってお喋りしながら折り紙を折るぐらいの事なんだけど、私にとっては憩いの時間。普段、勉強とアルバイトで一杯一杯の私には、ホッと一息つける癒しの時間だった。

活動日は毎週木曜日、一応午後3時から空き教室を押さえてあるので、みんな都合のつく時間に集まって来る。

第一回目のサークルは、案の定集まりが悪かった。

新入生は5人だけだったけど、守谷君が来ていたのには驚いた。

守谷君目当てで入会した子達は、まさか守谷君が1回目から来るなんて思わなかったのだろう。

だいたい集まっただろうと思う頃、皆を集めて自己紹介と説明をし、折り紙と折り紙の本をみんなの前に出し、適当な席にそれぞれ座って折り紙を始めた。来ていた女の子達は、守谷君が気になるものの、恥ずかしくて傍に寄れないような大人しい子達ばかりだったので、今回は守谷君の傍には女の子がいなかった。

「篠崎さん、今折っている折り紙の折り方を教えてください」

窓際の席で美鈴とお喋りしながら折り紙をしていた私は、彼が声

をかけて来るまで傍に来た事に気付かなかった。いきなり頭の上から声がして見上げた私は、一瞬驚いた顔をしたに違いない。

「守谷君、桜の花の折り方なんか知りたいの？」

その時、私と美鈴は桜の花をたくさん折っていた。男の人でも花の折り紙なんかに興味あるのかと疑問に思い、こう聞き返したのだった。

すると、守谷君は少し顔を赤らめたような恥ずかしそうな顔になり、「初めて見た折り方だったから」と言った。

私が笑って頷くと守谷君は前の席に座り、こちらを向いた。

「守谷君が一回目から真面目に来るとは思わなかったわ」

美鈴が本人を前にしてニッコリと笑って言った。

「それ、どういう事ですか？」

ちよつとムツとした顔で守谷君は聞き返す。

「こんな地味なサークルに男子が真面目に来るなんて、あまり無かったからね。殆どがコンパの時だけ来るって感じで……。女の子が多いサークルと言っても、ここは地味な子が多いし、守谷君には退屈なだけかなあ〜と思ってね」

美鈴は過去を振り返って誰もが思う事を言ったのだけど、守谷君には気に入らなかつたみたい。

「俺は純粹に折り紙が好きで入会したんです。ここへ来たら、変わった折り方とか覚えられれると思って。そんな偏見で見ないでください」

少し怒ったような顔で言い返してきた。

そんな守谷君の勢いに美鈴も思わず「ごめん」と言っている。

私と言えば、二人がそんな会話をしている間も、守谷君の目の

前で桜の花をゆっくり折って見せて、折り方を教えていた。

長身の彼が背を丸め、綺麗な長い指から生まれる桜の花はとても上品な感じだった。俯いて一生懸命折っている彼の綺麗な顔を間近で見て、心臓がいつもより早く打つのを感じ、私も普通の女の子なんだと心の中で苦笑いした。

2回目以降のサークルは、守谷君が真面目にサークルに来ている事を聞き付けた女子達が集まり、いつものまったりとした雰囲気からはかけ離れたものになった。

守谷君の周りに集まる女の子達……いかにも折り紙なんて興味無いでしよって言うような子達。ざわざわとおしゃべりに夢中で、守谷君も初回との違いに戸惑っているようだった。それでも、周りに寄って来る女の子達を無視するでもなく、かといって調子に乗っていい顔する訳でも無く、みんなに折り紙を配って、何か折る様に話している。

……結構面倒見いいじゃない。

私は、すっかり守谷ウオッチングが楽しみになり、折り紙を折りながら、守谷君を観察している自分が可笑しくなった。ひとり苦笑いしている私に、美鈴が顔を覗き込むようにして話しかけてきた。

「美緒、なあに？また、守谷君見てたでしょ。美緒も守谷ファンなの？」

「へへ、目の保養よ。綺麗な男の子は見るだけで楽しいの」

「なに、それ。おばさんみたいだよ。本当に見ているだけでいいの？」

「私はあの周りにいる女の子たちの仲間になる気はないし、年下だしね。まっ、向うだって、こんなお姉さまには興味無いだろうし」

「ふくん、そうなんだ。私だったら年下でもOKだけどな」

「何言ってるの！ 彼のいる人が！」

「そんなの関係無いわよ。守谷君だったら、1回ぐらいデートしてみたいな」

私はすっかり美鈴の言葉に呆れてしまった。まあ、冗談なんだろうけど……。

「それにしても、美緒が男性に興味持つなんて、珍しいじゃない？」

「興味って……」

そう、私は男性にも恋愛にも、あまり興味を持つ事が無かった。私の周りに興味を引く男性がいなかったせいもあるのかもしれないけれど……。確かに、テレビに出て来るような歌手や俳優などの芸能人の中には、カッコイイなと思う人もいたし、周りの同級生達に合わせて素敵だよね〜とか言い合った事もあった。けれど、所詮テレビの向こう側の人達だから、それ以上に興味を持つ事は無かった。だから、ある意味、イケメン芸能人をこんなに近くで生で見ている感覚だったのだ。自分でもうすうす感じてはいたけれど、私って……メンクイ？

「美緒がこんなにメンクイだったとは思わなかったわ」

美鈴が呆れた様に言った言葉が、見事に自分の危惧していた事を言い当てたので、私は慌ててしまった。自分の事棚上げてとか、自分の顔見てからにしなさいとか、思われている様で、落ち着かな

い気持ちになった。

「だから、違うって。キムタクや福山雅治レベルの男子が身近にいるんだよ。ちよっと気になるじゃない？」

「まーね。私もキャンパスで見かけると、気になって見てしまうんだ」

経済学部の私と違って、守谷君と同じ教育学部の美鈴は、キャンパスでよく守谷君を見かけるらしい。

「でも、守谷君って、普段は女の子に寄って来るなオーラを出していて、女の子にはすごく素っ気ない態度取ってるのに、ここでは、結構面倒見いいと言うか、女の子に優しくしてるよね」

「え？ そうなの？ 普段もあんな風に女の子を周りにはべらしてるのかと思ってたよ」

そう、経済学部と教育学部の学部棟が離れているせいもあって、私は守谷君をサークルでしか見た事がない。だから、普段の守谷君もここで見る守谷君と同じと思っていた。

「はべらすって……。美緒、ハーレムや大奥じゃないんだから……」  
そう言って笑う美鈴の頭の中は、きつとアラビアンナイトのような雰囲気の中、守谷君の周りに寝そべるように座る美女達か、お殿様のような守谷君の周りの着物の美女達を想像しているに違いない。実は私も、サークルでの女の子に囲まれた守谷君を見る度、想像していたのだから……。

「でも、サークルでの守谷君も、どこかこれ以上は近づくなっていう線を引いているように見えるね」

守谷ウォッチングを楽しんでいた私は、時々彼が顔は笑っていて

も、とても冷たい目になる事に気づいた。そう、それは女の子がどさくさに紛れて守谷君に触れた時とか、至近距離で熱い眼差しを向けた時とかに……。そう、女の子からの想いを拒絶していたのだった。

「そうなのよね。教育学部でも、女の子が多いせいから入学したてだと言つのに守谷ファンが多くてね、いろんな噂が飛び交ってる。」

「噂って？」

「女嫌いとか、実はゲイなんじゃないかとか、大学外に秘密の恋人がいるんじゃないかとか……」

誰でも思う事は同じらしい。

まっ、私にはどうでもいい事だけだね。

私にとってはアイドルを見る感覚で、守谷ウォッチングを楽しんでいるだけだから……。

5月のゴールデンウィーク明け、サークルに2年生の伊藤君が久々にやって来た。

彼はこのサークルに属している男子の中で唯一、真面目にサークル活動をしている男子だった。サークル活動で折る折り紙のほとんどは大学祭の展示用に折っているようなもの。彼のマニアックまでの折り紙は、大学祭の展示でもその威力を發揮した。去年の大学祭用に彼が作り上げたのは、2メートル近くある恐竜の折り紙だった。もちろんしっかりと紙を使うのだが、そのすべてのパーツは折り紙の技術を持って作られていた。それも、全て彼の創作によるものだった。

「あ、伊藤君、久しぶり。どうしたの、今期初めてのサークルじゃ

ないの？」

私は、懐かしい顔に、珍しく自分から声をかけた。

彼に対してはどこか一目置いているようなところがある。彼の折り紙の技術だけでは無く、頭の中で緻密に計算され、作り上げて行く集中力とか、自分で作り出す発想力や創造力に少なからずも影響を受けていた。

伊藤君は、教室へ入ったとたん、今までと違う雰囲気戸惑い、私の呼びかけにやっとホツとしたような顔をした。

「あ、美緒先輩、お久しぶりです。4月から工学部の学生寮に入っただんですけど、新歓行事が多くて、サークルに顔だしてくても来れなかつたんですよ」

照れたように笑う伊藤君の下がった目じりと眉毛、その下の丸い鼻が、とても愛嬌があつて親しみを感じる。どこにでもいる普通の目立たない男子。そう、守谷君とは対極にいる感じの雰囲気だ。どこかオタクっぽくて、服や髪形などの外見にはあまりこだわらない草食系男子。弟のような雰囲気、とても安心できた。

「どうしたんです？ この女子の多さは。違うサークルに来たかと思いましたよ」

私と美鈴の傍まで来ると、声を潜めて伊藤君が言った。

「今年は新入生がたくさん入つたのよ。みんな熱心でね」

美鈴が嫌味っぽく、苦笑いして言う。私もつられて苦笑いした。

その時、こちらを睨むような視線を感じて顔を向けると、守谷君の視線とぶつかり、目をそらされた。

「ね、伊藤君。あそこにいる男の子、守谷君って言うんだけどさ、珍しく男子で真面目に来てくれるのよ。伊藤君から声を掛けてあげ



てくれない？ 何をしたらいいのか困ってるみたいだし」

そう、守谷君はサークルに来て男子が自分一人で、周りの女の子たちとも話が合わず、困ってるんじゃないかと思っていた。いろいろな折り方が知りたいと言っていたんだから、伊藤君の技術とかアイデアとかはきつと刺激を受ける筈。

「へえ、あんなイケメン君が入ってくれたんだ。さすが、モテモテだね。なんか、声掛けにくいな」

伊藤君は苦笑いしながら、戸惑っていた。

その時、守谷君が徐おもむろに立ち上がって、伊藤君の傍に来た。

「先輩、僕1年の守谷と言います。もしかして、先輩は去年の大学祭の時、巨大な恐竜を折り紙で作られた方ですか？」

「えーあれ、見てくれたんだ。そうだよ、僕が作ったんだ」

「俺、あの折り紙を見て、折り紙サークルへ入ろうと思ったんです。先輩、いろいろ教えてください」

そう言って、守谷君は伊藤君に頭を下げている。伊藤君は照れたように「こちらこそ、よろしく」と言って、嬉しそうに、今までの折り紙作品の写真が入ったファイルを見せるため、二人で席に着いた。

そんな二人を遠巻きに見ていた守谷君の周りにいた女の子達は、二人に近づく事が出来ず、面白くないとばかりに、帰って行った。

「なに？ あの子達。先輩に挨拶もせず帰って行ったわよ。ホント、サークルに入った目的がわかるって言うものね」

美鈴は呆れたように言った。

守谷君と伊藤君はすぐに意気投合して、サークルの度に一緒にいるようになった。何やら、大学祭に向けて二人でいろいろアイデアを出しているようだ。守谷君の楽しそうな顔を見て、私も嬉しくなった。

守谷君目当てでサークルに来ていた子達は、伊藤君と一緒にいる守谷君には近づきにくいのか、サークルには来なくなってしまった。そしてまた、サークルはまったりとした雰囲気に戻り、私は守谷ウォッチングを楽しみながら、サークルの時間に癒されていた。

## #04：接近

サークルでしか接点のなかった私と慧の関係がぐっと近づいたのは、夏休みの偶然からだった。

前期の期末試験も終わり、大学は2カ月の夏休みに入った。

長い夏休みなので、集中的にアルバイトをする。少しでも家計の足しやお小遣いを溜めたかったから……。学費は奨学金で賄えただけ、教科書代等の大学で必要な物や、友人との付き合いや服なども買いたかった。それに、実家に居るとは言え、姉家族にお世話になっている身なので、せめて自分の食費ぐらいは入れたかった。

8月の初め、アルバイトのお休みの日に甥の1歳になる拓都を連れて、近くの芝生公園へ出かけた。1歳前から歩き出した拓都は、やんちゃでちっともじっとしていない。姉の家事がはかどるようにと、時々拓都の遊び相手をしていた。

広い芝生公園の周りに植えられた木々の木陰で休んでいると、10名ほどの小学生と大学生ぐらいの男の人が公園へやって来た。芝生の上でバトミントンやキャッチボール、鬼ごっこ、ドッチボールとキャツキヤ言いながら遊んでいる。その中心にいる大学生風の男の人を見て驚いた。守谷君だった。

彼と子供達と言うのが、どうしても結び付かず、不思議なものを見るような目で見つめていた。

彼が子供のように笑うその顔は、初めて見る笑顔だった。

その笑顔を見た途端、胸がキュンとするのを感じ、うるたえてしまった。

彼から目が離せない……大学で見る彼の雰囲気とは別人のように違う、生き生きした彼の表情が、これが本来の姿なんだと語っていた。

今までの冷たい顔立ちに張り付けられた作り物の笑顔とは全然違う、伊藤君といる時に嬉しそうにしている表情でも少し足りない、切れ長の目が垂れ下がって目じりにしわを寄せ、顔一杯で笑う生き生きとした心の底からの笑顔だった。

こんな笑顔の出来る人だったんだ……。

子供達が目の前で楽しそうに遊んでいるのを見た拓都は、さっきまで大人しくお茶を飲んでいたのに急に立ち上がると子供達の方へとトコトコと歩き出した。

「あ、たっ君、待って〜」

きゃきゃと言葉にならない声をあげて拓都は子供達に近づいていた。それに気づいた子供達が、拓都の周りに集まって来た。

「かわいい〜」

「この子何歳ですか？」

「なんて言う名前？」

「一緒に遊ぼう」

子供達が口々に私たちに声をかけて来た。

「名前はね、拓都って言うの。たっ君って呼んであげてね。今1歳だよ。一緒に遊んでもいいの？」

私が子供達に声をかけていると、守谷君が近付いて来た。

「おーい、もうドッチボールしないのかあ？」

その声に私は顔を上げて、少し微笑んで守谷君を見た。目が合ったとたん、守谷君が立ち止まった。

「篠崎さん……」

「守谷君、こんにちは」

私はさつき守谷君の笑顔を見た時の動揺を悟られない様に、ニツコリ笑って挨拶をした。驚いた表情をしていた彼が、私の挨拶を聞いて我に返り、慌てて「こんにちは」と挨拶を返した。こんな所で私に逢うなんて思いもしなかったのだろう。

「あの…… たつ君、私の甥ただけど、子供たちと一緒に遊ばせていいかな？」

一緒に遊ぶと言っても追いかけてこをしたり、ボールの投げっこをしたりするぐらいだけれど……。まあ、それも満足にできないだろうけど……。まだ兄弟のいない、ましてや保育園にも行っていない拓都にとって、子供たちと遊ぶ機会は少ない。

「目を離さなければ、いいですよ。でも、子供たちがどこまで相手できるか分からないけどね」

苦笑しながら話す彼の言う事はもっともだ。子供は自分本位だから、いつまでも小さい子に合わせて根気よく遊ぶと言う事は難しいだろう。

それから私達は、木陰に立って子供たちに視線を向けながら、しばらく話をした。

彼は小学校の学童保育の指導員のアルバイトをしているらしい。学校が夏休みでも、親は仕事があるから、夏休みの間子供達はお弁当を持って朝から夕方まで学童で過ごす。高学年になると家でお留守番ができる様になるせいか、ほとんど低学年の子供達だった。

それにしても、彼と学童保育のアルバイトが結びつかなくて、不思議そうな顔をした私に彼が言った。

「俺、小学校の先生になりたいんだ」

「えっ？」

彼が教育学部だと言う事は分かっていたけれど、まさか小学校教諭志望だとは思ってもしなかった。ある意味、彼から一番遠い存在の様な気さえした。だから、思わず驚きの声を上げてしまった。

「篠崎さん、俺に似合わないと思ってるでしょ？」

私の心の中を見透かすように、彼が苦笑しながら言う。慌てた私は、「そんな事無いよ」と答えたものの、私の態度は肯定した様なものだった。

「確かに今までの守谷君を見てたら、想像つかなかったけど、今日子供たちと楽しそうにしてるの見たら、案外いいかもって思ったわよ」

別に言い訳するつもりではなかったけれど、今日感じたままを告げて、私はまた笑顔を返した。

その日から、私のバイトの休みの日は、たつ君を連れて芝生公園へ行くのが楽しみになった。たつ君がお兄ちゃんやお姉ちゃん達と遊ぶと喜ぶからと言う言い訳を、自分の心にしながら……。

\*\*\*\*\*

10月になり、大学も後期が始まると、11月半ばの学園祭に向けて、サークル活動も、同好会会長としての仕事も一気に忙しくなる。学園祭の実行委員会主催のクラブやサークル、同好会等の学園祭参加団体説明会に参加し、作品展示の教室の申請、展示教室が決まるとポスター作りやチラシづくり、作り溜めた折り紙作品の展示の仕方等、する事も決める事も沢山あって、同好会会長の私は忙しい日々を送っていた。

そして、学園祭まであと5日と迫った日、それは発覚した。

「えっ？ ダブルブッキング？」

私達が折り紙の展示場所として申請していた教室が、他のクラブの使用教室と重複していたのだ。これは、実行委員執行部のミスではあるのだが、確認を怠ったのではないだろうかと不安になった。おまけに暗幕の申し込みを忘れていた事も発覚し、会長の私は一気にパニック状態になった。

しかし、ここでオロオロしていても始まらない。女だからと言う泣き言は言いたくないし、会長の責任を放棄して人に頼る事も嫌だった。

希望していた教室は前年までと違い、今回初めて大きめの広さの部屋を選んだ。それと言うのも、初試みの折り紙のワークショップを行う事と、伊藤君が守谷君と言う後輩を得て、かなり大きな折り紙を用意していると言う事もあった。それに、多くの人に見てもらいたいと言うのもあり、できるだけ入口に近い部屋を選んでいた。

ダブルブッキングしていたのは書道クラブで、そのクラブが毎年その部屋を使う事や、クラブの所属人数などの規模の違いなどからこちらが諦めなければいけないのは明白だった。と言うのも、毎年使う団体が優先だと、暗黙の了解が合ったらしい。結局、会長引き継ぎ時にその辺りの詳しい説明を聞かされていなかった私は、すんなり諦めるのが癪で、交換条件に申し込み忘れていた暗幕とポスターやチラシの訂正の為の費用を勝ち取ったのだった。勝ち取ったと言っても、暗幕は私が忘れていた事だし、訂正するための余計な仕事を増やしただけの事なので、威張れる事ではなかったのだけれど……。

展示場所は、去年まで使っていた教室が空いていたため、すんなりと決まった。しかし、計画していた展示方法の見直しと、ワーク

シヨップの規模縮小は余儀なくされてしまい、私は皆の前で頭を下げて謝った。みんな私の今回の失敗を温かく「まだ5日あるから大丈夫」と許してくれた。

「ダブルブッキングは執行部のミスだから、美緒は良くやったよ」  
美鈴はそう言って慰めてくれたけれど、自分は納得できていなかった。

「伊藤君、守谷君、とても頑張ってくれてたのに、最後の最後でこんな事になって、本当にごめんなさい」  
彼ら二人が学園祭に向けて、とても力を入れていたのを知っていたから、今回の事は本当に申し訳なかった。

「美緒先輩、展示方法を考え直したら、何とかありますから……。気にしないでください」

伊藤君は相変わらず眉毛を下げて優しく言った。

「もう謝罪はいいですから、とにかく準備しましょう」  
守谷君は硬い声でそう言うと、ポスターとチラシの訂正のための準備を始めた。周りは納得しきれていない私に対して慰めモードだったけれど、守谷君の言動は場の雰囲気を一気に吹き飛ばし、皆も思いだしたように動き出した。そして、同じように我に返った私は、皆の慰めモードに甘えようとしていた自分を思い知ったのだった。

……私もまだまだ……。  
皆に気付かれない様に溜息を吐くと、いつもの様に両手で頬を叩いて、自分自身に活を入れた。

学園祭前日も、伊藤君と守谷君の大型折り紙の展示に時間がかかり、会長である私は責任を感じて、皆を帰した後も最後まで手伝っ



た。結局、当初計画していた大型折り紙の展示も規模を縮小せざるを得なかった。

終わったのは、午後10時過ぎ。「お疲れ様」と別れようとしたら、守谷君が声をかけてきた。

「篠崎さん、帰る方向一緒なんで、送っていきます」

「え？ 守谷君も電車なの？ でも、一緒に帰ったら、守谷君のフアンの子達に恨まれないかな？ それとも、役得って喜んだ方がいい？」

私は男の人に送るなんていわれたのが初めてだったので、照れ隠しにわざとふざけて笑って返した。

「もう、篠崎さん、からかわないでくださいよ。ファンなんていませんから……。それに、役得ってなんですか？」

「いや、守谷君みたいなカツコイイ男の子と歩けるなんて、役得以外に無いじゃない？」

私はクスクスと笑って言う。守谷君は少し眉間に皺を寄せて、顔を背けた。そのしぐさがなんだか可愛くて、私は弟と言うのもいいなあ〜と一人悦に入っていた。

「守谷君、初めての学園祭で力入ってたのに、こんな結果になってしまつて、ごめんね」

二人で駅に向かって歩きながら、私は改めて今回の事を謝った。去年の学園祭で伊藤君の作った大型折り紙を見た時から、この同好会に入ろうと思っていたぐらいの彼だから、期待も大きかったはずだし、その分悔しいだろうと思ったから……。

「篠崎さん、篠崎さんが悪い訳じゃないのに、どうして皆に謝るん

ですか？ そうやって一人で責任を抱え込んで……。誰も篠崎さんの所為だなんて思っていないし、そうやって謝られると余計にイライラします」

守谷君の少し怒ったような眼差しと言葉に、驚いた。彼はどうして怒っているのだろうか？

「でも、会長だから責任あるし……」

「責任はみんな同じですよ。篠崎さん一人が背負うものじゃない」  
守谷君のやけに大人びた口調に、私は啞然とした。そして、年下の彼にそんなふうに言われる事が、どうにも癪に障った。

「何よ、年下のくせに偉そうに……」

負けず嫌いで可愛くない私の心の言葉が、思わず出てしまった。私の言葉を聞いて守谷君は驚いて目を見開いた。

「篠崎さん、二つしか違わないのに、大人ぶらないでください」

守谷君の落ち着いたもの言いは、私を煽った。

「私はもう成人してるんですっ」

「篠崎さん、そんな事言ってる時点で、負けてますよ」

守谷君はそう言うのとクスリと笑った。私は絶句して顔を背けた。

キィー可愛くない！

ちよっとイケメンだと思って、上から目線なんだから！

そして、丁度駅に着いたので、私は黙ったまま急ぎ足で改札を抜けた。

わかってる。

こんな所が子供っぽいんだと言う事は……。

その後守谷君は、私の家まで送って来てくれた。途中で彼が入会申込み用紙に書いた住所を思い出し、電車通学でない事に気づいた私は、送ってもらわなくてもいいと何度も言っただけで、「篠崎さんに何かあったら夢見が悪いから」と結局家まで付いて来たのだった。

私が大人げなく怒って酷い態度を見せていたと言うのに、守谷君は普段の私に対する穏やかな対応で、やっぱりどちらが年上か分からないなど、心の中で一人苦笑した。けれど、そんな事おくびにも出さず……。そして、私の中の彼のイメージに「生意気な年下」と言うキャラが追加された。

#### #04：接近（後書き）

拓都の年齢を2歳から1歳に変更しました。今後の展開に辻褄が合  
わなくなる事がわかったので……すいません。  
そのため少しだけ、表現を変えました。

## #05: 罫(前書き)

随分お待たせしてすいませんでした。  
かなりスランプに陥っていました。  
今回もどうぞよろしく願います。

「いろいろありました。が、学園祭も何とか無事に終えられたのは、皆さんのお陰です。お疲れさまでした。かんぱーい」

学園祭最終日、片づけが終わった後、大学近くのお店の一室にて打ち上げが始まった。同好会会長である私が、乾杯の音頭を取った。そしてその後は、もうそれぞれに食べ飲みながら、話の輪が開いている。

同好会の活動には消極的だった人たちも打ち上げには悪びれる事も無く参加しているのは、ひとえに守谷効果だろう。

私達の同好会は、コンパの回数は少ない。音頭を取れるようなお祭り野郎がいないせいもあり、守谷君とのコンパを狙っていた女子たちには、不満が多い事だろう。

「なんだか守谷君、可哀想だね」

ここぞとばかりに積極的な女子達に囲まれている守谷君をウォッチングしながら、私がポツリと言つと、美鈴がニヤツと笑つて言った。

「気になる？ まあ、守谷君なら慣れっこでしょ」

「気になる訳じゃ……。いつものウォッチングよ。でも、慣れてても、普段は寄って来るなオーラ出してるんですよ。だったら、嫌なんじゃないの？」

そう、普段は女子に対して守谷君は徹底して素っ気ないと言つし、サークルでも素っ気なくはしないけれど、誰にも踏み込ませないラインをきっちり保っている。

「守谷君だつて男だもの、まんざらでもないんじゃない？ 普通の男子なら堪らないシチュエーションだけど、いつもこうだと大変かもね。おまけに男子からは恨まれてたら、あそこまで容姿の良いのも、気の毒としか言いようがないね」

今回の打ち上げコンパには、普段活動をしていない名前だけの人にも全て連絡をしたが、男子はことごとく「守谷が来るなら行かない」と断られてしまった。結局、男子の参加は、伊藤君と守谷君の二人だけで、会長としては、ちょっと淋しい限りだけれど……。

守谷君と一緒にいたはずの伊藤君が、女の子達に押し出されたのか、苦笑しながら私達の方へやって来た。

「伊藤君、お疲れ。守谷ファンに追い出されちゃったみたいね？」

美鈴も苦笑交じりに、私達の席に呼び寄せている。

「いや、女の子のパワーは凄いね。まいったよ。あそこまで凄いと、守谷が気の毒になってくるよ。それでも、同好会の子たちにはきちんとした対応してるから、偉いよな」

いつもの垂れた眉毛を一層垂れさせて、伊藤君は困り顔で笑った。

「そうそう、普段は近づいて来る女の子達には邪険な対応なのに、サークル内では女の子に優しいのよね」

美鈴も伊藤君の言葉に相槌を打った。

「あいつ、自分の事で同好会のみんなに迷惑をかけないよう、気を使ってるみたいなんだよ。見かけがあんな奴だから、もつと偉そうな奴かと思っただけど、俺の事も先輩って立ててくれるし、今回の学際の準備の時も周りに気を使ってたよ。美緒先輩が一人で責任を感じてるのも、心配してたよ」

伊藤君は、サークルで守谷君と一緒に居て、彼の人となりを感じたようだった。

周りに気を使って、会長である私の心配までしてくれてるのに、生意気な年下なんて思った事、悪かったな……と、私は伊藤君の話聞きながら、こっそりと反省した。

「へえ〜守谷君って、周りに気配りできる人なんだ……」

私は、守谷君の外見ばかり見ている、本当の姿を見ていなかったかも……。

まあ、夏休みの公園での守谷君も意外だったけど……。

「ああ、そう言えば……。学際前日の準備で遅くなった時、本当なら俺も美緒先輩を送って行くべきだったのに、守谷の奴、俺の寮の入浴時間が11時半で終わるの知ってたから、自分が送るって言ってくれたんだよ。あいつ、美緒先輩に気を使わせないよう、帰りが同じ方向だなんて言って……。美緒先輩、気付いていました？」

伊藤君は悪気も無く思い出したように、いきなり2日前の出来事を語り出した。それを聞いた私は、守谷君にそんな気遣いがあったなんてと驚いたけれど、さっき反省したことなど忘れ、あの時の説教と年上の私をからかう様な物言いを思い出して、又ムツとした気分になった。そして、その事を伊藤君にぶちまけようと言いかけた時、驚いたように声をあげたのは、美鈴だった。

「えっ？ 美緒、守谷君に送ってもらったの？」

「まあね。守谷君ったら、方向が同じだから送りますって言われて、帰り道が同じところまでのつもりだったのよ。電車の中で、守谷君が電車通学じゃない事思い出して、ここまででいいからといったんだけど、心配だからって、家まで送ってくれたの……。でも、守谷ファンには内緒にしてよ。恨まれちゃうから……」



「へえ〜美緒、守谷君に送ってもらうなんて、役得じゃない？  
…守谷君もなかなかやるなあ〜」

美鈴がニヤニヤと笑って言う。

役得……美鈴も同じ事考えるか……。

でも……何が、守谷君もなかなかやるなあ、なのよ？

「まあ、ねえ〜。カッコイイ弟を連れて歩く気分だったんだけどな  
……。守谷君ったら、生意気に年上の私に説教して来るんだよ」

私はさつき思い出した苛立ちに似た感情のまま、愚痴るように言  
った。

「弟なんて、生意気なもんだよ。おまけに汚くて汗臭い。でも、守  
谷君だったら、多少生意気でも許すけどな……。でも、説教って何  
？」

美鈴には高校生の弟がいる。ラグビーをしている所為か、体も大  
きくていつも土まみれで汚れているイメージだ。姉の美鈴の背を越  
え出してから、生意気になったといつも愚痴っていたっけ……。

「ダブルブッキングの事、私一人が責任感じる事ないって、怒られ  
たの。心配して言ってくれたんだろうけど、その言い方が、上から  
頭ごなしに怒る感じで……。一応こちらは2つも年上だし、向こう  
は新入生で、私は会長なのに……。守谷君って結構、俺様なのかも  
……」

「美緒先輩、守谷は美緒先輩を心配してるんですよ。それにアイツ、  
さつきも言いましたけど、1つ上だけの俺を凄く立ててくれるんで  
すよ。そんな、俺様な奴じゃないと思いますよ」

伊藤君は守谷君を一生懸命庇った。

でもね……あの時、馬鹿にしたように笑われたんだから……。

やっぱり、女だからそんな態度なんだろうか？

「じゃあ、私が女だからなのかな？ 二つしか変わらないのに、大人ぶるなって言われたんだよ？ 向こうは未成年で、こっちは成人だって言うの！」

「美緒、守谷君にもそんなふうにしたの？」

「そうよ。年下のくせに生意気になって、私は成人してるんですけど言ったのよ。そうしたらなんて言ったと思う？ そんな事言ってる時点で負けてますよって笑うんだよ。腹立つと思わない？」

「ハハハ、それは美緒の方が負けてるわ」

私は美鈴の言葉にガツクリと来た。

「美緒先輩、守谷の奴、そんな事言ったんですか？ サークルではそんな事無いと思ってたんだけど、やっぱり、女性に冷たい奴なのかな？」

伊藤君は、自分の知らない守谷君の一面を聞いて、戸惑った様子を言った。

守谷君の事、せつかくいい奴だと思ってる伊藤君には、余計な事言ったかな……。

「大丈夫、大丈夫。守谷君は美緒の事、からかってるだけだから……。ふふふ」

美鈴は酔っているのか、私達の話の軽く受け流す。そんな美鈴の言葉に、ムツとして私は言い返していた。

「何が大丈夫なのよっ？ からかってるってどういう事！」

「だから……守谷君もそれだけ心許してるから、美緒に対して軽口が言えるんでしょ？」

心許してるう？

思わぬ事を言われて、絶句してしまった。

たしかに、夏休み以降、守谷君は私たちとも良く話すようになった。夏休みに公園で出会った事は、守谷君は何も言わないから、美鈴にも話していなかった。でもね、守谷君が私達の傍に来て話す時、いつも話してるのは美鈴だよ。私は傍で聞いているだけで……。

「そうか……守谷も美緒先輩に親しみを感じてるんだね」

伊藤君が安心したように笑った。

でも、私の心は納得しない。

違う！ あれは……。

「守谷君は、私を女だと思って、見下してるのよ！」

「またまた〜 美緒は相変わらずだね〜 男の人に偏見持ちすぎだよ」

「そんな訳じゃないけど……」

私は美鈴の突っ込みに、たじろんだ。

私は中学や高校の頃、父を早くに亡くして必要以上にしつかりしなきゃと思っていたのか、母に男の人と同等の評価をしてもらえない仕事と言われ続けていたせいか、同級生の男の子達に負けたくないと思うがとても強かった。そんな中で聞こえてくる「女のくせに」と言う言葉にとっても嫌悪を感じていた。だから余計に男の人の対応に敏感になるのかもしれない。

「美緒先輩、守谷はモテて過ぎて、女性に冷たい態度とる事もあるかも知れないけど、見下すような奴じゃないよ」

相変わらず伊藤君は、守谷君庇いモード。きつと、初めて自分に懐いてくれた男の後輩だからなのだろう……。

「伊藤君に対してはそうかもしれないけど……。でもね」

伊藤君に反論しようと言いかけた時、美鈴が諫めるように口を挟んだ。

「美緒、美緒は男の人相手だと、俄然負けず嫌いになるよ。そんな所が可愛くないんだよ？ だから恋愛もできないんじゃないの？」  
相変わらず美鈴は余裕の笑顔で、私をいたぶるように突っ込みを入れてくる。

…。  
うっ、痛い所を吐いてくるじゃないの。それも後輩男子の前で…。

「私はいいの。今は恋愛よりも目標の為に頑張ってる最中なんだから」

私はいつものお決まりの言い訳をした。

「美緒先輩、美緒先輩は一生懸命頑張ってる所、可愛いと思いますよ」

伊藤君はこんな私でも庇ってくれるのか、慰めるように言った。

……だけど、それ、恥ずかしすぎるよ……。

「あ、ありがとう」

どうリアクションしていいか分からず、初めて言われた「可愛い」と言う言葉に戸惑ってしまい、かろうじてお礼を述べた。

「フッフ、美緒って、年下受けするのかもね？」

可笑しそうに笑いながら、美鈴が思いもよらない突っ込みをする。

「年下受けってなによ？」

私は又苛立ち、尖った言い方をしてしまった。それでも、美鈴はそんな私の気持ちに気付かないのか、笑って「美緒の精神年齢が低いつて事」と、ますます私の感情を煽るだけだった。

「楽しそうですね」

さっきまでの私の苛立ちの原因が、いつの間にか私達の傍に来ていた。

「守谷君」

「守谷」

声を掛けられて初めてその存在に気付いた私達は、驚いてそちらを振りむいた。

「伊藤先輩、酷いですよ。自分だけさっさと先輩達の所へ抜け出して……」

守谷君は少し拗ねた様に、伊藤君に愚痴った。

「いや、違うって。俺はおまえのファンに追い出されたんだよ」

「ファンって……。男子は俺達二人しかいなかったから、珍しかったですよ」

「守谷君、今日のコンパの女子の80%は、守谷君狙いだよ」

美鈴がニヤニヤと笑いながら、守谷君をからかう様に言った。

「本郷さん、俺は獲物じゃありませんよ」

「いやいや、守谷君が餌だと、食いつきがいいのよ。コンパの参加率も急上昇。女子に限ってだけだね」

「なんですか、それは？俺をからかっています？それより、楽しそうでしたけど、何の話をしてたんですか？」

守谷君はそう言いながら、私の隣に座った。ちなみに、私の前は美鈴で、美鈴の横に伊藤君が座っている。

「ああ、そうだ。守谷、おまえ、この間美緒先輩を送って行った時、先輩を見下すような事言ったのか？」

伊藤君は私のために、守谷君に問いただしてくれたのだろう……。でも、そんな事、今更言つて欲しくないのに……。

「伊藤君、その事なら、もういいよ」

私は、困惑顔の守谷君を視界の中に入れながら、この話題を終わらせようとした。しかし、守谷君にしたら、無視できなかったのだろ……。

「篠崎さん、見下すつてどういう事ですか？」

横に座る守谷君は私の方を向いて、怒った様に訪ねて来た。イケメンって怒った顔もイケメンなんだな……などと、雰囲気こそぐわない事が頭をよぎった。私はすぐに何考えてるの！と自分に突っ込みを入れた。そもそも、イライラの原因は守谷君だけれど、それを面と向かつて言う程、私も子供じゃないつもり……。

「だから、もういいのよ」

私は意地になって言い返すと、「よくないです」と言い返す守谷

君。

これじゃあ、埒が明かないよ……。

「まあまあ、守谷君。美緒のいつもの愚痴だから……。男の人にバカにされたくないって言う……。」

美鈴が雰囲気を戻そうと口を挟んだが、余計に守谷君を煽った様で……。いや、いつもの愚痴ってなによ？ 煽られたのは私の方が……。

「俺、篠崎さんを馬鹿になんかした事無いですよ」

「へーそう？ 年上の私に負けてるって言ったの、守谷君でしょ？ どうせ私は可愛くも無いし、大人でもないわよ」

もうここまで来ると自分でも止められない。こんな所が可愛くないのは分かってるわよ！

「はいはい、そんな風に一人いじめてたら、余計に可愛くないわよ。美緒、飲み過ぎじゃないの？ 守谷君、美緒は勝手にいじてるだけだから、放っておいてちょうだい」

美鈴は間に入って、両者の気持ちを諫めようとしてくれた。でも……私一人がいじめてるだけ？ なんだか余計に腹が立つ！

「守谷君、ほらファンの子たちが、こちらを睨<sup>にら</sup>んでるわよ。私達の様なお姉さんの所じゃ無く、あなたに似合う年頃の女の子達の方へ行きなさいよ」

私は完全に八つ当たりモードになっていた。

「篠崎さん、俺に合う年頃ってどういう事？ 篠崎さんにしたら、俺は年下で頼りないって事？」

守谷君も、私の八つ当たりを受けて立つように、言い返す。そっ

ちが受けて立つなら、こちらだって……。

「そうよ、年下は頼りないの！ ほら、あの子達睨んでるから、早  
く行きなさいよ。関係のないこちらが恨みを買ったら嫌なもの」  
もうこうなったら、突っ走るしかない私の意地は、もう理性なん  
てぶっ飛んでいた。これって、お酒のせい？

一瞬、守谷君は綺麗な顔を歪めたけれど、次の瞬間悪魔的な笑み  
を口元に漂わせた。

「篠崎さん、それなら俺が年下だから頼りないかどうか、試してみ  
てくれませんか？ 俺の事よく知りもしないのに、年下だからって  
だけで頼りないって決めつけられたくないんです」

それが守谷君のしかけたトラップだとは気付かずに、こちらを睨  
むように見ている年下の女の子達の視線と、横でニヤニヤと笑う美  
鈴の好奇心丸出しの視線と、目の前の綺麗な顔に悪魔的な笑顔を貼  
り付けた守谷君の挑戦的な視線に囲まれ、ますますイライラが最高  
潮に達し、売り言葉に買い言葉の如く、守谷君の提案を受けて立っ  
てしまった。

「わかったわよ、試してやろうじゃないの！」

「じゃあ、俺と付き合って下さい。前言撤回は認めませんよ。それ  
じゃあ、また連絡します」

ニヤツと笑った守谷君は、それだけ言うのと元の席へ戻って行った。  
一瞬、彼が何を言ったのかよく分からなかった私は「ちよっと」  
と呼びかけたが、彼の耳には届かなかった。

その時、横にいる美鈴が盛大に笑いだした。

「守谷君、やるわね」



「何が？」

嫌な予感がしながらも美鈴に尋ねると、美鈴はとんでもない事を言い出した。

「美緒は守谷君と付き合う事になったみたいよ。ちゃんと付き合っ  
てあげなよ。彼は真剣なんだから」

美鈴の言葉を聞きながらも、私はまだ現状を理解できていなかった。同じように伊藤君も、何が起こったのかわからず、キョトンと  
していた。

そして、私が守谷君の罨にはまったと気付いたのは、もっと後の  
事だった……。

## #06：告白

「畏だなんて言うのと、悪意があるみたいだけど、そこにどんな思惑があったのか、私にはしばらく理解できなかった。実のところ、畏だと言う事さえ、美鈴に言われるまで気づかなかったぐらいだから……。」

「美緒は畏にかかった兎みたいなものよ」

「畏？」

現実味の無いその言葉に、一瞬戸惑った。

それって……守谷君の畏に私のはまったって事？

有り得ない。だってそうでしょ？ どうして守谷君が私を畏にはめなきゃならないの？

私はさっきの守谷君とのやり取りを思い出してみた。

もしかして……私の天邪鬼な性格を読んで、戦いの場に私を引きづり出したって事？

そう美鈴に問うてみれば、呆れた顔をして「戦いの場って何よ？」と反対に突っ込まれ、私は猛然と言ったのけた。

「そうでしょ！ これは守谷君と私の男と女のプライドを賭けた勝負なのよ！」

そう吼えた私を見て、がっくりと肩を落とす美鈴。「美緒先輩、頑張ってください」と何も分かっていなさそうな伊藤君の笑顔。

そして私は、どんな勝負を挑まられても、「やっぱり年下は頼りないわね」と鼻で笑ってやろうと、心の中で拳を握り締めていた。

その翌週のサークルの日、帰りがけに守谷君が近づいて来て、次の日曜の私の予定を確かめると、返事も聞かずに戦いの日時を告げ

た。

「日曜日の朝9時に迎えに行きますから、動きやすい格好を待っていてください」

そう告げて遠ざかる守谷君の背中を呆然と見つめていた私は、美鈴の笑い声で我に返った。

「美緒、戦いの結果教えてね」

ニヤニヤと笑う美鈴に、私はニッコリと笑って余裕の笑みを見せた。

……受けて立ってやろうじゃないの！

11月後半の日曜日、小春日和の青空を見上げ、私は武者震いをした。本当の所、守谷君が私を何に付き合わせ、どんな戦いを挑もうと思っているのか、皆目見当がつかなかった。動きやすい恰好をと言われていたので、ジーンズと綿のセーターにジャケットを羽織った。

……どこで何をするつもりなんだろう？

その疑問は、心の片隅で小さな不安になった。でも、あの時の守谷君の挑発する様な笑みを思い出すと、イケメンだからって年下男に馬鹿にされるもんかと、私は自分に活を入れていた。

「おはようございます」

約束の時間に家の前で待っていた私は、目の前に留まった車から降りて来た守谷君の女性を虜にする甘い笑顔に、心臓がドキリとした。

……ま、負けそう……。

「おはよう」と挨拶を返し、早くなる心臓の鼓動に余裕が無くなりつつあるのを、一生懸命隠しながら、助手席のドアを開けてどう

ぞと言っている守谷君の姿を見て、一瞬フリーズした。

いかにも女慣れしていそうな流れる動作と彼の眩しい笑顔に気後れしつつ、大人の余裕と心の中で繰り返して、助手席に乗り込んだ。彼が助手席のドアを閉め、運転席に回っている間、私は男の人と二人で車に乗るのは、初めてだと言う事に思い至った。いいえ、休日に男の人と二人で出かける事さえ、初めての事なんだと自覚した。

……こ、これじゃあ、まるでデートじゃない！

自分の頭に閃いたデートと言う言葉に、頬が熱くなるのを感じた。

……ち、違う！ これは、戦いだって！

自分の恋愛経験値が全く無い事は分かっているけれど、勘違いしてはいけない。いっそ、芸能人張りのイケメンくんとお出かけできるなんてラッキーぐらいの余裕が無いと！

「篠崎さん、暑いですか？ 顔が赤いけど……窓を開けた方がいい？」

運転席に乗り込んだ守谷君が、私を見てそう声をかけた。何赤くなってるのよ私と自分に突っ込みを入れつつ、大人の余裕と心の中で繰り返し、窓の外を見るフリして顔を背けた。

「今日はいいいお天気だから、車の中暑かったみたい……でも、大丈夫だから……それで、どこへ行くの？」

「行き先は、行ってからの楽しみ」

そう言って悪戯っぽく笑う守谷君を、まともに見てしまった。

「へ、変な所へは行かないでよ」

「変な所って、どこですか？」

「えっ？ ……………」

絶句している私にチラリと視線を向けると、「篠崎さんって、面白いね」と笑い出し、車をスタートさせた。

……………又馬鹿にされてしまった……………。

なんだか何を言っても笑われそうな気がして、私は流れる窓の外の風景を見つめた。車は郊外の山間部に向けて走っている様だ。途中のコンビニに寄ったので、何か買物があるのかと車の中で待つつもりでいたら、昼食を買うのだと言う。

「えっ？ 昼からもかかるの？ それなら先に言ってくれば、お弁当を作ったのに……………もつたいない」

「篠崎さん、言えばお弁当作ってくれたんですか？ それなら、今度お願いします」

ええっ？

誰も守谷君の分まで作るって言っていないのに……………。

「今度って……………そんな機会があればね」

「機会は作ればいいんじゃない？」

「それは……………今回の勝負がつかなかった時に……………」

「勝負？」

守谷君は少し怪訝な顔をして訊き返した。

「守谷君が言ったんでしょ？ 年下だから頼りないかどうか試してくださいって……………だから、これは守谷君の年下の男としての意地と、私の年上の女としての意地の勝負だと思っただけ……………」

私の言葉を聞いて、守谷君は益々顔を歪ませ、そして、額に手を当てて俯いて頭を横に振った。

「篠崎さんがそう思ったのなら、それでもいいです。今日は付き合ってくれますよね？ だったら行きましょう」

それでもいいって……違うの？

試してくださいって言ったのは守谷君だよな？

私は困惑した。何か間違っていたのだろうか？

グルグルと考えながら、守谷君の方を見ると、真っ直ぐ前を向いて真剣な顔で運転をしている。

まっ、いいか……でも、本当にどこへ行くつもりなんだろう？

たどり着いた所は、私にとっては懐かしい場所だった。

「あっ、ここ来た事がある」

思わず声を上げた私を、驚いたように守谷君がこちらを見たので「遠足で来た事があるの」と答えると、彼は納得がいったのか「ああ」と返事した。

そこは、私の住む町から車で20分ぐらいの所にある森林公園だった。紅葉は麓のこの公園まで下りて来ていて、もうピークを過ぎているようだった。ここで何をするつもりなんだろう？

「ここ奥に滝があるの知ってますか？」

守谷君は唐突にそう切り出した。

「滝？ ああ、知ってるけど……行った事は無いな……そこへ行くの？」

「そうです。それから展望台へも……そんなに大変なルートじゃないから、大丈夫ですよね？」

滝に展望台……森林公園の奥の山にある事は知っていた。でも、なぜ？ 何のために行くの？

大丈夫っていうのは、どう言う事なんだろう？ 体力を心配しての事？

「あの……何をしに行くの？」

「え？ ハイキングですよ。自然の中を歩くのは気持ちいいんですよ」

それは気持ちいいとは思うけど……勝負の話はどうなったの？

しばらく考えて、私は閃いた。……そうか、こんな慣れない山道を歩かせて、頼り甲斐がある事を証明したいんだ。彼はきっと、こう言うハイキングに慣れているのかもしれない。ハイキングと守谷君ってなんだかイメージが繋がらなかったけど、もう守谷君の見た目のイメージと実物は違うのだと言う事は、なんとなく感じていた。

守谷君は買ってきたお弁当とお茶をリュックに詰めると、それを背負った。篠崎さんはそのままでもいいと言うので、私は手ぶらのまま守谷君に付いて行った。

遊歩道の入り口の様な所に簡単な絵地図を乗せた看板が立っていた。それを見ると、渓谷に沿って奥まで行くと滝があつて、そこからさらに頂上へ向かつて登って行くと展望台があるらしい。その看板を見ると、結構登らなければいけない様な気がして、大学へ入ってから運動らしい運動をしてこなかった体力に不安になった。

折り紙同好会なんて入ってるから体力ないと思って、こんな勝負を挑んで来たのだろうか？

こうなったら意地でも登りきってやる！

守谷君は私がそんな事を思っているなんて思いもしない様に、のんびりと私の歩調に合わせてお喋りしながら歩いて行く。晩秋の紅葉の終わりがけの所為か、歩いている人も少なく、男の人と二人、山の中へ入って行っていいの？ と、頭の片隅で警告音が鳴った。……馬鹿な……心配する事なんてない！

落ちた広葉樹を踏みしめながら、針葉樹と広葉樹が混じった山中を歩いて行く。守谷君は小さな頃から、アウトドア大好きの両親に連れられ、夏はキャンプや海、冬はスキーと自然の中で遊んで来た、いろいろなエピソードを面白おかしく話してくれる。結構喋り出すと人懐っこくて話しやすい。またまた、守谷君に対するイメージを更新させながら、私はいつの間にかこのハイキングを楽しんでいた。

滝まで来ると一休みしようと言う事になり、私は傍にあつた岩に座った。守谷君がリュックからお茶を出してくれたので、それを一口飲むと、彼は目の前に小さなチョコレートの包みを差し出した。

「疲れた時は甘いものが良いですよ」

なんだかやけに至れり尽くせりだなと思いつつ、チョコレートを口に入れる。これが守谷君の作戦なのか？ と訝しんでみるけれど、彼は全く屈託のない笑顔で、自分が今まで見た事のある滝の話をしている。

……これだけのイケメン君が、私なんかとハイキングしていいの？

さつきから歩いていてすれ違った人や、私達の前を歩いていた小母様達お数人とか、守谷君を意識してチラチラと見ていたのは気付いていた。私みたいなのが隣にいたら……なんて思われてるんだろう？



「それじゃあそろそろ行きますか？　これから上りですけど、篠崎さん、足は痛くないですか？」

優しい言葉をかけてくれる守谷君の、その言葉の裏に何かあるのだろうかと変に勘繰りながら、「大丈夫」と笑顔で立ち上がった。

さすがに上りになると、私は少しづつ遅れ始めた。普段の運動不足を呪いつつ、何もしゃべらずにただ黙々と付いて行く。守谷君も時々話しかけてはくれるけれど、息が上がって答えられない私を見て、話しかけるのは諦めた様だ。それにしても、こんなに急な登り道だとは思わなかった。守谷君が途中で止まって待っていてくれて、「篠崎さん、大丈夫ですか？」と尋ねると、追いついた私に右手を差し出した。その手の意味が分からず、守谷君の顔を見上げると、「引っ張りましょうか？」と言う。驚いた私は、しばらく俯いて息を吐くと、守谷君の思惑に気付いた。

……私に優しくして、頼りがいがあるって思わせたいんだ。

私は声も出すのもしんどくて、首を横に振った。守谷君の思惑なんかには引っかからないわよ！

それから私達は、無言のまま登って行った。前に行く守谷君の背中を見上げ、私はどうしてこんなしんどい思いしてるんだろうと、ぼんやりと考えていると、彼が振り返った。彼は私を励ますように、爽やかに笑った。その笑顔に私の心臓は、息切れがする程速かった鼓動が、ますます速くなってしまった。

登り始めてから時間にしたら、1時間もかからなかったと思うけれど、守谷君なら30分もかからず登ってしまうコースなのだろう。けれど、運動不足の私には、とても長い地獄のロードの様だった。それは、守谷君と言う負荷がかかったせいかも知れないけれど……。

そして、不意に視界が開けた。足もとばかり見つめて登っていた

せいか、それは突然のゴールで、笑顔の守谷君のお出迎え付きと言  
う、何とも豪華なシチュエーションだった。

「篠崎さん、着きましたよ。頑張りましたね」

嬉しそうに笑って迎えてくれた守谷君の言葉は、たとえ上から目  
線でも、気にはならなかった。

守谷君と一緒に木の柵で囲まれた展望台から、私の住む街を一望  
した時、私は何とも言えない感動に包まれた。大げさかもしれない  
けど、山に登る人の気持ちが少しわかった様な気がした。私は思い  
つきり空気を吸った。そして、ゆっくりと吐き出すと、隣りに立つ  
守谷君を見上げた。

「守谷君、ありがとう。連れて来てくれて」

私はもう勝負なんてどうでもいいと思った。こんな素敵な感動を  
味あわせてくれて、こんな素敵な場所に連れて来てくれた守谷君に、  
感謝の気持ちで一杯だった。

「よかった。篠崎さんが喜んでくれて……。来た甲斐があつたよ」  
嬉しそうに笑う守谷君に、私も笑って頷く。そして私達は、二人  
で指差しながら、あの辺が大学だねとか、海が見えるねとか、しば  
らく下界を見下ろしていた。

近くにあつたベンチに座って、コンビニ弁当を食べる。自然の中  
で食べると、コンビニ弁当でもとても美味しい。それは、体を動か  
した後だから余計にだったのかもしれない。

「自然の中を歩くのって、こんなに気持ち良くて、楽しいものだ  
とは思わなかったわ。また、行きたいなあ」

私はお弁当を食べ終わると、遠くへ視線を向けて伸びをしながら  
言った。守谷君はそれに答えるように「ぜひ行きましょう」と嬉し

そうに言った。

「そうね。春になったら、サークルの皆で行きましようか？」

「それもいいけど、俺は篠崎さんと二人で行きたいんだけど……」

守谷君のその言葉に、私は驚いて彼の方を見た。

えっ？ それって……まだ勝負の続きのつもり？

「守谷君、認めるよ。守谷君は年下でも頼りがいあるって……勝負は私の負けで、いいよ」

私は、何をいきがっていたんだろう……。

2年早く生まれたぐらいで年上ぶって……。

あんな風に子供じみたやり方で、私に勝負を挑んで来た守谷君だけど、こんなに素敵な経験をさせてくれるなんて……思わなかった。絶対に負けないなんて、息まっていた自分が恥ずかしい。

「篠崎さん……俺、最初から、篠崎さんに勝負を挑んだつもりないんだけど……」

「えっ？ だって、年下が頼りないか試して欲しいって……」

「俺、あの時、言いましたよね？ 俺と付き合って、頼りないかどうか試して欲しいって……」

「だから、今日、付き合ったでしょう？ それで、守谷君は頼りがあるって認めただけ……だから、守谷君に付き合うのは今日だけのつもりなんだけど……」

「篠崎さん、俺が言った付き合いって、交際して欲しいって事なんだけど……」

ええっ？

ここ、交際？ 交際って……恋愛に伴う男女のお付き合いの事？  
どうして、私と？

「守谷君、からかわないですよ。やっぱり私を馬鹿にしてるでしょ？」  
そうよ、守谷君程のイケメンでカッコイイ男子が、こんな年上の美人でも何でもない私に、交際を申し込むはずが無い。守谷君は、私をからかって、楽しんでるんだ。

「篠崎さん、俺は真剣に言ってるんです。俺……篠崎さんの事が、好きなんだ」

#07：運命の恋人（前書き）

長らくお待たせしました。  
お楽しみくださいね。

## #07：運命の恋人

「俺……篠崎さんの事が好きなんだ」

突然の告白に、私の頭はフリーズした。驚いた私は、しばらくの間、守谷君と視線を絡ませたまま、見つめ合っていた。先に視線を外したのは守谷君だった。

「篠崎さんは、告白されても、好きじゃ無い人とは付き合えないって、いつも断っているって聞いたから……あんな風にワザと篠崎さんを怒らせて、たとえお試しても付き合ってもらえたらと思ったんだけど……まさか篠崎さんが、勝負に付き合わせるなんて思い違いしてるとは思わなかったから……焦ったよ」

守谷君は苦笑しながら言った。

勘違いしていた事が、急に恥ずかしくなった。

それにしても、どうして私がいつも断っているって知ってるの？

「あの……私がいつも断ってるって話、誰から聞いたの？」

「本郷さんだよ。彼女に気付かれたんだ。俺の気持ち……それで、篠崎さんの事、いろいろ教えてもらって……」

なに？ 美鈴が言ったの？

私は打ち上げの日の美鈴の言葉を思い出して、合点がいった。

何が畏にかかったウサギなのよ！

「私、守谷君の畏にかかるつもりありませんからね」

「畏？」

「そう、美鈴に言われたの。私は罠にかかったウサギだって！」

「ち、ちよつと待ってください。誤解です。確かに、篠崎さんをワザと怒らせて付き合わせるような雰囲気を持って行っただけど……それは、まともに告白しても、絶対に断られると思ったから……外見だけじゃ無く、本当の俺を見て欲しかったんだよ。けして、罠にかげようとか思っていないません」

守谷君は少し情けない顔をして、必死で言い募る。その必死さに、どこかほだされる様な気持ちになった。

本当に、私なんかがいいの？

まだ何処か信じられず、私は守谷君をじつと見る。私の視線に気付いた彼は、はずかし気に少し俯いた。

「篠崎さん、わざとですか？ そうやって俺の事じつと見るのは……サークルの時も、よく俺の事、見ていましたよね？ 少しぐらい俺に気があるのかなって思ったりもしてたんですけど……」

えっ？ バレてたの？ ウオツチングしていた事……

私は急に恥ずかしくなり、守谷君から目を逸らした。

「あ、あれは……ミーハー的なもので……守谷君ってほら、芸能人並みにカッコいいから、ちよつとアイドルを見てる様な気分で……ウオツチングしてたの。ごめんなさい」

私の言葉を聞いた守谷君は、おもむろに息を吐くと、「篠崎さん、あなたも顔だけですか……」と、落ち込んだ。

「いや、最初は確かにイケメンだなんて見てたけど……夏休みに公園で会った時の守谷君や、今日の守谷君を見ると、全然違う顔が見えて来て、むしろそちらの方が好ましいって言うか……」

最後の方は自分でも何を言っているのか分からなくなって、しど

るもどろになってしまった。そんな私の言葉を聞いた守谷君は、パツと破顔<sup>はがん</sup>させ、「本当ですか？」と私の顔を覗<sup>のぞ</sup>き込んだ。

「いや、えっ？ ……そうじゃなくて……あの……今私は、就活中な訳で……お付き合いとか、恋愛とか言われても……ちよっと……」  
私はテンパッていた。こんな時に余裕でかわす経験値も無く、なぜだかスッパリと突き放す事も出来ず……

「就活中？ 篠崎さんは、公務員志望でしたよね？」

「えっ？ それも、美鈴に聞いたの？」

「はい。でも、民間企業も考えているんですか？」

「そう言う訳じゃないけど、来年の6月には公務員の試験があるから、勉強しないといけないし……」

私は及び腰になりながら、どんなふうに言えば守谷君を傷つけずに、元の先輩後輩に戻れるかを考えていた。

「じゃあ、それが済んだら、真剣に考えてもらえますか？」

私の逃げ腰の言葉に怯む事無く、じりじりと攻めてくる守谷君に、私はタジタジだ。

「守谷君だったら、私なんかより、ずっと綺麗な彼女を選び放題なのに……私じゃ無くて……」

ここまで言いかけたら、守谷君の表情がすつと冷たくなった。

「篠崎さんも、皆と同じ事言うんですね？ 俺は周りの意見に合わせて恋愛しなくちゃいけないの？ 俺は外見だけで好きな人を選ばなくちゃいけないわけ？」



守谷君は、とても冷たい視線で私を見つめた。さっきまでの、熱っぽく攻める雰囲気は、一瞬にして消えてしまった。

守谷君……

彼はその、誰もが羨むうらやま整った顔のせいで、随分嫌な思いもしてきたのだろうか……。

でも、そんな守谷君が、どうして私なんかを選ぶのかが、分からない……。

「ごめんなさい。守谷君の気持ちも考えず……でも、どうして私なのか、分からなくて……」

「誰かを好きになるって、そんなもんじゃないんですか？ 気付いたら好きになってたんだから、しょうがないですよ……でも、篠崎さんの迷惑になるんだったら、諦めます」

守谷君のこの言葉を聞いた時、彼は真剣なんだと感じた。それなら、こちらにも真面目に答えなくては……。

「迷惑だなんて……そんな事……私、この年になって恥ずかしいんだけど、恋愛って言う意味で、誰かを好きになった事が無いのだから、よく分からないのよ。今日だって、男の人と二人で出かけるのも、二人で自動車に乗るのも、初めての体験なのよ……だから、最初はすごく緊張した。おまけに相手が守谷君なんだもん」

私がそう言うと、守谷君はこちらを見て、フツと笑った。

「篠崎さん、それって……俺は喜んでいいんですか？」

「いや、だから、あの……さっきも言った様に、今は就職のための勉強をしなくちゃいけないから……お付き合いするとかは、考えられないの。就職が決まるまで待ってもらえるなら……それから真剣

に考えてみる。それじゃあ、ダメかな？」

私はこう言いながら、まだ何処か、守谷君の気持ちを信じていなかったのかもしれない。

公務員試験の結果が出る来年の8月までに、彼は私の事を好きだなんて思い違いだったと、気付くかもしれない。もしかしたら、覚めてしまつかもしれない……そんな風に頭の片隅で考えていたのだから……。

「篠崎さん、さっき俺がそう言いました。じゃあ、それまでは、予約と言う事で……」

彼の表情が一気に笑顔に変わり、嬉しそうにそう言う。

「予約って……、とりあえず今は、お友達と言う事で……」

私は予約の意味が分からず、中学生の断り文句の様な事を言った。

「お友達って……せめて、恋人候補とか言って下さいよ」

こ、恋人？！

お付き合いなんて言うだけでドキドキするのに、恋人なんて……上級すぎる！！

「いいえ、お友達もしくは、先輩後輩ですな」

「それじゃあ、今までと同じじゃないですか？ たまには息抜きに誘ってもいいですか？ 電話やメールもいいですか？」

ええっ？

ちよつと、ちよつと……守谷君暴走しすぎだつて！！

私は暴走する守谷君を軽く睨んだ。

「大学では今まで通り先輩後輩で、息抜きは二人だけじゃ無く、他の人も一緒だったら……電話は用がある時だけで、メールは頻繁じ

や無ければ……でも、私メールするの苦手だから、返事はすぐできないかも……」

言いながら、私ってなんてわがままで上から物を言っているんだろって、笑ってしまいそうだった。守谷君は少しがりした様な顔をしたけど、気を持ち直したのかすぐに笑顔になった。

「残念だけど……不本意だけど……その条件飲みます。篠崎さんの初めての恋人候補と認めてくれるなら……」

だから……恋人って言葉は、恥ずかしすぎるのよ。

そんなこんなで、私達は取りあえず今まで通りの関係が続ける事になった。全ては私の就職が決まるまで保留と言う事で……

でもね、あんな風に守谷君に告白されて、その後、彼の事が気にならないはずが無かったのよ。

\*\*\*\*\*

私は、守谷君とハイキングに行った夜、美鈴に電話をした。それは報告の為では無く、怒るためだ。

「美鈴、守谷君に私の事、何話したの？」

私は、それほど怒っていた訳じゃ無かったけど、低い声で問い詰めた。

「あつ、守谷君バラしちゃったの？」

美鈴は悪びれた様子もなく、陽気な声を出した。

「バラしちゃったのじゃないわよ。それに罨にかかったウサギなんて、訳の分かんない事言うから……恥じかいたじゃないの。美鈴は知ってたんでしょ？守谷君の思惑」

「あんな切ない目で美緒の事見つめてるから、ちょっと助けをあげたくなるじゃない？ それに、その年になっても恋愛経験の一つも無い美緒の為にも、って思ってるね……」

なに？

私の為？

「余計なお世話よ！」

自分の知らない所で、誰かの思惑通りに、自分が踊らされているなんて、我慢できない。それがたとえ親友の美鈴でも！

「でも、美緒だって守谷君の事、気になっていたじゃない？ ……それで、守谷君とは付き合う事になったんでしょ？」

美鈴には、私の怒りなんか何とも思っただけなのか、嬉しげな声で言った。「悪いけど、ご期待に添えないみたい」と憚然と答<sup>ふぜん</sup>えれば、「またまた……冗談でしょう？」と笑う。私は、仕方なく、今日の事をかいつまんで説明した。すると、美鈴は少し驚いた様な声をあげた。

「ええっ？ 保留？ なんて贅沢なの！ あの守谷君を来年の夏まで待たせるなんて！」

「贅沢って……守谷君もその内、私なんかを選んだのは間違いだったって気付くかもしれないし……今の盛り上がった気持ちも、冷めて行くかもしれないし……待っていてくれるかどうか、分からなし……」

自分からも待つて欲しいってお願いしたけど、やっぱり守谷君みたいなモテモテマンを、就職が決まるまで、キープできるなんて、自惚れてはいない。

「美緒は守谷君の気持ち、信じられないの？」

「信じられないって言うか、自分に自信が無いから……とにかく今は、就職のために勉強する事が最優先だから……」

「ふん。でも、断らなかつたんだ？ いつもみたいに……だけでも美緒、就職決まるまでって守谷君を待たせてるけど、決まった後は付き合うつもりはあるんでしょうね？」

急に低い声で問いかけて来た美鈴の言葉に、私は怯んだ。

……付き合うつもり、って……

「就職が決まったら、真剣に考えてみるって言ったけど、付き合うつて約束したわけじゃない……守谷君だって、それは分かっていると  
思うけど……」

私は今日守谷君と交わした約束を思い返していた。

……恋人候補って、守谷君言っただけ……守谷君もそのつもりなのかな？

「呆れた。付き合うつ覚悟も無いのに、守谷君を待たせてるわけ？  
それで、とりあえずキープしておいて、やっぱり付き合えませんか  
て断るの？ 美緒は守谷君の気持ちに胡坐をかいて、平気なの？」

思わぬ美鈴のきつい言葉に、改めて恋愛の現実を思い知らされた。  
私って、いい加減すぎたのだろうか？

守谷君の気持ちに対して、不誠実な対応だったのだろうか？

「そうか、そうだよな……付き合うつ覚悟が無いのなら、今断った方が  
いいよね。そうしたら、守谷君だって、他の娘と付き合えるもの  
ね……」

そんな事を言いながら、他の娘と思っただけで、胸が苦しくなっ

た。

「ちょっと待って、美緒……さっきは言い過ぎたから、もう一度よく考えてよ。それに、誰かを好きになって、付き合うようになって、就職のための勉強の邪魔にはならないから……かえって中途半端な方が、余計に心惑わされて、勉強が手に付かないんじゃないかな？ 私も直也とは、お互いに励まし合って、お互いに恥ずかしくないよう頑張ろうと思うもの。恋は時には力にもなるから……美緒も逃げないで欲しい」

美鈴の言葉は実感がこもっていた。

私は逃げてるんだろうか？

その後のサークルで、私は守谷君をまともに見る事ができなかつた。彼のその姿を見た途端、私の心臓はビクリと跳ね、思わず、顔を背けていた。

どうしてしまったの？ 私……

守谷君は真っ直ぐ私達の傍へ来ると、「本郷さん、篠崎さん、こんにちは」と挨拶をする。美鈴がにこやかに挨拶を返しているから、私も暴走しそうになる心臓を心の中でなだめながら、どうにか「こんにちは」と返した。彼の方を見上げると、目が合った。たったそれだけの事なのに、うるたえる自分に戸惑いを感じた。いつもなら相手が目を逸らすまで、逸らしたりなんかしないのに……私は目が合った途端、顔ごと逸らしてしまった。

どうしてしまったの？ 私……

「美緒、顔、赤いわよ」

私を観察する様に見ていた美鈴がポツリと言うと、ニヤリと笑っ

た。

私は自分でももう誤魔化しきれいな程、守谷君を意識している自分に気付いていた。でも、だからと言ってどうしたらいいか分からなかった。

初めての感情に身動きが取れず、うろたえる私に、守谷君からメールが届く。

そう、守谷君はあれから、3、4日に一度ぐらいの割合で、写真付きのメールを送ってくれる。その写真は、綺麗な夕焼けだったり、何気ない落ち葉だったり、机の上の文房具だったり、その日の食事の料理だったり……そして、私も時々、写真で返事を返したりもした。そのやり取りは、私を癒してくれた。

サークルの時の変わらない態度の守谷君、そして、何気ない写メメールの中に見つける優しさ……

私は彼の罨の中に落ちて行く自分を、自覚しつつあった。

そんな時、守谷君から「雪を見に行きませんか？」と誘われた。それは、クリスマス間近の週末だった。県北部の山脈の上部に白い物が見られるようになり、ロープウェイで山頂へ雪を見に行こうと言う事だった。私は覚悟を決めて、彼の誘いを了解した。

ロープウェイを降りると、思った以上に寒く、ダウンジャケットを着ていたけれど、思わず首をすくめた。そんな私を見て、守谷君はすぐに自分のしていたマフラーを外すと、私の首に巻きつけてくれた。

それだけの事で、心まで温かくなる。彼のそんな優しさに、私の中に又一つ彼への想いが積み上がる。ハイキングの時とは違い、日毎に重くなるこの想いを抱えてる今の私は、あの時の様に楽しくお

しゃべりさえできない。このままでは、彼に心配をかけてしまうと思っても、ぎこちない態度の自分に舌打ちしたい気分だった。

「篠崎さん、寒かったから、あまり良くなかった？」

山の上のカフェで一休みした時、守谷君は心配気に訊いて来た。

大きな窓一面に広がる銀世界に目を向けていた私は、彼の問いかけに思わず首を振った。

「ごめんなさい。こんなに雪のある所へ来たの初めてで、とても嬉しかったし楽しかったの。だけど……私、変に緊張しちゃって……」  
今のこの心理状態をどんなふうに説明していいのか分からない……

「もしかして、この間、俺が告白した事、意識してるから？ 俺、できるだけ今までと同じように接しているつもりだったんだけど……今日、ここへ誘うのも、すごく悩んだんだ。でも、スキーとかした事無いつて言ってたから、雪を篠崎さんに見せたかったんだ」  
守谷君はどうしてこんなに上手く、女心のポイントを突いて来るのだろう？

彼の言葉に、私は頬が熱くなるのを感じた。きっと私、頬が赤くなってる……そう思うと余計に恥ずかしくなって、俯いてしまった。そんな私の態度は、雄弁に私の気持ちを伝えていたのだろう……

「篠崎さん、俺……自惚れてもいいかな？ 篠崎さんも俺の事……もう一度訊いてもいいかな？ それともやっぱり、来年の夏まで待たないとダメかな？」

私は返事の代わりに首を横に振った。

「それって、待たなくていいって事？」

守谷君の問いかけに、今度はコクリと頷いた。<sup>うなず</sup>そして、顔を上げると彼と目が合った。その熱い眼差しに、目を逸らす事ができな



った。

「じゃあ、俺と付き合ってくださいますか？」

私は小さく「はい」と答えながら、頷うなずいた。

その日から、彼は私にとって大切な人になった。

小さな喧嘩はしても、すぐに仲直りできたし、なにより、一緒に居る事がどうしてこんなにしっくりくるんだらうと、不思議になる程の存在だった。私達は小さな思い出を積み重ねて行った。それは、いつまでも続くと疑う事さえしなかった。

公務員試験も、落ちれば彼に辛い思いをさせると思うと、余計に頑張れた。無事に合格して、赴任地が同じ県内と言え、車で3時間もかかる地方都市だと分かってても、私達は大丈夫だと信じていた。週末毎に彼の元へ帰って、一緒の時間を過ごした。

他県出身の彼は、地元へ帰らず、この県の教員試験を受験する予定だった。私達は、いつともなし、共に歩む未来の自分達の話をしていった。

彼も私も、運命の恋人だと信じていた。

そう、あの日までは……………。

## #08：永遠の償い

「第52回虹が丘小学校入学式を閉会します」

閉会を告げる言葉に、我に返った。

あ……入学式が終わってしまった。

私は、先程まで過去へトリップしていた意識に活を入れる様に、小さく深呼吸すると前方を見た。新一年生の前に、それぞれの担任が立った。今から新一年生を教室まで連れて行くらしい。また、周りがざわつきだした。よく耳をそばだてると、「守谷先生が担任なんて、嬉しい」とか「やっぱり守谷先生は、カッコイイよね」とか……遠い昔に聞いた様な言葉がささやかれている。

……慧、あの頃と変わらないね……でも、大学ではあまり見せた事の無い、自然で屈託のない笑顔を、惜しみなく子供達に向けている。もう、私には向けられる事の無い笑顔……

私ったら、何を考えてるの！

美緒、これだけは忘れちゃいけない。裏切ったのは自分だと言う事を……

私は自分に言い聞かす。たとえ担任だとしても、いいえ、担任だから、その距離感を忘れてはいけない。私達は、まったく新しい人間関係として出会った、まったく新しい個人として、過去の事はおくびにも出してはいけない。

肝に銘じる様に自分に言い聞かせる。

これは、私の彼に対する永遠の償いなのだから……

担任教師が子供達を連れて退場すると、保護者は学校からの連絡事項をいくつか聞かされた。そして、その後、自分の子供の教室へ

向かう。教室の場所は分からなかったけれど、同じクラスの保護者の後について行けばいいだろう。自分の母校だったが、校舎は数年前に建て替えられていた。

周りのお母さん達の会話はやはり守谷先生の話題だ。今年3年目で、去年は3年生を担任したらしい。担任としての評判がよかったからか、今年は1年生の担任に大抜擢されたと、自慢気に話す母親。その母親の上の子は、去年担任が守谷先生で、とても良かったと嬉しそうの話している。

私は小さく溜息を吐いた。こうして小学校に居るだけで、彼の噂が聞きたくなくても耳に入ってくる。どうして彼は、実家へ帰らなかつたのだろうか？ もう、この県で教師になる意味が無いのに……

あ……私ったら、なんて自惚れが強いだよ。私と別れた後に、彼が誰かと付き合っていたっておかしくないのだから……その彼女の為に、この県に残つたのかもしれない……恐らくそうだろう。

拓都がいなかったら、彼がこの県で教師になっていた事さえ知らずにいただろう。いや、あのままK市にいたら、出会わずに済んだのに……なんて運命は皮肉なんだ。

1年3組の教室にたどり着くと、教室の後ろに半分ぐらいの保護者たちが立っていた。父親の姿が思ったよりも多い。よく見ると夫婦で出席している様だ。なんとなく、拓都が不憫ふひんになる。

後から来た人たちもどんどん中へ入って行く。だけど、私は教室の中へ入る事に躊躇ちゅうじゆした。まだ、私の存在に気付かれたくない。まだ、再会するだけの心の準備ができていない。

私は廊下から、そつと中を覗き込んだ。すぐに長身の守谷先生の姿が目飛び込んで来た。入学式だったせいか、ブラックスーツを着ている。彼のスーツ姿は、成人式に着たのを写真で見せてもらった事があったが、生で見るのは初めてだ。何を着てもさらりと着こ

なしてしまう彼は、スーツ姿もとてもきまっていた。

拓都の姿を探した。拓都は窓際から3列目の前から3番目の所に居た。一生懸命先生を見上げて、話を聞いている。拓都の目には、この担任はどんなふうに映るのだろうか？ 父親を亡くしてから、初めて身近な大人の男性だ。初めての担任が、男性で良かったのか、女性教諭の方が良かったのか……

子供たちへの話が終わると、守谷先生は教室の後ろに立つ保護者に「1年間、よろしくお願いします」と頭を下げた。

私の過去に関係無く、拓都が楽しく学校生活を送れば、それでいい。保護者に頭を下げた後笑顔になった担任教諭の姿に、視線を向けた。私をどんなに恨んでもいい。どうぞ、拓都を1年間よろしく願いますと、心の中で頭を下げた。

結局、教室の中に入る事無く、恐らく担任教師にも気付かれないまま、明日からお世話になる学童保育の顔合わせに拓都と共に出席した。この学童保育は、虹が丘小学校の校庭の端に建つ平屋建ての建物で、校庭・遊具等を小学校と共有する。事前に説明を受け、申し込んでいた子供と保護者が集まって来ていた。

最近は働く母親が多いので、もっと人数が多いかと思っていたが、この辺りはまだまだ祖父母と同居世帯も多く、昼間は祖父母に任せられている親も多いのだろう。

一通りの説明の後、自己紹介をした。拓都と同じクラスの子もいるようで、少し安心した。

「今度1年3組の担任になった守谷先生は、大学生の頃、ここで指導員をしていたんですよ」

学童保育の責任者の人が、にこやかに話をする。しかし、私はここでもかと、彼の噂に付きまとわれている様な気がして、辟易へきえきとした。

そう言えば、大学の頃の夏休みに、拓都と共に芝生公園で彼と会った時、学童の子供達を引率していたっけ……又過去が顔を出す。

あの時1歳だった拓都を、覚えているだろうか？

あの頃は、拓都の事を「たっくん」と呼んでいたから、名前は知らないかもしれない。それに……

「それじゃあ、明日はお弁当を持たせてくださいね。よろしくお願いします」

責任者の人の言葉に我に返ると、今日の自分はどうしようもないと、落ち込んだ。

学校を後にして、拓都と家に向かって歩きながら、お喋りな拓都の取りとめのない話に相槌を打つ。先程学童へ行く前に、桜の木の下で子供たちと先生の、クラス単位の集合写真を撮った。ほとんどの保護者は、その様子をカメラマンの後ろから同じように写真を撮っていたが、私は担任教師の視界に入らないよう、人々のずっと後方から、こっそりと覗いていた。

いずれは対峙たいじしなくてはならない時が来るのは、分かっている。それでも、恐らくまだ私の存在に気付いていない間だけでも、心の準備をしたい。今日はこんな事ばかり考えて、入学式をちつとも楽しめなかった。

もう3年も経ったのだ。大学生だった彼だつて、もう社会人になつて2年が過ぎている。もう、私の事なんて、忘れてるわよ……新しい恋をして、私の事なんか遠い過去になつてるわよ。

そう思いながらも、その事が少し悲しくなる。私にとってはまだ3年。彼に関しては、早く何十年も過ぎて欲しい。もう思い出すのも困難になる程、過去の中に埋没させてしまいたい。それでも私は、自分が裏切った事だけは、忘れてはいけいましないと戒める。

もう二度と恋はしない。死ぬまで、彼への想いだけを心の奥底に閉じ込めて、もう誰も愛さないと、彼の幸せだけを願って生きるの

だと決意して、彼を断崖から突き落とす様にその心を裏切り傷つけたのだから……

「守谷先生って、カッコイイよね」

拓都の無邪気な言葉に我に返る。又私は過去へトリップしていたみたいだ……情けない。何重にも封印して、心の奥底に閉じ込めて来たと思っていた過去が、担任教師を見た途端に、一気に封印がはじけ飛んでしまった。溢れる過去の記憶に、今日は囚われ続けている。

これではいけない。もういちど、しっかりと封印して、まったく新しい私として、彼と対峙しなくては……

「そうね」

私は、嬉しそうに私を見上げる拓都の頭を、クシヤツと撫でまわした。

\*\*\*\*\*

学校から、子供の足で約20分の自宅に帰ると、早速に貰ってきた教科書やプリントをテーブルの上に広げた。1年生の教科書を手にとって見てみると、自分の時はこんなにカラフルだったのだろうかと思う程、色彩豊かだ。ひとつひとつ丁寧に名前を書いて行く。拓都は、国語の教科書を広げて、やっと平仮名を覚えたからか、声に出して読んでいる。一字づつ確かめる様に読んでいる様は、可愛らしくて、思わず笑ってしまった。

「ママ、さくらははなって書いてある」

一字づつ区切って読んでいると、言葉の意味がなかなか分からなかったようで、何度も読んで、やっとその言葉が、桜の花の事だと分かった様だ。

「ホントだね。今日、小学校にも咲いていたね、さくら」  
そう言いながら、私の頭の中には、又過去の映像が蘇<sup>よみがえ</sup>った。  
彼からの最後になった写メール……彼の実家の傍の桜並木の桜の  
蕾が膨らんで来たと、その蕾のアップの写真だった。桜が咲いたら、  
一緒に見に行こうと、書いてあった。

だめだ、だめだ。もう、今日は何回、過去へトリップしているん  
だ……こんな事では、身動きが取れない。

私は頭の中の映像をシャットダウンし、大量に貰って来たプリン  
トに目を通す事にした。

学校通信、保健室からのお知らせ、学年通信、学級通信、家庭調  
査票への記入依頼の文書、明日の予定と用意する物の一覧……

学校通信は、校長先生からのメッセージと、新しく来た教諭や職  
員の紹介、1年間の大まかな行事の予定等……。

保健室からのお知らせは、健康診断の説明等と健康連絡票への記  
入のお願い。

学年通信は、1年生の目標と1年間のテーマ、それぞれのクラス  
の担任の紹介と担任以外の1年生担当の先生の紹介。

学級通信は……これは、守谷先生が書いたものだ。彼からの子供  
たちや教育への思いが綴<sup>つづ</sup>られている。そして、顔写真入りの自己紹  
介もあった。

教師3年目の24歳。趣味は、ハイキング・キャンプ・スキー・  
写真・折り紙。

あの頃と変わらない趣味に、心のどこかで安心している自分に気  
付きたくなかった。

拓都の音読は続いている。余程読める事が嬉しいのか、嬉々とし  
て読んでいる様に、ささくれた心が癒される。学級通信の担任の顔  
写真から視線をはがし、次のプリントへと移る。

家庭調査票への記入依頼の文章を読んで行く。書き方の説明を読みながら、早速に記入する事にした。

「ママ、そのプリント、今週中に出してくださいって」

今まさに記入しようとペンを持った時、拓都はタイミング良くそう言った。漢字ばかりの家庭調査票を見て、提出するプリントだと分かったのだろうか？ 先生の話在必死で聞いていたからか……

「はい。今から書くから、明日持って行ってね」

そう言つと、拓都はニツコリ笑つて「うん」と頷いた。

拓都の笑顔に心癒されながら、プリントに目を戻す。保護者の名前と勤め先、緊急連絡先、他の家族の名前と学校、もしくは勤め先、学校から家までの略地図、既往歴、予防接種の接種の有無、伝染病の罹患の有無、アレルギー等の有無、持病の有無、そして、学校への質問やお願い等……。

保護者欄に、自分の名前を書く。児童との続柄の欄に、どう書こうかと躊躇する。本来なら、叔母なのかもしれないが、養子縁組した今、やはり母と書いた。勤め先を書き、緊急連絡先に職場の電話番号と、自分の携帯番号を記入する。

あの時、彼に別れを告げたその足で、私は携帯を解約しに行った。そして新規で新しい携帯電話を契約したのだった。彼には知らせなかつた携帯番号を、今担任である彼に知らせるために記入した。

彼からの一切の連絡を絶つために、解約までしたのに、結局こうして知らせる羽目になるなんて……でも、今更だよな。

その後の項目にも、順次記入し、提出すべきプリントを全て書き終えた。

このプリントを見て、きつと彼は、私だと気付くだろう……今の私の事、どう思うのだろうか？



年齢から言つて、拓都は私の子供でない事は分かるはずだし……  
どんなふうに取りられたとしても、今の私は拓都の母親なのだから

……

「さあ、拓都、プリント書けたから、明日の準備をしよう。教科書を持って、拓都の部屋へ行くよ」

私は立ち上がると、まだ音読していた拓都に声をかけた。拓都は「はい」と返事をする、椅子から勢い良く下り、教科書を持って2階の自分の部屋へ向かって歩き出した。素早い拓都の行動に、私はプリントを持って、慌てて追いかけた。

\*\*\*\*\*

入学式の夜、私は拓都の保育園時代に知り合つた、成川由香里に電話をした。私が子育てと仕事に一人悪戦苦闘していた時、シングルマザーの会に入らないかと誘いかけてくれた人だった。彼女の二男と拓都が同級生で、とても仲が良かったからか、10歳と言う年齢差があるにもかかわらず、彼女とはすぐに打ち解け、意気投合した。私の誰にも秘めていた過去を、話したのは彼女にだけだった。それ程彼女を信頼していたし、長く付き合いたい友達だった。

だから、今日の突然の再会も（一方的な再会だが）、彼女には包み隠さず話した。最後まで聞いた後、彼女が言った言葉は、こんな言葉だった。

「美緒は、バカね」

いきなりバカ呼ばわりされて、本当なら腹が立つはずだけど、彼女の辛らつな物言いは、いつもの事なので、それほど気にならなかつた。

「何よ、私のどこが馬鹿なのよ？」

私は由香里さんに甘えるように、拗ねて言った。

「だから、もう恋愛はしないと、もう誰も愛さないとか言ってるから、元カレを過去の事にできないんでしょう？ 新しい恋をすれば、みんな綺麗な思い出にしまえるのに……本当にバカよね」

「私は彼を裏切ったんだから、もう恋はしちゃいけないのよ」

「ほら、それが自己満足なのよ。彼への罪悪感を、自分を罰する事で許された気持ちになってるでしょう？ もう3年も経っているんだから、彼だつていつまでも振られた事なんか覚えていないわよ。美緒がその事にいつまでもこだわっている方が、うっとおしいと思うけど」

由香里さんは、いつもこうだ。一番痛い所を突いて来る。だけど、それが当たっているから、何も言えない。

新しい恋、か……

彼以上に好きになれる人なんて、現れるのだろうか？

今日、再び彼を見て、何重もの封印が解かれた様に、私の心はまた彼に惹き付けられた。

彼のあの長い腕に抱きしめられた、あの感覚が蘇る。

はあく、何思い出してるのよ？ 只々大きく溜息を吐く事しかできない。

私の大きな溜息を聞いて、由香里さんはクスクスと笑いだした。

「元カレって、よっぽどいい男なんだろうねえ。美緒がそんな溜息を吐いちゃう程……機会があつたら見てみたいな」

「そうね、チャンスがあればね……ねえ、それより、今日、家庭調査票って言うのを書いたんだけど、保護者欄に私の名前を書いたか

ら、きつと私だって気付くよね？ どう思つと思つ？」

「そうねえ、まず、美緒は結婚したんだと思うわね。それで、拓都君は相手の連れ子とか、思っくんじゃない？」

「やっぱりそうだよね……保護者欄は、当たり前だけど私の名前だけで、続柄は母って書いたの。でも、拓都の母じゃないって知ってるから……父親の名前はどして書いてないんだろって思っかな？ 拓都とも小さい頃に会った事があるけど、覚えてるかな？」

私は心の中の不安を由香里さんにぶつけた。私はやっぱり由香里さんに甘えてるなあって思っよ。

「元カレと拓都君が会ったのは、1、2歳の頃でしょう？ それに、お姉さん家族は海外赴任している事になつてるんでしょ？ だったら、拓都君がお姉さんの子供だとは気付かないんじゃないの？ 亡くなつた事を知らなければ……それは、言っつもりはないんでしょ？」

「うん。姉達の事は言っつもりはない。あくまでも拓都和私は親子と言っ事で、押し進めるつもり……」

「そう、それなら、それを貫き通しなさい。不安になつたら、今まで守り通して来たものが崩れてしまっわよ」

再び由香里さんは、命令口調であえて厳しい言葉を言ってくれる。こっやって厳しい言葉をもらつと、私はシャキツとするのだ。

「わかつた。何があつても、頑張る。ちよつと元気出て来た。やっぱり由香里さんは偉大だよ」

「褒めても、何も出ないわよ。それより、新しい恋をしなさいよ」

「はい、前向きに検討してみます」

「そうそう、まだ26歳なんだから、人生諦めちゃだめよ」

そう言っつて、由香里さんは電話を切った。彼女はいつも前向きだ。今まで散々男で苦労して来たはずなのに、「私の運命の人が、必ず現れる」って、恋する事を諦めない。

私も彼女を見習わなくちゃ……

彼は希望通り小学校の先生になって、元気に働いている。その姿を確認できただけでも、良かったと思う。そして、私も自分の幸せについて、考えてみる時期なのかもしれない……

## #09：授業参観

入学式から1週間が経った。

やっと給食が始まったので、お弁当は自分の分だけで済む。自分のお弁当だけなら、昨夜の残り物のおかずでも構わないから楽だ。そんな事より、毎日辟易へきえきとしているのは、拓都のおしゃべりだ。仕事が終わって学童へ迎えに行き、帰りの車の中から、それは始まる。

「ねえママ、今日守谷先生がね、今地球がどんどん暑くなって、寒い所の氷がどんどん溶けてるんだって。それでね、氷が溶けるから海の水が増えて、いつか学校も沈んじゃうかもしれないんだって……だから、守谷先生がね、無駄な電気は使わないようにしようって……ねえママ、無駄な電気って言うのはね、誰もいない部屋の灯りを付けていたり、誰も見ていないテレビを付けていたりする事だっ。それにね、守谷先生が、ゲームも長くしていたらダメだって……僕、学校が沈んじゃったら嫌だから、ゲームするの止めようかな……」

私は拓都のとりとめも無く延々と続く話を、小さく溜息を吐きながら、聞いていた。地球温暖化の意味、わかっているの？ 学校が沈む話と無駄な電気の繋がり、分かっているの？

私は、心の中で突っ込みたい思いをグツと噛みしめる。そして、また守谷先生の話かと、心の中で舌打ちをする。

拓都は、学校の帰りから、寝るまで、ずーっと守谷先生の話が続ける。何が悲しくて、元カレの話を聞かされなければいけないのだ。これは一種の罰なのだろうか？ と、嬉しそうに話し続ける拓都をチラリと見た。

自宅へ帰りつくと、私が食事の用意をする間、拓都は宿題をする。ここの所毎日、平仮名の練習プリントと音読だ。音読は、必ずお家

の人に聞いてもらう事となっていて、聞いた感想を書く事になっている。親にまで宿題を出すのか……と、担任教師を恨めしくなった。毎日、上手に読めましたと音読カードに書きいれていく。たったそれだけの事なのに、なんとなく苦痛なのは、このカードを彼が見るのだと思うからだ。

小学校の事は、全て彼に繋がっていると思うと、なぜかこちらの私生活をさらしている様な気になって、気持ちが落ち着かない。いったい彼はどんな気持ちでいるのだろう……

今更だと思いながらも、酷く彼を意識してしまう、自分が嫌だった。

食事の後、拓都が持ち帰ったプリントを確認する。ちょうど一週間後の午後に、授業参観と学級懇談、そしてPTA総会が開催される案内のプリントだった。半日休まなきゃいけない……と、又溜息を吐いた。そして、それが、担任との初めての対峙である事を、しばらくしてから気付いた。

もう一つのプリントに、学級役員を学級懇談の時に決める旨が書かれていた。立候補用の欄もあり、立候補したい人は、その欄に名前を書いて切り取って提出する様だ。

学級役員って、何をするんだろう？

小学校の事に付いて、聞ける友達も無い。よその小学校も同じかなど、後で由香里さんに電話を試みよう、思い立った。

「ああ、ウチも来週あるよ。授業参観と学級懇談と総会。学級役員ねえ〜クラス行事の時にとりまとめをしたり、教育委員会なんか主催する講演会を聞きに行ったり、かな？ それからウチの小学校の場合は、学級役員になったら、もれなく小学校の委員会にはいらなきゃいけないのよ」

由香里さんは、上の子で小学校は何年か経験しているので、慣れた事のように話す。

「委員会？」

「そう、広報とか福祉とか……いくつか委員会があつて、1年間活動するの。役員と言えれば他にも本部役員とか地区役員とかもあるわね。私は去年、上の子の時、学級役員をしたのよ。結構何度か学校へ足を運んで、忙しかった気がするなあ。仕事を持っていると、そのやりくりが大変だった。ましてや美緒は、正職員だから、何度も学校の事で休むのは大変じゃない？ でも、卒業までに一度は経験しないとイケないと思うわよ」

由香里さんの話は、今一分からない所もあつたけれど、役員になると何度も学校へ足を運ばなくては行けなくて、忙しい様だ。できれば、今年は避けたい。学校へ行けば必然的にあの担任と顔を合わさなければいけないのかと思うと、私の今の危<sup>あや</sup>うい心が、ますます疲弊<sup>ひへい</sup>していくような気がした。

「ねえ、学級役員つて、どうやって決めるの？」

「そうねえ、ウチの小学校の場合だけど、まず、立候補や推薦を募るのよ。それで誰もいなければ、学級懇談の時に、ジャンケンかくじ引きね」

「ええっ？ そんないい加減な決め方なの？ 仕事があるからできませんって言うのはダメなの？」

「あのねえ、美緒。今時仕事をしていない専業主婦の方が少ないのよ。ほとんどが仕事を持ったお母さんがしてるわよ」

「そうなんだ……それじゃあ、運次第だね……」

「そう、そう。まあ、今年役員するのは、ちょっと酷かもね。当たらない事、祈っているわ」

由香里さんはそう言うのと、電話を切った。何も言わなくても、私の今の心理状態は分かかっていてくれるようだ。私は、一週間後に、彼の視界の中に入らなければいけない事を思うだけで、胸が震えそうになる現状で、役員の心配まで増えてしまい、もう一杯一杯の状態だった。

\*\*\*\*\*

心の準備なんてちつともできない内に、一週間は過ぎて行った。

その日は、午後から休みを取り、自宅で簡単に昼食を済ますと、自転車で小学校へ向かった。駐車場が少ないので、できるだけ徒歩か自転車でとあったので、久々に自転車を引っ張り出した。

小学校が近づくにつれ、鼓動が速くなって行く様な気がする。小学校に着いたら、息絶えるんじゃないかと、本気で心配になる程、息切れが激しい……単に運動不足か……。

ここ数年、運動らしい運動をしていない。拓都にせがまれて、遊具やアスレチックのある公園へ出かけたりもするが、子供の付き合いなので、知れている。慧と付き合っていた頃は、本当に良く体を動かした。ウォーキングにハイキングにサイクリング、テニスや卓球、そして、スキーにも連れて行ってくれた。私にとって、一番幸せだったあの数年間。宝物の様な時間だった。

はあ〜又、思い出してしまった。もう本当に、自分のバカさ加減にうんざりする。又、由香里さんに叱ってもらわなきゃ……こう言うのを、未練って言うんだらうな……こんな風に再会しなきゃ、一生思い出のままだったのに……

私は不幸体質の運命を呪う事しかできない。



学校に着くと、持参したスリッパに履き替える。スリッパを持参する事は、拓都の保育園時代から身に付いている。沢山の保護者でざわつく校内を、1年3組の教室目指して歩いて行く。知っている人とは出会わない。同じ年の母親は、きつといないか少ないだろうから、昔の同級生と出会う確率はほとんどないだろう。ここで私が知っている顔は、たった一人、担任だけだ。

周りで友達同士で集まってお喋りしている、楽しそうなお母さん達を見ていると、羨ましくなる。ママ友ってどうやって作るんだろう？ 保育園の頃は、母子家庭の会の由香里さんに声をかけてもらったから、友達ができたけど……やはり、同じ保育園や幼稚園から来た母親同士が集まっているのだらうなと思うと、転勤希望を出したのは、他の事を含め、間違いだったと、改めて後悔した。

1年3組の教室へたどり着くと、ちょうど授業が始まる様で、チャイムが鳴り響いた。担任もすでに前に立ち、今から算数の授業を始めますと告げた。半数以上の人が、教室に入り、子供達の後ろに立っている。しかし私は、やっぱり教室に入る事ができず、廊下から様子を窺<sup>うかが</sup>っていた。そんな人のためか、廊下と教室を分ける壁にある窓は、開け放されていた。私は、開け放された窓から、拓都の様子を見つめた。拓都は嬉しそうな顔をして、一生懸命先生の話聞いてる。この担任は、母親達だけではなく、子供たちの心を掴むのも上手なようだ……見ているだけでひきつける要素は多分にある彼だから、あの楽しい話術も、屈託のない笑顔も、意図せずともひきつけてしまう要素なのだろう……

私はできるだけ、担任の姿を視界に入れない様にしながら、拓都だけを見つめ続けた。私の背後では、母親達のお喋りの声が聞こえる。授業中なんだから、静かにすればいいのに……そんな事を思いながら、私は教室の中を見ていた。

「守谷先生の……」と今一番気になる担任の名前が聞こえた途端、私の耳は背後の母親達のおしゃべりに集中した。

『ねえ、守谷先生のファンクラブがあるって知ってる？』

……ファンクラブ？

『知ってる、知ってる。PTA会長でしょ？ 始めたのは……』

『そうそう、なんだか本部役員の人達って、先生方と結構交流があって、飲みに行ったりするんだって。それで、ただでさえカッコイイ守谷先生と、プライベートでお近づきになると、みんな惚れちゃうらしいわよ。守谷先生のカラオケなんて、もう酔いしれるくらい歌がうまくて、いい声なんだって……友達が去年と今年、本部役員なんだけど、すっごく自慢してくるのよ。悔しいよね』

……惚れちゃう？ それに、カラオケ……確かに慧は、歌がうまくて声もいい。でも、私だって、1度しか聞いた事がない。彼はカラオケが嫌いだって、サークルのコンパの二次会で一度行ったきりで、二人では行った事がなかった。あんなに上手なものもつたいないって言ったら、美緒にだけ歌ってやるよって、私の耳元でサビの部分を書いてくれた事があつたっけ……

『えー！ 私も本部役員になればよかった！ うらやまし』

『でも、今年は、守谷先生が担当になるかどうか分からないわよ。』

まあ、どっちにしても、今年の本部役員はもう決まってるしね……

『でも、そのファンクラブって、誰でも入れるの？』

『おやおや、本気で言ってるの？ ダメよ。あのPTA会長の取り巻きだけみたいだから……他の人が守谷先生に近づくのを阻止しようとしてるんじゃないかな？』

……ええっ？ 何それ？ 守谷先生に近づくのを阻止してる？

第一みんな、結婚しているわけでしょう？ 何を考えているのだから……  
それにしても、守谷人気は、大学の時と変わらない……いやそれ以上か……

『ねえ、それって、あの事件のせいかな？』

……事件？

『そうそう、あの旦那怒鳴り込み事件！ そうかも知れないね』  
……旦那怒鳴り込み事件？

『あの事件のせいで、今年から先生の携帯番号は公開しない事になったんでしよう？』

『そうらしいね。あれからすぐに、守谷先生も携帯番号を変えたらしいし……でも、PTA会長は知ってるらしいよ。なんととっても、守谷先生の大学時代の恩師の奥さんだから……教えてって言われたら、嫌ですって言えないよね』

次々に出て来る、私の知らない守谷先生の話題に、ついて行けない。

PTA会長が、恩師の奥さんですって？ その人がファンクラブを作っているって？

それに、旦那怒鳴り込み事件って、何？ そのために先生の携帯番号を教え無くなったって……

いったい彼の周りで何が起きているのだろうか……

甘い記憶も、事件などと言う物騒な言葉で、霧散むさんしてしまった。やっぱり、小学校は鬼門だ。聞きたくも無い彼の情報に、必死で耳を傾ける自分の浅ましさを思い知らされて、嫌になる。

気付けばもう授業は終わろうとしていた。「この後、学級懇談がありますので、参加できる方は残ってください」と、父兄に向けて

担任が言う。子供達は、図書室で待つか、学童の子たちは学童へ行くよう説明していた。明日の予定を書いたプリントとその他のプリント、それから宿題プリントを配り、子供達を立たせて、終わりの挨拶をする。子供達はロッカーからランドセルを出して来ると、教科書やプリントを入れ、帰る用意をし出した。それぞれの保護者が、自分の子供の所へ行き、この後図書室で待つように言っているようだった。

担任が「図書室へ行く人は廊下へ並んでください」と声をかけた。そうして、彼が廊下に出るのと入れ替わる様に、私は後ろのドアから教室の中へ入り、拓都に近づいた。「拓都」と声をかけると、「ママ」と嬉しそうに笑って拓都は振り返る。彼はいつでも機嫌がいい。小学校へ入ってからには特にそうだ。毎日が楽しそうで、安心する。担任教師の話題が無ければ、私ももつと喜べるのに……

「学童へ行って、待っていてくれる？ ママはこの後、学級懇談とPTA総会に出なくちゃいけないから……」

「うん。わかった」

拓都が可愛い笑顔で答えると、ランドセルと背負った。そして、元気に教室を出て行く後ろ姿を見送った。拓都が廊下に出た所で、「守谷先生、さようなら」と、廊下に居た担任教師に挨拶をする。「拓都は、学童だったか……気を付けて行けよ。さようなら」と答える、担任教師。「はい」と答えて踵かかとを返すと、拓都は校舎の出入口に向かって元気よく去って行った。

拓都と担任教師のやり取りを教室の中から聞いていた。若い担任は、子供達を名前の呼び捨てで呼んでいるらしい。「図書室へ行くのはこれで全部か？」と廊下で問いかけている担任の声を聞きながら、やがて来る、彼との本当の意味での再会に向けて、心の中で落ち着けと言い聞かせ続けた。



## #09：授業参観（後書き）

今回は、美緒と慧の本当の意味での再会まで行けませんでした。次回に持ち越しです。すいません。次

## #10：学級懇談

「お待たせしてすみません。学級懇談を始めます」

図書室で親を待つ子供達を送って行った後、急いで戻って来た担任教師が、教室に残っていた保護者にそう声をかけた時、私は教室の後ろの掲示板に貼られた、係の当番表を見ていた。見ていたと言っても、視線を向けていただけで、その内容はちつとも頭の中に入っていないかった。拓都が何の係をしているのかさえ、確認する余裕はなかった。

いよいよだ。ついにこの時が、来てしまった。

私はゆっくりと振り返ると、皆に声をかけた担任と目が合わない様に、視線を落とした。

私は今、彼の視界の中にいるのだろうか？

担任の指図で、保護者達が机を動かして出したのに合わせて、私も手近の机を持って動かす。会議をする時の様に、真ん中に空間を開けて、向い合せに四角く机で囲む。クラスの半分以上の保護者が残っていたが、後の人達は上の子供の所へ行っているのだろうか……黒板を背にした席に担任教師が座り、保護者達は彼に向ってコの字型に並べた席に座った。1年生の机と椅子は、こんなに小さかっただろうかと思う程、可愛らしい。

私は、できるだけ彼の視線から逃れる様な位置を探したが、少数のため、それは無駄な事だった。

視界の端で彼を捕えながら、けしてそちらへは視線を向けず、私は彼とは垂直の位置の数人の間に紛れこんだ。

緊張はピークに達している様な気がする。座った膝の上で、ハンカチを握りしめた手は、汗ばんでいる。私はどんな表情をしている

のだろうか……そして、彼は、何を思い、どんな表情をしているのだろうか……

まともにも彼の方を見る事ができない私は、彼の様子を窺う事さえできない。確かにそこに存在している事だけを感じている。

「1年間、1年3組の担任をさせていただく、守谷慧です。どうぞよろしく願います」

皆が席に着いたのを確認すると、担任はまず挨拶をした。そして、学級での子供達の様子を話し出した。それから、今後の学級運営について、担任の方針や考えを丁寧に話し始めた。

私は今更ながら、彼は本当に小学校の教師なんだと、立派に教師を務めているんだと、感慨深げに思った。あの、小学校の教師になりたいんだと言った夏の公園から、もう5年以上の歳月が経ち、彼は夢をかなえて、元気に教師を務めている。それは、なんて喜ばしい事なんだろう。

私は馬鹿みたいに、自分の罪悪感から、彼との再会を怖がっていたけれど、彼の夢をかなえた姿を見られるなんて、それこそ夢みたいな事じゃないか……

どうして、まともにも彼を見る事も出来ず、怯えた様に緊張しているの？

今こそ、彼への祝福を込めて笑顔を向けるべきじゃないの？

私は彼の話を聞きながら、反省をした。そして、他の保護者達と同じように、担任の方に顔を向けた。今日の彼は、上着は着ていなかったが、ボタンダウンのシャツにネクタイをしている。下半身はよく見えないけれど、黒っぽいズボンをはいている様だ。首から顔写真入りの身分証明書をぶら下げているのは、父兄と見間違われなためか……

「それじゃあ、皆さんに一人づつ自己紹介をして頂きましょうか？」



えっ？ 自己紹介？ そんなのありなの？

一人反省をしながら、彼の様子をうかがっていた私は、担任の言葉に驚いた。まさか、こんな所で自己紹介をしなければいけないなんて……

端の人から順番にと言われて、窓側にいた担任が一番近い席の人が立った。

「西森翔也の母親です。よろしくお願ひします」と頭を下げると、席に着いた。……なんだ、それだけでいいのか……と、ホツとした次々に子供の名前を言って頭を下げて行く。どの子の名前も初めて聞く名前だった。いよいよ私の番だ。

「篠崎拓都の母親です。どうぞよろしくお願ひします」

保護者の方に視線を向けて、頭を下げる。そして、担任の方を向いて、小さく会釈した。彼も私を見ていた。一瞬目が合つと、彼は小さく頷いた。

……ああ、目が合つたら、笑顔を見せようと思っていたのに……反省したのに、笑顔を作る余裕までは無かった。それでも、一番心配していた3年ぶりの再会の第一歩は、乗り越えられたようだ。私は小さく息を吐くと、肩の力を抜いた。

最後まで自己紹介が終わると、「何かご質問やご要望がありましたら、おっしゃってください」と、年若い担任は、にこやかな笑顔で皆に向かって声をかけた。数人の保護者が持ち物や家庭学習などについて質問したのに対して、彼はよどみなく回答して行く。まだ3年目の新米教師だと言うのに、貫禄さえも感じさせる安心感があった。

ひとしきり質疑応答が終わると、本日一番の関心事の学級役員の話に移った。担任が説明する学級役員の仕事は、由香里さんに聞いた話とだいたい同じだった。

私はさつき廊下で聞いた守谷先生の噂話を思い出し、ファンクラブまである程の人気の担任教師のクラスの学級役員だから、立候補する人がいるだろうと、密かに期待した。しかし、母親達はシビアなもので、事前の立候補は皆無だと言う。学級役員程度では、守谷先生にお近づきになれないと思っているのか……やはり現実的にめんどくさい役員なんて、誰もしたくないのか……期待も虚しく、この調子だとジャンケンかくじ引きになってしまいそうだ。

「どなたか、学級役員を引き受けてもいいと言う方はいらっしゃいませんか？」

担任は、人を引き付ける笑顔で問いかけるが、現実的な母親達ばかりなのだろう、皆その笑顔に引きずられまいと、俯いていた。

「しかたがありません。それではくじ引きでもいいですか？」

否と唱えれば、学級役員を引き受けざるを得ないと思うのか、皆素直にくじ引きを了承した。彼がくじを作るのを見て、私は思い出した。

……そう言えば、サークルで何かの役目を決める時、くじを作るのは、いつも慧がしていたっけ……彼が作るくじは何本も棒線を引いて、当りを決めておいて、みなにその棒線を選ばせる単純なくじだ。その彼がある時「棒線の両端は、絶対に当りにしないから、美緒が嫌な時は、両端を選ぶといいよ」とそつと教えてくれた。

……くじを作るのなら、あのときの癖が出るかもしれない。

案の定、回って来たくじは、単純な棒線のくじだった。私は片方の端に名前を書いた。私はこの時、もしかしたら、自分はこの担任の過去を知っているんだと言う優越感が、心の中にあつたかも知れない。どこか高揚した気分で、名前を書いていたのだから……。

全員が名前を書き入れた後、彼は確かめるようにくじの書かれた

紙を見つめて、フツと笑った。そして、折り曲げて隠してあった当りの箇所を確かめると、本年度の学級役員の名前を告げた。

「それでは、西森さんと篠崎さん、よろしくお願いします」

私は呆然と彼の方を見ていた。彼は私を見て、悪戯っぽくクスリと笑ったような気がした。後からくじの書かれた紙を見せてもらったら、当りは両端の棒線だった。これは、意図してしたことなのか？ 私への意趣返しなのか……。

子供達の机を元通り直すと、役員に決まった二人は残るように言われ、他の人たちは教室から出て行った。まだ呆然としている私に、もう一人の役員に決まった西森さんが声をかけてきた。

「篠崎さん、だったわよね？ 当たっちゃったわね。仕方ないから覚悟を決めて、1年間頑張りましょう。よろしくね」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

私は、慌てて頭を下げた。すると西森さんは、プツと噴出すと「そんなにかしこまらなくていいわよ」と笑った。私は「はあ」と答える事しかできない。

「そんなに緊張するような事じゃないから。私は、一昨年おとし、上の子の学級役員をしているのよ。それなのに、下の子でもこんなに早く当たるなんて……私ってくじ運悪いのよねえ」

西森さんはそう言いながら、ケラケラと笑っている。なんだか親しみやすそうな人だ。私は少しホツとした。

「こちらへ来て下さい」

担任が、机を3つ向かい合わせにくつつけて、私達を呼んだ。西森さんは陽気に「はい」と返事をする、そちらへ向かって歩い

ていく。私もその後を歩きながら、何となく居た堪れない思いが、心の中を支配していった。

「守谷先生、今年もよろしくお願いします」

西森さんは、席に着きながら、担任にぺこりと頭を下げた。担任も「ああ、西森さん、こちらこそよろしくお願いします」と笑っている。私かなぜ？ と思っていると、西森さんが、「守谷先生は、去年上の子の担任だったのよ」と教えてくれた。

そう言えば、入学式の時、教室へ向かう途中、守谷先生の事を自慢げに話していたのは、この人ではなかっただろうか…… と思いつた。

私は、担任と西森さんが座る向かい合った席に垂直にくっ付けられた机の席に座った。そこしか空いていなかったからだ。

……近い、近過ぎる…… 手を伸ばせば届く所に、彼の綺麗で長い指があった。彼は書類を見ているようだった。私は顔を上げられず、その書類を持つ指を見つめていた。

……息が止まりそうだ…… いや、そんなレベルじゃない。この位置で目が合ったら、心臓が止まってしまうかもしれない。

「篠崎さん、すっごく緊張していない？」

西森さんは、私を心配して言うてくれたのだろう…… でも、今はその事に触れないで欲しかった。

「大丈夫です」

西森さんの方を向いて、何とか笑顔を作ると、そう答えた。

「あ、わかった。篠崎さん、守谷先生があんまりカッコ良くてイケメンだから、緊張してるんでしょう？」

西森さんは、罪の無い脳天気な笑顔で、そんな事を言う。私の緊

張を解こうと思って、言ってくれているのかもしれないけれど、この状態でその発言は、地雷だ。

「そ、そんな事……」

ないと言おうと思ったら、西森さんはフッフフと悪戯っぽく笑うと、ワザと地雷を爆発させた。

「わかるわー私も最初そうだったもの。他のお母さん達も同じよ……でもね、浮気はダメよ!」

……私の心臓は、止まったかも知れない……。

## #11：見えない壁（前書き）

いつもありがとうございます。

昨日は更新できなくて、すいませんでした。

今回は、少し長いです。

覚悟をして読んでください。

## #11：見えない壁

「やだ、篠崎さん、そこは笑う所よ」

固まったまま顔を引きつらせる私に、ガハハと笑いながら突っ込む西森さん。

……あなたはいったい何を考えてるんですか……

突然ガタンと音がして、驚いてそちらを見ると、担任が立ちあがっていた。

「書類が足りないの、もらってきます。少し待っていてください」担任はそう言うと、長い脚でさっそうと教室を出て行った。私は彼の後姿を見送ると、ホッと息を吐いた。私のそんな様子を見ていた西森さんが、楽しそうな声で、また私に突っ込んでくる。

「やっぱり篠崎さんも、守谷先生のようなイケメンが、タイプなの？」

「タイプって……」

西森さんの突っ込みは、戸惑うばかりで、なんて答えたらいいのか、分からない。それでも西森さんは、私の返事などお構いなしに、話を続ける。

「守谷先生ってさ、この辺では見かけない程、男前でしょう？ 俳優とかモデルと言っても通用するぐらいだし、背も高いし、性格も真面目で爽やかだし……でもね、恋愛から遠ざかっている主婦には危険なのよ。去年、本気になりかけたお母さんがいてね……修羅場だったんだから……守谷先生は、まったくの被害者みたいなものだけだね……」

本気になりかけた？ 修羅場？ 被害者？ ……それって……さつき聞いた、あの事件の事だろうか？

「もしかして、それって、旦那怒鳴り込み事件って言うのですか？ 私は恐る恐る訊いてみた。すると、西森さんは、驚いた顔をして、「知ってるの？」と訊き返した。」

「授業参観の時、廊下で噂話をしてる人たちがいて、そんな事を言ってたから……」

「そっか……結構噂広まつっちゃったから、2年生以上の子供を持つお母さんなら知ってるかも知れないね。でも、今年初めての人は、そんな話、驚いたでしょう？」

「ええ、まあ、事件なんて言うから、何があったのかなって、ちょっと気になりました」

「あれはね、去年、ウチの上の子のクラスのお母さんが、不登校気味の子供の相談を担当の守谷先生にしたのが始まりなのよ。ご主人が単身赴任で、余計不安だったんだと思うの。それに、守谷先生も初めての担任で、一生懸命だったから、保護者との距離感が上手く掴めなかつたんだと思う。そのお母さん、守谷先生の携帯へ何度も電話して相談していたみたいで、守谷先生も一生懸命対応してくれるから、きつと勘違いしちゃったのよね。自分の為に一生懸命になってくれるって……その内、相談は口実になって、声を聞きたくて電話をするようになってしまったみたいで……単身赴任のご主人が、奥さんの様子がおかしいって、携帯を調べちゃったらしいの。そうしたら、担任に電話をかけている数が普通じゃないもんだから、不倫だと思っちゃったのよね……それで、ご主人が学校へ怒鳴り込みに来た訳。その時ちょうど、本部役員の人達が集まっていたらし



くて、一気に噂が広まってしまったのよ。その後、ご主人は奥さんと子供を赴任先に連れて、転校して行ったんだけどね……守谷先生は気の毒って言うか、一生懸命だっただけに、可哀そうと言うか……ねっ」

そんな事があつたんだ……それで、携帯番号を教えない事になったのか……彼もその外見ゆえに、余計な苦勞をしているんだな……相変わらず。

「そうだったんですか……大変だったんですね」

「そうだね、守谷先生は大変だったと思うけど、あの後も子供たちや他の保護者には、変わらない態度で接してくれて、本当にいい先生だと思つたのよ。だから、先生に迷惑かけちゃうから、本気で惚れちゃだめよ。……でもねえ、私もあと10年若くて独身だったら、絶対に惚れてたな……」

そう言つて、西森さんはまた、ガハハと笑つた。

いったいこの人の頭の中はどうなっているのだ……

私は、脳天気な西森さんの笑い声を聞きながら、つられる様にクスリと笑つた。そんな私の笑顔を見た西森さんは、「そうそう、笑わなくちゃ。篠崎さんは、緊張しすぎだよ」と言つて、またニッコリと笑つた。

西森さんは、やっぱり、私の緊張を解くために、楽しく話をしてくれていたんだ……

いい人だな〜と思ひながら、私は緊張の解けた心からの笑顔で、彼女に向けていた。

「篠崎さんって……」

私の顔をじつと見た西森さんが、何かを思い出したように言いかけた時、教室に入って来る足音が聞こえた。二人揃つてそちらに目

を向けると、先程から話題になっていた担任、守谷先生がプリントを持って近づいて来るところだった。

「お待たせしてすみませんでした」

担任は、席に着くと、持って来たプリントを私達二人のそれぞれの前に置いた。私はプリントに目を落としたが、西森さんはプリントに目もくれず、目の前の担任に話しかけた。

「ねえ、ねえ、守谷先生。篠崎さんって、愛先生に似てると思わない？」

大発見をしたように、西森さんは嬉しそうにタメ口で話す。私は自分の事を言われたので、驚いて顔を上げた。その時、担任は一瞬顔を歪めたが、すぐに真面目な顔つきに戻り、私の方をチラリと見た。

「そうかな？　あまり似てるとは思わないけど……」

「髪型が違うから、少し雰囲気が違うけど、さっき篠崎さんが笑った時、そっくりだと思ったのよ。ほら、篠崎さん、笑って」

……そ、そんな事、言われても……。

「あの、愛先生って？」

私に似ていると言う先生とは、どんな先生なのだろう？

「去年3年2組の担任だった大原愛先生おおはらあいんだけど、他に男の先生で大原先生って言う人がいるから、みんな愛先生って呼ぶのよ」

西森さんはニコニコと説明してくれた。

私に似ている大原愛先生って、どんな先生なんだろう？

「そろそろ説明しますので、雑談はそのぐらいで……」  
放って置けばそのままいつまでも雑談していそうな西森さんを、  
たしなめるように話を絶ち、担任は不機嫌なのかと思うほど冷たい  
表情で、説明を始めた。

……どうしたのだろうか？

今日はずっと穏やかな表情をしていた彼が、さっきから急に酷く  
真面目と言っか、冷たい表情をしている。西森さんは気づいている  
のだろうか？

なんだか、これ以上近づくなと言わんばかりの、見えない壁を感  
じた。それは、私だから？ ……もしかして、私が役員なんかにな  
ってしまったから？ 近づき過ぎたのだろうか？

そもそも、私の事は認識しているよね？ 私の事を恨んでいるか  
ら、そんな表情になってしまっのか……3年経って、許されたなん  
て思っていないけど、謝ると言うのも何か違うし……でも今は、担  
任と保護者と言う関係なのだから、過去は持ち出さないで欲しい……  
……いいえ、彼は担任と保護者と言う距離を、私に分からせようと  
しているのかも知れない。過去を持ちだすのではなく、なかつた事に  
したいのかも知れない。

担任は硬い表情で、私達の目の前に置いたプリントの説明を始め  
た。それは、学級役員が参加しなければならぬ専門委員会の希望  
を書きいれるプリントだった。専門委員会は5つあり、第三希望ま  
で書きいれるようになっていた。担任は、それぞれの委員会の説明  
を淡々とする、まだよく理解できない内に「今週中に書いて子供  
に渡してください」と、取り付く島も無く言った。

私は途方に暮れた。何も分からない状態で、何を基準に希望を書  
きいれればいいのか……

私が不安げな顔で西森さんの方を見ると、彼女は私を安心させる  
かのようにニッコリと笑った。

「私は前回広報委員をしたのだけど、広報誌を作るのは楽しかったから、また広報にしようかな？ 篠崎さんも、広報にする？」

西森さんの笑顔はとても安心ができた。担任の固い説明よりも、ずっと魅力があった。

「はい、何も分からないので、西森さんと同じにしてもいいですか？」

私は藁をもすがる思いで、西森さんに問いかけていた。

「広報つて、会議とか多いんじゃないんですか？ 篠崎さん、お仕事そんなに休んで大丈夫ですか？」

えっ？

私は初めて……いいえ、3年ぶりに、彼に声をかけられた。それまで西森さんの方に向けていた顔を、驚いて思わず、この至近距離で、彼の方へ向けてしまった。視線が絡み、リリースする時空間。

「守谷先生、酷いわ。私だって働いてるのに、私にも訊いてよ」

固まった空気を切り裂く様に、ワザと拗ねた様な声を出す西森さん。彼女は脳天気なのか、確信犯なのか……

それでも彼女の発言は、今の私には救い以上のものがあつた。

「西森さんは広報の実態を知っていて、広報を選ぶんだから、お仕事をしても、大丈夫なんでしょう？」

担任は、溜息を吐いた後、西森さんを諭すように言った。悪戯いたずらを見つけたら子供の様な顔をした彼女は悪びれもせず、エヘへと笑うと、また私の方を向いた。

「篠崎さんは、平日の昼間は、あまり休めないお仕事なの？ だったら夜は出られるの？」

西森さんは、年上の先輩お母さんとして、未熟な母親を諭し導く様に、優しく訊いてくれた。

「ええ、平日なら夜の方が確実に出られると思います。でも、子供も連れて行っていいのかな？」

「広報の仕事をしている間、おとなしくしていられるなら、いいと思うけど……見てもらう人はいないの？ 旦那は帰り遅いの？」

旦那？

一瞬何の事か分からなかった。今までそう言う存在がいた事も無かったし、保育園の時は母子家庭だと分かってもらえていたから、そんな事を訊いて来る人もいなかった。

私は、ここで否定をした方がいいのだろうか？ 旦那はいないと言ったら、彼はどう思うのだろうか？

いずれは分かる事かも知れないけれど……

それでも、彼の方を見る事ができなかった。別れて3年で、違う人と結婚して子供までいると思っっているだろう彼から、軽蔑したような目で見られたら、息が止まる様な気がして……。

「えっ？ あの……」

私が言いあぐねていると、得心がいったと言う表情をした西森さんが、また優しく微笑んだ。

「大丈夫よ。広報はね、夜しか出られない人と、昼間出られる人のグループに分けて、作業するから……みんな親だから、子供を連れて行っても理解してもらえと思うわ」

西森さんは私に向かって優しくそう言うと、今度は担任の方を向いて苦笑しながら、話を締めた。

「守谷先生、そう言う事ですから、広報でも大丈夫なんですよ」

「そうですか。そう言う事なら、何も言う事はありません。それは、学級役員の仕事について説明します」

担任は、また硬い真面目な表情と声になって、説明しだした。

学級役員は、各学期ごとの父兄参加の行事の手伝いをして欲しいとの事。

1学期は、給食試食会。2学期は、親子ふれあい学習会。3学期は、親子レクリエーション。

ほとんどの学期が、企画と打ち合わせと準備に2日、そして行事の当日の3日間、学校へ来てもらわないといけないと説明は続く。

「学級役員の会議は、夕方の4時からと言う事になっています。お二人は、時間的に大丈夫ですか？」

さつき委員会の話の時に、散々、昼間は無理だから夜にと言う話をしてきた所なのに、また同じような事を、訊いて来るこの担任は、何を考えているのだ。彼がうかがう様にこちらを見る表情は、何の感情も表れていない、硬い真面目な表情だった。

「守谷先生、なによお〜さつきも時間の話ししてたじゃないの。私はもちろん大丈夫だけど、篠崎さんは、4時だとまだお仕事終わらない時間でしょ？」

「あ……そんなに頻繁じゃ無ければ、大丈夫です。早退します」

「そうですか……それじゃあ、全ての日程が決まっている訳じゃないですけど、第一回目の会議は、来週の木曜日の午後4時に会議室で、初顔合わせと、今後のスケジュールについて話し合います。学級役員の会議は、学年単位でしますので、5クラスの役員10名と担任5名の予定です。都合が悪くなったら、学校へ連絡してください」

一通り説明し終わると担任は、広げていたファイルをパタンと閉じた。私は、さっき聞いた来週の予定をスケジュール帳へ記入していた。西森さんは、携帯電話を鞆から取り出すと、なにやら操作し始めた。こんなところでメール？　といぶかしんだ目でちらりと見ると、西森さんはニコツと笑った。

「私、スケジュールは携帯で管理してるの」  
ちよつと自慢気な顔をして、西森さんは携帯の画面を見せた。

「へえ、すごいですね。私、携帯を使いこなせなくて……」

「あら、簡単よ。ねえ、守谷先生」

西森さんはすぐに雑談に、担任を巻き込もうとする。なんだか西森さんって……おばちゃんパワーって言うか、脳天気って言うか……どちらもあまり嬉しくない表現なので、本人には言えないが、今の私には、そのパワーがありがたかった。

「簡単かどうかはその人に寄ると思いますが、自分のやりやすい方法で管理すればいいと思いますよ。携帯と言えば……役員の方とはいろいろと連絡を取る事が多いと思うんですが、今年から個人情報保護の観点から、教職員の携帯番号は公開しない事になりました……でも、役員の方の時間的都合もあると思うので、携帯メールで連絡を取り合いたいと思います。それから、こちらの携帯から電話をかける時は、非通知で電話をしますので、非通知拒否の設定をしていたら、解除しておいてください」

担任は、そう言うのと、ポケットから携帯電話を取り出した。そして、携帯の画面を見ながら、紙にアドレスを書き写し、私達の方へ向けて示した。私は慌てて携帯電話を鞆から取り出すと、机上の紙を見ながら、間違わない様にゆっくりと入力した。

「守谷先生、今手で登録しなくても、赤外線で送って下さいよ」  
西森さんは、何やら操作をすると、担任の方へ携帯を向けている。

「西森さん、赤外線だと、携帯番号まで送ってしまうので……すいませんが、手で登録してください。それから、アドレスを登録できたら、件名に名前を入れて、空メールからを送ってください」

「あ、そうか……でも、守谷先生はずるいな。自分は受信したメールで登録するんだから……あ、そうそう、篠崎さんの携帯アドレスと番号も教えて？」

西森さんはそう言いながら、手早く担任のアドレスと登録すると、即座に空メールを送っている。

私は、そんな西森さんのくるくる変わる表情と動作を、ボケっとして見ていた。

「え？ あ、私の携帯アドレスと番号ですか？ ちょっと待ってください」

私はプロフィール画面を出すと、西森さんに見えるように向けた。

「ちょっと、篠崎さん。赤外線で送ってよ」

「あ、ごめんなさい。私、赤外線のやり方、分からなくて……」  
私は恥ずかしくなって目を伏せた。西森さんは「ええっ？」と驚いた後、「やった事無いの？」と問いかける。私が頷くと、テキパキと指図し、携帯を向かい合わせ送信を完了させた。そして、私の方へも、彼女のデータを送ってくれたので、すぐに登録した。

「あの、もういいですか？ 篠崎さん、私の携帯へ空メールを送ってください」

あっ！ まだ送っていなかった。



彼は、私と西森さんのやり取りが終わるのを、待っていてくれたのだ。

私は「すいません」と謝って、すぐにメールの新規作成画面を開くと、先程登録した担任のアドレスを捜す。登録する時、名前を「1年3組担任」にしようかフルネームにしようか迷った末「守谷先生」と無難な名前で登録した。件名に自分の名前を入力しながら、このメールは3年ぶりの彼へのメールである事に気付いた。3年ぶりのメールが中身の無い空メールなんて……今の私達を象徴している様だ。

あの頃、幾度となくやり取りした写メールは、3年前に携帯を新しくした時、一旦はデータを移したけれど、その日、時間をかけて、一つ一つ開きながら、一つ一つ削除していった。それは、思い出にさよならを言う様に、彼から送られた写真を心に焼き付ける様に……たった一つを残して、全てを削除したのだった。

私は空メールを送信した。ほどなく、担任の携帯がメールの受信を告げた。彼はその長い指で、テキパキと登録の操作をすると、パチンと携帯を閉じた。

「言い忘れましたが、携帯アドレスを教えるのは学級役員だけで、他言しない様にしてください。そのアドレスは、1年後に変えますので、今年度限りだと言う事も、覚えておいてください」

そう言うと、担任は立ち上がった。その姿を見上げた西森さんは、笑顔で「了解しました」と言い返している。そして……

「ねえ、守谷先生。今日はいつもと違うのは、私たちみたいな美人を前にして、緊張したからですか？」

キヤー！ 西森さん、何を言うの……！

ここにきてまた地雷ですか？

私は驚いて、西森さんと担任の顔を交互に見た。すると担任は、フツと笑つと「そうかもしれないですね」と答えた。

「もうすぐPTA総会が始まります。体育館へ入ってください。では、1年間、よろしく願います」

それだけ言つと、担任は長い脚で教室のドアに向かって歩き出した。私は呆けた様にその後ろ姿を見送っていた。

その時、私の心の中では、先程西森さんが言った言葉が繰り返されていった。

……先生に迷惑かけちゃうから、本気で惚れちゃだめよ……。

それはもう、今更なのだけれど……。

## #12：小さな決意

「なんだか今日の守谷先生、変だったね？」

「西森さんは、担任が出て行った教室のドアの方に視線を向けたまま、ポツリとそう言った。」

「そう、なんですか？ 私は、入学式と今日しか知らないから、いつもああなのかと思いました」

「嘘ばかり……でも、ある意味、先生である彼は、その2回の彼しか知らないと言えるだろう。でも、私は知ってる。あんな堅苦し、冷たい感じの彼は、本当の彼ではない事を……」

「いつもは、もつとにこやかで、爽やかで、楽しい話もできる先生なんだけどな……特に3人になってから、ちつとも笑わなかったし、私が笑わそうとしているいろいろ突っ込んでも、真面目に返すし……何か嫌な事でもあったのかな？」

「西森さんのおふざけな発言は、担任を笑わそうとしての事だったのか……ことごとく外れてたけど……」。

それに、嫌な事って……やっぱり、私の事かな……？

「ほらほら、篠崎さんまで、守谷先生の不機嫌病がうつっちゃうよ。ほら、笑って……」

「もう、西森さんには、負けちゃうな」

「西森さんは、自分の周りで緊張したり、不機嫌だったり、落ち込んだりしている人がいると、笑わせようと構わずにはいられないんだ……いい人なんだよね。でも、守谷先生と絡めて突っ込んでくるのは、勘忍して欲しい。」

「ふふふ、さあ、今の内に、この専門委員会の希望のプリントを書いてしまわない？」

「そうですね。何も分からないので、よろしくお願いします」

私はぺこりと頭を下げた。西森さんと一緒に役員になれて良かったと思った。

結局、西森さんが言うまま、第一希望を広報、第二を文化、第三を福祉とした。何も分からないのだから、少しでも知ってる人と同じがいいから……だからと言って同じになる保証はどこにもないのだけだ。

PTA総会の会場である体育館に入ったのは、始まる少し前だった。並べられた椅子に、皆思い思いの場所で、仲の良い母親たち同士で固まって座っていた。その元気なお喋りには、母親パワーを感じてしまう。

全校生徒の数の割には少ないなと思いつつも、いろんな人に声をかけられて、にこやかに返事を返していく西森さんの後を付いて行く。前の方で席を陣取っている数人のお母さん達が、西森さんに向かって手を上げて「西森ちゃん、こっちよ」と声をかけた。彼女もそれに答えて、手を振っている。

あ……お友達と約束してたんだ……

私も一緒に行ってもいいのかな……

「篠崎さん、ウチの上の子と同級生のお母さんたちなの。怖くないから、一緒に座る？」

私の戸惑いを察して、西森さんは優しく言ってくれた。怖くないからは、彼女特有の気配りだ。彼女は本当に気配りのできる人だ……それに、さつきから何人も声をかけられてたし、彼女の気さくで

気配りのできるところが、皆に好かれているのだろっ……

「すみません。よろしく願います」

そう言うと、西森さんをお母さん達の後ろの列に座った。すると前に座っていたお母さん達が振り返って、ニヤニヤしている。

「ちょっと、西森ちゃん。聞いたわよ。又、守谷先生のクラスだって？ ずるいよね、西森ちゃんばかり」

「そつよ、そつよ、2年続けてなんて、千裕ちゃんだけなんだから……」

責める様な事を言いながらも、二人は笑っている。千裕ちゃんと言うのは、どうも西森さんの名前らしい……

「ふふふ、うらやましいでしょう？ おまけに学級役員も当たっちゃって、さっきまでこの篠崎さんと守谷先生と3人でお話してたのよ。うふふふ」

西森さんは、自慢気に笑っている。

「何？ 千裕、また役員当たったの？」

前に座っていたお母さんが、もう一人振り返った。

「そつよ、守谷先生のクラスで、役員に当たるなんて、宝くじもの」  
「よ」

西森さんは、強がるように返している。

「守谷先生のクラスでも、なり手が無くて、くじ引きだったんだ……それって、宝くじじゃないって……」

「あら、さつきは1メートルも離れていない距離で、向かい合っておしゃべりしていたんだから……近くで見ても、守谷先生は男前だったわ。ねえ、篠崎さん？」

あー、こちらに話を振らないで欲しい。私が戸惑いながら頷くと、前に座る一人が、私に笑いかけた。

「篠崎さんって、小学校は初めて？　なんだか初々しいわね。西森ちゃんはうるさいけど、いい人だから、仲良くしてあげてね」

「いえ、私の方が、何も分からなくて、お世話になりっぱなしで……」

「きゃー、ホントに初々しい。小学生の子供がいるなんて思えない」

私はまともに母親パワーを浴びて、カルチャーショックを受けていた。

母親達のざわめきも、皆の前に用意された机の席に数人の男女が着くと、静かになった。西森さんが横から、中心にいる美しい女性が、PTA会長だと教えてくれた。

あの……彼の恩師の奥さんだと言う……ファンクラブの会長だと言う……本当に美しい女性。

議長が総会の開始を告げ、昨年度の会計報告が読み上げられ、事前に決められた議題がシナリオ通りに進められていく。承認の為に拍手、監査の報告……各委員会の長が与えられた役をこなす様に、前に立って報告を繰り返す。全て予定通りに終わると、今年度の本部役員が紹介された。

そして、学校側から今年度の方針や、変更点等についての説明があり、最後に教職員の紹介があった。

1年の担任から、前へ出て名前を言う程度の自己紹介をして行く。1年の担任5人が前に立つと、母親達がどよめいた。聞こえてくるのはやはり、守谷先生への感嘆の声。

「やっぱり、モリケイはカッコイイわね。西森ちゃん、惚れたらダメだよ。家庭崩壊だからね」

前に座る西森さんの友達が振り返って、こんな事を言う。

モリケイって……略さなくても……それに、惚れたらダメは、合言葉なのか……

家庭崩壊って……あの事件のせいなのか……

2年、3年と紹介は進み、4年の担任が前に立った時、西森さんがまた横から教えてくれた。

「篠崎さん、あの一番右端の女の先生が、愛先生だよ」

そう言われて、視線を向ける。自分に似てると言われても、自分ではよく分からない。愛先生の髪形は、肩より少し長めでウェーブのかかったミディアムヘア。それは、3年前までの私のヘアースタイルとよく似ていた。今の私は、3年前にショートヘアにしてから、伸ばした事が無い。もう二度と、伸ばさないと決めた、彼が好きだと言った長めの髪。

「私に似てる？」

小さな声で、西森さんに問いかけると、私と前に立つ愛先生を見比べている。

「髪型が違うけど……何か似ている気がする。やっぱり笑った顔かな？ こう、ホツとする様な笑顔……」

西森さんはそう答えると、前に座る友達に、私と愛先生の事を問にかけている。前の3人が私を振り返り、同じように愛先生と見比

べた。

「うーん、髪形が違うから、パツと見は思わなかったけど……じつくり見たら、顔の作りは似ている様な気がする。……えっ？ 笑った顔が似てるって？ 篠崎さん笑って見せて」

そう言われて笑えるもんじゃないけれど、皆に言われて引きつった笑顔を見せた。その時、前に立つ愛先生が、自己紹介をしてふんわりと笑った。その笑顔を見て、どこか懐かしさを感じた。

総会が終わり、委員会の希望プリントを提出してから帰ろうと言う事になり、西森さんと担任を捜していると、まだ人々でざわめく体育館の中、片隅に立って話をしている彼を見つけた。話をしていたのは、なんと、あの愛先生だった。その時の彼の表情を見て、ドキリとした。今日は決して見る事のなかった、あの懐かしい優しい表情……私以外の人に向けられているのを、初めて見たかもしれない。

あの頃は、周りの女性に冷たい態度や、作った様な笑顔しか見せていなかった彼だけど、今では職場でそんな優しい表情をするようになったんだ……それは大人になったと言う事なのか……

西森さんが声をかけると、こちらを見て驚いた顔をしたが、すぐに真面目な担任の表情になった。さっきの優しい表情は消えていた。あれは、同僚限定なのか……

私達はプリントを提出し、「お疲れさまでした」と体育館を後にした。そして、学童へ拓都を迎えに行き、自転車を引いて、歩いて帰った。

家に帰ると、どつと疲れが出て、座り込んでしまった。何もする気になれない。なんだか意地悪すぎる運命に、もう白旗を振ってしまいたい。もう、勘忍して欲しい。こんな事続けていたら、私の気力も疲弊してしまう。これは、私がした事への因果応報？ この一



年、この罰を受け続けなければいけないの？

ソファーに座ってぼんやりしていると、拓都がニコニコとプリントと教科書を持ってやって来た。

「ママ、このプリントを書いて出してくださいって。それから、音読、聞いてくれる？」

拓都の笑顔だけが、今の救いだ。この笑顔を守るために、頑張らなきゃ……

気持ち少し浮上して、「いいよ」と答えると、拓都は私の隣に座って、教科書を読みだした。まだ少しつかえる所もあるが、随分上手に読めるようになってきた。子供は日々成長してるんだなって、今更ながら感動する。そんな成長途中の拓都を見ながら、私は何をやってるんだろうつて思う。

拓都の音読を聞き終えて、いつもの音読カードに感想を書き入れる。最初の頃は、このカードを担当である彼が見るんだと思うと緊張したが、もう慣れてしまった。そうだ、こんな風に彼が担任である事にそのうち慣れて、今のこの精神的疲労も感じなくなってしまうのかもしれない。人間って、どんな環境でも順応できる様になってるのかな……

拓都が持って来たプリントを見て、私は又運命を呪いたくなった。プリントには『家庭訪問のお知らせ』とあった。

彼が、この家へ来たのはもう4年以上前だ。私がまだ大学生の頃で、家の前まで車で迎えに来てもらう事は、何度もあったけれど、家の中へ入れたのは、確か1度だけ……姉がしつこく言うので、1度だけ家に招いた。でも、やっぱり恥ずかしくて、自宅へ招いたのはその1回限りだった。

彼は覚えているだろうか？ あの頃と何も変わらない、この家。ただ、住む人が変わっただけ……違う、減ったんだ。私と拓都だけ

を残して、みんな居なくなってしまった。

……ダメだ……普段考えない様にしてるのに、思いだすとじわじわと溢れだす涙。

お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お義兄さん……こんな弱い私で、ごめんね……でも、拓都は守るから、何に代えても、守るから……みんな、私と拓都を見守っていて……

テレビのアニメを見て笑っている拓都の方を見て、気付かれない内に涙を拭く。今日はどうもおかしい。こんな私は、本当の私じゃない。私は、いつも前を向いて、胸を張って歩いていたじゃないか……  
いつまでも、過去の罪悪感に囚われないで、忘れる事が一番の償いなのかもしれない。

私はもう一度、プリントに目を落とし、家庭訪問の希望日を、スケジュール帳を見ながら、都合のよい日時を書き入れた。

\*\*\*\*\*

その夜、私はまた、由香里さんに電話をした。学級役員の顛末てんまつを話すために……。

「それは、オメデトウ。見事に役員に当たったんだ。でも、そのくじは、ちよつと意味深ね」

私の話を聞いた由香里さんが、苦笑交じりにお祝いの言葉を言った。

「めでたくなんかないわよ。でも、あのくじは、もしかして……仕返しとか？」

「仕返しとまでは言わないけど、試したのかもね？」

「何を？」

「美緒が昔の事を覚えているか……」

「そんな事、試して、どうするって言うの？」

「それは本人に聞かなきゃ分からないけど……ちょっとした悪戯心だっただんじゃないのかな？」

そんな悪戯心で、役員にされてはたまらない……でも、私がある時、昔の事を思い出さなければ、当りを引く事は無かったかも知れない……。結局自分が引き寄せた事なのか……。

「もう、決まっちゃった事だから……今更、もういいわ。もう、このグチャグチャした気持ちをリセットして、役員の仕事を頑張る事にしたから」

私の小さな決意を、告げてみる。けれど、由香里さんは、噴き出すように笑いだして、「無理しなくてもいいよ」と言った。

無理しなきゃ、私が私でいらなくなるの！

そう心で叫んだが、結局口にしたのは「無理してないよ」と言う言葉だけだった。



### #13：悪い噂

明日からゴールデンウィークが始まると言う4月28日、1年生の第一回学級役員会議の日である。職場を3時半に早退し、午後4時の集合に間に合わせる様に車を走らせる。上手くいけば少し早目に着くに違いない。西森さんから、今朝、メールが届いていた。5分前には行ってるから、会議室で会いましょうと……

思ったよりも信号に引つかからず、スイスイと来れたおかげで、10分前に小学校へ到着した。帰宅ラッシュには、少し早かったせいかも知れない。

校舎へ入るとまず職員室を訪ね、来校者用のネクストラップ付きの名札を受け取り、首から下げる。これは不審者と間違われなかったためだ。職員室と同じ並びにある会議室に向う途中で、西森さんに出逢い、合流した。

「篠崎さん、お疲れ。仕事早退して来たんでしょ？」

西森さんは、<sup>わづ</sup>労う様に声をかけてくれた。

「そうです。先週も半日休んだから、ちょっと周りの目が冷たかったです……」

私は苦笑しながら、職場を出る時の、冷たい空気を思い出した。自分の負い目がそんな風を感じただけかもしれないけど……。

「それはお気の毒。私みたいにパートだとお気楽なだけどね」

西森さんに自分の仕事については話していなかったけれど、私の仕事はパートやアルバイトでは無いと察しているのだろう。

「パートでも、働く事にならないんだから、お気楽じゃないです

よ

「いやいや、正社員の人とは、責任が違うから……篠崎さんは正社員なんでしょ？」

「ええ、まあ……」

私はいつも、自分のプライベートの話になると、言いあぐねてしまう。どんな事から、拓都が姉の子である事がバレないかと、思うからだ。それは、そのまま担任に伝わってしまうかもしれないという不安と、この若さで結婚もせずに、一人で働きながら子育てをしている事が、変に同情を買ってしまうのが嫌だったからだ。これは同情される様な事ではない。自分で選んだ事なんだから……

「役員になった事、職場の人には言っているの？ 言っておかないと、早退するのも理解してもらえないんじゃないの？」

「ええ、一応、上司には話したのだけど……やっぱり職場の同僚たちにも言っておいた方がいいですよね？」

私は今の職場にこの4月から転勤になって、姉の子供の面倒を見ている事は上司に話したのだけど、同僚にはまだ言っていなかった。今回役員になった事で、上司も皆に話しておいた方がいいと、勧められていたのだ。結局こちらにも、変に同情や詮索をされるのが怖くて、まだ話せていないのが現状だった。

「それはそうだよ。少しでも早く話して、理解してもらわないと……ねっ」

そう言っつて西森さんはニッコリ笑うと、会議室のドアを開けた。西森さんに続いて会議室に入ると、もうすでに来ていた他のクラス役員さんが、私達に気付き、こちらを向いた。西森さんが「こんにちは」と言くと、皆も挨拶を返す。私も続いて「こんにちは」と

会釈した。

「あ、西森さん、また役員になったの？」

一人のお母さんが、こちらを見て笑顔で言った。

「そうよ、なんと、守谷先生のクラスの役員なんだから」

もう、守谷先生のクラスというのは一種のステータスの様だ。

「えー、西森さん、去年も上のお兄ちゃんの時、守谷先生のクラスだったよね？」

また別のお母さんが、声を上げた。

「ふふふ、そうよ」

ここまで来ると、誰も西森さんを止められないかもしれない。

会議室は、長机を中心に空間を置いて、長辺に長机が3つ、短辺に長机が1つと言う長方形に並べてあった。椅子は全部が中心を向く様に外側に並べてある。

私達は、みんなの傍の空いている席に座った。そして、次々に新しい人が入って来て、最後に1年の担任達が入って来ると、全員がそろったようだった。

担任達は、一方の長辺に並んで座り、役員達はもう一方の長辺と短辺に、担任と対峙する様に座った。全員が座ったのを見届けると、担任の中で一番年上らしい女性が立ち上がった。

「今日はお忙しいながお集まりいただき、ありがとうございます。初めての集まりなので、自己紹介からお願いします。まずは担任からしていきますので、その後順番にお願いします。私は、1年1組の担任の長嶋恵子ながしまけいこです。よろしく願います」

そう言って長嶋先生が着席すると、隣りに座っていた若い女性が

立ちあがった。

「1年2組の担任の中島美穂なかしまみほです。よろしく願います」

20代後半ぐらいの真面目で神経質そうな細身の女性教諭が自己紹介した後、その隣の長身の担任が静かに立ち上がった。

「1年3組の担任の守谷慧です。よろしく願います」

今日の彼は、体育の授業があったのか、ジャージ姿だった。そんな姿でさえ、なぜか似合って、目を奪われてしまう自分に嫌悪して目を伏せた。

その後も、4組5組の担任が自己紹介し、次に役員のお母さん達が順番に立ち上がると、クラスと名前を言っていた。

全員の自己紹介が終わると、プリントが回って来た。全員にプリントが回ったのを見届けると、最初に挨拶をした長嶋先生が、議長のように話を進め始めた。

「それでは、1年間の予定ですが、そのプリントにありますように、おもな行事の日時が決まっています。運動会と文化祭は、委員会の方でお手伝いしてもらいますが、給食試食会と親子ふれあい学習会、そして親子レクリエーションは、学級役員の方に協力をお願いします」

長嶋先生は、皆に目を向けて、優しく微笑んだ。少しふつくとした顔と体に包容力を感じて、母親をイメージした。なんとなく、この人が担任だったら、いろいろと相談出来たかもしれないと思った。今の自分は、担任が一番頼ってはいけない人だと、思っているからかも知れない。

「それでは、1学期の予定ですが、6月22日の給食試食会の前に、企画・打ち合わせの会議をしたいのですが、いつがいいか、こちら



と皆さんの一番都合のいい日にしたいと思うのですが……担任側としては、できるだけ、給食試食会の直前で水曜日か木曜日でお願いしたいのですが……」

今度は4組の30代後半ぐらいの男性教諭が、話し始めた。すると、5組の30代ぐらいの女性教諭が、「直前と言いますと、6月の8、9日の水木か、15、16日の水木のいずれかになりますが、いかがですか？」と話を補足する。

その話を受けて、役員のお母さん達が、ざわざわと相談し始めた。私は、スケジュール帳を見て、今の所、特に早退できない予定は無い事を確かめると、西森さんに「どうですか？」と訊いてみた。西森さんは、お得意の携帯のスケジュールの画面を見て、「私？もちろんノープロブレムよ。篠崎さんはどうなの？」と訊き返された。西森さんの言い方に、笑いそうになるのを耐えて「私も大丈夫です」と答えた。

会議の予定は6月15日の水曜日と決まり、その後給食試食会の詳細について説明を受けた。給食は余分に作れないので、子供にお弁当を持たせて、子供の給食を親が食べると言う事らしい。次回の会議では、試食後のアンケートの内容や、もう少し細かい打ち合わせをする事となった。そして、だいたい1時間ぐらいで、第一回目の会議は終わった。

今日は彼とは離れて座っていたのと、直接話をしなかった事で、精神的な疲れはあまりなかった。だからか、担任達が部屋から退出すると、西森さんを中心に残った数人のお母さん達と、おしゃべりするのにつき合う気になった。やはりと言っか、話題は守谷先生の事だった。

「いや〜守谷先生って、こんな近くで長時間見たの初めてだったけど、やっぱりカッコイイね〜」

そう話すのは、会議の前に西森さんに声をかけたお母さんだ。彼女は西森さんの上の子と同級生の子供がいるらしい。

「ふふふ、守谷先生のクラス役員だともっと近くで見れちゃうし、お話もできるんだから……役得よ」

相変わらず西森さんは、自慢気に話している。

「いいよね、私もあんなイケメンな男の人、身近で見ると初めてかも……」

別のお母さんが、思い出したようにうつとりと答える。

「あんなに外見がいいのに、先生としても一生懸命で、子供達にも好かれてるし、性格も真面目で爽やかかって、でき過ぎって感じだよね」

「だけど、それは先生としての守谷先生であって、プライベートでは女性を弄もてあそんでたりするかもよ」

一人のお母さんが、穿つがつた見方をした。すると、それに賛同する様に、同じような意見が出始めた。

「そうそう、先生だって聖人君子じゃないんだから、いい先生を続けるストレスをプライベートで遊んで晴らしてるかも……守谷先生なら、女性に不自由しないだろうし……」

「ほら、去年不倫疑惑があったじゃない？ お母さんの方が勘違いしてのめり込んだ事になってたけど、守谷先生も思わせぶりな事、言っただんじやないのかな？ 無自覚なのかもしれないけど……普通子供の事で相談してて、担任に気が行くなんで、考えられないよ」

ええ？ そこまで言う？ 彼はそんな人じゃないのに……  
なんだか悲しくなった。その外見ゆえにいろいろな誤解をされる

事は、大学時代から聞いていた事だったけど、ほとんどが妬みとか逆恨みの類で……今のお母さん達の発言も、妬みなのかな？

こんな憶測が、お母さん達の噂で、真しやかに流れたとしたら？

「そこまで言ったら、守谷先生が気の毒だよ。私みたいにミィーハーンな気持ちでカツコイイなんて言ってるからいけないのかもしれないけど、先生としての守谷先生は、一生懸命頑張ってくれてると思うし、保護者からしたら、先生としての守谷先生が、いい先生でいてくれたらそれでいいんじゃないかな？ プライベートまで口出しできる事じゃないでしょう？」

西森さんは、いつもと違い、真面目な口調で反論した。

「でも実際、女性を次々弄ぶような人だったら、どう思う？」

「はあ？ 何を根拠にそんな事を言うのだろうか？ 本当の彼の事を知りもしないで……」

「どつって……守谷先生はそんな人じゃないと思うけど……」

西森さんは、その質問に対して、憮然として答えているけど、答えにならない。

「まあ、外見だけ見たら、そんな事もあるかもって思われてしまう所が、守谷先生の辛い所だよな」

西森さんの知り合いが、西森さんをフォローする様に言う。

「そうそう、あの外見だから、辛い事も多いのよと、私は大学時代を思い出して、心の中で賛同していた。」

「でもね、私見たのよ……3年ぐらい前なんだけど、その頃守谷先生ってまだ大学生だと思うんだけどね、その日、私達の結婚記念日で、子供を両親に預けて夕食を外で食べて、その後飲みに行こうって言う事になって、主人と二人繁華街を歩いていたのよ。そこで5

つ下の従姉妹を見かけて、声をかけたんだけど、その時、一緒にいた男性が、めちゃくちゃイケメンで驚いたの。ちよつと忘れられない様な男前だったの。それで、従姉妹が私の傍に来たから『彼氏？』って聞いたら、一目ぼれして逆ナンしたって言うのよ。従姉妹も派手な娘で、結構遊んでるんだけど、その時は『ウチの親には内緒にして』って言うから『自分を大事にしなさいよ』って言うて別れたんだけど……後日、またその従姉妹に会った時、あの時の彼はどうだったのって聞いてみたの。そうしたら、従姉妹が言うには、彼はその頃、出会ったお店によく来てて、めちゃくちゃイケメンでカッコイイから、女性に声を掛けられては、お持ち帰りしてる様な来るもの拒まずだったらしいの。だけど、皆一回限りで誰にも落ちないって言われていたから、従姉妹は自分が落としてやるって声をかけたらしいの。それなのに、反対に、従姉妹の方が彼に一目ぼれしてしまっただって。だけど、やっぱり、他の皆の様に弄もてあそばれただけで、教えてもらった携帯番号もでたらめだったらしいし、大学もどこかはぐらかして言わなかったらしいし、名前も下の名前だけで、本名かどうか分からないって、悔しがってた。それでね、私もずーっと忘れてたんだけど、入学式の時に守谷先生を見た時、どこかで見えた様な気がしたの。それで、今日の会議で守谷先生が自己紹介した時、思い出したのよ。初めて従姉妹とその彼が一緒にいるのを見た時、従姉妹が彼の事を『けい』って呼んでたのを……守谷先生って、『けい』って名前なんだね。それで見た事あるって思った顔が、あの時の彼とそっくりだと思いだした訳……絶対に守谷先生だとは言わないけど、あんなに男前の男性で年齢も同じぐらいの人は、この辺では見かけないから……そうじゃないかって、思ったんだけど……」

いつの間にか、みんなシーンとして聞いていた。私は気付いた。みんなその彼が、守谷先生だと思ったのだと言う事に……

私は違うと思いたい。私と付き合っていた頃は、そんな事は無かったって信じてる。でも、3年前って言うのが……私と別れた後だ

「だったら……もしかして、裏切られたショックで、女性を手当たり次第弄んだとしたら？ 私のせい？」

「でも……守谷先生だとは決まった訳じゃないし、そうだとすると、大学生の頃の話だし……そんな不確かな話は、あまり人には言わない方がいいんじゃないかな？ 守谷先生の名誉のためにも……まだ他の人には言っていないんだったら、ここだけの話にしておかない？ ねっ、みんな」

西森さんは、さすがにいい人だ。守谷先生の名誉を守るために、みんなに口止めしてくれた。みんなも、西森さんの話にそうよねと頷いた。

本当にこんな噂が広まったら、去年の旦那怒鳴り込み事件も、さっきの誰かの話じゃないけど、彼の方が思わせぶりな事を言ったんじゃないかって、疑われてしまうかも知れない。

真実はどうなのかは分からないけど、ずーっと夢だった小学校の先生になれたんだから、人に後ろ指さされる様な事はしていないと信じたい。私は、何の力にもなれないけど、陰ながら、応援してようと、心の中でそっと誓った。

\*\*\*\*\*

「それで、美緒は自分のせいかも知れないって思ってる訳だ……」

拓都の保育園時代を過ごしたK市に住む由香里さんの自宅に、ゴールデンウィークを利用して、1泊2日で遊びに来ていた。由香里さんの子供達、お兄ちゃんの礼君と拓都と同級生である弟の陸君との久々の再会に拓都は大喜びで、昼間は3人で大いに遊んだ。そして、疲れた子供達を早々に寝かしつけた後、大人の時間とばかりに、二人でお酒を飲みながら、ゆっくりとお喋りを始めた。

私は、先日の学級役員会議の後で聞かされた、嘘かホントか分からない彼の噂について話した。その話を聞いた由香里さんの第一声がさっきのセリフだ。

「そんな事……そんな人じゃないって思いたいけど……」

私は、自分が一瞬感じた不安を言い当てられ、言葉に詰まった。

「へえ〜リセットして、忘れるんだって言ったた人が……やっぱり、心配？」

「そりゃ〜拓都の担任だから、悪い噂は立って欲しくないし……」

「それだけ？」

「そうよ」

「美緒は素直じゃないし、天邪鬼あまのじゃくだよねえ〜」

由香里さんはいつも痛い所を突いて来る。本当は何もかも分かっている癖に、ワザと私がひねくれる様に追い詰める。「ほつといてよ」と言って、顔を背けた。

「いつそさ、元カレに何もかも本当の事を話して、今でも好きだと告白すれば？」

「な、何言ってるのよ！ そんな事できる訳無いでしょう？ 向こうは私の事を恨んでるだろうし……今更、何言ってるのよ」

本当に由香里さんは、何を考えているんだか……

「ふ〜ん、そう？ でも、今でも好きだと言う事は否定しないんだ

……」

な、何を……

私は返す言葉も出ず、頭の中が真っ白になった。

「それじゃあ、新しい恋なんてできないよね……ねえ、美緒。綺麗事ばかり考えてないで、思いっきりぶつかって、バツサリと振られてしまった方が、踏ん切りがつくんじゃないの？」

「他人事だと思って、勝手な事言わないでよ」

「私はね、美緒に幸せになって欲しいだけなのよ」

「由香里さん……」

「ねえ、美緒、美緒は拓都君に新しいお父さんをつて、考えた事は無い？」

拓都にお父さん？ 拓都のお父さんは一人だけだ。新しいお父さんなんて……

「拓都のお父さんは、拓海お義兄さんだけだよ。そんな事、考えた事無い」

私の答えに、由香里さんは苦笑した。

「私はね、男の子二人だから、余計に思うのだけど……いつか女親だけでは分かってあげられない事が出て来るんじゃないかって思うの。男親じゃ無ければ理解してあげられない事が……だから、私の幸せの為と言うより、家族の幸せのために、まだ結婚の夢を捨てきれないの。たいがい、男に懲りてもよさそうなのにな……なぜかに家庭の幸せの夢を捨てきれないのよ。自分が育ったのが幸せな家庭じゃ無かったからかなあ〜」

由香里さんは、最後の方は独り言のように呟いた。

以前、由香里さんから、両親の話聞いた事があった。酒浸りで働かない父親と、そんな父親の暴力におびえる母親の間で、良い子を演じて来た由香里さん。だから余計に、幸せな家庭を夢見るのだと、苦笑交じりに話してくれた事があった。

「あのね、美緒。私、付き合い始めた人がいるの……職場の上司なんだけど……5つも年下なのよ。最初は、本気にしてなかったの。でも、何度も食事に誘ってくれて……子供がいるから二人では出かけられないって断ると、子供達も一緒になって、何度か昼間公園で遊んだりしたのよ。そうしたら彼、子供たちと遊ぶのが上手で、子供達も懐いちゃって……彼ならいいかなあって、思うようになったの」

「え？ ホント？ おめでとう、由香里さん。私よりも由香里さんこそ幸せになってくれなきゃ……」

なんだか嬉しさと胸が詰まって、涙があふれて来た。誰かが幸せになる話は嬉しい。ましてや大切な親友だ。拓都と歩き始めてから、ずっと支えてくれた、人一倍包容力と思いやりのある彼女だから、誰よりも幸せになって欲しい。

「おめでとうって……まだ結婚する訳じゃないから……」

由香里さんも私の涙に釣られたのか、涙ぐんでいる。

幸せって……人それぞれ形は違うだろうけど、私にとって幸せって、どんな形をしているのだろうか？

由香里さんは、家庭と言う形の幸せを求めた。

私は？……そもそも私が望む幸せの形なんて、あるのだろうか？





#### #14：家庭訪問（前書き）

すみません。

思う所があり、大幅改稿しました。

最初と随分話が変わった部分がありますので、できましたらもう一度読んで頂きますよう、お願いします。

## #14：家庭訪問

ゴールデンウィークが終わり、いつもの日常が戻って来た。いつもの様に朝の準備をして、朝食を食べ終わると、数日前から懸念していた事を告げようと、拓都を見た。拓都は可愛らしい手を合わせて、「ごちそうさまでした」と言っている。

「拓都、今日ね、夕方、家庭訪問があるの。守谷先生がウチへ来て、お話をしてくださるのよ。だから、今日は早くお迎えに行くわね。4時半頃だと思っ」

拓都は、いつもと違う事を言う私の顔を、目をパチクリと開けて見ている。

「4時半だね？」

拓都が時間を確認する様に言ったのは、最近時計の見方を覚え始めたからだ。やたらと時間の事を言ったり、確認したりしながら、時計をじっと見ている。そんな拓都を見つめて、私はニツコリと「そっだよ」と言った。

「ねえ、ねえ、守谷先生がお家へ来て、何のお話をするの？」

「ん……学校の事とか、拓都の話かな？」

「それは、僕も聞いてもいいお話？」

「大人の話だからダメだよ。先生が来たら挨拶だけして、自分のお部屋にいてくれるかな？」

「えー、僕の話なのに、僕は聞いちゃ駄目なの？」

「先生はね、拓都君はお家でいい子にしていますかって、訊くのよ。ママがなんて答えるかは、拓都には秘密。でも、拓都はいつもいい子だものね。大丈夫だよ」

私がニコニコとそう答えると、拓都は少し神妙な顔をして、「そっか……わかった」と返事した。拓都はいつも聞きわけがいい。その聞きわけの良さが、時々寂しくなるのだけれど……

それにしても、とうとう、この日がやって来た。気持ちの整理も、心の準備もできないまま、毎日大きくなって行く、モヤモヤとした心の中の不安は、いつか私を飲み込んでしまいそうで、怖くなる。

初めて二人きりで対峙する……その事が、私の不安と緊張のピークになる様で、何かとんでもない事を口走ってしまわないかと、自分が信じられなくなる。過去に触れず、担任と保護者の距離を保たなければいけない。

仕事を4時に早退し、4時半に拓都を迎えに行き、すぐに家に帰ると、約束の5時まで落ち着かなくて、ウロウロと歩きまわる。掃除は今朝しておいたし、お茶を出す用意もしている。本当は座敷に入ってもらおうと思ったけれど、座敷には仏壇があって、両親と姉夫婦の写真が飾ってある。それを見たら、姉夫婦が亡くなっている事は、一目瞭然だ。写真を片付けると言う手もあるけれど、拓都が見たら、言い訳ができないと思ったから、LDKのワンフロアになっっている生活の中心になっっているこの部屋へ、入ってもらう事にした。前に一度彼が来た時も、この部屋だった。

両親が建てたこの家は、最初は台所と居間がきっちり別れた部屋だった。でも、姉が結婚する時、同居すると言うので、リホームしたのだった。フローリングのワンフロアの半分にソファとテレビ、もう半分は対面式キッチンとダイニングテーブル。拓都が宿題をするのも、このダイニングテーブルで、私が家計簿を付けるのも、

このテーブルだった。このダイニングテーブルに、再び彼を招く。

私は今日と言う日を迎えるにあたって、初めての家庭訪問なので勝手がわからず、すでに恒例行事になっている西森さんに、指示を仰いだ。

玄関先で対応した方がいいのか？

上にながってもらった方がいいのか？

お茶は出すのか？

お茶菓子は要るのか？

考え出したらきりが無い程、分からない事だらけだった。

『私は一応リビングに入ってもらうけど、先生によっては玄関先でつて言う先生もいるらしいよ。お茶は出すけど、お茶菓子までは出さない』

大ベテランの話をありがたく聞き、私も中へ入ってもらう準備をし、暑いので冷たいお茶の用意もしておいた。

何をこんなにドキドキしてるんだと自分を叱る。

やっぱり二人きりになるのは、よくないかもしれない……。

3年ぶりなのよと、惑わす様な声が頭の中で聞こえる。この気持ちは未練なのか、後悔なのか……私の心は、あの頃からちっとも成長してなくて、彼を前にしたら、うっかりとあの頃の気持ちに舞い戻ってしまいそうで……。

美緒、裏切ったのは私の方だと言う事、忘れちゃいけない。

私は洗面所の鏡で顔を映し、両手で頬をパンパンと叩き、活を入れた。そして、暗示をかけるように大丈夫と呟いた。

時計が5時をさす頃、携帯の着信音がリビングのソファアの上に

置いた鞆の中から聞こえてきた。どの位鳴っていたのか洗面所にいたので気付かなかったけれど、携帯を取り出そうとしたら切れてしまった。

着信記録を見ると非通知の表示。それは……心臓がドキンと跳ねた。

次の瞬間、自宅の固定電話が鳴りだした。もしかして？ とドキドキしながら受話器を取る。

「もしもし、篠崎さんのお宅ですか？」

「はい」

受話器から聞こえる懐かしい声。電話を通すと彼の声は少し低く聞こえる。

「すみません、守谷です。時間が遅れておりまして、今、前の方が終わった所です。後5分ぐらいで着けると思います。よろしく願いします。」

「わかりました。よろしくお願いします。」

電話を切ると一つため息をついた。

はあく緊張する。

今までも学級役員として担任である彼の傍に座って話した事があるけれど、二人きりと言うのは、辛いかもしれない。

「拓都、守谷先生、もうすぐ来るって」

テレビを見ていた拓都にその声をかけると、振り返って嬉しそうに笑った。

後5分と言う時間が、時を刻む音が聞こえるかのように、ゆっくりと流れる。ドキドキと緊張で押し潰されてしまっんじゃないかと、また不安が首をもたげる。

もうすぐ、もうすぐこの家にやって来る。心臓の鼓動が、また少し早くなつた気がした。

その時ふいに、玄関のブザーが鳴った。それはあたかも、悲劇の舞台の始まりのブザーのように、鳴り響いた。

ゆつくりと玄関のドアを開けると、長身の懐かしいその人の姿があった。あの頃のように斜め40度に顔を上げると、緊張した視線が合わさった。とたんに「遅れてすいません」と彼が頭を下げた。「いいえ」と言つて、私は視線を下げる。そしてドアを大きく開けると「どうぞ」と招き入れた。

「守谷先生、こんにちは」

私と一緒に玄関まで来ていた拓都が、担任が入つて来るなり挨拶をした。拓都の満面の笑みに、担任も緊張を解いたのか、「拓都、こんにちは、お邪魔します」と言つて、やっと笑顔を見せた。

「拓都、先生はママとお話があるから、自分のお部屋へ行つていてね」

事前の予定通り、拓都にそう告げると「はい」と返事をして、「先生、またね」と2階へ上がつて行つた。

拓都が行つてしまうと、また緊張した空気が覆い始めた。これは、私の緊張だ。拓都がいた方が良かったんじゃないかと、そんな考えがチラリと頭をかすめた。

ガラスのはまったドアを開け、ダイニングのテーブルに誘導する。お茶の用意をするため、対面式の流し台の向こう側へ行くと、大きく息を吐いた。まるで、今まで息を止めていたように、上手く呼吸が出来ない。……また、呪文のように大丈夫と繰り返す。

お盆を持つ手が震える。私の動揺を覺<sup>さ</sup>られてはいけないのに、体

は正直に反応してしまう。まだまだ修行が足りないなあーと思うそばから、何の修行だよ、と自分で突っ込みを入れる。大丈夫、まだツッコミ入れる余裕がある。

ダイニングテーブルの傍まで行くと、一瞬目が合った。すぐに目を伏せて、失礼しますと呟いて、冷たい麦茶の入ったガラスの冷茶器を茶卓ごと持つと、彼の前にどうぞと置いた。

少しカタカタと震えた事に気付いただろうか？

ああ、もう情けない。

上手くポーカーフエースとやらが出来ているのだろうか、今の私は…

「ありがとう」と言って、茶器を持ち上げて一口飲む彼の表情は、何やら余裕ありげに見えた。私は、彼の対面に座り、顔を上げると彼がボツリと言った。

「まだ、あの車に乗ってるんだ」

えっ？

一瞬何の事を言っているのか分からず、呆けた顔をしてしまった。

「だから、カーポートに停めてあるミニだよ」

なに？いきなりタメ口？

これって家庭訪問だよな。

でも、彼の指摘した私の愛車は、今日の前にいる彼と選んだものだったからだろう。

そう、私が就職する時、二人で見に行った中古車屋さんで一目惚れしてしまったミニクーパー。本当は軽自動車を買うつもりだったのに、もうそれ以外は考えられなくなってしまった。あの時、メカオんちの私の代わりに彼がいろいろ調べてくれて、アドバイスしてくれて、お店の人との値段交渉まで引き受けてくれた。予算が少な



かったので本当に助かった。

「買い替える余裕がないのよ」

そう言ってしまったから、自分もタメ口だった事に気づき、焦った。

「旦那に買い替えてもらわなかったのか？」

だんな？

ナンノコト？

そして、私はフリーズした。

頭の中は旦那と言う言葉がぐるぐる回っている。

ああ、やっぱり、私は結婚してると思われてるんだ……

姉夫婦が亡くなった事も、知らないだろうし……あの事故があった時、彼は春休みで他県の実家へ帰っていたから、知らなかっただろうし……姉家族は海外転勤になったと話したのを、信じただろうし……。

それに、一緒に海外へ行っているはずの姉の子供が、今私の子供になっっているなんて、思いもしないだろうし……

全てはあの事故で、狂ってしまった。私が提案して、送りだした姉夫婦のデートの結末は、拓都から両親を奪い、私は償い切れない罪を背負った。

だから、手を離れたのだ。これ以上罪深い私の人生に、彼を巻き込みたくなかったから……。

もうこれ以上、大切な存在を、私の不幸体質の運命のせいで、永久に失くしたくなかったから……。

あの時、彼に本当の事を話せば、きっと力になってくれたと思う。でも、それが辛かった。あの頃、大学生だった彼の重荷になるのが怖かった。未来ある彼の人生に影を落とすたくなかった。

いいえ、そんな事は後から考えた理由。あの事故から葬儀が終わ

るまでの数日間、私は彼の事を思い出す余裕も無く、全て終わった時に思ったのは、もう私と彼の未来は別々になってしまったのだと言う事。

本当の所、社会人になったばかりの私には、拓都の手を取るのが精一杯で、その後の拓都と生きて行く現実で頭が一杯で、彼の事を考える余裕も無かった。ただ、発作的に、彼との未来はもうないのだと、自分に言い聞かせ、別れなければと考えていた。

私はあの日、好きな人ができたと……職場の人に何度か誘われ、だんだんと好きになってしまったんだと……でも、あなたには、なかなか言い出せなかったのだと……だから、別れて欲しいと、告げた。これが一番、彼が反論できない理由だと、あの時は思ったから……

彼は、私とその好きになったという職場の人と、結婚したと思っ  
ているのかもしれない。

あの日決意した気持ちを貫かなければ……たとえ恨まれようと、  
そのように仕向けたのは私だから、彼を傷つける事になっても、自  
分が選んだ別れだったから、後悔はしないと誓ったのだから……

「あの車を気に入ってるから替えたくないの」  
またタメ口で返している自分に気付かなかった。

目の前の彼は、少し余裕の笑顔を見せて、また、タメ口で返して  
来た。

「ああ、ジユディだっけ？名前まで付けるほど気に入っていたもん  
な」

そう、私は愛車を相棒だと思って「ジユディ」と名前を付けてい  
た。買った時は10年落ちの古い車で、パワステもパワーウィンド  
ウも無かった。今ときと言われるが、私はこの車がかわいくて仕方  
がなかったのだ。しかし、今は思い出に浸っている訳にはいかない。

彼は、懐かしい車を見て、昔の様に二人きりになって、つい気持ち  
が過去へ飛んでしまったのかもしれないけれど、お互いに目を覚ま  
さなければ……目の前のこの人と私の関係をはっきりしなくては、  
自分の心が崩れてしまう。

「守谷先生、家庭訪問の方を始めて下さい」

私の言葉に、ハツとした表情を見せた彼は、一瞬顔を歪ませ、思  
い直したように居住まいを正して、「失礼しました」と言った。

「拓都君は、学校では、今のままで特に気になる事はありません。  
勉強に関しても、よく理解していると思いますし、積極的に手を上  
げて、発表もしてくれれます。友達との関係も、上手く言っている  
と思います。お家の方で、何か気になる事はありますか？」

担任は、手元のノートを一瞥した後、スラスラと学校での拓都に  
ついて説明した。

「いえ、特には……」

「それじゃあ、このまま見守ってあげて下さい。他に、学校の事や  
勉強の事など、聞きたい事はありますか？」

「今の所、特にありませんので、又何かありましたら、よろしくお  
願います」

私は少し頭を下げた。家庭訪問って、この程度の話なのか……

「それじゃあ、これからも役員としていろいろとご協力願いたいと  
思いますので、よろしく願います」

彼は立ち上がると、そう言って頭を下げた。そして、玄関へと向  
かって歩き出した彼の後を追いながら、この家の中で、彼を見るの  
は今日が最後なんだろうなと、その大きな背中を見ながら思った。

こんなに近くにいるのに、もう届かない。それはまるで別の次元にいる様に、交わる事の無い二人のベクトル。

玄関まで来て、拓都を呼んだ。返事と共にトントンと階段を下りて来る。

「先生、もう帰るの？」

下りて来るなり、守谷先生を見上げて、友達に言う様に訊いた。

「ああ、拓都はしっかりお母さんのお手伝いをしろよ」

そう言つて、担任は拓都の頭をクシャクシャとかき混ぜる。嬉しそうな顔をした拓都が、元気に「はい」と返事をしていた。

「それでは、失礼します」

担任はそう言つと、ドアを開けて出て行つた。それを見届けた後、私はさつき彼が触れた拓都の頭を、そつと撫なでていた。

## #15：噂の行方（前書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。  
大変申し訳ないのですが、「#14：家庭訪問」を大幅改稿いたしました。

少し内容の意味も変わってしまったので、  
できましたら、もう一度読み直して頂きますよう、お願いします。  
ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

今回は、いつもより、ずいぶん短いです。  
本当はもう一つエピソードを入れたかったのですが、  
なかなか書けないので、ここでいったん切りました。  
どうぞお楽しみください。

## #15：噂の行方

一番の不安要素だった家庭訪問が終わり、私はやっと風薫る5月を肌で感じられるようになった。次に担任に会うのは、6月15日の学級役員のお2回目の会議だ。それまでの約一ヶ月間は、呼吸が楽にできそうな気がする。

最近拓都も、守谷先生の話ばかりではなくなり、お友達の話も出るようになった。西森さんの息子の翔也君の話が良く出てくるので、仲がいいのかも知れない。

その日は、残業をしたため、学童が閉まる午後7時にギリギリ間に合った。やはり、拓都が最後だった。「遅くなってごめんね」と謝ると、「今日図書室で借りた本を読んだから、大丈夫だよ。とっても面白かったんだ」と、ニコツと笑った。

いつの間にか一人で本を読めるようになった事より、無意識かもしれないけど、私に心配をかけまいとして、大丈夫と言う拓都の優しさに、胸が一杯になる。

これが、子育てのご褒美なんだろうな……と一人納得しながら、やっぱり私は、拓都と過ごす日常が、私にとっての幸せなんだと、自覚してかみ締めた。

家に戻ると、拓都が私宛の封筒を持ってきた。学校から役員宛のお知らせらしい。その封筒には、5月20日の金曜日の第一回全委員会会合の詳細及び、今年度の委員会メンバーの一覧が掲載されたプリントが入っていた。あの、学級役員になってしまった学級懇談の日に、委員会の希望を第三希望まで書いて提出したっけ……

メンバー一覧を見て、ホツとした。広報のところ、西森さんと私の名前があった。第一希望が通ったんだ……

私はすぐに西森さんに、第一希望が通ってよかったと言う事と、

広報の方でもよろしくとメールした。送ったと思ったら、すぐに返事が帰って来るのが西森さんだ。

『今年は、守谷先生のクラスになれたし、委員会も第一希望が通ったし、もしかして、すっごくついでる年かも……ラッキーV こちらこそよろしくね(＾O＾)ノ』

西森さんらしいメールに、私はクスツと笑うと『宝くじでも買ってみる?』と返事をした。

\*\*\*\*\*

5月20日金曜日午後2時、全ての委員会の第一回目の会議がこの日行われ、広報委員会の会場場所は、家庭科教室だった。私はまだ小学校の教室の配置を覚えていなかったため、西森さんと校舎入り口で待ち合わせると事になった。午後2時なんて中途半端な時間だったので、仕事は午後から休みをもらい、ゆつくりと昼食を食べると、乾いた洗濯物を取り入れ、自転車で小学校へ向かった。

校舎入り口の所で、すでに来ていた西森さんが他のお母さん2人と話をしていて。近づいて「こんにちは」と言うと、皆がこちらを向いて「こんにちは」と返し、西森さんだけがいつもの様に「お疲れ」と言ってくれた。

「彼女、私と同じ守谷先生のクラスの学級役員なんだけど、彼女も広報なんだよ」

西森さんは、私にニッコリと笑った後、他の二人に紹介してもらった様だ。そして、私の方をもう一度見て「この二人も広報よ。上の子の同級生のお母さんなの」と教えてくれた。

私は二人の方を見て「よろしく願います」と頭を下げた。

「やだあゝ私なんかに頭を下げないで……そんなに堅苦しくしなく

てもいいのよ。こちらこそよろしく」

一人のお母さんが、苦笑しながらそう言うと、もう一人のお母さんも「そうよ」と笑った。

会議の行われる家庭科教室へ向かいながら、西森さんと他のお母さん達が話しているのを、聞くとともに無く聞きながら、彼女達の後ろからついて行った。他のお母さん達の内の一人が私を振り返り、ニコツと笑うと話しかけて来た。

「小学校は初めて？」

彼女はそう訊きながら、私と並んで歩きだした。私は彼女の方を見て「そうです」と答えた。

「いきなり学級役員なんて、大変でしょう？」

「そうですね。分からない事だらけで……でも、西森さんが一緒なので、助かってます」

「やっぱりあなたも、守谷先生ファン？」

いきなりそんな事を聞かれて驚いたが、きつと西森さんが、先程、自慢しまくったに違いない。

「いえ、私は、そんな事無いです。西森さんには内緒ですけど……」  
最後の方は小さな声で言うと、彼女は「ホントに、西森ちゃんには参るよね」と言ってクスクス笑った。

西森さんは、知り合いが多いし、いろんな人に好かれていると思う。だから、守谷ファンだと公言していても、周りの皆も「またか」と思いながら、苦笑するしかないのだろう。

それにしても、小学校へ来た途端、これだ……西森さんと一緒にいたら、守谷先生の話題からは、逃れられないのかもしれない。



家庭科教室へ入り、すでに来ていた人達に「こんにちは」と声をかけると、振り返って挨拶を返してくれた。家庭科教室は、向い合せに3人づつ座れるようになっていて、6人掛けの大きな机が7つ並んでいる。黒板に向かつて2つ並び、その後ろにもう2列、窓際の列だけもう一つ机が配置されていた。

私達4人は、空いていた一番後ろの窓際の机の所へ座った。他の人達も、思い思いの所へ座って気楽なお喋りをしている。

「千裕ちゃん、ねえ、ねえ、聞いた？ 守谷先生の噂」

家庭科教室に入ってくるなり、西森さんの姿を見つけると走り寄って来たその人は、周りに気遣い、少し声を落として西森さんに問いかけた。

彼女は、西森さんのご近所の仲良しのママ友らしい。今年度は学級役員ではなく、西森さんの住んでいる地区の地区役員なのだろう。どうやら彼女も、守谷ファンのようだ。

彼女の問いかけに、私と西森さんは思わず顔を見合わせた。

……もしかしたら、あの噂が広まっているの？

西森さんもそう思ったようで、少し顔をしかめた。そして、笑顔を作り「えっ？ どんな噂？」と聞き返している。

「守谷先生って、大学時代、すごいプレーボーイだったんだって、女性をとつかえひつかえ弄もてあそんでいたんだって……なんだか、ショックー！」

ああ……私はやっぱりと思った。そして、西森さんの方を見ると、彼女も同じように思ったのか、私にコクリと頷いて見せた。

「ねえ、その噂、誰に聞いたの？」

西森さんは彼女につられる事なく、冷静に問いかけている。彼女の方は、自分の話に乗ってくれるかと思っていたのか、西森さんの冷

静な反応に少し肩透かしを食らったようだった。

「えっ？ 誰って……本部役員をしている友達だけ……」

「そう……私ね、その噂の最初の出所知っているのよ。その話が出た時、一緒にいたから。でも、その時に本当かどうか分からない噂で、守谷先生の名誉を傷つけちゃいけないからって、その場にいた人達に、口止めたんだけど……やっぱり人の口には戸は立てられないか……」

西森さん自身もこうなる事は多少予測はしていたようだったが、人の口を経る度に、微妙に噂の内容が変わっていくような気がする。人の口には戸は立てられない……その人は内緒の話のつもりでも、次の人に伝わる頃には好奇心な噂でしかない。

「ねえ、その噂は、嘘なの？」

西森さんのママ友は、やけに冷静な西森さんに驚きつつ、最初の勢いはどこへやらで、余計に声をひそめてボソリと訊いた。

「真偽の程は、本人しか分からないけど、大学生の頃の話だって言うし、私は今の守谷先生を信じてるから……ただ、守谷先生のあの容姿じゃ、信じちゃう人も多いでしょうね。みんな噂より、自分の目を信じればいいのに……」

西森さんは少し寂しそうに言った。本当に西森さんの言う様に、自分の目で見えた守谷先生を信じて欲しい。だけど、悲しいかな人は、噂に惑わされ易いものだから……

「そっか……そうだよ。千裕ちゃん、私も自分の目を信じるよ」

「うん。そうしてあげて。皆もこの噂、広めないようにしようね。誰かから聞いたなら、今の守谷先生を信じた方がいいって、話してあ

げて欲しいの」

西森さんの真剣な顔に、その机の所に座っていたお母さん達も、同じような表情で頷いたのだった。

## #16：役員活動（前書き）

お待たせしました。

サブタイトルをいいのが思いつかなくて……

なんだか恋愛小説らしくないサブタイトルですいません。

## #16：役員活動

どうしてだか、小学校へ来ると、必ずどこかで彼の噂を聞く羽目になる。それは西森さんという事が多いせいなのだけど……聞きたくなくても、彼の名を耳にすれば、無意識にそちらに耳を傾けている自分を自覚しては、舌打ちしたくなる。

それでも、彼の悪い噂を耳にすると、嫌な気持ちになって、心の中で密かに弁護している私もいたりして……その内、その弁護が口から出てしまいうんじやないかと、密かに恐れもする。

だから、今日のように、以前聞いた彼の悪い噂が、密やかに広まり、やがて彼を窮地に陥れるんじゃないかと、恐ろしい予感に胸が震えてしまうのだ。

彼の傍で、あこがれの職業への夢を語る燃える瞳を見つめていたからこそ、今彼が掴みとったこの現実を、悪い噂などで手放す事の無い様……今の私には密かに祈るしかないのだけれど……。

そんな風にすこしナーバスな心境で始まった広報の会議だけれど、PTA新聞作りと言う初めての事に興味をひかれ、いつの間にか噂話の事は忘れていた。

PTA新聞は学期ごとの年3回発行する事になっていて、B4サイズの4ページと言う作りだ。メンバーが広報委員長、副委員長を含め20人ほどいるので、2回の会議でだいたい仕上げる予定になっているらしい。1回目の会議は、企画、その企画に合わせて先生や児童への記事依頼、行事等での取材の割り振り等。2回目の会議までに、取材担当者が各学年ごとの行事や運動会等の学校行事で写真撮影や説明などのメモを取って記事にまとめておく。そして、2回目の会議では、集まった写真やイラストを選び、記事の入力して見出しを考え、レイアウト用紙の上でレイアウトした後、チェックして、後は印刷会社へ持ち込むという流れだ。

メンバーを昼間作業するグループと夜作業をするグループに分ける事となり、それぞれ希望する方へ別れる事となった。

「篠崎さん、私も夜の部にするよ」

西森さんが、そう言ったので、私は驚いた。

「え？ 西森さんは昼間でも出られるんじゃないですか？」

「広報へ誘ったのは私だし、夜の部も面白そうだし……」

夜の部の何が面白いのか分からなかったけれど、私の為に夜の部にしてくれると思うと、申し訳なかった。

「でも、子供達はどうするんですか？」

「会議がある日は、パパに早く帰って来てもらうから……ダメな時は、パパの両親が近くにいます……」

「いいんですか？ 私も西森さんが一緒の方が心強いけれど……」

「篠崎さん、拓都君を連れて来るんでしょ？ ウチの翔也も連れてこようか？ 遊び相手に……」

「あ、その事なら、大丈夫になったんですよ。お隣のおばさんが、夜会議のある日は、拓都を預かってくれる事になったんです」

ずっと親しくしていて、母や姉夫婦が亡くなった時に親戚の様にお世話になったお隣のおばさん。おばさんの家は、子供達も結婚して他県で暮らしているので、夫婦二人きりで、隣りに住む私と拓都を娘と孫の様に可愛がってくれます。私も母を早くに亡くしている上、頼る人がいないので、甘えさせてもらっているのだ。

いつも夕食のおかずを持って来てくれたり、一緒に夕食を食べよ

うと招いてくれたりと、実家へ帰って来てから、親しく付き合っている。その上、私がどうしても午後7時までには帰れそうにない時は、拓都のお迎えをしてもらう事もお願ひしているし、自宅の鍵も預かってもらっている。本当に何から何までお世話になりっぱなしなので、何かお礼をと思って母の日に鉢植えのカーネーションとおばさんの好きな和菓子をプレゼントしたが、おばさんはそんな気を使う必要はないと、自分達がしたくてしてるんだから甘えてもらえると嬉しいのだと言ってくれる。

先日、おばさんが「旬の活きの良いカツオを1本頂いたから、夕食を食べにおいで」と誘ってくれた。その時に、役員の話をして、夜の会議に拓都を連れて行く事をポロリと言ってしまった。だから、おばさんが心配して、拓都を預かると言ってくれたのだった。

その後、昼の部と夜の部に別れて話し合いを始めた。4ページの新聞を昼・夜の部それぞれ2ページづつ担当するのだが、前後の1と4ページを夜の部が、中の見開き2と3ページを昼の部が受け持つ事になった。内容は毎年定番のテーマがある程度決まっているので、それに合わせて取材をし、写真・記事・イラストを用意するのだ。

1学期のPTA新聞の1ページ目の内容は、新年度の校長先生の挨拶文とPTA会長の挨拶文、新一年生のクラス写真とそれぞれの担任のコメント。2・3ページ目は、先生の紹介と1学期の各学年の行事の様子。4ページ目の内容は、企画物と各委員の新会長のコメントだった。

今日の会議が始まるまで一緒にお喋りしていた他のお母さん達は、みんな昼の部に行ってしまう、西森さんが夜の部にしてくれて、内心ホツとした。夜の部は広報委員長を筆頭に8名のメンバーと広報担当の先生2人が昼と夜それぞれ一人づつ付いてくれる事となった。1年生の子を持つ親は、私と西森さんだけだったので、1ページ

目に掲載する1年の担任のコメントの依頼、回収を任された。依頼するコメントのテーマと文字数を示し、原稿用紙を封筒に入れて、後で各クラスの担任に渡し、回収は次回の学級役員会議の時に言う事にした。

印刷会社には、記事は全てデータの形で渡すので、後から書いてもらったコメントを、データ入力しなければいけない。依頼人から提出された手書きの記事を、表現が適切でない所とか、誤字脱字等の見直し、訂正を行った後、入力作業をする。

私は、最初から先生達にテキストデータの形で提出してもらったら、見直し訂正の修正だけで済み、楽なものにと、記事依頼の作業をしながら思っていた。しかし、これが今までの広報のやり方で、今年小学校に入ったばかりの新米父兄には、提案する勇氣はとても無かった。

4ページ目の、企画物について話し合いが行われた。普段学校へ余り来る事が無く、学校の様子が分からない保護者に、学校のいろいろな取り組みや、その様子を知らせようと言うテーマになった。その具体的な内容として、4年生以上が加入する必須クラブの紹介や学校でのバリアフリーやエコ活動の取り組み等色々な案が出たので、2学期や3学期の企画としても使う事となった。1学期はまず、必須クラブの紹介と決まり、他のそれぞれの記事と共に担当を決め、今日できる作業を進めて行く。

私にとって初めての事はばかりだったけれど、西森さんと言う経験者がいてくれたお陰で、割合スムーズに作業を終えられた。今回は6月28日で、夜の部は午後7時に図書室へ集合と言う事になった。解散した後、西森さんと共に1年の担任へのコメント依頼の手紙を渡すため、職員室を尋ねた。

職員室の1年生の担任の机が並んでいる辺りを見ると、2組と5組の先生が座っていた。近づいて、広報からの依頼の説明をすると、



快く引き受けてくれ、席を外している他の先生の分も渡してもらおうようお願いをして、学校を後にした。

学童へ拓都を迎えに行った後、一緒に買物をして帰宅すると、もう5時半になっていた。けれど、いつもの事を考えれば、まだまだ早い時間で、学童で宿題を済ませて来た拓都は、楽しそうにテレビのアニメを見ている。宿題を済ませたとと言っても、親への宿題でもある音読はまだなのだけど……。

そして、私はまだ干してあった洗濯物を取り入れ、夕食の用意を始めた。

……今日は、一度も会えなかった。小学校へ行ったのに……

……あ、私、何考えてるのよ。

情けない。忘れるんだと、リセットするんだと決意したのは、誰だったの？

私は呆然と蛇口から溢れ出る水流を見つめていた。

「ママ、お鍋から水が溢れてるよ」

拓都の声に、私は慌ててシングルレバーを下げた。「拓都、ありがとう」ニッコリ笑顔で拓都を見れば、さっきまで水が溢れていた鍋を見つめて「ママ、お水もつたいないよ」と一言。私はますます情けなくなつたのだった。

\*\*\*\*\*

6月、太陽はもう夏の顔をして、プールには子供たちの明るい声が聞こえ始めた。

まだ泳ぐ事の出来ない拓都でも、水遊びは大好きで、プールの授業を楽しみにしていた。

「ママ、今日はね、お水の中に潜ったんだよ」

拓都がそんな報告をしてきたのは、2回目のプールの授業があった日だった。

「わー、拓都、凄いね!」

私は心から感嘆した。この間まで、お風呂で頭を洗っていた時に、顔に水が掛かるだけで、嫌がっていたのに……確かに今は、ゴーグルを付けてもいい事になっているから、水の中に潜るのは容易いのかも知れない。それでも拓都のちよつとした成長も、嬉しくなってしまう。

「それでね、守谷先生がプールにおはじきをまいてね、それをみんな潜って取っこしたんだ。すつごく面白かったよ。それからね、守谷先生、泳ぐのとっても上手だった。スイスイってすぐにプールの向こうまで、泳いじゃうんだよ。すごいよね」

拓都が嬉しそうに担任の事を、いつものように自慢気に話す。それを聞いて私は心の中で小さく溜息を吐いた。拓都に言われなかった、彼が泳ぎが上手い事は、よく知っているのだ。

また蘇<sup>よみがえ</sup>りそうになる記憶に蓋をすると、私は「よかったね」と苦笑した。

6月15日、いつの間にか梅雨が始まり、拓都はシトシト雨のせいでプールができないとふくれっ面だ。

「今日は役員会議があるから、小学校へ行くよ」

私がそう言うと、雲の切れ間から太陽が覗いた様に、拓都の表情

はパツと明るくなった。

「ママ、学校へ来るの？」

「うん、行くけど、丁度拓都が学童にいる頃だけだね」

「そっか……じゃあ、僕の朝顔見て来て」

この間から授業で朝顔の種まきをして、芽が出て、大きくなって来たと話していたばかりだった拓都が、目をキラキラさせて言った。

「わかった。よく観察して来るね」

そう答えると、拓都はまた嬉しそうに笑った。

前回の学級役員会議同様、私は3時半に早退し、小学校へ向かった。今回の会議の場所は、1年1組の教室だった。もうすでに西森さんは来ていて、「篠崎さん、お疲れ」といつもの挨拶をしてくれる。他の役員さんたちにも会釈をし、西森さんの傍まで行くと、私は拓都に朝顔を見て来るよう言われた話をした。西森さんも「翔也も、毎日、朝顔の様子を話してくれるよ。後で見てこようか？」と笑って誘ってくれた。

そうしている内に、担任達が入って来た。一ヶ月以上ぶりに見た担任は、もう夏服で、半袖のポロシャツと綿パンをはいていた。季節の移り変わるのを感じながら、私は「こんにちは」と挨拶をした。今回は、クラスごとに意見を出し合って、後で全体の意見をまとめる事となった。それぞれの担任とクラス役員2名が、机を寄せて話し合う事になった。学級懇談の時と同じように、3つの机を寄せて座ると、担任がUSBメモリーを西森さんに差し出した。

「これ、広報で頼まれていたコメントです。どうせ後で入力すると思っただので、他の先生の分も一緒にこの中に入っています。メモリは後で返してもらえればいいから」  
え？ 私が思っても言いだせなかった事、彼は気付いてしてくれたのだ。

「わー、守谷先生、賢い！ ありがとうございます」  
西森さんは、嬉しそうにUSBメモリを受け取った。

「私もデータで提出してもらえれば助かると思っていたんですが、今までの広報のやり方があると思って、言いだせなくて……助かります。ありがとうございます」

私は嬉しくなって、思わず正直に自分の気持ちを言ってしまった。

「後からそう思っていたと言うぐらいなら、提案すればよかったのに」

担任は私の方へ視線を向けると、冷たくそう言った。その視線に『君ならそのぐらいできるはずだ』と言われた様な気がした。

大学までの私なら、強気で負けず嫌いだっただから、きつと言えただろう。大学の時のサークルの会長をしていた時も、大学祭の執行部相手に自分の意見をはつきりと言った。特に相手が男性だと、余計に燃えて、相手を負かしてやるうなんて思うぐらいだった。

でも、今の私は……母親達の中にいて、同化する事も出来ず、かといって孤立するのも怖い。出産を経験している母親達に尊敬と畏怖の念を持ち、出産経験も無い私が母親などと言っている事に負い目を感じて、無意識に目立たずおとなしくしていようとしてしまう。

「そうですね。すみませんでした」  
私は居た堪れない思いで、謝った。

「やだ」。篠崎さん、そんなに真剣にならなくてもいいから。謝る事じゃないでしょ?」

落ち込みそうな私を救いあげる様に、明るく声をかけてくれる西森さん。心の中でありがとうとお礼を言うと、西森さんに笑顔を見せて頷いた。

その時、入口から誰かが入って来る足音がしたと思うと「守谷先輩」と言う声が聞こえた。その部屋にいた全員がそちらを向いた。入って来たのは、若い女性だった。彼女は全員に注目されて、少し恥ずかしそうな、バツの悪い表情をしながら、こちらに向いて歩み寄って来る。

「安藤さん」

担任が、低い声で咎めるとが様に彼女の名を呼んだ。すると彼女は慌てた様に傍まで来ると頭をぺこりと下げた。

「すみません、守谷先生。見学させてもらってもいいですか?」

「井田先生の方は、もういいのか?」

「はい、もう今日はいいと言う事でしたので……」

「じゃあ、その辺にでも座って見学してて。あ、彼女は、教育実習生の安藤さんです」

担任は、彼女に指図すると、私達の方を向いて、彼女を紹介した。すると彼女は立ったまま、またぺこりと頭を下げると、ニコツと笑った。

「お邪魔してすみません。教育実習をさせてもらっている安藤です。守谷先生とは大学が同じで、サークルの先輩、後輩だったんです」

彼女がそう言った途端、私はドキリとした。

……サークルの先輩、後輩……彼女は今4年生だから、彼が4年の時に彼女が1年だったんだ……

「へえ、何のサークルだったの？」

西森さんの好奇心に火が着いたようだった。守谷先生がらみの話だから、余計なのかもしれない。

「はい、折り紙サークルです」

ああ……やっぱり……

「ええ？ 折り紙？ なんだか守谷先生らしくない！」

「らしくないって、どう言う事ですか？ 西森さん」  
担任も現状を忘れて、思わず訊き返している。

「ねえ、篠崎さん。守谷先生と折り紙って、似あわないよね？」

西森さん、こっちに振らないで！

私は心の中で叫んだ。

「そんな事無いと思うけど……」

しどろもどろに答えたけれど、担任の顔は見れなかった。

「いや、守谷先生なら、テニスサークルとか、イベント企画サークルとか……もっと活動的な感じのサークルの方が似合うでしょう？」

だから、私に同意を求めないで！！ 西森さん。

私の心の叫びなど西森さんに届くはずも無く、同意を求める視線が痛い。

「守谷先輩は、とても真面目に折り紙に取り組んでいましたよ。折

り紙と言っても、巨大なガンダムを折り紙で作ったりとかしてたんですよ」

安藤さんは、守谷先生を援護する様に説明する。私は蘇よみがえりそうになる記憶を無理やり封印して、西森さん同様、驚いた顔をして見せた。

「安藤さん、もういいから。静かにできないなら、出て行きなさい」担任の少し怒った様な声に怯ひるんだ安藤さんは、「すみませんでした」と謝ると、傍の椅子に座った。

私たちが、給食試食会のアンケートの内容について話し合っていると、じっと見つめる視線を感じた。それは、安藤さんだった。彼女は丁度、私の正面になる辺りに座っているので、真っ直ぐに私を見つめている。私は思わず顔を上げて、彼女の方を見た。すると彼女は「あっ」と声を出した。

「もしかして……美緒さんじゃないですか？」

## #16：役員活動（後書き）

広報委員会での活動の内容は、あくまでもフィクションですので、おかしな点がありましても、突っ込まないでくださいね。



## #17：小さな嵐

「もしかして……美緒さんじゃないですか？」

え？ 誰？

私は、そう言う彼女が誰かわからず、啞然としたまま彼女を見つめていた。

「すみません。私、安藤香織の妹の詩織です。美緒さんですよね？」  
安藤香織……その名前に一気に記憶が蘇<sup>よみがえ</sup>った。高校の頃の友達。クラブの仲間だった彼女……彼女の家にもクラブの仲間達とよく遊びに行っただけ……

そう言えば、彼女の家へ遊びに行くと、小学生の妹がすぐに私達の中に入り込んで、一緒に遊んでいたっけ……あのときの小学生が、今日の前にいる彼女？

「えっ？ 香織の妹なの？ あの頃、小学生だった？」

私がそう聞き返した途端、彼女は破顔一笑した。

「そうです。うわ〜懐かしいです。美緒さんぜんぜん変わってないけど……え〜っと、7、8年振りですよね？」

「もう、そんなになるのねえ。そう言えば、あの後、引越したんじゃないかった？」

「そうです。父が転勤族でしたから……今はK県にいます。私は大卒でこちらへ戻ってきたんです。姉は短大を出て東京で就職しました」

そうだった。香織の父親は転勤の多い職場で、高校へ入る時に引

っ越してきて、卒業と同時に又引っ越したのだった。結局この町にいたのは3年間だけだったっけ……

「そう、香織は元気なの？ もう年賀状のやり取りしかしていないから……」

「元気ですよ。キャリアウーマンになるんだって、頑張ってます」  
安藤さんは嬉しそうに姉の近況を伝えてくれた。

「ねえ、ねえ、篠崎さん、お知り合いだったの？ 世間は狭いわねえ」

西森さんが突然口を挟んだけれど、ニコニコして、会話に自然に溶け込んだ。

「そうなのよ。もうビックリ。懐かしいわね……香織にもよろしく伝えてね」

私も笑顔で西森さんに答えた後、安藤さんにもニコリと笑った。

「はい。姉も驚くと思います。……そう言えば、美緒さんもM大でしたよね？ 姉がそう言っていたのを思い出しました。私の大先輩ですよ。そうしたら、守谷先輩の先輩にもなる訳だ……あっ、もしかしたら守谷先輩と同じ時期に大学にいた事になりますよね？ 守谷先輩は目立っていたから、ご存知でした？」

私はここで初めて、とても危険な方向へ話が向いている事に気づいた。屈託の無い笑顔で話す安藤さんには、何の邪心も無い。それでも私の心が危険レベルを超えたと警告していた。

「いえ、私は経済学部だったから……」

差しさわりの無い返事をしながら、これ以上突っ込むなと心で願っていた。

「安藤さん、これ以上私語を続けるなら、本当に出て行ってもらおうよ」

担任が痺れを切らして、脅すように言う。

「すみません。懐かしくてつい……」

安藤さんは、担任の言葉に、一気にしぼんでしまい、素直に謝った。私も同じように私語をしていたので「すみませんでした」と謝った。そして、話し合いを続けようとした矢先、又安藤さんが「あれ？」と声を出した。どうにも彼女は、学習能力が無いようだ……

「どうして美緒さんが、ここにいるの？」

安藤さんは今更な質問をした。けれど、その疑問に一番気づいて欲しくなかった。

「そんなの、役員だからに決まってるでしょう？ 何の見学をするつもりだったの？」

私が答える間も無く、西森さんが合いの手を入れるように、さらにと答えると、クスクス笑いながら突っ込みまで入れている。しかし、安藤さんは、西森さんの突っ込まれた事さえ気づかずに、驚いた顔をした。

「ええっ？ 美緒さん、お子さんいるんですか？」

ああ……気付いて欲しくなかった……

「ええ、まあ……」

私はこれ以上訊かれたくなくて、訊くなオーラを出しながら、短く答えた。

「安藤さん、何度言ったらわかるんだ？」

担任は、少しキレ気味に睨にらんでいる。

「すみません。すみません。もう何も言いません」

安藤さんはぺこぺこ頭を下げると、声が出ない様に手で口を覆った。その情けない表情と仕草に、私はホッと息を吐いた。

安藤さんは、どう思っただろう？ 私の年齢を知っていて、子供の年齢から考えたら、大学生の時に子供を産んだ事になる。もうこれ以上、何も訊かないで欲しい。担任と西森さんの前では……

その後すぐ、他の教育実習生が安藤さんを呼びに来た。安藤さんの指導教諭が呼んでいたらしい……彼女は、私達に頭を下げると「失礼しました」と教室から出て行った。その後ろ姿を見送ると、私達三人は、大きく溜息を吐いた。あまりにタイミングが合ったので、西森さんがクスクスと笑いだした。

「なんだか、台風みたいだったわね。……それにしても、篠崎さんと守谷先生が同じ大学出身だったなんて……こちらも世間が狭いわね」

西森さんの好奇心のスイッチがまた入ってしまったのだろうか……そのスイッチは、大きな爆弾のスイッチでもあるのに……

「それは、M大が地元の大学だからですよ。この小学校にもM大出身の先生は、多いですよ」

担任は、何でも無い事のように説明した。そう、偶然でも何でもない。この地元が狭い世間と言うだけの話だから……。それで西森さんは納得できたのか、それ以上その事に触れる事は無く、私達は話し合いを再開させた。

「それじゃあ、アンケートの質問内容は、味・量・メニュー内容・

盛り付けについての評価と、家で子供と給食の話をするか？ その時、どんな話をするか？ と言う質問と、それから、子供の好きな食べ物、嫌いな食べ物。……この3点でいいですか？」

担任は、白紙の用紙に書きつけると、私達に確認した。そしてその後、他のクラスの質問内容と合わせて、アンケートの質問事項を決めて行った。

「給食試食会の当日は、最初と最後に学級役員さんに挨拶をしてもらいますので、言う事を考えておいてください。それから、試食会の進行やアンケートの説明等も学級役員さんが主になってしてもらいますので、よろしくお願いします。試食会が終わった後、アンケートを集めて、会議室でクラスごとに集計してもらいます。学級役員さんには申し訳ないけど、試食会の後、残っていてください」  
1年1組の担任の先生が、最後に皆に向かってそう言った。

ええっ？ 挨拶？ 進行？ 説明？ 学級役員ってそこまでしないといけないの？

私は驚いて西森さんのほうを見ると、上の子ですでに学級役員を経験している彼女は、当たり前のように聞いている。

「西森さん、挨拶や進行係も役員の仕事なの？」

私は小さな声で西森さんに訊いてみた。すると彼女は、ニコツと笑った。

「そうよ、先生は子供達を見なきゃならないから、保護者への対応は役員の仕事なのよ。篠崎さんは、最初の挨拶と終わりの挨拶のどちらがいい？」

ええっ？ そんなに気軽に言わないで……

みんなの前に立って挨拶するって言う事だよ……

「後の方がいいかも……でも、何を言えばいいか分からないから、

教えてくださいね」

西森さんはフツツと笑うと、「了解」と一言言った。

なんだか今の私って、気の弱い何も一人でできない人間みたいだ。中・高と学級委員なんかもして来たし、人前で話す事も、それなりにできるつもりだった。でも、今の私は……本物の母親達の前に出る事に気後れしてしまうのか、やはり、担任の目の前と言う事が、私を怯<sup>ひる</sup>ませるのか……

解散後、西森さんと給食試食会の打ち合わせをした。挨拶で言うべき事、全体の流れ、アンケートの説明はどちらがするのか等、話し合っていくうちに、だんだんと学級役員のするべき事が見えて来た。それにしても、やっぱり役員って大変なのだ実感する。いくら守谷先生のクラスでも、役員になりたがる人がいないはずだ……

「じゃあ、来週の給食試食会は、30分早めに集合しましょう。直前にもう一度打ち合わせしたいし……」

「そうですね。先輩、よろしくお願いします」

私は少しふざけて返事をした。それは別段他意は無く、いつもの明るい西森さんの真似を試みただけだった。だから彼女は、フツツと笑うと「任せなさい」と胸を叩いた。そして、ふと何かを思い出した様な顔になった。

「先輩と言えば……さっき、教生（教育実習生）の彼女が、篠崎さんは守谷先生の先輩で、同じ時期に大学にいた事があるって言うってでしょう？ それだと……ねえ、篠崎さんって何歳なの？」

私の「先輩」と言った言葉が、西森さんの好奇心のスイッチを入れたのだ。

「えっ？」

そう言ったきり、私は言葉を続ける事ができなかった。頭の中は、どうしよう、どうしようと騒ぎまわるだけで、冷静になれない。

「だから、守谷先生と同じ時期にいたとしたら、最大で3つ違いだよな？ 確か守谷先生は今年3年目で、24歳ぐらいでしょう？ だったら……篠崎さんは27歳ぐらい？」

頭の中で危険レベルが跳ね上がった。そして、西森さんに真実を言うのか、言わないのか……決断できないまま、私の表情は強張るばかりだった。そんな私の様子に気付いたのか、西森さんの好奇心旺盛な表情が、すっと萎んだ。

「ごめん。訳ありだった？ プライバシーだよな。本当にごめんね。篠崎さんが別に何歳でもかまわないのよ。守谷先生がらみだったから、ちよつと気になっただけで……」

西森さんは、自分の好奇心で訊いてしまった事を謝った。

そんな、謝ってもらおう事じゃないのに……

自分の年齢さえ言えないなんて……

「こつちこそごめんなさい。変に気を使わせちゃって……あ、あの私、今26歳なの……」

そう言った途端、西森さんは驚いた顔をした。やっぱり、か……。今26歳なら、拓都は19歳で産んだ事になって……19歳はまだ大学生で……。

誰だってそのぐらいは想像つく……。

でも、こんなに親しくしてくれる西森さんに、何もかも黙り通すなんて……したくない。

「もしかして、学生結婚？」

ああ、また西森さんの好奇心をくすぐっただけだったのかもしれない

ない。

「ごめんなさい。今はこれ以上言えない。でも、いつか、西森さんに話したい。話せるようになるまで、待って欲しいの」

「そっか……わかった。篠崎さん、若いのに……苦労してるんだね」  
西森さん……いったいどんな想像してるんだか……

「別に、苦労なんか……本当にごめんなさい」

「そんな顔しない！ 私の方が訊いて欲しくない事を訊いたんだから……まあ、何か困った事があつたら、いつでも言つてね。私にできる事なら、協力するから……」

西森さんはそう言うのとニコツと笑つた。彼女はいつも相手の気持ちを酌んでくれる。いい人と出会えたと、私は心から思つた。

「ありがとう。また、いろいろとお世話になると思うから、よろしくお願いします。……ところで、西森さんは何歳なんですか？」

「え？ 私？ フッフ……何歳に見える？」

「ええっ？ 私、人の年齢当てるの苦手なんです……30歳ぐらいですか？」

子供の年齢から考えて、恐る恐る言つてみる。西森さんの上の子は確か9歳ぐらいだったはず……

「うふふふ……篠崎さんは、いい人ねえ」 私は、33歳よ。篠崎さんより7歳も上なのよ」

7歳年上と言つても驚かない。私の今一番の親友である由香里さんは、10歳も上だから……



「なんだか社会に出ると年齢差ってあまり感じないですね。学生の頃なら絶対出会わないのに……」

「本当にそうだよ。私が高三の時、篠崎さん中一だよ……そう考えると、年齢差を感じるなあ」

西森さんのその言い方に、私は思わず笑ってしまった。

良かった……話題が明るくなって……

「そう言えば……篠崎さんって、美緒って名前なんだね。可愛い名前だねえ〜 これから美緒ちゃんって呼んでもいい？」

西森さんが、首を傾げて笑った。彼女は一步私に近づいた。

3年前から自分の現状を詮索されたり同情されるのが嫌で、周りに壁を作つて来たと思う。それでも、一人で拓都を抱えての生活は、破綻をきたす寸前で、人の優しさに頼る事も覚えた。だけど、実家へ帰つてから、いいえ、彼に再会してから、また壁を高く築いている。人に知られるのが怖い秘密をたくさん抱えて、どこまで周りの人たちに心を開いていいか分からない。

西森さんは、信じていいよね？ 誰ともなしに問いかけていた。

「じゃあ、私も千裕さんって呼びますね」

そう言つと、西森さんは嬉しそうに笑った。そして「私にとって、一番若い友達だわ」と言つて、また楽しそうに笑った。

\*\*\*\*\*

「ママ、朝顔を観察してこなかったの？」

すいません……すっかり忘れていました。いろいろあり過ぎたので……

「ごめんね……22日に給食試食会があつて、また学校へ行くから、その時は絶対に見るからね！」

ああ、今度こそ絶対に……心に言い聞かせる。

「うん。絶対だよ！」

そう約束したのに、その日また思わぬ出来事で、朝顔の事をすっぽりと忘れてしまうなんて、この時には想像もしなかった。

## #18：危うい秘密

「美緒、結婚したんだって？」

いきなりそんな質問をぶつけてきたのは、先日小さな嵐のごとく、私の過去を引つ掻き回してくれた教育実習生の姉である安藤香織だ。あんどうかがおり電話なんて何年ぶりだろうと思うほど、疎遠になっていた高校時代の友人が、連絡を取り合っていないかった時間の長さなど関係なく、いきなり高校時代の延長のまま、不躰に質問をぶつけて来たのだ。それもこれも、彼の後輩だと言うあの教生が、私に気づいたのが発端で……

「なによ、いきなり……電話なんて何年ぶりだと思ってるの？ 香織の方こそどうなのよ？」

私は話題をすり替えるべく、話をはぐらかした。本当に何年ぶりだろう？ 3年前までは、1年に数回は電話かメールのやり取りをしていた。お互いの近況を伝える程度だったけれど……

でも、だんだんと数は減り、3年前に携帯番号とアドレスを変えたと言う連絡をした時に返事が来たぐらいで、後は年賀状のみの関係になってしまったのだった。

彼女の実家が引越した事もあって、県外の短大へ進んだ彼女が、この町へ帰ってくる事もなかったから、高校卒業後は一度も会っていなかった。それでも、凝縮したような3年間の友人関係は、何年経っても一度ひとたび繋がれば、二人の間にあった時間なんてすぐに飛び越えてしまう。

「え？ 私？ 恋人も結婚相手も無く、仕事を生きがいにしていますよ」

なんだか棒読みのような言い方に、私はクスリと笑いを漏らした。

「私の事より美緒の事よ！ あんた、小学校1年生の子供がいるっ  
ていうじゃないの！！ 私、聞いてないからね！！！」

「…… やっぱり、はぐらかされてくれないか……  
どう言えば納得してくれる？ 何もかも正直に話してしまう事が、  
一番楽かもしれない……。」

ハッキリ言っつて私は、駆け引きも、策を講ずる事も、上手く言い  
訳をするのも下手だ。絶対どこかでボロがでる。

遠く離れた街にいる香織に、真実を話しても誰かに漏れる事は無  
いだらう。それに、誰にも言わないでと言えば、いくらお喋りな香  
織だって、その点は信頼できると信じてる。

でも問題は、今現在、あの担任の傍にいる香織の妹の方なのだ……  
…香織がこんな事を訊いて来たという事は、妹がそう伝えた訳で……  
…姉に似て妹も好奇心が旺盛で、お喋りだらうだから、私の事を担  
任に訊いたり、喋っているかもしれない……香織に真実を伝えて、  
妹にはこれ以上詮索しない様に、私の事を誰にも言わない様につて、  
釘をさしてもらおうか……いや、妹には真実を言わない方がいい。  
どこでどう漏れるか分からないのだから、少しでもばれる危険は冒  
したくない。香織の妹が担任と知り合いだから余計に……。

「あのね、3年前に姉夫婦が交通事故で亡くなったの……。」

「えっ？ あの看護師をしてた、可愛いお姉さんが亡くなったの？  
確か、結婚して子供が生まれたって、前に言ってたよね？」

「そう、姉は一人息子を産んで死んだのよ。」

「えっ……美緒、まさか……まさか、そのお姉さんの子供を？」

「そう、残された姉の子供の面倒を見てるの。でもね、今は親子として暮らしてるの。学校にも周りの人にも本当の事は言っていないの。隣のおばさんは知っているけど、近所の人達も気付いてるかも知れないけど……でも、親子だと言う事で通してるのよ」

「美緒……お、お母さんはどうしたの？ ……あつ……そう言えば、亡くなつたって……美緒……ごめん。余計な詮索して……」

「ううん。知らなかったんだから、仕方ないよ。それはいいの。それより、香織の妹さんに言つて欲しいの」

「詩織に？」

「そう、私が小学校の保護者だったから、とても驚いていたの。そりゃあ、あんな大きな子供がいたら、驚くよね。お姉さんと同級生だから、年も分かつてるし……だから、これ以上詮索はしないで欲しいって釘をさして欲しいのよ。でも、姉の子供だと言う事は言わないで欲しいの。学校にはこのまま親子だと押し通すつもりだから、どこからバレるか分からないから……それに、詩織ちゃんは、ウチの担任と知り合いだから、真実を知っているとどこで迂闊うかつに漏れしてしまうか分からないから……ごめんね、いろいろお願いして……」

「何言ってるの！ 詩織が迷惑をかけたんじゃないの？ こちらこそごめんね。詩織ったら、すごく興奮して電話をかけて来たのよ。詩織はね、美緒があこれのお姉さんだったの……私みたいにかさつで優しくない姉より、見かけおとなしそうで優しそうに見える美緒に可愛がつてもらったから、憧れていたんだって……そんなあこれのお姉さんが、学生結婚したかもしれない、十代で子供を産んだかも知れないって、とても興奮してたのよ。彼女的美緒に対する

イメージを覆す様な事だったみたいね。詩織も美緒の本性を知ったら、もっと驚くだろうに……ねっ」

「ちよつと、聞き捨てならない事、言っただわね。私の本性ですって？ 見たままでしょう？」

「いやいや、美緒はその見かけで得してるよ。今なら、癒し系？」

「もう8年も会ってないのに、今の私を知らないでしょう？ とつても大人の素敵な女性になったんだから……」

私は、暗い話題が明るい方向へ向いた事に、安心した。香織とはいつも笑いあつて過ごしたから、こんな暗い話は似合わない。

「はい、はい、そう言う事にしておいてあげるわよ。でもね、詩織が美緒の事、高校の頃と全然変わっていなかったって言うていたわよ。若く見えて良かったじゃない。フフフ……そう言えば、美緒の子供の担任って、めちゃくちゃイケメンなんだった？ 詩織がうるさいのよ。先輩、先輩って……」

またその事か……彼はいつまでたつてもその手の話が付きまとうのは、仕方が無い事なのか……

「まあ、そうね。お母さん達の中にはファンクラブまであるらしいから……」

「ひえ〜ファンクラブ？ お母さん達が？ 中学や高校なら生徒が先生に憧れるって言うのは聞くけど、小学校だとお母さん達なんだ……」

「まあね。……それより、詩織ちゃんに感謝しなきゃね。香織と何年振りかに電話で話せたんだもの……詩織ちゃんにお礼を言ってお

いてね」

「わかった。でも、詩織にはよく釘をさしておく。人のプライバシーを詮索するなってね」

「うん。ありがとう。お願いね」

私は電話を切った後で、自分がいかに危うい所にいるか、思い知った気がする。守りたい人と守りたい秘密……そのどれをも、私は守り通せるのだろうか……。

\*\*\*\*\*

6月22日水曜日、給食試食会当日。

今日は1日休みを取ったので、洗濯や掃除を済ませ、午前11時半に西森さんと待ち合わせた。そして、今日の全体の流れと挨拶や説明のために言う言葉の確認をした。そして、まだ子供たちが授業中のため、保護者は体育館に集まってもらった事になっていた。そのため、受付をする事になった。他のクラスの学級役員と共に、体育館の入り口のところ、やって来た保護者に名簿にチェックしてもらい、今日の給食のメニューを書いたプリントとアンケート用紙を渡していく。

今日のメニューは、米粉パン、白身魚のフライタルソース添え、野菜いっぱいスープ、牛乳だ。

「なんと言っても、今日のメニューのメインは米粉パンでしょう？  
今流行りだし……」

西森さんがメニューを見ながら言っている。

「米粉パンって、食べた事ないけど……普通のパンと違うんですか

？」

「私も食べた事がないから、楽しみにしてたのよ。何でも、モチモチしているらしいわよ」

西森さんが嬉しそうに笑った。こんな時、彼女の表情はとても正直だ。

「米粉パン、美味しいわよ。でも私は、揚げパンがよかったな」  
そう言ったのは、隣のクラスの学級役員だった。それから、他のクラスの学級役員達も加わり、小学生の頃の給食の思い出話で盛り上がった。

保護者達が揃った所で、体育館の舞台下に収納された折り畳み椅子を、各自一つづつ持ってそれぞれの教室まで移動してもらった。教室の中では給食当番が給食の用意をしていた。

「ねえ、ねえ、守谷先生のエプロン姿、可愛い」

西森さんの言葉に、視線を担任に向けてみれば、エプロンを付けて給食の用意を手伝っていた。廊下からその様子を覗いて、私も頬が緩んだ。……彼のエプロン姿なんて、初めて見た。

給食の用意ができると、保護者達は自分の子供の机の横に折り畳み椅子を置いた。子供と一緒に同じ机で、親が給食を食べ、子供はお弁当を食べるためだ。全員が席に着くと、西森さんと私は皆の前に立ち、西森さんが挨拶をした。

「今日はお忙しい所、給食試食会に参加して頂き、ありがとうございます。日頃子供達が食べている給食を食べて、そのメニューや味、量や盛り付け等について確認して頂き、これからお家の方でも、今日の試食会を切っ掛けに、給食の話や食べ物の話など、食育に繋げて行って頂けたらと思います。食事の後、先程渡しましたアンケート



トにご協力頂きますよう、お願いします」

西森さんが話し終わると、私も一緒にペコリと頭を下げた。そして、和やかに食事の時間が始まった。

「ママ、給食美味<sup>おい</sup>しい？」

拓都が楽しそうに訊いた。私も拓都に微笑みかけると「美味しいよ。拓都はお弁当、美味しい？」と訊き返せば、「ママのお弁当も美味しいよ」と嬉しそうに笑った。

米粉パンも話に聞いていたように美味しくくて、こんな機会でもなかったら、米粉パンを食べる事は無かったと思うと、嬉しかった。他のメニューも美味しくくて、毎日こんな給食を食べている今の子供たちが、とても羨ましかった。

「ねえ、拓都は給食で何が好き？」

まだ、入学してから3ヶ月弱しか経っていないけれど、お気に入りメニューはあるのだろうか？

「あのね、カレーが一番好き。それからね、海藻サラダも好き」

カレーは拓都の大好きなメニューだが、やはり給食でもカレーなのか……その上、海藻サラダ？

家では食べた事の無い、自分の頃には無かったメニューの海藻サラダと言う、思いがけないメニューが出て来て、驚いた。

海藻サラダって、あれだよね……ワカメとか、名前も知らない赤っぽいやら、緑のやら、ピラピラヌルヌルしたカラフルな海藻をドレッシングであえたサラダ。

「へえ〜海藻サラダが好きなんだ……」

思わずそう呟くと、拓都は嬉しそうに笑って、「うん」と思いきり頷いた。

そろそろ皆が食べ終えた頃、もう一度、西森さんと私は皆の前に立った。そして、先に担任から聞いておいた、給食の食器の後片づけの仕方と、アンケートの記入の仕方を説明した。

「もう一つ、言うのを忘れていましたが、牛乳パックは開いて、廊下にしたバケツの水で洗って、雑巾で簡単に拭いて、カゴへ入れて下さい。分からない人は、お子さんに聞いてください」

先程まで座って給食を食べていた担任が、急に立ち上がった追加説明をした。その話を聞いて、そんな事をしているのかと、私は学校が地道なエコ活動に取り組んでいる事に気づいたのだった。

その後、拓都に教えてもらいながら、給食の食器を片付け、牛乳パックを処理した。そして、皆がアンケートを書いている頃、最後の挨拶をするために西森さんと共に前に立った。

「今日は、お忙しい中、給食試食会にご参加頂き、ありがとうございます。今日の試食会を切っ掛けに、給食や学校の事など何でもいいので、お子さんとの会話が增やして頂ければと思います。また、今回の試食会を通じて、給食や学校としての取り組みなどにも興味を持って頂けたら、とても嬉しいです。それでは、アンケートを提出して頂きましたら、椅子を体育館へ戻していただき、解散となります。本日はありがとうございます」

私は深々と頭を下げた。一番心配していたおしまいの挨拶も、嘸む事無く言えて、ホツとして、西森さんと目線でご苦労様と労った。

体育館へ椅子を戻し、西森さんと共にもう一度教室へ戻ろうとしていた時、同じクラスのお母さんから声をかけられた。

「篠崎さん、ちょっといいかな？ 話したい事があるんだけど……」  
初めて話をするその人は、今日同じクラスの中で見かけたなと思う程度で、私に何の話があるのか、全く見当がつかなかった。しかし、学級役員としての私に用があるのではなく、私個人に用があるようなので、西森さんに先に行ってもらおう事にした。

「千裕さん、先にアンケート用紙を持って会議室へ行っていてください」

前回から西森さんの事を千裕さんと呼ぶようになっていたが、まだ少し慣れていない。それよりも、今から会議室でアンケートの集計をする所だったので、後から追いかけてよと、先に行ってもらおう事にした。

「ごめんね、篠崎さん。無理を言って……」

私達は体育館の隅で立ったまま向かい合っていた。その人は申し訳なさそうな顔をして、謝って来たけれど、どんな用があると言うのだろうか？

「あの……篠崎さんって、美那ちゃんの妹さんよね？」

えっ？ お姉ちゃんの事、知ってるこの人は、誰？ まさか拓都の事も知ってるの？

私は、なんて答えようか迷いつつ、この人は分かっている、確認しているのだと思った。

「え、ええ……」

何とも情けない返事だったが、私は今どんな表情をしているのだろうか……

「あのね、私、柴田葉月しばたはづきと言っただけど、美那ちゃんとは同級生で、小学校と中学校が同じだったの」

お姉ちゃんの同級生……

この小学校の父兄に、お姉ちゃんの同級生がいたって不思議じゃないのに、どうして今までその事に気付かなかったのだろう……そうしたら、姉が子供を残して亡くなった事を知っている人がいたって不思議じゃない。そして、妹の私がその子の面倒を見ている事を知っている人がいる事だって、あり得る話なんだ……3年間、この地元の街を離れていたから、すっかり忘れていた。K市では、姉の事を知っている人なんていなかったから……

私の立ち位置も危ういけれど、それよりも、秘密そのものが危ういのだと言う事に、私は今頃になって気付いたのだった。

## #19：噂の予感（前書き）

お待たせしました。

なんだか、書いても書いても、自分の思った所へたどり着けなくて、あまりに長くなってきたので、途中で分ける事にして、

前半部分を先にアップする事にしました。

どうぞ、よろしく。

サブタイトル変更しました。

## #19：噂の予感

私と拓都が現在住む、両親の建てたこの家は、『虹ノ台ニュータウン』と言う分譲住宅団地の中にある。約20年前に、虹ヶ丘小学校の裏に広がる丘陵地に造成されたその住宅団地は、一丁目から五丁目まで5つ自治会に別れている。それぞれの自治会は、約10軒づつの『組』と言う組織が、1組から10組までの10の組織で成り立っており、約100軒で構成されている。したがって、5つの自治会の総軒数は、概ね500軒おおよそと言う大規模な住宅団地だった。

20年前のこの辺りは、T市郊外の田園風景の広がる農家集落だったらしい。しかし、この『虹ノ台ニュータウン』が出来てから、徐々に宅地化が進み、いつの間にか田園風景が住宅地へと変わって行った、そんな少しのんびりとした郊外の住宅地域が、虹ヶ丘小学校の校区だった。

約20年前に私がまだ小学校へ入る前の頃、私たち家族はこの新興住宅団地へと引っ越して来た。周りも同じような年頃の子どものいる若い家族ばかりで、昔からの地域に比べると、近所付き合いはずっと希薄なものだった。その頃は、この団地にも小学生が多く、私の同級生も同じ自治会に10人ぐらいいいたし、同じ組の中にも小学生は沢山いた。けれど現在、この住宅団地の第二世代と言える我が家のように、あの頃小学生だった子供たちが、大人になって、家庭を持って、自分の育った家に住むパターンは、実は少ない。お隣のおばさんの家のように、息子も娘も県外で家庭を持ったり、地元で働いていても、同居はせずに近隣で住宅を建てたりと、ご近所の小学生率は、自分の時のピーク時には考えられないくらい少なくなってしまうていた。

私の住む虹ノ台一丁目の5組は、現在、お隣のように子供たちが外へ出て夫婦二人の世帯や、まだ未婚の子供と同居している世帯、

最近結婚した息子夫婦と同居して赤ちゃんがいる世帯、そして、夫婦のうち片方が亡くなって遠くに住む息子のところへ身を寄せたため空き家になった家など、結局のところ小学生は拓都一人だった。

私が子供の頃は、同じ自治会内の同級生や年の近い子供達の家はだいたい分かってた。しかし、今は世代が違う事も有り、自治会内のどこにどのぐらいの小学生がいるのか何も知らない上に、自分が昔知っていた同年代の人達の内、どのぐらいの人がこの自治会に残っているのかも分からなかった。

考えてみれば、学生の頃は近所付き合いなんてしていなかったから、同じ組内の人とは挨拶を交わすぐらいで、なんとなく家と名前がわかってる程度だった。ましてや組外の人となると、子供の頃の記憶を元に、この辺に同級生の家があったと言うぐらいの認識で就職してから4年間この街を離れていたた事と、もともと希薄な近所付き合いのせいで、私と拓都の事が人々の噂に上るなんて考えもしなかったのだ。

姉の同級生だと言った柴田葉月さんは、旧姓を山本さんと言うらしく、実家は同じ自治会らしい。そう言えば、姉の小学校の頃仲良くしていた同級生に、葉月ちゃんと言う子がいたなと思いついた。家は割合近くて、ウチの家にもよく遊びに来ていたような気がする。

「美那ちゃんがあんなに早く亡くなるなんて、本当にお気の毒で…私お葬式にもいかせて頂いたんですよ。まだ、小さな男の子を残して…さぞ無念だったでしょうね」

この人は、こんな事を言うために、私を呼びとめたのだろうか？私を見て、姉を思い出したから…ただそれだけ？

「その節は、参列頂き、ありがとうございました。子供の事は、姉も義兄も辛かったと思います」

私はどうリアクションしていいのか迷いながら、彼女の言葉をそ

のまま受けて、言葉を返した。

「あの……実家で聞いたんだけど、美那ちゃんの子供を、妹さんが面倒を見ているって……お仕事の関係で遠くの街に行っていたけれど、この春から実家へ戻って来て小学校へ入ったって……私、まだ美那ちゃんがお元気だった頃、実家へ帰った時に、子供を連れて遊びに行った事があるの。その時に、小学校は同級生だねって話をしていたのよ」

私は頭が真っ白になった。ただ、少し笑みを浮かべながら、親しげに話す彼女の口元を見つめていた。

この人は、この事が私にとって大切な秘密なのだという事を知らないだけ……何も悪気が無いのよ。そう思うのに、なぜだか秘密を暴かれている様な気になった。

怖い……ここまで積み上げて来たものが崩れて行く様な……恐怖。

「あの……その事を、誰かに言いましたか？」

「えっ？」

「ウチの子が姉の子供だと言う事を……誰かに話しましたか？」

「あ、あの……美那ちゃんが亡くなった時、同級生達と残された子供はどうなるんだろうって話してて、妹さんもまだ若いし、ご主人の方のご両親が引き取られるのになって話していたんだけど……あの後、実家の母から妹さんが働いている街へ面倒をみるために連れて行っただけで聞いて、同級生の誰かには話したと思う。でも、今回こちらへ帰って来たって言うのは、まだ私も聞いたばかりで……」

私が真剣な言い方で訊いたせい、彼女はちょっと怯おそんで、言い訳の様に話した。



私は今、どんな表情をしているのだろうか？ 彼女を怯ませる様な顔をしていたんだらうか？

「そう……あの、この事は誰にも言わないで欲しいの」

「えっ？」

「だから、拓都が姉の子供だと、誰にも言わないで欲しいの」

「えっ？ どうして？」

「私、学校には言っていないの。拓都と私は親子として生活しているし、学校にもそう報告してるのよ。それに、周りの人にも言っていないの。この事が噂で広まって、拓都が動揺したり、いじめの要因になったら嫌だし……」

「……………」

「ごめんなさい。姉の事を思い出して声をかけてくれたんだと思うけど……………」

「ううん。私の方こそ、篠崎さんの事情も考えずに……篠崎さん若いのに一人で甥の面倒を見ているなんて、偉いなあって思ってた……何か困った事とかあったら、また言って来て？」

柴田さんは、申し訳なさそうな顔をした後、優しく微笑んだ。

いい人だな……なのに、私の秘密を知っていると思うと、心を開く事が出来ない。

「ありがとう。……………あの……………、この学校の保護者の中に姉の同級生って、柴田さんの他にもいるのかな？」

「同級生？ ん……私が知っているのは、2人だけど……他にもいるかも知れない。何年かしたら入学する子供がいる同級生は何人か知っているけど……小学校の時の同級生と言っても、女子は校区外へお嫁に行く人の方が多いし、男子も団地の人は、あまり同居していないからよく分からないのよ。でも、誰にも言わないから、安心してね」

「ごめんなさい。気を使わせて……その柴田さんが知っている同級生は、私の姉と姉の子供の事、知っていると思いますか？」

「うーん、どうだろう？ 二人の内一人は、篠崎さんと同じ一丁目だけど、男の人なのよ。美那ちゃんが亡くなった事は知っていると思うけど、その子供の事まで、男の人だとあまり気にかけないと思うけど……もう一人は、女の人だけど、団地の人じゃないし、美那ちゃんと親しかった訳じゃないから……どの程度知っているか、分からないな……保護者の間では、篠崎さんと子供の関係については聞いた事がないよ。それに、篠崎さんしばらく地元になかったから、近所の人以外、みんな知らないんじゃないかな？ 私は実家が近所だし、母も美那ちゃんの事をよく知ってたから……」

「そうですか……いろいろすみません」

「いいのよ、それぞれ事情はあるだろうし……でも、学校には、言っておいた方がいいんじゃないの？ 特に担任に分かってもらっていた方が、何かの時に相談もできるだろうし……」

柴田さんの言葉は、もつともな意見だとは理解できる。でも……。理解しないのは私の心の方……。

私は黙って首を左右に振った。

一番担任には知られたくないのだと、心の中で繰り返す。そして、笑顔を浮かべて「心配かけてすみません。これからも、よろしくお願ひします」と言うと、頭を下げた。

去って行く柴田さんの後姿を見つめながら、この秘密は噂になるだろうか、と考えた。

彼女が言わなくても、近所の人が誰かに言っつて、それが、回り回つてこの小学校の保護者の耳に入る事は、考えられない事は無い。保護者の耳に入れば、先生の耳にはいる事だつてあり得る事で……。

人の口には戸は立てられない。

西森さんが言つたこの言葉が、今まさに真実味を持つて私の胸に響いた。

## #20：交差するベクトル

「千裕さん、ごめんね。待たせちゃって……」

私は、柴田さんとの会話を終えた後、我に返ると慌てて会議室へ向かった。会議室へ入ると、他のクラスの学級役員さん達はもうアンケートの集計を始めていた。

「ううん。大丈夫だよ。美緒ちゃん、柴田さんと知り合いだったの？」

西森さんの隣に座ると、彼女は何気なく訊いて来た。はて、どうこたえるべきか……ここで姉の事を出して、又いろいろ訊かれても困るし……

いつかは西森さんに話したいと思いつつも、先程感じた秘密が暴かれる恐怖がよみがえり、やはり姉の事は言えないと思った。

「あ……あの、私は忘れていたんだけど、子供の頃ご近所だったそうです」

「へえ、偶然だね。美緒ちゃんって、この間から偶然続きだね」  
そう言ってニコツと笑った西森さんの言葉に、私は戸惑った。

偶然……そう、全てはその偶然のために、私はこの秘密を守らざるを得なくなったのだ。

「そうだね」

私はそう言って、西森さんに微笑んで見せた。もう、この話はいれでお終いにしたかったから……

私達は記録係と数を数える係に分かれて、集計をして行った。1年生は30人学級なので、1クラス約27〜28人ぐらいだ。それで、今日参加してくれた保護者数が23人と言うのは、出席率がいい方だと思う。下の子が小さくて働いていないお母さんや、会社のお昼休みに抜け出して来たお母さん、それから親と同居しているのか、祖母と思われる年齢の人もいた。

アンケートの最後の感想や意見欄には、丁寧な書き込みがあったりして、みんな子供の給食に興味がある事がうかがえる。私は試食会の開催に関わる役員で良かったと、素直に思った。

私が遅れたために、他のクラスは集計を終え、役員さん達は先に帰ってしまった。結局一番最後になった私達は、集計を終えると、感想欄に書かれた文章をじっくり読んでいたので、さらに遅くなってしまうたのだった。その時、いきなり会議室のドアが開いて担任が入って来た。

「お疲れ様です。もう子供達はかえりましたけど、翔也君と拓都君は教室で待っています。集計は途中でもいいですので、行ってあげてください」

担任は入って来るなり、一気言った。

「守谷先生、集計はもうできていますよ。感想をね、じっくり読んでたんですよ。皆さん、給食や学校の事、気にかけて興味を持っていらっしゃる事が分かって良かったです。PTA新聞にもこの集計結果や感想のまとめなんかを載せられるといいんだけど……」

西森さんが担任に向かって話しているのを聞いて、PTA新聞にアンケート結果を載せるのはいいアイデアだなと思った。さすが、西森さん。

「そうですね。また広報の方から要望があれば、アンケート結果の

全クラスまとめたものを、お渡しします。それから、アンケートの集計、ありがとうございます。今日はお疲れ様でした」

西森さんからアンケート用紙の束と集計した用紙を渡されると、担任は劳いヒラキの言葉でこの場を締めた。そして、西森さんの方に向けていた視線を、チラリとこちらに向けた。私は咄嗟とっさに視線を避けて、目が合うのを回避し、そんな自分の行動に心の中で溜息を吐いたのだった。

「美緒さん」

いきなり名前を呼ばれて、ドアの方を見ると、先程担任が入って来た時に開け放したドアから、教育実習生の安藤さんが入って来た所だった。

「あ、詩織ちゃん。こんにちは」

私は笑顔で挨拶をした。安藤さんの姉である香織と数年ぶりに電話で話せたからか、最初の時とは違い、ずいぶん親しみを感じていた。

「美緒さん、お時間あったら少しお話したいんですけど……」

安藤さんが少し遠慮がちに言いかけると、私が返事をする前に担任が口を開いた。

「安藤さん、篠崎さんは教室で子供を待たせているんだ。無理を言ったらダメだよ」

えっ？

どうして、ここで口を出すの？

私が驚いた顔で担任を見ると、少し冷たい表情で安藤さんを見ていた。

「大丈夫よ、私がウチの子と一緒に拓都君を見てるから、心おきな

くお話してね。この間もあまり話せなかったみたいだし……」  
西森さんがいつもの調子で、ヘラリと笑って言った。

「わあー、すいません、ありがとうございます。少しだけお時間良  
いですか？」

安藤さんは嬉しそうな顔をして、西森さんにお礼を言っている。  
だけど、当事者の私がどうもカヤの外のような……。

「美緒ちゃん、そう言う事だから、先に行ってるね。ゆっくりお話  
すればいいからね」

西森さんに声をかけられ、自分がぼんやりとしていた事に気付い  
た。私はハツとすると、出て行こうとしていた西森さんの腕に、慌  
てて手をかけた。

「千裕さん待って。拓都は学童へ行くように言ってくればいいのか  
ら、先に帰ってください」

「あら、いいわよ。子供達は一緒に遊んでる方が楽しいだろうし……  
…気にしないで」

「いいえ、どちらにしろ学童へ寄らないといけないので……それに、  
千裕さんにも悪いし……」

「そっか……美緒ちゃんは、気を使い過ぎるから、学童の方がゆっ  
くりできるね。わかった。拓都君を学童へ送って、帰るわね。私の  
事は気にしないでね」

気を使い過ぎるのは西森さんの方だと思いながらも、西森さんの  
優しさに甘える事にした。

「すみません。じゃあ、拓都を学童までお願いします。今日はお疲

れ様でした」

私がペコリと頭を下げると、西森さんはフッフと笑って、「じゃあ、お疲れ。またね」と言って出て行こうとして、思い出したように担任の方を向いた。

「守谷先生、何ボケつとしてるんですか？ 今日はお疲れさまでした。またよろしく願います」

私達の話が終わるまで、担任は無表情でその場に立ち尽くしていた。西森さんの言葉に我に帰ると、「あつ、すいません。お疲れ様でした」と言葉を返した。そして、西森さんの後姿を見送ると、私と安藤さんの方を向いて「安藤さんはこの後大丈夫なの？」と声をかけた。安藤さんが笑顔で「はい、大丈夫です」と答えると、「それじゃあ、お疲れ様でした」と言うなり、踵を返して会議室を出て行った。

私は彼の姿がドアのところから見えなくなると、ホッと息を吐いた。途端に緊張が解けた。そんな私を見ていたのか、安藤さんは私を心配気な眼差しで見ると口を開いた。

「美緒さん、守谷先輩……あ、守谷先生がいると、緊張しますか？」

え？ 私、そんなに分かりやすい態度だっただろうか？ 私の緊張は、人にも感じるほどなのだろうか？

「いえ、そんな事、ないよ。どうして？」

「守谷先生が出て行った途端、緊張が解けた感じがしたから……でも、守谷先生なら、それも分かるなって思ってた……」

ああ、又、彼の話か……この話に乗ると、調子に乗って喋られそうだから、今日は回避しなくちゃ……

「そんな事より、話ってなんだったの？」



「ああ、ごめんなさい。実は、この間、姉から電話があつて、怒られました。人のプライベートを詮索するなつて！ 美緒さん、不愉快な思いをさせて、ごめんなさい。あんまり懐かしくて、つい、いろいろ聞いてしまつて……」

しょんぼりした様な顔で謝る安藤さんが、急にかわいそうになつて、私は笑つて「気にしてないよ」と答えた。

「香織と何年かぶりに電話もできたし、詩織ちゃんにも会えて、懐かしかつたし……」

「わー、そう言つてくれると嬉しいです。私、あの頃、美緒さんに憧れていて……ウチのお姉ちゃんなんかより、ずつとおしとやかで優しくて……それでいて、キャプテンなんてするほどしっかりしたところもあるし……理想のお姉さんでした」

「詩織ちゃん、買い被り過ぎよ。私なんてガッツで、気が強くて、頑固だし……詩織ちゃんが思っているような女性じゃないわよ」

私は、彼女が言う私の姿と現実のギャップに思わず苦笑してしまつた。

「そんな事無いですよ。高校生の頃と全然変わらなくて……あつ、子供っぽいって言う訳じゃないんですよ。今はそれなりに大人の女性に見えます。ただ、雰囲気が変わらないって言うか、ホンワカした暖かいイメージで、笑顔が癒し系って言うのかな……」

「詩織ちゃん、もう無理しなくていいから……」

私は彼女が一生懸命私を褒めようと苦戦しているのに、思わず笑みがこぼれた。

「そう、その笑顔！ 美緒さんだっって感じ……」  
彼女の言い方に、私はとうとう噴き出してしまった。

「もう、詩織ちゃんたら……」

「本当に美緒さん、全然変わらないよ。小学生のお子さんがいるなんて信じられない！」

知らないお母さん達に言われたのなら、笑顔で流せるけれど……昔の私を知ってる彼女の言葉は、変に私の心に刺さった。彼女は事情を知らないのだから……そう思おうとしているのに、一瞬間が強張り、どうにか作った笑顔は、不自然だったかもしれない。

「あつ……ごめんなさい。余計な事、言っってしまった……いつも一言多いって、守谷先輩に怒られてばかりなのに……」

彼女の何気ない言葉に、心がフリーズする。それは、何気に彼女と彼女の親しさを表している様な気がした。私がいた頃のサークルでは、彼は女の子達とそんなに親しくなかった。それなのに……。

「守谷先生と仲いいんだね」

思わずポロリと言ってしまった、内心焦る気持ちを隠すように笑顔を見せる。これって、やきもちみたいじゃない。……どうか笑顔が、不自然に見えませんか……。

「そんな〜仲いいなんて……私が先輩に付きまとっているだけなんですよ。大学の入学式の時、サークルの勧誘をしている守谷先輩を見て、一目惚れだったんです。でもね、あんなにカッコいい人だから、恋愛対象なんて恐れ多くて、妹とか可愛い後輩の座を目指そうと思って、嫌な顔されても先輩の周りをウロチヨロしてたんですよ。私って、結構打たれ強いって言うか……めげないって言うか……お陰で、可愛い後輩ぐらいにはなれたかな〜って思っているんですよ」

ああ、余計なひと言のせいで、彼女のおしゃべりが止まらない。訊きもしない事を嬉しそうに喋る。私の返事なんて期待していないだろうけど、私は「よかったね」と笑っておいた。

私の知らない、別れた後の彼……このお喋りな、親友の妹と出逢い、彼女の積極的な行動にタジタジとして困りながらも、きっと突き放せず、可愛い後輩として受け入れたのだろうと想像する。彼は最初は冷たく突き放す様に寄せ付けない雰囲気があるけれど、一度受け入れれば、とても優しく情に厚い人だ。彼女との関係がどのようなものかは分からないけれど、彼女の話聞いて、胸の奥の治りきっていない傷が、またシクシクと疼いた。私の知らない彼の3年間。私の知らない人たちと出会い、過ごし、思い出を重ねて行ったのだろう。私がそうであったように……。

「詩織ちゃん、教育実習はいつまで？」

私は、いつまでも先輩の話題が止まりそうにない安藤さんに、別の話題を振った。

「今週いっぱい終わりなんです。せっかく美緒さんに会えたのに……寂しいです」

私じゃ無くて、守谷先生に会えなくなるのが寂しいんでしょう？

と心の中で突っ込む。だけど、「最後まで頑張ってるね」と笑顔を見せた。その時……。

「なんだ、まだいたのか？」

いきなりドアが開いて聞こえて来た声に、ドキリとして思わず振り向くと、さっきよりは柔らかい表情の担任が立っていた。

「守谷先輩、すいません。もう帰る所です。さっき、先輩の話をしてたんですよ。クシャミしませんでした？」

やっぱり、この子は、一言多い。

私は安藤さんの言葉に、思わず顔をしかめた。

「おまえ、保護者に余計な事言うなよ」

今までと違い、やけに砕けた担任の物言いに、普段彼女とそんなやり取りをしているのだと見せつけられていた様な気がした。

ただの保護者でしかない私と、可愛い後輩の彼女。

安藤さんは、「余計な事なんて言っていないよ」と言いながら、私に向かって舌を出している。私はどうにか笑顔を返しながら、「じゃあ、これで……お姉さんにもよろしくね」と彼女に言った後、「失礼します」と言いながら小さく会釈すると、彼の横をすり抜けて会議室を後にした。

こんな風に私達のベクトルは一瞬交差するけれど、その後はどんどんと離れて行く。この一年間は、長い人生からしたら、ほんの一瞬の交差なのだと思う。この一年が終われば、後はもう二度と交差する事の無いお互いの人生。

それは私が選んだ事なのだと、もう一度自分に言い聞かせた。

\*\*\*\*\*

「ママ、朝顔見てくれた？」

拓都の言葉でようやく朝顔の存在に気付いた私は、自分の迂闊さうかつに落ち込みながら、謝った。

「拓都、ごめんね。いろいろ忙しくて……」

「僕ね、翔也君のママと翔也君と一緒に見に行ったよ。もう葉っぱが一杯出て来てるんだよ」

責めない拓都の優しさに許されながら、私はまた「ごめんね」と

呟いた。

翔也君のママ……西森さんにも、お世話になったんだ。後でお礼のメールをしておこうと思いなから、夕食の後かたづけをし、拓都と一緒に風呂に入って、寝かしつけながら本を読んであげる。これは、保育園の頃からの習慣で、市立図書館で借りた本を、每晚少しづつ読む事にしていた。保育園の頃は絵本ばかりだったけれど、小学生になってからは、低学年向けの児童書を読むようになった。拓都も自分で読めるようになって来たけれど、自分で読むと文字の方に気が行って、お話の世界に入り込めないようで、もうしばらく寝る前の読み聞かせは続けようと思っている。

「ママ、またあの『にじのおうこく』を読んで欲しいな」

拓都の大好きな絵本『にじのおうこく』……時々この絵本を読ん で欲しいのだ。けれど、私は、この絵本は封印したいと思っている。この絵本は……彼のお兄さんの奥さんが書いた絵本だった。

絵本大賞を取って話題になり、私も気に入って購入していたこの絵本の作者が、彼の義姉の書いたものだを知った時は、とても驚いた。そして、一度だけ会わせてもらい、ますますファンになった。

彼女は高校生の頃、友達に絵を描いてもらって、このお話をインターネットで公開し、人気になったそうだ。周りの勧めもあり、絵本大賞に応募したら、見事に大賞を取ったと言う事だった。

「うん。また今度ね」

そう言っ て誤魔化す自分が、情けなかった。彼と再会してから、手に取る事も出来ない絵本。どうして手元に残しておいたのかな……と自分を恨みたくなった。

拓都が寝てしまうと、私は由香里さんに叱って欲しくて電話をする。今日一番の出来事……姉の同級生に話しかけられた話をした。

「美緒、そんな事分かり切っていた事でしょう？ 実家へ帰ったんだから、周りにお姉さんの事を知っている人は一杯いるんだから……」

「そんな事言っても…… K市では知ってる人がいなかったから、思いもしなかったのよ」

「そんな所が美緒は抜けてるよね」

「どうせ私は抜けてますよー」

こんな自虐的な物言いをするのも、由香里さんに甘えているからだ。いつもどこか気を張っている私は、最初の頃甘える人も無く、自分一人で抱え込んでダウン寸前だった反省から、甘えさせてくれる人には素直に甘える事にしている。由香里さんは精神的に甘えさせてくれるお姉さんの様な存在で、お隣のおばさんは、いろいろと生活の助けをしてくれる、実生活で甘えさせてくれるお母さんの様な存在だった。

「美緒、そんな言い方しても可愛くないから……でも、そこまで拓都君がお姉さんの子供だと知られたくないのは、元カレと再会したからでしょう？ 再会していなかったら、担任にも話していたんじゃないの？」

そうかもしれないと思った。確かに、同情されたくないとか、拓都にママと呼ばせている手前とかあって、必要以上に姉の子だとは言わずに来たけれど……、ここまで頑かたくなに秘密を守ろうと思っていなかった。

「そうかもしれない……どうすればいいと思う？ 由香里さん」

「元カレにバレるのは時間の問題だと思っけど……バレたらバレた時の事と開き直っていたらいいのよ。だいたい、もう3年も経ってる訳でしょう？ 今更バレたとしても、彼も何も言ってこないんじゃないの？ 美緒は負い目があるから、いつまでたってもビクビクしてしまっだろっけど、彼の方はもう過去の事になってるわよ。美緒には可哀そうっけど、これが現実だと思って受け入れるしかないよ」

由香里さんはいつも、真実をずばりと言って来る。私が可哀そうだからと優しい物言いはしない。優しく言ったって、現実が変わらないのだから、辛ければ辛い程、早くその現実を受け入れて、次に何をすべきか考えた方がいいと、由香里さん自身、自分にそう言い聞かせて来たらしい。それが由香里さんの優しさなのだと、今の私は分かってる。

「そうだね……彼は真実を知っても、もう何も思わないかも知れないね。それがこの3年と言っ時間なんだよね」

そう、3年と言っ時間の長さは、私達が付き合っっていた時間より長いのだから、私との過去を消し去る程の思い出があるかも知れないのだから……

そんな事を考えると、また胸の奥が疼いた。

いつかこの傷も癒える日が来るのだろうか……

## #21：封印する想い

私の中の私が愛した守谷慧と言う存在は、3年前のまま時が止まっている。今現実を目にする担任の守谷慧は、私の知らない彼だ。きっと、彼が目にする今の私も、彼の知らない私に違いない。二人の間に流れた3年という月日は、お互いを知らない人間に変えて、出会わせた。

-----だから。

彼が真実を知って、3年前の私の嘘に気付いたとしても、もう今の彼には時効でしかなく、気にする事は無いのかも知れない。

由香里さんに電話で言われて、自分が一人意地になって秘密を守ろうとしていたのは、空回りだったんじゃないかと、自分の一人相撲を自覚した。とにかく、彼を意識しすぎる自分がいけないのだと分かってはいるけれど、彼と再会した途端封印は解かれ、溢れ出た想いは傷となって私を苦しめる。

こんな想いも、今だけ……この一年を乗り切れば、もうほとんど彼と会う事も無いだろうし、そのうち彼も別の小学校へ転勤になるだろうから、そうすればまた、心の奥に封印して、永久凍土のごとく死ぬまでこの想いは閉じ込めてしまえばいいんだ。

この一年さえ乗り越えれば……。

給食試食会から約一週間後の6月28日、初めて夜行われる広報の第二回会議。

いつもより早く拓都と夕食を済ますと、拓都をお隣のおばさんに預けて、学校へと急いだ。薄暗い中、灯りの灯った校舎へ入ると図書室を目指した。



「美緒ちゃんお疲れ」

7時から始まる会議にぎりぎりに図書室へ入ると、もう全員が集まっていて、入るなり皆がこちらを向いたので「こんばんは」と挨拶をして、すぐさま手を振っている西森さんの隣に滑り込んだ。

全員と言っても、前回は広報の役員全員だったけれど、今回はその半数の夜の部の人達だけだ。8名のメンバーが図書室の大きな机を囲み、順番に担当の記事や写真を説明して提出する。西森さんが守谷先生から預かったUSBメモリーを示しながら、守谷先生の提案でデータで提出してもらった事を告げ、今後先生からはデータの形で提出してもらおうと、入力仕事が軽減されるのでそうして欲しいと、要望を出した。そして、皆の賛同が得られると、私はやっとホツとした。

委員長が今夜する仕事の流れを説明する。記事を入力してくれる人はいませんかと言うので、そのぐらいならと思って手を上げると、私一人で驚いてしまった。

え？ 私、出しゃばった？

「千裕さん、どうして手を上げないんですか？ 私出しゃばり過ぎですか？」

小声で隣の西森さんに少し責める様に言うと、苦笑しながら「タイピングは自信のないよ」ネット見るだけなら得意なだけだね」と返って来た。そんなものなの？

「それじゃあ、篠崎さんをお願いするわね」

そう言われて顔を上げると、委員長がニッコリと微笑んだ。私は委員長から入力の仕事の説明を受け、入力を始めると、他の皆は、見出しやレイアウトをガヤガヤと話し合い始め、私は与えられた仕事に没頭していった。

「美緒ちゃん、タイピング早いね。仕事で入力してるの？」

いつの間にか隣に来ていた西森さんが訊いて来たので、私はパソコンの画面から目を話さず「いろんな事をするけど、パソコンでの仕事の主ですね」と答えた。

「篠崎さんって、どこにお務めなの？」

西森さんの反対側から聞こえて来た声に、手を止めて顔を上げると、委員長が微笑んで私を見ていた。

「えっ？ 県庁ですけど……」

「ええっ？ 美緒ちゃんって公務員さんだったの？」

「ええ、一応県職で……」

「へえ〜そうなんだ……意外な事実！」

「どうして意外なんですか？」

「いや、どこかの会社の事務員さんかなと思っていたから、公務員は想像外だった」

なによ、それと思ったけれど、まあ、これも西森さんのいつもの会話だよと納得した。そんな私達の会話を委員長は微笑んで見ていたけれど、近づいて来たメンバーに声をかけられ、そちらを振り返っていた。私は、入力を再開し、西森さんは隣に座って、私の様子を楽しそうに見つめていた。

「ねえ、ねえ、中野さん。守谷先生の噂、聞いた？」

委員長に話しかけたメンバーの声が聞こえ、私は西森さんと顔を見合わせた。またあの噂の事かと、お互い目線で会話する。中野さ

んと言っるのは委員長の事だ。私と西森さんは、守谷先生と言っキーワードですぐに耳を澄ませた。

「守谷先生って、愛先生と付き合ってるって本当？」

……愛先生と付き合っている？

私の心臓は急にスピードを上げ出した。これは聞いてもいい話だろうか？

「誰に聞いたの？」

委員長は少し声を落として訊き返した。

「友達なんだけどね、友達の友達が、守谷先生と愛先生がデートしてるのを見たんだって。だから、委員長なら何か知ってるかと思っ  
て……」

声をかけた彼女も声のトーンを落として話しているけれど、すぐ横にいる私達の耳には充分に聞こえた。西森さんが驚いた表情をしている。これも想像外だったのだろう。私も同じだけれど……。

「私も噂でしか知らないけれど、どうもそうらしいわよ」

「そうか……守谷先生ぐらいカッコ良ければ、フリーのはず無いよね。でも、愛先生か……確か、愛先生の方が年上だよな？」

「そう、2つ上だったと思う……でも、お似合いじゃない？ いい事よね守谷先生にとっても……去年みたいな事があると、いろいろ言われちゃうから、きちんとお付き合いしている人がいる方が、守谷先生にとってもいいことだよ」

「そうだよな。あの時もいろいろ言われてたものね。最近も守谷先生は大学時代、女遊びが激しかったとか言う噂があったし……」

私はもう、二人の会話が耳に入らなくなっていた。横で西森さんが「愛先生か……」と呟いている。私はキーボードの上で手が止まったまま、点滅するカーソルを見つめていた。

終わった後、校舎から駐車場まで西森さんと並んで歩いていると、西森さんが苦笑交じりに口を開いた。

「驚いたね。守谷先生の事だから、彼女ぐらいはいるかと思っただけで、まさか愛先生とはね……思い返してみたら、PTA総会の時も二人で話してる雰囲気、よかったものね。だけど、守谷先生は同じ学校の先生とは付き合わないと思っていたんだけど……」  
私はぼんやりと聞いていた。西森さんの言葉が私の耳を避けて通り過ぎて行くようだ。

「ねっ、美緒ちゃん？」

名前を呼ばれて我に帰ると、私はこちらを見ている西森さんに「えっ？」と訊き返していた。

「もう聞いていなかったの？ だから、委員長の言う様に、守谷先生はきちんとお付き合いしている人がいる方がいいって話よ。保護者との事で変に誤解を受けるより、愛先生と付き合い合っている事が公になった方が、守谷先生にとってもいい事なんじゃないかな？  
って訊いてるの」

「あ………そうですね」

どうも頭がよく回らなくて、西森さんの言葉も上手く聞き取れなくて……心が全てを拒絶する。

「どうしたの？ 何か心配ごとでもあるの？」

「いえ、大丈夫です」

ダメだ、ダメだ。

こんな状態だと西森さんに心配をかけてしまう。それよりも気付かれてしまう。

美緒、分かっていた事じゃないの！

彼女がいるだろう事ぐらい、分かっていたでしょう？

それが誰かわかったただけの事じゃないの！

期待してたわけじゃないでしょう？

この気持ちはもう一度封印するのでしょうか？

もう、私と彼の人生は、遠く離れてしまっているのだから……。

「美緒ちゃん、まさか……」

「いや、違います。ちょっと他の事考えていて……ごめんなさい。心配かけて……」

「そう？ それならいいんだけど……心配事があるのなら、相談に乗るから……何でも言ってみてね？」

「ありがとうございます。又いろいろ聞いてください。それじゃあ、今日はお疲れさまでした」

ちょうど駐車場にたどり着いたので、私は逃げるように小学校を後にした。

西森さんに気付かれてしまったのだろうか？  
きつと変に思ったに違いない……。  
誤魔化し切れていなかったら……。。

私は車を運転しながら、大きく息を吐いた。

一番驚いたのは、取り繕<sup>つくろ</sup>え無い程、自分が動揺した事だ。

バカだ、私……大バカだ。

自分から手を離したくせに、再会して、逃がした魚の大きさに後悔したの？

自分が恋愛から遠ざかってるからって、彼が他の女性と親しくしているのは、許せない？

自虐的に何度も自分に突っ込みを入れる。

美緒、しっかりしろ！ あなたの選んだ人生は、拓都を立派に育て上げる人生でしょう？

後悔なんてするな！ お姉ちゃんにもお義兄さんにも胸を張れるよう、頑張り通すんでしよう？

彼を傷つけてまで決意した思いを忘れるな！

だから、彼が幸せになる事を喜ばなければ……彼の幸せを祈り続けなければ……。

自宅の駐車スペースに車を止めた後、しばらく降りる事が出来なかった。どうしようもなく流れる涙を止める術<sup>すべ</sup>さえ、今の私には分からなくて……。

どうにか涙が止まった後、先に自宅へ入り、瞼を冷やしてから、拓都をお隣りへ迎えに行った。

情けない。自分の弱さが、周りのみんなに迷惑をかけてしまう。

私は鏡の中の自分に誓った。彼の事で泣くのは、今日が最後。

この想いも、弱い私も、もう一度心の奥に暗示をかけて封印する。彼と私は、ただの担任と保護者……ただ、それだけ……と。

その夜、拓都を寝かした後、珍しい人から電話があった。

「もしもし、美緒？ 元気だった？」

やけに明るい声で電話をかけて来たのは、本郷美鈴だった。高校、大学と同級生で、一番仲の良かった彼女は、遠く離れた所にいる今でも、時々電話やメールで連絡を取り合っている。

大学時代教育学部の養護教諭コースだった彼女は、同級生の彼氏が東京で就職するのに合わせて、東京都の教員採用試験を受けたけれど合格できず、結局民間の会社の事務に就職したのだった。自分の希望した職種を諦めてでも、彼の傍を離れなかった彼女の想いの貫き方が、ある意味潔くて羨ましかった。

「うん、元気だよ。久しぶりだね。この前電話で話したのは、3月頃だっけ？」

「そうそう、あれから美緒、実家へ帰ったんでしよう？ 拓都君は小学校へ入学したんだよね？ どう？ 小学校は」

小学校と聞いて、心臓がドクリと跳ねた。脳裏に浮かんだ顔を、すぐさまかき消す。

「自分の母校だし、学校の勉強とか様子が懐かしいよ」

「なんだか美緒が小学生の保護者だなんて、不思議な気がするよ」

「まあね、自分でもそう思う。そうそう、お隣のおばさんには、とてもよくしてもらっているよ。よく夕食のおかずを持って来てくれたり、夕食に招いてくれたり……なんだか本当のお母さんみたいなの」

お隣のおばさんは、美鈴の母親の姉で、美鈴の伯母にあたる。姉が亡くなった時も、私は何も考えられなくて、自分の友達に連絡する事さえ気づかなかった。それをお隣のおばさんが、葬儀が済んで

からだつたけれど、美鈴に連絡してくれて、美鈴からすぐにお悔やみの電話を貰い、その年のお盆に初盆参りに来てくれた。

「伯母さんは面倒見がいいし、子供や孫がみんな県外にいるから、美緒と拓都君を娘や孫だと思ってるんだよ。しっかり甘えとけばいいよ」

「充分甘えさせてもらってますよ。それより、美鈴の方はどうなの？ また小野君とケンカしたんじゃないでしょうね？」

前回美鈴が電話をして来た時は、小野君の浮気疑惑でケンカして、その勢いで電話して来たのだった。

「ハハハ、あの時はごめんね。美緒に愚痴を聞いてもらって、落ち着いたよ。大丈夫だよ。今日は良い報告」

「良い報告って、もしかして、とうとう結婚？」

「フッフ、近いけど、結婚はまだなの。私達ってよくケンカするけど、その原因が仕事が忙しくて、なかなか会えない事多くて、必要以上に疑心暗鬼になっちゃう事なのよね。だから、少しでも二人の時間が持てるように、一緒に住もうって言うてくれたの。結婚はもう少し後かな？ 彼ももつと仕事に自信が出来てから考えたいって言うし……」

嬉しそうに話す美鈴の声を聞きながら、彼女の幸せそうな顔が浮かんだ。彼女は顔が派手な作りの美人で、性格もサツパリして、アネゴ肌っぽい所があるけど、彼の前では乙女なのだ。

「そっか……おめでとう。良かったね」

「うん。でも、おめでとうはまだ早いわよ」



「同棲するなら、事実婚みたいなものじゃないの？ その内、でき婚なんて言うんじゃないの？」

「ハハハ、出来ればそれは避けたいけどね」

機嫌の良い美鈴の声を聞きながら、心から良かったと思った。彼女達の付き合いをずっと傍で見っていた私は、何度も危機があったのも知っている。住む所が遠く離れてからでも、何かあると美鈴から連絡があつて、いろいろと聞かされて来た。

「でも、本当に良かった。小野君の所で一緒に住むの？」

「そう、彼の所は私の所よりも広いからね。今週末に引っ越しするのよ」

「そっか……また新しい住所教えてね？ 何かお祝いでも贈るよ。何がいい？」

「結婚じゃないんだから、いいよ」

「でも、美鈴にとつたら結婚みたいなものでしょう？ 何かお祝いさせて？」

「じゃあ、エプロン」

「白くてレースがヒラヒラの？」

美鈴が「そうそう」と笑うと、私もクスツと笑った。

そう高校生の頃、二人でデパートへ買い物に行き、売り場に飾つてあった豪華なレースの白いエプロンを見て、「こんなエプロン、恥ずかしくてできないね」と笑いあつたのだ。そのエプロンは、ウ

エディングドレスの様に見えたから……。

「了解。すつごく豪華なのを探すよ」

「フッフ、それじゃあ私も、美緒の時には、とっておきの探して来るから……」

私の時？ ……そんな日は、来る事は無いだろう。

「そうだね……」

私は自嘲気味に答えた。

「そうだねって、少しは前向きになって来たの？」

「前向きって……」

「もう、恋愛も結婚もしないって言ってたじゃないの。今までは仕事と子育てに必死そうだったから……もう3年経って、拓都君も小學生になって、ちょっとは自分の事考える時間が出来たんじゃないの？」

ああ、そうだ。美鈴は、何もかも知ってるんだ……。

今まで何も言わずに見守って来てくれたんだ。

姉の死後、最初に電話をして来てくれた時、美鈴は『美緒には守谷君がいるから大丈夫だよ？』と確認する様に私に言った。きつと、姉夫婦が亡くなり、頼る人がいなくなった私に、慧の存在が支えてくれると言いたかったのだと思う。でも、美鈴には嘘がつけなくて、私は『慧とは別れたの』と告げた。慌てた様に『どうして？』と訊く美鈴に、私はそれまで抑え続けて来た心情をぶつけた。

だって、まだ学生の彼に何を頼って言うの？

私には大きな責任があるのに、未来のある彼を巻き込みたくない

の。

私といると、彼まで不幸にしてしまうかもしれない。それが怖い。彼まで失う事になったら……。もう、私と彼の人生は全然別のものになってしまったの……。

美鈴は根気よく黙ったまま、私が泣きながら吐き出すのを受け止めてくれた。そして、私が落ち着くのを待ってから、ポツリポツリと問いかけてきた。

『彼はお姉さん夫婦が亡くなった事、知ってるの？』と……。

『彼とはなんて言っただけなの？』と……。

私は、彼は知らないし、知らせるつもりも無いと答えた。その上、姉家族は海外赴任のため一家で引越したと嘘を吐いた事も言った。そして、彼には好きな人が出来たと言っただけだと、告白した。それらを聞いた彼女は、反論もせず、ただただ受け止めてくれた。

私は、私を信じていてくれた彼を裏切ったのだから、もう二度と恋も結婚もしないと美鈴に宣言した。自分の決意を誰かに告げなければ、くじけそうだったから。

あれから美鈴は、拓都と私の生活については尋ねて来たけれど、彼の事や恋愛の事なんかは、一切尋ねる事は無かった。今までの様に美鈴自身の恋愛話は面白おかしく話すけれど、私にはけしてそんな話を振る事は無かった。

あれから3年経って、今まで何も言わなかったのは、美鈴の思いやりだったんだと気付いた。そして、その事をとても心配していたくれたんだと、今更ながら理解した。

「私は、拓都がいてくれたら、それでいいの」  
私がポツリとそう言っただけで、電話の向こうで溜息を吐くのが分かった。

「美緒は恋愛事に不器用だから……でも、いつまでも拓都君も美緒の傍にいる訳じゃないんだよ」

そう、不器用だから、この恋心も上手く消してしまえない。

拓都もいつか私から離れて行く事はわかっている。

その時に拓都の負担になりたくないと思うだけ……。

「拓都が結婚したら、私も婚活しようかな……」

私が自嘲気味に言うと、小さく「バカね」と呟く声が聞こえた。

## #22：大接近【前編】

その日、その事が発覚するまでは、ごく当たり前の普通の一日だった。いつもの様に定時に仕事を終え、拓都を迎えに行き、買い物をして、家に帰る。そんな当たり前の一日になるはずだった。

その日、7月6日水曜日の午後5時に少し前、その事は発覚した。

「ちよつと、この内容、去年の資料と同じじゃない？」

同僚が上げた声に、周りのみんなが固まった。それは明日の会議の為に用意した資料で、最新のデータをまとめたものだった。しかし、使用したデータが去年と同じものだったようだ。

私は青ざめた。その資料は私が責任者で作り上げたものだったからだ。

明日午前の会議用と言う事で、すぐさま全員で手分けしてやり直す事になった。全員残業決定となってしまうた。それも、私のせいだ……。

「篠崎さんらしくないミスね」

周りのみんなは仕方がないと思ってくれているのか、苦笑しながらもすぐに仕事の割り振りをして取りかかってくれた。私は皆に謝りながら、今日はお迎えいけそうにないなど、お隣のおばさんにお迎えを頼もうと、電話をかけるために廊下に出た。

電話のコール音は何度も繰り返すけれど、誰も出ない。どこかに出かけると言う話も聞いていないし、この時間だったら、買い物に行っているのかも……と後でもう一度電話をしようと、自分の席に戻った。

「篠崎さん、お子さんは大丈夫なの？」

同僚の言葉に我に帰ると、時間はもう午後6時前になっていた。

「ええ、遅くなる時はお隣のおばさんにお迎えを頼んでいるので……ちよっと電話してきます」

もう一度電話をかけるが、やはり誰も出なかった。

どうしたのだろうか？ この時間に出かけてるなんて、今までなかったような……お喋りなおばさんだから、近所の人の所でお喋りして、時間を忘れてるとか……

あまり長く席を外せないと思い、もう一度後で電話をしようとして、再び席に戻って仕事を再開した。

心の中は妙な焦りがじわじわと広がり始めていたが、今は仕事を進める事が大事だと、嫌な予感は振り払った。

午後6時半、やはり電話は繋がらない。どうしよう……学童は午後7時までだ。今の私は迎えに行けない。かと言って急にお迎えを頼めるような知り合いはいなかった。

どうしよう……頭の片隅で考えながら、仕事を進める。おばさんに連絡が取れないなんて、考えもしなかった……どうしよう……本当に！

とうとう午後7時前になってしまい、私は覚悟を決めた。もう一度おばさんに電話をする。やはり、出ない。私は大きく息を吐くと、学童の電話番号をメモリーから呼び出して電話をかけた。

「もしもし、篠崎です。いつもお世話になってます。連絡が遅くなってすみません。あの……どうしても今日は仕事で遅くなるんですけど、いつも迎えを頼む人と連絡が取れなくて……それで、責任は全てこちらが持ちますので、拓都を一人で帰して頂けませんか？」  
無茶を言っている事は充分承知していた。でも、ここで押し通さなければ、余計に迷惑をかけてしまう。

「篠崎さん、それはできません。お子さんをこの時間から一人で帰すなんて……確かにまだ外は明るいですけど……」

「すみません。どうしても今すぐに帰る事が出来ないのです、せめて明るい間に拓都を帰してもらえませんか？ 拓都に直接話があるので、お電話代わってください」

学童の指導員の松田先生は動揺している様だったが、拓都を呼んでくれた。

「拓都？ あのね、ママの言う事を良く聞いてね。ママはどうしても今日はお仕事が遅くなるから、お迎えに行けないの。それにね、お隣のおばさんもお留守みたいで、拓都をお迎えに行けないのよ。だから、拓都一人でもお家まで帰って来れるよね？ まだ明るいから、大丈夫だよね？」

「うん。大丈夫。一人で帰れるよ」

「そう、偉いね。じゃあ、学童の松田先生に、一人で帰れますって言ってくれる？ それでね、おばさんの所で待っていて欲しいの。おばさんがお留守だったら、お隣の玄関の所で少しだけ待っていてくれるかな？ すぐに帰って来てくれるから……待っている間は絶対に玄関の前から動いちゃダメだよ」

私はお隣のおばさんがすぐに帰って来てくれる事に賭けて、拓都を帰らす事にした。最悪な事は今は考えない。絶対大丈夫と自分に言い聞かせる。家の鍵もおばさんに預けてあるから、拓都一人では家にも入れないのだ。

夏の事だから、夜でも寒くないし、お隣は暗くなるとセンサーで玄関灯が点くから、真っ暗では無い。拓都を一人で待たせることになるかも知れないと、頭の片隅で不安が警告するけれど、今の私に

はどうしようもなかった。

もう一度、指導員の松田先生に電話を変わると、全ての責任はこちらで持つので、今日だけは一人で帰して欲しいと、頼み込んだ。今後二度とこのような事はしないと約束して。

電話を切ると、すぐにまたおばさんに電話をかける。やっぱり出ない……どうしよう……子供の足で約20分で家に着く。もう一度20分後ぐらいに電話を試みよう、また仕事に戻った。

自分の席に戻ってしばらくすると、ポケットに入れていた携帯電話が震えた。取り出して見ると、知らない電話番号だった。誰だろう？ 拓都に何かあったのだろうか……

さつきからの不安がどんどん心を支配していく。心臓が大きく鼓動しだした。私は電話に出るために、また席をはずして廊下へ出た。

「はい」

「守谷です」

えっ？ どうして？ でも、非通知じゃ無かった……。

私がすぐに返事が出来ずにいると、彼は続けて少し怒ったような口調で話し出した。

「篠崎さん、何を考えてるんですか？ こんな遅い時間に1年生を一人で帰らせるなんて！」

「すみません。どうしても仕事で帰る事が出来なくて……私が残業の時にいつもお迎えを頼んでいる人に連絡が取れないんです。それで仕方なく……」

「そうですか……それでは私が拓都君を送って行きます。拓都君が



言うにはお隣のお家でお母さんの帰りを待たせて貰うらしいですね？ お隣のお家へ送って行けばいいんですか？」

「そんな……とんでもないです。先生にそんな事、してもらう訳にはいきません。まだ明るいから、拓都一人で帰らせて下さい」

担任の申し出を、私は思わず断った。今更彼にお世話になる訳にはいかない。

「私は拓都君の担任です。少なからず自分のクラスの児童には責任があります。こんな時間にひとりで帰ると分かっている、知らんぷりはできません。お隣のお家まで送るだけですから……」

ああ……そこまで言われて、反論もできない。でも……お隣は今、お留守だし……どうしよう？

彼が送って行ってお留守だったら、なんて言うだろう？

でも、丁度おばさんが帰って来るかも知れないし……どうしよう、どうしよう……。

「じゃあ、今から送って行きますので、また送り届けたら連絡を入れます」

私がグルグルと考え込んでいる内に、彼は痺れを切らせて、電話を切ってしまった。

どうしよう？ お留守だと分かったら……そんな所へ帰らせたのかと、子供をお留守の家の前で待たせるつもりだったのかと……きつと怒るだろう。

私はもう一度、おばさんに電話をした。呼び出しのコール音は、虚しく繰り返すだけだった。

私が席に戻って仕事を始めると、すぐにまた携帯が震えた。私は息を吐いた。おばさんが帰って来ていて、間に合ったのか、それと

も……やっぱりお留守だったのか……。

私は周りの人に、何度もすいませんと断って、携帯を取り出して廊下へ出た。

「はい」

「守谷です。篠崎さん、お隣はお留守みたいですが……拓都君が言うには、お留守でも玄関前で待つように言ったそうですね？ お留守だと分かっていたんですか？ 拓都君はお家の鍵も持っていないと言っし……」

彼は怒りよりも呆れたと言う様な声で説明する。やっぱり、帰って来ていなかったか……。

「すみません。お隣になかなか連絡がつかないので、もしかしたら思っただんですが……鍵もお隣に預けてあるんです。お隣が今夜出かけると言う事を聞いていなかったの……すぐに帰って来ると思っていたんですが……」

どんなに言い訳したって、拓都を留守のお隣りへ一人で帰らせたという事実は、取り消し様がない。

どうすればいい？ ここで拓都を置いて帰ってくださいなんて、言える訳がない。本当にどうしよう……。

その時、彼が大きく溜息を吐くのが聞こえた。

「わかった。俺の家で預かるから。大学の時と同じ所に住んでるから、覚えてるだろ？ 県庁から近いし、仕事が終わったら、帰りに迎えに来て。一応、終わったら連絡を入れて。非通知で電話しなかったから、俺の番号は履歴に残ってるだろ？」

彼は急に砕けた言い方で早口に言いたてた。

私は彼のタメ口に驚いてしまって、言っている内容を聞きとる事が出来なかった。

どうして？ どうして、急に話し方が変わったの？

それは、あの頃を思い出す様な物言いで……。担任と保護者の溝を一気に飛び越えた様な口のきき方だった……。

「えっ？」

私は、彼の言葉が上手く理解できず、思わず驚きの声を上げてしまった。

「だから、これは担任としてじゃなくて、昔の知り合いとして、拓都を預かるから……仕事終わったら連絡して来て。わかったか？」

昔の知り合い……もう私は昔の知り合いでしかないんだ……。その事にショックを受けてしまう自分が痛かった。

そんな事より、彼は今、あえて昔の知り合いとして、私を助けてくれるのだと言うのだ。

その優しさが辛いけれど、今の私は、彼を頼るしかない。こんな形で、彼を頼る事になるなんて……。

あの時、彼を頼る事は出来ないと言ったのに……。

「すみません。今日だけ、今だけ、お世話になります。二度とこんな事がないよう、気を付けますので……本当にすみません」

「ああ、二度とないよう、願いたいね。じゃあ、仕事の方、頑張ってください」

電話が切れた後、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

こんな事になるなんて……これも運命のなら、私は恨まずにいられない。

彼の優しさに胸が詰まる。

零れそうになる涙を、ぐっと奥歯で噛みしめて、私は仕事に没頭した。それこそ余計な思考が入り込まない様に……。

結局仕事が終わったのは、午後10時を回っていた。彼のお陰で、時間を気にせずに仕事が出来て、感謝せずにはいられない。もしも、あのまま拓都を一人で帰っていて、この時間まで一人でお隣の前で待っていたとしたら……考えただけでもゾツとする。

『今日はありがとうございました。仕事は今終わりました。遅くまですみませんでした。今から拓都を迎えに行きます。マンションに着いたら電話をします』

私は職場の駐車場に停めた自家用車の中からメールを送った。出来るだけ彼の声を聞かない様に、震える胸の内がバレしてしまわない様に、電話をかけずにメールで仕事が終わった事を連絡した。

彼のマンションは車で5分程の所だ。まだ覚えてる。忘れるはずなんか無い。何度も通った彼の部屋。社会人になってからは、週末はほとんど彼の部屋で過ごしていたのだから……  
マンションのそのたたずまいを見ると、思い出が一気に押し寄せて来た。もう二度と訪れる事は無いと思っていたのに……

到着して停めた車の中で大きく深呼吸をした。震えるこの気持ち  
を何とか抑え込んで、携帯の着信履歴の一番上の番号を選んだ。コール一つですぐに繋がった電話が、彼が待っていてくれた事を教えてくれる。

「はい」

第一声の彼の低い声に胸が震えた。

「あ……今着きました。遅くなってすみませんでした」

「ああ、お疲れ。拓都、寝てしまったんだよ」

「すみません。いつもならもう寝てる時間なので……」

「拓都は俺が車まで抱いて行くから、ランドセルを取りに来てくれるかな？」

「はい。わかりました」

「じゃあ、待つてるから……部屋はわかってるよね？」

いちいち確認するのはやめて欲しい。忘れるはずなんかないのに……。

私は「はい」と答えると、電話を切って車から降りた。

5階建てマンションの3階の一番奥の部屋……。

本当は部屋までは行きたくない。思い出に押しつぶされそうだから……。

ここに愛先生は来たのだろうか？ きっと来た事があるのだろう……。

ごめんなさい。こんな形でも、元カノが彼の部屋へ来るなんて嫌だろうな……。

二人の邪魔する気なんて、無いから……許して下さい。

心の中で頭を下げる。

彼は愛先生に今日の事は言わないだろうけど……やっぱり、申し訳ない。

エレベーターを降りて廊下を歩く。一歩一歩近づく彼の部屋のドア。

鉄の扉の向こうは、もう私の知らない世界……。



### # 23 : 大接近【後編】

「今日は、すいませんでした」

玄関のドアが開くと同時に、私は深々と頭を下げた。下げた頭の上で、小さく溜息をつくのが聞こえ、「入って」と言う彼の声に、頭を上げた。

一歩踏み入れた玄関は、あの頃と変わらず殺風景で、彼が今日はいっていたであろうスニーカーと拓都の靴が並んでいた。

すでに上にあがった彼が「これ」と言っただけでランドセルを差し出したので受け取ると、「その靴と一緒に先に持って行ってくれるか？ 拓都は俺が連れて行くから」と言い、私の返事も聞かない内にクルリと踵を返すと中へ向かって歩いて行った。

私は啞然と彼の遠ざかる後ろ姿を見つめていたが、彼がリビングのドアの向こうに消えると我に返った。

あ……バカだね私。

何を期待してたの？ 上にあげてくれるとでも？

封印したはずの気持ちは、思い出と言う鍵で簡単に開いてしまった。

けれど、理性が最後の保護者と言う仮面は外させない。彼のように夕メロで話す事はできない。

私は小さく息を吐くと、腰を曲げて拓都の靴を持ち、先に部屋を出た。下まで降りて、車にランドセルと靴を入れると、もう一度マンションのエントランスに引き返した。ちょうど、エレベーターが1階に到着し、拓都を横抱きにした彼が出て来た所だった。

「すいません。重いでしょう？ 私が代わります」

慌てて、エレベーターから出て来た彼の前に立つと、拓都を受け

取ろうと手を出した。

「重いから、無理だろ？ 俺が連れて行くから……」

「でも……だったら、おんぶなら……」

確かに横抱きにするのは無理かもしれない。でも、おんぶなら、今でもする事があるから……

「そんな事言ってる間に、車まで連れていけるだろ？ 先に行つてドアを開けて」

彼はこれ以上反論を許さないと云つた不機嫌な雰囲気、私は何も言えず「はい」と返事をすると、慌てて車へ走った。

ああ、もう！

彼を不機嫌にしてしまう自分が情けない。

どうすればいい？ どんな態度をとればいいの？

自己嫌悪に陥りながら、助手席側のドアを開けて、助手席の背もたれを倒す。彼がやって来て、拓都をそこに寝かすと、シートベルトをして、ドアを閉めた。傍に立って、それらを見届けると、ドアを閉めてこちらを向いた彼と対峙した。

「今日はこんなに遅くまで、ありがとうございます。本当に助かりました」

私はまた、深々と頭を下げた。保護者の仮面は絶対はずしてはいけないと、自分に言い聞かせ続ける。

彼と私は、担任と保護者だと……。

「いや……拓都の担任だから当たり前です。それから、お風呂は入れていますけど、夕食は食べさせました。……今後、こんな事無いよう気を付けて下さい」



この時間なら、夕食が必要な事ぐらい気づきそうなものなのに、私は何も考えていなかった自分が益々情け無くなった。

でも、昔の知り合いとしてって言うたのに、やっぱり担任だからって……。

そう、担任だから、してくれた事なんだよ。

何を期待してたの？

彼が今でも想っていてくれるって？

自分の甘さを思い知らせるように、彼の言葉は丁寧な言葉に戻り、やはり私達は、担任と保護者なのだと、自覚させられた。

「はい、何から何までお世話になって、本当にすいませんでした」  
そう言ってもう一度頭を下げると、彼は「じゃあ、気を付けて」とマンションの方へ歩き出した。私はその背中に「ありがとうございまして。おやすみなさい」と声をかけた。すると、彼の足が止まり、ゆっくりと振り返るとフツと目を細め口角が持ち上がり、優しく微笑んだ。

それは、懐かしい表情だった。泣きたくなる程、懐かしい彼の優しい微笑み……。

そして、彼が「おやすみ」と言った後で、音にはならない声で、くちびるが『みお』と動いた様に見えた。

私は心が震えた。

私も心の中で『おやすみ、慧』と呟くと、クルリと背を向けて、運転席側へ回った。零れそうになる涙を見られないよう、素早く運転席に座ると、エンジンをかけて車を発進させた。バックミラーに映る彼は、ずっと立ち止ったまま、私の車を見送っていた。

バカだな……私。本当にバカ。

あれは願望が見せた幻。薄暗い中で、彼の口元なんて見えてたの？

彼が私の名を呼ぶはずなんかないのに……。再会してしまった事は仕方ないけど、迷惑だけはかけちゃいけないでしょう？

私は何度も溜息を着きながら、それでも頭の中は、さっきの彼の微笑をリピートしている。

私……微笑み返す事さえできなかった。

彼の目に映った私は、どんな表情をしていたのだろう。

もう、今更……だけど。

信号に停まった時、助手席の拓都に目をやる。横を向いて丸くなっている小さな背中。

何を食べたのだろうか？ 彼が作ったのだろうか？

拓都と彼はどんな風に過ごしていたのだろうか？

どんな話をしたのだろうか？

まさか拓都が彼に自分の本当の両親の事を話すはずはないと思うけれど……

拓都は両親の事を忘れる事は無い。3年前のあの日からずっと、拓都は私と共に朝晩仏壇に向かって両親と祖父母に挨拶をしている。小さい頃は、人からお母さんの事を尋ねられると、本当の母親とママと呼ぶ私の事を混同していたけれど、いつしか拓都は、本当の両親の事は口にしちゃいけない事だと思ったようで、人前では一切言わなくなつた。私と二人の時にだけ、お空のお母さん、お父さんと呼んで話す拓都に、私は、実の両親の事を他人に話せなくしてしまつた罪を感じる。

元々は私が拓都から両親を奪ってしまったのだから……。

私が彼らを死へと向かわせてしまったのだから……。

私は拓都に対していくつ罪を重ねて行くのだろう。

元カレに心を奪われている場合じゃない！

私は彼よりも拓都を選んだのだから……。

気づけば自宅の傍まで来ていた。どこをどう走ってきたのか、記憶に無い。体に染み付いた習慣が、車を走らせてきたのだ。自宅の駐車スペース車を停める。さて、拓都を抱いていけるだろうか？小学校へ入って又背も伸びた様だし、体重も増えている。やっぱりおんぶだなと思ひ直し、拓都を起こす事にした。

先に荷物を家の中に入れ、拓都の体をゆすって起こした。拓都は寝ぼけ眼で「あれ？ 守谷先生は？」と訊く。「もう帰って来たんだよ」と答えると、私の顔を見てニコツと笑った。

おんぶをして家の中まで連れて来ると、少し眠気が覚めて来たのか、お喋りな拓都の口が動き出した。

「ねえ、ママ。守谷先生がチャーハンを作ってくれたよ。美味しかったよ」

「そう、よかったね」

「あのね、守谷先生のお家にもね、『にじのおうこく』の本があったよ。守谷先生もね、大好きなんだって。それでね、守谷先生が『にじのおうこく』を読んでくれたんだよ」

嬉しそうに担任の家での様子を報告する拓都。彼の家にあの絵本があるのは、知っている。きっと拓都は、僕の家にもあると話したのだろう。僕の大好きな絵本だと嬉しそうに話したのだろう……。

「そう、よかったね。……さあ、お風呂へ入って、もう寝よう」

「はい」

拓都の元気な返事に、私は小さく溜息をついた。

お風呂へ入ってパジャマに着替え、拓都と一緒に仏壇に向かつて姉夫婦と両親に「おやすみなさい」と夜の挨拶をする。そして、拓都の部屋へやって来ると、拓都は本棚の『にじのおうこく』を出して来た。

「ママ、守谷先生もね、この虹の絵が好きなんだって。ママと同じだね」

ベッドに腰掛けて、膝の上にその絵本を置いた拓都は、最後のシートの絵が載っているページを開いていた。それは、大切な人の元へ架かった虹の絵だった。

「そうだね。さあ、寝なさい。もう真夜中だよ」

拓都をベッドへ寝かせ、夏用の薄い掛け布団をお腹の辺りまで掛けてやった。時間はもう午後11時を回っている。拓都は横になると、やはり遅い時間のせいかな、すぐに眠ってしまった。

保育園の頃は、一緒の部屋で布団を並べて寝ていたけれど、小学校へ入る前にこちらへ戻って来て、自分の部屋ができると、一人でベッドで寝るんだと言い出した。少し寂しかったけれど、これも成長の証しだと喜んだ。結局、寝てしまっただけで本を読んであげているので、あまり変わりはないのだけれど……。

拓都の寝顔を見ながら、今日のことを思い出す。

彼のマンションは、思い出がありすぎて、時間が戻ってしまいそうに怖かった。

いいえ、戻ってしまえたら、どんなに良かっただろう……

あの時、私もタメ口で、彼を慧と呼んだら、彼の反応は違っていたのだろうか？

あーなに痛い事考えてるのー！！

彼には恋人がいるって言うのー！！

元カノに周りをウロチヨロされたら、迷惑だよ！

膝の上に置いた絵本に目を落とす。さっき拓都が広げていたページを開く。

『ママ、守谷先生もね、この虹の絵が好きなんだって。ママと同じだね』

拓都の言葉が頭の中で繰り返される。

気づくといつの間にか頬を涙が流れていた。

バカだな……美緒。

彼がああ頃を思い出して、好きだと言ったんじゃない事くらい分かっているけれど……

私が社会人になった時、職場がK市と言う事で、約120kmという距離を隔てる事になり、私達は中距離恋愛になった。同じ県内と言う事もあり、遠距離恋愛ほど離れている訳でもなく、車で3時間で行き来できるからと、週末には会えるからと、平日に会えなくても我慢ができた。けれど、週末に県主催のイベントなどがあると、借り出される事があり、帰れない事もあった。

そんな帰る事の出来なかったある週末、屋外で開催されたイベントが、お昼過ぎに急な激しい雨に降られ、慌てて片付ける事となった。片付けが終わった頃、雨も上がり、おまけに雲の切れ間から日差しまで差し出した。早々に終わったイベント会場から車で帰る途中、姿を現した太陽の光に雨にぬれた木々の緑がキラキラと光り出した。すると、大きな虹がくつきりと空に架かったのだ。

私は空き地に車を止めると、車から降りて虹を見た。その時私は、あの絵本のラストの虹の絵を思い出した。

『にじのおうこく』のお話の中の王国の人々は、愛する人や大切な人の元へ、虹の橋を架ける事ができる。その事を思って、私はす

ぐに目の前に架かった虹に向かって、携帯の撮影ボタンを押した。

そして、『慧の元へ虹の橋を架けたよ』と彼に写メールを送った。返事はすぐに来なかった。けれど、数時間後、彼からも虹の写メールが届いた。『美緒の虹の橋は、確かに架かったよ』と……。

## #24：疑惑の渦中

私は時計を見て、慌てて飛び起きた。寝過してしまった。昨夜なかなか寝付かれなかったせいだ。

はあく、私は大きく溜息を吐いた。

昨日の自分を思い出し、自己嫌悪に陥<sup>おちい</sup>った。

何度も同じ事を繰り返して学習しない自分に、呆れ返る。

……どうして、実家に帰ってきたのかな……。

彼と再会さえしなければ、こんな思いをする事は無かったのに……。

この運命が恨めしい。

結局は自分の反省を棚に上げて、運命ばかりを恨んでしまう。

だいたい、アイツもアイツよ！ どうして実家へ帰らなかったのよー！

どうして、この県で先生になってるのよー！

はあくともう一度溜息を吐くと、私は急いで着替えて、朝の用意をするために階下へ降りていった。

洗濯機を回して、朝食の用意と自分のお弁当に取り掛かる。朝は時間との勝負なのに、出だしが遅れてしまったために、いつもより余計にバタバタしてしまう。

「ママ、おはようー！」

朝はいつも元気に起きてくる拓都だけど、今日はいつもりよ3割り増し機嫌がいいように思う。ああきつと、昨日、大好きな守谷先生のお家へ行ったせいだ……。でも、このお喋りな拓都が、誰かにその事を話してしまわない内に、しっかりと口止めしておかなきゃ！

「拓都、おはよう。あのね、ママと約束して欲しい事があるの」「私はしゃがんで、拓都と視線を合わせた。」

「何？」

拓都はキョトンとした顔をして、私の顔を見つめる。

「あのね、昨日、守谷先生のお家へ行っただでしょう？」

「うん。とっても楽しかったよ」

拓都の目が、キラキラと輝きだしたのを見て、私は心の中で溜息を吐く。

「そう、良かったね。でもね、守谷先生のお家へ行っただ事は、誰にも言わないで欲しいの」

「えっ？ どうして？」

「拓都が守谷先生のお家へ行っただ事をお友達に話したら、みんな行きたがるでしょう？ でも、守谷先生もお忙しいから、みんなを連れて行けないのよ。だから、みんなが羨ま<sup>やましい</sup>しがるから、拓都は誰にも言わないで欲しいの。わかった？」

「うん。わかった」

何となくしよんぼりした拓都の肩をポンと叩いて、「さあ、おはようの挨拶をしてこよう」と仏壇のある座敷へと背中を押した。

朝食が終わると拓都が一枚のプリントを持って来た。それは、1学期の個別懇談のお知らせだった。7月20〜22日の間の希望の日時を、第3希望まで書いて今週中に提出しなければいけない様だ。



それにしても……と、私は又溜息を吐いた。  
彼に近づき過ぎないように思っているのに、また、彼と一対一で対峙しかければいけないなんて……

「わかった。明日提出できるように、書いておくから」  
私は無理に作った笑顔で言うと、拓都を学校へ送り出した。そして、自分も用意をすると、いつもの様に愛車のミニに乗って出勤した。

\*\*\*

「あつ、美緒ちゃん、お先に。下駄箱の所で待ってるからね」  
西森さんはそう言うと、手を振って去って行った。

そう、今日は、気が重い個別懇談の日。  
希望日時をどうしようか考えていた時、西森さんが電話で、しばらく役員の会議も無いから、個別懇談の時、時間を合わせてお喋りしようかと誘ってくれたのだった。そして、その希望がすんなり通り、今日の懇談は西森さんの次が私と言う予定になっていた。

懇談は気が重いけど、西森さんとお喋りできるのは楽しみだった。その楽しみだけを考えて、今日は小学校までやって来た。早く嫌な事は済ませてしまわなければ……

「篠崎さん、お待たせしました。入ってください」  
西森さんが出て行った後、担任はそう言って私を教室に招き入れた。

私の心臓は、これだけの事でも、ドキンと跳ねる。ドキドキと速まる鼓動を、私は保護者と言い聞かせて、抑える。

教室の窓際の机を向い合せにくっつけて、懇談スペースが作られていた。開け放された窓からは、梅雨明けの爽やかな風が入り込んでいた。

「失礼します。よろしくお願いします」

私は担任をまともに見る事も出来ないまま、頭を下げた。

「どうぞ、座ってください」

そう言われて、子供用の小さな椅子に座る。子供の机二つ分の距離に、彼がいる。

近過ぎる……

それでも、いつまでも下を向いたままでは、話もできない。

私が思い切って顔を上げると、一瞬合った視線を、彼の方から手元の資料に落とした。

ああ、彼も居心地悪いんだ……

元カノとこんな風に向かい合うなんて、嫌な気分だろう。それも、裏切られた相手なのだから……

今まで自分の気持ちの事ばかり考えていたけれど、彼も同じように、私と再会した事に戸惑っているのかもしれないと、今になってやっと気付いた。

その時、私は言おうと思っていた事を思い出した。この間、拓都がお世話になったお礼を、言わなければとずっと思っていたのだった。

「あ、あの……先日は、拓都がお世話になって、ありがとうございます  
ました」

私の声に顔を上げた彼は、一瞬驚いた様な顔をした。しかし、すぐにいつもの無表情に戻り、「いいえ、気にしないでください」と言った。そして、その後、言いくそうにまた口を開いた。

「あ……その事ですが、誰にも言っていないと思います。もしも、誰かに尋ねられても、否定してください」

「えっ？ 誰かに尋ねられるって？」

私は驚いてすぐに聞き返した。すると彼は、焦った様に言い訳をした。

「あの日、学童の先生は、私が拓都君を送って行った事を知っています。その事で誰かに何か尋ねられても、私は篠崎さんのお隣りへ送って行っただけと言う事にしておいてください」

それは……私との事が彼女にばれると嫌だから？

それとも、去年の様に、保護者との関係を疑われたくないため？  
きつとそのどちらもだろう……。

私だって、他の人に知られたくない。人の噂の的になるのは、いろいろな事を含め、避けたいのだ。

それに……私の事で、彼が不味い立場になるのだけは避けたい。  
去年の事があるから余計に、彼の立場は微妙だろう。

「わかりました。でも、誰かに尋ねられる可能性があるのですか？  
そう、問題はそこだ。学童の先生は、担任が家まで送って行っただけだと思っている。拓都には口止めをした。それでも、そんな事を言うのは、誰かに何か言われたのだろうか？

誰かに、知られてしまったのだろうか？

「いや、もしもの事を考えてです。篠崎さんを巻き込む様な事になつては、申し訳ないので……」

「いいえ、お世話になつたのは私の方ですから……」

そんなもしもの事まで考えて、私が巻き込まれるのを心配してくれと言つのだろうか？

「あれは、私が勝手にした事ですから……気にしないでください」

彼は硬い表情のまま、そう言いきつて、この話題はお終いにしたいようだった。これ以上言いあつても、同じ事だろう。彼が気にするなど言うのなら、もう忘れた方がいいのかもしれない。そう思つて私は、遠慮がちに頷いた。

「それでは、1学期の拓都君ですが……これが、通知表になります」彼は先程の会話など無かつた事のように切り替えると、いつもの無表情な顔で淡々と言うと、私の目の前に、拓都の通知表を広げた。私は拓都の通知表に目をやった。1年生だからなのか『できる』と『がんばろう』の2段階だ。確か、小学校の頃の成績つて、3段階だったような……と思つてみると、私の疑問を察したのかどうか、担任は通知表の説明をし始めた。

「1年生と2年生の通知表は、各教科の各項目ごとに設定したレベルに達しているか、もう少し頑張った方がいいかの2段階での評価です。3年生からは、これに『よくできる』が加わつて、より頑張つている教科の項目については、その成績が付けられます。拓都君は、どれもできているので、心配ないですね」私は担任の説明を聞きながら、通知表を見て、拓都はよく頑張つてるんだなと、喜びと安堵の気持ちに顔が緩んだ。

「学校での友達関係はどうですか？」勉強の事は今のところ心配いらないう様なので、気になつていた友達について訊いてみた。

「拓都君は誰とでも仲良くできるので、いつも誰かと一緒に楽しそうに遊んでいますよ。特に西森さんのところの翔也君とは仲がいいですね」

良かった。保育園が一緒だった子がいないから、一からの友達作りで、大丈夫だろうかと心配していたからだ。

「そうですか。良かったです。同じ保育園からのお友達がいなかったから、心配していたんです……」

私はいつの間にか目の前の担任が、元カレだと言う事も忘れ、思わず本音で言葉を返していた。

「拓都君は素直でとてもいい子だから、大丈夫ですよ」

彼は自然な笑顔でそう言った。私は不思議な気がした。

彼の自然な笑顔に、いつの間にか私の緊張も解けている。

いつも顔を合わす時は意識しすぎてドキドキしてしまうけれど、拓都の事だからだろうか……。

拓都の話をしてしていると、私はきちんと保護者としていられるから……。

先日の様に思い出の多い場所で彼と向き合うのは辛いけど、学校でなら保護者としての自分を保つ事ができるから……役員になってこの数カ月内に慣れて来たのもあるのかも知れない。

「他に心配事や気になる事がありますか？」

「今のところは特にありません」

「では、初めての夏休みですので、規則正しい生活をさせる様にしてください。拓都君は学童でしたね。それなら、大丈夫ですね。朝顔の鉢は、篠崎さんが持って帰ってください。朝顔の観察も夏休みの宿題ですから」

締めくくりに最後に最後の説明をすると彼の表情は、最初の頃よりずっと柔らかいものになっていた。私は「分かりました」と頷くと椅子から立ち上がった。そして、通知表と夏休みに関するプリントの入った封筒を持ち、「今日はありがとうございました」と頭を下げて、教室を出た。

廊下には次の順番の保護者が待っていた。私は「お先に」と軽く会釈をして、校舎の出入り口へ向かって歩き出した。

私は、彼との関係が、少し担任と保護者らしくなった様な気がした。これでいいんだと、心の片隅でホッとした気持ちがゆっくりと広がりつつあった。

校舎の出入口の下駄箱の所まで来ると、西森さんと誰かが片隅の方で真剣な顔をして、話し込んでいるのが見えた。話をしているのは、確か……西森さんのご近所のお友達で、同じように守谷ファンの人だ。広報委員会の昼の部の人だったはずだ。私が近づくと、二人は気配を感じたのか、驚いた様に私の方を見た。そして、二人で顔を見合わせている。

「千裕さん、お待たせしました」

「あ、美緒ちゃん、お疲れ」

西森さんは、私の方を見て微笑んだ。そして、もう一度一緒にいた友達の方を見て、「彼女なら口が堅いから、いいでしょう？」と尋ねている。友達も「仕方ないね」と頷いた。

何の事だろう？

「あのね、美緒ちゃん。この事は誰にも言わないで欲しいんだけど……」

やけにもつたいぶって西森さんが話し始めたので、私は凄い秘密を打ち明けられるのかと、ゴクリと唾を飲み込み、頷いた。

「守谷先生の事なんだけどね、また不倫疑惑が起こったの」  
えっ？ 不倫疑惑？

「え？ 守谷先生は愛先生と付き合っているんじゃないの？ どうして、不倫疑惑？」

先日聞いた、愛先生との噂は間違いだったのだろうか？  
それにしても、また勘違いされる様な事があったのだろうか？

「そうなのよ。愛先生との噂は、本物だと思ったんだけど……実はね、学校に投書があったらしいの。それも写真付きで……」  
写真付き？ って、写真を撮られてるって事？

私が驚いていると、西森さんも眉間にしわを寄せた。

「ビックリよね？ なんでもね、守谷先生の自宅マンションでこの学校の児童の母親と一緒にいる所を写真に撮られたらしいの。それも、子供も一緒にいたらしいのよ。時間も夜の10時を過ぎている様な時間で、子供は寝てしまったらしくて、守谷先生がその子供を抱いている写真らしいの。そんなに遅い時間に子供と一緒に守谷先生の自宅にいるって、普通じゃ考えられないわよね？」

私は気が遠くなりそうだった。血の気が引くって、こんな状態を言うんだと、頭の片隅で思った。

そして、思い出した。さっき、彼が私にあの日の事を口止めたのは、このせいだったんだと……。

これはあの日の事だ。

誰かに見られていたんだ……。

でも、どうして？ 誰が何のために写真を撮ったの？

誰かが彼を陥れようとしているのだろうか？

彼は恨まれているのだろうか？

相手は私だと、知られてしまったのだろうか？

「そ、それで、相手の保護者は誰か分かっているの？」

私は思わず訊いてしまった。

「それがね、写真では分からないのか、守谷先生は問い詰められても、相手の名前は言わなかったらしいの。彼女のプライバシーがあるからって……ただ、不倫と言うのは否定して、昔の知り合いが困っていたから、子供を預かっただけだと言っているらしいの」

昔の知り合い……そんな言葉に引つかかっている場合じゃない！  
彼は私を庇ってくれたんだ……だから巻き込みたくないって言うていたんだ。

「誰が投書したか分かっているの？」

「そんなのもちろん無記名だから、分かるはず無いわよ」  
西森さんの友達が怒った様に言う。

「私は守谷先生の言う事を信じたいと思うけど……」  
西森さんもショックを隠せない様に言った。

「ねえ、この噂、もう広まっているの？」

最初に嚴重に口止めされたけれど、彼女達が知っていると言う事は、他にも知っている保護者達がいると言う事で……

「いいえ、まだ噂にもなっていないと思うの。私の友達、本部役員をしているんだけど、たまたま学校に用事があつて行っていらしいのよ。それで、偶然、校長先生と教頭先生と守谷先生が話しているのを聞いてしまったらしいの。彼女も大変な事を聞いてしまったって思ったみたいだけど、自分一人の胸にしまっておけなかったみたいで……私にだけって教えてくれたの。でも、私も一人で抱えるには大きい問題で、つい千裕ちゃんに聞いてもらったのよ。だから、もうこれ以上広めないで欲しいの。やっぱり、守谷先生にとっては、立場が危うい問題だと思うし……」



西森さんの友達もやはりショックが大きかったみたいで、動揺しているのが分かった。

「さつき、守谷先生は普段と変わりない感じだったから、今のところ、何か処分されたと言う訳でもないのかもしれないし、まだ、処分が決まっていないのかもしれない……守谷先生の言い訳を信じてもらったのかもしれないし……でも、去年の事があるから、きっとまたかと思われていると思うの。守谷先生が担任から外されるって事が無い事を願ってるんだけど……」

西森さんもかなり動揺しているようだった。

担任から外されるって……私のせい？

私、どうすればいいの？

私は彼が庇っていてくれるのに、甘えてもいいの？

#25：恋より友情（前書き）

お待たせしました。

少し長くなってしまいました。

よろしく願います。

## #25：恋より友情

結局私は、楽しみにしていた西森さんとの楽しいお喋りもする事無く、みんな暗い表情のまま別れた。

その後、拓都を学童へ迎えに行き、車まで戻って来ると拓都の「朝顔は？」の一言に、また自分が情けなくなった。

慌てて拓都と二人、校舎の間にある中庭へ、朝顔の鉢を取りに行く。前から言われていたのに、結局この日初めて見た朝顔は、もう蕾を付けていた。

「うわぁー拓都、もうすぐ咲きそうだね」

「うん。今ね、つぼみが5つあるんだよ」

「ホントだ。じっくり観察してるんだねえ」

私が感心したように言うと、少し自慢気な顔をして「毎日見てるからね」と言った。

本当は昨日から夏休みに入っている。夏休みは私が仕事に行っている間、拓都は朝からお弁当を持って学童へ来ている。学童の建物は小学校の校庭にあるので、今日も朝顔の水やりをして観察していたらしい。

やっとお目にかかれた朝顔は、青々とした葉っぱに、先が赤くなつた蕾が付いて、拓都の表情の様子にとっても生き生きとしていた。

その日、拓都が寝てしまうと、憂鬱な気分のまま一人居間のソファに座って、ぼんやりとしていた。手には携帯を握っている。

彼に電話をかけてみようか……。

私のせいで、彼は今窮地にいるのだから……せめて、謝罪の電話ぐらい……。

でも、今の私に何ができる？

彼を救う事も出来ないのに……。

正直に名乗り出て、真実を話す？

真実って……何？

私達は以前恋人同士でしたって？

私は独身で、姉の子供を育てていますって？

だから、不倫じゃありませんって？

どれも、お互いに本意じゃない。

それに、彼は、私に学校に通報された事は知って欲しくないだろうし……。

私が知っているのと彼が知ったら……。

やはり、私から電話はできない。

それでも自分一人で抱えるには大きすぎる問題で、いつもの様に由香里さんに電話をする事にした。

「由香里さん、元気？」

「美緒、丁度良かった。私も電話しようと思っていたの」

「え？ そうだったの？ 何か用事があった？」

「美緒こそ、話したい事があったんでしょ？ 元カレの事？」

「まあ、そうだけど……」

由香里さんにはバレバレなのか、私が話したい事って、彼の事しかないのか……なんだかな……。

何となく情けなくなりながら、私は、先日彼に拓都を預かっても

らった時の事と、今日聞いた疑惑の事を話した。

「ええっ？ そんな展開になってたの？ ねえ、元カレって、もしかして、まだ美緒の事好きなんじゃないの？」

えー、由香里さん、何言ってるの？！ そんなあり得ない事、言わないで欲しい。

「そんな事無い。だって、彼には恋人がいるもの」

「え〜！ その話、聞いてないよ。どうしてそんな事を美緒が知ってるの？」

「うん……噂なんだけど、彼が同僚の先生と付き合っているって……デートをしているのを見た人がいるって……私も小学校で二人が話をしている所を見たけど、いい雰囲気だった」

PTA総会の後、体育館の片隅で二人が話をしていた姿を思い出して、胸にチクリと痛みが走った。

「へーそうなんだ。じゃあ、拓都君を預けた時に、美緒に馴れ馴れしい態度で接していたのは、単に懐かしさゆえの事なのか……それにしても、人の心を惑わす様な態度だよな」

「人の心を惑わすって……そんなんじゃないよ。でも、付き合っている人がいるなら、私は邪魔しない様にしなくちゃいけないと思ってるの。彼が幸せになるのを、陰ながら応援しなきゃ……」

「バカね。私の前まで強がる必要ないのよ。美緒は本当は今でも好きなんですよ？」

ずっと封印していた気持ちも、再会した途端に溢れだし、自分でも認めざるを得なくなった想い。自覚したからこそ余計に、彼には

気付かれないようにしなくちゃいけないけど……

「私は多分、一生彼を忘れられないんだと思う。でも、再会さえしなければ、綺麗な思い出に変えて、この想いは昇華できたはずなんだけどな……」

「今日的美緒はやけに素直で気持ち悪いぐらいだけど……それならいつそ奪っちゃえば？ その同僚の彼女から」

「何言ってるのよ！ 彼にとって私との事は昔の恋で、終わった事なの。だって、拓都を預かってくれたのも昔の知り合いだからって言ってるし……でも、その事で彼が窮地に立たされて、担任を外されるとかになったら、どうしよう？ ねえ、私はどうしたらいいと思う？」

「美緒に出来る事はないよ。美緒が勝手に動いたら、余計に彼を困らせる事になると思うし……もう、彼に任せときなよ。」

「それしかないよね……でも、私のせいなのだと思うと、申し訳なく……」

「拓都君を預かるって言ったのは彼の方なんだから、そんなに気に病む事無いよ。それに、美緒が心配して動いて、昔の二人の関係が明るみになる方が、お互いに気まずいでしょう？ 彼だって恋人がいるのなら、余計に知られたくないんじゃないの？」

由香里さんの言っている事は、もっともだ。今、私達の過去の関係がバレたら、彼の噂ならすぐに広まるから、きつと多くのお母さん達から白い目で見られそう……元カレにちょっかい出してるって思われるんだろっな……。

「そうだろうね……」

「ねえ、美緒。彼も新しい恋を見つけているのなら、美緒もそろそろ新しい恋をしてもいいんじゃないの？ 彼の事は一生忘れられないかもしれないけど、美緒は美緒の人生を考えなきゃ。拓都君が大人になるのなんて、あつという間だよ。それに、きつと美緒にも運命の人がいると思うの」

運命の人か……。

由香里さんは諦めていないと言う『運命の人』の存在。  
私にも運命の人はいるのだろうか……。

「そんな人がいればいいけど……今はそんな気持ちになれないと思う。拓都の担任が彼の間は無理だろうな……その内、彼も違う学校に転勤するだろうし、もう会えなくなったらきつと、この気持ちも落ち着くだろうけど、それまではたぶん無理だろうな……」  
彼には恋人がいるから、私もって言う具合に簡単に気持ち切り替えられたら、どんなにいいだろう。彼の事など忘れてしまえる程の、運命の出会いがあるのなら、早く出会いたい。

「本当に不器用なんだから……」

「ごめんね。心配ばかりかけて……」

「何言ってるの？ お互いさまでしょう？」

「ありがとう、由香里さん。それより、由香里さんの話はなんだったの？」

「うん。美緒がこんな時になんだけど……やっぱり美緒と一緒に喜んで欲しいから……あのね、私、結婚する事になったの」

「ええっ！ もうそこまで話が進んでたの？ でも良かった！ おめでとうー！」

「うん、ありがとう。あのね、彼が転職する事になって……それで、結婚して付いて来て欲しいって……本当にこんなコブつきの年上女でいいのかって、何度も聞いたんだけどね。でも、私も子供もひっくるめてついて来て欲しいって言われて……」

由香里さんの声が少し震えているのを感じて、彼女もやっぱり、強い母親である前に、一人の女性なんだなって感じた。その事が、とても嬉しい。そして、ある意味羨ましかった。

「うん。うん。良かった。いい人だね。きっと運命の人だよ」

「私もね、彼こそ運命の人だったらいいなって思ってる」

由香里さんにしては消極的な言い方だなって思ったけど、それだけ彼女の中で葛藤もあったと言う事が……。

「それで、どこへ転職になったの？ もしかして遠くへ行っちゃうの？」

今までのK市も、ここから車で3時間もかかるけれど、それでも同じ県内と思うと、近く感じていたけど……今度はなかなか会えない程遠いところだろうか……。

「ふふふ、どこだと思っ？」

「もう！ もったいぶらないですよ」

「ふふふ、あのね、T市なの」



「えっ？ ここの市なの？ うそ？ 本当に？ 嬉しい！！」

「そうなのよ。私も聞いた時、嬉しくて、それで結婚を決めたって言うのは大げさだけど、ちょっとはあるかな？」

そんな事を言っつて、今度はハハハと笑う由香里さんの声に、いつか私の心は癒されていた。

「そうなの？ それは光栄だわね」

私も同じように、笑って返す。こんな風に友の喜びが、いつしか自分の喜びとなつて、辛い事も乗り越えて行けるのかもれない。

「それでね、住む所はまだ決まっていけないんだけど、できたら美緒のところと同じ校区に住みたいなって思ってるんだけど……小学校の名前、なんだつたっけ？」

「えー！ 本当に？ 一緒の小学校へ来てくれるの？ もう、嬉しすぎる！！ 拓都も喜ぶよ。小学校はね、虹ヶ丘小学校なの。住むところ決まったら教えて。引っ越しも手伝いに行くよ」

「もう、美緒は気が早い。これから住む所を探すんだから……でも、拓都君と同じクラスになれるといいな。それに、美緒の元カレにも会いたいしね」

「あ……そうだね。同じクラスになれたらいいよね」

そうか……由香里さんが同じ学校になると言う事は、彼を見ると言う事で……同じクラスになったら、彼と話をする事になるんだよね。まさか、彼に変な事は言わないと思うけど……。

「じゃあ、はつきり決まったらまた連絡するね」

そう言っつて由香里さんは明るく電話を切った。私も「おやすみ」

と返した。

良かった。

遅かれ早かれ結婚するとは思っていたけど、こんなに早くとは…。

良かった。本当に……。

それに、由香里さんが近くへ来てくれるのは嬉しい。

心強い味方が増えた様な気がする。離れていても、味方だったんだけどね……。

\*\*\*\*\*

「じゃあ、拓都君は預かるから、お仕事がんばってね。いつてらっしやい」

そんな西森さんの言葉に送られて、私は職場へと向かった。

夏休みに入って一週間、西森さんが拓都と翔也君を遊ばせたいから、1日預かりたいと言ってくれた。

その日は、ご主人が出張で泊まりと言う事で、夕食も一緒に食べようと誘われている。朝、拓都を西森さんの家へ送ると、西森さんに明るく手を振って見送られたのだった。

夕方6時過ぎに西森さんの家へ帰り着くと、拓都と翔也君が「おかえり」と元気に迎えてくれた。今日はよっぽど楽しかったのか、いろいろと報告してくれる。

「あー僕も、お兄ちゃんがいたらなあ〜」

報告の最後に、拓都がポツリと言った独り言が、私の胸を締め付けた。心の中で、「ごめんね」と呟く。拓都に兄弟を作ってあげら

れない自分は、なんて頼りない存在なんだろう。由香里さんの様に、拓都と私をセットで気に入ってくれて、拓都も気に入る人が現れたら……。でも、一番問題なのは自分自身の気持ちなのだと思っていて、また心の中で「ごめんね」と繰り返した。

西森さんの夕食の準備を手伝い、みんなでワイワイ言いながら食べた後、後片付けを済ませてしまうと、子供達3人はテレビを見ているので、西森さんと私はダイニングのテーブルで、紅茶を入れてお喋りをする事にした。

「今日も一日、お疲れ様でした」

西森さんがそう言って、紅茶のカップを乾杯の様にあげたので、私もクスクス笑って「ビールじゃないのが残念だけど……千裕さんも今日は子守り、お疲れ様でした」とカップを乾杯の様に持ち上げた。

二人でクスクス笑いながら、たわいもない話をしていると、そう言えば……と西森さんが急に声を潜めた。

「この間の守谷先生の不倫疑惑だけど、綾ちゃんが言うには……あつ、綾ちゃんって、この間疑惑の話を教えてくれた近所の友達のことね。それでね、彼女がね、守谷先生と一緒に写真を撮られた保護者って、PTA会長の事じゃないかって言うのよ。ほら、PTA会長って、守谷先生の大学の時の先生の奥さんって言うじゃない？ それで、守谷先生は昔の知り合いだって言ってたから、以前から知っていたPTA会長は当てはまると思うのよ。だから、何か理由があって、子供を預けたのを、迎えに行った時に写真を撮られたんだと思うの。守谷先生としては、お世話になった先生の奥さんの頼みで断れなかったのだろうし、変に疑われるのが怖くて、写真に写った保護者がPTA会長だと言えなかったんじゃないかしら？」

私は驚いて何も言えなかった。まさかそれは違うとも言えないし、

ましてや、それは自分だなんて、言える筈もない。

「凄い推理だね。千裕さんとお友達って、探偵みたい」

私はどうにか笑顔を作って、言葉を返した。

「でも、これだと、守谷先生の言い訳の辻褄が合うと思わない？」

「うーん、どうだろうね……よく分からないから……でも、あまり詮索しない方がいい様な気がするけど……」

「そうだね。あんまり騒ぐと、噂になって広まっちゃうものね」

西森さんも同意してくれたので、安心した。この話にはもうあまり触れたくない。それにしても、PTA会長って……

自分の代わりに疑われているPTA会長に申し訳なく思った。

西森さんは、そうそうとまた思い出したように口を開いた。

「ねえ、8月の7、8日の土日に、キャンプへ行かない？」

「えっ？ キャンプ？」

「そう。主人がアウトドア大好きでね。キャンプも毎年行っているのよ。昨日も今年はキャンプどうしようって話したら、翔也が拓都君も一緒に行きたいって言いだしてね。それで、誘おうかって話になったの。どう？」

「どつって言われても、急な話で……すぐに返事できないよ。でも、いいの？ 家族で行くキャンプでしょう？ 私達が混じっても……」

「いいの、いいの。テントもね、前のが小さくなって買い換えたから、二つあるし……他に必要な物は、ほとんどこちらで用意するから、美緒ちゃん達は、自分の使うタオルや着替えやタオルケットとかあればいいよ。食材もこちらで用意するし、費用は人数分貰えばいいから……美緒ちゃんは、キャンプってした事あるの？」

キャンプ……。  
忘れるはずの無い、彼との思い出。

私が社会人になった夏に、彼と二人で行ったキャンプ。小学生の時の学校から行ったキャンプ以外では、初めてのキャンプだった。キャンプ初心者の方にキャンプの楽しさを教えてくれた彼。

夜、二人で見上げた星の美しさを忘れない。広い宇宙に二人だけの様な気がしたあの時……。

また、思い出に囚われそうになって、我に返った。

「あ……4年ぐらい前に、一度だけ行った事があるけど……」

「そうなんだ。じゃあ、雰囲気はわかってるよね？それに、絵日記の宿題があるでしょう？書くネタを作らないとね……」

ああそうか、夏休みの宿題があるんだ。拓都は学童でみんなと少しづつしている様なので、まだ特には気にしていなかったけど、絵日記とかもあるんだ……。

「絵日記の為にネタ作りをしないといけないの？」

「そうよ。絵日記は3枚だけだけど、ウチなんか、キャンプとプールと私の田舎のお祭りって決めてるのよ」

「ええっ？ そんな……絵日記の為に？」

「そう言うもんなのよ。後で書くネタに困らない様に、美緒ちゃん

もキャンプに行こう?」

小学生の子供のいる夏休みつて、親はいろいろ大変なんだな……。私はカルチャーショックを受けた気がした。

でも、拓都にとつてもいい経験かもしれない。私にとつても、キャンプの記憶を新しいものに更新する時期なのかもしれない。

「そうだね。迷惑じゃなかったら、一緒に連れってもらおうかな?」

「迷惑だなんて……こつちが誘っているんだから……また詳しい事は日が近づいたら打ち合わせをしようね」

「うん。よろしく願います」

私は西森さんに出会えた事を、素直に感謝した。拓都と二人きりだと、キャンプなんて思いもしないから……拓都と二人のお出かけと言えば、公園へ行くのが精一杯だ。社会人になって5年目の私は、まだまだ経済的に余裕がない。それに、拓都を大学まで行かせてあげたいから、少しづつでも貯金もしたい。そんな経済状態だから、お金をかけた遊びをした事がないし、玩具もあまり買ってあげた事がなかった。

「それでさ……こんな事訊くのは、美緒ちゃんが気を悪くするかわからないんだけど……」

急に声のトーンを抑えて、意味深な前置きをする西森さんの顔を見つめた。

「あのね……拓都君つて……お姉さんの子供つて、本当?」  
えっ? どうして……。

私は絶句したままフリーズした。私は今とても驚いた顔をしているのだろう。私の顔を見て、西森さんは慌てて言い訳をした。

「あ、ごめん。美緒ちゃんのプライベートな事を……本当にごめんね。あのね、翔也の保育園の時一緒だったお母さんから訊かれたんだけどね……彼女のお姑さんのお知り合いが美緒ちゃんのご近所の方らしくて、そのお知り合いからお姑さんが訊いたらしいんだけどね。同じ1年生の子が近所にいるんだけど、その子の両親が何年前に亡くなつて、その母親の妹さんが、まだ若くて独身なのにその子の面倒を見ているって……篠崎さんって言うんだって、聞かされたらしくて……私に篠崎さんって知ってる？ って訊いて来たのよ。それで、同じクラスだつて言うと、そんな話をしたから……美緒ちゃんの事かなくて思つて……前に年齢を聞いた時に、ちよつと意味あり気な事言つてたでしょう？ だから、キャンプに誘うにも、旦那さんも行く？ って聞いていいのかどうか、迷つてたの」

西森さんが必死で説明するのを聞いて、私は止めていた息を吐き出した。

彼女は私の表情を見て、真実だと確信した事だろう。

ああ、やっぱり、人の口には戸は立てられないんだね。

私は、西森さんには話しておこうと思つていたから、今こそと覚悟を決めた。

「私の方こそ、ごめんね。気を使わせて……その人が言う様に、拓都は姉の子なの……でも、姉夫婦が亡くなつた時、拓都はまだ3歳でね、私は拓都の母親になろうつて決心したの。私は両親も亡くしてるから、本当に拓都和二人きりになつちやつてね、あの時、私達は家族になるために、私の事をママって呼ぶつて約束したのよ……それから私達は親子として暮らしてるの。だから、学校にも本当の事は言わずに、調査票には親子として書いたのよ。変に同情されるのも嫌だし、拓都が両親がいない事で卑屈になつたり、いじめられたりしたら嫌だし……だから、千裕さんも他の人には言わないで欲しいの。人の口には戸は立てられないし、私のご近所や姉の同級生なんかは知ってる人もいるから、いつか皆に知れ渡るかも知れな

いけど……でも、できるだけ知られずに親子として生活していきたいのよ。だから……千裕さんも胸にしまっておいてくれるかな？」  
私が告白している間、千裕さんは悲痛そうな表情をしていた。その表情を見て、こちらの方が辛くなった。こんな話は聞いた方が重く受け止めてしまうものだ。私にしたら、もう3年以上こんな生活をして来たから、もうそれほど辛い事じゃないのだけれど……でも今は別の意味で辛い事はあるけど……。

「分かった。もちろん誰にも言わないよ。でも、ごめんね。こんな事言わせて……それに今までも、知らなかった事とは言え、美緒ちゃんを傷つける様な事言ってたんじゃないかな？ 本当にごめんねでも、学校にも言っていないんだ……守谷先生も知らないんだよね？」

一番知られたくない人だと、心の中で呟く。

「そう、言っていないの。もしかしたら、巡り巡って学校や担任にも知られるかもしれないけど、私は拓都とは親子だと貫こうと思ってるの。それに、養子縁組もしてるのよ。だから、本当に親子とも言えるんだけど……」

「えー！ そこまでしてるんだ。それだけの覚悟で母親になったんだから、誰がどんな噂をしても、親子だと大きな顔してたらいよ。私はこれからも、そんな事を気にしないで、同じ母親として接するからね。それに何か困った事があつたら、何でも言つて来てね。これは同情じゃないからね。友達として言ってるんだからね」

千裕さん……

何度も念を押す彼女の言葉に泣きなくなつた。

私が同情されたくないなんて言つたから、違つのだと、友達だからだと繰り返し言ってくれる事自体、彼女なりの気の使い方だと分かつている。



恋はかなわなくても、こんなに素敵な友達がいてくれる。その事がとても贅沢で幸せな事だと、私は一人噛みしめていた。

## #26: キャンプ【前編】(前書き)

お待たせしました。

長くなりそうなので、前編と後編に分けました。  
今回はいつもより短めです。

## #26：キャンプ【前編】

8月7日土曜日、真夏の太陽がもう高くまで上がり、雲一つない空は今日の真夏日を約束している。

ああ、今日も暑くなりそうだ……連日の暑さに、空を見上げて少しうんざりしながら、それでも今から行く河畔のキャンプ場に心は飛んだ。

西森さん家族がワンボックスの車で迎えに来てくれて、初めて会う西森さんのご主人に、思わず深々と頭を下げた。

「おはようございます。今日はよろしくお願いします」

「おはようございます。こちらこそよろしくお願いします。いつも子供達や妻がお世話になってます」

少し照れたような笑顔で、丁寧に挨拶をしてくれる長身で体格の良いご主人は、日に焼けた肌のせいか、いかにもアウトドア大好きと言つ秀囲気があった。

今回行くキャンプ場の名前を聞いて、私は驚くと共に、因縁めいたものを感じてしまった。

彼と行ったキャンプ場……

あまりの偶然に、キャンプの記憶を更新しようなどと思ったからだろうか、そんな風に思った自分が恨めしくなった。

西森家の車に乗せてもらって、七色峡キャンプ場へ向かう。車窓の景色は見覚えのあるもので、私の心は無意識に時間を遡る。さかのぼ

あの日の彼の運転する横顔。車に流れるあの頃流行っていた音楽。時折こちらを見る彼の優しい眼差し……。

車は溪谷沿いをどんだん山の奥へと進んで行く。私の記憶も過去

へと進んで行く。

彼が話した子供の頃のキャンプの話。笑いながらテントを張り、一緒に食事の用意をし、食べたバーベキュー。線香花火の儂い光と見上げた夜空の星のきらめき……。

蘇る思い出に溺れそうになって我に返ると、心の中で苦笑した。K市にいる時にはこんなにリアルに思い出さなかった。そして、私は今更ながら気付いた。彼と過ごしたこの街へ帰って来たからだ。思い出の場所がここにあり、その上、彼に再会した事で、記憶の鍵が壊れてしまったようだ。

彼との思い出の場所の全てで、新しい記憶に更新したら、もうこんなに苦しい想いをしなくていいのだろうか？

少しづつ、別の思い出に置き換えていけば、いつか忘れてしまえるのだろうか……

「美緒ちゃん、どうしたの？ 車に酔った？」

さつきから黙りこくって、車窓の風景ばかり見ていたからか、それとも私が分かりやすい表情をしていたのだろうか……西森さんは助手席から振り返って、心配気に声をかけてくれた。

「ううん。大丈夫。4年前に来た時と変わらないなって、見てただけだから……」

ダメだ、ダメだ。これから始まるのに、こんな事で落ち込んでいたら……

「そうだね、この辺は変わらないね……それにしても、お天気もいいし、天気予報も2日とも晴れマークだったし……良かったね」

「ホント！ キャンプ日和だね。でも、紫外線強そうだね」

「そうそう、日焼け止め塗って来た？　ずーっと外にいるから、焼けるよ〜」

西森さんはそう言って、楽しそうに笑った。その笑い声に、楽しい気分になって来た。

うん。大丈夫。

新しい思い出で、全てを塗り替えてしまおう。

西森さんと一緒なら、楽しい2日間になりそうだ。

キャンプ場に着くと、さすがにアウトドアに強い西森家の人々は、テキパキとテント2つとタープを設営し、キャンプの準備を進めていく。子供達も慣れてきているのか、できるお手伝いをしている。私は言われるまま手伝うのが精一杯で、全てのセッティングが終わると、ホッと気が抜けた。

「美緒ちゃん、お疲れ。私ちよつと管理棟まで行って来るから、休んでいて」

私の疲れ具合を見て、西森さんは労いの言葉と共に、笑いながら出かけて行った。元気のあり余る子供達は、西森さんのご主人がキャンプ場の散策に連れ出してくれた。

私は、タープの下の影で、折り畳み式のアームチェアに腰掛け、真夏の日差しを反射させてキラキラ輝く川の水面を、ぼんやりと見つめていた。

私の名を呼ぶ声に、声のするほうを見ると、西森さんが嬉しそうに顔をして走ってくる場所だった。何をそんなに急いでいるのだろうと、首をかしげて彼女の到着を待つと、「美緒ちゃん、美緒ちゃん」とますます嬉しそうに、タープの影の中に走りこんで来た。

「ねえ、ねえ、さっきトイレに寄ったらね、いい人にあっただよ。誰だと思う？」

西森さんの瞳は、当てて、当ててと訴えながら、キラキラ光っているようで、ちよつと引いてしまった。

トイレで会ったいい人？

私はやっぱり首をかしげて、分かりませんというメッセージを視線に込めた。

私のそんな反応にもガツカリする事無く、彼女は言いたくてウズウズしてたのか、焦るように口を開いた。

「あのね、愛先生に会ったんだよ」

えっ？

愛先生？

それって、まさか……。

私の中に嫌な予感がジワリと広がりだす。

「ふふふ、あのね、愛先生だけじゃないんだって……虹が丘小学校の先生7人で来てるんだって」

「先生7人で？」

ドキドキ……まさか……。

「そう。お盆過ぎに6年生のキャンプがあるんだけど、その下見兼予行練習だって。6年の担任2人に有志5人がくつついてきたんだって言うってた。あのね、その中に、守谷先生もいるんだよ。後で、挨拶しに行こうね」

嬉しそうに話し続ける西森さんは、私の反応など気にしないのか、誰先生がいるのかを説明してくれる。知らない先生達の名前が頭の中を通り過ぎる。分かっているのは、彼の名と愛先生。



「ママ、あのね、川の水、すごく冷たかったよ。それからね、あっちの方にアスレチックがあったよ」

拓都が嬉しそうに報告してくれる。西森家の兄智也君も弟の翔也君もニコニコ顔で、午後から川で遊ぼうとか、夜は花火するんだよねとか、興奮気味に話している。

良かった。拓都が楽しいなら、それでいい。

それでも、昼食の用意のバタバタですっかり忘れていたらしい西森さんが、急に思い出したのか、声を張り上げた。

「そうだ！ 言うの忘れてたけど、守谷先生や金子先生や愛先生達もキャンプに来てるんだよ」。後で挨拶に行こうね」

私も同じように忘れていたけど……と言っても、心の片隅に押しやっていたただけけど……どうして、思い出すかな？ もうずーつと忘れていて欲しかった。これから起こる事を想像するだけで、私の心は疲弊していく。

「えっ?! ママ、ホント?! 守谷先生も来てるの?」と、これは翔也君。お兄ちゃんの智也君も「金子先生が来てるの?」と嬉しそうに声をあげた。金子先生は、智也君の担任の先生らしい。拓都も同じように、驚いた声をあげ、嬉しそうにニコニコして私の顔を見上げた。

「へえ、先生もキャンプに来てるのか……どこにいるの?」

西森さんのご主人は、すぐにテンションの上がる西森さんと違い、どこかのんびりとして落ち着いている。

「あのね、バンガローの方だって。パパ、場所分かる?」

「ああ、管理棟の向こう側にバンガローが幾つか建ってたよ」



「あつ、そうだった？ 随分ここに来てなかったから、他のキャン  
プ場とごっちゃになって分からなくなっちゃった」

エヘへと笑う西森さんを、「おまえは覚える気が無いんだろ？」  
と笑うご主人に「頼りにしてまーす」と返している西森さんとご主  
人を見て、お似合いの夫婦だなと、私は少し羨望の混ざった眼差し  
で見ている。

昼食の後片付けを済ますと、早速に先生達に挨拶に行こうと子供  
達が言いだした。私は留守番をしてるからと言おうと思ったら、先  
にご主人に「留守番してるから、行っておいで」と言われてしまっ  
た。

私は笑顔でいられるだろうか？

私が辛い顔をしたら、西森さんに気付かれてしまう。

彼女には拓都との関係については告白したけれど、担任である彼  
の事は言っていないし、言ってもいらない。だから、この二日間を  
できるだけ彼に会わずに過ごしたい。

でも、この状態で、私も残るとは言えないし……結局行くしかな  
いのだと、腹をくくるしかなかった。

彼と愛先生が付き合っているかもと知ってしまった今となっては、  
二人が一緒にいるのを冷静に見る事ができるだろうか……

私は運命に試されているの？

何のために？

もしかして、彼を傷つけてまでした決意の強さを試されているの  
だろうか？

それならば、立ち向かうしかない。後悔しないためにも……

## #27: キャンプ【後編】（前書き）

前編と後編に分けたのに、前編の倍ぐらいの長さになってしまいました。

中編も作ろうかと思いましたが、同じ事なので一挙に更新します。長いのですが、読んで頂けたら嬉しいです。

## #27：キャンプ【後編】

早く早くと急かす子供達に引つ張られるように、私達は、駆け出して行く子供達の後を急ぎ足でついて行く。子供達は先程の散策でバンガローの位置が分かっているのか、真っ直ぐにそちらを目指して駆けていく。

バンガローが並んでいる一画に入って行くと、吹き抜けの屋根だけある下に木のテーブルと椅子が並んでいるスペースがあり、そこにいくつかのグループが食事をしていた。そんな中に先生達のグループもいた。テーブルの上には手作りと思われるお弁当が広げられ、缶ビールを飲みながら楽しそうにお喋りして食べていた。男性4人と女性3人のグループの中に、彼はいた。そして、隣りには彼女が……。

「せんせい、守谷先生！」

3人の子供達が、先生を見つけたのか手を振りながら走って行く。お兄ちゃんの智也君にとっても、守谷先生は去年の担任だ。

子供達の声に、驚いて先生全員がこちらを見た。西森さんと私は、軽く会釈すると、子供達の後を追って、先生達に近づいて行った。

「こんにちは、さつき愛先生からキャンプに来ていらっしやると聞いて、挨拶に来ました」

西森さんが挨拶をするのに続いて私も「こんにちは」と挨拶をすると、みんなからも挨拶が返って来た。顔に張り付けた笑顔は不自然じゃないだろうか？

「ああ、聞いていますよ。偶然ですね。守谷先生のクラスの役員さん達だって？」

私達が一番近い位置にいた、30代ぐらいの男性教諭がにこやか

に話しかけて来た。

「はい、そうなんですよ。今日は6年生のキャンプの下見だったって聞きましたけど……」

「そうです。私と谷崎先生が初めてのキャンプの引率で、雰囲気と時間配分を見るために、当日と同じスケジュールでキャンプをしてみようと話していたら、守谷先生がキャンプなら参加したいと言ってくれまして、そうしたら、いつの間にか人数が増えていたんですよ……これだと仕事と言うより、遊びみたいですね」

苦笑しながら言い訳の様に話す先生の右手には、缶ビールが握られ、完全に休日モードだった。

子供達は守谷先生のところへ行って楽しそうにお喋りをしている。彼は一番奥の席に座っていたので、私達が立つ位置から一番遠い。子供達と彼とのやり取りを、目を細めて楽しそうに見ている愛先生は、時折子供達に話しかけたりして、その輪の中に自然に溶け込んでいた。

別に二人がイチャイチャしている訳でもないのに、二人の間の自然な雰囲気胸が詰まって、目を逸らす。運命に立ち向かおうと決意して来たのに、早くも私の心は逃げ腰だ。

そして、私は居た堪れなくなつて、小さな声で「お邪魔しちゃいけないから、そろそろ行くこうか？」と西森さんに話しかけた。けれど、今の西森さんはすんなり帰ってくれる訳もなく、「そうね、守谷先生と金子先生に挨拶をしてからね」と返つて来た。

さっき挨拶したと言うのに、わざわざ傍まで行って挨拶をすると言っのか……。

心の中で盛大に溜息を吐き、西森さんの後を付いて行く。できるだけ視線を合わせないように気を付けながら、笑顔、笑顔、と言いつつ聞かせる。

「守谷先生、子供達がすいません」  
そう言いながら担任に近づいて行く西森さんの後ろに隠れる様に付いて行く。

「いいえ、かまいませんよ。それにしても、偶然ですね。西森さんはよくキャンプされるんですか？」

彼はいつもと変わらぬ調子で会話を続ける。

「ええ、毎年夏にはキャンプに行くんですよ。それで今年は、翔也が拓都君と行きたいって言うので、篠崎さんも誘ったんですよ」

嬉しそうに受け答えする西森さん。私の名前は出さないで欲しい。私は視線をどこに向けていいのやら……俯いたままでも変だろ……。

キャンプの話が続いている西森さんの斜め後ろから覗くように彼の姿を伺い見る。Tシャツにジーンズの彼は、あの頃と変わりがなくて、切なくなる。こんなに傍にあの頃のままの彼がいるのに、二人の間は何万光年も離れている様に遠い。

「私はこのキャンプ場は、子供達が生まれる前に来たきりだから、10年ぐらい前かな？ 篠崎さんは4年前に来た事あるそうですね」  
何気ない会話の何気ない言葉が、思い出を引き寄せる。思わず彼の方を見てしまうと、彼と視線が合った。一瞬彼の眼が見開いた様に見えた。きつと私も同じ様に驚いた顔をしたのかもしれない。すぐに引き剥がす様にお互いが視線を逸らし、笑顔に戻す。そんな私達に気付きもせず話し続ける西森さんに、今は救われた思いだった。

子供達を連れて、今度は金子先生に声をかける西森さん。金子先生は20代ぐらいの女性の先生だった。そして、やっとこの場を離

れようとしていた時、最初に話しかけて来た6年の担任の男性教諭がまた声をかけて来た。

「今夜、あちらの広場でキャンプファイヤーをしますので、よかつたら来て下さい。大勢の方が楽しいですから」

「本当ですか？ 本格的ですね。是非参加させてください」

西森さんは嬉しそうに答えている。

千裕さん……独断ですか？ 私の意見は聞いてくれないの？

それでも、事情を知らない彼女の前では、私は従うしかなかった。

自分達のテントのところまで戻って来ると、急に西森さんが真面目な顔になって私の顔を覗き込んだ。

「美緒ちゃん、疲れてる？ 大丈夫？ さっき全然話をしなかったけど……」

さっきは笑顔を作るのに必死で、お喋りまで気が回らなかった。そう言えば、挨拶しかしていない。

「大丈夫よ。知らない先生が多かったから、ちょっと人みしり？」

私は、西森さんが心配しないようにと、少しふざけて返した。

「千裕がお喋りだから、篠崎さんは口を挟むすぎがなかったんだよ」  
西森さんのご主人が笑って指摘する。あ……それも少しはあったかも。

「もうパパったら！ 私はそこまでお喋りじゃありません」

ブンと怒って見せる西森さんに、ハハハと笑って返すご主人。やっぱりこの二人は、夫婦なんだなと、独身の私には伺い知れない絆を感じた。

テントサイト近くを流れる川は、水の深さが大人の膝までぐらいで、水遊びにちょうど良く、子供達は水着になって遊び始めた。私も素足を水につけてみたら、冷たくて気持ち良かった。拓都の楽しそうな顔を見たら、連れて来てもらって良かったと思った。たとえば、辛い思いをしたとしても……。

もうこれで、彼と会うのはキャンプファイヤーの時だけだから、何とかやり過ごせば、楽しく過ごせるだろう。気持ちを前向きに。終わった恋に囚われていないで……。

3時のおやつにスイカ割りをしてから食べようと、子供達に目隠しをして、順番にスイカを叩かせる。あらぬ方向へ行ったり、地面を叩いたり、皆で声をかけて誘導するけれど、ちぐはぐな行動に大笑いする。皆でひとしきり笑った後、割れたスイカを食べやすいように切って食べると、いつものスイカよりずっと美味しく感じた。

子供達と西森さんのご主人がまた川遊びに戻ると、私と西森さんは夕食の準備に取り掛かった。いつもは家族全員で食事の用意をするらしいが、今日は私がいるので、みんなにはもうしばらく遊んでいてもらう事にした。

夕食はパエリアとチキンソテーと野菜スープと言うメニューで、自宅でもパエリアなんて作った事がなかったので、驚いた。さすがにキャンプ慣れしている西森さんは、食材は全てあらかじめ切っており、後は調理するばかりとなっていて、その準備と段取りの良さに、私は感心してしまった。

調理途中で子供達が帰ってきたので、服に着替えさせると、料理の匂いに釣られてみんなが集まって来た。子供たちにも手伝いをさせながら、出来上がった料理をテーブルに並べると、キャンプだと言う事を忘れてしまう程の、豪華なディナーだった。

夜だからと言う事で、私も缶ビールを一本頂いた。ちょっとぐら

い酔っていた方が、いろいろ考えなくてもいいかもしれない。

お料理が美味しくて、昼間の暑さが和らぎ涼しい川風が吹くと、ビールとの相乗効果でとっても気持ち良くなってきた。

「うん。これがキャンプの醍醐味かしらね？」

西森さんが少し頬を赤くして、ビールを片手に言う。

「ホント、気持ちいいねえ」

私も目を閉じてビールで少し火照った頬を撫でていく川風を感じていた。

「キャンプでのビールは最高だねえ」

西森さんのご主人ものんびりと口を開いた。智也君もそんな父親を見て、ジュース片手に「キャンプのジュースは最高だねえ」と言った。それを聞いて、みんなで又笑った。

「ママ、美味しいね。来てよかったね」

拓都が私を見上げてニツコリと笑った。私も微笑み返すと「翔也君に誘ってもらって良かったね」と言った。

「食事が済んだら、キャンプファイヤーに行くよ」

食事を終えた西森さんが声をあげて立ち上がった。それを聞いた子供達もわーいと声をあげた。みんなで後片付けを済まし、私達は広場へ向かった。

もう陽は落ちて、辺りは薄暗くなっていた。キャンプ場の中にはところどころ街灯があり、ぼんやりと辺りを照らしている。西森さんのご主人が、優しい明かりのランテラを持って誘導する様に先頭を行く。その周りを子供達がキャツキャと騒ぎながら付いて行く。私と西森さんも、お喋りしながら、その後を歩いて行った。

陽が落ちて一層涼しくなってきた空気の中を歩いているのは、と



ても気持ちがいい。お酒のせい、少しフアフアとしたい気分、これから起こる不安も、何とかなるさと言う鷹揚おつような気持ちになっていた。

広場の方に炎の灯りが見えて来た。風に乗って歌声も聞こえて来た。もうキャンプファイヤーを始めている様だ。

広場に到着して「こんばんは」とみんなが挨拶をすると、先生達も歓迎ムードで「こんばんは」と返って来た。

昼間と違い、暗闇の中の炎の灯りに照らされているみんなの顔は、和やかなのに何処おこか厳かな雰囲気もあって、変に緊張する。

火の周りに場所を開けてもらい、私達は座らせてもらった。斜め向こう側に彼がいるのが見えた。隣にいる愛先生と何か話している。このキャンプファイヤーのせいだろうか、二人の雰囲気が一層親密な物に見える。私は目を逸そらした。ビールの効果も、目の前の光景に、一遍に吹き飛んでしまったようだった。

それからキャンプファイヤーの周りで、6年生のキャンプ本番で歌う予定の歌を歌ったり、本番では児童が班ごとに出し物をする事になっているので、今日は先生達が順番にいろいろな芸を披露してくれた。

6年の担任の先生が、一発芸とも言える様な校長先生の真似をして見せたり、他の先生が怖い話をしたりした。愛先生達女性3人は、練習していたのか女性アイドルグループの歌を振付付きで歌った。これには子供を含め男性陣に大いに受けていた。

そして彼は、今流行っているバラード曲をアカペラで歌った。隣にいる愛先生がウツトリとして見つめている。

私は目を閉じて聞いた。

彼の歌う時の低音の甘い声が、過去の記憶とリンクする。

彼の腕の中で、私だけのために歌ってくれた彼の声と重なる。

無意識に過去の記憶の中を、彼の声を聞きながら漂い続けた。

彼の歌が終わって目を開けると、彼と眼が合った。でもそれはすぐに暗闇の中に紛れていった。

「守谷先生って、ホント、噂通り歌が上手いんだねえ。なんだかすごく得した気分。今年はやっぱいい年だわ」

西森さんもウツトリした表情で、私にだけ聞こえるように言った。その声に現実に引き戻された。また彼との思い出に浸っていた自分を嫌悪する。その時目の片隅に、彼と愛先生が仲良く話をしている姿が焼付いた。

いい加減に目の前の現実を受け入れなければ……。

最後に簡単なダンスをしようと、歌に合わせてみんなで手を繋いだりしながら、火の回りをグルグルと回って踊った。

子供達もキャンプファイヤーは初めてだったけれど、充分楽しめていたようだった。拓都の楽しそうな横顔を見ながら、そろそろこの想いに踏ん切りをつける潮時なのだと、感じていた。

そうしてキャンプの夜は更けていった。

私は寝付けないまま、短い睡眠を繰り返し、とうとう眼が覚めて起き出してみると、時間は朝の4時半。外はもう薄っすらと明るくなつて来ていて、夜明けが近い事を教えていた。

隣で寝ている拓都は、昨日の疲れのせいかぐっすりとよく眠っている。私は思い切って、携帯電話だけポケットに入れると、散歩に出る事にした。

記憶を頼りに川沿いの遊歩道を歩いて行く。道が川沿いを離れて森の方へ曲がった辺りから、道を外れてそのまま川沿いを歩いて行くと、川は流れが急な水遊び禁止区域になる。上流のせいか大きな岩があちらこちらに転がっていて、子供達が昼間遊んでいた人工的

な河原と違い、自然のままの河原が続いていた。

キャンプに来ていている人がこの辺にも入り込んでいるのか、道は無  
いけれど獣道の様に、草が踏まれて通りやすくなっていた。

確か、この辺……4年前の記憶を手繰り寄せながら、慎重に歩い  
て行くと、小さな滝（滝とは言えない程の川の中の落差による水が  
垂直に落ち込む所）がある場所にたどり着いた。

それは、4年前に彼と散策していて、偶然に見つけた滝だった。  
あの時の様に、近くの岩に腰掛けると、その水が落ちる様を見つめ  
る。早朝の静寂の中、落ち込む水音が響いていく。

バカだな……私。

未練タラタラで……。

二人の姿から目を逸らしたって、現実は変わりはないのに……。  
彼の幸せを一番に祈らなければいけないのに……。

この気持ちを封印するのじゃ無くて、すっぱりと切り捨ててしま  
わなければ……。

美緒、もういい加減に、潮時だよ。

いつまでも、昔の恋に絶すがっていたらダメだよ。

あの写真も、消してしまわないと……。

彼から送られたたくさんの写メールの中、たった一つだけ消せな  
かったあの写真。

二人の心が繋がった虹の写真を、私は自分への戒めの為に残した。  
K市で拓都と過ごした3年間、一人で頑張っている事にどうしよ  
うもなく辛くて寂しくなった時、この写真を見て、彼へと繋がるこ  
の虹を、私が壊したのだと、だから、一人で頑張らなきゃいけない  
のだと、言い聞かせた。

それなのに、再会した途端、自分の中に封印した彼への想いに翻  
弄されて、どうしようもなく弱くなってしまった私の心。

でも本当は、この写真を待ち受けにまでして残しているのは、あ

の頃の彼に繋がっているこの虹の写真に縋すがっていたから……何処かで彼に繋がっている様な気がして、私は思い出も、彼への想いも手放せないまま、身動き取れなくなってしまっていた。

もう、潮時だよ。

私は、あの虹の写真を見つめながら、削除の操作をするのをためらった。

その時、ガサリと落ち葉を踏みしめる音に、慌てて振り返った。そこには、とても驚いた顔をした彼が立っていた。

私は携帯を握ったまま、周りの空間ごとフリーズした気がした。彼の視線と私の視線が、絡まったままその空間に固定された様だった。

「参ったな……」

彼の言葉が、解凍のスイッチだったように、その一言で私も我に返り、携帯をポケットへ入れた。

「あ、あの……おはようございます」

挨拶の言葉をどうにか言つと、私は立ち上がった。

ここにはいけない。

私の理性がそう命令する。

「ああ、おはようございます」

彼は私の挨拶に答える様に返すと、こちらに近づいて来た。

どうして？

一緒にいる所を誰かに見られたら……先生達も沢山いるのに……愛先生だって……。

「すみません。失礼します」  
私が立ち去ろうとしたら、彼は困った様な顔をした。

「そんなに慌てて、行かなくてもいいよ。まだ早朝だし、誰もここまでは来ないだろうし……」

それは、どういう意味？

だれにも見つからないから、ここにいろと？

私が困惑したまま立ち尽くしていると、彼は傍にあった岩に腰掛けた。そして私に「座れば？」と傍の岩を指差した。

その言葉にコントロールされた様に私は彼が指し示した岩に座る。二人の間は1mも無い。心臓はさっきからドキドキとどんどん速く打ち出し、頭はさっきまで考えていた事など、すっかり飛んでしまっていた。

「驚いたよ。こんな所で会うなんて……それも、このキャンプ場だなんてな」

彼は滝の方に顔を向けたまま苦笑しながら話し、最後にこちらを一瞥した。

「ごめんなさい。先生達も来るって分かってたら、断ってたんだけど……」

私は居た堪れなくなった。せつかくのキャンプなのに、私なんかに会って、嫌な思いをしたのかもしれない。彼女と一緒になのだから、それは当たり前だ。

「いや、別に会った事が悪いだなんて言っただけだよ。ただ驚いただけ……そもそも、小学校で再会した事自体、驚きだったけど……」

今の彼は担任の彼じゃない。砕けた物言いは、あの頃のままの慧だ。でも、私は保護者の仮面を脱ぐ事は出来ない。それなのに、彼

の砕けた物言いを喜んでいる自分が情けなかった。

「その事も、本当に申し訳なくて……知っていたら、こちらへ転勤しなかったのに……」

「いやいや、それこそ偶然なんだから、仕方がないだろ？ そんな事言ったら、この県で先生になった俺の方が悪いと言う事になるだろ？」

彼がこちらを向いて、照れたように苦笑している。

私は首を左右に振った。

そんな……あなたは先生になるのが夢だったんだから……どこで先生になるうが、あなたの勝手だもの……

「美緒は俺に会いたくなかったんだろ？ だから、再会した事を申し訳ないなんて言うんだろ？」

彼は急に真剣な顔で私を真っ直ぐに見つめて来た。

あの頃のように名前を呼ばれて、嬉しいと思ってしまう自分を戒めながら、彼の質問の意味を考えた。

会いたくなかったのだろうか？ そう、こんなに苦しい想いをするのなら、会いたくなかった……。

でも……本当は、会いたかった。いいえ、彼の元気な姿を見られるだけで良かった。

「そんな事……考えた事もなかったし、もう二度と会う事がないと思ってたから……でも、あなたが先生になった姿を見て、嬉しかった。夢が叶って、おめでとう」

私は、これだけはズーっと言いたいと思っていた。立派に先生を務めている姿をこの目で見られた事が、何よりも嬉しかった。

私は保護者の仮面を外して、伝えられた事に、少し興奮した。

……言ってしまった。これで思い残す事もない。

「あ、ありがとう……もう3年目なんで、先生になれた感動を忘れかけてたよ。そうだな、夢だったんだよな……」

彼は私の突然のお祝いの言葉に、少し照れたような反応をした。

私は、お祝いを言えた事に、少し余裕ができて、彼に笑顔を向けた。

「これからも、頑張ってください。役員として精一杯協力しますから」

私はもう一度仮面をかぶり直し、彼との距離感を自覚した。

大丈夫だ。もうこれで本当に……。

私は、会話の締めくくりの言葉を告げると、立ち上がろうとした。

「あ、あの……拓都は……」

彼は私が立ち去ろうとした事に気付いたのか、引き留める様に何か言いかけた。

「えっ？」

「あ……拓都は……いい子だね。美緒の育て方がいいんだろっな」

私は面食らった。いきなり褒められて、どこかむず痒い。

彼は拓都が私の子でない事は分かっているはずだ。でも、誰の子供なのかは、尋ねてこない。そう言う事は個人情報なので、うかつに訊けないらしい。

それなのに育て方を褒めてくれるなんて……

「あ、ありがとう」

何か言ったらボロが出そうで、お礼の言葉しか言えない。

そして、私はゆっくりと立ち上がった。これでいいんだ。これで少しは二人の間のぎこちなさが取れるかも知れない。

私は「お先に」と会釈して歩き出した。

「あつ、美緒」

2、3歩行った所で、呼びとめられた。そして、振り返って首を傾げた私に、「美緒は今、幸せ？」と彼が訊いた。

えっ？

それは……元カノが不幸だったら心配だから？

自分を振った元カノの幸せまで心配してくれる……彼はそう言う人だった。一度懐に入れた人には、とことん情に厚い。

そんな彼に心配かけないために、私はとびきりの笑顔で答えよう。

「うん。幸せだよ」

あなたは？ とは訊けなかった。心の中で、あなたも幸せでありますようにと祈る。

私は幸せだ。拓都がいるもの。あなたがいなくても、歩いて行けるんだよ。

「そっか、良かったよ。安心した」

その言葉を聞けて、私も安心したよ。こんな私の事を心配してしてくれたんだね。もう、肩の荷をおろしていいよ。私の事は忘れていいから……。

笑顔が涙でゆがまない内に、私は背を向けた。「じゃあ、また……」と言うと、速足で彼から遠ざかった。

どんどんと距離が離れていく。私達はもう過去には戻れない。時は不可逆。前に進むしかないんだよ。

そう自分に言い聞かせて、零れそうになる涙を必死に押し留める。今泣いてしまったら、止まりそうにないから。

さようなら、慧。



あなたこそ、幸せになって……。

太陽はいつの間にか山の向こうから顔を出し、今日の暑さを約束している。

遊歩道に戻る所で、愛先生に会った。「おはようございます」と言う笑顔が幸せに輝いている様に見えた。私も「おはようございます」と返して、その場を去ろうとしたら、彼女に問いかけられた。

「あの……お散歩ですか？ 守谷先生を見かけませんでしたか？」

あ……守谷先生を探しに来たんだ……それとも約束していたとか

……

私には関係ない。

「はい。そちらの川沿いの所でお見かけしましたよ」

笑顔で答えると、彼女も恥ずかしそうに笑った。そして「ありがとうございます」と言うと、私の指し示した方向へ向かって歩き出しました。

彼女の嬉しそうな後ろ姿をしばらく見つめて、どうぞ慧を幸せにしてあげて……と心の中で呟いた。

## #28：友の引越し

バカだよ……慧は。

本当に、バカだよ。

私なんか、恨まれて当然なのに……。

どうして私なんかの幸せを気にするのよ。

本当にバカなんだから……。

私は、あのキャンプの早朝の出来事を思い出して、大きな溜息を吐いた。

あの直後は、彼が先生になれた事にお祝いを言えた事で私の心は満たされていた。

だけど、あの時の彼を思い出すと、辛くなる。

あんな仕打ちをした元カノを、恨むどころか幸せを気にしてくれていたなんて……。

私は彼を安心させてあげられただろうか？

彼の肩の荷を下ろさせてあげられただろうか……。

彼の方が幸せにならなきゃいけないのに……それとも、もう今が幸せだから、私の幸せを心配してくれたのだろうか？

そうかもしれない。自分が幸せだから、私にも幸せになって欲しいと思ってくれたのかもしれない。

彼女に向ける彼の優しい眼差しを思い出す。

二人が仲良く話をしている姿が目には焼き付いている。

彼は、彼女と幸せなんだ……。

彼の幸せを願っていると言っのに、心にチクリと痛みが走る。

ああ、私って、まだまだだな……。

でも、こんな私の幸せを心配してくれた彼の為にも、これからは

笑顔で彼に接しよう。

彼女との幸せを、心から願えるように、私の中の彼を思い出に変えていこう。

大丈夫、できるよね、美緒。

\*\*\*\*\*

「ねえ、私、由香里さんがこの街へ来てくれる事に浮かれていて忘れてたけど、結婚式はするの？」

お盆が過ぎた頃、由香里さんから住む所が決まり、2学期から虹ヶ丘小学校へ通えるようになったと連絡があつた。その時に、引越しはお任せパックで済ますから、落ち着いたら遊びにおいでと誘つてくれた。それで夏休みも終わりの8月31日、由香里さんの新居となったマンションに拓都を連れて、お祝いがたらに遊びに来たのだった。今日は休日出勤した代休と言う事で平日だったので、ご主人には会えなかつたけれど、由香里さんとゆっくり話ができると喜んでやって来た。

「ふふふ、いつ訊かれるかと思つてたけど……結婚式はしないわよ。あのね、もう籍は入れたの。私はもう川北由香里なのですよ」  
由香里さんは、悪戯を告白する様に、笑いながら教えてくれた。

「え　　！　　そうなんだ！　　おめでとう。ご主人は川北さんって言つただね。でも、ご主人の方も結婚式をしなくても、ご両親とが良かったの？」

よく考えたら、もう入籍しているのは当たり前で……子供たちの転校も明日に迫っているのだから……。

「もう、彼のご両親は亡くなっているのよ。九州の方にお兄さんが

いてね、お盆に挨拶をして来たの。実はね、彼もバツイチなのよ。だから、結婚式はもういいの。代わりに、家族でホテルのディナーを食べて来たのよ」

由香里さんは、上機嫌で話す。いつも私の悩みの聞き役ばかりしてもらってたから、今日は私が聞き役に回ろう。心の片隅で、私の話題にならない事を祈りながら……。

「それで、由香里さんは仕事はどうするの？」

彼女は、保険の外交の仕事をしていた。結婚した川北さんはその保険会社で上司だったらしい。彼女は契約社員だったので、結婚のために、いったん仕事は辞めた。しかし、彼女はこの仕事が好きだと言っていたから、また続けるのだろうか？

「そうなのよね。彼と同じ職場はなんだか居づらいから、彼と同じ支社じゃ無くて、営業所の方で働かせてもらえないかと思っているのよ」

「そうか……やっぱり仕事は続けるんだね。あの仕事は由香里さんには天職なものね」

「美緒だってそうでしょう？ 高校生の時からずっと今の仕事に着くために頑張ってたんでしょ？ だったら、天職よ」

そんな風に考えた事がなかった。ただいつも一生懸命勉強して、働いて来ただけだ。

……彼もきつと、小学校の先生が天職なのだろうな……。

ふと彼の事を思い出した事に気付き、ドギマギしてしまった。なんで、すぐに彼と結び付けるかな……。

「美緒？ どうしたの？」

自分の考えにうるたえてしまったのを、目ざとい由香里さんに気付かれてしまったようだ。

「ううん。なんでもないよ。ただ、今の仕事が本当に天職になって、思っただけ……」

「そう？ それならいいけど……あつ、そうそう、昨日にね、虹ヶ丘小学校へ行って来たんだよ」

「あ……そうか。転校の挨拶に行ったんだね？ それでクラスは何組になったの？」

「ふふふ、守谷先生とお話したわよ」

由香里さんは意味ありげに笑いながら言った。

「え……！ じゃあ、1年3組なの？」

「そう言う事。美緒が忘れられないの、分かったわ。あそこまで男前だとはね。想像以上だったよ」

「ねえ、まさか、彼に何か言わなかったでしょうね？」

「何かって？ 篠崎さんとはK市にいた時からの友達ですって事は言ってたわよ」

「それだけ？ 本当に？」

彼女の意味ありげな表情が気になって、私はしつこく確認した。

「何？ 他に何か言う事あった？ 美緒が今でも先生の事を想ってますって？」

由香里さんは、悪戯っぽい眼をして私の顔を覗き込んだ。

「ま、まさか、そんな事、言っていないよね？」

私は、それが事実だったらと思うと怖くて、恐る恐る尋ねた。

「言うわけないでしょ。想いは自分の口で言わなきゃ……ねっ」

由香里さんは、嬉しそうにニヤリと笑ってみせる。

「そう言えば、お兄ちゃんの、礼君のクラスは？」

私はまた由香里さんに痛い所を突かれそうな気がして、話を変えた。礼君は、西森さんところの智也君と同じ4年生だ。もしかしたら同じクラスかも？

「礼はね、4年4組だよ。担任は大原先生って言う、女の先生」

あ……愛先生……。

由香里さんが大原先生と言った途端、私の顔は強張ったかもしれない。私の顔を見て訝いぶかしげな表情をした。

「担任、愛先生なんだ……」

何と言う偶然なんだろう。愛先生と彼が担任だなんて……。

「え？ 大原先生って愛先生って呼ばれてるの？ でも、担任が愛先生だと何かあるの？ そう言えば……守谷先生も今の美緒みたいな顔をしたなあ」

「えっ？ どう言う事？」

「あのね、初めは大原先生との対面だったの。下駄箱を教えてもらって、4年4組の教室まで案内してもらって、話を聞いたのよ。大原先生って、おとなしそうで真面目な感じの先生だった。それで話

してると、笑った時かな？ 美緒に雰囲気似てなってるなって思ったのよ。よく見ると顔立ちも似てる感じがするし……でも、大原先生はきつと見たままの雰囲気先生だろうと思うの。美緒はその見かけと、親しくなるにつれて、ギャップが出て来るものね」

私がここで嫌な顔をして「ギャップってなによ？」って言ったら、由香里さんはクスクス笑い出した。そして、話を続けた。

「まあ、まだこちらのお母さん達の間では猫を被ってるかも知れないけど……とにかく、大原先生はなんとなく美緒に似てなってるいなながら話してたのよ。それでね、大原先生の説明の後、今度は守谷先生が同じように下駄箱を教えてくれて、1年3組まで案内してくれて、説明を聞いたんだけど……篠崎さんとK市にいた頃から友達ですって話をした時に、ついでに大原先生って、篠崎さんにちょっと似てますよね？ って言ったら、さっきの美緒みたいな表情をしたわけ」

そう説明した由香里さんは、さあ白状しなさいと脅すような眼差しで見つめて来た。

ああ、由香里さんのその眼差しに逆らえる訳がない……。

「あ、あのね、大原先生は、彼の恋人だと思ってる……たぶん、そう」  
私がそう言うと、由香里さんはやっぱりと言う様な表情をした。  
彼女は勘がいいから、誤魔化しきれないのよ……。

「ふん。守谷先生は……美緒の元カレは、美緒を忘れられなくて、美緒によく似た同僚と付き合ってる訳だ」

「違うよ！ もう3年以上経ってるのに、いつまでも私の事なんて想ってるはず無い。私と愛先生が似てるかどうかわからないけど、彼の好きになるタイプだったと言うだけじゃないの？」

私は由香里さんの言葉に驚いた。そんな訳無い。私の事なんて……

…あんなひどい仕打ちされた時点で、恨んで嫌になったはずだ。たとえそうじゃなくても……3年の歳月は、私との事を過去にしまうには充分過ぎる時間で……。それでも、私が幸せかどうか、気にしてくれていたんだ……。

「守谷先生が、大原先生と付き合い始めた理由なんて、どうでもいいけど……美緒は二人が付き合っているって言う噂を信じて、もう諦めてしまっのね？」

「噂も何も……二人が仲良く一緒にいる所を目にしたもの。彼が彼女の事を優しい眼差しで見つめているのを見てしまったもの。疑いようがないよ」

「へー、そんな現場をいつ見たの？」

あつ、拙い事を言ってしまった。

私は由香里さんにキャンプでの話はしていなかった。していないと言っか、できなかった。

勘の良い彼女だから、まだ中途半端でしかない私の決意を見抜いて、私の心の綻びを突かれたら、また弱くなってグラつきそうだから……。

今まで散々、愚痴や弱音や悩みを聞いてもらって来たから、今回のキャンプで私が選んだ決意を、いつかは由香里さんに聞いてもらおうとは思っていた。

けれど、自分自身が自信を持って、自分の決意を由香里さんに語れるようになるまでは、もう少し黙っていようと思っていたのだった。

……でも、やっぱり由香里さんに隠し通す事は出来ないみたい。

私は観念して、由香里さんにキャンプでの出来事を淡々と話した。できるだけ感情が入らない様に……



「そんな事があつたんだ……美緒、頑張つたんだね」  
えっ？ こんな自己満足な中途半端な決意しかできない私を褒めてくれるの？

私の話を黙って聞いてくれた由香里さんは、聞き終わると暖かい眼差しで、優しい言葉をかけてくれた。いつもなら、突っ込みどころ満載の私の行動や決意なのに……

「私、これで良かったのかな？ 彼を安心させてあげられたかな？」  
私は心配になって思わず<sup>すが</sup>縋るように訊いた。

「大丈夫。彼も美緒が幸せだと聞いて安心したよ。それにしても、彼の気持ち、わかるなあ。私もね、こうして自分が幸せになると、あの酷い元旦那も幸せになって欲しいって思うもの。でも反対に、今の旦那と付き合うまでは、元旦那が誰かと幸せだなんて聞いたとしたら、きつと腹立って恨んでいたと思う」

由香里さんは、そう言って笑った。

……そうだよ。やっぱり自分が幸せじゃなきゃ、別れた相手の幸せまで願えないよね……自分が考えた事が正しかったと思いがら、胸に走る痛みを知らんぷりした。そして、由香里さんに合わせて、私も笑って見せた。

「美緒……美緒は恋愛事に不器用なくせによく頑張つたと思うよ。でもね、私には強がらなくてもいいのよ。私にだけは弱音を言つていいの。どこかで本音を吐き出せなきゃ、美緒自身が参っちゃうよ。あんまり無理すると、本当に病気になるっちゃうよ。美緒はただでさえ仕事も子育ても頑張ってるんだから……」

由香里さんは真剣な表情で、それでいて優しい眼差しで、私を諭すように言ってくれた。いつも彼女はそうだ。厳しい事を言ったかと思うと、私のありのままを受け止めてくれる優しさのある人。

私は由香里さんの言葉に、流れ出した涙を止める事ができなかった。何も言葉にできなくて、ただウンウンとつなずくだけだった。

#29：運動会（前書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。  
今回も、長くなってしまいました。  
どうぞ、よろしく願います。

## #29：運動会

2学期が始まり、9月26日の運動会目指して練習が始まった。体を動かすのが大好きな拓都は、家に帰ってからも、運動会でするダンスの練習に余念が無い。このダンス、今流行のアイドルグループが歌っている歌に振り付けをしたもので、いったい誰の趣味なんだ……と、初めて聞いた時に思ってしまった。

「ママ、あのね、守谷先生、すつごくダンス上手なんだよ」

ニコニコ顔で話す拓都の言葉に、本当はあまり出して欲しくない話題だと思いながらも、想像して噴き出してしまった。

……あの、腰をフリフリするところとか、最後の決めポーズとか……信じられない……

「そっか……運動会、楽しみにしてるね」

ニコリ笑って、拓都の頭をなでてやると、拓都は嬉しそうに「うん」と言って笑った。

2学期になって、もう一つ新たに始まったのは、週末の宿題に日記が出る様になった事。日記と言っても、「せんせい、あのね」で始まる、先生に話しかける様な数行の作文の事だった。こんな宿題は厄介なもので、何を書かせればいいのか……と悩んでいると、拓都の方があっさりと、「先生にね、お話する事を書けばいいんだって」と言う。しかし、日記と言えば、夏休みの絵日記のように、書くネタの為に出かけするのが当然の様に言われてカルチャーショックを受けたばかりだ。

週末毎に宿題の日記の為に、お出かけするなんて……無茶で本末転倒だと思う。しかし親として、ここは何か書くネタを提供しなけ

ればとか、こんな事を書けばとか、こんな風に書けばとか指導して、少しでも上手に内容良く書かせねばと意気込み、見栄を張ろうとするのは、親ゆえなのか……。

……いったい誰に見栄を張ろうとしてるのよ……読むのは担任だけなのに……。

元カレに見栄を張りたかったのかな……。

こんな事でも担任を意識して、悶々と一人悩みこんでしまう私など気にも留めずに、拓都は少し考えて、私の方を見てニコツと笑うと、「ボク、今日、お買い物に行った時、グミを買ってもらった事、書く」と言くと、ゆっくりと、それでいてためらいなく書き始めた。

「え？ そんな事でいいの？」

「うん。守谷先生がね、嬉しかった事や楽しかった事や面白かった事や悲しかった事なんかを書いたらいいって言ってた」

「そうなんだ……でも、お買い物の事が嬉しかったり楽しかったりしたの？」

「うん。グミを買ってもらったの嬉しかった」

そう言ってニコツと笑った。

そんな事でいいのか……と私は拍子抜けしてしまった。それにしても、グミ一つで喜ぶって、普段全然買ってあげてないみたいで、なんだか恥ずかしいな……って、これも元カレに対する見栄なのかな……。

\*\*\*\*\*

9月26日日曜日は、快晴の運動会日和だった。残暑のせいだ、

日差しの下は暑いが、校庭をぐるりと取り囲む木々の下は、木陰のお陰で涼しかった。

運動会と言えば、早朝からの場所取りが保護者達の間で熾烈しれつなバトルとなる。それは保育園の頃も同じだったので、私はどうしようかと悩んでいた。見るのは私一人だから、どこでもいいような気もしたが、お昼は拓都と一緒に食べる事になっているから、それなりの場所の確保は必要だ。小学校の運動会の雰囲気分からないので、西森さんに訊く事にした。

「運動会の場所取り？ 朝6時からシートを置いていい事になっているから、場所取りする人は大変みたいね。でも、トラックの周りなんて暑くて座つてられないわよ。私達はね、毎年校庭の周りの木陰にキャンプの時のテーブルセットを持っていくの。そこからは運動会の様子はあまり見えないんだけどね。自分の子が出る時だけ、ビデオの撮りやすい位置に移動して、見るのよ。でも、最近は同じように木陰の場所取りも大変になって来ているんだけど……」

西森さんはさも当然と言わんばかりだけど、私はその話を聞いて、又カルチャーショックを受けた。

……運動会に、キャンプのテーブルセット？ 自分の子供の時だけに見行くの？

「運動会なの？ テーブルセット？ シートを引いて座るんじゃないの？」

「ハハハ、もちろんトラックの周りはシートだよ。私達は邪魔にならないフェンスの手前に場所をとるの。そう言えば、美緒ちゃんもウチが取った場所に来たらいいよ。美緒ちゃんと拓都君用の椅子も持って行くから……」

「いいの？ 是非お願いしたい。私一人だから、どうしようかと思つてたの……」

「なんだ、早く言えば良かったね。私の中では、美緒ちゃんも一緒なのは決めてただけだね……そうそう、この前由香里さんからも訊かれて、当日一緒に場所取りする事になったの。と言つても、場所取りはお互い旦那ただけだね」

そう、運動会の一週間前の土曜日、西森さんが子供を連れて芝生公園へ行こうと言つので、ちょうどいい機会だからと由香里さんと子供達も誘つた。由香里さんと西森さんの所の子供達は、上も下も同級生だから、これからいろいろ教えてもらうのにいいんじゃないかと思つたから……。

でも、由香里さんには、西森さんに私と担任との関係だけは言わないでと釘をさす事は忘れなかった。それに、西森さんには拓都が姉の子供だと言つてある事と、彼女が担任のファンだと言つ事も伝えておいた。

西森さんはすぐに誰とでも仲良くなれる人だから、由香里さんともすぐに打ち解けたので安心した。こんな風に私にとって心強い味方がいてくれて、何とかこの1年を乗り越えられそうなので、私は二人の友に心の中でよろしくお願いしますと頭を下げた。

運動会当日、由香里さんのご主人に会うのは初めてで、「いつも由香里さんにはお世話になってます」と頭を下げると、彼は「いえいえ、こちらこそ。お噂は聞いていますよ」とニッコリと笑つた。

どんな噂をしているのと、由香里さんを軽く睨んだ。すると由香里さんは「美緒は若いのに頑張つてるんだよつて言つてるのよ。ねえ？」と言ひ、ご主人に同意を求めている。ご主人も笑つて頷くだけで、余計な事は言わなかつた。

小学校での会話は、余計な気を使う。今までは本人以外、私と担任の関係を知っている人がいなかったから、私が話さない限りばれる心配はしなくても良かった。由香里さんの事は信頼しているけれど、彼女と話しているといい油断して、自分から言ってしまうのとも限らない。西森さんも近くににいるから、気を引き締めなくては……。

運動会が始まり、子供達が校庭に並んで準備体操を始めた。私達は1年生がよく見える場所へデジカメを持って移動する。その時、西森さんが、忘れていたと広報の腕章を私に差し出した。

「広報委員長から預かっていたの。この腕章をしていると、競技に邪魔にならない位置なら、トラック内に入ってもいいのよ。一応PTA新聞用の写真を撮ってると言う事で、広報の特権だよ」

西森さんはそう言ってニッコリ笑った。  
へえ〜広報ってそんな特権があったのか……

「ねえ、トラック内まで入って写真撮るなんて、目立ち過ぎじゃないの？」

「皆いかに自分とところの子供を綺麗に写すかに集中してるから、周りの目なんて気にならないのよ」

また西森さんの、親なら当然発言に啞然とする。一歩間違えればモンスターと言われかねないのじゃないかと思っただけれど、口にはしなかった。

西森さんがモンスターペアレンツだとは思わないけど、こんな風な今時の親の様子を聞くと、モンスターが生まれる土壤があるんじゃないかと思ってしまう。

……先生も大変だな……

そんな事を思って頭を過るのは、担任の顔だったりして、また内



心一人焦ってしまった。

「それにね、子供を撮るフリして、守谷先生の写真も近づいて撮れるしね……」

フフフと笑って話す西森さんに、私は隠れて溜息を吐いた。

「今日も守谷先生はカッコイイねえ」

隣で由香里さんが、子供達が並ぶ前に立って体操をしている担任の方を見て言った。そして、私の方を見て、フツと笑った。

そんな意味深な笑い方は止めて欲しい。

「ホント、守谷先生って何着ても似合うんだから……」

西森さんも由香里さんの言葉を受けて、ジャージ姿の担任の方を見て嬉しそうに言う。

私はこの二人の言葉になんて返せばいいのか分からず、ただ視線だけ彼の方に向けた。

それは……久しぶりに見る彼の姿だった。キャンプの時以来の彼の姿……姿を見てしまうと記憶が呼び覚まされそうになる。私は避ける様に視線を拓都の方へ向けた。

「あれ？ 愛先生、髪を切ったんだね？」

西森さんが、突然声をあげた。

「あつ、ホントだ。愛先生、髪を切ったら、益々美緒に似て来たよ」  
西森さんの声に反応して、由香里さんも愛先生の方を見て、こんな感想を言う。

その発言、微妙なんだけど……。

「由香里さんもそう思う？ 私も前から美緒ちゃんに似てるって思ってたのに、誰も賛同してくれなくて……守谷先生に言っても、そう思わないって冷たく言われちゃったし……よかった、私と同じ意見の人がいてくれて……本当に髪を切って髪形が似てきたから、今度は似てるって思う人が増えるかも……」

西森さんは同士を見つけた様に、嬉しそうに由香里さんと話し出した。

……別に似てるって思う人が増えなくても……

私も愛先生のショートヘアを確認した。でも自分では似てるかどうかなんて、よく分からなかった。

1年生の競技が始まる前に、絶好の撮影ポイントを探す。しかし、考える事は皆同じで、人の頭をよけると、結局絶好とは言い難い場所から撮影する事になった。だからと言って、腕章を付けてトラックの中へ入る自信は無かった。密かに思ったのは、来年の運動会までに、デジカメをもっと望遠の倍率の高いものに買い換えようと言う事。ちよつと奮発して、一眼レフのデジカメでもいいかも……。

そんな風に考えていたのに、いざ1年生の50m走が始まり、拓都がスタートラインに立つと、ファイnder越しよりも自分の生の目で見たくて、そのまま息を止める様に固唾を飲んで見守り、気付いたらゴールしていたと言うオマヌケぶり。結局1枚も撮れなかったのだ……。

……いいんだ。心のカメラに写したから……

そんな負け惜しみの様な慰めで、自分の心を誤魔化した。

競技の合間にトイレへ行った帰り、今行われている他の学年のダンスを見ながら歩いていると、「あいせんせー」と言う声が聞こえた。

え？ 愛先生？ どこにいるのだろうとキョロキョロしていると、

女の子が走り込んで来て私に抱きついた。私が驚いてその子を見下ろすと、その子も驚いて飛び退いた。「ごめんなさい。間違えました」と頭を下げると走り去ってしまった。私は返事をする間もなく啞然としたままその子の後姿を見送った。

……もしかして……愛先生と間違えられた？ やっぱり似てるの？

皆のところへ戻って、先程の間違えられた事を言うと、西森さんと由香里さんは顔を見合わせて噴き出した。「やっぱり」と二人揃って言って笑い続けている。ちょうど西森さんの近所のママ友で同じく守谷ファンの綾さんが来ていて、「ホント！ 髪を切った愛先生に似てる！」と驚きながら笑っていた。

なんだか複雑……似てるって言われるのが、なんとなく面白くない……彼はどう思ってるのだろうか？ 愛先生が髪を切る前は似てると思わないって言ってたけど、髪を切ってからは彼にはどんなふうに見えるんだろう……。

午前の競技が全て終わり、昼食の時間になった。子供達は親の所で昼食を食べる事になっている。1年生は初めてなので、子供達の見学場所まで迎えに来てほしいと事前のプリントに書いてあった。

私達が3人連なって子供達を迎えに行くと、他の保護者達も集まって来ていてごった返していた。自分の子供を見つけると名前を呼んで、次々と連れて行く保護者達。

私は拓都はどこだろうとキョロキョロしていると、担任がいるのに気付いた。吸いつけられる様に彼を見つめていると、彼もこちらを振り返り眼が合った。私は思わず口角を上げ、目を細めてへニヤリと笑った。なんだか情けない笑い方になってしまったけれど、彼と眼が合ったら絶対に笑おうと決めていたから……私は大丈夫だよ、幸せだよとメッセージを込めて……。

彼は一瞬眼を見開いたけれど、同じように小さく笑ってくれた。

それは、他の人からは分からない程の笑顔だった。

「守谷先生。さっきのダンス、とっても良かったですよ。バッチリ写真撮りましたので、PTA新聞に載せてもいいですか？」

西森さんは担任を見つけると、嬉々として近づいて行って声をかけた。

「……さすが……千裕さん。」

守谷ファンと公言するだけあって、その行動力もさすがと言うしかない。

「ハハハ、僕なんかの写真より、子供達の写真を載せて下さい」

担任が笑ってそう答えると、西森さんは「もちろん子供達のも載せますよ」と笑い返していた。

「……どこまで本気で、どこまで冗談なんだか……」

昼食が済んで、子供達がまた戻ってしまうと、私達はのんびりとお喋りする事にした。そこに、西森さんの近所の綾さんも加わり、その後、PTA総会の時に前の席に座っていた西森さんの友達の3人のお母さん達も集まって来た。

「ねえ、ねえ、西森ちゃん、聞いた？ モリケイと愛先生が付き合ってるって……」

後から来たお母さんの内の一人が少し声を潜めて言う。

「あ……噂、広まってるんだ……」。

「もちろん知ってるわよ。私なんか二人が仲良くしてる所見ちゃったもの。ねえ、美緒ちゃん」

西森さんは、キャンプでの事を自慢気に話した。私は、彼女が確認のために話を振るのを、作り笑いで曖昧に頷く事しかできな

い。でもそんな私の反応よりも、皆は西森さんの話を「私も行きなかったな、そのキャンプ」と羨ましげに聞いていた。

「それでも、去年みたいな不倫騒動より、愛先生の方が健全でいいよね」

別のお母さんがそう言うと、皆は同意するように頷いた。愛先生と付き合う事は、お母さん達にも受けがいいみたいだ。

「ねえ、ねえ、髪を切った愛先生と美緒ちゃんって似てると思わない？」

西森さんがまたその話題をぶり返した。私は内心またかと思いなから、皆が私の方を見て来るので、ぎこちなく笑って見せた。

「あ　！　ホント、似てるかも……そう言えば、PTA総会の時も、そんな事言ってたっけ……」

そうして、又ひとしきり、似てる、似てると騒がれてしまった。

「そうそう、去年の不倫騒動と言えば……その張本人の藤川さん、昨日、偶然にスーパーで会ってね。なんだかちよつと様子が変わったのよ」

愛先生の話題がひと段落すると、また別のお母さんが、何かを思い出したように話し出した。

「えっ、藤川さんって、県外へ引っ越したんじゃないかった？」

「そうだけど、彼女もご主人も地元はこちらでしょ？　たまたま実家へ帰って来てたのかなって思ったんだけど……向こうも私に気付いたから挨拶をしたのよ。そうしたらね、変な事を聞いて来るの……守谷先生は何か処分されたのかって……担任は降ろされたのかって……」

「え　　！　何それ？」

「そうなのよ。なんだか変でしょう？　去年の事で処分されるのなら、去年の内に処分されてただろうし……それでね、私が何も処分されてないし、担任も降ろされてないわよって言うと、顔をしかめたのよ。そして、それじゃあ守谷先生が保護者と不倫しているって噂は広まっていないのかって訊くから、それは藤川さんの事でしょうって言いそうになったのを我慢して、今はそんな噂無いわよって答えると、彼女はそんなはず無いって怒って行ってしまったのよ。私、呆れたわ。彼女がここまで被害妄想が酷いとは思わなかったよ。やつぱりちよつと病的だと思わない？」

私はこの話を聞いている最中に西森さんの方を見た。すると彼女は何も言うなと眼で合図して、綾さんにもそんな目線を送っている。

「藤川さんって、子供の事で悩んで、ちよつと精神的に参っているのかもしれないね。去年起こった不倫問題を他の人の事と思いたいのかもしれないね」

話を聞いた後、西森さんはしんみりとそう答えた。皆もそれを聞いて口々に、少し同情的な感想を言い合った。やつぱり母親として子育ての悩みは他人事ではないのかもしれない。

「それでも、守谷先生を巻き込むのは止めて欲しいわね。こんな事いろんな人に聞き回って、反対にまた守谷先生に不倫騒動が持ち上がったのかと噂されかねないよ。愛先生も可哀そうだよ」

綾さんが、少し怒った口調で言うと、またみんな口々にそうだねと言いつつ合った。

「もう、この事は、ここだけの話しにしておこうよ。誰かに話すと変なふうに変わって行くかもしれないし……噂って怖いよね」

西森さんは、口止めする様に話を終わらせた。彼女はいつも、守谷先生の悪い噂は広まらない様に、ここだけの話にしようと言う。でも、結局、人の口には戸は立てられないんだよね……。

ここにいる人たちも、私と拓都の関係の噂を聞いているかもしれない。でも、面と向かって言えないだけなのかもしれない。

後から来た3人のお母さん達が去った後、私と西森さんと綾さんは顔を見合わせた。皆考えている事は、きっと同じだろうと思う。そんな時、ずっと黙って傍で聞いていた由香里さんが、口を開いた。

「さっきの話し、その藤川さんって人が写真を送りつけてきたんじゃないの?」

皆が驚いて由香里さんの方を見た。それは、どうして由香里さんがその事を知ってるのと言う疑問の眼差しだ。

「ごめん。私が由香里さんにだけ言ったの。でも彼女は口が堅いから……」

頭を下げる私に、西森さんも綾さんも気にしなくていいと言ってくれた。由香里さんは「余計な事、言っちゃったね」と苦笑している。

「由香里さんが知ってるのなら、遠慮なくこの話をするけど……ねえ、さっき由香里さんが言った様に、夏休み前の不倫騒動を起こしたのって、やっぱり藤川さんじゃないかと私も思うのよ」

西森さんがそう言うと、私も綾さんも同意する様に頷いた。

「恐らく、その藤川さんって人、守谷先生に対して、可愛さ余って憎さ100倍って感じなんじゃないの? 思い込みの激しそうな人だから、守谷先生は私を誘惑したのに、私ばかりが引越しさせられてと思っちゃって……それで、何か守谷先生の弱みを握ろうと思

つて、ストーカーの様に付け回してたのかもね」

由香里さんが、もっともらしい推理を披露する。皆は一瞬驚いた顔をしたけれど、それが真実の様な気がして、また一様に頷く。

「そう考えると、彼女は守谷先生が何らかの処分される事を願って、わざわざ学校へ送りつけてきたと言う事だね。それなのに処分も、担任を降ろされる事もなく、ましてや噂さえも広まらずにいるから、当て外れだった訳だ……」

綾さんも、由香里さんの推理を引き継いで推理していく。それは、私が考えていた事と同じだった。恐らく全員が同じ事を考えているだろう。

そうして、藤川さんが起こしたであろう騒動が、何の影響も無かった事を知って、彼女は又何か起こすのじゃないだろうか……。

私はこの騒動の原因を作った当事者だ……それを今、何も知らない西森さんと綾さんに話す訳にはいかない。

でも……この騒動を彼女がもつと大きな物にしたら……私の事もばれる日が来るのだろうか……。

そんな事より、彼が窮地に追い込まれたら……私はどうやって彼に償えばいいんだろう……。

「ねえ、もしかして、彼女又何かするんじゃないかな？ この前の事が思う様な結果にならなかつたから、前以上の事を……」

私は心配になって、思わずその不安を口にした。

「そうだね……それはあり得る話だと思う。でも、彼女が掴んでる守谷先生の弱みって、他にもあるのかな？ この前の写真だけだったら……今度こそ、保護者の噂になる様に、大々的にバラまく可能性があるよね。真実は違っても、写真って言い訳できないじゃない？ 去年の事があるから、今度そんな噂が流れたら、去年の事までやっぱり守谷先生にも非があるんだって、みんなは思うでしょう



ね

由香里さんの言う事は、いつものように私への同情を挟まない、冷静な真実の目だ。最悪、そんな風に噂や写真をバラまかれたら、きつと相手の母親は誰だと言う事になるだろう……。その相手の人は何の釈明もしないつもりかと、責め立てる人も出て来るに違いない。

「私、守谷先生にこの事を言おうかと思うんだけど……」

さつきから黙って皆の推理を聞いていた西森さんが、やっと口を開いたと思ったら、こんな事を言いだした。

「でも……今回の不倫騒動は、私達は知らない事になってるし……」  
私は、全ての原因は私だと思うと余計に動揺してしまった。

「知ってるなんて言わないわよ。私達でさえ、今回の藤川さんの様子のおかしい話を聞いて、これだけ想像したんだから、守谷先生なら、藤川さんがこんな事を言っていたと話せば、自分で考えるところだよ。去年の事は皆知ってるから、去年の事を恨んで何かしようとしてるかも知れないから、気を付けて下さいって話ならできると思うの」

西森さんは冷静だ。私なんて、オロオロと動揺しまくりで、そんな風に考えられなかった。

そつだ、こんな話を聞いたからと話せば、彼ならピンと来るはずだ。写真を送りつけてきた人が分かれば、対処のしようもあるだろうし……。

皆は西森さんの考えに同意した。藤川さんが動き出す前に守谷先生に伝えなければと言う事になり、西森さんが、藤川さんの事で伝えたい事があると守谷先生にメールを送る事になった。

「もちろん、美緒ちゃんも一緒に話しに行ってくれませんか？  
役員として……」

西森さんにニッコリ笑って言われると、否とは言えなかった。

## #29：運動会（後書き）

今回も又、守谷先生の登場が少なく、すみません。  
美緒との絡みも、ほとんどないですね……  
ホント、申し訳ない……> (一一) <

### #30：彼女が髪を切った理由（わけ）

『もちろん、美緒ちゃんも一緒に話しに行ってくれるでしょう？  
役員として……』

私も一緒に？

全ての原因である私が、どんな顔して会えばいいの？

私は、家に帰って来て落ち着くと、西森さんの言った言葉を思い出して、溜息を吐いた。

由香里さんったら全て分かってる癖に、ニツコリ笑って、「二人で話した方が真実味があるよ」なんて言うんだから……私の味方なんだか、面白がってるだけなんだか……。

それでも、心配してくれていたのか、由香里さんから電話があった。

「美緒、千裕ちゃんと一緒だと、いろいろ大変だね。いつその事、千裕ちゃんに言っちゃえば？」

由香里さんは、西森さんより年上だから、西森さんを千裕ちゃんと呼ぶ事にしたみたい。って、そんな事より、西森さんに私と担任の過去の関係を話せと言うの？

「そんな事できるはず無い！ 千裕さんは信頼のできる人だけど、彼女がどんなふう to 受け取るか分からないし……どこでどう広まるか分からないもの！ これだけは、相手のある事だから、絶対に言わない！」

私は由香里さんの冗談のような提案に、本気で息巻いた。

私が良くて、彼にとつては不本意でしかない。ましてや今、付き合っている人がいるのだから……。

こんな事を考えると、胸が苦しくなる。  
この胸の痛みを感じずに、彼の恋を応援できる日は、いつ来るのかな？

「まあまあ、そんなに意気込まなくても！ まあ、この事が広まれば、不倫騒動より大スクープかもね…… 人気を守谷先生の元カノが、自分のクラスの保護者だなんて……」

由香里さんは、恐ろしい予測を苦笑しながら言う。

「分かってるなら言わないでよ」

「まあ、美緒は千裕ちゃんにお任せして、隣で笑っていたらいいから……」

「笑ってなんかいられないけど、千裕さんにお任せして、余計な事は言わないつもり」

私がおか言くと、ボロが出そうで怖い。不倫騒動の件は、知らない事になっていくけれど、知っているのに知らないフリする事が多すぎて、いつか地雷を踏みそうな気がする……。

「そうそう、それでいいのよ。それよりさ、愛先生って、どうして髪を切ったと思う？」

えっ？ どうしてって…… そんな事、考えなかった。

「髪を切りたかっただけじゃないの？ イメチェンとか？」

「普通さ、幸せにお付き合いしている女性があんなにバッサリ髪を切る時って、相手の好みに合わせた時か、失恋した時か、ケンカして相手の気を引きたくてわざと髪を切るとか、それとも、暑いのが苦手で切ったとか…… っ、これは、夏の初めならわかるけど、も

う9月も終わりです、これから涼しくなってくるこの時期に切るのは変だと思つたよ。前は胸ぐらいまでの長さがあつたよね。それを美緒と同じぐらい短くするって……ねえ、美緒は守谷先生と付き合っていた時って、どんな髪型だったの？」

由香里さんは、もつともらしい講釈を述べながら、まるで愛先生が髪を切つた事に何か重大な理由でもあるかのように、推理しだした。

……由香里さんつたら……探偵かつて言うの！

なにも理由が無かつたつて、切りたくなつたら切るんじゃないの？ と思ひながらも、自分の時はどうだつただろうかと考えた。

彼と付き合つている時は……私の長い髪を彼が手で梳すいてくれるのが気持ちよくて、切ろうなんて考えなかつた。彼も「美緒のこの髪好きだから、切るなよ」つて言つてたつけ……私が髪を切つたのは、彼と別れたからだ……。

悔しいけど、由香里さんの言う通りだ。

「肩より少し長くて、少しウェーブがかかつてた」

私は正直に、あの頃の髪型を端的に言つた。

「もしかして、愛先生の髪を切る前の髪型によく似てた？」

こつ聞かれるだろつ事は、予測していた。だからと言つて、それはたまたま偶然だ。

「ま、まあね。よくある髪型だしね……」

「ふん。なる程……そう言つ事か……」

由香里さんは、名探偵が推理するが如く、全てを納得した様に呟いた。

「な、なによ、そう言つ事つて……！！」

私は由香里さんの眩きに、心を掻き立てられる。

「ねえ、守谷先生はさ、ショートヘアが好きないよね？」  
私の質問には答えず、又何かを確かめる様に質問を重ねる。

「わからないよ。ただ、私には髪を切るなって、言ってた」  
そう、このショートヘアは自分への戒め。

「ふん。……と言う事は、ショートヘアは守谷先生の好みじゃないのに、愛先生は髪を切った訳だ……」

「だから、切りたかっただけでしょ？」

「まあ……そうかも知れないね」

由香里さんは、又意味深にクスリと笑って、「そう言う事にしときましよう」と言って、最後は濁す様にこの話を終わらせた。

電話を切った後、私は考えたくないのに、由香里さんの言った愛先生の髪を切った理由について、グチャグチャと考えている自分に気付いて、溜息が出た。西森さんと一緒に担任に話をしに行く事は、頭の片隅に追いやられていた。

愛先生が髪を切った事に、何か理由があるのだろうか？

彼は愛先生に、髪を切るなって言わなかったのだろうか？

彼の好みが本当はショートヘアだったのだろうか？

それとも……二人の間に、髪を切りたくなるような、何かがあったのだろうか？

私は頭を振った。よく分からない事を、グダグダ考えてもしょうがない。ましてや、彼の恋人の事など……考えたくない。今の私は、とっつても心が狭い。

その日の夜、今度は西森さんから電話があった。それは、藤川さんの事を担任に話すと言う件についてだった。

「美緒ちゃん、守谷先生にメールしたらね、電話がかかってきたから、藤川さんの事、もう話しちゃったから……」

あっけらかんと話す西森さんの言葉に、ホッとするよりも呆れてしまった。

それに、どんな顔して担任に会えばいいんだと悩んでいた私の思考時間を返して欲しいよ。

「それで、信じてもらえました？」

「うーん、信じてくれたんだろうと思う。気を付ける様にしますって言ってたけど……」

話をした西森さんが、担任の反応にイマイチ納得できていないようだった。

彼はどう思ったんだろう？ 写真を送りつけたのは藤川さんだと思っただろうか？

「ほら、私達は写真が送られて来た事、知らない事になってるから、守谷先生も返事しにくかったんじゃないかな？」

それに仮にも藤川さんは以前の保護者だ。変に疑うのも教師として辛いだろうし……。

「そうだね。守谷先生からしたら、不倫騒動が起こってる事なんて知られたくないだろうしね……」

当事者の私には、特に知られたくないだろうな……

「そっだろっね……」



私がいんまり返事を返すと、急に西森さんが明るい声で「ねえ、ねえ、美緒ちゃん」と呼びかけてきた。

「美緒ちゃんは、愛先生が髪を切ったのはどうしてだと思っ？」

ああ、西森さん、あなたもですか……

「それ、由香里さんにも訊かれました」

私は溜息を吐きながら言った。

「あつ、やっぱり？ 私もね、由香里さんに言われるまで、愛先生が髪を切った事に理由があるなんて思いもしなかったんだけどね。でも、由香里さんの話を聞いたら、確かになって思ったのよ。女性にとって髪を切るって、よく失恋した時とかって言うじゃない？ でも、キャンプの時、仲の良い雰囲気だったし、他に理由があるのかなって思っ……守谷先生に訊いちゃった」

……西森さん、訊いちゃったじゃないですよ。いったい何を訊いたと言うのか……。

「何を訊いたの？」

「ふふふ、守谷先生はショートヘアが好みなんですかって……」  
やっぱり西森さんは最強だ。

「それで、何と答えたんですか？」

「その人に似あっていたら、どんな髪型でもいいですよ、だって西森さんは、少し声を低くして、担任の言い方をまねて答えた。……別に長い髪が好きだった訳じゃ無かったんだ……。」

私が何も言わずにいると、西森さんは私の反応など気にもせず、また話し始めた。

「それでね、じゃあ、愛先生のショートヘアは似合っていると思いますかって訊いたのよ」

……西森さん、あなたは、無敵ですか？

「そこまで聞いたんだ？」

「そうよ。聞きたい事は的確に、よ。そうしたらね、『似合ってるんじゃないんですか？ 皆の反応は良かったみたいですよ』って、かわされちゃったのよ」

西森さんよりも相手の方が上手と言う事だ。そうだ……彼はそう言うあしらいは上手だった。

「へえ」

何ともまめけな返事をする、西森さんは益々勢い込んで、「それでね」と言い募る。

「愛先生が髪を切ったら、やっぱり篠崎さんに似てると思いませんかかって、訊いてみたのよ」

……西森さん、あなたは、悪魔ですよ。それを訊いたんですか？  
彼に……。

私は西森さんの無邪気さが、怖くなった。知らない事とは言え、私の事は担任との話の中に出さないで欲しい。

「そうしたらね、今度は認めたのよ。似てるって!!」

西森さんは勝ち誇った様に言った。よっぽど、最初に似てるって認めてもらえなかった事が恨めしかったのだろうか……。

……でも、認めただ。

心の中で、得体の知れない感情がうごめき出したのを感じた。

二人で撮った数々の写真……今はもう消してしまっただけ無いです。

……の記憶の私の顔が愛先生に置き換わっていく。

私に似てたから？

それとも同じようなタイプが好きになるタイプとか？

どこか自惚れと、自嘲と、複雑な感情が入り混じって……私の胸を覆い尽くす。

……あなたは、愛先生を見て、私を思い出したりはしないですか？

こんな事を考える自分を嫌悪して、私は溜息を吐いた。

西森さんが又何か言っているけれど、よく聞こえない。

「……だからね、最後に早く藤川さんの事が解決するといいですね。愛先生の為にもって言ったらね、そうですねって、否定しなかったのよ。やっぱり、付き合ってるのは、本当だね。あんがい、守谷先生の方が、ショートヘアが似合うんじゃない？ とか言ったんじゃないのかな……」

西森さんの言葉が頭の中を通り過ぎていく。私は曖昧に返事を返しながら、電話を終えた。

別に、今更シヨックを受ける様な事じゃない。

分かっていた事。

彼の幸せを祈るのだから、愛先生との事も、認めて受け入れて、二人の幸せを願わなくては……

そう自分に言い聞かせる言葉は、虚しただけだと、自分自身が一番よく分かっていた。

#31：単独取材（前書き）

お待たせしました。

また長いです。

よろしくお願いします。

### #31：単独取材

運動会後の由香里さんと西森さんの変な盛り上がりも沈静化した10月のはじめ、二学期最初の広報の企画会議が開かれた。

10月6日水曜日夜7時に少し前、夜の学校はなんだか気味が悪いなと思いつながら、会議のある図書室へ向かった。図書室のドアを開けると、西森さんが私に気付いて手を振った。他には、西森さんの後ろの机に座って話し込んでいる広報委員長と広報役員の誰か、そして、別の離れた机で3人で楽しそうにお喋りしている、顔は知っているけど名前は覚えていない人達。

「こんばんは」と挨拶をして中に入ると、話をしていた人達もこちらを振り向き、挨拶をしてくれた。

「千裕さん、こんばんは。珍しいですね、一人なんて……」

西森さんはいつも誰かと話をしていて賑やかなのに、今日は珍しく一人でポツンと座っている。私が挨拶をすると、小さい声で「お疲れ」と言うと、閉じた唇に一本だけ立てた人差し指を当てた。

……それって、喋るなって事？

私が少し首を傾げると、彼女は手元のメモにスラスラと何かを書いた。

『今、後ろで委員長達が、守谷先生のうわさをしてるの』

それを讀んだ私は、呆れた。

……それって、盗み聞きじゃないですか？！

西森さんは私の驚いた顔を見てニツと笑うと、隣りの椅子を引き座るように促した。

……二人で盗み聞きなんかしたら、もっと怪しまれてしまうじゃないですか！

その時、バタバタと残りの役員達がドアを開けて入って来て騒が

しくなると、委員長達は話を辞めて、会議を始めるために離れて行った。

「美緒ちゃん、後で話すね」

西森さんは、会議の始まる前に、小さな声で私にそう言った。

何か、重要な噂でも聞いたのだろうか？

なんだろう？

気になる……

委員長が前に立って、二学期の新聞づくりについて説明しました。二学期は行事が多い。新聞のネタには困らないのだけれど、紙面をどのように配分するかが問題だった。結局例年通りと言う事で、1面には、6年のキャンプと修学旅行、2面3面は運動会と文化祭をメインで載せ、あと学年行事と遠足を少しだけ載せる。4面は企画ページとその他のページで載せきれなかった記事と言う事になった。

夜広報の担当は、一学期同様1面と4面を受け持つ事になっている。4面の企画物は、最初の会議のときに出た案で、この小学校でのエコ活動の紹介をする事となった。

「一学期に給食試食会をしたのですが、その時に空になった牛乳パックを開いてバケツの水で洗っていました。その水も花壇に撒く<sup>ま</sup>そうです。牛乳パックのリサイクルの為にエコなやり方だと思ったので、紹介したらどうでしょうか？ まだ、去年から始めただけらしいので、保護者全員は知らないと思うので……」

私は給食試食会の時の事を思い出して、提案してみた。周りのお母さん達もやはり知らなかったようで、「へえ〜そんな事してるんだ」と感心している。

その他にも、給食の残飯や調理時の野菜くず等をたい肥化して、地元の農家に引き取ってもらって、野菜を提供してもらっている事

とか、ゴミの分別の為にゴミ箱をゴミの種類別に分けた事を掲載する事になった。

そして、それぞれの記事に担当者を決め、コメント依頼等の準備をして、会議を終えた。牛乳パックの件は、私と西森さんで取材する事になり、その週の金曜日の給食が終わる頃に1年3組の教室の前で落ち合う約束をした。担任には西森さんがメールで連絡をしておいてくれる事になり、私は取材の日は、職場でお昼休みの後1時間だけ暇をもらう事にした。

私と西森さんが帰ろうと立ち上がると、委員長が近づいて来て私に声をかけた。その時、ほとんどの人がすでに図書室から出ていて、そこにいたのは委員長と、会議前に委員長が話しこんでいた役員と、西森さんと私の4人になっていた。

「篠崎さん。篠崎さんって1年3組の役員さんだよね？」

私は委員長にいきなりそんな事を聞かれて、驚きながらも「そうです」と頷いた。

「篠崎さん、独身でまだ若いのお姉さんの子供の面倒を見てるんだって？ それなのに役員までして、偉いねって皆で言ってたのよ。なにか困った事が合ったら……」

委員長はここまで言いかけて、恐らく私の表情を見て止めたのだろう。私がどんな表情をしているのかは分からないけど、心が一瞬で凍りついた様な気がした。

「あ、あの……その事は誰から……」

私がようやく口にした言葉を聞いて、今度は委員長の顔が強張こわばった。たぶん彼女は、悪い事を言ってしまったと思ったのだらう……。

「友達から聞いたんだけど……1年3組のクラス役員さんで篠崎さんって言う人がって言うから、広報のメンバーにいるよって話してたの。そうしたらそんな話を聞いたから……独身でまだ若いのに、お母さん達の中に混じって学校の役員の仕事をするって、結構辛いんじゃないかなって……思ったから……」

委員長には悪気は無い。悪気は無いって分かってるんだけど……。

「ごめんなさい。この事は、学校に言っていないの。姉夫婦が亡くなってから、甥はまだ小さかったから、今までずっと親子として暮らして来たの。だから……この事が広まって、拓都が動揺したり、いじめの原因になったらと思うと……辛いなって思ってた……本当にごめんなさい」

私も相手の痛そうな表情を見て、謝罪の言葉を繰り返してしまった。なんだか部屋中が凍りついたみたいで、隣にいる西森さんも何も言わない。

「いいえ、こちらこそ事情も分からずに差し出がましい事言って、ごめんね。……でも、本当に困った事とかあったら言ってね。それから、この事を知ってる他の人にも口止めしておくから……」

同情と親切心から言ってくれたであろう委員長に、謝らせてしまった事が辛かった。でも、今の私はこの事が広まる方が怖かった。

……本当は担任に知られてしまう事が一番怖いのだけれど……。  
もしかして、もう知られているのかも……。

そう想像するだけで、胸がキュッと痛くなる。彼に知られてしまったら、どうしたらいい？

委員長は、黙って沈みこんでる私に居た堪れなくなったのか、「お疲れ様」と言ってもう一人と一緒に離れて行った。その後ろ姿を見送っていた西森さんは、茫然とたたずんでいた私の肩をポンと叩



くと、ニコツと笑い、「帰ろうか」と言うと、私の背を押して促した。

図書室を後にし、だまつたまま玄関に向かって歩いてみると、西森さんがポツリと言った。

「やっぱり、噂って、どんなに口止めしても広まっちゃうものなんだね……」

西森さんが、私の隠しておきたい秘密が広まっている事について言ったのは、これだけだった。

あれやこれやとその場しのぎの慰めを言われたらどうしようかと思っただけで、何も言わずにそっとしておいてくれた。いつもならお喋りな西森さんなのに……。

「そうだね」

と、私が相槌を打つと、西森さんは私の方を見て、フツと笑った。

「会議が始まる前に委員長達が話してた守谷先生の噂話もね、同じだなんて思ってた……ホント、人の口には戸は立てられないよ。……夏休み前に、守谷先生に不倫騒動が起こったでしょう？ あの噂だったの。あれから随分日にちは経ったけど、守谷先生の噂だとやっぱり広まって行くんだなんて、妙に感心してしちゃった」

ああ、あの噂も広まっているのか……。

彼はこの事を知っているのだろうか？

あの後、やっぱり何の処分も無かったのだろうか？

本当に藤川さんの仕業なのだろうか……。

写真に写っていたのが私だってバレているのだろうか？

バレてたら、今頃、質問攻めになってるよね……。

今のところ、その事について、誰かに何か訊かれた事は無い。でも、こうして噂が広まってくると、相手は誰だって言う追及は大きくなって行くものだ。私だって、写真に写っているのが自分じゃな

かかったら、誰だろうって気になるもの。

「あ、あの、守谷先生と一緒に写真に撮られた女性って誰かわかったの？」

私は、思わず訊いてしまったけれど、一瞬驚いた様に見開いた西森さんの顔を見て、自分がまずい質問をした事に気付いた。

「あら、やっぱり美緒ちゃんも気になる？」

西森さんは、同士を見つけたと言う様に嬉しそうな顔をした。

「そりゃ、あれだけ千裕さんに、守谷先生の話の間かされたら、ちよつとは気になりますよ。それに担任だし……」

私はその場しのぎの言い訳をしながら、どうか必要以上の焦りが顔に出ません様に……と祈りながら、なんとか笑って見せた。

「あのね、綾ちゃんが推理してたみたいに、PTA会長じゃないかって話が出てたらしいけど、委員長はPTA会長と仲がいいから、会長が否定していたのを聞いたらしいの。それでね、守谷先生の以前から知り合いの男性に子供の学校の先生だからと言う事で頼まれて、たまたまその人の奥さんが子供を迎えに行った所を写真に撮られたんじゃないかって……だから、あまり面識のない奥さんだから、迷惑をかけたくなくて名前を言わなかったんじゃないのかって、言ってた」

私はその推理に思わず笑いそうになった。良かった。まだバレていないんだ……。

私は安堵の気持ちで、「そうなんだ」と言うと、つい頬が緩んでしまったのだろうか？ 西森さんにニヤリと笑われて、ツッコミを入れられた。

「何？ ホツとした顔して……あくまでも推理だよ。でも、愛先生

がいるんだから、守谷先生が不倫なんて、考えられないよね？」

西森さんのツッコミは時として、凶器にもなる。すっかり愛先生の事を忘れていた私の心に、現実を突きつける。西森さんはいい人だし、大好きな人なのに……時々恨めしくなる。

知らないんだから、仕方がないよね……。

\*\*\*\*\*

「美緒ちゃん、ごめん。翔也が熱があつて……昨夜からちよつと熱っぽかったんだけど、下がるかなって思つて、連絡しなかつたんだけど……どうする？ まだまだ日はあるし、別の日にしようか？」

西森さんは、取材に行く日の朝、行けなくなつたと連絡して来た。取材は私一人でもできると思う。ただ、一人で行くかどうかだ。

「大丈夫だよ。職場にも今日のお昼に時間を貰う様に言つてあるし、私一人で取材して来ます」

「そう？ お願いしていい？ ごめんね」

来週はまた、学級役員の会議があるし、その次の週は、親子学習会だし……その後文化祭も控えてるし……、やっぱり今日行つておいた方がいいよね？ せっかく職場の人達の許可を得たんだから……。

「了解。しつかり取材してきます」

西森さんが気に病むといけないので、明るく言つて電話を切つた。

お昼の休憩時間になると、私は急いでお弁当を食べ、職場の人に

声をかけて職場を後にした。ちょうど食べ終わった頃に行かないと、タイミングを逃してしまう。そう思いながら、車を走らせた。

学校に着いて、職員室で来校者用のネクストラップ付きの名札を受け取って、1年3組の教室を指指して歩いて行った。給食中のせいか廊下には誰もいなくてシーンと静まっているけれど、放送クラブが流す今時の音楽だけがハイテンションに流れていた。廊下側の窓や入り口の引き戸が開けられた教室の中からは、カチャカチャと言う食器の音と、子供達の賑やかなお喋りの声が聞こえてくる。

時間を見ると、そろそろ食べ終わる頃か……私は、担任の席からは見えない廊下の位置から、開いている入口を通して教室を覗き込み、拓都を探す。

あつ、拓都だ。隣の席の子とお喋りしながら食べている。

目ざとい子供に見つかり、こちらを指差し「誰か来てるよ」と言われてしまった。

仕方なく、担任が見える所まで移動して、担任と眼が合うと頭を下げた。担任は立ち上がると、廊下まで出て来てくれた。私は、口角を少し上げて微笑みを作り、もう一度頭を下げて「よろしくお願います」と言った。彼も穏やかな優しい表情で会釈してくれた。

私はドキドキしながらも、彼に笑いかけられた事に満足した。

「西森さんのところの翔也が休みだったから、違う日になったのかと思いました。お一人ですか？」

「はい、一人でもできそうでしたので……後で牛乳パックを洗っている所の写真を撮らせて下さい。それからお話も少し訊かせて頂けたら……」

「わかりました。写真を撮る場合は、自分のお子さんを撮っていただくか、よそのお子さんを撮る場合は、後ろ姿等の本人が特定でき

ないアングルでお願いします」

彼が『自分のお子さん』と行った時、ドキリとした。噂はまだ彼のところまで届いていないのだろうか？ それとも……。

「わかっていません。広報の方でも注意を受けていますので……」

そうなのだ。最近は個人情報保護法の観点からも、また犯罪などの予防の観点からも、児童が特定できるような写真を掲載する場合、親の許可が無いといけない。また、子供の写真を勝手に撮ったと怒る親がいなくても言えないからだ。

その時、拓都が私に気付いて「ママ」と廊下まで出て来て呼んだ。私は拓都にニッコリ笑うと、今日は驚かそうと思って学校へ来る事を言っていなかった事を思い出した。

「学校の役員のお仕事で、給食の牛乳パックを洗ってる所の写真を撮りに来たんだよ。拓都はもう給食を食べ終わったの？」

「うん。じゃあ、牛乳パックを持って来るよ」

拓都はそう言うつと自分の席に戻って行った。他の子供達も、突然現れた来訪者に興味シンシンなのか、私の周りに集まって来る。

「拓都君のお母さんの？」

可愛らしい女の子が私の顔を見上げて訊いて来た。私は「そうだよ」と答えると、「何をしに来たの？」と質問が続く。他の子が私の手に持っているデジカメを見て「写真を撮るの？」と訊く。また別の子が「何を撮るの？」と訊く。そして、次々に質問が飛び出し、私は困ってしまった。

小学校の先生って、大変だと思って、今は教室の中へ戻ってしまった担任の方へ、助けを求める様に視線を向ける。

「こらこらおまえたち、そんなに質問攻めにしたら、拓都のお母さんが困るだろ？ 今日学校で学校の役員の仕事でみえてるんだから邪魔をしない様に」

担任は私の窮状を見てとったのか、すぐに子供達に注意をしてくれた。1年生の子供達は素直に「はい」と言っ、私から離れて行った。

こうして近くで、彼と子供達のやり取りを見ていると、夢の様な気さえする。最後の時は大学生だった彼が、希望通り先生になって目の前にいるなんて……。

拓都が切り開いた牛乳パックを持って来たので、バケツに入れた水で洗っている様子を写真に撮った。やはり顔がはつきり映らない様に、しゃがんで俯うつむいている姿を横から撮った。

当番が、そのバケツの水を花壇に撒きに行くと言うので、付いて行き写真を撮らせてもらった。

そして給食を終えた子供達は、いっせいに校庭へ遊びに行ってしまった。拓都も私に手を振ると、友達と一緒に行ってしまった。他の教室からも子供達がどんと廊下へ出て来て、あつという間に外へ流れ出して行き、後は数人残った静かな教室と、担任と私だけだった。

「篠崎さん、この後仕事に戻られるのですか？」

私がぼんやりと廊下の隅に立って、子供達が校庭へ出て行くのを見送ると、担任が声をかけてきた。

「え？ あ、はい」

いきなり訊かれたので、驚いて慌てた返事をしてしまった。そんな私を見て、彼はクスリと笑った。

「まだ時間はいいですか？ このあと少し話したい事があるので、」

「この給食ワゴンを返して来るまで待つていてくれませんか？」

えっ？

話したい事？

もしかして……？

「はい……わかりました」

私が答えると、彼は給食ワゴンを押して給食室の方へ向かって行った。

話したい事……なんだろう？

もしかして……拓都の事だろうか？

分かってしまったのだろうか？

拓都が姉の子供だと……

私は窓から外の景色を見ながら、彼の話について考え続けていた。

……それとも、役員としての話だろうか？

学校で話す事だから、きっとそうだ。

こんな所で個人的な話はしないだろうな……。

「篠崎さん」

ぼんやりと外を眺めていた私は、近づく足音にさえ気付けなかった。呼びかけられて、驚いて振り返ると、彼が先程と同じ穏やかな表情で微笑んだ。

「お待たせしてすみません。牛乳パックの事で何か訊きたい事はありますか？」

なんだ……そんな事を言うために待たせたのか……。

「いえ、説明頂いた事で、よくわかりましたので……写真も撮れましたし……」

では、これで帰りますと言おうと思っただら、言葉を遮断する様に彼がまた口を開いた。

「篠崎さん、ちょっとこちらへ……」

と言つて、彼は窓の傍を離れ、廊下の片隅へ誘導した。片隅と言つても廊下の途中の壁際だ。それも階段の傍だった。担任と保護者が廊下で立ち話をしている、特に変だとは思われない様な場所だろうか……。

窓から見えるのがダメだったのかな？

単に教室の前から外しただけなのか……。

私は場所を移動した意味も分からないまま彼に従うと、彼は私を見つめて小さな声で話し出した。

「1学期の個別懇談の時言ったと思うけど、拓都を預かった事を誰かに尋ねられても、否定して欲しいって言っただろ？ あの事なんだけど……」

彼の口調がいきなり砕けたものになり、私は戸惑った。彼の担任モードと昔の知り合いモードは、どこで切り替わるのだろうか？ いきなりスイッチがオン、オフになる様に、見事に切り替わる。

「ええ」と、取りあえず相槌を打つが、なぜいきなりこの話を？ それも学校で？ と頭の中で疑問がグルグルと回り出す。

「あの事、もう心配しなくていいから……誰かに尋ねられる事もないと思うし、もう巻き込む事もないから……」

「えっ？ あの写真の件、解決したんですか？」

私は彼の言葉に、思わず尋ね返していた。しかし、言った途端に驚いた彼の表情を見て、私はまずい事を言ってしまった事に気付いた。



「どうして、その事を知ってるんだ？」

彼は少し声を荒げた。私はその声にビクリとし、動揺して視線を泳がせる。

その時、階段を下りて来る足音がし、私は気まぎれになって一歩後ろに下がった。そして、階段の方を見上げる様に視線を向けると、下りてくる女性の足が見えだした。

彼も階段に背を向けて立っていたけれど、半身はんみになって、同じように階段のほうに視線を向けた。

「あつ、守谷先生。丁度良かった。お借りしたい資料があるんですが……」

階段を下りて来たのは愛先生だった。私はその姿を見た途端、胸にチクリと痛みが走った。彼女からは、長身の彼の向こうに私が見えるのが見えなかったのか、階段を駆け下りながら彼に声をかけている途中で、やっと私の存在に気付いたようだった。

「今夜にでも連絡しますので、よろしくお願いします」

彼は素早く私にそう言うと、愛先生の方に向き直り、「何の資料ですか？」と訊いている。

「あの、お話し中だったんじゃないんですか？」

愛先生は、私に気を使って、戸惑いながら言う。

「大丈夫です。もう終わりましたから……」

彼は愛先生にそう言うと、私の方を向いて「今日はお疲れ様でした。また来週、会議の方お願いします」と言った。私もすぐに「ありがとうございました」と頭を下げると、彼は頷いて踵を返した。そして、私に軽く会釈をする愛先生と一緒に職員室の方へ歩いて行った。

私は二人の後姿を見送りながら、冷たい風が吹きすさぶ荒野に一人取り残された様な気がした。

## #32：ホットライン

『今夜にでも連絡しますので……』  
って、言ったよなあ。

それって、電話をかけてくるって事だよな？

それも、不倫騒動について知ってるって事を訊くために。

私は大きく溜息を吐いた。西森さんへの今日の報告はメールで済ませたけれど、由香里さんにはいろいろと聞いて欲しい。けれど、いつ電話がかかって来るかも知れないと思うと、ただじっと待つている事しかできない。

家に帰ってからずーとドキドキしながら待つてる自分がいて、そんな自分を持って余しながらも、なんとか拓都を寝かせてしまおうと、もう時間は夜の9時を過ぎていて、今日はかかって来ないのかなと、少し寂しく思ったりして……。

バカだなあ。

彼には愛先生がいるのに、こんなにドキドキして待つてるなんて。今日最後に見た、彼と愛先生の後姿を思い出して、また落ち込む。拓都と生きて行くために、彼の手を離れたのは私なのに……今更、どんな顔して未練なんて言うつもりなのか。

さっきから握りしめている携帯電話を開くと、そこにはあの日消しそびれた虹の写真。

この写真を消せない事が、私の気持ちの真実。

けれど、もうこの虹の向こう側へは行けはしないのに……。

もう一度溜息を吐いた途端、携帯が震えだした。マナーモードを解除していなかったと思いつながら、開いたままの画面を見ると、非通知では無い11桁の数字の羅列。未だに登録していない彼の番号の様な、そうでない様な……でも、おそらく彼だ。

「守谷です。夜分すいません」

電話越しの彼の第一声を聞くといつも胸が震える。付き合っていた頃もそうだった……って、開き始めた記憶の扉を、意思の力で押さえつけて、話を続ける。

「いいえ、今日はありがとうございました」

「お疲れ様でした。いい写真は撮れましたか？」

「おかげさまで……」

いつまでこんなうわべだけの会話を続けるつもりなのか。

「ところでさ、今日言ってた写真の件って、どう言う事が教えてくれるかな？」

私がつびれを切らした頃、彼は本題に入った。またしても彼は、担任モードからスイッチを切り替えた。

「ごめんなさい」

写真の件って、元はと言えば私が原因なのだ。

「何謝ってるんだよ？ 言えない事？」

彼は私がいきなり謝ったから、言えないんだと思っただけだ。

「私のせいで、先生にあらぬ疑いがかかってしまって……何か処分されたりとか無かったですか？」

私がそう言うと、彼は徐おもむろに溜息を吐いた。

「処分はされていない。……そうか……全部知ってるんだ。俺が預かるって言ったんだから、気にするな。それに、写真撮られたのも、

俺の方の事情だから」

「何も処分が無くて、良かった。……それで、解決したの？ やっぱり藤川さんと関係があったの？」

私はこの時、自分の言葉が保護者モードから、昔の様な口調に変わりつつある事に、気付かなかった。

「何とか解決したから、もう心配しなくていいよ。やっぱり藤川さんの事も知ってるんだ……ああ、そうか。西森さんと仲がいいもんな……いろいろ聞いてる訳だ」

やっぱり藤川さんと関係があったと言う事なんだろうか？ 教師としてははつきり言えない所もあるのかもしれない。でも、解決したのなら、それでいい。私のせいで、彼が処分されなくて良かった。それにしても、彼は自分の噂が、どんなに広まっているのか知らないんだ。そう思うと、笑いが込み上げてきた。あんなに人気があるのに、自覚は無いのか……。

「西森さんからも聞かされてるけど、お母さん達の間で、どんなに守谷先生の噂をしているか、知らないの？ 母親達の噂話に登場する人物の第一位だと思うよ。私も小学校へ行く度に、聞かされるもの……」

私はクスツと笑いながら言った。

「なんだよ、それ……他にどんな事聞いたんだよ？」

彼は少しムツとした声で、訊いて来た。私はなんだか楽しくなつて来て、自分がすっかり保護者と言う立場を忘れ、過去に戻ったような感覚になっていた。

「フッフ、PTA会長は、大学の恩師の奥さんとか、守谷先生のファンクラブを作っているとか……それから、去年の旦那怒鳴り込み

事件のせいで、今年から担任の携帯番号を教えなくなつたとか……」  
私は楽しい気分で喋っていたけど、どこか冷静な部分が、意識的に愛先生との噂は避けていた。それから私と別れた後の悪い噂とかも……。

「あ、そんな事まで知られてるのか……。母親の情報網は侮あなどれないな」

彼は悔しそうに言うので、私はまた笑ってしまった。

「そうだよ。特に西森さんなんか、守谷フリークを公言してるからか、余計に情報が集まって来る気がするの。私は彼女といつても一緒にいるから、聞こうと思わなくても聞かされてしまうのよ」

「守谷フリークって、なんだよ。西森さんはどちらかと言うと、俺をからかっている様な気がするよ。それで、いろいろ聞かされる美緒は、噂を聞いてどう思ったんだ？」

自然な会話の中で、自然にあの頃のように名前を呼ばれて……私の心臓はドキッと跳ねた。

キャンプの時も呼ばれたけれど、電話だと耳元でささやかれているみたいで、胸がキュッと締め付けられる様に苦しくなった。それは嬉しさゆえなのか、辛さゆえなのか、自分でもよく分からなかった。

でもまるで、この電話の向こうは、あの頃の彼に繋がっている様で、久しぶりにあの頃の様な気持ちで会話できている事に、罪悪感よりも楽しさの方が勝ってしまった。このまま時が止まってしまえばいいのに、なんて思ったりして……。

「最初は驚いたけど、やつぱりって思ったよ。大学の頃と同じで、相変わらず人気があるんだなって……でも、あの頃みたいに近づくなオーラを出せないから、余計に引きつけちゃうんじゃないの？」

「余計に引きつけるって……俺はね、一生懸命、教師として頑張ってるだけなのに」

ちよつと拗ねた様な物言いに、私は心の中でクスクスと笑った。

「皆もそれは認めてるよ。とてもいい先生だつて言ってるもの。子供たちにも人気があるしね。拓都も毎日、守谷先生がねって、あなたの話ばかりしてるわよ」

今度はクスクスと声に出して笑いながら、私は彼を何処かからかうような調子で言った。そんな私の物言いが気に障ったのだろうか？ 彼が急に黙り込んだ。そして……。

「あの、拓都は……」

「あつ、もう寝たわよ」

私は彼の言葉をさえぎる様に言った。

何を言おうとしているの？ そんな真面目な声で……さっきまでと違う雰囲気で……。

やっぱりもう知ってるの？

「あ、いや……おまえさ、宿題の日記、拓都が書く時、傍にいて書かせてるのか？」

えっ？

なに、いきなり？

「えっ、あの宿題の日記って、週末に出される『せんせいあのね』の日記？」

まだ胸がドキドキしている。拓都が姉の子供だと言う事を訊かれるのかと、思わず身構えたら、いきなり日記の話って……。

でも、どちらかと言うと、訊くのをためらって、話を変えたって

感じだし。

いったい何を言いたくて、何を聞きたいのか？

「ああ、そう、その日記だよ。その日記の内容は、美緒も承知してるのか？」

日記の内容を承知してる？ 拓都は何か変な事を書いているのだろうか？

最近、拓都は一人で日記を書いてしまい、私が見せてと言っても、「恥ずかしいから嫌」と言ってみせてくれなくなった。「絶対見ちゃだめ」と言うので、寝ている隙にこっそり見るのとはばかられ、気になりながらも拓都の気持ちを尊重していたのだった。

「それが最近、一人で書いて、見せてくれなくなったの。恥ずかしいから、絶対見ちゃだめだって言うの。やっぱり何か変な事書いているの？」

彼が急にそんな事を言うから、何か不都合な事を書いているのだろうかと心配になった。

「いや、美緒の事がよく出て来るから、分かかって書かせてるの。なって、ちよっと思っただから」

「ええっ？ 私の事？ やだ、変な事書いてなかった？ もう拓都だったらー！」

私は慌てた。彼がわざわざ言うくらいだから、きっと変な事書いてるんだ。まさか、拓都の秘密が分かる様な事、書いてないでしようね？

そう思うと、急に不安になった。

拓都にハッキリ口止めた事は無い。でも、今まで他人の前では、いいえ、私の前でさえ、ほとんど本当の両親の事は言わない。



「そんな事無いよ。拓都が美緒の事を大好きなのがよくわかる様な作文だよ。そうか……見てないんだ。でも、本人の気持ちを尊重して、これからも見ない様にしないとなつ。俺がこんな事言つたのも、内緒だからな」

彼の笑いを含んだ物言いが、今度は反対に私の方がからかわれている様で、安堵と共にムツとした腹立ちも沸き起こつた。

「なによ、自分は読めると思つて！ どうせ、私の恥かしい話を読んで笑つてるんでしょ」

私がプンと怒つて言うと、途端に彼はクククツと笑いだした。

「相変わらずあまのじゃくな美緒で、安心したよ。美緒、ここは拓都の成長を喜ぶところだよ。拓都は、少しづつ親から離れて、自分の世界を持ち始めたんだよ。美緒の育て方がいいから、順調に成長している証拠だよ」

ずるい。

ずるいよ、慧。

あの頃の様に、素直になれない私をからかつて、わざと怒らせて、そして私が一番喜ぶポイントを持ち上げる様に褒めるんだから。素直になるしかないじゃない！

あなたは無意識にしている事かも知れないけど、あの頃に戻った様に会話をしているせいかも知れないけど、こんな風にあなたと会話できる事を喜んでいる自分を認めるしかないじゃないか。

あなたを裏切つた私と、以前と変わらぬ調子で会話してくれるのは、なぜ？

許されたなんて思わないけど、あなたにとっては全てが過去になつたから？

あなたが楽しそうに会話をしてくれるから、こんな風に以前の様

に会話をしてもいいと言う事なの？

それでも……。

「ありがとう。やっぱりあなたは、先生なんだね」

私は感慨深げに言った。彼は、拓都の事も、きつとほかの子供達の事も、よく見ているんだろう。そして、上手に褒めて、子供達が成長していく様を見守っているのだろう。

そして、私はこの言葉で自分自身を諫める。勘違いしてはいけない。以前の様に会話ができて、以前の様な関係に戻れる訳ではないのだから。

「ああ、そうだな。小学生って成長が目覚ましいから、いつまでも幼い子供の様なつもりでいると、子供の成長に置いて行かれるぞ。親も同じように成長していかないと」

私が引いた担任と保護者のラインを、彼も感じ取ったのだろうか？ 言葉づかいは変わらなくても、声にはもう、さっきまでのからかうような雰囲気は無くて、教師を自覚した様な真面目な響きがあった。

「ふふふ、そうだね。私はなかなか成長できないけど、拓都の成長を妨げない様に気を付けなきゃね」

自嘲気味に自分に言い聞かせるように、私は言った。  
私のこの未練で、拓都の事が見えなくなるような様には。

「美緒なら大丈夫さ。……そうそう、二学期の学級役員会議は1回だけしか時間が取れないから、今度の会議までに、親子ふれあい学習会でする事を考えておいて欲しい。西森さんにも伝えておいてくれないか？」

彼はもう気持ちは担任モードに戻っていた。これが現実。

「わかりました。来週の会議もまたよろしく願います」

「ああ、こちらこそよろしく願います。……美緒、一人で何もかも抱え込んで無理をするなよ。困った事があつたら、俺に出来る事なら、言ってくれたらいいから」

……どうして？

どうして、そんな優しい事を言ってくれるの？

やっぱり知ってるの？ 拓都の事。

たとえ、拓都との真実を知らなくても、私が拓都と二人きりで暮らしている事は、もう気付いているだろう。旦那がいない事も。

だからなの？ 心配してくれるのは。

あなたは一番頼つてはいけない人なのに。

「あ、ありがとう。大丈夫だよ。友達もいるし、周りに甘える事もできるようになったから」

そう、拓都を抱えて、一人では限界があつたから、私は素直に周りに助けを求められるようになった。それでも、こちらへ来てからしばらくは頼れる人があまりいなくて、彼に迷惑をかけてしまったのだけだ。

もう大丈夫。由香里さんも西森さんも、お隣のおばさんもいてくれる。私は大丈夫だから。

私は電話を切つた後、今まで胸に溜め込んでいた息を、その想いと共に吐き出した。

そして、私は思った。

たとえ、彼が拓都の事を知ってしまったとしても、私は貫くだけだ。拓都と私は親子だと。

それでも、私は彼と昔の様に話せて嬉しかった。

ほんのひと時、二人して過去へタイムスリップしたように、繋が

ったホットライン。

それは、いつか見たあの虹のようだ……。

#33：折り紙と誕生日（前書き）

お待たせしました。

またまた長くなってしまうました。

どうぞよろしくお願いします。

### #33：折り紙と誕生日

少しづつ秋らしくなってきた10月13日水曜日午後4時、二期の学級役員会議が開催される事になった。彼と電話で話してから、まだ一週間も経っていない。まだ記憶に新しい彼の姿、声を頭の中から追い出して、私は職場を早退すると車を走らせる。朝は30分以上かかる道も、通勤ラッシュと時間がずれると、20分かならないくらいで来れてしまう。

今日、また彼と会うのだと思うと、嬉しさよりもどんな顔して対峙すればいいのかと悩んでしまった。電話での親しすぎる会話と、小学校で担任と保護者として会う時の切り替えを、彼のように上手くできない。

そんな事を悶々と考えながら、職員室の並びにある会議室のドアを開けた。開けた途端、中にいた全員がこちらを振り返り、西森さんと目が合うと彼女は「美緒ちゃん、お疲れ」とニッコリと笑った。私は皆に「こんにちは」と声をかけながら中へ入って行くと、皆もにこやかに挨拶を返してくれた。

皆が集まっている所へ近づいて行くと、いつもの様に西森さんを中心に、又担任の噂話で花が咲いていた。

「ホント、篠崎さんって愛先生に似てるわね」

他のクラスの役員が私を見てそう言った。

又例の私と愛先生が似ている話を、嬉しそうに西森さんが皆にしたのだろうか。

「先週、愛先生を見たら、あれから少し髪が伸びてパーマをかけたみたいだから、もうあまり似てませんよ」

私は先週、単独取材に来た時に見た愛先生を思い出して言った。

結局は髪形が似てると似た雰囲気に見えるものだ。

「いやいや、守谷先生だって似てるって認めただから、髪形が変わっても似てるって！」

西森さんは守谷先生に認めさせた事が嬉しかったのか、自信ありげに言う西森さんに、私は心の中で溜息を吐いた。

だいたい、愛先生に似てる事が、そんなに騒ぐ事なのだろうか？

「と言う事はさ、篠崎さんは守谷先生の好みのタイプって事かな？」  
また別のクラスの役員さんが、そんな事を言いだしたので、私はすかさず「そんなわけ無いでしょ！」と少し怒りを込めて言った。  
それなのに、皆は笑い出して、西森さんは「美緒ちゃん、冗談だつて」と笑っている。

私にとつては冗談で済まされない事なのに……。でも、何も知らない人達を恨んでも仕方がない。私は「もう」からかわないで」と苦笑いした。

西森さんは守谷先生の事になると、途端にミーハーになるのは分かっているのだけれど、時々、その突っ込み方が憎らしく思う事もある。それでも、本来の思いやりのある西森さんに救われる事の方が多くて、私は彼女を憎む事ができない。

1年生の各クラスの担任達がやって来て、役員も全員そろつくと、会議が始まった。今日の議題は来週の親子ふれあい学習会での学習内容についてだ。また、クラスごとに意見をまとめて、後で各クラスの出した意見を元に話し合つて決める事になった。

それぞれクラス単位で役員と担任が話し合う事になり、私と西森さんの前に担任が座った時に初めて担任と目が合った。その時、彼はフツと穏やかな微笑みを見せ、私はドギマギしながらも、何とか笑顔を作つて会釈した。

彼に対して最初の頃とは違う私の態度に、西森さんに何か勘づか

れてしまうのじゃないかと不安にもなったが、私と同じく最初の頃とは違う彼の穏やかな態度に、嬉しさの方が勝ってしまったって、そんな不安はすぐに霧散していった。

「学習会の内容について考えて来てくださいと言いましたけど、一つ肝心な事を言い忘れていました。文化祭で展示するための作品作りを親子でもらうと言う事です。考えて来てもらった事は、それにあいますか？」

そう尋ねられて、私は親子のふれあいのイメージで考えていたので、体を動かす事を考えていた。

「去年から始まった親子学習会だし、去年上の子の時は親子ミニ運動会だったでしょう？ だから、今年もそんな感じで考えてたんだけど……作品作るなんて、思いもしなかったわ」

西森さんは、少し不満げに言った。そうだ、肝心な事を伝えてくれなかった担任が悪いのよ。そう思って、私も西森さんの言い分に頷いた。

「ハハハ、申し訳ない。それで、私が少し考えた事があるんですが……親子で折り紙をして、それを画用紙に貼って、何かを表現してもらおうと言うのはどうでしょう？」

担任は、あまり悪いと思っていない雰囲気ですら笑いながら謝ると、思いもよらない提案をして来た。

折り紙？ どうして、折り紙？

私は怪訝な顔をして担任を見ると、彼は私にだけ分かる様にニヤリと笑った。その笑顔が「折り紙なら美緒も得意だろ？」と言っているようで、何も言えなかった。

「あー守谷先生、自分が大学の時、折り紙サークルだったから、得意なものを出してきましたね？」



西森さんは、ニヤリと笑って担任に突っ込んでいる。

「まあ、そうですね。でも、これなら準備も簡単だし、親子で教え合いながら折り紙をするのもいいんじゃないかと思うんだよね」

「折り紙か……上の子が小さい時は一緒に折ったりしたけど、あまり折り方知らないしなあ」

西森さんが、自分の事を振り返って感想を言った。私はどう言えればいいか分からず、二人のやり取りを聞いていた。

「折り方は、いろいろプリントしますし、家に折り紙の本のある人は持って来てもらうよう、事前にプリントで知らせますし、当日も私分からない人には教えに回りますよ」

担任はこの案を提案しようとしているようで、いろいろな対応も考えていた。

「ウチに折り紙の本なんて無いなあ。美緒ちゃんも持ってるの？」

急に西森さんが私に話題を振ったので、慌てた。

「持ってるも何も……マニアックな折り紙の本まで揃ってますよ。」

「まあ、一応は……」

「そうだよ。小さい子がいる家は、結構折り紙の本買ってるよね。ウチは、子供が興味を示さなかったから、買わなかったなあ。もっぱら外遊びだったしね」

あ、子供向けの折り紙の本じゃないけど……いいかな？

「それじゃあ、折り紙と言う事でいいですか？」

「良いも悪いも、守谷先生、最初から決めてたくせに」

苦笑している担任に、また西森さんは突っ込みを入れている。彼が言っていた様に、西森さんは担任をからかって喜んでいるのかもしれない。

その後、各クラスからいろいろな案を出し合い、学年全体で話し合っ、折り紙と言う事になった。必要な物は折り紙と画用紙だけなので、先生達が用意してくれる事になり、事前の準備も無かったので、後は当日を待つだけとなった。

会議が終わり、帰ろうと西森さんと椅子から立ち上がったところで、担任が私達の傍へやって来た。

「西森さん、この前、警告頂いた件、解決しましたので……心配いだけいて、ありがとうございます」

西森さんも私も驚いて担任の顔を見た。わざわざ西森さんに事後報告するなんて……西森さんも、担任から結果報告を貰えるなんて思わなかったのだろう。

「あ、あの、やはり藤川さんが関わっていたのですか？」

あつ、西森さん、それを言ったら、最初の不倫騒動を知っているって言ってる様なものなの！

私はヒヤヒヤしながら、二人のやり取りを見ていた。

しかし、彼の方は先日の電話で私達が最初の騒動を知っていた事を分かっている、西森さんがそんな事を言いだしても驚きもせず、普通に言葉を返している。

「そうですね。いろいろと誤解されていたようで……でも、話を聞いていたおかげで、早く解決する事ができました。ありがとうございます」

「いえいえ、良かったです。守谷先生が、担任を降ろされたらどうしようかと思っていたので……」

「ハハ、大丈夫ですよ。元々処分なんてされていないんですから」担任は屈託のない笑顔でそう言った。西森さんは、自分で知っていた事をバラしてしまった事に気付いていないのか、嬉しそうに会話している。

まあ、いいか。担任も西森さんも、解決した事を喜んでいるのだから……。

「守谷先生って、やっぱり真面目で律儀な人だねえ。それに、私達が不倫騒動の事を知ってる事も分かってたみたいだし……」

西森さんは校舎から出て駐車場まで来ると、そんな事を言い出したので驚いた。

元はと言えば、私が担任に知っていた事をバラしたんだ。そう思うとなんだか西森さんに申し訳ない気持ちになった。でも、西森さんは、知られているだろうと予測して、あんな事訊いた訳で、担任が驚きもしなかったのを見て、担任に知られている事に気付いたんだ。

私がバラした事に気づいたんだらうか？

西森さんって……侮あなづれないな。

「まさか、分かっててあんな事訊いたの？」

「まあね。藤川さんの事を警告した段階で、気付かれるかなって思っていたから……でも、守谷先生も大人だね。何事もなかったようにサラリと流すんだから……」

彼を大人だと言う西森さんの方がずっと上手だよ。

私がバラした事に気づいていなかったとホツとしたけれど、これ

からも担任との過去の関係に気付かれないよう気を引き締めなくてはと、自分に言い聞かせる。西森さんの事大好きで大切な友達だと思っているけれど、この事だけは話せない。ごめんね、千裕さんと心の中でそつと呟いた。

\*\*\*\*\*

会議から一週間後の10月20日水曜日。

「ママ、今日学校へ来るんだよね？」

私は拓都と向かい合って朝食を食べている時、拓都が嬉しそうに言い出した。

「そうだよ。今日は親子ふれあい学習会だからね」

「守谷先生がお家の人と折り紙をするって言ってた」

「そうそう、拓都は折り紙好きだったよね。今日はどんな折り紙を折ろうか？」

「ぼくね、虫の折り紙の本に載っていたのを折りたい」

「えー！あの本の折り方、難しいよ。前も途中で難しいからママ折ってって頼んで来たのに……」

「でも、やりたい。ママが教えてくれるんでしょう？」

「まあね、一応その本も持って行くね。今度は最後まで頑張ってみ

ようか？」

拓都は嬉しそうな笑顔で「うん」と元気良く頷いた。

家を出る頃になって、カレンダーを見ていた拓都が、今日の日付のところを指差して、私の方を振り返った。

「ママ、今日、ママの誕生日だね。おめでとう」

「あ、気付いた？ ありがとうね。今日、帰りにケーキ買ってこようね」

私がケーキと口にした途端、拓都は破顔し、嬉しそうに「うん」と返事した。

そう、今日は私の27歳の誕生日だった。拓都の誕生日には時間があればケーキを焼くが、自分の誕生日は、市内の少し高いけど美味しいと評判のケーキ屋さんに注文している。それが私の誕生日の贅沢だった。小さいけれどホールケーキを注文しているので、ローソクを立てて火を吹き消すのだ。そんな些細な事も、拓都と私の誕生日のお決まりのイベントだった。

午前中だけ仕事をし早退すると、いったん自宅に戻って昼食を取り、自転車で学校へ向かう。1学年だけでも、やはり駐車場不足になるので、できるだけ徒歩か自転車と言う事で、役員としては率先しなくてはいけない。

今日も体育館に集合の為、入口の所で役員が受付をする。クラスごとに来た人から名簿をチェックし、今日使ういろいろな折り紙の折り方をプリントした資料と画用紙を渡していく。折り紙は子供達がノリやハサミ、色鉛筆などの文房具と共に持って体育館に来るらしい。

今日の親子ふれあい学習会は1年の5クラス合同で体育館で行われる事になっていて、体育館の床に座り込んで、親子で折り紙をしてもらう事になっていた。事前に知らされていたからか、折り紙の本を持って来ている人が多かった。

保護者がだいたい集まった頃、子供達が並んで体育館へ入って来た。子供達がクラスごとに並んで床に座ると、保護者もその後ろに並んで座った。

各クラスの学級役員が全員前に出て並ぶと、他のクラスの役員が始まりの挨拶をし、次に別の役員が、今日の親子ふれあい学習会の説明をした。そして、体育館をクラスごとに大まかにブロック分けして、親子が組んで床に座り込むと、みんな楽しそうにお喋りしながら折り紙を始めた。

「美緒ちゃん、何？ その本。子供向けの折り紙の本じゃないじゃないの？ えっ？ 虫の折り紙の本？ わー！ 難しそうな折り方！」

西森さんと由香里さんと私は子供と共に集まって折り紙をする事にした。私が持参した数冊の折り紙の本を皆の前に出すと、西森さんがそれを見て驚きの声を上げた。

「さすが……折り紙同好か……」

由香里さんも私が出した折り紙の本を見て、思わず口にした言葉を聞いて、私は慌てた。まさか、この場で「折り紙同好会」の名を出すなんて……すぐにその言葉を遮断する様に、西森さんに話しかけた。

「ほら、子供向けのアニメキャラクターの折り紙の本もあるよ」

拓都にせがまれて買ったキャラクターの折り紙の本。由香里さんの言葉を誤魔化すために、その本をすかさず西森さんの前に出した。それには、西森さんよりも子供達が反応して、3人が覗きこむと○

〇が載つてると指差して騒いでいる。西森さんも、虫の折り紙の本よりは取っ付きが良かったのか、子供達と一緒に見ている。

私はその様子にホッと息を吐くと、由香里さんの方を見て、睨んでおいた。

「それにしても、美緒ちゃん、こんなに折り紙が好きだったの？」

西森さんは、私が持って来た折り紙の本が、マニアック過ぎたのか、不思議そうに訊いた。

「まあね、以前に折り紙にハマった事があって、その時にいろいろ買いそろえたのよ」

まあ、嘘ではないし……と心の中で言い訳しながら、もう一度由香里さんに視線で「気を付けてよ」と念を押すと、彼女は苦笑して頷いた。

「なんだ。こんなに折り紙オタクだったんなら、この間の会議の時に言えば良かったのに。折り紙サークル出身の守谷先生とも話が盛り上がったんじゃないの？」

折り紙オタクって何よって思いながら、西森さんがなかなかこの話題から離れてくれなくて困ってしまった。

「いや、サークルにいた人にはとても、とても、敵いませんから……」

言いながら、自分でも可笑しくなった。サークルのリーダーまでしていたくせに……と心の中で突っ込んでみる。由香里さんの方を見ると、笑いを堪えているようで、なんだか居心地が悪い。

「美緒、この『クリスマスオーナメントを折り紙で作ろう』って本、見せてもらってもいい？」

由香里さんがそう言いうと、西森さんがすぐに反応して「え？」

クリスマスオーナメント？ 私も見たい」と話題が変わり、私は心の中でホッと息を吐いた。

それから、子供達と共に口も手も動かしながら、折り紙を進めて行った。

拓都は朝、虫の折り紙を折りたいと言っていたのに、他の子たちと共にキャラクターの折り紙に夢中になっている。まあ、いいか……と思いつつ、私は子供が分からないと言う所を教えながら、サークルの頃に思いを馳せた。

今日もって来た折り紙の本は、キャラクターの本を除いて、全てサークルの頃に購入したものだ。全て彼も見つめた事があるだろう。彼はこの本を見て、何を思うだろう？

一冊一冊に思い出がある。

学園祭でクリスマスオーナメントを売ろうと言う事になって、内職の様に必死で折り続けたっけ……。あのクリスマスオーナメントの本に載っている折り紙は、全て折った事がある。あの時、結構評判良くて、毎年販売していたっけ……。

虫の本と言えば、学園祭の展示で、張りぼての木にクワガタやカブトムシ等の虫をとまらせる為、皆で折ったよなあ。

「折り紙は進んでますか？」

頭上から声が聞こえて、皆そちらの方を見上げた。そこには穏やかな笑顔の担任が立っていた。

私の心臓がドキリと跳ねた。急に彼を意識して緊張してしまい、顔を逸らせる。

子供達は一斉に「先生、見て、見て」と自分達が折ったキャラクターの折り紙を見せている。

「守谷先生、見て下さいよ。篠崎さんこんなマニアックな折り紙の



本をそろえているぐらい、折り紙オタクだったんですって」

西森さんがそう言って、虫の折り紙の本を持って示している。

あ、西森さん、何を担任に言ってるんですか!!

そう思っても口にできず、ぎこちない笑顔で「千裕さん、折り紙オタクはヤメテ」と言うのが精一杯で……。

「あつ、この本、懐かしいな。サークルの時にメンバーが持っていて、学園祭に展示するためにたくさん折りましたよ。結構難しい折り方なんだよなあ」

西森さんが見せた虫の折り紙の本を、担任は手に取って、そんな事を言った。私は何とも言えない気持ちになった。まさしく今私が思い出していた事だから……まるで思い出がシンクロしたみたいで……。

「篠崎さん、折り紙に詳しくそうですね？」

担任はシレつとしてそんな事を訊いて来た。あなたがそれを訊く？ と心の中で突っ込みを入れながら、「ええ、まあ」と曖昧な返事をする。隣りから笑い声が聞こえて来て、そちらを見ると、由香里さんが堪え切れないとばかりにクスクス笑っている。

もう、知っているとは言え、不謹慎でしょう?!

私は由香里さんを睨みつけた。

「そう言えば、今日は美緒の誕生日だったよねえ。おめでとう」

由香里さんが唐突に言い出した言葉に私は固まった。

なぜ？ このタイミングに？ 彼が傍にいるの分かって……。

「えっ？ 本当？ 美緒ちゃん、おめでとう。それで、何歳になるの？」

西森さんは驚いた後、嬉しそうな笑顔でお祝いの言葉を言ってくれた。でも……。

「あ、ありがとう。でも、もう祝ってもらおうような年じゃないから……」  
私は、傍に担任がいる事を意識しながら、遠慮がちな言葉を返した。

「なに言ってるのよ。私達よりずっと若いのに。それとも、それは嫌味なの？」

西森さんが笑いながら突っ込みを入れてくる。

いえいえ、嫌味なんて、とんでもない。

そう思っても、担任がいると思うと声が出ず、思わず首を左右に振った。

「守谷先生。守谷先生も、篠崎さんにお祝いの言葉を言ってあげてください」

由香里さんは、恐ろしい事に、担任まで巻き込もうとしている。

これって、確信犯？ 私のためにこんな事を言い出したの？

それまで、静かに私達のやり取りを見守っていた担任が、自分に話を振られて、一瞬固まったような気がした。けれど彼は、そんな事を微塵も感じさせない穏やかな笑顔で「篠崎さん、誕生日、おめでとつございます」と、私をまっすぐ見て言ってくれたのだった。

#34：お誕生日メール（前書き）

お待たせしました。

又長いです。

どうぞよろしくお願いします。

## #34：お誕生日メール

『篠崎さん、誕生日、おめでとございます』

彼に最後に誕生日を祝ってもらったのって、いつだったんだろう？  
4年前？

確か、23歳の誕生日だった。  
彼の優しい眼差しに、一瞬のうちに記憶が頭の中を駆け巡った。

「守谷先生、ダメですよ。そんな女性を惑わす様な笑顔で言ったら……ほら、ウブな美緒ちゃんが固まってるじゃないですか」  
記憶の彼方にトリップしていた私の意識を呼び戻したのは、西森さんのそんな言葉だった。

「あ………すみません。ありがとうございます」  
私は我に返ると、すぐさまお礼を言ったが、笑顔を貼り付ける余裕はまだなかった。するといきなり隣りから、ハハハと耐えきれないと言わんばかりの笑い声が聞こえ、ギョツとなってそちらを見た。

「ごめん、ごめん。千裕ちゃんったら、女性を惑わす様な笑顔なんて言うんだもの………それに、ウブな美緒って………」

由香里さんは、言いながらも笑いが止まらない様で、それを聞いた西森さんまでが笑っている。

「もう、西森さん、からかわないでくださいよ」

笑っている彼女達のツッコミを、同じように笑ってかわす担任。

それにしても、由香里さんは知ってる癖に、わざと担任を巻き込

んで、私の反応を面白がってるとしたか言えない。西森さんにしてもそうだ。二人して、私をからかって、楽しんでるんだから……。  
なんとなく悔しい気持ちになって、こんな事なら由香里さんに何もかも話すんじゃないかと、そんな事までグルグルと考えている私を追い詰める様な、3人の笑い声。

「美緒、誕生日なんだから、笑わなきゃダメだよ」

由香里さんの脳天気な言葉に、誰のせいよと心の中で悪態を吐く。

「そつだよ」誕生日に眉間にしわを寄せてたら、せつかくの可愛い顔が台無しだよ。ねえ、先生」

西森さんまでもが楽しげに忠告するその言葉に、キレそうになった。

どうして、そこで担任に振るのだ！

「皆さん、お喋りもいいですが、手も動かしてくださいね。子供達もいますので……」

担任はもう冷静に戻ったのか、そう忠告すると別のグループの方へ移動して行った。

私は去りゆく彼の後姿を見ながら、せつかくおめでとつって言うてくれたのに、彼女達のせいで、嬉しさも半減してしまったと、心の中の行き場のない怒りを持って余っていた。

「それにしても美緒ちゃん、いいなあ」。私も守谷先生におめでとつって言うて欲しかったなあ」

西森さんの言葉に、由香里さんはクスクス笑ってるけど、私は溜息しか出なかった。

西森さん、あなたのその脳天気が羨ましいよ。

キャラクターの折り紙の本を覗き込んで夢中になっていた子供達に、そろそろ仕上げをしようかと声をかけ、それぞれが母親の傍に戻って来た。

「拓都、拓都が折った折り紙、画用紙にどんなふうに貼りたい？ ママね、このお花の折り紙を周りに貼ろうと思っただけ……」

私はそう言いながら、自分の折った花の折り紙を画用紙の上に並べた。

そう言えばと、並べた花の折り紙を見ながら思い出したのは、初めて彼と話をした時の事。桜の花の折り方を教えて欲しいと、彼が声をかけてきて驚いたっけ……。私の目の前で背中を丸めて折り紙を折る彼の長い指から生まれる綺麗な桜の花……。

「あのねママ、このモンスター達がお花畑で遊んでるみたいに貼りたい」

自分の折った花の折り紙を見ながら、また思い出にトリップしていた私は、拓都の声に我に返り自己嫌悪に陥った。

親子ふれあい学習会なのに、彼の事で頭の中を一杯にしてるって、母親失格だ。

拓都が夢中になつて折っていたのは、人気アニメに出て来るいろいろなモンスターだった。そのモンスター達を、画用紙の上の私が並べた花の折り紙の中に置いた。

なんだかとてもカラフルで賑やかな画用紙になった。それを見て私は思わず笑みが漏れた。まだきちんと折れなくて、どこか歪んだ折り紙だけど、拓都らしくて微笑ましい。

私はいつの間にか自己嫌悪から立ち直り、拓都とのやり取りに癒されていた。

「それでは、そろそろ時間になりますので、片づけをしてください。まだ作品が出来上がっていない方は、お家で続きをして、お子さんに持たせてください」

担任がそう言いながら、1年3組の親子の間を歩いて行く。子供達が先生に出来上がった作品を見せる度に、目じりを下げて笑って声をかけている。そして子供達の頭をクシヤツと撫でるのだ。

「美緒、見過ぎ」

担任と子供達のやり取りをぼんやりと見ていた私の肩をポンと叩いて、由香里さんが苦笑して言った。

私は我に返ると慌てて由香里さんの方を見ると、彼女はもう一度苦笑すると小さな声で「美緒、そんなに見つめていると、千裕ちゃんにバレるよ」と囁く。私はギョツとして「うそ！ そんなに見てた？」と訊き返すと、彼女は「まあ、他のお母さん達も結構視線飛ばしてるけどね」とクスクス笑った。

ああ、さっき反省したばかりなのに、彼がいる空間にいると思うと視線も気持ちも持って行かれてしまう。それはきつと、さっき彼が誕生日のお祝いを言ってくれたせいだ。思いもよらない彼からの言葉に、自分が思う以上に私の心は嬉しくて舞い上がっているんだ。これじゃあ、本当に母親失格だ。

私が大きく溜息を吐くと、由香里さんはどうしたのと言う表情で私を見た。

「だめだよ。親子ふれあい学習会なのに、邪心いっぱい、母親失格だよ。今までは学校でならきちんと保護者の仮面をかぶれていたのになあ。さっきのおめでとは反則だよ。由香里さんのせいだからね」

私は独り言のように自己嫌悪の心情を吐露しながら、最後に由香里さんを睨んだ。

「でも、嬉しかったしょ？」

由香里さんは私の顔を見て、ケロツとそんな突っ込みをする。ニヤリと笑った顔で。

もう……反論したいけれど、私の気持ちを全て知ってる由香里さんには何も言えない。

たしかに、私の心は嬉しくて喜んでいるのだから……。

「それにね、美緒はすっかりお母さんしてるよ。私なんて自分で産んだ子供なのに、美緒に申し訳ないぐらい、手を抜いてるよ。美緒なにも24時間完璧な母親でいる必要は無いんだよ。自分の気持ちを抑え込んで、全てを子供に注ぎ込まなくてもいいの。美緒は十分いいお母さんだよ」

さつきとは違って、真面目な顔で私を諭してくれる由香里さん。

私は彼女と出会ってから、ずーっとこんな風に、励まされ、心を軽くしてもらって来た。だから、子供を産んだ事もない独身の私でも、拓都の母親として頑張って来れたんだと思う。

「何話してるの？」

私達の作品も一緒にまとめて提出しに行ってくれていた西森さんが戻って来て、やけに真面目な顔で話していた私達が気になったのか、そんな事を訊いて来た。

「ウブな美緒がね、女性として母親としてどうあるべきか、悩んでるって訳」

由香里さんは、少しふざけて言ったけれど、的を射ていた。それを訊いた西森さんは少し考え込んで、それから私を見てふんわりと笑った。

「美緒ちゃんは何に対しても真面目に考え過ぎるのよ。子供を思う



気持ちがあれば少々手を抜いても大丈夫だし、女性としても美緒ちゃんのことだから、子供がいるから恋愛できないとか思ってるでしょ？」

西森さんの突っ込みに、いつもの様にタジタジしていると、由香里さんが隣で「そうそう」と相槌を打つ。

「私は、拓都の母親である事が、一番大事なの」

私はまた二人にからかわれている様な気になって、むきになって言い返した。

「ほら、そんな所が真面目過ぎるのよ。美緒ちゃんは母親と言う立場にこだわり過ぎてるのよ。拓都君の事を一番大事に思っている、その気持ちだけで充分なのよ。それにね、母親が幸せじゃないと子供は幸せになれないの。全てを子供に注がれたら、その内子供の方が重荷になっちゃうよ」

西森さんは、優しく言うてくれたけれど、私の心はどこかまだ素直に聞けなくて、そんな事分かってるって、心の中で言い返してる。私が何も言えずに俯いていると、二人は溜息を吐いて、「私としては、美緒ちゃんに女性としても幸せになって欲しいだけなんだけどな」と西森さんが言うと、「美緒はウブなくせに頑固だからね」と由香里さんが苦笑していた。

その時、子供達がクラスメイトの折り紙を見回って戻ってきたので、話はここで中断してしまった。

何よ、二人して……由香里さんも私の気持ち分かってる癖に、そんなに責めなくても……。

結局、自分の子供を産んだ二人の母親としての余裕には敵わないのだと、余計に惨めになっただけだった。そして、母親としても、女性としても、中途半端な今の自分が、一番嫌だった。

学校からの帰りに拓都とケーキ屋さんへ寄って、予約しておいたケーキを受け取りに行く。誕生日のケーキなので、年の数だけローソクを付けてもらうのだけど、最近は少しだけ太めの10年分のローソクがあつて、そのローソク2本と普通サイズのローソク7本を付けてもらった。

二人だけなので直径12cmの4号サイズのイチゴのホールケーキ。このケーキにローソクを立てて、食べる前にケーキと一緒に記念写真を……と思つて、夕食の後、お皿の上にケーキを出して思い出した。本当はずっと今日頭の片隅で思っていた事。彼がおめでとうと言つてくれてから。

今日は私の誕生日だけれど、明日は彼の誕生日だと言つ事。

おめでとうと彼は言ってくれた。私は彼におめでとうと言わなくてもいいの？

と言うより、私が彼におめでとうって言いたいって思ってる。

でも、元カノからおめでとうなんて言われても、うっとうしいだけだろうか？

今の彼女にしたら、迷惑な事だろうか？

彼があの時、私におめでとうなんて言わなければ、こんな事思ひもしなかったのに……。

あれは、言わされたただけだけれど。

私はお皿の上のケーキにローソクを挿しながら、ふとひらめいた。このケーキにローソクを25本分挿したところで写真にとって、おめでとうの写メールを送ろうか、と。

とりあえず、太いローソク2本と普通のローソク5本を挿したところで、ケーキだけの写真を1枚。残りのローソクも挿そうとしていた拓都を制して、ケーキだけの写真を取る私を不思議そうに見つ

める拓都。

「ママ、どうしてローソク全部挿さないのに写真撮るの？」

「明日はね、ママのお友達の25歳の誕生日なの。だから、25本のローソクを立てたケーキの写真を送っておめでとうって言つよ」

「へえ〜そうなんだ。でもぼくは、本物のケーキのほうがいいなあ」

「その人は遠くにいるから、ケーキは送れないの。だから、メールでおめでとうだけ言つよ」

すぐ近くにいるけれど、心は遠い過去にあるから……もう、虹の橋も届かない程遠い。

でも、まだ迷ってる。本当におめでとうって言つて、迷惑じゃない？

その後、27本分のローソクを挿したケーキとセルフタイマーで記念写真を取り、ローソクの火を消して、ハッピーバースデイの歌を歌って、二人でお誕生日のイベントをした。ニコニコの拓都とケーキを食べた。ケーキはとても美味しかった。でも、何か物足り無い感じがした。

拓都が寝た後、迷う想いの背を押し欲しくて、由香里さんに電話をした。

「へえ〜守谷先生は明日が誕生日なんだ。それで、おめでとうメール？ 美緒にしては積極的じゃない？」

由香里さんに、明日の彼の誕生日におめでとうってメールを送っても良いだろうかと訊いてみた。すると反対に聞き返されて、戸惑

ってしまっ。

積極的……になるんだろうか？

「やっぱり、元カノから個人的なメールなんて、うっとうしいかな？」

「ん……どうだろ？ でも、守谷先生と電話で話した時でも、昔みたいに話せるんでしょう？ それに、今日おめでとうって言うてくれたおかえしなんだから、気楽にメール送ってみたら？ 美緒は何でも深刻に考え過ぎるのよ。千裕ちゃんも言うてたでしょ。」

「千裕さんは、彼との事知らないから……。」

「イヤ〜今日の美緒を見て気付いたかもよ？ 美緒は自分では分かっていなかっただろうけど、守谷先生がおめでとうって言った途端、美緒真っ赤になって固まってしまったんだから……私、どうしようかと思ったわよ。千裕ちゃんが、先生に女性を惑わすような笑顔とか言って茶化さなかったら、美緒だってなかなか元に戻れなくて、気まずい思いをしたかもしれないよ。千裕ちゃんに感謝しなきゃね。」

「え　　！！ 真っ赤になってたの？ うそっ！！」

嫌だ、私。気持ちもろバレな態度とってたの？ 西森さんがあの時言ったのも、私をからかっと思ってたけど、私を救うためだったの？ あの後由香里さんが大笑いしたのも、場の雰囲気や和ませため？

私、二人を酷い人たちだと思ったのに……。

二人の友情に助けられていたなんて思いもせずに恨んでいたなんて……。

自分の狭量さに、またまた自己嫌悪してしまった。

「ごめん。ごめんね、由香里さん。私、あの時、二人して私をからかっているんだと思って、恨んでた」

「いいの、いいの。でも、あの後、千裕ちゃんがね、美緒ちゃんつてもしかして、守谷先生の事好きなのかなって言ってたよ。だから、美緒はイケメンに弱いだけって言っておいた。それに、美緒は初恋の人が忘れられないのって言っておいたから」

「そんな事まで言っちゃったの？」

「そうでも言わないと、ますます千裕ちゃんに疑われるよ？ 本当の事話すつもりがないなら、その辺上手く対応しなきゃ」

西森さんに担任との事を話すなんて……やっぱり、言い辛い。彼女はファンな訳だし……愛先生との事、応援してみたいだし……それに、話したところで、学生の頃の恋愛の様に協力してなんていう話じゃないし……話す事で、西森さんが変に気を使ったりしたら嫌だし……。

役員会議は、まだ3学期もあって、担任と私達学級役員の3人で話をする事はまだあるから、こんな事聞かされても、彼女だって困ってしまうだろう。本当に気を付けなきゃ。

「そうだよね、いつもありがとう、由香里さん」

「いいの、いいの。それより、守谷先生にお誕生日メールするんでしょ？ 良いと思うよ。少しくらい自分の気持ちに正直な行動を試みてみて」

いいだろうか？

彼女のいる人にそんなメールをしても。

それに……。

「でも、今日の私の反応を見て、彼も何か気付いたかな？ それなのにメールなんかしたら、迷惑じゃないかな？」

「そんなに堅く考えなくてもいいよ。お祝いの言葉を貰ったから返すだけ、それだけだから……それで美緒の気持ちも満足できるなら、いい事じゃない？ おめでとうって言われて、嫌な気がする人はいないって」

「そ、そうだよね……」

由香里さんの言葉に後押しされて、おめでとうメールを送ろうと決心した。

母親である事より、今は恋する乙女になっている自分を自覚している。

でも、今だけ、今だけは許して欲しい。

大きくなり過ぎた想いを、少しだけ吐き出させて欲しい。

おめでとうメールだけで満足するから……。

誰ともなしに許しを請い、祈る。この想いがいつか上手く昇華できますように、と……。

そして次の日、私はいつメールを送ろうか悩んだ。夜だと、もしかしたら彼女とお祝いをしているかもしれない。そんなところにメールを送ったら……やっぱりまずいだらうな。

いろいろ悩んで、朝、出かける前にメールを送信した。あの25本分のローソクを立てたケーキの写真と誕生日おめでとうと言う言葉と、『幸せな25歳でありますように』とメッセージを付けて。

彼から返事が来たのは夜だった。

メールに驚いた事と、あのケーキの写真がとても嬉しかった事、

本当は写メールを送りたいが、あのケーキの写真に負けない写真が撮れないので今回はパスだと書かれていた。そして、『美緒に又おめでとうが言えて、良かった』と『君の幸せをいつも祈っている』とメッセージがあった。

私は許されているのだろうか？

あんなに酷い事をしたのに。

彼は今幸せだから、全てを許す余裕があるのかもしれない。

これ以上の幸せを望むまい。

これ以上欲張りになつてはいけない。

彼の思い遣り溢れるメールに、期待してしまいそうな自分の恋心に、私は必死で言い聞かせた。

### #35：写メールの真実（前書き）

お待たせしました。

今回も長くなってしまって、すいません。

読むの大変だと思いますが、どうぞよろしくお願いします。



### #35：写メールの真実

あのお誕生日メールの返事を貰ってから、いいえ、彼から誕生日のお祝いの言葉を貰ってから、私はやっぱり、浮かれていた。私の心の枷はすっかり緩み、一人の時に彼からのメールを見て、ニヤけながら癒されていた。

まるで、彼に告白された後、彼への思いがどんどん膨らんでいた頃、彼から届く写メールが嬉しくて癒されていたあの日々の様で、胸の奥がキューンとなる。

由香里さんにお誕生日メールの話をする、「ほら、たまには自分の気持ちに素直になる事もいいもんでしょ？」なんて言う。

この気持ちに素直になってもいいんだろうか？

彼を想っていてもいいんだろうか？

彼にメールをしてもいいんだろうか？

だんだんと欲張りになって行く自分に、今は気付かないフリをした。

そして、彼から写メールが届いた。

それは10月の終わり、紅葉の山の写真だった。

いつか二人で雪を見に行ったあの山が、今は紅葉で綺麗だと綴られていた。

あの山は二人が付き合う事を決めた山だ。

あの日から始まった恋人と言う関係。

そんな山の写真を送って来たのはただの偶然？

それとも何か意味があるの？

この写メールの意味を期待している自分に浅ましさを感じながらも、彼の想いは無いのかと探してしまう。

この写メールはきくと、この間の誕生日のケーキの写メールのお

返し。

ただそれだけの事。

そう思わないと心は必要以上に嬉しがって舞い上がる。

返事は写メールの方がいいだろうかと、昨日撮った写真を思い浮かべる。10月最後の土曜日、西森さん家族と由香里さん家族と拓都と私で森林公園へ行った時の写真。

10月の終わりの森林公園の紅葉はまだ始まったばかりだった。

子供達は木製のアスレチックに大喜びで、大人もその後を付いて行ったけれど、結構アスレチックってハードな遊具で、1年生には難しい物もある。西森さんのご主人はさすがにアウトドアが好きなだけあって、一番年上なのにひよひよいと軽く制覇してゆく。私の次に若い由香里さんのご主人も、最近運動をしていないと言いなから、学生時代は陸上をしていたとかで、西森さんのご主人に負けていない。

子供達が「パパ頑張って」と声をかける。拓都も同じように応援しているけれど「パパ」と呼べる人がいない事に辛くなった。

皆で持ち寄ったお弁当を食べて、午後からは子供達とパパ達はキヤッチボールを始めた。私達女性陣は、そんな子供とパパ達の様子を見ながら、シートに座り込んでまったりとお茶とおやつでお喋りタイム。

拓都は初めてのキャッチボールなので、心配しながら見ていると二人のパパが5人の子供達を上手に遊ばせてくれている。西森さんが拓都の分のグローブまで用意してくれて、こんなところまで心配りのできるところが西森さんの尊敬できる点だ。時々脳天気発言やツッコミでイラッとさせられる事もあるけれど、それらも全て彼女流の場の雰囲気と和ませる話術なのだ。最近は分かって来た。

楽しそうな拓都を見て、私は嬉しくなった。拓都は今まで遊んで

くれる大人の男性が傍にいなかったから、私と遊ぶ時とは違って、のびのび遊んでいる様に見える。

やっぱり、由香里さんの言う様に、父親とのかかわりって成長していく上で大事なのかなと、今日の拓都を見ていて思ってしまった。

「ねえ、由香里さん。ご主人と子供達の関係ってどう？ 上手いってる？」

私は子供がある程度大きくなってから、新たに親子関係を築く事って、実際のところどうなんだろうかと由香里さんに訊いてみた。

「ん……そうねえ、陸はまだ1年生だし性格もあるのか、彼に上手に甘えるのよ。でもね、礼はもう4年生で、ちよつといろんな事が分かり出して来た年頃だから、素直に甘えられないし、本当の父親の記憶も薄っすらとあるから、余計に複雑な思いがあるんだと思うの」

わぁー、やっぱり大変なんだなって思いながら聞いていたけど、由香里さんはその事で悩んでいるふうでもなく、ケロリとした口調で話している。

「そうよねえ、4年生になってから、だんだんと幼さが抜けて、考え方とかもすっかりして来たって言うか、自立心が出て来たって言うか、そんな感じだよな」

西森さんも同調して、子供の成長していく様子を話している。

「じゃあさ、子供達にとって、結婚して良かった？」

普通ならこんなところまで訊きはしないだろう質問だけど、私と由香里さんの仲だから、あまり気にせずここまで訊いたのだと思う。それは自分の子育ての限界に不安になったから。

「あら？ なあに？ 美緒も結婚したくなったの？ 私の場合は、

子供達にとつても、私自身にとつても、結婚して良かったわよ。それも全部旦那のお陰だけだね」

由香里さんは幸せそうな笑顔で答えてくれた。私は良かったと安堵した気持ちとちよっぴり羨ましくなった。

「良かったね、いい人に出会えて」

「そうね。私は誰かさんと違って、運命の人と出会える事を諦めなかったもの」

由香里さんはそう言つと、私の心の中まで覗く様な眼差しで私を見て、ニツコリと笑つた。

それは、もう結婚なんかしないと云つていた私への嫌みも込められている。それが由香里さんの心配している気持ちの裏返し of 言葉だと言つことぐらいは、分かつていた。

「どうせ私は、諦めてばかりですよ」

私は自嘲ぎみに呟いた。

「あら、美緒ちゃんはまだ若いんだから、これからいくらでも出会いはあるわよ。なんならパパに会社の人を誰か紹介してもらおうか？」

西森さんがニコニコと脳天気な事を言う。

彼女は分かっているのだろうか？ 子供のいる私なんかを紹介して欲しいなんて言う人が、いると思つているのだろうか？

「こんな子持ちでもいって言う人がいたらね」

私は自虐的に笑つた。西森さんは少し驚いた顔をしたけれど、「美緒ちゃんはまだ未婚だし、まだ若いから、必ず出会いはあるよ」と慰めるように言つた。

その日拓都は、家へ帰る車の中からずーっと今日の話をし続けた。よほど楽しかったらしく、特にキャッチボールが気に入ったようだった。

「ねえ、ママ。僕の家にはパパは来ないの？」

家に着いてからも、今日の事を思い出しては話し続けていた拓都が、急にこんな事を訊いて来た。

その質問は昼間同じような事を考えていたとは言え、拓都の口から出た事が衝撃だった。

「えっ？」

私は驚いて拓都を見た。

「陸君家には、パパが来たでしょう？ だから……」

私の顔を見てまずい事を訊いたと思ったのか、拓都は慌てて言い訳の様に言った。

「拓都もパパが来て欲しいの？」

私は、拓都の表情を見逃さない様に、見つめたまま訊く。

「ぼくね、キャッチボールがしたいんだ」

そうか……拓都はキャッチボールをしてくれるパパが欲しいんだ。

「キャッチボールなら、ママが相手をしてあげるよ」

私がそう言うと、パツと明るい顔になった拓都が「ママもキャッチボールできるの？」と訊いて来た。

1年生相手のキャッチボールぐらいできるでしょう。

「多分できると思うよ。ウチにはパパは来ないけど、拓都にはお空

のお父さんがいるでしょう？ それにキャッチボールならママがいるから、大丈夫だよ。今度西森さんところで、グローブとボールを借りて、キャッチボールしようか？」

私は心の中の動揺を抑え込んで、笑顔で拓都に話しかけた。拓都は嬉しそうに「うん」と頷いた。

拓都にとつてパパと言う存在は、遊んでくれる大人の男性と言う認識なのだろうか？

今日、お友達のパパを見て、羨ましくなったのだろうか？

私は何とも言えない空虚感を感じながら、楽しそうにしている拓都を見下ろしていた。

そして、翌日、彼から届いた紅葉の山の写メール。

私が拓都の父親は必要か、なんて悩んでいたところに届いた写メールは、浮かれた恋心と現実の子育ての難しさの間で、揺れ動く私の心を余計に掻き乱した。

嬉しさの反面、恨めしさも募り、彼の真意はどこにあるのだろうと、届いた写真を見つめていた。

このまま返事をしない方がいいのか、私から始めた写メールなのに、何も返さないのは失礼なのか……。

昨日撮った森林公園の写真を送ったら、彼はどう思うだろう？

二人で初めてハイキングに行った、あの森林公園の写真。彼もこの写真の意味を考えるだろうか？

私一人が思い出しがみついているだけなのだろうか？

そして、考えれば考える程、彼への想いに囚われて、私は『森林公園も少しづつ紅葉が始まっていました』と言うメッセージと共に、写メールを送信していた。そんな私の心の中は、苦しさよりも、ドキドキする恋する乙女そのものだった。それは現実逃避だったかもしれないけれど。

11月7日曜日、小学校の文化祭の日だ。こう言う学校イベントには、必ず役員は駆り出され、役割を与えられる。委員会単位で仕事を割り振られ、広報はバザーの担当だった。

前日のバザーの値付けや陳列を担当する人、当日の販売を担当する人、最後の片付けと売上金の集計を担当する人に別れる事になり、私は最後の片付けの当番になり、西森さんは前日の準備になった。

私はその日、後片付けの当番だからと午後から文化祭に行く事にした。由香里さんと西森さんも時間を合わせてくれて、3人で子供達の展示物を見に行った。

午前中子供達は体育館で観劇し、午後からは各教室に展示されている展示物の見学になっていたのか、子供達がグループ単位で見学に歩いているのに何度も遭遇し、先生達も子供達の様子を見守るため各教室を見て回っているようだった。

私達は、まず1年3組の展示物を見て回った。拓都の作品を見つけると、携帯のカメラで撮影した。1年生は、運動会の時の絵と書き方と工作、そして、親子学習会で作った折り紙作品。自分も一緒に作ったのだと思うと、なんだか恥ずかしい。

その後、4年生の教室を回っていた時、愛先生に会った。子供達と一緒に見て回っているようだった。私達は愛先生に軽く会釈して特に会話をする事も無かった。その後バザーを覗きに行ったり、PTAの手芸クラブの作品展示を見て、最後にPTAの写真クラブの作品展示をしている部屋に入った。

「あれ？ この写真、守谷先生が撮った写真だ」

西森さんが驚いた様な声を上げた。私はその声に引き寄せられて、その写真を見に行った。

それは、角度は違うけれど、彼が私に送ってくれた写メールの写真と同じ、あの山の紅葉の写真だった。よく見ると、他にも同じ山の紅葉の写真が展示されていた。

「あ、キャンプの時に一緒に来ていた先生達の写真もある。皆で写真撮りに行ってたんだ。仲がいいんだねえ。あつ、やっぱり、愛先生のもある。守谷先生とよく似た構図だねえ」

西森さんはいい事を見つけたと言わんばかりに、写真を見ながら嬉しそうに喋っている。

私の顔は一瞬強張ったと思う。その時由香里さんと目が合うと、慰めるような眼差しで、気にするなとも言つ様に首を横に振った。だめだ。西森さんの前では笑顔でいないと。

彼女と行った時に撮った写真を送って来たんだ。

それだけで、あの写真には、何も意味がない事が分かる。バカみたい。何を期待してたんだろう。

その後、何とか二人と笑顔で別れて、私はバザーの片付けに向かった。

売れ残った商品を段ボールの箱に詰めて、売上金の計算をした。5人でしたのですぐに終わってしまった。そしてバザー会場の戸締りをする、解散となった。私は一人廊下をとぼとぼと歩いていると、「篠崎さん」と呼ぶ声に振り返った。

私の名を呼んだのは、愛先生だった。

「お疲れ様です。篠崎さん、もう帰られるのですか？ あのこと……すいませんが、少しお時間頂けないでしょうか？」

私は怪訝な表情をしたのではないだろうか？ 今一番会いたくなかった愛先生の申し出に、その意味をはかりかねていた。



「あつ、深刻な話じゃないんです。ちょっとだけお話してみたかったです」

愛先生は、私の顔を見て慌てて言い訳をした。

「わかりました。ここでいいんですか？」

私はどうにか笑顔を貼り付け、承諾を告げた。

「すみません、無理を言つて。ここではなんですので、こちらへ」  
そう言つと愛先生は片付けの済んだ会議室へ入つて行つた。この部屋はさつきまで写真が展示されていた部屋だった。

心の中に黒い雲が広がる。嫌な感情に支配されそうで怖い。愛先生はいつたい何を話したいのか？

私と彼との関係を知っているのだろうか？

彼が言つとは思えない。だったらなぜ？

愛先生に勧められて椅子に座る。長机に並んだ椅子に二人で座る。並んでいるから顔を正面から見なくて済む。それだけでもホツとした。

「あの、篠崎さん。私と篠崎さんが似ているつて言う噂、ご存知ですか？」

いきなりこんな事を訊かれて、少し拍子抜けした。

「あ、はい。あの、運動会の時、愛先生と間違われて、先生のクラスの子供だと思つんですが、愛先生って呼ばれて抱きつかれて、びっくりしました。その子も違つと分かつて驚いていたみたいだけど

……」

私はその時の事を思い出して、フツツと笑つて言つと、愛先生も笑顔で「あ、私のクラスの子です。何処かのお母さんと間違えちゃつたつて言つてました」と嬉しそうに話す。

「それに、西森さんは最初から似てるって言ってたんだけど、運動会の時に、先生、髪を切られていたでしょう？ あの時、私の髪形に似ていたからだと思うんですけど、沢山の人に似てるって言われました」

私は愛先生が笑顔で話してくれたので少し気が緩んで、話を続けた。

「そうなんですよ。私も髪を切った時に同僚の先生から誰かに似てるって言われて、そうしたら、1年生の担任の先生から、3組の役員の篠崎さんに似てるって言われて、篠崎さんを知らない先生まで運動会の時に篠崎さんを教えてもらって見たらしくて、よく似てたって言われたんですよ。篠崎さんは自分で似てるって思いますか？ 私は良く分からないんです」

愛先生は話をするのと、とても可愛らしい人だった。声も私と違って少し高音の可愛い声で、話し方もプライベートのせいか、少し甘えた様な喋り方に感じた。きっと性格も素直で可愛い人なんだろうなど、話を聞きながら想像していた。

「私も似てるかどうか分からないです。でも、こうしてお話していると、雰囲気は全然違うなって思うんです。愛先生ってすごく可愛い雰囲気があるんですけど、私は負けず嫌いで、いつもしっかりしてる委員長タイプって言われてました」

「いや、可愛くなんてないですよ。でも、篠崎さんはしっかりしてる委員長タイプって分かる気がします」

こんな話をするために呼びとめたのだろうか？

それなら廊下で立ち話程度でいいはずだ。

それともまだ何か話があるのだろうか？

彼と関係している事だろうか？

「そう言えば、愛先生の写真見ましたよ。写真の趣味がお有りなんですね」

私は、さつきここで写真の展示を見てから、ずっと心の中にくすぶっていたモヤモヤを思い出して、つい話題を振ってしまった。

私はいったい何を訊きたいのだろうか？ 聞いたら余計に悲しくなるかもしれないのに、何を確かめたいのだろうか？

「いえ、写真なんて旅行に行った時に友達同士で撮るぐらいだったんですけど、最近写メールを友達とやり取りするようになって、何かいい構図はないかなって探す様になっただですよ」

写メールと聞いた途端、私は自分の馬鹿さ加減を思い知った。

彼から写メールを貰って、浮かれていたんだ。

彼が写メールを送る相手が自分だけなんて、心のどこかで思っていたんだ。

「そうですね。今回はキャンプの時のメンバーで撮影のために行かれたんですか？ 紅葉が見ごろでしたね」

どうしてまだこんな会話を続けているのか分からないまま、笑顔で話し続けている自分を止められない。

「文化祭の展示用の写真が足りないから、撮影に行こうって誘われたので……本当に紅葉が綺麗でした」

「いいですね、皆さん仲が良くて……」

私はいったい何が言いたいの？ そう思いながら心の中で溜息を吐く。これ以上話す事がないのなら、もう帰りたい。

「あ、あの、話は変わりますが……篠崎さんの下の名前は、『みお』

って言うんですか？」

「えっ？　そうですけど……」

それがどうしたのだろう？

「あつ、今日、展示物の見学をしていた時、お会いしましたよね？　その時西森さんが篠崎さんの事『みおちゃん』って呼んでいらしたので……可愛い名前だなんて、思って」

「そうですか？　ありがとうございます」

私はそう答えながら、愛先生がだんだんと挙動不審になって行くのが気になった。私達はお互いに並んで座りながらも、体を斜めにして少し向かい合う様にして話していた。私はできるだけ相手の目を見て話そうと思ってているけれど、今回はあまり目を合わす余裕がなくて、彼女の口元ばかり見ていた。しかし、彼女の方もだんだんと視線を彷徨わせるようになり、私と目を合わせるのを避けている様な気がする。

「あ…あの、篠崎さんは、もしかして、守谷先生と以前からお知り合いですか？」

「えっ？」

驚きと共に、ああ、やっぱりと言う思いが胸に広がった。けれど、なぜ彼女は、そんな疑問を持ったのだろう？

「あ、いや、ちょっとそんな風に思ったから……」

愛先生は、そう言うつと俯いてしまった。

ああ、彼女はなんて素直で可愛い人なんだろう。どんな事でそんな風に思ったか分からないけど、不安になって確かめずにいられなかつたんだ。

「どうしてそんな風に思ったんですか？」

こちらも確かめずにいられない。どうしてそんな疑問を持ったのだろうか？ 以前不倫騒動の時に撮られた写真が私だっただけでわかったのだろうか？ それとも彼が何か言ったのだろうか？

「あの、それが……守谷先生が私に間違っって『みお』って呼びかけたから、気になっていたんです。それで、私と似てるって言われている篠崎さんが『みお』って名前だと知ったので、もしかしたらっと思っ……」

私はこの時、どんな表情をして聞いていただろう。もしかしたらバレてしまう様な表情をしていたかもしれない。それでもここは、シラを切り通すしかないだろう。

それにしても、どうして？

……最近彼と話をするようになって、以前の様に『美緒』と彼が呼ぶ。だから、つい出てしまったのだろうか？ 私と愛先生が似ていたから？

「違いますよ。守谷先生とは担任として初めて会っただけですから……私じゃないですよ。よくある名前だから、兄弟とか親戚の子とか、呼びなれた誰かの名前がつい出てしまったんじゃないですか？」  
私は彼女を安心させるようにニッコリと笑って言った。そんな自分の冷静さに何処か呆れながらも、彼女の不安を取り除かねばと思っってしまった。

「そうかな？ すいません、こんな話をして……どうか忘れて下さい」

愛先生は恥ずかしそうにそう言っつと、頭を下げた。

「いえ、大丈夫ですよ。誰にも話しませんし……忘れるようにします」

ね。それじゃあ、これで失礼します」

私は笑顔でそう言うと、立ち上がった。こちらを見上げた愛先生は、まだ恥ずかしそうに「本当にすいませんでした」と言った。

保護者にこんなプライベートな事を訊いてしまった自分を恥じているのだろうと思うと、愛先生の素直さや健気さを感じて、そこまですで彼の事を思っているのかと思うと、私はもう踏み込めないんだと認めるしかなかった。

心の中で「こちらこそごめんなさい」と呟いて、私は会議室から出た。

少し俯き加減で玄関の方へ向かって歩き出した時、前から歩いて来る人の気配を感じて顔を上げた。

どうしてこのタイミングで会うかな？

本当に私の運命はどうなっているのだと恨みたくなる。

こちらへ向かって歩いて来た担任と目が合うと、彼は優しく微笑んだ。

その笑顔を勘違いしてはいけない。

少し速足で近付いて来た担任に「お疲れ様です。失礼します」と頭を下げて、通り過ぎようと歩調を早めた。すれ違う時、彼の顔を見ずに俯いたまま行こうとした私に、彼は「美緒」と呼んだ。

私は驚いて足を止めて顔を上げると、睨んでしまったのだろう。彼は少し怯んだ表情になった。

「守谷先生、失礼します」

私はもう一度、ハッキリとそう言うと、頭を下げて歩き出そうとしたその時、背後で会議室のドアが開くのが聞こえた。

「篠崎さん」

彼がもう一度私に呼び掛けた時、彼も会議室のドアが開いた事に気付いたのか、そちらに顔を向けたようだった。

愛先生が出て来る。そう思うと、心臓がドキドキしました。このシチュエーションは、運命が用意した物なのか……私はその運命を振り切る様に、もう一度「失礼します」と言っていると、速足で玄関へと逃げだしたのだった。

#36：重荷を降ろせる場所（前書き）

随分お待ちたせしました。

なかなか進まなくて、本当に申し訳ないです。

今回も楽しんで頂けたら嬉しいです。



### #36：重荷を降ろせる場所

日曜日に行われた文化祭の翌日の月曜日は、振り替え休日だった。学童もお休みだったので、どうしようかと思っていたら、パートの仕事は休みを貰っているからと、由香里さんが拓都を預かってくれる事になった。

仕事を終えて拓都を迎えに行くと、「カレーをたくさん作ったから、食べて行かない？」と由香里さんが夕食に誘ってくれた。「旦那は帰りが遅いから、気を使わなくていいわよ」と……。

お言葉に甘えて夕食をご馳走になる。由香里さんがこんな風に誘ってくれるのは、きつと何か気付いたからに違いない。

彼女はいつもそうだった。私の様子がおかしいと、さりげなく食事やお茶に誘ってくれて、私が抱え込んでいる重荷を降ろさせてくれる。

やっぱり今回も何か気付かれてしまったのだろうか？ 今朝、拓都を送って来た時、いつものようにふるまっただつもりなのに……。

由香里さんと出会ってから、最初は子育ての話ばかりをしていたっけ……。案外早く、拓都が姉の子供である事は話したけれど、彼の事だけはなかなか話せなかった。言葉にしたら、封印している想いが溢れ出してきそうで、怖かったから。

でも、ある時、あまりに私の様子がいつもと違ったのか、今日のように由香里さんは私を夕食に誘ってくれた。

私は周期的に、彼の事を思い出して、それが止まらなくなって、どつと落ち込む事があった。

彼を裏切ったという事実が、私の心を傷つけ追い込む。

学生の彼を巻き込まなくて良かったと、私の不幸な人生に彼を引きこまなくて良かったと、ずーっと自分に言い聞かせていたけれど、

彼を想う心が、あの時彼に真実を告げれば、今でも一緒にいられたはずだと、反対に私を責めて来る。

これで良かったんだと言う肯定の気持ちと、それを後悔する気持ちが入る様に、私の心をどん底へと降下させる。

そうなる自分でもなかなか浮上できなくて、周りのみんなには何とか笑顔を貼り付けて対応していたけれど、由香里さんの前ではフツと素の自分が出てしまったのだろう。

由香里さんは私に言ってくれた。『一人で重荷を背負ってないで、私のところに少し降ろして行きなさい。受け止めてあげるから……』と。

私は由香里さんの優しさに、今まで封印していた想いを全て解放して、話し出した。一度話し出した想いは、堰を切ったように溢れだし、私は彼女に全てを話していた。彼女は時々相槌を打ちながら、何も言わずに聞いてくれた。そして私が話し終わると『辛かったね』と一言ポツリを言ってくれた。

それから由香里さんは、ずっと私の心の受け皿になってくれている。

「美緒、又何か抱え込んでるでしょ？　また落ち込んだ時の顔してるよ」

由香里さんは夕食後、子供達がテレビを見る為に離れて行ってから、私を真っ直ぐに見てそう言った。

落ち込んだ時の顔って……って思ったけれど、私の心を見抜く彼女に勝てない事は分かっている。けれど、昨日の愛先生との会話は誰にも言わないと約束したし……。

他の事ならこんなにも落ち込みはしないし、落ち込んだとしても復活する力はあるつもりだ。でも、彼の事になると、とたんに弱くなってしまふ私がいる。由香里さんに聞いてもらう事で、何とか平静を保っているのだと思う。

「そんな事無いよ」

私がそう答えながらも、昨日の事を話そうか、どうしようかと逡巡していた時、鞆の中の携帯がメールの着信を告げた。条件反射の様に鞆から携帯を取り出して開くと、送信者の名前を見て指が止まった。

「どうしたの？　もしかして、守谷先生から？」

由香里さんはするどい。しかたなく頷くと、彼女はにやりと笑って「また、写メール？」と訊いて来た。私は小さく息を吐くと、メールを開いた。

それは、見覚えのある滝の写真だった。

私がしばらくそのメールに見入っていると、痺れを切らしたようにまた由香里さんが口を開いた。

「どうしたの？　写メールじゃ無かったの？」

「ううん。写メールだった」

そう答えると、私は携帯を閉じた。

「ふ〜ん。なかなかいい感じじゃない？」

由香里さんは私を見て、ニヤニヤと笑った。

何がいい感じなのよ！

心の中で悪態を付きながら、由香里さんを睨むと、からかったせいで睨んでると思ったのか、「美緒、素直に喜ばなくちゃ。もしかすると、守谷先生も……」と言いかけたところで、私は首を左右に振って「違う。何もいい感じなんかじゃない！」と、由香里さんの言葉をさえぎった。

「どうしたの？　やっぱりなんか変だよ？　守谷先生と何かあったの？　写メールのやり取りするようになったんでしょ？」

「彼の送って来る写メールなんて、何の意味もないの！」

私は思わずそう言い返していた。その言葉を聞いた由香里さんは一瞬驚いた顔をした後、怪訝な顔で私を見た。

「ねえ、美緒。美緒はいつたい、どうしたいわけ？」

「どうしたいって……」

私はその質問の意味を計りかねて、由香里さんの問いかけに戸惑ってしまっただ。

「そうでしょう？ 守谷先生の事が好きなくせに、彼女がいるから自分の想いは伝えられないって言うたのに、急に誕生日のお祝いを言いたいって写メールを送るから、美緒もやっとその気になって一歩進んだのかと思ったのよ。だけど、何？ 送って来た写メールが、愛先生も一緒に行った山の写真だったから気に入らないの？ それとも、やっぱり彼女がいるかもしれない人に写メールなんて送ってしまった事を後悔してるの？」

由香里さんの言葉に驚いたけれど、その通りだと思った。

後悔、なのかな、やっぱり……。

今更ながら、彼の優しさや誕生日のお祝いの言葉、以前の様に「美緒」と呼ぶ彼の甘い声に、昔に戻ったような気になって浮かれ、何かを期待して、何かを勘違いして、彼に写メールを送ってしまった自分が恨めしい。

彼は今の彼女と幸せだからこそ、元カノの私の心配までして幸せを願ってくれていると言うのに、イタイ勘違い野郎の私は、二人の間に横恋慕した揚句、今カノを不安にしまっっているなんて……。

「そうだね。後悔してる。愛先生と幸せな彼に、裏切った私が写メールを送るなんて……なんて恥知らずで図々しい奴なんだろうって

……彼があまりに優しいから、ちょっと勘違いしてた。昔に戻ったような気になってたんだと思う。それに、愛先生がいる事、見ないフリしてた。私、横恋慕してるようなもんだものね……」

私は由香里さんの手前、苦笑いしながら言った。そんな私を、由香里さんは驚いた様な顔をして見ている。

「ちょっと、美緒。どう言う事？ 横恋慕なんて……それに、まだ守谷先生と愛先生が付き合っていると決まった訳じゃないし……」

「ううん。二人は付き合ってるよ。キャンプの時もとてもいい雰囲気だったし、愛先生も彼の事を見つめる目が違ってた。それに、千裕さんが言ってたけど、彼は愛先生との事否定しなかったって……」  
それに……二人は写メールのやり取りをしてるし、私の名前と間違えて呼ぶって、きっと二人きりの時の事だろうし……。

私は心の中で、二人が付き合っている理由を続けながら、胸に苦い物が広がって行くのを感じた。

「そんなの……愛先生が一方的に思ってるだけかもしれないじゃない。それとも、前は付き合っていても、今は別れたかもしれないじゃない？」

「彼が裏切った私にこんなに優しいのは、自分が幸せだからよ。あんなに酷い事したのに、私の事を心配してくれるのも、自分が幸せで心に余裕があるからでしょう？ 由香里さんだって言ってたじゃない？ 今は自分が幸せだから、前のDVのご主人でも幸せになつて欲しいって思ってる……」

由香里さんは自分の言った事を思い出したのか、少しバツの悪い表情をした。それでもすぐに、私を心配気な目で見つめてまた口を開いた。

「ねえ、美緒。どうしたの？ 美緒が言ってる事は分かってた事ばかりでしょう？ 昨日、文化祭であの写真を見たから？ 彼が送ってくれた写メールが、愛先生も一緒に行った場所の写真だったから？ でも、他の人も一緒だったんでしょう？ それなのに、今更なぜ？ それとも他に何かあったの？」

やっぱり由香里さんは勘がいい。誰にも言わないと約束したけど、由香里さんにだけはやっぱり聞いて欲しくなった。彼女は口が堅いから、なんて自分に言い訳しながら、私は話し始めた。

「あのね、昨日ね、バザーの後片付けが済んで帰ろうとしていた時に愛先生に声をかけられたの……」

私は心の中で愛先生に手を合わせながら、昨日の愛先生との会話を由香里さんに話す。由香里さんは驚いた顔をしたけれど、口を挟まずにただ相槌を打って聞いてくれた。そして、最後まで聞き終わると、私を見て少し呆れたように笑った。

「美緒らしいね。愛先生の素直な想いにほだされちゃった？」

由香里さんの笑いと言葉にムツとなったけれど、由香里さんに話した事で、気分は少しづつ浮上しているような気がする。

「そんな訳じゃないけど……」

あの時の不安げな愛先生の表情を思い出すと、胸が苦しくなる。

それは自分にも覚えがあるから……。

やっぱりほだされてるのかな？

「それにしても、恋する女性の勘<sup>あなせ</sup>って、侮れないね。愛先生の勘が美緒に行き着くなんて、すごい！ と思ってしまうたよ。普通だったら、保護者だし、疑わないでしょ？ 近くにいた千裕ちゃんさえ、気づかないのに」

そう言っただけで由香里さんは又クスクスと笑い出した。

笑い事じゃないんだけどな……でも、こんな風に笑ってやり過ぎ  
してしまえば、楽なのかもしれないね。

由香里さんはいつもこんな風に茶化して、私の悩みを笑い飛ばし  
てくれる。

私もつられて笑いながら「千裕さんは、想像もできないだろうね」  
と返した。

「ねえ、美緒。今回の事は美緒が責任感じる事は無いんだよ。美緒  
の事だから、自分が悪いなんて思ってるんだろけど、悪いのは全  
て守谷先生だからね！ だいたい女性の名前を間違えるって、たい  
がいよ！ その上、付き合っているんだとしたら、そのフォローは  
しっかりしなきゃ。彼女を不安にしたまま放っておくって、酷いじ  
やない！」

さっきまで笑ってたと思ったら、いきなり真面目な顔で彼を糾弾  
する様な事を言いだした由香里さん。

相変わらず、彼と愛先生が付き合っている事を認めていない様な  
口ぶりだし……。

でも、彼だけのせいじゃない。私もいい気になって浮かれていた  
のだから……。

「美緒、そんな情けない顔しないの！ 美緒は彼を庇いたいかもし  
れないけど、私は女性として守谷先生を許せないよ。もしも本当に  
愛先生と付き合ってるなら、元カノの名前と間違えるのもそうだけ  
ど、元カノに昔の様に馴れ馴れしく呼びかけたり、写メールを何度  
も送ってきたりして勘違いさせる事こそ、腹が立つの！」

由香里さんは言っている内にだんだんと怒りのボルテージが上が  
って来たのか、怒気を込めて言った。

それは違う、と思っただけれど、今の由香里さんに何を言っても、  
聞き入れはしないだろう。

彼が勘違いさせたんじゃないじゃなくて、私が勝手に勘違いしてるだけ。

全ては彼が優しいから。私と二人きりになると、昔の雰囲気に戻ってしまうのだと思う。でもそれは、懐かしさゆえの事。何年かぶりに会った友達とだって、最初はよそよそしくても、話している内に昔に戻った様に話してる事ってあるもの。

それにしても、私の為にこんなに怒ってくれる友達に、改めて感謝の気持ちが込み上げた。いつも私の事を心配して、真剣に考えてくれる年上の親友。彼女と出会えた事は、私にとって人生の宝物かもしれない。

「由香里さん、ありがとう。私の為にそんなに怒ってくれるのは嬉しいけど、血圧上げないでね。大丈夫だから、私は本当に大丈夫だから。私には拓都もいるし……」

私は、まだ怒り冷めやらぬ由香里さんに、苦笑いしながら感謝の言葉を言った。そんな私に拍子抜けしたのか、彼女の怒りのボルテージは一気に下がり、今度は情けない顔をして「美緒、ごめん。一人興奮して」と反対に謝って来たので、「私の方こそ、ごめんね」と謝ると、お互いに顔を見合わせて、笑いだした。

「ああ、そう言えば……あのね、ウチの陸がね、拓都君にパパ自慢をしていたの。今日、二人の会話を聞いてたら、陸ったら得意になってパパ自慢してるのよ。あの調子だといつもしてるかも知れない。それでね、拓都君が『ウチにもパパが来ないかな』なんて言ってるから、びっくりしちやって……ごめん、美緒。陸には後で言い聞かせるから……本当にごめんね」

「ううん、大丈夫だよ。この前皆で森林公園へ行った時にキャッチボールが楽しかったのか、同じような事を言ってたのよ。キャッチボールをしてくれるパパが欲しかったみたいで……だから私がキャッチボールをしてあげるって言ったら、満足してたから……でも、



今度は何をしてくれるパパが羨ましかったのかな？」

「あのね、ゲームなの。あの人結構、ゲームが得意みたいでね。子供達がなかなかできない所でも、楽々クリアするから、もう子供達、尊敬のまなざしよ。今日、拓都君とゲームをしながら、一生懸命にパパはゲームがすごく上手いんだって、自分の事のように自慢してたのよ。でも、拓都君がパパを欲しいみたいと言うから、責任感じちやって……ごめんね、本当に」

うなだれる由香里さんに私は、「気にしないで、私もゲームの練習するから」と笑った。

ゲームと言って思い出すのは、初めてテレビゲームなる物をした時の事。アウトドア好きの彼の部屋に、テレビゲームが置いてあるのを見て、『やっぱり男の子なんだな』って思ってたそう言うのと、『学童の子供達と仲良くなるのに必須アイテムなんだよ、ゲームは』と、今時の子供達と親しくなろうと思ったら、流行りのゲームぐらい知らない子供達と会話が成り立たないらしい。やってみると結構面白いよと彼は笑いながら『やってみる？』と訊くので、少し興味のあつた私は頷き、早速にゲームをする事になった。

それは、キャラクター達がゴーカートに乗って競争するゲームだったけれど、ハッキリ言ってみるとやるのは大違いだった。

『美緒って意外と不器用なんだな』

彼のこの言葉が私の負けん気に火を付けた。それから彼の部屋を訪れる度、私は練習した。そんな私に彼は呆れていたけれど、ついに彼を負かした時には『美緒には参ったよ』と言わせ、私はやっと満足したのだった。

あの時の様に、今度は拓都の為にゲームの特訓でもするか。

私はそんな事を思いながら、懐かしいテレビゲームの記憶に、フツツと笑いが漏れた。

「なあに？ 思い出し笑いなんかして……ねっ、それより、美緒は本当に結婚は考えてないの？」

「拓都も私も受け入れてくれて、キャッチボールとテレビゲームのできる人だったら、考えようかな？」

私が笑ってそう答えると、由香里さんはふざけてると思ったのか「もう、真面目に聞いてるんだからね」と拗ねたように言った。

私自身の結婚と言うより、拓都の父親となってくれる人がいるのならって、この間から少し考えてしまう。そんな私の頭の中は、彼と拓都と私が仲良くテレビゲームをしている姿を想像していた。

#36：重荷を降ろせる場所（後書き）

すみません。

お話は何の進展もないですね。

前回予告した大きな事件まで、たどり着く事ができませんでした。  
次回は、必ず……

更新が遅れがちですが、どうぞ見捨てないでくださいね。

#37：一瞬の風（前書き）

お待たせしました。

また、長いです。

どうぞよろしくお願いします。

### # 37：一瞬の風

この滝は、森林公園の奥にある滝だ。

彼からの写メールを見つめながら、私は遠い記憶を思い返していた。

初めて彼と行ったハイキング……今思えば初デートだったけれど、私は戦いだと思いこんで、彼に気を許さないよう気を張っていたわけ……。

懐かしさに頬が緩む。そして、彼からのメッセージをもう一度読んだ。

『美緒からもらった森林公園の写メールを見て懐かしくなったので、今日行ってきました。滝のマイナスイオンに癒されてきました』

今日、森林公園へ行ったんだ。

また、展望台まで登ったのだろうか？

やっぱり、愛先生と一緒に行ったのかな？

ああ、もう又こんな事ばかり考えてしまう！

私は首を横に振って、携帯を閉じた。

もう、返事をするのは止めよう。私が送らなければ、彼からも送って来ないだろうから……。

由香里さんはあんな風に言ってくれたけれど、やっぱり愛先生にしたら元カノとメールのやり取りしてるのって、嫌だろうから……いつまでも彼の優しさに甘えてはいけけない。

自分が勝手に勘違いして、自分の想いを少しでも満たしたくて、メールしてしまったけれど、保護者である事をもう一度肝に命じなくては。

私は自分自身にそう決意をさせたけれど、彼からの写メールを消す事も、あの日消しそびれた虹の写真の待ち受けを変えてしまう事も出来なかった。

\*\*\*\*\*

文化祭が終わった翌週の金曜日、お昼の休憩が終わり午後の業務が始まって少しした頃、その連絡は入った。

子供がいるといつ学校から連絡が入るか分からないので、携帯電話は常に上着のポケットに入れている。もちろん、マナーモードにしているけれど……。

その時、上着のポケットが震えだした。それはメールではなく、電話だと確信すると、静かに席を立てて廊下へ出た。携帯を取り出して確認すると、見覚えのある11桁の数字。

彼だ。

この時間だと拓都に何かあったのだろうかと、不安が頭を過る。急いで電話を繋げると、彼の第一声に胸が震えた。

「篠崎さん、拓都君がお昼休みにジヤングルジムから落ちまして、先程救急車で市民病院へ運ばれました」

……えっ？

拓都が落ちた？

救急車で市民病院？

私にとって呪わしい救急車とか市民病院と言うキーワードに頭は真っ白になって行く。

「篠崎さん、聞こえてますか？ 養護の青木先生と一緒に行ってもらっています。私も帰りの会が終わりましたら、病院へ行きますので……」

絶句したまま言葉を発しない私を不審に思ったのか、担任モードの彼はもう一度私に呼び掛けて話を続けた。

「それで、拓都は大丈夫なんですか？」

私は我に返ると、担任の言葉など気にせず、問いかけた。

「落ちてすぐは気を失っていたんですが、すぐに気がついて大泣きしました。でも、頭を打ったようですので、救急車を呼びました。私も校庭にいたんですが……」

頭を打った……その言葉は、私は背筋を冷たくした。

思い出すまいとしても、過去の記憶の扉が開きそうになる。

「わかりました、ありがとうございます。すぐに行きます」

私は担任の話の途中で言葉をさえぎると電話を切って、上司の元へ急いだ。

それからどうしたのか記憶は曖昧だ。気付くと市民病院へ向けて車を走らせていた。信号で止まる度にイライラし、デジャブの様に蘇る記憶と戦いながら、真っ直ぐに前を見据えて運転をする。

それでもやはり願わずにいられない。

……お姉ちゃん、拓都を連れていかないで……私から拓都を取り上げないで……。

市民病院に着いて総合受付で尋ねると、救急の受付の方で聞いて下さいと言われ、そちらへ向かうと、廊下に置いてある長椅子に見覚えのある人が座っていた。

あつ、養護の青木先生じゃないだろうか。

「青木先生ですか？」

私が近づいて声をかけると、その女性は「はい、篠崎さんですか

？」と立ち上がりながら、聞き返された。

「はい。今日は拓都がお世話になりました」

「いえ、こちらこそ、目が行き届きませんで……」

「それで、拓都は大丈夫なんでしょうか？ いまどちらに？」

「大丈夫ですよ。頭も体も骨の方は異常なかったようで、擦り傷なんかの怪我の処置は終わっています。頭を打ったので今、頭部CTを撮りに行っています。実は、ジャングルジムから落ちてすぐは意識が無かったんですよ。でもすぐに気がついて、痛みで泣いて少し興奮していたようなんですが、その後ちよつとぐったりとしてきて心配していたら、病院へ来てから少し吐きまして……お母さんがいないので、心細そうでしたけど、怪我の処置をしている間は、泣かずに頑張っていましたよ」

青木先生は私を安心させようと思ったのか、最後に拓都を褒めて笑顔を見せた。でも、頭を打って吐くのは良くないんじゃないだろうか……？

私がおも心配そうな顔をしていたからか「お母さん、拓都君はよく頑張ったので、褒めてあげて下さいね」と青木先生は私を安心させる笑顔で言った。

私はいったん不安な気持ちを心の奥に押し込めて、「はい、ありがとうございます」と頭を下げた。

その後、青木先生と一緒に座って待っていると、すぐにストレッチャーに乗せられた拓都が戻って来た。私が「拓都」と呼びかけると、拓都も「ママ」と安堵した表情をし、恥ずかしそうな笑顔を見せた。頭に怪我をしたのか白いネットの様なものをかぶっている。

ああ、無事だ。



その笑顔を見て微笑み返ししながら、私もやっと詰めていた息をホッと吐き出した。

看護師が、少し様子を見る為今晚は泊まってもらう事になったからと説明し、そのまま病室へ案内してくれる事になった。私は青木先生にもう一度「今日はお世話になりました」と頭を下げると、「お大事にしてくださいね」と会釈して帰って行った。

病室は市民病院3階の小児病棟の一室だった。ベッドの柵を引き上げると、ベビーベッドの様になるベッドが並ぶ6人部屋で、今は3人しかいないのが入り口のところの名札には3人の名前だけしか無かった。

開け放たれた入口から覗くと、ベットごとに区切るカーテンが今は開けられ、拓都より小さな子供が寝ているのが見えた。

看護師が「失礼します」とストレッチャーごと病室へ入ると、拓都をベッドに移して横向きに寝かせ、「もう一度説明に来ますね」と言うとストレッチャーを押して出て行ってしまった。

拓都と二人取り残され、途方に暮れていると、周りの視線を感じてそちらへ顔を向けた。「今晚だけですけど、よろしくお願いします」と声をかけ会釈する。「こちらこそ」と笑顔が返って来て、緊張が緩んだ。

私は置いてあった椅子に腰かけて、拓都の顔を覗き込んだ。拓都は寝かされたままじっとしている。やはり元気がない。うとうとと眠っている様だ。「拓都」と呼びかけると薄っすらと目を開けて「ママ」と答えるが、また閉じてしまう。「拓都、大丈夫？」と訊いても、「うん」と頷くとまたうとうととしてしまう。本当に大丈夫なんだろうか？ 先程の検査の結果はどうなんだろうか？

私が、拓都の手を握りながら不安げに拓都を見つめていると、看護師がやって来た。

「篠崎さん、一応入院になるので、いろいろ聞かせてくださいね」  
看護師はそういいながら周りのカーテンを閉めた。プライバシー保護のためだろうか。そして、用紙を挟んだボードとペンを持って、もう一つあった椅子に腰かけると、笑顔を向けた。私の不安などたいた事無いと思っているのか、それとも不安を煽あおらないよう笑顔をみせているのか、やけに明るくて親しげだ。

「あの……拓都は大丈夫なんでしょうか？」  
私は我慢しきれずに訊いてみた。

「さっきのCTの結果も異常なかったみたいだから、大丈夫だと思いますよ。後ほど先生に説明に来てもらいますからね」

看護師の彼女は、まるでそれがマニュアルどおりである様にニッコリと笑った。

異常なかったんだ……

看護師の言葉に少し安堵しながら、質問に答える為に彼女の方に向き直った。

「それじゃあ、家族構成を教えてください」  
家族構成？

「あの、私と拓都だけです」

「本人とお母さんだけですな？ あの、ご主人は、亡くなられたんですか？」

看護師のご主人と言う言葉に、どうこたえるものかと困り果て、私は仕方なく本当の事を話す事にした。

「いえ、あの……拓都は、姉夫婦の子供で、私は本当は叔母なんです

すが、今は母親として暮らしています」

一瞬看護師は目を見開いたけれど、すぐに普通の表情に戻って質問を続けた。いろいろな患者がいるから、特にどうとは思わないのかもしれない。

どうして入院するだけなのに、こんな事を訊くんだろうと思いつながら、訊かれるまま私の両親の死因や姉夫婦の死因、そして拓都に関する事等の説明をした。その後、看護師は入院についての説明を一通りすると、立ち上がった。

「それでは、この書類に記入してもらったら、事務の方に出しておいてくださいね。それから、拓都君、2回程吐いちゃったんですよ。また吐くかもしれないので、その膿盆を使ってください。吐いた物がのどに詰まるといけないので、横向きに寝かせておいてくださいね。何かあったら、このボタンを押して呼んでください」

看護師のスラスラと説明する言葉が上手く頭に入って来ない。それでも「はい」と返事をする、看護師は安心したように微笑んで病室から出ようとした時に何かを思い出して振り返った。

「そうそう、お母さん、今夜はどうされますか？ 簡易ベッドを貸し出す事も出来ますが……」

「一晩だけなので、ここに座って子供の様子を見ています」

「わかりました。でも、お母さんも少しは休んでくださいね。付添いの仮眠室もありますし……お母さんが倒れたら大変ですから」

私は大丈夫ですと言う代わりに、微笑みながら頷いた。

看護師が去った後、すぐに拓都を診た医師がやって来た。そして、青木先生から聞いた事と同じような説明をしてくれた。

「頭も体も骨折はありませんでしたし、怪我也縫う程の傷は無かったのは不幸中の幸いでしたね。ただ、頭部打撲の為に嘔吐がみられるんですが、これも子供の場合よくある症状ですし、CTの結果、特に中で出血している様子もないので、このまま様子を見ていてください」

そう説明すると医師は「拓都君」と何度か呼びかけ、拓都が目を開けて彼を見ると「頭痛い?」「気持ち悪い?」「手と足は動くかな?」と訊いている。拓都は訊かれる度に「うん」と返事をし、最後に少しだけ手足を動かした。

「今みたいに、時々呼びかけて意識レベルが低下しないかチェックしてください。それで何か変だなと思ったら、すぐにナースコールをしてくださいね」

医師の説明を聞いていた時、いきなり拓都が嘔吐した。驚いてすぐに膿盆を口の傍へ持って行ったが、遅かったようだ。医師はナースコールを押すと、「患者が嘔吐したから、シートと寝巻と拭く物を持って来て」と連絡している。私は「すみません」と言いながら、拓都の背中をさすっていた。

看護師が来て、全ての始末をすると、また私と拓都の二人きりになった。拓都が喉が渴いたと言うので、自販機で水のペットボトルを買って来て、看護師に言われた様に、まだ嘔吐の可能性のある拓都に少しづつ飲ませる。落ち着くと拓都はまたうとうととし出した。

本当に大丈夫なんだろうか?

お姉ちゃん、拓都を連れに来たんじゃないよね?

拓都がいなくなったら……そう考えただけで、私はゾツとした。

私のせいだ……拓都の母親として生きて行こうと決めたのに、そのために恋も手放したのに、今頃になって手放したはずの恋心に翻弄されて、横恋慕して……。

罰があたつたんだ。

彼が昔の様に話すから、勘違いして、いい気になってたんだ。

このままでは母親失格だと罰を与えられたんだ。

お姉ちゃん、お義兄さん、私にはもう任せられないと思つたの？

拓都の少し青ざめた横顔を見ながら、私は誰にとも無く懺悔をしていた。

「篠崎さん」

不意に名前を呼ばれてそちらを見ると、カーテンの開いているベッドの足もとの方に、私の心を惑わす原因となっている人が立っていた。

「あつ、守谷先生、わざわざありがとうございます」

私は立ち上がると、頭を下げた。先程の懺悔は一瞬ではじけ飛ぶ。

「拓都はいかがですか？」

担任は、近づくと拓都に視線を向けた。

「はい、骨折は無かつたんですが、頭を打つてるので何度か吐いてしまつて……CTの結果も異常なかつたらしいんですが……ずっととうとうと寝てしまうので……」

彼の担任モードに、私も保護者の仮面を付け、拓都に視線を向けたまま話す。

「そうですね。しっかりと見ている事が出来ず、本当にすみませんでした。青木先生から、今晚だけ入院して様子を見ると聞いているのですが……」

彼がちらりと私の方を窺つのを目の端に捕らえたけれど、視線を上げることはできなかった。

「はい、私もそう聞いているので、拓都が回復したら退院できると思います。いろいろご心配かけてすいません」

「いえ、何かありましたら、携帯の方へ連絡してください。夜中でもかまいませんから」

二人とも微妙に視線を合わさずに話をする。私は自分の心に蓋をして、保護者の仮面をしっかりと被った。彼の方も担任モードを崩さない。これが今の私達の関係。血迷ってはいけない。

「ありがとうございます」

彼の方を見ずに頭を下げる。彼はしばらく無言のままその場に立っていたが、「それでは、お大事にしてください」と言っと、帰って行った。

私は病室の入り口で、遠ざかる彼の後姿を見つめながら、私達の間にはやはり越えられない壁があるんだと、心とは裏腹に納得している自分がいた。

私は小さく溜息を吐いた。彼を目にするだけで上がる心拍数に情けなくなる。彼の傍にいと、あの頃に戻りそうになる。

どうして彼が担任なんだろう？

どうして彼と再会してしまったのだろうか？

どうして、私はまだ彼を思い続けているのだろうか……。

再会してから際限なく繰り返されたクエッションに、答えてくれる者はやはり誰もいなかった。

その後、看護師が「一応、夕食にお粥を出しますので、様子を見ながら食べさせてください」と言われた。それは、先ほど又お水を飲ませた後、嘔吐したからだ。でも、胃の中の物はほとんど吐いてしまったらしく、出てくるのは胃液ばかりで、ますます拓都はぐっ

たりとしてしまった。

本当に大丈夫なんだろうか……又不安がもたげてくる。よくニコスなんかで、症状が急変して亡くなりましたとか聞くけれど……縁起でもない事が頭をかすめる。

病院での早めの夕食が済んだ頃、同室の人達がそれぞれのベッドの周りのカーテンを閉めたので、同じように閉めて、狭い空間の中で拓都と二人きりになる。

夕食のお粥は、食欲が無いのか一口二口食べて、「もういらないと又横になってしまった。

他のベッドではテレビを見ているのか、小さく音が聞こえている。すぐ隣のベッドは空いているので、話す言葉もボソボソとしか聞こえてこない。

これから長い夜をこの狭い空間で拓都と二人不安の中で過ごすのかと思うと、心細くなった。

友の顔を思い浮かべたが、拓都の傍を離れられなくて、連絡もできない。病院ゆえ携帯電話は電源を切っている。頼る人のいない事がどんなに辛い事かは身に染みて分かっているから、こんな時堪らなくなる。

さつき彼を見た時、<sup>すが</sup>縋りたくなかったのは、この不安な心細さのせいだ。きつと……。

拓都、拓都、ママを独りぼつちにしないで。

拓都が元気になったら、良い母親になるから……。

お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お義兄<sup>にい</sup>さん、拓都を助けて！拓都を立派に育てるから、まだ連れていかないで……。

未熟な母親だけど、私から拓都を奪わないで……。

私は両手を胸の前で組みながら、ブツブツと空の上から見守る両親と姉夫婦に懇願した。拓都の顔が涙で歪む。もうこれ以上私の大

切な人を、運命に奪われる訳にはいかない。

その時、近くで聞こえた物音に振り返ろうとしたその時、後ろから不意に抱きしめられた。

「美緒、俺が守るから思いっきり泣けよ」

驚いて声を上げようとしたその時、囁かれた懐かしい低音の声に、私の頭の中は真っ白になった。

えっ？

まさか、彼？

思わず「慧」と呟いた自分に驚き、我に返った。

私は彼の腕から逃れようと身じろぎをした。

泣いているのを見られた？

こんな弱った私を見て、同情したの？ 気持ちが悪く過去へ戻ったの？

そんな風に優しくするから、勘違いしてしまうのに……。

あなたには、あの可愛らしい人がいると言うのに……。

もう、私を惑わさないで！

「守谷先生、止めてください！」

私は強く身をよじって立ち上がると、彼の腕から逃れた。彼は、

私が思いのほか強く言ったので怯んだのか、後ずさった。

今なら、さっきの事は、無かった事にできる。彼の言葉は、聞かなかった事にできる。

「お母さんが参ってはいけないので、何か食べて下さい。拓都のため頑張ってください」

彼はコンビニの袋を差し出しながら、強張った表情でそう言った。

彼も、無かった事にしたんだ。

「ありがとうございます」



それは、無かった事にする事を了承したと言つ返事。

彼は、コンビニの袋を渡してしまうと、踵を返してその場から立ち去った。それは一瞬の風の様に、私の心をざわめかして過ぎて行った。

コンビニの袋の中には、おにぎりとお茶とお茶が入っていた。私はそれを見て初めて、自分が何も食べていなかった事に気付いたのだった。

### #37：一瞬の風（後書き）

今回のお話に出て来る、ジャングルジムから落ちた時の怪我の様子や頭部打撲による症状は、多少は調べていますが、お話の都合にあうように書いています。

こんな事はありませんとか、おかしいとかの突っ込みどころ満載だと思いますが、妄想の産物ですので、温かく見逃して頂けると嬉しいです。

病院での医師、看護師の描写も、想像上の事ですので、実在するものではありません。

その点ご理解いただきますよう、お願いします。

### #38：友の帰郷と虹の写真

『美緒、俺が守るから思いっきり泣けよ』

彼が言ってくれた言葉が、一晩中、頭の中でプレイされ続けていた。

聞かなかった事になんて、できない。

拓都はあれから、本格的な眠りに入ったのか、落ち着いた寝息に変わっている。それでも不安は消えてくれず、心のどこかで彼の言葉に縋り付いている自分がいた。

あの時、あの腕に縋っていたら、どうなっていたのだろうか？

私は首を横に振った。

こんな事を考える事は、間違ってる。

選ばなかった方の事を考えてみたって、結局はそちらを選べなかったのだから……。

翌日、拓都はケロリとして目覚め、どうして自分が病院にいるのか、よく分からないようだった。そして、「お腹が空いた」と、朝食をキレイに食べたのだった。

午前中の内に医師の診察を受け、退院許可が出た。この土日安静にして異常がなければ、月曜日から学校へ行ってもいいと言われて、やっと安心できた。

自宅へ帰って来て、シャワーを浴びて着替えると、やっと人心地つき肩の荷が下りた気がした。すっかり元気になった拓都を見て、改めて無事だったと心の底から安堵すると、思わず拓都を抱きしめ

ていた。

「拓都、無事で良かったね」

「ママ、どうしたの？」

あまり記憶のない拓都にしてみれば、私のこの行動は不思議に思ったのかもしれない。

「病院から元気に帰って来れたから……」

両親も姉夫婦も、無事に帰ってこれなかったから……。

「うん。ママ、ごめんね？」

「拓都が悪いんじゃないんだから、謝らなくていいのよ。拓都が元気になってくれて、ママ嬉しいんだから」

私はそう言うと、大きな欠伸が出た。安心した途端に睡魔が襲って来たようだ。

「拓都、ママ少し寝てもいいかな？」

「うん、いいよ。僕が本を読んであげる」

布団を敷いて横になると、拓都が本を持って部屋へやって来た。

その本は『にじのおうこく』だった。

「この前、朝の会の時に、守谷先生が『にじのおうこく』を読んでくれたんだよ」

嬉しそうに話す拓都の顔がぼやけ始めた。拓都のたどたどしい朗読を聞きながら、私は夢の世界へ入って行く。

夢を見た。

慧が私の元まで架けた虹の橋を渡ってやって来ると、私を抱きしめて言った。

『美緒、もう何も心配しなくていいんだよ』

彼の優しい声が私を包み、彼の温かさに包まれて、幸せに微笑んだ。

目覚めた途端、夢だった事が悲しかった。

寝る時に拓都が『にじのおうこく』なんか読むから……。それに昨夜の彼の言葉のせいだ。

携帯の待ち受けの虹の写真を見ようと携帯を開くと、真つ暗な画面を見て電源を切っていた事を思い出し、慌てて電源を入れてみると、メールを受信した。

由香里さんと西森さんからのメールだった。子供から拓都の事を聞いたのかもしれない。

開いてみると、やはり心配のメールだった。電話をしようかと思っただけで、二人ともこの週末は出かけると話していたのを思い出して、拓都の怪我の経過と自宅に戻ってきた事をメールで送った。

二人からはすぐに安心したとメールが返って来た。ずいぶん心配かけてたんだろな。

私はもう一人、退院の連絡をしなければいけない事を思い出した。やっぱり報告しないとダメだよな？

自分の中にそう問いかけて、また昨夜の彼を思い出してしまった。今は彼の声を聞くのが辛い。私はメール作成画面を開いた。

『昨日はご心配をおかけしました。拓都は元気になりましたので、

退院して自宅へ戻ってきました。このまま異常が無ければ、月曜日  
から学校へ行ってもいいそうです。いろいろとお気使い頂き、あり  
がとうございました」

もう保護者モードのメールしか送れない。それが本来の関係。  
溜息を付きながら携帯を閉じ、しばらくするとまたメールを受信  
した。

『連絡ありがとうございます。拓都が元気になって安心しました。  
でも油断せずにこの土日、ゆっくり休んでください。お母さんも体  
に気を付けて下さい』

彼からの返信は全くの担任モードで、よそよそしい。  
これが現実。夢はやっぱり夢で、選ばなかった答えに未来は無い。

翌日の日曜日の夜、懐かしい友から電話があった。

「美鈴、久しぶり。元気にしてた？」

「美緒、私、帰って来たの」  
テンションの低い声で話す美鈴に、いつもと違う雰囲気を感じた。

「そうなんだ。それで、いつまでいるの？」

「私、仕事を辞めてこちらへ帰って来たのよ」

「ええっ？ それって……」  
結婚準備のためとか……その割には元気がないけれど……。

「私、直也と別れたの」

「えー！ 別れたって……また喧嘩しただけじゃないの？」

「彼ね、結婚するのよ。他の人と」

「ど、どうしてそんな事になってるの？ 美鈴達、一緒に住んでたんじゃないの？」

「うん、最初は上手くいったんだけどね。彼の方が仕事が忙しくなって、すれ違う事が多くなった頃に彼の友達の彼女の相談に乗る様になったみたいで、その友達が二股かけてるとか心変わりをしたとかで、彼女の相談相手になってる内にお互いどちらとも無く関係を持つちゃったみたいなの。それで、彼女が妊娠してね。責任取りたいから別れてくれって……何が責任よね？ 私の方の責任はどうしてくれるのよって話よね」

淡々と話す美鈴の話に、私はただ絶句するばかりだった。

「美鈴……」

「美緒、私は大丈夫だから。もうそれも一ヶ月前の事なの。もう吹っ切れたから。それで何もかもリセットして一からはじめようと思っ……」

「何よ美鈴。一番辛い時に、どうして話してくれなかったの？ 私じゃ何もしてあげられないかもしれないけど、話を聞いてあげることぐらいはできたのに……」

「ありがとう、美緒。あの時はね、惨めな自分を誰にも見せたくないかったの。結局は自分でしか乗り越えられない事でしょう？ だか

ら、さんざん泣いて、吹っ切ったのよ。これもね、美緒のお陰なの」

「私の？ 私は何もしてないじゃない」

「美緒だって、辛い別れを乗り越えてきたでしょう？ だから、私も乗り越えなくちゃって……」

「私は……そんな事言ってもらえる様な立派なものじゃないのに……」

今だってまだ乗り越えていないのに……  
でも、今の美鈴にそれは言えない。

「ううん。美緒の辛かった気持ちはよく分かる。それも自分から別れを言いだすのは、本当に辛かったと思う。そんな辛い中、拓都君をちゃんと育てて……美緒はよく頑張ってるよ」

違う、違う。私はそんな褒めてもらえる様なものじゃない。  
今だって、拓都が大変だったのに、彼の事で心乱してるし……。

「私、そんな風に言ってもらえる程、頑張ってるから……」

「もう、美緒は……そんなところが美緒らしいんだけどね。それでね、私、絶対あいつより素敵な人と結婚してやろうと思ってるの。だから、美緒も一緒に婚活しよ」

美鈴は、傷ついた分、対抗意識を燃やす事ではっきり空いた心の穴を埋めようとしてるんだ。

「婚活って……私、結婚する気無いら……」

「美緒、何言ってるの！ もう27歳でしょう？ あっという間に30代になっちゃうんだから……」



「美鈴、そんなに焦らなくても……まずはこちらで就職しないの？」

「その事なら、ちゃんと考えてるわよ。私、やっぱり初心に戻って、養護教諭を目指そうと思うの。まずは来年の試験を受けるために勉強をしようと思ってるんだけど、それまで遊んでる訳にいかないから、県と市の養護教諭の臨時採用を申し込んだの。それに、大学の方にも根回ししておこうと思って……そうそう、今度の土日、M大の大学祭なのよ。ゼミの教授に挨拶に行きたいし、付属の学校の採用や臨時の募集なんかも聞いてこようと思ってるの。折り紙サークルの展示も見たいから、一緒に行かない？」

私は美鈴の話に相槌を打ちながら、これだけ仕事に対して真面目に考えているのなら、もう大丈夫なんだなと安堵した。10年近く付き合ってきた彼と別れたのに、前向きに行動している美鈴を誇らしくさえ思った。

……今の私と大違いだ。

「M大の大学祭か……懐かしいね。行ってみようかな？ 拓都も一緒に行ってもいい？」

大学祭なんて、何年振りだろう？

もう私の知っている人はいないけど、久々に行ってみるのも気分転換になるかもしれない。

「もちろんOKよ。それじゃあ、土曜日の午後でもいい？ 時間はまた連絡するわね」

美鈴の最初の暗い雰囲気はいつの間にか消えていた。彼女も話しながら、吹っ切れたのかもしれない。

\*\*\*\*\*

11月19日金曜日夜7時。広報の2学期2回目の会議の日だ。今回も1学期の時と同じように、私は記事の入力作業をしていた。他の人はそれぞれ担当の箇所のレイアウトや写真選びをしている。隣で記事の文章チェックをしていた西森さんが、ニコニコと私に携帯の待ち受け画面を見せた。

「あー、ミッキーと一緒に写真撮れたんだ」  
そうそう、先週末は西森さん家族、デイズニールランドへ行っていた。西森さんは嬉しそうに、その時の様子を話した。

携帯の待ち受け画面には、ミッキーマウスと子供たちが一緒に写っていた。西森さんは嬉しそうに、その時の様子を話した。  
「西森ちゃん、何々？ 私にも見せて」  
他の広報のメンバーが、西森さんの携帯を覗き込む。みんなそれを見て、デイズニールランドの話で一盛り上がりしている。

「ねえ、ねえ、私の待ち受けも見て」  
また別のメンバーが自分の携帯をみんなの方へ向けた。そこにはかわいい猫の姿が写されていた。そこにいたメンバー全員にその携帯が回され、またひとしきり「かわいい」と盛り上がると、今度は、携帯の待ち受け自慢が始まった。  
子供の写真、ペットの写真、好きな韓流スターの写真等々……結構みんな待ち受けに思い入れがあるんだなと感心していると、西森さんがニコニコとこちらを向いた。

「美緒ちゃんのは、どんな待ち受けなの？」

「いやあ、私のはそんな自慢するような待ち受けじゃないから……」

確かに思い入れはあるけど、単なる虹の写真だし……。

「何々？ 気になるじゃないの？」

私は仕方なく西森さんに携帯の待ち受け画面を見せると、「何だ、拓都君の写真じゃないんだ」とがっかりされてしまった。

だから、見せるの嫌だったのに……。

「ねえ、守谷先生の待ち受けの写真って、何だと思う？ 私この間、覗いちゃったんだ」

急にそんな事を言い出したのは、本部役員もしている広報メンバー。いつもは昼の部会議に出ているが、2学期は昼の部に出れなくなったからと、夜の会議の方に出席していた。

守谷先生の話題に、西森さんが食いつかないはずはなかった。それは、周りのメンバーも同じだけけれど。

「わー、何々？ もしかして、彼女の写真とか？」

「守谷先生が、誰に見られるか分からない待ち受けを彼女の写真にすると思う？」

「じゃあ、なんだろう？ クラスの子どもたちの写真とか？ 多すぎて無理か……」

「守谷先生なら、この間の文化祭の時に展示されてた写真みたいな風景写真じゃないの？」

「あー、勘が良いねえ。そうそう、風景写真だったの。虹の写真だったのよ」

えっ？ 虹の写真？

周りで「なぐんだ」と言う声が飛び交っているけれど、私の心臓

はドキドキとスピードを早めた。  
隣の西森さんが驚いた顔をして、私の方を見たけれど、私の意識は虹の写真に飛んでいた。

あの虹の写真だろうか……。

そんなはず無いと思いつつも、心が震える。

それとも……一番考えたくない事だけど、他の誰かとも私と同じように『にじのおうこく』の話をして、虹の写真を交換し合ったとか……それは、嫌だ。

でも……3年以上たった今でも、彼がああ虹の写真を残しているなんて、考えられない。それも待ち受けにしてるなんて……単に変えるのが面倒で、そのままにしていたとか……そんな事はあるまい。

でも、もしかすると、私と同じようにあの写真だけは残してくれたのだろうか？

「美緒ちゃん」

西森さんに呼ばれて我に返ると、にやりと笑っている。

「な、なに？」

何か気付かれてしまったのだろうか……。

「ふふふ、美緒ちゃんって、守谷先生と趣味合うみたいね、折り紙も好きだったし」

西森さんの好奇心に輝く瞳が怖かった。

何か、勘ぐってる？

「ぐ、偶然だから」

こんなに動揺したら、何かありますって言ってるようなものだと思うのに、どうしようもない。

「分かってるわよ。ちょっと驚いただけよ。でも、いいじゃない？  
守谷先生と趣味が合うなんて」

西森さんはフフフと意味深に笑って、そんな事を言った。  
ちつともいい事なんてない！

まだ回りで携帯の待ち受けの話題で盛り上がっていたので、私と  
西森さんの会話は誰にも聞かれることは無かった。

「ねえ、この間の本部役員とPTA担当の先生達との文化祭の打ち  
上げの時、池田さんが守谷先生に迫ったんだって？」

広報委員長が、先ほど守谷先生の話題を披露した本部役員さんに、  
新たな話題を振った。

「ちょっと、池田さんって、去年離婚したって噂の人でしょう？」  
他のメンバーが口を挟む。

「そうそう、その池田さんよ。彼女独身時代にローカルテレビだけ  
どアナウンサーをした事があってね。若く見えるし美人だから自  
信があるんじゃないのかな？ 酔った振りして、守谷先生に携帯番  
号を教えてくれて迫ってたの。私は独身だから不倫じゃないです  
よって……」

「若く見えるって、あの人確か34歳のはずだよ。守谷先生よりず  
っと年上じゃない？」

西森さんも、守谷先生の噂となれば、口を挟まずにいられないの  
か。

「そうそう、守谷先生より10歳ぐらい年上だよ。だいたい守谷  
先生が保護者に対して本気になるはず無いよね。去年のトラウマも

あるだろうし……」

「そつだよ。いくら美人だって、独身だって、子供もいるのに守谷先生に迫るなんて、身の程知らずだよ。教師と保護者なんてタブーでしょ。教育委員会に知れたら、怖いよね」

母親達の辛辣な噂話に驚きながらも、自分の想いに釘を刺されているようで、胸が痛くなった。

教師と保護者……私達の今の関係は、乗り越えてはいけない壁があるのだと言われた気がする。

そして、虹の魔法はその壁に阻まれて、彼の元へは架けられないのだと、心の中に芽生えた彼の虹の写真への期待を、粉々に打ち碎いたのだった。

#39：大学祭【前編】（前書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

更新が遅れがちで、お待たせしてばかりで、本当にすいません。

今回のお話は長くなってきたので、前編と後編に分ける事にしました。

いつもより少し短いです。

どうぞよろしく願います。

### #39：大学祭【前編】

4年ぶりの母校の大学祭。

この前来たのは卒業して一年目の時。

蘇よみがえりそうになる記憶を押し込めて、大学の門をくぐった。

通路に模擬店のテントが並び、呼び込みの声が飛び交う。大勢の人が賑やかに行き交う大学祭は、若さに溢れて眩しいぐらいだった。一瞬気遅れしてしまったのは、今の生活がこの喧騒から遠く隔たった所にあるせいかもしれない。もう三年以上、子育てと主婦業と仕事で一杯一杯の生活をしてきたから、大学時代はもう遥はるか昔の事のようにだ。

…… たった5年前まで大学生だったのに……

「なんだか、年を感じるよね。若さが眩しいよ」

「なあに？ 美緒。やけに年を取ったみたいなのを言って……」  
美鈴がプツと吹き出し、笑いだした。

「大学時代が遠いなあ〜って、思ってね」

「そうだね、美緒はいろいろあったから……まあ、今日だけでも大学時代に戻ったと思って大学祭を楽しんでくださいな」

「そうだね。休日に拓都と離れて過ごすなんて、初めてだし……たまにはいいかもね」

拓都は西森さんの所へ遊びに行ったので、今日は美鈴と二人で大学祭へ来ていた。

拓都が傍にいない事が、何となく落ち着かないけれど、結婚もし



ていないのに独身に戻ったような、自由さも感じていた。

私たちは模擬店を覗きながら、折り紙サークルの展示会場へ向かった。

「ねえ、私たちの頃よりセンス良いと思わない？」

折り紙の展示を見ながら、私は美鈴に問いかける。色遣いと言い、展示の仕方と言い、私たちの頃とは時代の違いを感じてしまう。たった5年なのに……。

それだけ自分がこんな世界から離れてしまっていた事を思う。折り紙と言えば、拓都相手に折るぐらいだったし……もしかして私、すっかり所帯じみていない？

「そう言われたら、そうだね。私たちが卒業した後、レベルが上がったかな？ この巨大折り紙も、前は伊藤君任せで男子好みのテーマだったけど、これは女子の作品じゃないかな？」

美鈴が指差したゆるキャラの巨大折り紙は、見に来た女子高生が「カワイイ！！」と騒いでいた。

スタッフをしている現在のサークルメンバーも5年も経っていると知った顔は無く、私たちは展示を一通り見ると会場を後にした。その後、他のサークルの展示を見て回り、メインステージで行われるイベントを眺め、歩き疲れた頃、大学祭仕様のオープンカフェで休憩する事にした。

注文したケーキセットを食べながら、見てきた展示について話をする。

「なんだか淋しいね。知ってる子もないし、自分たちの時と雰囲気が違うし……」

私がポツリとそう言うと、美鈴は笑って私の方を見た。

「どうしたの？ 美緒は何を期待してたの？ 誰かに美緒先輩って声をかけて欲しかった？」

美鈴の言葉は的を射ていて、私は母校の中に自分の居場所を探していたのかもしれない。

今まで大学時代の事は思い出さないようにしていたから、余計なのかもしれないけれど。

「そう言う訳じゃないけど、やっぱり大学時代は遠いなって思ってた……」

「まあ、美緒の言いたい事は分かるけど……美緒にとっては大学時代は特別な思い出があるものね」

美鈴の言葉に心臓がドクンと跳ねた。私は小さな声で「そんな事無いよ」と呟くと、美鈴は優しい顔でフツと笑った。

「守谷君、今、どうしてるんだろうね？ 実家へ帰って先生になったのかな？」

美鈴は遠くを見ながら独り言のように言った。いきなり出てきた彼の名前にドキリと心臓が跳ねる。

そう、彼女は知らない。彼がこの県で教師になり、拓都の通う小学校の教師をしているなどと。

彼と再会した事を言いあぐねていたら、言うタイミングを逃してしまった。もう今更言い出だせないけど、彼女には私が彼と別れた時に苦しんだのを知られているから、余計に言い辛いのかも知れない。

「そうだね」

私が小さく相槌を打つと、美鈴は徐に私の方をまっすぐに見た。

「美緒はまだ、守谷君の事、忘れられない？」  
どうしてこう直球で訊いて来るかな？

彼の名前が出たあたりから、私の心臓の鼓動は少しづつスピードを上げだし、今はドクドクと早鐘のように跳ねている。

それは、美鈴に隠し事をしているせいだろうか？ それとも、彼を思い出してドキドキしているのだろうか？

「もう3年以上経ってるんだよ。もう忘れたよ」

彼と別れたばかりの美鈴の前では、辛い別れを乗り越えた私ではない。  
たい。

でも、そう言いながら、胸は痛かった。

「美緒は嘘が下手だね」

美鈴がクスクスと笑いながら言う。

「嘘なんて言って無いわよ」

私は拗ねて口をとがらす。

「そんな痛い顔して忘れたなんて言われてもねえ」

啞然として美鈴の方を見ると、「美緒は本当に不器用なんだから」と言われてしまった。

長い付き合いの美鈴にはごまかしがきかないのかもしれない。さつきまで笑っていた彼女が急に真面目な顔をして、私に向き直った。

「ねえ、美緒。やっぱり今でも、恋愛も結婚もしないって思ってるの？」

「しないって言うか、もうできないと思う」

「でも美緒。美緒が過去の想いに囚われて、別れた時のまま立ち止

まっついても、現実の時間はどんどん流れて行くんだよ。守谷君だつてもう美緒の事諦めて、今頃は新しい彼女がいるだろうし……拓都君だつてどんどん大きくなって大人になって行くのに、美緒はいつまでも過去にしがみついている気なの？」

「過去にしがみついている訳じゃないけど……」

この想いは過去のものじゃない。

「だつたら、これからの事を考えなきゃ。拓都君が大人になった時に、美緒が誰とも結婚せずにいたら、拓都君はきつと自分のせいで美緒が結婚できなかつたって思うよ。美緒が自分のせいでお姉さん達を死に追いやつたつて、拓都君に罪悪感を感じてる様に……それに、美緒は守谷君に対してだつて、罪悪感を感じてるでしょ？ そんな罪悪感を拓都君にも感じさせる気なの？」

そんな……そんな事……やっぱりそうなのだろうか？

私が結婚しないと、拓都は責任を感じて罪悪感を持つてしまうのだろうか？

「ねえ、美緒。直也も私に対して少なからず罪悪感を感じてると思うの。だから、私はアイツより素敵な人と結婚して、アイツを安心させたいのよ。私が幸せにならないと、アイツも心から幸せになれないんじゃないかと思うの。私を捨てて選んだ幸せなんだから、とことん幸せになつてもらわないと、私の涙も無駄になるじゃない？

だから、私と一緒に婚活しよ？」

美鈴はニコツと笑つて婚活で話を締めた。彼女は笑っているけれど、やっぱり今でも小野君の事、好きなんだ。だから、小野君の罪悪感を取り除いてあげたいんだ。美鈴は派手な見かけと姉御肌な性格だけど、彼を思う気持ちはとつても一途だつた。

もしかして慧も私に対してそんな風に思っているのだろうか？

だから、私に今幸せなのかと尋ねたのだろうか？

私に罪悪感を感じて欲しくなくて、優しくしてくれたのだろうか？

私は美鈴の言葉に返事もせず、グルグルと考え込んでいた。

「もう美緒は考え過ぎるから、とにかく行動を起こそうよ。もう会えない人をいつまでも想ってるより、新しい出会いを求めなくっちゃ！ ねっ！」

やけに明るく元気な美鈴が、どこか痛々しく感じてしまうのは、彼女が彼一筋だった事を知っているから……。でも、そうやって辛い現実を乗り越えようとしているんだ。なのに私は美鈴が言うみたいに、過去にしがみ付いてるだけなんだろうか？

「うん、そうだね。子持ちの私でもいいって言ってくれる人がいるなら、考えようかな」

私も美鈴みたいに現実を受け入れて、乗り越えなくちゃいけないのかもれない。

「そうそう、もう罪悪感から解放されるべきなんだよ、美緒は」

罪悪感……。やっぱりそれは永久に消えないと思う。彼がどんなに幸せになっても、あのひどい裏切りの記憶は、忘れちゃいけないと思う。もう二度と大切な人を傷つけないためにも、私の心の十字架として……。

それから美鈴は、市主催の婚活パーティーがあるから申し込もうとか、婚活サークルに参加しようとか、具体的な婚活イベントを提案し出したので、驚いた。意地になってなあい？ と尋ねたくなるほど、テンションが高くて参ってしまう。

でも、そうやって乗り越えようとしている美鈴を応援したいと思う。私は心の中でそっとエールを送った。

その後、教授のところへ行くと言う美鈴と別行動する事になった。私は、拓都と預かってくれている西森さんへのお土産でもと、模擬店を見て歩く事にした。拓都がいたら喜びそうな食べ物や、大学のキャラクターの公式グッズ、フリーマーケットもあり、一人でも十分楽しめそうだった。

人混みにもまれながら、時々立ち止まって模擬店に並ぶ商品を物色する。

一人きりでこんな風にぶらぶらするのは何年振りだろう？

本当に独身に戻ったみたいだと思いつつながら、結婚もした事ないのと自分で突っ込みを入れ、フツツと笑いが込み上げてきた。

その時、ふと視線を感じて、商品から目を上げてそちらを見た。

そこには、驚いた顔をした彼が、私の方を見て立ち尽くしていた。あつと思つた時には、彼が傍まで近づいてきていた。

幻だと思つた。

美鈴とあんな話をしていたから、彼を忘れたくない私の恋心が見せた幻だと……。

「一人？」と訊く彼の言葉で我に返ると、頷きながら、もう一度目の前にいる彼に意識を向けた。

これは、現実なの？

#39：大学祭【前編】（後書き）

たくさんの方にお気に入り登録をして頂き、本当に嬉しいです。  
これからも気に入っていたいただいた皆さんを励みに、更新頑張ります。  
今後もよろしく願います。

#40：大学祭【後編】（前書き）

お待たせしました。

今回も長くなってしまうました。

覚悟して読んでください。よろしく願いします。

今回は、守谷先生の事を表す時、「慧」と名前で表記しています。いつも、その場の雰囲気で、「担任」としたり、「彼」としたりしてきましたが、「慧」と表記するのは、あまり無かったと思います。守谷慧〓守谷先生〓担任〓慧で、単に「彼」と表す事も多かったのですが、誤解なきようお願いします。



## # 40 : 大学祭【後編】

「美緒」

名前を呼ばれて、またぼんやりしていた事に気付く。

「ここだと邪魔だから、あっちへ行こう」

私たちは大勢の人が行き買う模擬店のテントの前に立っていたので、人の流れの邪魔をしていた。それに気付いた慧が、私の腕をつかむと人混みから離れた場所まで引つ張って行った。

慧にとっても母校だから、ここにおいても不思議じゃないのに、彼に会うまでそんな事は思いもしなかった。ここでの彼との思い出は、すべて過去の事だったから。

現状を理解した私は、慌てた。

「あつ、こんにちは」

今頃になって挨拶する私を、慧はクスツと笑った。

「ああ。美緒は一人で来たの？ 拓都は？」

「あつ、拓都は西森さんのところで、私は美鈴と来たんだけど、美鈴が教授に挨拶に行ったから、しばらく別行動って事で……」

何焦ってるんだ、私。

私の焦りようが面白いのか、慧はまたクスツと笑い、「落ち着けよ、美緒」と苦笑交じりに言う。

慧はいきなりオフモードで会話してるけど、いいのだろうか？

ここはいろんな人の目があるし……。

それに……私は病院で彼の優しさを拒絶してしまった事を思い出した。

拒絶する事で、又慧を傷つけたんじゃないのかと、不安になった。

なのに、こんな私にどうして話しかけるの？  
いつそ、嫌ってくれた方が楽かもしれない。

私なんかを構うから、名前呼び違えてあの可愛い人を不安にさせてるんじゃないの？

あつ、もしかしたら、一緒に来てるの？

二人じゃなくても、あのキャンプのときのメンバーで来てるのか？  
私と話してるのが見つかったら、どう思われるか……。

「あの、守谷先生は、誰かと来てるんじゃないんですか？」

私なんかと話していいの？　と言うつもりで聞いたのに、私の問いに慧はムツとした顔をした。

「俺も一人だよ。それに、今はプライベートだし、ここでは教師や保護者って言うのは無しにしよう。先生なんて、呼ばなくていいよ」  
教師や保護者って言うのを無しにするって、それは二人の壁を取り払おうって言うてるの？

ここに居る間だけは、昔のように先輩後輩に戻ろうと言うの？

「でも、こうして話しているのを誰かに見られたら……拓都を預かってもらった時みたいに勘違いされないかな……」

そう、私より慧の方が困った事になるんじゃないの？

「別に関係ないよ。元々以前から知り合いなわけだし……」

それでいいの？

まだ、話を続けていてもいいの？

「わかった」

私は神妙に頷いた。これは、シンデレラの魔法のようなものだ。

慧が二人の間の壁を失くす魔法を使って、私たちは大学の頃に戻る。限られた時間の間だけ……。

これは自分に都合のいい考えだっただけでわかってる。今だけ、拓都も愛先生も忘れて、目の前の慧の事だけ見つめていたい。

「俺、伊藤先輩と待ち合わせしてるんだよ」

あ……なんだ、約束があるのか……

勝手にしばらく慧と一緒にいられるなんて考えていた自分が、バカみたいで情けなくなる。

「伊藤君？ 懐かしいなあ」

「美緒も一緒に来る？ 伊藤先輩も喜ぶと思うし」

「えっ？ いいの？」

伊藤君の懐かしい顔を思い出し、頬が緩んだ。

慧がどういふつもりで言ってくれたのかは分からないけど、まだ一緒にいてもいいの？

「伊藤先輩、卒業してから初めて来るんだよ。なんでもゼミの教授が何とかって言う賞を貰ったらしくて、明日記念講演があるらしいんだ。それで、今晚俺のところへ泊るんだよ」

慧の表情がだんだんと穏やかな優しい笑顔になって行く。まるであの頃に戻って行くように……。

本当にいいの？

私、ここにいても？

口に出しては訊けないけれど、慧の目を見て拒絶されていない事を確かめる。彼の優しい眼差しに、私の想いを止めていた籬たがをそっと緩めた。

「そうなんだ。伊藤君って、今どうしてるの？」

「伊藤先輩は地元へ帰って就職したよ。機械の設計をしてるらしい」  
「そっか……、伊藤君らしい所へ就職したんだね。それで、どこで待ち合わせしてるの？」

「折り紙サークルの展示会場。でも、まだ約束の時間までもう少しあるから……美緒は何か予定あるの？」

「あ……拓都と西森さんにお土産でも買おうかって思って……」  
「バカバカ、バカ正直に言っちゃって……もっと話をしていたかったのに。」

「そう、じゃあ、行こうか」

「えっ？」

「お土産買いに行くんだろ？」

「そうだけど……一緒に行ってくれるの？」

「後で伊藤先輩に会いに行くんだろ？ それなら今別行動しなくても、一緒にいて時間になったら、会いに行けばいいだろ？」

「そうだけど、そうなんだけど、いいの？」

「そ、そうだね」

これは今だけ。今だけの特別な時間。教師でも担任でもない慧と保護者でも母親でもない私の夢の時間。

今だけ許して、と誰にともなく許しを請い、これが最後だからと自分に言い訳をする。

私たちは、人の溢れる模擬店のテントが連なる通路を連れ立って歩く。隣に慧がいると思うだけでドキドキして、私はわざと並ぶ商品に目をやる。お土産を買う事に没頭しないと、とても面白い物なんてできそうにない。

私は立ち止まって、美味しそうなクレープやワッフルを見つめていると「お土産？ それとも美緒が食べたいの？」と慧が可笑しそうに言う。その言葉に、頬が熱くなる。

「カツコイイお兄さん、彼女に買ってあげて」

お店の女の子たちが慧に声をかけてきた。

な、何言ってるのよ？

私はドギマギしながら慧を盗み見ると、彼は悠然として「そうだな、美緒、どれがいい？」と私を見た。

どうしてそんなに平然としていられるの？

彼女と間違えられたんだよ？

いいの？

私じゃ無かったら、勘違いするよ？

私だって、ちょっとぐらい期待しちゃうじゃない？

「私はいいから」と言った時、ドンと人波に押されて私はよろけた。とつさに支えてくれた慧の手の温もりと力強さを感じて、私の心臓は最高潮に飛び跳ねている。

「危ないな」と呟くと私の顔を覗き込んで「大丈夫」と尋ねる慧の方を見れなくて、俯いたまま「大丈夫だから」と彼から離れようとした時、彼が私の手を握った。

驚いて慧を見上げると「美緒はボーっとして危ないから」とニツと笑いながら、以前よく言われた言葉を返された。

どうして？

どうして、恋人同士の時のように振舞うの？

今一番訊きたい疑問。でも、訊いてしまったら、この魔法も解けてしまうと思うと、やっぱり訊けない。

今だけ、今だけと自分に言い聞かせ、ずるいけれど、今のこの刹那の幸せを感じていたい。

私は手を振りほどく事もせず、ただ俯いた。

「本当に買わなくていいの？」

「さつき、美鈴とケーキを食べたから……」

「美緒なら、別腹に入りそうだけどな……そう言えば、本郷さん、こちらへ戻って来てるんだ？」

何気に食いしん坊だと言われた気がしたが、慧に繋がれている手に意識が行ってしまったって、言い返す事もできない。本郷さんと彼が言ったのを、美鈴の事だと気づくのに、ワンテンポ遅れてしまった。

「美鈴は、最近仕事を辞めて帰って来たの。こちらでもう一度養護教諭を目指すらしいのよ」

私は慧に繋がれた手に行っていた意識を、無理やり美鈴の事に向けた。

美鈴が恋人と別れたから帰って来たことは言わない。慧もそれ以上話題を続けなかったので、ホツとした。

その後、ベビーカーと手作りクッキーをお土産に買い、そろそろ約束の時間だからと折り紙サークルの展示会場へ向かっていると、慧の携帯がメールの着信を告げた。

慧がポケットから携帯を取り出して開いた時、不意に思い出した。彼の携帯の待ち受け画面の事を。

虹の写真……

それは、あの時、私が送った虹の写真なんだろうか？

確かめたい衝動にかられるけれど、隣でメールを見ている慧の携帯を覗く訳にもいかず、ストレートに訊くのもためらわれる。

「伊藤先輩、渋滞だったから遅れてるんだって。待ち合わせの時間を30分ずらしてほしいらしい。美緒の方の時間は大丈夫？」

「丁度そのぐらいの時間に連絡を入れ合う事になってるから、連絡を入れれば大丈夫だよ」

私はニコツと笑って答えた。心の中でまだこの夢時間が続く事に嬉しさが込み上げる。必要以上に頬が緩まないよう、気をつけなくっちゃ。

「だったら、ちょっと休憩がてらに、何か飲もうか？」

慧が、さつきメールを見るのに離れた手を、もう一度繋いだ。私たちはもう人ごみから外れていたから、もう繋がなくていいのに……と思うけれど、私はその手を解く事が出来なかった。

私たちは飲み物を買って、人があまりいないテニスコートの傍のベンチに腰掛けた。

慧はブラックコーヒーで、私はココア。私が何も言わなくても、彼は昔と同じようにそれらを買った。もしかして、二人ともあの頃へタイムスリップしてしまったんじゃないかと思うぐらい、いつの間にか自然に傍にいる。あの頃から、もうずっとそうしていたように、私は慧の隣で違和感なくおしゃべりをしていた。

「あの誕生日の写メールのケーキの写真。自分の誕生日のケーキにロウソク挿してる途中で写真撮っただろ？」

「あ、わかつちゃった？」

「バレバレだよ。前日が美緒の誕生日だったしな。でも、美緒の写真はセンスあるよ」

「そうかな？ 最近、写真なんて、拓都の写真ぐらいしか撮らないから……」

「また、何でもいいから、写真送って？ 美緒の写真は楽しみなんだ」

「どうしてそんな、嬉しがらせるような事、言うかな？」

期待が膨らんでいくのを止められなくなるよ。

でも……私なんかとメールのやり取りをして、彼女は気を悪くしないの？

それとも、今のこの夢時間だけの話？ この魔法が解けたら、無かった事になるの？

「うーん。そんなに写真、撮る事ないし……」

「撮れた時でいいから……俺も送っていいかな？」

どうして……

どう答えていいかわからず、視線をさまよわせる。

「俺が送ると、迷惑？」

「とんでもない！ ただ、担任と保護者だから……」

「メールぐらい、関係ないよ」

それは、どんな気持ちで言ってるの？

ただ、私の撮る写真に興味があって、言ってるだけ？

私は慧の気持ちを量りかねて、心が揺れていた。



「美緒、髪の毛伸びたね。最初見た時、ショートヘアは見た事なかったから、驚いたよ」

そうだった。一ヶ月ぐらい前から、そろそろ切らないかと思っていたのに、文化祭や拓都の入院騒ぎで、美容院へ行く機会を逃している。

「切ろうと思ってたんだけど、なかなか行く暇が無くて……」

「美緒はショートも似合うけど、長い髪の方がいいと思うな」  
どうして、こう恋人モードの雰囲気と言うかな？

私は「そうかな？」と言いながら、やっぱり切るのは止めようと心に決めていた。

これは今だけの夢だと自分の恋心に言い聞かせるのも、そろそろ限界だ。

もしかして……と心は期待に震えている。

そうだ、あの虹の写真の事を確かめれば……

「あ、あの、虹の……」

「えっ？」

遠くへ視線を向けていた慧が、私の声にこちらを向いて訊き返した。

そんな面と向かって、訊けないよ。

「あの……にじのおうこくの本、朝の会の時、読んだんですってね」  
「？」

私は咄嗟とつとに話題を変えた。駄目だな。肝心なことは何も訊けない。自分の期待する答えと違ったらと思うと、やっぱり訊けない。

「ああ、そう言えば、拓都もあの本が好きだって言ってたな」

「そうなのよ。読んでもらったって、嬉しそうに報告してくれたよ。そう言えば、お義姉さんはお元気？」

慧の兄嫁である義姉は、「にじのおうこく」の作者だ。私も一度だけ会わせてもらった事があったけれど、とても素敵な女性だった。

「もう二人の子持ちで、元気に子育てしてるよ」

「わあ、あの二人の子供だったら、メチャクチャ可愛いだろうね。男の子？ 女の子？」

慧も整った顔をしているけれど、彼のお兄さんと言う人は、隔世遺伝らしく、もつと外人ぽい堀の深い顔立ちだ。そして、お義姉さんも、黒目がちの大きな目と小さな口元が印象的な可愛い人だった。

「上が女で、下が男。そりゃ身内だし、メチャクチャ可愛いよ。美緒だって、お姉さんの子供は可愛いだろ？」

慧はまっすぐに私を見て、そう訊いた。私の心臓がドキンと跳ねた。

もしかして、知ってるの？

拓都が姉の子だと、知ってるの？

「そうだね。身内だと余計に可愛いよね」

私はドキドキしながら、何とか平静さを装って答える。慧はフツと笑うと、それ以上はその事に触れなかった。

もう知っているのかもしれない。

でも、慧が知ってるかも知れないのは、拓都が姉の子だということ実だけだろう。

その事で慧に別れを告げたことは、言えるはずもないけれど……。

「そろそろ行こうか」

慧は立ち上がりながらそう言った。私もあわてて立ち上がり、歩き出した彼の後を追った。彼はもう手を繋ごうとはしなかった。

折り紙サークルの展示会場へ着くと、熱心にゆるキャラの巨大折り紙を見ている伊藤君を見つけた。慧が「伊藤先輩」と声をかけると、こちらを見た伊藤君は「守谷、久しぶり」と笑い、私に気付いたようだったので、挨拶をした。

「伊藤君、お久しぶり、元気だった？」

「えっ？ 美緒先輩？」

伊藤君は心底驚いたような顔をして私を見ると、助けを求めるように慧の方を見た。

「おい、守谷、どう言う事だよ？ 美緒先輩とよりが戻ったのか？」

伊藤君の言葉に私は驚き、現実を思い知らされた。伊藤君は私たちが別れた事を知ってるんだ。

「伊藤先輩、そうじゃないんだ。その事は後で話すから……美緒とは偶然会って、伊藤先輩に会いたいわって言うから連れて来たんだよ」  
慧が伊藤君に説明してるのを聞きながら、心が冷えて行くのを感じた。

そうだった。のこのこ顔を出せる立場じゃなかったんだ……。

もう魔法は解けてしまったんだ。

「美緒先輩、すいません、余計な事を言って。久々に会えて嬉しい

です」

伊藤君は先程の驚きをすぐに切り替えて、私に笑顔を向けた。私も彼に心配をかけたくなって、「うん、私も嬉しいよ」と笑顔を張り付けて言った。

その時、「守谷せんぱい」と呼びながら近づいて来る女子学生の声に、皆がそちらを向いた。

そうだった。彼女はこの大学の学生だった。まずい！

「ねえ、伊藤君。私と守谷君が昔付き合っていた事は、彼女には内緒にしてね」

私は思わず彼女に背を向けると、伊藤君に小さな声でお願いをした。伊藤君は、いきなりそんな事を言う私を不思議そうに見たけれど、頷いてくれた。

「守谷先輩、来てくださっただんですか？　今回は一人ですか？」

「いや、ここで先輩と待ち合わせしてて……」

そう言いながら、慧は私たちの方を振り返った。彼女も同じようにこちらに視線を向ける。

「あれ？　美緒さんじゃないですか？」

「詩織ちゃん、お久しぶり」

そう彼女は、今年の6月に小学校へ教育実習に来ていて再会した高校の時の友達の妹だ。すっかり忘れていたけれど、彼女も折り紙サークルの後輩になるのだった。その事は彼女には言っていないかったけれど。

「美緒さん、どうしてここに？　もしかして、私がいる事覚えてい

てくれました？」

嬉しそうに笑って尋ねる詩織ちゃんに、どう返事をしようかと戸惑っているうちに、隣にいた伊藤君が口を開いた。

「何言ってるんだよ。美緒先輩は、以前、折り紙サークルのリーダーだったんだよ」

あっ、言ってしまった。

私は爆弾発言をした伊藤君と詩織ちゃんを交互に見て、慧の方に助けを求めるように視線を向けた。けれど、先に口を開いたのは詩織ちゃんだった。

「美緒さん、小学校で会った時、守谷先輩の事、知らないって言ったのに……知り合いだったんですか？」

「ごめんね。ほら、守谷先生には保護者にファンが多いから、知ってるなんて言うのと、いろいろ聞かれそうだから、知らない振りしたのよ」

私はとりあえず言い訳をした。言った事は嘘じゃないけれど、彼女は納得してくれるだろうか？

「安藤、悪かったな。知ってるなんて言うとおまえ、もっとうるさくいろいろ言いそうだったから……」

「守谷先輩、私そんなにうるさく言いません。何ですか、二人して知らんぷりして。私バカみたいじゃないですか！」

「詩織ちゃん、ごめんね？ そんなつもりじゃなかったんだけど……あの時は周りに人もいたし……」

私は、詩織ちゃんの拗ねたような怒りに居た堪れなくなった。でも、私がいかに情けない顔をしていたからだろうか、詩織ちゃん

の方も「私の方こそ、興奮してすみません」と謝ってくれた。

「ちょっと、守谷。どう言う事だよ？ 小学校に美緒先輩が来たのか？」

伊藤君は私たちの会話を聞いて、怪訝な顔をして問いかけてきた。

「あれ？ 知らないの？ 守谷先輩は美緒さんの子供の担任なんだよ」

あ…… 今度はあなたが爆弾発言ですか…… 詩織ちゃん。

伊藤君はたれた目を見開いて、「美緒先輩、結婚したんですか？！」と私を責めるように見た。

私はどうやって言い訳しようか悩んでいた時、私の携帯が着信を告げた。

私は携帯を取り出しながら「ごめんね」とその場を離れた。私の背後で慧が伊藤君に「後でちゃんと説明するから」と言っているのが聞こえた。

電話は美鈴だった。もう終わったからと言うので、待ち合わせ場所を決めて電話を切った。

美鈴、ナイスタイミング！

私はこのややこしい現場から逃げ出すことにした。後は慧に任せよう。

「私帰らなくちゃいけなくなつたから、もう行くね。伊藤君も詩織ちゃんも、元気でね。守谷先生、今日はありがとうございました」

私はみんなの傍に戻ると、別れの言葉を言った。中途半端で放り出していく私を許してくださいと心の中で謝りながら、頭を下げた。

伊藤君と詩織ちゃんが、笑顔で「お元気で」と言ってくれたのに、慧は少し不機嫌顔で「気をつけて帰って」と言った。こんな状態で放り出していくんだから、仕方がないか。

私は美鈴との約束の場所へ向かいながら、今日の事を思い出して嬉しい反面、切なくなった。シンデレラは王子様に出会ったお城を後にする時、こんな気持ちだったのだろうかと考えた。

これで魔法は終わりなのだと、夢時間の時の慧にはもう会えないかもしれないと、あれは、現実の慧じゃ無いのだと、自分に言い聞かせるしかない。あまりに幸せだったから、この落差は計り知れない。

もう夢時間は終わってしまった。

魔法は解けてしまったのだ。

#40：大学祭【後編】（後書き）

かなり、いろいろな事を詰め込んだ回になってしまいました。  
今まで、二人の絡みが殆ど無かったところに、  
今回はなんだ？と驚かれる方もいらっしゃると思います。  
けして、夢オチとかじゃないです（笑）

すいません。

ラスト部分、6月5日17時に改稿しました。



# 4 1 : 懺悔とサンタへの手紙 (前書き)

お待たせしました。

また長いので、覚悟して読んでください。

どうぞよろしく願います。

## # 41：懺悔とサンタへの手紙

『今日は、短い時間だったけど、付き合ってくれてありがとう。美緒に会えて、話ができて嬉しかった。伊藤先輩も喜んでいたよ。』

これは夢の続き？

それともやつぱり現実？

大学祭へ行った夜、慧からメールが届いた。

それは昼間と同じように、甘い雰囲気か漂っていた。

メールの文字の向こうにある彼の気持ちは、私と同じなの？

でも、どこか信じられず、現実味が無い。

私が忘れられなかったように、彼も忘れずにいてくれたの？

大学祭のあの日から、私の中でももしかしたらと言う気持ちが膨れ上がる。

そんな事ない、そんなはず無いと、何度も否定するけれど、あの恋人のような態度は、何だったんだろうと言う疑問が頭から離れない。

思い出の場所で、私と二人だったから、過去の気持ちにリンクしてしまっただの？

それだけでは説明できないほどの甘い雰囲気を思い出して、心の中に期待が広がって行く。

私はあなたを好きでいていいの？

あなたを好きだと言ってもいいの？

なんだかそれはとても虫のよすぎる話のような気がして、頭の片隅で彼を裏切った事を忘れちゃいけないって、諫める声が聞こえてくるのだけど、もうそれだけでは抑えきれないほど、私の想いも大きくなってしまった。

思い出すと頬が緩む。

だけど大っぴらに喜ぶのは憚はばかられる感じ。

嬉しいのに、どこか後ろめたくて。

自分のしたこと棚に上げて、もしかして彼は今でも私の事を思っ  
ていてくれるんだろうかなんて、思う自分がとても自惚うぬぼれているよ  
うな気がして。

それでも、もう一度、慧のあの優しい笑顔を見たくて、拓都を学  
童へ迎えに行った時、グラウンドの向こうの校舎の一階にある明かり  
の点いた職員室を見つめる。遠すぎて人影しか分からないのに、胸  
はドキドキして、まるで中学生の恋みたいだと思いながら、初恋が  
大学の時だったくせにと苦笑する。

こんな自分は嫌いじゃない。まるで二度目の初恋のようで……そ  
れなのに頭の片隅で、自惚れちゃいけないって言い続ける自分もい  
て……。

大学祭へ行った土曜日から一週間、膨れ上がった私の想いと期待  
は、日が経つごとにしぼんで行く。だんだんと冷静になってみると、  
やっぱりあり得ないよと、頭の中で声が響いた。

結局のところ、自信が無いのだ。

慧を裏切って、そして何年も経って、それでもまだ想ってもらえ  
る程、自分が見た目も内面も良い人間だとは思えない。

だから慧の態度をそのまま鵜呑みしてしまう程、厚顔でもないつ  
もりなんだけど……。

一人でこんな事ばかり、考えてもしょうがないと思いつながら、思  
い出すと溜息が出る。

「なあに？ 美緒。こんな良いお天気なのに、溜息なんか吐いちゃ  
って」

由香里さんが呆れたように言った。

11月最後の土曜の今日は、また、西森さんと由香里さんの家族と私と拓都で、芝生公園へ遊びに来ていた。子供たちがキャッチボールをしたいと言ったからだ。

パパ2人と子供5人が、キャッチボールをしているのを、レジャーシートに座り込んでその様子を見つめながら、私の思考は別の事で鬱々としていた。そして、自分でも気づかないうちに、溜息を吐いていたらしい。

「美緒ちゃん、なにか悩み事でもあるの？」

さつきからボーとしている私を、西森さんが心配そうに見つめた。ダメだ、ダメだ。みんなに心配をかけては……。

「ごめん、ごめん。ちょっとボーとしちゃって……私、拓都とキャッチボールのしに来たんだった」

そう言つと、私は西森さんに借りたグローブとボールを持って拓都の名を呼びながら近づいて行った。

「拓都、ママとキャッチボールしよう」

「わあ〜い！ ヤッター！」

拓都が満面の笑みで走り寄って来る。そして、離れて立ち拓都へ向けてボールを投げた。しかし、距離感がつかめず、ボールは拓都の頭上を越えて飛んで行く。

「ママ、大きいよ〜」

拓都は文句を言いながらボールを拾いに走った。

「ごめん、ごめん。今度はちゃんと投げるから」

もっと簡単だと思ったんだけど、難しいな。まあ、練習するしかないか。

ボールを拾ってきた拓都が、今度は私の方へ投げしてきた。力は弱いけれど、私の所まで届いた。そのボールをグローブで受け止めるのが、又難しくて、私はキャッチボールを甘く見ていたことを思い知らされた。

「ママ、本当にキャッチボールできるの？」

何度かボールを投げあったが、拓都の方がずっと上手く投げたり捕ったりできる事に驚き、嬉しさもあったけれど、自分が情けなくなつた。

「ごめんね。ママ、練習しないとダメみたい。拓都と一緒に練習するよ」

私は自分の甘さを反省し、拓都に謝つた。けれど拓都は、以前のように私に寛容では無く、自分の意思を言うようになってきた。

「ママ、ぼくは陸君と翔也君のパパとキャッチボールするよ」

これが成長と言うものだと思いつつながら、やっぱり誰だつて上手な人とやりたいものねと自分を慰めた。そして私は、情けなさに大きく溜息を吐き、私から離れて行く拓都の後姿を見送つた。

それからお昼に皆が持ち寄つたお弁当を食べ、子供達とパパ達はアスレチックの方へ行つてしまった。私達女性陣は、いつものように食後のデザートフルーツやお菓子を食べながら、ストレス解消のお喋りタイム。

「美緒、拓都君に振られちゃったね？」

由香里さんがからかうように笑つた。

「ホント、情けない……」

「大丈夫。すぐに友達同士でできるようになるから、親の出番なんてあつという間に終わっちゃうんだから」

西森さんは、慰めるように言ってくれる。そうだよな？ その内親より友達の方が良くなるのだろう。でも、その親の出番に間に合わない私って、親失格？

「ねえ、ねえ、美緒ちゃん、先週の土曜日、M大の大学祭に行ったじゃない？」

西森さんの何気ない言葉にドキリとする。今の私は大学祭と言うキーワードに敏感だ。

大学祭へ行く事は西森さんにも由香里さんにも話していたけれど、大学祭での出来事はまだ誰にも話していない。自惚れているみたいで、話すのを戸惑ってしまう。

「うん。それがどうしたの？」

私はざわつく心を鎮めながら、平静を装って訊き返す。大学祭の話が出た途端、緊張しているのを自覚した。なんだか二人に今の心情を見透かされているようで、居心地が悪い。

「守谷先生、見かけなかった？」

えっ？

何を知ってるの？ 千裕さん。

「いいえ、見なかったけど……」

咄嗟に否定してしまったけれど、誰かに見られたの？

「あのね、近所の綾ちゃんから聞いたんだけど、綾ちゃんのご主人がM大出身で、大学祭へ行ったらしいの。それで、守谷先生を見かけたって、プライベートもカッコ良かったって言ったのよ。美緒

ちゃんも先週行つてたから、もしかして見かけたかなと思つて……」  
西森さんが嬉しそうな笑顔で話す。  
まさか、見られていないよね？

「そ、そーなんだ。私は見なかったけど……大学祭は土日と二日間あつたから、私が行つた日と違う日だったのかも……」  
私の戸惑いに気付いたであろう由香里さんが、何か言いたそうにしてたけれど、丁度子供達とパパ達が帰つて来たので、話はそこで終わつた。

家に帰つてきたら、どつと疲れが出て、ソファーに座りこんだまま動けなかつた。

思い出すまいと思つても、考えるのはやはり彼の事ばかり。又無意識に大きな溜息が出た。その時、拓都が神妙な顔をして近づいて来た。

「ママ、あのね、サンタさんへの手紙を書きたいの」

「えっ？ プレゼントのお願いの手紙の事？」

拓都は笑顔で「そうそう」と頷いている。

拓都はまだサンタクロースを信じている。そして、拓都の欲しいものを知るため、サンタさんをお願いの手紙を書こうと、毎年手紙を代筆しながら、聞き出しているのだ。

いつもなら、12月になると私の方から声をかけるのだけど、何かよほど欲しいものがあるのかなと思ひながら、レターセットを引き出しから出して、ダイニングテーブルのいすに座つた。なかなか座ろうとしない拓都に座るよう促すと、「ぼく自分で書きたいんだ」と言う。

ああ、これも成長の証だよね？

宿題の日記にしてもそう。だんだんと私に秘密を作って、自分だけの世界を築こうとしている。

喜ばしい事なのに、何となく淋しくて、だんだんと母親という存在は、拓都にとって必要でなくなるのだろうかと考えだしたら悲しくなった。

拓都は私に見えないように離れた場所で一人で手紙を書くとき、封筒に入れて「ママ見ないですよ」と言って渡してきた。サンタさんに出してくれと言う事らしい。

これを見なければプレゼントを買えないじゃないかと心の中で思いながら、ニツコリと笑って受け取った。

拓都が寝た後、居間のソファで拓都の手紙を見つめて悩んでいた。

拓都は見るなど言ったけど、見なきゃプレゼントは買えないしなあ……。

本当は拓都が欲しいプレゼントって何だろう？ 私に隠したい物って何だろう？と、とても興味を惹かれているのだ。

拓都ごめんと心の中で謝りながら、封筒の中から手紙を出した。

『サンタさんへ』

ぼく いいこにしますから パパがほしいです。

ぼくはパパとキャチボールがしたいです。

おねがいます』

拓都……そんなにパパが欲しいの？

自分が情けなくなった。

今日のキャッチボールの失敗は痛かった。でも、もうママではダメなの？

おそらく、由香里さんのところの陸君が羨ましいのだろう。陸君



に突然パパが出来たのを見てるから、自分もと思ってしまったのだろつ。

『キャッチボール』を『キャチボール』と書いているところが、まだ幼さを感じるのに、以前、ウチにはパパは来ないと言ったから、私に内緒でサンタさんをお願いしようと思ったのに違いない。

私は大きく溜息をついて、今日は何回目の溜息だろうと思いつながら、手紙を封筒にしまった。

その時、携帯が着信を告げた。由香里さんだった。昼間の何か物言いたげな顔を思い出す。

「美緒、今日はお疲れ。もう拓都君寝たの？ 今電話してていい？」

「由香里さんもお疲れ様。拓都はもう寝たからいいよ」

「ねえ、美緒。なんだか今日は元気の無い声してるし、昼間もぼんやりして変だったし、又何か抱え込んでるでしょう？」

「やっぱり…… 由香里さんだけは誤魔化せない。」

「う…… 由香里さんには隠し事できないね」

「当たり前よ！ 美緒はすぐ顔に出るから、バレバレだって。昼間千裕ちゃんが大学祭の話をしてたけど、大学祭で守谷先生に会ったんでしょ？」

「はあ〜そこまで分かった？」

「まあね、美緒とは長い付き合いだもの。千裕ちゃんは、気付いてないと思うけど……それで？ 守谷先生と会って、何かあったの？」

由香里さんは強引なようだけど、このぐらい突っ込んで聞いてもらわないと、話せない私の性格をよく分かっているのだ。

心の中で由香里さんに感謝しながら、今日もまた重荷を降ろさせてもらおうと、私は覚悟を決めて病院での事から大学祭での事まで話した。由香里さんは相槌を打つだけで口を挟まず、最後まで私に話させると、溜息を吐いた。

「それで、美緒は何を悩んでる訳？」

「えっ？」

「それとも、惚気オウチ？」

「ええっ？」

「どうして、そんな反応？」

「好きな人からそんなにアプローチされて、喜びこそすれ、何を悩む事があるの？ 私、この前、守谷先生は酷い男だと怒ったけど、今の話を聞いて守谷先生が可哀そうになったわ」

「ど、どうして？」

「そうでしょう？ 守谷先生は振られた側なんだから、振った美緒に対してもう一度アプローチするってとっても勇気があることだと思うのよ。病院での事は美緒が泣いている姿を見て思わず行った行為かも知れないけど、本心だと思うの。それを拒絶された上に無かった事にされてしまったら、やっぱり無理なんだと思うわよね？ 普通。それを大学祭の時にもう一度アプローチしてくるって、よっぽど美緒の事が好きじゃなきゃ、できないでしょう？」

「そうなんだろうか？」

そう思ってもいいのだろうか？  
でも……

「そ、そんな事、有るはず無い。彼をあんなに酷く裏切ったのに、虫がよすぎるよ。自惚れすぎだよ」

「美緒、いつまで悲劇の主人公になってるつもり？ 美緒は彼に対する罪悪感を、自分が不幸になる事で償ってるつもりなのよ。彼を裏切った自分を許せないから……」

由香里さんの言葉は、胸に痛かった。

そう、自分が許せなかった。

あの時、たとえ普通じゃ無い心理状態だったとしても、あんな裏切り方は酷かったと思う。

何も言い返せない私に、由香里さんは話を続けた。

「でもね、美緒。本当に償いたいと思うなら、彼の、守谷先生の想いを素直に受け取るべきじゃないの？ 自分にはそんな資格無いって美緒は思つかもしれないけど、そう言う考えが彼をもっと傷つけてるって思わない？」

彼をもっと傷つけてる？

私……慧の幸せを……そう、彼女がいるんだから、忘れなきゃって……。

「で、でも……愛先生の事は？」

「美緒、この期に及んで、まだそんな事言う訳？ ねえ、美緒の好きな守谷先生は、付き合っている人がいるのに、別の女性に思わせぶりな態度をとるような人なの？」

あ……そんな事、思いもしなかった。

由香里さんに言われて初めて私は、慧に対して酷い誤解をしてい

た事に気付いた。

「そんな事無い。そんな事するような人じゃ無い。私が一番よく分かっている筈なのに……」

「今の美緒はね、自分の事しか見えてないのよ。守谷先生と再会した事で、罪悪感と彼を思う気持ちで一杯一杯になっちゃって……」

私はその時、由香里さんの言葉に頭を思い切り殴られたようなショックを受けた。

自分では分からなかった。何も見えていなかった。

なのに、思い当たる事が沢山ありすぎて、目眩がしそうだった。

慧の幸せを願うって言いながら、彼女がいるのに私の心を惑わさないでよって思ってた。

昔みたいに美緒って呼ばれる度、彼に優しくされる度、嬉しいくせに勘違いしちゃダメだって自分に言い聞かせてた。

それは、自分が辛い思いをしたくなかったからだ。

由香里さんが言うように、私、自分の事しか考えてなかった。

慧はあんなにも優しく見守り、手を差し伸べていてくれたと言うのに……。

「由香里さんの言う通りだよ。私、何も見えてなかった。自分の事しか考えてなかった。彼がどういう人か考えたら、分かりそうな事なのに……ねえ、由香里さん、私これからどうしたらいい？」

私は由香里さんに懺悔ざんげしながらも、やっぱり周りが見えなくて、途方に暮れた。

「そうねえ、美緒は素直になればいいのよ。自分の気持ちに対しても、彼の気持ちに対しても……」

「素直？ 素直になるってどうすればいいの？」

「それは、美緒がこれから自分で考える事。今度こそ悔いの無いようにね」

とても難しい宿題を出されたような気がした。

素直になるって、どう言う事だろう？

慧に自分の想いを告げる事だろうか？

慧にもう一度付き合って欲しいって言う事だろうか？

今の私にはとてもできないって思った。

慧の態度を疑う訳じゃないけど、やっぱり由香里さんが言うような彼が私の事を思っていてくれると言う事は、現実味が無くて……彼から具体的な言葉を言われた訳でもないし、愛の告白をされた訳でもない。

もしも慧が、もう一度と言ってくれたら、いつでも受け入れられるように待っていていようとは思っけれど……。

それでも、慧からのどんな小さなアプローチでも、疑わずに、素直な気持ちで受け取ろう。そして、私も同じように返していけたら……。

「由香里さん。いつもありがとうございます。由香里さんに話を聞いてもらって、心が凄く軽くなった。私が間違った方へ行きそうになったら、また叱ってください。これからもよろしくお願いします」

最後の方は由香里さんへの敬意を込めて、丁寧に行った。私の親友であり、人生の大先輩であり、姉のような人。

本当にありがとう、由香里さん。

電話を切った後、ソファアの私の座ってる横に置いていた、サンタさんへの手紙が目に残った。

あつ、この手紙の事、すっかり忘れてたけど……これも相談すればよかった。でも、由香里さんに言うと、また陸君がパパ自慢をしたせいだと責任を感じるかな？

もうしばらく様子を見よう。クリスマスまではまだ一カ月近くあるのだから。

翌日、11月最後の日曜日の夜、慧から写メールが届いた。そこには可愛い女の子と男の子が写っていた。

『実家の法事で帰ったので、この前話に出た姪の葵と甥の奏の写真を撮りました。とてもちゃんなのに、カメラを向けるとお澄ましの二人でした。』

想像通り、メチャクチャ可愛い子供達だった。きつと、慧も可愛くて仕方のないだろう。そんな愛情を感じる写真だった。私はその写真を見ながら、頬が緩むのを感じていた。子供たちの可愛さもそうだけど、何より慧からのメールが嬉しかった。大学祭での慧が、夢で無かった証拠のようで……。

私も写メールを送ろうと、携帯の画像フォルダを開いて写真を選ぶ。サムネイルの中から一枚の写真を選んだ。それは、拓都がグロブとボールを持ってニコニコしている写真。甥の写真では無く、私の子供としての拓都の写真。

『葵ちゃんと奏君の写真、ありがとう。メチャクチャ可愛くて、頬づりしたい程です。私の方は拓都の写真です。最近、キャッチボールにハマってます。』

メールを送信すると、心の中がほんのり温かくなった。そして待

ち受けの虹の写真を見ながら」「慧、これからもよろしく」と呟いて  
いた。

## # 4 2 : 臨探教師 (前書き)

また長くお待たせしてすいませんでした。

今回はなんとか5000文字以内に収められました(笑)

どうぞ、よろしく願います。



## # 4 2 : 臨探教師

それは週の真ん中の水曜日、今日から12月が始まると言う日の夜、想定さえしていなかった出来事に、私の心の中は多いにパニックになった。でも、良く考えればあり得る事で、どうしてその可能性を思いつかなかったのかと、後になって大変悔やまれた。

こんな事なら、もっと早く話しておけば良かった。

「もしもし、美緒？ 元気してる？」

その電話は、先日母校の大学祭へ一緒に行った、高校の時から友人の本郷美鈴だった。

「元気だよ。この間はありがとうね。美鈴のおかげで久々に大学祭へ行けて良かったよ」

私は相手が美鈴と言う事で、すっかり気を抜いた状態で会話をしていた。

「ねえ、美緒。美緒さあ、私に何か隠し事してない？」  
えっ？

美鈴の問いかけに私の心臓はドキリと飛び跳ねた。このドキリは、思い当たる事があると言うドキリだ。

ま、まさか……知ってしまった？ なんで？

私の頭の中は、必死にその可能性について考えを巡らしていた。

「か、隠し事？ 何もかも全部美鈴に話してる訳じゃないけど、意図して隠そうなんて思った事は無いよ」

そうだよ。別に隠そうだなんて思った訳じゃ無くて、ただ話せなかっただけで……。

「私、このまえ養護教諭の臨時採用に申し込んだって言ったじゃない？」

えっ？

いきなり話変わる？

「そう言えば、そんなこと言ってたよね？」

「昨日、電話があつてね。その学校の養護の先生は本当は年明けから産休に入るらしかつただけど、切迫流産で入院しちゃったらしくて、そのまま出産まで入院になるらしいの。急な事でなかなか引き受け手が見つからなかつたらしくて、私に白羽の矢が立ったと言う事なのよ」

「へえ、急な話だけど良かったじゃない？ それで、引き受けたんでしょ？」

「まあそうなんだけどね。それで今日、その学校へ行って来たんだけど……美緒にはサプライズで驚いてもらおうと思つて、何も言わなかつただけど……まさか私の方が、こんなサプライズで驚かされるなんて、思つてもみなかつたわ」

えっ？ まさか……嘘でしょう？

「ま、まさか……」

「美緒の隠し事、何の事だか、思い当つた？ そう、私今日から虹が丘小学校の養護教諭をする事になりました。拓都君のお母さん、よろしくね？」

やけに明るい口調で言つてるけど、美鈴は怒ってる。何も言わなかつた事、絶対に怒ってる。

「美鈴、ごめん。美鈴に隠し事しようとか思つて、言わなかつた訳じゃないの。又美鈴に心配かけそうで、言いあぐねているうちに夕イミングを逃してしまつて……」

私のしどろもどろの言い訳を聞いて、美鈴はわざと大きく溜息を吐いた。

「ふ〜ん。この前大学祭の時さあ。私言つたよね？ 守谷君実家へ帰つて先生になつたのかなつて。その時美緒、なんて言つたか覚えてる？ そうだねつて言つたんだよ。拓都君の行つてる学校の先生になつてゐるつて知つていたのに、とぼけたよね？ おまけに、拓都君の担任だつて？ 美緒、信じられないよ。今まで黙つてるなんて……」

電話の向こうの美鈴の表情は見えないけれど、怒つてる？ 呆れてる？ それとも、悲しんでるの？

「ごめん、美鈴。本当にごめんね。今更言い訳だけど、美鈴にもう彼との事は乗り越えたと、大丈夫だと思つて欲しかったの。彼と再会したなんて言つたら、又心配するでしょう？ 美鈴はずっと私に気を使つていてくれたし、それが申し訳無いつて思つてたの。もう余計な心配かけたくなくて……」

「何言つてるのよ。私たちは友達でしょう？ 心配するのもしられるのも、お互いさまでしょう？ 友達の心配して、何が悪いの？ もう〜まつたく、美緒らしいと言つるか……」

ここまで言つと美鈴は大きく息を吐いた。

「ごめんなさい……そうだね、お互い様だよ。美鈴も辛いのに、又私の事でいろいろ心配かけちゃつて……」

「ほら、お互いさまつて言いながら、又心配かけて悪いつて思つて

るでしょう？ 私の事も美緒が心配してくれてるの分かってる。こ  
うやって心配してくれる友達がいるのがありがたいって思う  
し、私はそんな友達に恥ずかしくないよう、頑張ろうって思えるの  
よ。だから私にも美緒の心配をさせて欲しいの」

美鈴の言葉に熱いものが込み上げてきた。

どんなに離れていても、ずーっと友達でいてくれた美鈴。まだま  
だ、自分の辛い失恋の痛みがあるだろうに、私の事を思ってくれる  
美鈴の友情がありがたかった。

「ありがとう、美鈴。今まで言わなくてごめんね。入学式の時、担  
任紹介で始めて知って驚いたの。凄く動揺すこしたし、どうしようかと  
思ったの。実家へ帰ってきた事を後悔したぐらいで……」

私は、彼と再会したところから説明しなくちゃと話し出した。す  
ると美鈴が話を途中で止めた。

「もういいよ、美緒。偶然の再会で、美緒が驚いた事や辛かった事  
ぐらいわかるよ。守谷君の方だって驚いただろうけど……」

美鈴が急に言い淀んだので、何か私に言いにくい事でもあったの  
かと心配になった。

「彼と何か話したの？」

「ううん。話したと言うほどじゃないけど……守谷君がいる事に驚  
いて、どうしてここにいるの？ 美緒の事知っているのかって聞い  
たら、拓都は俺のクラスだって言うから、またまた驚いたら、守谷  
君の方も私が知らなかった事に驚いてたよ。向うは美緒が話して  
ると思っただけ。でも、それだけしか話してないの。先生はみんな  
忙しそうだし、私も初めての事で、覚える事が一杯でそれどころじ  
ゃ無かったのよ」

「そつか……彼も驚いてたんだ。もしかして……拓都が姉の子だと話した？」

まだ、彼に言えずにいる真実を、全ての事情を知っている美鈴が、彼に安易に話すとは思わないけれど……。

「そこまで話をする暇なかったし、守谷君と話していると女の先生たちに睨まれてるみたいで、何となく話し辛いよ。でも、やっぱり、拓都君がお姉さんの子供だって話してないの？ そうだよ、話せないよね。別れた原因そのものだものね」

美鈴は又一つ溜息を吐いた。私は美鈴の言葉に顔を歪ませた。最近では忘れがちだった罪悪感に、また胸が痛んだ。

私にしても美鈴にしても、この事はどこかタブーのような気がして、あまり話題にはしてこなかった。でも、そろそろ彼に話した方がいいのかも知れないと、思い始めていた。

私が相槌のように「まあね」と返すと、美鈴はさつきよりまた声のトーンを下げて、話を続けた。

「美緒はさ、守谷君と再会して、余計に忘れられなくなっただんてしよ？」

いつもの美鈴のストレートな問いかけに、大学祭の時も訊かれたなど思いながら、忘れられないと言うより、やっぱり彼の事が好きだと自覚したのだと思っただけで、どちらも同じ事かと思ひ直し、素直に「うん」と返事した。

「でもね、美緒。美緒には可哀想だと思うけど……あえて友達として言うけど、一度心変わりした相手を、たとえ嫌いになったんじゃなくても、どこか信じられないと思うの。それに、もう時間が経ちすぎてるでしょ？ 3年以上の時間が経って、守谷君も美緒を諦めて、新しい未来を歩き始めてると思うのよ。私がもし3年経って直也に『あの別れは間違いだっただ、やっぱりおまえの事が好きだから

やり直そう』って言われても、その時まだ気持ちが残っていたとしても、やっぱり以前のよ様な気持ちになれないし、心底信じる事ができないと思うの。又裏切られるんじゃないかって、思いながら付き合うことは、やっぱりできない」

美鈴にこう言われて、思い出した。

私、別の人を好きになつたつて言つたんだ……。

そして、私が別れを告げた時の彼と、今の美鈴は同じ状態だったと言ふ事に、やっと思い至つたのだつた。

「じ、じゃあ、彼に本当の事を全て言つたら……どうかな？」

私は恐る恐る最後の切り札を使う事を、窺<sup>うかが</sup>つてみた。しかし、美鈴から返つて来たのは、冷たい否定だつた。

「美緒、それこそ今更だし、余計に傷つけるだけだよ。あの時、美緒は彼を思うがゆえにとつた行動だつただろうけど、彼にしたら、そんな大変な時に、自分を頼ってくれなかつたどころか、嘘までついて別れを告げられた訳でしょう？ たとえ過去の恋になつていても、ショックなんじゃないかな？ 冷たいことを言つただけど、今更本当の別れの原因を聞かされても、もう遅すぎると思うよ。だから、美緒も今は辛いと思うけど、すっぱりと諦めて、別の幸せを考えた方がいいと思う。守谷君が担任なもの、あと少しだし……」

恋人に裏切られたばかりの美鈴の言葉は、説得力がありすぎて……  
…言い返す事も出来ない。

美鈴がこんなに厳しい事を言ふのは、未練を持つなと言いたいのだろう。

でも、心の中で、彼は美鈴とは違つかもしれないじゃないかと言ひ返している自分がある。それは、彼の気持ちが見えなくて、由香里さんに教えて貰つた素直な心も、自信がなくて又後ろ向きになつてしまひそうだから……。

「わ、私ね、クラス役員をして……」

「はあ？ クラス役員？ まさか、自分から立候補したの？」

「違う、違う、くじ引きで当たってしまったの」

「それは、大変だったね。……って、クラス役員って言ったら、担任と話す機会も多いんじゃないの？」

「そうだね、会議もあるし……最初はギクシャクしてたけど、もう一人の役員さんが良い人で、いろいろ教えてくれるし、おしゃべりで明るい人だから、担任と3人で話す時とかも、彼女が場の雰囲気をよくしてくれるから、最近では彼とも普通に話せるようになってきたの」

私は美鈴に何を言いたいのだろう？

彼との関係は上手くいきつつあると？

今の私と彼の現状は、確かなものが何もなく……こんな事を思うと由香里さんに怒られそうだけど、やはり彼の態度を良いように解釈しすぎなんじゃないかと思ってしまう自分もいて……。

「そっか……守谷君はもう吹っ切れてるんだね」

「吹っ切れてる？」

「美緒は心変わりをしたと別れを告げられた彼の気持ちを想像した事がある？」

あ……彼の気持ち……傷つけたらと思うってたけど、裏切った自分を責めるばかりで、彼の気持ちを考えてきたらどうか？

「私もね、あの時は美緒の辛さばかりを考えていたけど、今はあの

時の守谷君の気持ちがよく分かるのよ。だけど、美緒と普通に会話できてるんだったら、彼もこの3年半の間に、吹っ切ったんでしょうね」

私はますます何も言えなくなった。

彼は過去を吹っ切れたから、私にあんなに優しくしてくれたのだろうか？

でも、それよりも、今の辛い自分の気持ちを、彼の事に重ね合わせて話す美鈴の方がやるせなかった。

「ごめん、美緒。美緒には辛い厳しい事を言つて。でもね、どこかで美緒も吹っ切らなきゃ前に進めないと思うの。美緒の気持ちを分かかってこんな事言うのは、友達としてとても辛いけど、早く現実を受け入れて、自分の幸せを考えて欲しいのよ」

私にここまでしつこく諦めて前を見ると言い募る美鈴は、どこか彼女らしくない。私があんな酷い別れ方をした時だって、反論せずを受け入れてくれた。なのに、今回はどうしてここまで言うのだから？

そして、私は、ふと思いついた。

彼女は、自分自身に言い聞かせているんじゃないかと言う事に。

「美鈴だって、吹っ切れてないじゃない。私はいいの。この想いは今までどうしたって消える事は無かったんだから、開き直す事にしたの。それより、美鈴の方こそもう吹っ切ったような顔をして、私の事に重ね合わせて自分に言い聞かせてるんじゃないの？」

私は反撃するように言い返した。

美鈴だって同じじゃない！

お互いに上手くいかない恋に振りまわされて……。

「もうアイツの事なら吹っ切れてるわよ。心残りがあるとしたら、簡単に心変わりするような男に10年近くの長い時間と若さを捧げ



た恨みよ！」

その言い方が美鈴らしくて、頬が緩んだ。でも、これが彼女の精一杯の強がりだと分かっている。

こうやって彼女は一生懸命自分の恋心を振り切って、前を向こうとしているのだ。

「お互い恋愛ベタだね」

それに頑固だし……。

私がクスツと笑いながら言うと、「美緒の頑固者」と私が思った事を返された。

「私は美緒の恋を応援しないからね。でももし、諦めがついたら、一緒に婚活しよう？ だいたい世の中の半分は男なのに、守谷君よりもっと良い人がいるわよ」

「そうだね」

美鈴、ありがとう。

いつも心配してくれて。

私は友の友情に感謝しながら、彼女に一日も早く、新しい恋が訪れる事を祈った。

### #43：女子会（前書き）

長らく、本当に長らくお待たせして、すいませんでした。  
今回も、とても長いです。  
ぜひぜひ、よろしく願います。

### # 4 3 : 女子会

美鈴と電話で話してから、私の頭の中から消えない憂いがある。彼に別れの真実を告げる事はタブーなのか、と言う事。

拓都の事も話さない方がいいのだろうか？

真実を告げないと言う事になれば、私は心変わりをして別れを告げた事が真実になってしまう。

そうすると、美鈴が言ったように、私は一度裏切った前科のある信用できない相手だと言う事になる。

私は大きく溜息を吐いた。

この事を考え出すと、後悔という泥沼の中にスパイラルのように潜り込んでしまいそうで、思考をシャットダウンした。

「ママ、クリスマス、楽しみだね？ クリスマスまであと何日？」  
「サンタへの手紙を書いてから、拓都はご機嫌で、あと何日？」  
と  
毎日のように訊いてくる。

この事も、頭の痛い問題だった。

「あと8日だよ。良い子にしてないと、サンタさん来てくれないぞ」  
「こちら笑顔でそう返しながら拓都を見ると、嬉しそうに「うん」と頷いた。

クリスマスまでの日にちも、自分で数えてごらんとっても、ママから聞きたいのと言って、毎日訊いてくる。それが最近の朝の習慣になっていた。

問題のクリスマスプレゼントは、パパなんて用意できる訳もなく、一応、グローブとボールの予定だ。でも、拓都がいると内緒でプレゼントを買いに行く暇がなくてどうしようと思っていたら、西森さ

んが『お休みの日に拓都君預かるから、クリスマスプレゼント買いに行つといでよ』と言つてくれた。

西森さんはどうしてこちらの困っているツボを上手くついてくるかな？

西森さんと言う人の奥の深さを感じずにいられない。最初はミィーハーなお母さんと言うイメージだったのに。

「今日はね、翔也君のお家にお泊りするんだよ。陸君と陸君のお兄ちゃんとママも来るよ」

そう言つた途端、拓都は破顔し「ホント！」と叫んだ。

「本当だよ。学校の帰りに直接翔也君のお家へ行くからね」

今日は12月3週目の金曜日で、西森さんのご主人が忘年会のためお泊りらしい。それで、私たち母親も忘年会をしようと、子連れで西森家へお泊りする事になった。子供たちが寝てからが私たちの忘年会と言う名の女子会だ。

偶然にも由香里さんのご主人が出張中で、明日の午後まで帰らないと言う事なので、丁度良かったらしい。もちろん私の家は、誰に気兼ねすることなくどこへでもお泊りできるのだが、拓都のパパ云々のせいで、何やら複雑な心境だ。

その日、仕事を終えて拓都を迎えに行き、そのまま西森家へ行くのと、すでに由香里さん達は来ていて、夕食の用意を始めていた。夕食はお好み焼きと言う事で、人数が多いのでリビングのこたつの上にホットプレートを置き、皆でワイワイ言いながらどんどんとお好み焼きを焼いて行く。お好み焼きはそれぞれの家庭で微妙に作り方が違うので、新しい発見があつて面白い。私達はせっかくだからと、もうビールを持ちだした。

子供達は食べ終わるとさっさとゲームをし始めた。私達は女子会の前哨戦とばかりに、気持ちよくビールを飲みながらお好み焼きを

つつき、最近話題のドラマの話に花を咲かせる。

「ねえねえ、N Kの朝の連続テレビドラマ見てる？ 主人公の旦那役俳優さん、ちよつと守谷先生に似てるのよね」

西森さんの口から、また担任の名が出る。それだけで心臓がドキリと跳ねる。やっぱり重症だよねと心の中で自分に呆れる。

西森さんの言うドラマは見ていないけれど、最近話題らしく雑誌やテレビでもよく取り上げられ、その主人公夫婦の顔は見覚えがある。確かに私もその俳優さんの笑った顔を見た時、似てるなと思っていた。

「ドラマは見てないけど、その俳優さんならちよつと似てるかも」  
私が西森さんの言葉にそう返すと、由香里さんが「守谷先生ねえ」と意味深な笑顔を私に向けた。

ちよつと、由香里さん、やめてよ！ 千裕さんにはれるじゃない！  
心の中で叫びながら由香里さんを睨んだ。それでも由香里さんは余裕の笑みを返してくる。

西森さんが子供とお風呂へ行っている間に、私は由香里さんに抗議した。

「由香里さん、千裕さんの前で守谷先生の名前が出た時に、意味深な表情で私を見るの止めて！ 勘の良い千裕さんにバレるでしょ」

「千裕ちゃんにならバレてもいいんじゃないの？ いっその事、今日話してしまえば？」

「ダメよ！ まだ役員と一緒にしなくちゃいけないのに、お互いに気を使うでしょう？ それに、彼も関係する事だから勝手に話せないと思うし……」

彼がどう思っているか分からないのに、彼に迷惑をかける事だけ

はしたくない。

「じゃあ、守谷先生だって言わなければ、美緒の事、話題に出してもいい？ 千裕ちゃんも心配してるみたいだし……」

由香里さんの提案を聞いて、私の心の憂いを相談するためにも、少しぐらいは話してみようかなと思いはじめた。

\*\*\*\*\*

「それで、美緒ちゃんはクリスマスプレゼントどうするつもりなの？」

子供達が寝た後、私達女三人は飲み会モードに突入していた。そして、お酒のせいで軽くなった口が、拓都のサンタさんへの手紙の事を話していた。

「ん……とりあえず、グローブとボールにしようと思ってるんだけど……パパなんて言われてもねえ」

拓都にとって本当の父親の記憶は、もうほとんど無いのだろう。いつか……拓都とパパとママなんて言う、家族を築ける日が来るのだろうか？

頭の中で想像するパパと拓都がキャッチボールしている姿……。そのパパは、誰？

「美緒には申し訳ないと思ってるのよ。ウチの陸がパパ自慢なんかするから……でも、ママに内緒でお願いするなんて、健気よねえ。パパがどういう存在か分かっていないから、余計に叱れないし……ねえ、いつその事、彼にパパになってって、言っちゃえば？」

ニヤリと笑う由香里さんに、私は慌てた。

「な、な、なに言ってるの！ 由香里さん！」

「あら、美緒ちゃん、パパ候補がいるの？」

「こつという話にすぐさま食付く西森さんは、嬉しそうに訊いた。」

「パパ候補って……」

私が返事に窮きずして居る間に、由香里さんが嬉しそうに話し出した。

「そうなのよ。美緒ったら、初恋の元カレに3年ぶりに再会して、最近良い感じらしいのよ」

「なんだ美緒ちゃん、そういう人がいたんじゃないの。でも、元カレって言う事は、以前に付き合ってたって事でしよう？ 3年ぶりに再会して焼け木杭ぼくに火が付いちゃったの？」

「そうじゃないのよ。美緒はずーっと想い続けてきたの。本当はもう諦めてたんだと思うけど、忘れられなくて、もう誰も好きにならないとか誰とも結婚しないと行ってたんだよ。まあ聞いてよ、美緒の悲恋の話」

由香里さんは、まるでありふれた恋愛小説の話でもするみたいに、西森さんに語っている。

「ゆ、由香里さん。勝手に人の話しないでよ」

「まあまあ、千裕ちゃんだって美緒の事、いつも気にかけてくれているのに、聞きたいわよねえ。美緒は自分の事だから話しくいだろうから、私が大まかに話してあげるから、任せておきなさい。千裕ちゃんに話したら、これからいろいろ相談にも乗ってくれるわよ」

「そうよぉ〜美緒ちゃん。私、口硬いから、誰にも言わないわよ。」

恋愛相談も任せてね」

この二人にかかったら、私は太刀打ちできない。でも、いろいろ相談したい事もあったから、丁度いい機会かもしれない。でも、本当に彼の名前は言わないでしようね？

由香里さんは、私が彼と別れたいきさつと3年ぶりに再会した事を話した。約束通り、私が彼と担任と保護者として再会したとは言わず、仕事の関係で再会したと話してくれた。

「美緒ちゃん、辛い思いして来たんだね。それなのに、拓都君の子育て、良く頑張ったよね」

西森さんは少し潤んだ目で私を見ると、ねむい 労うようにほ 褒めてくれた。

彼と別れてからは必死に生きていたような気がする。生活と仕事と子育てで余裕の無い日々を送っていた。拓都にもずいぶん我慢をさせたと思う。だから、そんな風に褒められると何処かくすぐすたい。

「ううん。由香里さんや周りの人たちに助けてもらったから、ここまでやってこれたの。由香里さんと知り合う前は、拓都と共倒れになりそうだったもの。だから、由香里さんにはとても感謝してます」

「なあに？ いきなり持ち上げて何も出ないわよ。お互いさまでしょ？ 私も美緒に助けられてたんだから」

由香里さんがお酒のせい、目元を赤くしてフツツと笑った。私もそれに答えるように笑った。そんな私達を見て、西森さんが「なんだか二人の関係、羨ましいなあ」なんて言うから、私は慌てた。

「私、こっちへ帰ってきて、千裕さんに出会えた事が、一番幸運だったって思ってるんだよ。いろいろ助けてもらって、本当に感謝し



てます」

「そうそう、私だって、千裕ちゃんと友達になれて嬉しかったし、感謝してるんだよ」

由香里さんまでがそう言うので、西森さんは照れたような顔で「やーねえ、二人しておだてないですよ」と言うと、慌てたように話を変えた。

「ねえ、ねえ、その彼って、どんな人なの？ 別れた時学生だったって言うから、年下だよな？ 携帯に写真とか保存してないの？」

「そう……2つ下なんだけど……私よりしっかりしてるって言うか……」

徐々に核心に迫ろうとしている西森さんの問いかけに、私はどう答えていいか戸惑う。

「美緒ったらねえ、別れた時に携帯に保存してた彼の写真や彼から送って来た写メールなんかの彼に関するデータの全てを消したんだよな。潔けいいとめい言うつか、意地いぢっ張りぢぢと言うつか……あつ、一枚だけ残したんだっけ？ 彼からの写メール。まだ待ち受けにしてるの？」

由香里さんがボロボロとバラしていく事に、どこか不安を感じながら、その問いかけにも戸惑ってしまふ。

「待ち受けって、あの虹の写真の事？」

「そうそう、千裕ちゃんも見たの？ なんでもね、童話に出てくる虹の真似して、お互いに虹の写真を送り合ったらしいよ。ねえ、美緒？」

「童話って……もしかして『にじのおうこく』とか？」

西森さんがいきなりそんな事を訊くから、心の中がざわつく。私はとりあえず頷きながら「知ってるの?」と訊き返した。

「翔也がね、守谷先生が読んでくれた『にじのおうこく』の絵本が面白かったから、もう一度読んでほしいって珍しく言ったのよ。それで、図書館で借りて来たって訳。大切な人の元へ虹の橋を架ける魔法だっけ?」

私はまた、彼の名が出てきてドキリとする。由香里さんが私の方を見て、意味ありげに笑った。

「う、うん。そう」

「ふ〜ん、何かロマンチックだねえ。……そう言えば、守谷先生の携帯の待ち受けも虹の写真だっけ噂だよ」

西森さんの言葉に、由香里さんは驚いたように目を見開いた。そして、私を一瞥すると、「へえ、守谷先生もその童話の真似して、恋人と虹の写真を送り合ったのかなあ?」とのんびりと言った。

由香里さんの言葉に、胸がきゅっと締め付けられた。やっぱり、そんな人がいるのだらうかと、頭の中で又嫌な考えが回りだす。

「そう言えばさ、その彼は拓都君の存在を知ってるの?」

西森さんの問いかけに、私は固まった。なんて言えばいい? 私の職場で再会した事にした事になっているのだから、拓都の事は知る訳ないよね。どう答えたらいいの?

「美緒はまだ言えてないんだよね」

由香里さんの突然のフォローに、私はすが縋るように頷いた。

彼が知ってるとなれば、いろいろな疑問がわいてきて、誤魔化しきれないと由香里さんも思ったのだらうか……。

私がチラリと由香里さんの方を見ると、彼女は安心のできる笑顔

を返してきた。

「そっか……難しいよね。拓都君の事は別れた原因でもあるしね。……でも、先に自分の気持ちは伝えた方がいいんじゃない？ もしかしたら彼、美緒ちゃんはまだ、心変わりした相手の事を好きなのかもとか、付き合ってるのかもって思ってるかもよ」

あ……そっか……別の人を好きになっただって言ったんだから、そう思うのが普通かもしれない。

西森さんにそう言われて、初めてその可能性に気付いた。

そして、美鈴に言われた『一度心変わりした人を、心底信用する事が出来ない』と言う言葉が、再び脳裏によみがえった。

「そっだよ。早く自分の気持ちを伝えないと、彼、誤解して、美緒の事諦めちゃうかも」

「由香里さん、それって、彼が私の事を想ってるって前提でしょう？ まだわからないよ」

私は由香里さんにそう返しながらも、頭の中は美鈴に言われた言葉がグルグルと渦巻いていた。

「美緒ちゃん、私もね、旦那と付き合う前、お互いに別の人が好きなんだと誤解してたのよ。私は結婚するまで旦那と同じ会社で同期だったんだけど……私達の同期は十数人いて結構同期同士仲が良くって、皆で飲みに行ったり遊びに行ったりしていたのよ。そんな中でも彼は同期で一番美人の子と仲が良くてね、二人は付き合ってるんじゃないかって噂になってたから、私は自分の気持ちは伝えるつもりはなかったの。そんな時に彼が転勤する事になって、もう諦めなきゃなって思ってたら、たまたま彼と二人きりで話す機会があったのよ。ちょうどいい機会だったし、最後だから今まで仲よくしてくれたお礼と、向うへ行っても頑張ってるって、ただそれだけを言う

つもりだったの。だから彼が、同じように笑顔でお礼を返してくれて、それで満足だったのよ。……だけど、その後で『梶川と仲良くない！結婚する時は呼んでくれよ』って言われて、とてもショックだった。確かに同期の男性の中では梶川君と仲良かったけれど、このまま誤解されたまま別れてしまうなんて辛すぎるって、思わず『私の好きなのはあなたです』って言ってしまったの。そんなこと言ってしまった自分が信じられなくて、彼女がいるだろう彼に申し訳なくて、すぐに謝っただけど、そうしたら彼も私を好きだって言ってくれて……本当に信じられなかった。だからあの時、自分の気持ちを書いて無かったら、彼とは結婚できなかつただろうなと思う。本当に運命ってちよつとしたタイミングで、どう変わるか分からないよね。だから、自分の気持ちに素直になって、気持ちを伝える事って大事だなんて思うの。美緒ちゃんも、彼が誤解してるかもわからないんだから、早く自分の気持ちを伝えた方がいいよ」

西森さんはいつにない真剣な表情で話すと、私の背中を押すような眼差しで見つめた。

彼も私其他の人を好きだと思ってるのだろうか？

誤解されても仕方の無い別れ方をしたんだと思えば、又美鈴の言葉が脳裏によみがえった。

『一度心変わりした人を、心底信用する事が出来ない』

誤解してるなら、解かなければ。

解くためには、どうしたらいい？

「私の場合、自分の気持ちを伝えようと思ったなら、まず誤解を解かないといけないと思うの。心変わりしたんじゃないって事を……でも、そのためには別れの真実を話さないと、分かってもらえないと思うんだけど……話してもいいと思う？ 別れの真実について……」

……」

私の頭の中で、もう一つの美鈴の言葉が彷徨いだす。

「真実を告げる事は、『それこそ今更だし、余計に傷つけるだけだよ』」

「良いも悪いも、本当の事を正直に話さないと、誤解が解けないんじゃないの?」

「でも……高校・大学と一緒にだった友達に言われたの。私にとって一番大変な時に彼を頼らなかつた上に、嘘までついて別れを告げたことが分かつたら、彼を余計に傷つけるだけだって……」

そして私は、彼女が10年近く付き合ってきた恋人に心変わりをされて振られた事、一度心変わりした相手を、心底信用する事が出来ないといわれた事、今更真実を言っても彼を傷つけるだけだから、もうすっぱりと諦めた方がいいと言われた事を話した。

「確かに、そのお友達の言う事も理解できる部分もあるけど……でもね、美緒、二人が再会した事に意味がある気がするの。チャンスだとも思っし、千裕ちゃんのような運命のタイミングが今なんじゃないかなって思っのよ。もう一度、あの別れた時からやり直すつもりで、すべてを正直に話せば、彼なら分かってくれるんじゃないかな?」

由香里さんは何を根拠に彼なら分かってくれるって言うのだろうか?

でも、今の彼なら、もしかして……?

「美緒ちゃん、私もそう思う。彼の事が好きなのなら、自分の気持ちと本当の事を誠意を持って正直に話した方がいいと思うよ。その方がたとえどんな結果になろうとも、悔いは残らないと思うの。そ

のお友達は今が一番つらい時だから、彼の辛い時の気持ちにリンクしてしまつんだと思うけど、実際のところ二人は3年以上の時間を経て、今なら別れた時の事も落ち着いて向きあえるんじゃないかな？ 美緒ちゃんはこのを乗り越えないと、前に進めないと思うから、今が頑張り時じゃないのかな？」

そつだ、あれから時間が経つて、私達は再会した。

お互いに落ち着いて向きあえるだけの時間が必要だったのかも少しれない。

だから今になって再会したのかも……。

由香里さんの言うように、この再会には意味があるのかも少しない。

もしかしたら空の上から両親や姉夫婦が私の気持ちに同情して再会させてくれたのかもしれない。

でも、彼にしたらどうなんだろう？

期待させるような態度を取るかと思えば、もう三週間近く、彼からの写メールは来ていない。

今彼は、何を思ってるの？

「美緒、何考えてるの？ どうせ美緒の事だから、自分から告白するなんてできないって思ってるでしょう？」

由香里さんはいつも私の気持ちを読んでもしまう。敵わないな、本当に。

「今はまだ……怖いよ。彼の気持ちも分からないし……こっちが勝手に期待して思い込んでるだけかもしれないし……」

「美緒ちゃんの気持ち分かるよ。私も本当は自分の気持ちを言うつもりなんて無かったんだから。彼が土壇場であんな事を言わなければ、きつと告白できなかったと思う。結局追い詰められないと、人

間って動けないものなのかもね」

「まあ、これが美緒だものね。私達はいつでも応援してるから、聞いて欲しい事や協力してほしい事なんかがあったら、何でもいいから私達を頼ってね。絶対一人で抱え込んで自己完結しちゃダメだよ。それで、彼に告白する勇気が心に一杯になったら、私達が背中を押しまくってあげるからね」

由香里さんは、いつまでたっても臆病な私に呆れながらも、笑顔で言ってくれた。

美鈴の言葉も、由香里さんと西森さんの言葉も、たとえ相反していても、皆私の幸せを願っているからこそその言葉。

この3人に出会えた事は、不幸だと思っていた運命も、案外幸運だったのかもしれないと思った。

そして、この3人の友情に恥じないように、今度こそ私はこの恋にけじめをつけようと決意した。

まあ、今すぐに行動に移せる訳じゃないけど……。

でも、彼からの写メールを待つてるだけじゃなく、こちらから送ってみようと思っ直した。

私は車検から返って来たばかりの愛車ミニクーペを携帯で撮ると、メッセージを添えて彼に送った。

彼と一緒に選んだこの小さな車、ミニ。

『私の大切な相棒は、あの頃と同じように今も現役でがんばってくれています。頼もしい奴です』

私達が中距離恋愛をしていた時、彼と私の間を幾度となく往復したこの車は、まるであの虹の架け橋のようだったと、今更ながら思った。

「いっそ、七色に塗り替えちゃおかな？」  
私はひとりごちてクスリと笑った。



### # 4 3 : 女子会 (後書き)

次話から6話分友達の西森さん、由香里さん、美鈴のそれぞれの視点の話が入ります。

他視点は後から読むほうがいい方は、美緒視点の# 5 0話まで飛ばしてもらっても、話は繋がると思います。

#44：西森千裕の困惑の日々【西森千裕視点】（前書き）

お待たせしました。

今回初の西森さん視点。

西森さんのイメージが壊れない事を祈っています。

今回お話の長さの最長記録を更新したんじゃないかな？

8000文字超えてしまいました。

覚悟して読んでくださいね。

よろしく願います。

#### #44：西森千裕の困惑の日々【西森千裕視点】

今年はラッキーな年かも知れないと思い始めたのは、次男翔也の小学校入学式の時だった。

担任が守谷先生だと分かり、思わず拳を握りしめ心の中で「ヨッシャー」と叫んでいた。

守谷先生はこの3月まで、長男智也の担任で、彼にとっては初めての担任だった。この春から教師3年目となる彼は、爽やかで子供たちに真剣に向き合おうと一生懸命な先生で、とても好感が持てた。そして、なにより保護者（主に母親）に受けたのは、その芸能人かモデルかと見紛う程の<sup>みまが</sup>人目を惹く容姿だった。やっぱり、眼福だよねえ。

私は又この一年も、この年若く端正な目鼻立ちのイケメン担任を間近に見られる幸せに預かれるのかと思うと、優越感に浸った。

綾ちゃん、悔しがるだろうな。

そして、そのラッキーが担任と保護者と言う関係だけにとどまらず、もういっ歩先生に近づけるクラス役員と言うところまで続いているとは、守谷ファンを公言する私と言えど、想像すらしていなかった。

そりゃあ、私は守谷ファンですよ（開き直り）。でもね、自ら進んでクラス役員に立候補するほど、目が眩んではないのですよ。それは他のお母さん達も同じで、誰も立候補する人はいなかった。

おそらく去年の不倫騒動（旦那怒鳴りこみ事件とも言う）の影響で、下手に立候補なんかしたら、守谷先生目当てなんて勘ぐられるのが怖いと思う。それにね、一昨年長男のクラス役員をしたけど、役員の仕事はそれなりに大変だった。今時の母親は仕事を持つ

てるから、仕事を早退したり休んだりと犠牲にする部分も多い。やはり主婦としては生活が第一だもの。

だから、まさか自分がくじ引きでクラス役員に当たってしまわないで、思いもしなかった。

でもね、内心ちょっと喜んだのよ。クラス役員になると担任と話し合いをする機会もあるし、今年から公表しないと話す担任の携帯番号も、もしかしたら役員にだけは特別に教えてくれるかもしれないし（これはやはり教えてもらえなかったけど、メルアドは頂けた）……それになにより、他の保護者が知らない守谷先生を見られるかもしれないじゃない？ こんなお得なポジションを、くじに当たったから仕方ない、皆さんの嫌がる仕事を犠牲になって引き受けますって顔して、ちゃっかりゲットできちゃうんだもの……なんて、私も現金だよな。

守谷先生のファンって言うのは、最初は本当に外見だけ愛でればそれで幸せ、みたいな気持だったんだけど、長男の担任をしてもらって、子供たちや教育への考え、対応を見ていて、その一生懸命さや真面目さに、信頼と応援したくなる母性本能みたいな気持ちも生まれ、今ではファンと言うより応援団と言う感じかな？

でも、そんな事真面目に周りの友人たちに言うのも恥ずかしいので、アイドルのファンのようなノリで、守谷ファンを公言しているの。

そんなクラス役員を決めるくじに当たったのは、私だけではなくもう一人いる。クラス役員は各クラス二人と決まっているから。そして、そのもう一人と対面した時、彼女は魂を抜かれたかのように茫然としてそこに立っていた。

初めて見る彼女の名前は、篠崎美緒と言った。

彼女の第一印象は、『若い！』だった。そして、その場に溶け込

めていない雰囲気。まるでそう、年の離れたお姉さんが、母親の代りに来てるって感じで……。でも、さっき母親って自己紹介してたよね？

「篠崎さん、だったわよね？ 当たっちゃったわね。仕方ないから覚悟を決めて、1年間頑張りましょう。よろしくね」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

彼女の緊張具合に、私は思わず笑ってしまった。そこまで緊張するほどの事じゃないって！

私がそう言って笑い飛ばすと、彼女はホッとしたような顔をした。しかし、今度は守谷先生を前にした途端、先程以上の緊張に彼女が固まるのを感じた。

そんな彼女を見て、ああこれは初めて守谷先生を目の前にした時にだれもが陥る緊張だなと、その緊張をほぐしてあげたくて、わざと明るく彼女も笑って緊張が解けるように、突っ込んでみた。

「わかるわ〜私も最初そうだったもの。他のお母さん達も同じよ…でもね、浮気はダメよ！」

その途端、彼女は完全にフリーズした。

驚いたのは私の方だ。どうして？ どうしてそこでフリーズ？

「やだ〜、篠崎さん、そこは笑う所よ」

私はいたたまれず、ガハハと笑って流したけれど、雰囲気は微妙だ。

その上、守谷先生までもいつもと雰囲気が違って、ニコリともしない。

なんなの？ この緊張感漂う微妙な雰囲気は！

守谷先生の方に、冗談で突っ込んでみても、以前のように軽いノリで返って来ない。

私はすっかりお手上げ状態になってしまった。

これって、あの事件の後遺症なのかな？

今年度からは、保護者との距離を思いっきり離すとかって事？

その日はそのままの雰囲気が終わってしまい、なんだか疲労だけが残った。

守谷先生とお話しできたと言うのに、喜びよりも疲労の方が大きいなんて！

この一年、守谷先生はこの雰囲気で行くのだろうか？ なんだか……。

心の中ではそう思っていたけれど、友達たちには自慢しまくって心に空いた穴を何とか優越感で埋めた。

だけど、右も左も分からず迷える子羊のような篠崎さんに頼られるのは、母性本能がキュンキュンと刺激され嬉しかった。私って、頼られると弱いよね。

彼女は若く見えるからもしかしたら10代で子供を生んでいるのかもしれない。知り合いのママ友もこの小学校にはいないみたいで、常にどこか緊張したような表情のままだった。私がこの小学校でのママ友第一号だと思うと、何となく嬉しい。

こんな風に私と篠崎さんのクラス役員がスタートしたのだった。

最初迷える子羊のようだった篠崎さんも、クラス役員や広報の会議などで顔を合話し話すたび、だんだんと打ち解け親しくなっていた。そして、いつか下の名前で呼び合うようになり、メールや電話で連絡を取り合うようにもなるほど親しくなる頃には、篠崎さんの最初にした印象はすっかり消えて、芯のしっかりした真面目で頑張り屋の良いお母さんと言うイメージに変わって行った。

それでも、彼女に対して何か違和感を感じるのは、守谷先生と一緒にいる時だ。彼女はいつまでたっても、守谷先生という時緊張が

取れない。その緊張は、他の人が守谷先生の傍にいる時に感じるポイントと頬を染めるような緊張では無く、どこか怯えたような緊張なのだ。思い返せばその事が、頭の片隅にずっと引っかかっている違和感だった。

守谷先生もそうだ。最初に感じた、今年度は保護者と少し距離を取るのかなと懸念したように、会議の時、間近で話をして、以前のような笑顔が無い。黙々と会議を進めるだけで、無駄話一つない。

どうしちゃったの？　もしかして、保護者と打ち解けるのが怖くなったの？

そんな事、訊ける訳もなく、私はこの二つの違和感を抱え悶々としていた。

彼女、美緒ちゃんは、会うたび新しい事実を知り驚いてしまう。まるでそれはびっくり箱のようで、何かまだまだ秘密を隠し持っているような気になる。

最初から何か訳ありな感じで、自分の事はあまり話さない美緒ちゃんだったし、聞いてはいけない雰囲気があったから、彼女から話してくれるのを待っていた。

けれどそれは、彼女からではなく、他から噂話として入って来た。

『亡くなったお姉さんの子供を、独身の妹さんが面倒を見ているらしいよ』

その話を聞いた時、私の中にあつた美緒ちゃんに関する疑問が、パズルがびつたりはまるように解けた気がした。私としては確かめずにいられず、美緒ちゃんに確認すると、彼女は観念したようにその事を認めた。

そして、彼女の話を聞いて、あらためて彼女の強さを実感した。まだ二十代の独身の女性だから、恋や結婚にもあこがれるだろうと

思うのに、全てを飛び越えて子育ての道を選ぶのは、苦渋の選択だったのでは？ 否、彼女の性格からしたら、その道しか選べなかったのだ。たった一人で、頼る身内もなく、子育てして来たのかと思うと、母親と言う立場からしたら胸が痛い。私なんか旦那にも親にも甘えてるのに……。

そんな話をすると、彼女は優しく微笑んで、同じような立場の友達が支えてくれたと教えてくれた。そして今は、お隣のおばさんと千裕さんがいるからと、嬉しい事を言ってくれた。

彼女はこの事を学校にも言っていないと言う。養子縁組までしていると言うのには驚いた。よっぽどの覚悟なのだろう。

そして、彼女に感じていた違和感の正体について、やっと思い至った。学校側にこの事を知られたくなくて、守谷先生の傍にいる時に怯えたように緊張していたのだと。

私はあらためて、友としてできる限りの協力をしていこうと心に決めた。私はやっぱり頑張っている人の応援をするのが、嬉しかったのだ。

2学期が始まると、翔也のクラスに転校生があった。その子の母親と美緒ちゃんはK市にいた頃、シングルマザー同士で助け合った友達なのだと紹介された。そのお友達は再婚を機にこちらへ引っ越してきたのだった。子供も二人ともウチの子たちと同じ学年だった。美緒ちゃんとは10歳違うらしく、私よりも年上で、サツパリとした頼りがいのある気持ちのいい女性だった。私達は美緒ちゃんがいたおかげで、すぐに打ち解けた。美緒ちゃんも私といる時よりも、その由香里さんと言う友達を頼っているような感じだった。

そんな由香里さんから知り合っつてすぐに電話があった。

「これは美緒に内緒なんだけど、美緒は独身で、拓都君はお姉さん



の子供だと言う事は知ってるよね？ それで、美緒はこちらの友達とは立場が違っちゃったせいかな、あまり友達がないのよ。だから、千裕ちゃんが友達になってくれた事をとて喜んでたの。彼女はいろいろと辛い思いもしてるし、今も辛い事があると一人で抱え込んでしまうようなところもあるから、さりげなく助けてあげて欲しいのよ。私は彼女にとって叱る役目だから、千裕ちゃんはフォローしてほしいの。美緒は生真面目なうえに頑固なのよ。それに変にプライドが高いから、時々叱り飛ばしてやるの。素直になれってね……フッフ」

由香里さんからそんな電話を貰って、私達は美緒ちゃんに対して同じ想いでいるんだと安心した。そして、由香里さんに友達として認めてもらったように嬉しかった。

それから時々、由香里さんとは連絡を取り合った。けれど、12月に忘年会と称した女子会をするまで、美緒ちゃんがとても辛い恋をしていたなんて、思いもしなかった。美緒ちゃんの悩みは拓都君の事ばかりだと思っていたから。

知り合ってからもうずいぶん経つのに、今までその事を話してくれなかったのは、ちょっと淋しかったけれど、私の中で、もしかして美緒ちゃんは守谷先生の事が好きなんじゃないかなって思い始めていたから、本当の事を知ってちょっとホッとしたんだ。

だって、守谷先生には愛先生がいるし、担任と保護者じゃね……やっぱり難しいと思う。

守谷先生と言えば、2学期になってから、私達に対する態度が一変した。1学期は役員会議の時、笑いもしなかったし、どこか厚い壁を感じていたのに、穏やかな表情で笑顔も出るようになったし、冗談の突っ込みにも笑って返ってくるようになった。

いったい守谷先生に何があったの？ と考えて見て、あの不倫騒動の藤川さんの事が解決したのが大きいのかなと結論付けた。

まあ、なんにしても以前のような守谷先生に戻ってくれるのなら、何よりだ。

守谷先生が変わったせいだろうか？ 美緒ちゃんの緊張も、落ち着いてきた。それはたんに慣れただけなのかもしれないけれど、以前は守谷先生とまともに顔を合わすことさえ避けているような緊張感があったから……。

\*\*\*\*\*

もう2学期もあと残すところ3日となった12月22日、個別懇談が行われる。一応個別懇談は20日から22日の間の希望日時と言う事で、私と美緒ちゃんと由香里さんは、相談して22日の午後3時台に順番で組んでもらえた。また、懇談終了後、一番近い我が家でお喋りしようという計画だった。

17日に女子会で集まったばかりだと言うのに、私達は幾らでもおしゃべりできるから不思議だ。そう思っていたら、美緒ちゃんから、今日の懇談に仕事で早退できなくなったため行けなくなったとメールが来た。

残念だけど、仕事なら仕方ないよね。

私は『了解。お仕事がんばって！ 明日、よろしくね』と返信した。

そう、明日の23日は祝日でお休みだから、昼間に一足早いクリスマスパーティーをしようと言う事になっている。今まで美緒ちゃん、シングルマザーの会の人達とクリスマスパーティーをしていたらしく、今年できないのは拓都君が可哀そうだと由香里さんがこっそりと教えてくれたので、私の家で3家族集まってパーティーをする事になっているのだった。

懇談の時間になり、呼ばれて教室の中へ入って行くと、1学期と

同じように子供の机を向かい合わせにして席を作ってあった。傍に置かれたファンヒーターが点いて温かい。教室は冬は冷えるんだと改めて実感した。

「守谷先生、よろしくお願いします」

そう言いながら促されて先生の前のいすに座った。前回と同じように守谷先生は、翔也の普段の様子を話し、成績表を前に広げて説明していく。

こんな時の守谷先生は、本当に普通の先生なのだけれど、子供の様子を話す時に零れる笑みが素敵で、小さな子供でもこの笑みに惹きつけられるんだろうなと考えながら、自分もその惹きつけられた一人かと心の中で苦笑した。

あらかた説明が終わった頃、私の携帯がメールの着信を告げた。

マナーモードにし忘れたため、設定していたデイズ二一の曲が流れ、慌てて止めた。そんな私を見ていた守谷先生が、「メールですか？見てくださって構いませんよ」と言ってくれたけれど、「メールですから後でいいです」と携帯を又鞆の中へしまった。

その時携帯の事でふと思い出し、守谷先生に問いかけた。

「守谷先生の携帯の待ち受けって、虹の写真なんですってね？」

私の問いかけに先生は驚いた顔をした。

「どうして知っているんですか？」

「ふふふ、本部役員の人で覗き見た人がいて、噂で聞きました。守谷先生の待ち受けだから、もっとみんな期待してただけで、虹の写真と聞いて、がっかりしていましたよ」

「どんな写真を期待していたんですか？」

「そりゃあ、彼女の写真とかですよ」

「そんなプライベートな写真は、誰に見られるかもしれない待ち受けになんかしませんよ」

「あつ、彼女と言うのは否定しませんね？」

「ノーコメントです。教師と言えどプライバシーはありますから」

「ふふふ、そうですね。じゃあ、その虹の写真は、もしかしたら『にじのおうこく』の虹の架け橋を真似て撮ったものですか？」  
そう訊いた途端に、先生の表情は先程以上に驚いた顔になった。

「えっ？ どうして……もしかして、何か聞いているんですか？」

「えっ？ それはどう言う事ですか？」  
何か聞いている？ ってどういう意味？ 誰に？

「いや、いいんです。私の勘違いでした。でも、どうして『にじのおうこく』が出て来たんですか？」

守谷先生は困惑したような余裕の無い物言いで訊いて来た。  
ああ、やっぱり当りなんだ。守谷先生も案外ロマンチックだねえ。

「ふふふ、当たりですか？ 何かその絵本のせいで虹の写真を送り合っのが流行ったんですか？ 篠崎さんも虹の写真を待ち受けにしているから、理由を聞いたなら『にじのおうこく』の虹の架け橋の真似をして撮ったものだって言ってたんですよ。守谷先生も彼女から送って来た虹の写真ですか？」

私はクスクス笑いながら言うと、きつと愛先生から送られてきた

虹の写真だろうなと思った。

仲のよろしい事で……。

「西森さん、もしかして、カメラかけてる？」

「はあ？」

カメラかける？　なんだそりゃ？

「いや、いいです。……篠崎さんも私の待ち受けが虹の写真だと知  
っているんですか？」

「えっ？　篠崎さん？　はあ、まあ、そうですね……そう言えば、  
守谷先生と篠崎さんって、折り紙と言い、虹の写真の待ち受けと言  
い、結構趣味が似てますよね？　篠崎さんと愛先生って似てますけ  
ど、趣味も似てますか？」

フッフ、今日は突っ込んだこと訊いても会話が Continuing から、ポ  
ロリと何かバラしてくれないかなって、私は芸能記者か！

「えっ？　愛先生？　彼女は別に折り紙が好きだとか、虹の写真が  
好きだとか聞いた事無いけど……」

守谷先生はそう答えながら、怪訝な顔をしている。

あっ、もうこれ以上はまずいかも……でも、最後に一つ。その反  
応だけでも見て見たい。

「待ち受けの虹の写真は、愛先生から送られて来たんですか？」

そう言った途端、目の前の守谷先生の表情はすつと冷めたもの  
になった。

「西森さん、さっきも言ったように教師にもプライバシーはあるの  
で、興味本位にいろいろ訊かないでください。それに、愛先生とは

何も関係ありませんから、彼女に迷惑をかけるような噂は流さない  
てくださいね」

1学期の時のような距離を置いた冷たい表情に、怯んでしまった。  
ああ、怒らせてしまったと、すぐに「ごめんなさい」と謝った。守  
谷先生の方も、すぐに表情を緩めて「私の方もきつい言い方をして  
しまつてすいません。でも本当に、プライバシーは勘弁してください  
いね」と念を押された。

それにしても、愛先生とは関係ない？

付き合っていないと言う事？

じゃあ、虹の写真は誰から送られてきたの？

自分が撮った写真だという反論は無かったよね？

\*\*\*\*\*

「それで千裕は、守谷先生に怒られて、落ち込んでる訳だ」

パパにそう言われて、私は神妙に頷いた。

私はその日あった事をいつもパパに話す。他の人には口が軽い訳  
じゃないけど、パパにだけはなぜだか話してしまう。それはまるで  
日記を書くように、その日あった事、自分が感じた事を話すのだ。

パパは呆れながらも、耳を傾けてくれる。もしかしたら聞き流し  
てるのかもしれないけれど、結構昔に話した事も覚えていたりする  
から、きちんと聞いてくれているのだと思う。

「落ち込んでると言うか……愛先生と付き合っていないのかなって  
……それにね、懇談の後で由香里さんにその話をしたら、『千裕ち  
ゃん、いい突っ込みしてくれたねえ』って言うのよ。どう言う意味  
かな？」

「そりゃー言葉どおりの意味だろう？ 守谷先生の本音が聞けたと言う意味で」

「守谷先生の本音？ 愛先生と付き合っていないって言う事？ でも、それが分かってても、由香里さんは別に守谷ファンってわけじゃないし……噂話が好きなのかな？ そんな感じじゃないけど……」

「千裕は本質が見えて無いなあ。ほら、その『にじのおうこく』の真似をして虹の写真を送り合ってた言うのも、以前、美緒さんから訊いた時、そう言うの流行ってたのになって、千裕言っただろ？ あの時俺も興味があったから、ネットで調べて見たんだよね。でも、そう言うのは一つも出てこなかったよ」

「ええつ？ じゃあ、それってまったくオリジナルって事？ じゃあ、じゃあ、美緒ちゃんと守谷先生ってまったく同じ事考えたって事かな？ 今日の守谷先生の反応じゃ、『にじのおうこく』の真似をしたって言うてるようなものだったし……」

「千裕、確かに別々に同じ事を考える事もあるかもしれないけど、その二人が送り合ってたって考える方が自然じゃないか？」

「えー！ ！ ！ それは無い、無い！ パパ、思い出してよ。美緒ちゃんの好きな人は仕事の関係で再会したって言うたのよ。拓都君の事だって、まだ話していないって……」

「でもさ、守谷先生のファンだって公言してるおまえに、言い辛くて隠してるのかもしれないだろ？」

「そんな……そんな事無いよ。あり得ないよ。今日守谷先生は、彼女いる事否定しなかったし……美緒ちゃんはまだ片想いのような事

言ってたし、もしもそうだとしても、その虹の写真は今の彼女からの写真かもしれないじゃない？」

「おまえ……可哀そうな想像するんだな。もしも、守谷先生の元カノが美緒さんだったとして、美緒さんと交換していた虹の写真を、また今の彼女とも同じ事するかな？ 美緒さんは元カレからの写真だって言ってたんだらう？」

「そうだけど……やっぱりあり得ないよ。美緒ちゃんの元カレが守谷先生だなんて……パパ、思いすぎだつて！ 虹の写真が引つかかってるだけでしょう？ たまたま同じ事思っただつて！」

私は否定しながら、パパの推理に思い当たる部分を気付かない振りをした。

そんな事、やっぱりあり得ないよ。

もしそうなら、話してくれるはずだよな？

それともパパの言うように、言い辛くて隠してるの？



#44：西森千裕の困惑の日々【西森千裕視点】（後書き）

西森さんは、無意識に良い仕事をしてくれました（笑）  
でも、これからますます西森さんの困惑の日々は続きそうです。

次話は、由香里さん視点です。

#45：川北（成川）由香里の思惑〈前編〉【由香里視点】（前書き）

ずいぶん長い間、お待たせして、すいませんでした。

長くなってしまったので、半分に分ける事にしました。

今回は初の由香里視点です。

今回の前編は、由香里さんの回想なので、会話文のカギかっこは『』をつかいました。

#45：川北（成川）由香里の思惑〈前編〉【由香里視点】

私が初めて彼女、篠崎美緒に声をかけたのは、子供を預けていた保育園の保母に頼まれたからだった。

その頃の私は、同じ保育園に子供を預けているシングルマザーの人たちと助け合いの会を作っていた。それを見込んでの保母の依頼だった。

その頃美緒は、頼れる身内も知り合いもないK市で、たった一人で亡くなったお姉さんの子供を育てていた。慣れない子育ての上、仕事の方も社会人2年目でまだ新人みたいなものだったにもかかわらず、子供と二人の生活の全てが若い美緒の肩にかかっていた。

彼女は見るからに限界を超えているような疲れた表情をしており、保母もそれ気付いたから助けてやってほしいとお願いしてきたのだろうと思う。

美緒に私達の会に入らないかと声をかけた時、彼女の張りつめていた糸が切れてしまったのか、誘ってくれて嬉しいと泣き出した。その姿を見た時、どんなに追い詰められていたのだろうかと、自分も同じ立場だから、彼女の辛さや疲れは良く分かった。

そんな彼女と親しくなるにつれ分かって来たのは、見た目の癒し系のような優しい雰囲気を裏切るような変なプライドの高さと頑固さだった。おそらく、父親を早くに亡くし、母親の苦勞を見て来たのと、『女でも男に頼らずに生きていけるような仕事を持って』と母親に言われて育って来たせいで、自分に厳しく、人に甘える事を許さないからだろう。

だから、そんな美緒が私に心を開いてくれるようになって、恋人との辛い別れの話をしてくれた時、彼女のそのプライドが彼に頼るのを、彼を巻き込むのを許さなかったのだろうと感じ、やりきれなくなつた。

今でこそ自分の限界を知り、人に助けられ甘える事も覚えた彼女だけれど、彼と別れた事をけして後悔しているとは言わなかった。それでも彼を想う彼女の恋心が、後悔と罪悪感で苦しみ、自分自身を責めて落ち込んで行くのを見るたびに、私は早く彼女をこの罪悪感のスパイラルから救い出してあげたかった。

そして、彼女と出会ってから3年の月日が経ち、いつか彼女は彼を想って落ち込む事もなくなり、彼の事を口にする事もなかった。私は吹っ切れたのだと信じていた。ただ、彼女が口にする恋や結婚はしないと云う言葉だけは、心に引つかかっていたけれど……。

彼女がいろんな意味で思い出の多い実家へ帰ろうと思うと言った時、私は引き止めなかった。彼女にとっても、拓都君にとってもK市は仮の場所。やはり生まれ育った実家に戻り、彼女の両親や拓都君の両親の想いの溢れる家で、生活するのが本来あるべき姿なのだと思っただから……。

だけど、まさか、こんな運命が待ちかまえているなんて、誰にも想像さえできなかっただろう。

『由香里さん、今日入学式でね……拓都の担任が……彼だったの』

『えっ？ 彼って？』

私は美緒の言う事が、すぐに理解できなかった。

『だから……慧だったの』

慧と言うのは、彼女から何度も聞いた元カレの名前。

まさか……そんな事……でも、そう言えば、元カレは小学校の先生を希望していたって話してくれた事があつたっけ……。

『まさか……元カレが担任だったの？』

彼女はそうだとすると、その日聞いた彼に関する噂話を話し、これからどうすればいいかと落ち込んだ。

再会した事にも驚いたけれど、彼女が少しも吹っ切れていなかった事、彼への想いに蓋をして誰にもそれを気付かせなかった事を思い知らされ、私は今まで彼女の傍でどうして気付いてやれなかったのかと、自分が情けなくなつた。

それでも、こうして私を頼って再会した事を話してくれた事は嬉しい事だつた。彼女にとって私は、親友である事と共に、彼女の母や姉という存在を重ねているのだと思う。彼女がこうして話してくれたと言う事は、彼女にとって今回の彼との再会は、限界を超えていたのだらう。

遠く離れている事に苛立ちを覚えながらも、私は彼女を叱る立場を全うする。そうしないと彼女は自分自身を責め苛むこらむからだ。私に叱られると少しは自分自身を庇おうとするから、落ち込む事も少なくなる気がする。

そうして彼女は、彼との間に何かあるたび私に電話をしてきて、心にたまつたものを吐き出すようになった。きつとそうしないと、彼と対峙できなかつたのだらう。役員という立場で、保護者と担任として向き合う事が多くなつてしまつたから……。

そんな中、もう一人の役員の人がとてもいい人でと、彼女が話すのを聞いて、担任である彼との間のクッション役になっていくれる女性に、少しでも今の彼女を癒す存在でありますようにと祈らずにはいられなかつた。

美緒と彼が別れる原因となつた、拓都君がお姉さんの子供であると言う、彼に知られたくないゆえの秘密を、他の人から指摘された時、どうすればいいかとおろおろする彼女に、私はもう3年も経つ

ているのだから開き直れと叱りつけた。彼の事になると、こんなにも弱くなってしまうのかと、恋する女の弱さに哀れさえ感じた。頑固である意味気の強い彼女をここまで弱くしてしまう彼とはどんな男性なのだろうと思う。そして、彼は今、彼女と再会して、何を想い感じているのだろう。

3年前に心変わりをしたと言って冷たく振った、憎い元カノだろうか？

それとも、もう3年も経ってしまったから、憎しみも薄れ、今はもう別の人がいて、ただ過去の人でしかないのだろうか？

まさか、あんな酷い振られ方したけれど、彼女の事が忘れられなくて想い続けていたとか……あり得ないよね。

それでも、彼が拓都君を預かってくれた話を聞いた時、もしかして……と期待が膨らんだ。なのに彼には恋人がいると言う噂らしい。そして、そんな噂に又落ち込んでいる彼女に、堪らなくなって新しい恋をしろと勧めた。すると彼女は、とてもそんな気になれないのだと言っ。

そうなのだ。私は今更ながらに思い至った。彼女の頑固さはこんなところにも表れていて、結局彼女の心は3年前のあの別れの時点から、一歩も進んでいなかったのだ。

私の方と言えば、以前から付き合っていた私が契約社員をしている生命保険会社の5歳下の上司が転勤する事になり、結婚してついでに行く事になった。なんとその転勤先が、美緒の住む市で、すぐに同じ校区への引っ越しを決めたのだ。

ずーとみて見たいと思っていた美緒の最愛の人、守谷慧と言う教師との対面の時は、ほどなくして訪れた。

『はじめまして、陸君の担任をさせていただきます守谷です』

そう言つて挨拶をしたのは、想像以上のイケメン教師だった。

美緒もなかなかやるじゃない！

一瞬そんな思いが頭をかすめたが、今となつては忘れられずに執着しているのは美緒の方で、目の前の爽やかな表情の若い教師は、噂ばかりが先行して、実際のところ美緒に対してどう感じているのだろうか……。

1年3組の教室でいろいろな説明を聞いた後、私は探りを入れてみる事にした。

『守谷先生のクラスの篠崎拓都君は、K市の保育園の時、ウチの子と仲が良かったんですよ』

『ああ、聞いています。仲が良かったから一緒のクラスにしてほしいとの事でしたので……』

そうなのだ。美緒には話していないが、事前に篠崎拓都君とできれば同じクラスにしてほしいとお願いしていたのだ。

『ありがとうございます。拓都君のお母さんとも仲良くしていたので、いろいろな面で助かります。拓都君のお母さんとは、保育園の時、母子家庭の助け合いの会で知り合つたんですよ。彼女、若いのに知り合いもないK市で拓都君を抱えてとても大変そうでした。でも、良く頑張っていると思います』

私はそう言つてニッコリと笑つた。目の前の教師は、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに表情を戻した。

『母子家庭ですか……でも、この川北さんの調査票には、ご主人の名前がありますけど……』

『私、再婚してこちらに引越して来たんですよ』

そう言つと彼は調査票に視線を落したまま、しばらく考え込んでいたようだった。そして小さく嘆息するのを私は見逃さなかった。

『そうですか、わかりました。これからどうぞよろしくお願いします』

そう言つて頭を下げた彼は、もう元の爽やかな教師の顔に戻っていた。

なかなか手強そうな相手だけれど、一瞬見せた驚きの表情と溜息に、私は何かを感じた。

もしかすると、もしかするかも……。

その後聞いたキャンプの時の話。守谷先生の噂の恋人は、長男礼の担任の愛先生だと言う。二人が仲良くしていたのを見せつけられて、又気落ちしている美緒だけれど、私はキャンプの時の美緒と彼の会話を聞いて、私の想像は本物かもしれないと感じたのだった。

そして、いつしか私の予測を裏付けるように、美緒と彼は急速に接近し出した。

美緒が彼に誕生日メールを送ろうと思うと言い出した時には、驚いた。それは私が担任である彼に、彼女の誕生日のお祝いの言葉を言わせた事が引き金だった。

そして彼女はメールを送り、彼からの反応も概ねおおむね良い感じで、このまま二人が新たな関係を築いていってくれる事を願った。

しかし、運命は美緒を試すように、次々といろいろな試練を与える。

愛先生の存在。

拓都君の怪我。

そして、彼からのアプローチ。



負い目のある美緒は、すぐに悪い方へ考えてしまい、彼からのアプローチも拒絶してしまう。

私は話を聞きながら、イライラしてしまう気持ちを抑えきれなかった。

ただ、守谷先生も一度拒絶されても、諦めずにまた美緒に近づこうとしてくれる事に、本気さを感じた。なのに、彼女の方がそれを受け止めきれず、ネガティブ思考で呆れてしまう。

素直になって彼の想いを受け止めるだけでいいのに。

私から見たら、二人はお互いを想い合っているように思えるのに、どうしてそんなに悲観的なのです？

でも、私ができる事は美緒の背中を押す事だけ。

美緒が自分で考えて動き出さないと……。

美緒にしたら、彼の気持ちが見えなくて、自分から近づいて行くのが怖いのだろう。

でも、一歩ずつで良いから、自分から動いて欲しい。

彼の方も、もしかして自信がなくて怖いのかもしれないから……。

#45：川北（成川）由香里の思惑〈前編〉【由香里視点】（後書き）

由香里視点の後編も、あまりお待たせせずアップしますので、  
よろしく願います。

#46：川北（成川）由香里の思惑へ後編【由香里視点】（前書き）

お待たせしました。

後編を続けて更新できて良かったです。

前編より少し長いです。

どうぞよろしくお願いします。

#46：川北（成川）由香里の思惑〈後編〉【由香里視点】

12月22日水曜日、2学期の個別懇談の日。美緒にしたら、担任である彼に会えるのは今年最後だから、一步近づくチャンスなのに、仕事で懇談に行けなくなったと、お昼にメールがきた。

なんてついてない。

美緒の運命は、いつも意地悪だ。

それならば私が少し、彼の背中を押ししてみようかな……。

二人とも怖がっていたとしたら、なかなかうまくいきそうにないもの。

懇談の時間が近づき、教室の前の廊下で待っていると、後ろの入口の戸が開いて千裕ちゃんが出てきた。なんだか元気だない。何かあったのだろうか？

「川北さん、どうぞ」と呼ばれたので、千裕ちゃんに「後でね」と言って手を振ると、彼女は無理に作った笑顔で「待ってるね」と言っただけで去って行った。

いつもと違う千裕ちゃんの様子が気になったけれど、後で話を聞けばいい。それよりも……。

子供の机を向かい合わせて作った席に、「お願いします」と言うのと、「どうぞ」と促されて座った。1年生の椅子は本当に小さい。守谷先生の長い脚が窮屈そうだ。

陸の学校での様子を話し、成績表を目の前に広げて説明していく担任は、美緒の元カレと言うより、やはり普通に先生だなど、子供たち一人一人をよく見ている、良い先生なんだなど、目の前の若い教師を見て思った。

「何か質問とか、気になる事や、心配事がありましたら……」  
担任は決められたセリフのように、そう言った。

「あの、私の事じゃないんですけど……今日、篠崎さん、仕事で懇談に来れなくなっ……」

「ああ、連絡が入っていましたよ」

「それで、彼女、来ていたら先生に相談したかったと思うんですけど……代わりに私が話してもいいですか？」

「篠崎さんに頼まれたのですか？」

担任は怪訝な顔をした。そして、何かを探るように私を見ている。

「いいえ、これは私のおせっかいなんですけど……あの、拓都君の事なんです」

「拓都の？ 私が聞いてもいい話しなんでしょうか？」

「ええ、彼女、とても悩んでいたの、普段子供達を見ている先生の意見を聞きたいと思っ……実は、クリスマスプレゼントの事なんですけど、毎年彼女はできるだけ拓都君の欲しいものをあげようと思っ……一緒にサンタさんへ手紙を書くんです。書く事で、拓都君の欲しいものを聞き出さらしいんですけど、今年は拓都君が自分で書くから、ママは見ちゃダメだっ……一人で書いて、サンタさんへ出してほしいと渡されたらしいんですけど……彼女がこっそりと手紙を見たら、パパが欲しいっ……書いてあつたらしくて……」

「パパ、ですか？」

「はい。それはウチの子のせいなんです。ご存じのように私は夏に再婚しまして、子供達に新しくパパが出来たんですが……陸は本当の父親の記憶が殆ど無くて、今のパパが子煩悩でとてもよく子供達と遊んでくれるんですよ。それで、すっかり陸はパパに懐いたのはいいんですが……陸が拓都君にパパ自慢をしてるようなんですよ」

「ああ、私にもよく、パパの話をしてくれますよ。ゲームがとても上手なんだとか……」

「ええ、そうなんですよ。ゲームで子供たちの気持ちを掴んだようなもので……あつ、それですね、時々西森さん、篠崎さんの家族ぐるみで遊ぶようになって、パパ達と子供達がキャッチボールをするようになったんです。それで、拓都君がキャッチボールをとても気に入ったみたいで、キャッチボールをしてくれるパパが欲しくなったみたいなんですよ。なんでも、『陸君のウチにはパパが来たのに、ぼくのウチには来ないのか』って、お母さんに言ってみたみたいで……篠崎さんは『ママがキャッチボールをするから』って納得させたらしいんですけど、パパ達のように上手くキャッチボールができなくて、それで内緒で拓都君はサンタさんに『キャッチボールがしたいからパパをください』ってお願いしたらしいんです」

私は、自分の話になりそうだったのを、慌てて美緒の話に戻して話を続けた。

担任は静かに頷きながら話を聞いていた。そして、「そうですね、お母さんにしたら辛い事ですね」と言うと、何かを考え込むように視線を落として黙りこんだ。

「篠崎さんは、手紙の内容を知らない事になっているから、その事について拓都君と話ができなくて……それに彼女自身、私達と家族ぐるみで遊んでいる時も、やはりパパの存在って必要なのかなって悩んでいるようでした」

彼は私の話に黙って頷くと、しばらく思索した後で顔をあげて私の方に視線を向けた。

「わかりました。私に話した事は、篠崎さんに黙っていてください。拓都君にそれとなく話してみますから……」

えっ？

美緒に話すなど？

どうするつもりなの？

私は彼の反応に戸惑った。彼はやはり担任として対応するつもりなのか？

私としては、彼から美緒に連絡を取ってほしいのに……。

「どうして篠崎さんに黙っておくのですか？」

「川北さんは篠崎さんに頼まれた訳じゃないんですね？ だったら、私は聞かなかった事にしておきます。でも、拓都には、パパと言う存在についてきちんと話そうとは思いますが……大丈夫ですよ」

何が大丈夫なんだろうかと、思ったけれど、目の前の担任は、母親達を惹きつける爽やかな笑顔で言い切った。

まあ、私が焦る必要もないか……。

この事は彼に任せておこう。

「すみません。いろいろと勝手な事を言いまして……どうぞよろしくお願いします」

「川北さんはお友達思いですね。これからもいいお友達でいてあげてください」

担任は笑顔のまま言ったけれど、それって美緒のために言ってるの？

「もちろんです。私は彼女がずっと辛い思いをして来たのを見ているから、幸せになってほしいと願っているんです」

私は真剣な眼差しで、担任を見据えて言った。

私の願いは、彼に通じるだろうか？

彼も私の真剣な眼差しを同じような真剣な表情で受け止めたけれど、すぐに顔を逸そらしてしまった。

「では、インフルエンザも流行りだしていますので、冬休みにいろいろお出かけもされると思いますが、気を付けてください」

守谷先生がそう言うのに頷うなずきながら、私は立ち上がり「ありがとうございます」と頭を下げた。

彼は気付いただろうか？ 私の言外に込めた思いを……。

その後、どこか落ち込んだ様子の千裕ちゃんと合流し、明日のクリスマスパーティーのための買い物に出かけた。

「ねえ、どうしたの？ 何かいつもより元気ないけど……」

私は買い物に行く道中、なかなか話そうとしない千裕ちゃんに焦れて、こちらから話を振った。

「あーん、由香里さん、聞いてよ。私、絶対、守谷先生に嫌われたよ」

私の問いかけに、それまで黙っていた千裕ちゃんが、耐えきれないとはかりに泣きついてきた。

やっぱり守谷先生に関係した事かと呆れるけれど、彼女の無自覚に守谷先生の間を突くところは、いい刺激になったかもしれない。

それまでの落ち込んで黙っていた千裕ちゃんが嘘のように、先程の個別懇談での守谷先生とのやり取りを、堰を切ったように話しました。



話を聞いて驚いた。本当は美緒の恋の後押しのために、千裕ちゃんに本当の事を話して、仲間に引きずり込もうかと考えていたところだった。

千裕ちゃんって、真実を知らなくても、良い働きをしてくれるのよねえ。

「千裕ちゃん、いい突っ込みしてくれたねえ」

私は嬉しくなって、思わずそう言ってしまったけれど、千裕ちゃんはきよとんとした顔で「いい突っ込み？」と聞き返してきたので、私は笑ってごまかした。

「守谷先生に嫌われたかもしれないのに、笑うなんて、由香里さん酷いよ」

「いやいや、守谷先生は感謝してるかもよ？ 美緒の携帯の待ち受けが虹の写真だって分かったんだから……」。

\*\*\*\*\*

翌日の12月23日木曜日、天皇誕生日でお休みのこの日、いつもの3家族でクリスマスパーティーをする事になった。K市にいた頃は、母子家庭の会のメンバーで集まってクリスマスパーティーをしていたので、今年はどうしようかなと千裕ちゃんに話したら、千裕ちゃんが自分の家でパーティーをしようと言ってくれたのだった。

午前9時に西森家へ集合して、子供達はパパ達が公園へ遊びに連れて行ってくれている間に、私達母親はクリスマスランチの用意をする事になっている。

「昨日はごめんね。買い物全部お任せしてしまっ……」

美緒はやって来るなり私達に頭を下げた。

「気にしなくていいのよ。美緒ちゃんはお仕事だったんだから……それよりさ、今日のメインはローストチキンよ。昨日の内に鶏丸ごと肉を注文しておいたのを朝から取りに行って来たのよ」

千裕ちゃんはいつものようにテンション高く、今日のメニューとそれぞれの分担について話している。でも、そんな千裕ちゃんを見ながら何か違和感を感じた。

昨日の今日なのに、いつもの千裕ちゃんなら美緒に会って真っ先に守谷先生の話題を出すんじゃないだろうか？ それなのに、忘れていただけ？

そして、私はそんな様子を見ながら、ふと思い出して美緒に声をかけた。

「ねえ、美緒。個別懇談はキャンセルしたの？ それとも違う日にしてもらったの？」

もともと今回の個別懇談は希望者のみと言う事だったので、キャンセルしても成績表は2学期の最終日（12月24日）に子供が貰ってくる事になっている。

「もう日もないから、キャンセルしたの」  
彼に会うチャンスをキャンセルして良かったのか……？

「イケメン担任と話ができるチャンスだったのに、もったいない」  
私はわざとそう言った。いくら千裕ちゃんだって、懇談の話が出たら思い出すでしょ？

この事は、千裕ちゃんの口から美緒に言ってもらわないと……。

「もう、からかわないでよ」

美緒がこちらを睨みながら言ったけれど、千裕ちゃんの反応の方が気になった。

守谷先生の話題に食いつかないなんて、どうしたの？ 千裕ちゃ

ん。  
食いつかないどころか、何も言わずにエプロンをすると流し台までいき、調理の下準備を始めた。

「やだ、マヨネーズあると思ってたのに、もう少ししかないわ。これじゃあ足りないよ」

急に千裕ちゃんが大きな声を出した。私と美緒は顔を見合わせる  
と美緒が口を開いた。

「私、買ってくるよ。車、一番出しやすいから……」

「いいの？ 助かる。頼むね」

千裕ちゃんがそう言うと、美緒は鞆を持って出かけて行った。美緒の姿が見えなくなると、千裕ちゃんは大きく息を吐き、私の方を振り返った。

「ねえ、由香里さん。美緒ちゃんの好きな人って、見た事あるの？」

「えっ？ なに？ いきなり」

千裕ちゃんの問いかけに、どう答えるべきか、逡巡しているうちに、千裕ちゃんの方から質問の意味を説明し出した。

「あのね、昨日の懇談の事……ううん、懇談の事だけじゃなくて、他の事もみんな、パパには全て話しているんだけど……でも他の人には絶対に何も言っていないんだよ。パパが言うにはね、今までの話を聞いていたら、美緒ちゃんの好きな人って、守谷先生じゃないかって言うのよ」

なに？ 千裕ちゃんの旦那って、探偵なの？

「美緒は彼に会社で再会したって言ってたじゃない？」

本当の事を言うチャンスだったのに、私は思わず反論してしまっていた。

「そうだよね。私もそう言ったんだけど……パパだったら、おまえが守谷先生のファンだなんて言うから、誤魔化したんじゃないかって……」

なかなか鋭い！ ご主人名探偵！

「へえ。それで、ご主人はどうして美緒の好きな人が守谷先生だつて思つたの？」

「あの虹の写真つて、二人とも『にじのおうこく』の虹の架け橋を真似て恋人と虹の写真を送り合つたつて言つてたでしょう？ そんな事を偶然二人ともが考えるなんておかしいつて言うの。それならその二人が虹の写真を送り合つたつて考えた方が自然だつて言うのよ。それに美緒ちゃんの話してくれた元カレつて、同じ大学の2つ下つて言つてたけど、それもピッタリだつて……」

守谷先生は恋人と虹の写真を送り合つたなんて言わなかつたんでしょ？

千裕ちゃんの頭の中ではもうそういう風に思いこんでいるのか……。

それにしても、千裕ちゃんのご主人の目の付けどころは、凄い！美緒の元カレの設定も踏まえての推理だったのか……。

「そう言われると、それも有りかと思うね」

私は無難な返事をしながら、さてどうしたものかと考えていた。

「そうでしょうか？ 私もパパにそう言われて、いろいろ思い返してただけ……美緒ちゃんの元カレつて、同じサークルだつて言つてたけど、守谷先生は折り紙サークルで、美緒ちゃんもやけに折り

紙に詳しくあったから、もしかすると、もしかするかもって思ったのよ。それに、守谷先生に誕生日おめでとうって言われた時の美緒ちゃん……守谷先生の事が好きなのかなって思ったくらい、真っ赤になつてたものね……。でも、今までの守谷先生の態度を見ると、美緒ちゃんが元カノだなんて思えないのよ……やっぱり、愛先生とは付き合つて無いのかな？ キャンプの時、いい感じだったのに……」

千裕ちゃん、核心に迫っているけど、肝心なところ見落としてるね。

昨日の懇談での守谷先生の反応は、ミエミエじゃないの？

千裕ちゃんにしたら、大した事無い反応だったからもう忘れちゃったかもしれないけど、私に話してくれた時は、すぐのことだったから、わりあい真実そのまま話してくれたんだらうな。

担任が「何か聞いてるんですか？」と尋ねたのは、美緒から二人の過去を聞かされてるのかって言う事だらうし、「カマかけてる？」と訊いたのも、千裕ちゃんが二人の事を疑つてカマをかけてるのかって事だらうし……守谷先生にしたら、どう反応したらいいのか、悩んだらうなあ。

「愛先生とは関係ないって言つてたんでしよう？ だったら、付き合っていないってことなんじゃないの？」

私は、守谷先生と愛先生の交際疑惑から離れられない千裕ちゃんに、くぎを刺した。そして、その事を美緒にも千裕ちゃんから話してもらわなければと考えを巡らし、千裕ちゃんが屈託なく美緒に話すためには、美緒と守谷先生の元恋人説を潰しておいた方がいいと考え至つた。

だって、千裕ちゃんが真実を知つて、バレてる事を知らない美緒の前で上手く立ち回れるかどうか不安だったし……美緒は千裕ちゃ

んにはまだ知られたくないみたいだし……それに千裕ちゃんには美緒自身の口から話してほしいから。

「そうなんだけど……じゃあ、守谷先生の虹の写真は美緒ちゃんが送ったものだと思う？」

「それは短絡過ぎないかな？ 美緒は相手が守谷先生なら、守谷フアンじゃない私には話してくれてもいいんじゃないの？ たまたま、いろいろな偶然が重なっただけじゃない？ ご主人想像しすぎだよ」  
ちよつと胸がチクリと痛んだけれど、私も聞いていないと言うス Tanksで押しまくろうと思う。

私が美緒と守谷先生の元恋人説を否定した途端、千裕ちゃんは分かりやすいぐらい安堵の表情をした。

「そうだよね？ パパは考え過ぎだよね？ あー良かった」

「良かったって、何が？」

「だって、美緒ちゃんの好きな人が守谷先生だったら、今まで散々愛先生との事応援してるって美緒ちゃんに話してたから、傷つけられたかって……ちよつと不安だったのよ」

あ、千裕ちゃん、あなたはなんていい人なの！！

私、こんなに人の良い千裕ちゃんを騙してるなんて……。

もしも、全てが上手くいったら、美緒には千裕ちゃんにしっかりと謝ってもらわなきゃ。

もしも、じゃないね。こうして千裕ちゃんまで騙してるんだから、美緒には幸せを手につかむまで、諦めずに頑張ってもらわなきゃ！  
千裕ちゃんに、彼は愛先生と付き合っていないって話してもらったら、このクリスマススの機会に美緒の方から何かアプローチするよ、背中を押そう。

私は心の中でいろいろな策を考えながら、友の幸せの笑顔を見られる事を願っていた。

#46：川北（成川）由香里の思惑へ後編 【由香里視点】（後書き）

由香里視点が長くなってしまいました。

お付き合いくださり、ありがとうございます。

次話は本郷美鈴視点になります。

又しばらくお待ちくださいね。



#47：本郷美鈴の苦悩の日々〈前編〉【美鈴視点】（前書き）

お待たせしました。

初的美鈴視点です。

またまた長くなりましたので、前・後編に分けました。

前編は、美緒視点より少し過去の回想から始まります。

よろしく願います。

#### #47：本郷美鈴の苦悩の日々〈前編〉【美鈴視点】

8年間付き合ってきた直也と別れた。

もう9年目に入っていた。

あんなに長く付き合っていたのに、同棲を始めて4カ月で破局してしまった。

友達の彼女の相談に乗っていたらしい。友達が二股をしているみたいと相談に乗っているうちに、自分が二股をかけていては世話が無い……結局、類友、皆同じ穴のムジナって言う奴かな……。

一緒に暮らしていたのだから、何となく彼の気持ちが変わって行くのは分かったけれど、気付かない振りをしていた。その内、仕事が忙しい、出張だと帰らない日が増えていった。それでも、頭のことかでももしかしたらと思いつつも、考えないようにしていた。この予感を自覚してしまえば、私の8年間積み重ねた物が、粉々に壊れてしまいそうで……あの頃は彼の言い訳に縋っていたのかもしれない。

そしていきなり彼女が私の前に現れ、自分が悪いのだと頭を下げた。さすがの私も、子供と言う武器を出されては、何も言えなかった。その後、彼からも責任を取りたいから別れて欲しいと言われ、涙も出なかった。

現実感がなかった。あまりの衝撃は、悲しいと言う気持ちさえ起こさせないのか……。

ただ、8年間の思い出を壊したくなくて、私は物わがりのいい女を演じた。いつまでもアイツの中で、いい女だったと思って欲しくて、縋りついたり、泣き叫んだりできなかった。

一人きりになってから沸々と怒りが込み上げ、わたしの8年間に對する責任はどうやって取ってくれるんだとか、青春を返せとか、下世話な話、私の時には完ぺきな避妊をしておきながら、どうして

浮気の彼女には避妊しないのだから、いろいろな思いが湧きあがったけれど、ひとしきり怒りが出尽くした後、私は泣いた。

涙は心の傷を癒す作用があると言う。

私は一人きりの部屋で、思い切り泣いた。時には悪態を吐き、時には自分を慰めるように泣いた。

そして、私は実家へ帰ろうと決心した。

高校の時から親友の篠崎美緒が、彼と別れた時の事を思い出す。あの時の美緒は、理由も言わずに心変わりを理由に別れを告げた。最愛の彼に……。

あの時は不幸に見舞われた美緒に同情して、守谷君の気持ちまで考えなかったけれど、今なら彼のショックと悲しみが分かる。私の場合、前兆があったから、それなりに心構えも出来ていたけれど、彼は幸せの絶頂から奈落の底まで落とされたのだ。本当の理由も知らされずに……。

あれから3年以上の時間が過ぎて、彼の心の傷はもう癒えただろうか？

時間はいつも傷ついた者に優しい。

私もいつか、懐かしい思い出として、この8年間の日々を思い出す事が出来るのだろうか？

美緒だつて辛かったのは分かっている。

美緒の性格上、あそこで彼を突き離すことしかできなかったのだらう。

人に頼る事を良しとしないあの性格。ましてや相手が男だと余計にそう思うのは、母親の苦勞を見ているせいなのだらうけれど……最愛の人にまで、頼らないなんて……。

いや、美緒は愛するがゆえに彼を巻き込めなかったのだ。

そして、自分にとって一番つらい道を選んだ。

それが美緒の強さなのだと分かっている。だから、私も友に恥ずかしくない生き方をしなければと、今回、直也との別れの時に思った。取り乱さず、毅然として現実を受け入れよう……せめて彼の前だけでも。

そして私は、泣くだけ泣いて8年間の恋にピリオドを打ち、生まれ故郷に帰って来た。彼と一緒にいたくて一度は諦めた夢を叶えるために。

帰ってきて美緒に連絡した時も、二人で母校の大学祭へ行った時も、美緒は何も言わなかった。だから、その事実を知った時の私の衝撃は、言葉に表せないほどだった。

申し込んでいた養護教諭の臨時採用の依頼がこんなに早く来るとは思わなかった。なんでも妊娠中の養護教諭の急な入院で、なかなか引き受け手がなく、私のところへまわって来たようだった。

連絡を貰った次の日には来てほしいと言われ、私が向かったのはなんと！美緒のところの校区の小学校で、拓都君の通っている学校だった。

私は美緒を驚かせてやろうと思って、虹ヶ丘小学校で臨時採用されたと言う事は連絡しなかった。

しかし、驚かされたのは私の方だった。

どうしてこの小学校に守谷君がいるのよ？！

朝の打ち合わせの時に皆の前で紹介され、「よろしくお願いします」と頭を下げて、顔をあげた時に目に飛び込んできた彼を見て、私は目が飛び出るかと思うほど驚いた。

そんな私と目があった彼の方も驚いている。

これはどう言う事？

この小学校は……拓都君の通っている小学校だ。美緒は知っているのだろうか？

私は朝の打ち合わせが終わるのを待ちかねて、終わるとすぐに守谷君のところへ行った。

「守谷君、どうしてあなたがここにいるのよ？ 美緒は知ってるの？」

教室へ向かう準備をしていた守谷君は、私の顔を見て驚いた顔をした後、溜息を吐いた。

「まさか何も聞いていないんですか？ 拓都は俺のクラスですよ」  
彼は怪訝な眼差しを向けた。そして私は又驚いてしまった。

拓都君の担任だと言うの？ それって……。

「何も聞いてないわよ！ でも、でも、拓都君の担任だったら……」  
美緒に会ったと言う事？ と続けようとしたら、彼は「教室へ行かなきゃならないので」と職員室を出ていった。

遠目に私達のやり取りを見ていた先生達も、担任をしている教室へ行くため出て行ってしまい、職員室の人口密度は一気に下がった。

「本郷先生、守谷先生とお知り合いですか？」

そう訊いてきたのは優しそうな笑顔の教頭だった。

「ええ、大学の時のサークルの後輩です……」

「何かとても驚いていられたようですが……」

「彼がまさかここで先生をしているとは思わなかったものですから

……」

「そうですか。守谷先生はとてもいい先生ですよ。今年3年目ですが、1年生の担任をしていて、保護者にも信頼のある先生です」

教頭ののんびりとした雰囲気、私はホッと息を吐き出したけれど、この朝の守谷君と私のやり取りは、他の先生達の間でセンセーションを巻き起こしていたらしい。

「朝は、子供たちが登校してくる様子を見て、健康観察をしてください。そして、保健室を訪れる子供たちや職員の対応をしながら、去年の資料の控えを見ながら、保健室便り、教育委員会への報告書等の作成をしてください。毎日欠席者等の健康報告が各クラスから集まりますので、データの記録資料も作成してください。それから、校務分掌は養護の青木先生と同じ保健部会に入ってもらいますので、会議等に出てください。分からない事がありましたら、保健主事か私に聞いてください」

教頭と一緒に保健室へ来ると、教頭は去年の資料を出しながら、すらすらと説明した。

私はさっきのシヨックが後を引いているのか、教頭の言葉がすんなり頭に入って来ない。とりあえず去年の資料通りにやればいいのかと、自分なりに理解して「分かりました」とほほ笑んだ。

教頭が保健室を出て行った後、去年の資料を見て溜息が出た。

養護教諭って、保健室で怪我や病気の手当てをするだけじゃないの?!

なんでこんなに作成文書が多いのよ!!

そうこうしている内に、休み時間になると子供たちがたくさんやってくる。最初は驚いた。そんなに体調が悪い子がいるのかと……。

でも、話を聞いてみると、朝の会で保健室に新しい先生が来たと聞いて、私を見に来たのだ。

見世物じゃないっての!!

最初はにこやかに対応していたけれど、子供たちのストレートな好奇心に、ホトホト疲れてしまった。

好奇心旺盛なのは子供たちだけでは無かった。

「本郷先生、保健室はいかがですか？」

そう言っただけで入って来たのは、同じ年頃の女性教諭で、岡本香住とおかもとかすみ言うらしい。彼女は担任を持っていないからか、授業中だと言うのに保健室へやって来た。

「経験がないものですから、何をしたらいいのか戸惑ってしまって

……」

私がそう言うと、彼女はニッコリと笑った。

「焦らなくていいですよ。青木先生はきつちりと資料をまとめていらっしゃる方ですから……私も同じ保健部会に入っているのだから、分からない事があれば聞いてくださいね」

私の事を気にして来てくれたんだと感動して思わず「ありがとうございます」と頭を下げた。

彼女は苦笑しながら「いえいえ」と言い、そして「ところで」と話を変えた。

「本郷先生は、守谷先生とお知合いなんですか？」

その質問を聞いて、何となくわかってしまった。

彼女はこれを訊きたくて来たんだと言う事を……。

「ええ、大学のサークルの後輩なんですよ、守谷先生は……」

私は心の中で、守谷君はどこにいても女性の目を引き付けるんだと溜息を吐いた。

「へえ、守谷先生って、大学の時はどんな感じでした？」  
彼女の好奇心の炎が燃え上がったのを感じた。

「どんな感じって……うーん……今の守谷先生はどんな感じなんですか？ 大学を卒業してから5年ぶりに彼を見たので……」

私は守谷君の事を正直に話していいものかどうか考えながら、今の守谷君の情報を聞いてからにしようと思いついた。

「今の守谷先生ですか？ 真面目で一生懸命で、爽やかで、誰にでも優しく……あんなにイケメンなのに全然気取ってなくて、とてもフレンドリーな人ですね」

な、何？ その完ぺきさ。

「なんだか話聞いてると、パーフェクト過ぎない？」

私は話題のせいか、いつの間にかタメ口になっていた。

「いや、本当にパーフェクトな人ですよ。でもそれが仇あたになって、勘違いしちゃう母親がいたりして、誤解される事もあるんです。本人は仕事に一生懸命なだけなのに……」

勘違いする母親？ どう言う事？

「勘違いとか誤解と違って……どう言う事？」

「去年、守谷先生のクラスの母親が、不登校気味の我が子の事で心配して、何度も守谷先生に電話で相談していたんですよ。守谷先生も一生懸命対応していたら、その母親は守谷先生が自分のために一生懸命になってくれていると思いついて……何度も何度も



電話していたのを、単身赴任していたご主人が、様子のおかしい母親の携帯の履歴を見て、担任と不倫しているって思いこんで、学校へ怒鳴りこんで来たんです。守谷先生は初めての担任で、一生懸命対応しただけなのに、先生の中には色目を使っただんじやないのかとか、モテると思っただんじやないのかと言っ人もいて、気の毒だったんですよ」

私はあまりの話に驚いてすぐに声が出なかった。

守谷君はやはりその容姿のせいで今も苦労しているんだ。あの頃は、寄ってくるなオーラを出していたけど、今はそう言う訳にいかないのだろう。

「へえ〜大変な思いしてるんだねえ。まあ彼はどこへ行ってもモテモテだから……ある意味仕方ないところもあるのかなあ」

私はあの頃の事を思い出して、感慨深く答えた。そして、美緒の事を思い出しかけた時、又興味津々な声で岡本先生が訊いてきた。

「あつ、やっぱり大学の頃もモテモテでした？ 彼女とかいたんですか？」

「そうだね。あの外見なら、モテるでしょ？ でも、あの頃は外見だけでモテただけで、本人は寄ってくる女性がうつつとうしいのか、寄ってくるなオーラを出していて、それでも近づく女性には酷く冷たい態度を取っていたよ。でも今は大人な対応してるんだね。安心した。……彼女とかの話はプライベートだから、本人に訊いて？」

そう、迂闊に彼女の事は言えない。その元カノがこの学校の保護者なんて、言えるはずもない。

それにしても、美緒は守谷君と再会した事、なぜ言ってくれなかったのだろう？

親友だと思っていたのに……。

「え　　！！　女性に冷たい守谷先生なんて想像つかない！　寄ってくるなオーラですか？　信じられない！！」

彼女のいきなりの驚嘆に、私の思考は中断された。

ええっ？　そこまで驚く事？

「ちよつと！　守谷君には私が言ったなんて言わないですよ」

私は慌てた。こんなに驚かせるのなら、言わない方が良かった。

私が言った事を知ったら、どう思うだろう？

「わかっていきます。でも、守谷先生って、彼女の話とか昔の事とか、訊いても妙に話をはぐらかしてしまうから、教えてくれないんですよ」

へえ　この岡本先生って、そんな話を守谷君とできるんだ……親しくないとそこまで突っ込んで訊けないよね……。

「岡本先生って、守谷先生とそんな話する事あるんだね。今、守谷先生って、誰かと付き合ってる感じなの？」

私はそばに座っている岡本先生をもう一度見た。美人と言うほどじゃないけど、はつらつとして普通に好感のもてる女性だ。もしかして、守谷君と付き合っているとか？

それで、彼の事知りたくて探りに来たのかな？

私は、守谷君を忘れたと言いながら、苦しい表情をしていた美緒の顔を思い出した。

美緒、仕方ないよ。もう時間が経ち過ぎて、お互いに違う道を歩んでるんだから……。

「守谷先生が誰かと付き合ってるって話は聞いた事無いんだけど……実は、この学校の先生といい感じなんです。私の友達なんですけど、とてもいい子なんですよ。二人で出掛けたりしてるみたいなんですけど、まだ、付き合っていないらしくて……でも、周りから見ても、

とてもいい感じなんですよ」

そうなんだ……二人で出掛けたりする相手はいるんだ。

そつだよ、守谷君なら選り取り見取りだろうね。

美緒に対して仕方ないと思いつつも、この現実が少し辛かった。

美緒がまだ想い続けている事は、何となく分かっているけれど、

早く現実を受け入れて、前を向いて進んで欲しい。

私はその夜、美緒に電話をした。

美緒が私に言えなかったのは、余計な心配をかけたくなかったからだろうとは、分かっていた。

それでも、チクリと言わないと気が済まない。

それに、今の守谷君の事を考えると、美緒も早く他の人の方を向いて欲しいから、心を鬼にしてキツイ事を言おうと決めていた。

もう過去を追いかけるのじゃ無く、新しい未来を見て欲しい。

そして、苦しんだであろう守谷君も、幸せになつてほしいもの。

二人ともが苦しい過去の呪縛から逃れ、それぞれに幸せになつてほしい。

電話を終えて、私は大きく息を吐き出した。

分かつてはいたけれど、美緒はやはり守谷君の事が忘れられなくて、別れの本当の理由まで話そうかなんて言いだして、驚いた。

もう遅いのよ。彼にはいい雰囲気彼女がいるらしいから、いくら美緒でも邪魔しちゃいけないよ。

今更別れの理由を言つて、また彼を苦しめて、なんになると言うの？

もう、守谷君をそつとおいてあげて欲しい。

やっぱり今の私は、振られた方に味方してしまうのかな……。

美緒、ごめんね。



#47：本郷美鈴の苦悩の日々〈前編〉【美鈴視点】（後書き）

養護教諭の仕事内容については、ネットなどで調べた程度ですのであまり突っ込まないでくださいね。  
よろしくお願いします。

#48：本郷美鈴の苦悩の日々〈中編〉【美鈴視点】（前書き）

お待たせしました。

美鈴視点がなかなか終わらなくて、中編まで作る事にしました。

美緒視点を楽しみにして頂いている方、すいません。

もう少し美鈴視点にお付き合ってください。

どうぞよろしく願います。

#48：本郷美鈴の苦悩の日々〈中編〉【美鈴視点】

養護教諭としての日々は、初めての事ばかりで戸惑いながらも、何とか必死で仕事をこなしていった。

あれから守谷君と話す機会も無く挨拶程度だったけれど、時々見かける子供達とのやり取りや、授業の様子など、私が想像していたよりもずっと、彼は立派に先生をしていた。

皆が褒めるはずだ……。

そう言えば、美緒の所の拓都君を見たのは、私が採用されて一週間程経った頃だった。この頃はまだ、新しい先生への興味本位で保健室へやって来る子供がいた頃だ。

私は保健室へ来た子供の胸に付けた名札の名前と顔を必ず確認する。少しでも早く全校生徒の名前と顔を覚えたくかったから。

最近は校外では名札を付けないのだと言う。知らない人に名前と呼ばれると、自分の事を知っている人だと思って、子供が付いて行く可能性があるからだとか……なんだか嫌な時代になったなあと思いつながら、今の私には、この名札がとても大切な子供達とのコミュニケーションの元なのだと思う。

この名札のおかげで、拓都君を見つけた。保健室へ遊びに来た中に彼はいた。

平仮名で書かれた名札の名前『しのぎ たくと』を目にした時、私はマジマジとその子を見てしまった。思い返せば、拓都君を見たのは本当に小さい頃だ。名札が無かったら、気付きもしなかっただろう。守谷君がお姉さんの子供だと分からなかったのも頷ける。

拓都君は誰に似ているのだろうか？ 美緒のお姉さんは独身の頃から見ていたから良く覚えているけど、お義兄さんの方は、殆ど見た事がなかった。もしかすると拓都君は父親似なのかも知れない。

拓都君に『先生は拓都君のママの友達だよ』と言うと嬉しそうな

笑顔で『ホントなの？』と訊いてきた。私はニツコリと笑って『本当だよ。帰ったらママに聞いてみてね』と答えた。すると元気に『うん』と返って来た。

可愛い。美緒が一生懸命育てた拓都君の素直な笑顔に、こちらまで笑顔になった。

私はそんな拓都君を見ながら、この素直な拓都君と美緒が、本当の意味で幸せになれるよう、祈らずにいられなかった。

初日に私と守谷君の関係を探りに来た岡本先生は、あれからも時々保健室へやってきて、お喋りするようになった。今では学校で一番気心の知れた相手となり、初日に守谷君に話しかけた事で、女の先生から睨まれていたみたいだったけれど、彼女のおかげで誤解も解けた。

この学校の独身の先生達は結構仲が良くて、グループで一緒に遊んだりしていると言う。そんな事も岡本先生から聞かされた。男性4人、女性3人の7人で、その中に守谷君もいい感じだと言う彼女もいるらしい。「本郷先生が入ってくれたら男女同数になるから、丁度良いですね」とその独身グループに誘われた。なんでも、花見とかキャンプとかハイキングとか、アウトドアなグループで、今度は年末からスキーに行くらしい。

守谷君もそんな遊び仲間がいて、いい感じの彼女がいて、もう過去の事は吹っ切れているのかもしれない。

良かった……と、一人安堵の溜息を吐いた。

しかし、岡本先生の友達で、守谷君といい感じだと言う先生を教えてもらった時、その安堵が苦悩に変わった。

岡本先生の友達は大原愛と言う先生で、その姿を見て驚いた。

美緒に似てるのだ。笑顔が特に。



結局守谷君も、どこかで美緒を追い求めていたのだろうか？  
似てるから親しくしていたのだろうか？

美緒の代りなんて言う気持ちなら、皆が不幸だ。

でも、その事は誰にも言えない。今更守谷君に訊くことさえできない。

ましてや美緒になんか言えるはずもない。

私は一人胸を痛めることしかできなかった。

クリスマスに近づいたある日、守谷君と仲のいい男性教諭が声をかけてきた。

「本郷先生、守谷先生の大学の先輩なんだって？」

そんな風に声をかけてきたこの先生は、たしか広瀬先生だ。

それにしても、今頃どうしてそんなこと訊くかな？

もうその事実是最初の内に職員中に広まっているはずだ。

「はい、そうですけど……それが何か？」

「いや、その事は別に関係ないんですが、終業式の日がクリスマスイブで金曜日でしょうか？ 独身で負け組の先生達とクリスマスパーティーをするんですよ。本郷先生も良かったら来ませんか？ もちろん守谷先生も来ますから……」

負け組って……そりゃ〜私は振られたばかりですよ。

「それに参加すると言う事は、負け組を認める事になりますよね？ 別に守谷先生が参加しようが関係ないですけど……」

私がそう言うと、その男性教諭は慌てました。

「いやいや、負け組って言葉はダメですね。独身で自由を謳歌して

いる人の集まりですよ。別に合コンとかじゃないですから、気楽に参加してください。この小学校の先生だけじゃなくて、違う学校の先生にも声をかけているので、たくさん集まりますし、いろいろ話も聞けると思いますよ。それに守谷先生は、女の先生の参加率を上げるための秘密兵器だからね」

守谷君は秘密兵器なんかじゃ無く、ミエミエの兵器だよっ。

ニヤリと笑う目の前の男性教諭を見ながら、心の中で悪態を吐いた。

「大学のサークルのコンパもそうでした。守谷君が参加すると女性が集まるけど、男性は来なくなりましたけどね」

私もクスリと笑って、昔の思い出を語った。

「そうそう、守谷先生が効くのは女性だけですからね。そのために本郷先生は男性を集めるために是非参加して頂かないと！」

「お上手ですね？ 今年のクリスマスイブは残念ながら予定が空いていますので、喜んで参加させて頂きます」

おだてているだけだと分かっても、つい嬉しくなって参加に同意してしまった。気分転換にもいい機会かもしれない。

\*\*\*\*\*

12月24日、2学期の終業式の日。今年はクリスマスイブの今日は金曜日だった。勝ち組には最高の曜日巡りだけれど、負け組にはどうでもいいことだ。

私はそんな事を考えながらフツと笑った。今日のクリスマスパーティーに誘った時の広瀬先生の情けない慌てた顔を思い出したからだ。

誰が言い出したか知らないけど、恋人がいる事が勝ち組で、いな

い事が負け組になるなんて……別にどうでもいいけど。

明日から冬休みと言う事もあり、今日がクリスマススイブと言う事もあり、子供達はどこかそわそわした感じだった。子供達の会話には、今日渡される成績表への心配と、クリスマスプレゼントへの期待が感じられた。まだサンタクロースを信じているような話をしていいるのを聞くと、なんだかホツとする。子供達にはできるだけ長くサンタクロースの存在を信じていて欲しい。

ふと、拓都君の事を思い出した。あの素直な子なら、きっとサンタクロースを信じているだろう。どんなプレゼントをお願いしたのだろう……今時の子供の欲しがるものが思いつかないけれど。

美緒と二人でクリスマスを祝うのだろうか？

子供がいるから、ケーキも食べるのだろうか？

二人きりでケーキを食べている姿を思い浮かべて、切なくなつた。やっぱり、美緒が結婚して、家族が増える方が、拓都君にとってもいいことだと思うよ。

美緒が守谷君の事を吹っ切れたら、一緒に婚活しよう。

私は心の中でひそかに決意した。

その日仕事を終え、一度家に帰ってから、会場へ向かう事になつた。

クリスマスパーティーってどんな服を着ていけばいいんだろう？

実のところ、今までクリスマスは彼と過ごしてきたので、このようなパーティーに出るのは初めてだった。パーティーじゃないけれど、集まって飲むと言えば、会社の忘年会とか歓送迎会ぐらいで、どちらかと言うとお座敷の宴会と言う感じで……。

事前に岡本さんにリサーチしてみると、女性は殆どが華やかなドレスやワンピースらしい。

ドレスって……結婚式の披露宴に出席するようならもりのレベルなのだろうか？

結局、OL時代に同僚の結婚式に出席した時に着たワンピースにした。

パーティの会場は広瀬先生の知人がやっていると言うレストランの地下にあるパーティールームを借りていた。50人ぐらいまでなら対応できるパーティールームらしく、20人ちよつとの人数だと広いぐらいだった。

結婚式の二次会などによく使われると言うこのパーティールームは、いろいろな形式のパーティに対応しているらしく、今回は立食のビュッフェ形式だった。

なぜこの人数で立食？ と思つたら、広瀬先生曰く「着席形式だと、誰が守谷先生の傍に座るかで揉めるだろ？」との事。私は驚いて守谷君ならありえるかもと鵜呑みしかけたら、岡本先生に「広瀬先生のいい加減な説明、信じちゃダメよ」と笑われた。

虹ヶ丘小学校からは例の独身グループの8人（私を入れて）で、他の学校の先生達も合わせると毎年20人前後が集まるらしい。守谷先生が参加するせいか、若干女性の方が多い。

午後7時からと言う事で、会場のレストランに着くともう既に来ている人たちがいて、皆親しく話をしている。

全員集まったところで、今回初めて参加した人の紹介と言う事で、私と他の小学校の新採の女性教諭が皆の前で、よろしくと頭を下げた。大学出たての初々しいその新入りの彼女は、守谷君にポーと見惚れていた。

今の守谷君は大学時代と違って寄るなオーラが無い分、免疫がない子には危ないかもしれない。さすがに毎年参加している他の小学校の女性教諭達は、普段守谷君に会えないからか、ここぞとばかりに守谷君の傍に集まっていた。

私はその様子を見て、サークルの時のコンパを思い出して、心の中で苦笑する。

「愛ちゃん、守谷先生の傍に行かなくていいの？」

岡本先生が愛先生に話しかけているけれど、愛先生は、守谷君の傍に行くのに気後れするのか首を横に振ると、私達と一緒に少し離れた場所から、守谷君を囲む賑やかな一団を見つめていた。

愛先生つて……控えめな人なんだな……こんなところは美緒と似てるのかな。

私は大学時代、美緒と彼がキャンパス内ではあまり一緒にいなかった事を思い出す。彼のファンが沢山いたから、美緒も気後れしていたみたいで、サークルの先輩後輩と言う立場を貫いていた。

とりあえず乾杯をしようと言う事になり、皆が中心の料理と飲み物が置いてあるテーブルの周りに集まり、広瀬先生の「カンパイ！」の声に続いて声をあげながら自分の周りにいる人達とグラスを合わせた。

全体に間接照明のせいかわ暗い室内にあつて、料理のテーブルだけはスポットライトを当てられ、美味しそうな料理が並ぶ。

「このレストラン、結構おいしいから楽しみだったのよ」

そう言いながら岡本先生が、自分のプレートにお料理を取って行く。私も愛先生もその後が続いた。もう一人いる虹ヶ丘小学校の女の先生は、別の小学校に仲の良い先生がいるのか、その先生と一緒にいるようだ。

あちこちにお料理をつまみながら歓談する小さな輪ができ、私達も今日の料理の批評をしながら、食べる事に専念していた。

その時、違う小学校の男の先生二人が近づいてきて声をかけてきた。

「あつ、辻岡先生、吉田先生、お久しぶりです」

岡本先生が笑顔で挨拶を返している。愛先生も「お久しぶりです」と返している。私は知らない先生だったので、会釈をすると「本郷先生って、守谷先生の大学の先輩なんだって？」と一人の先生が訊いてきた。

又この話題か……と思いつつも、ニツコリ笑って、「そうです。同じサークルだったんですよ」と答えた。そして、訊いてきた先生は辻岡先生と言って、去年まで虹ヶ丘小学校にいた先生だと岡本先生が教えてくれた。

「僕もM大なんですよ。守谷先生とは入れ違いでしたけど……」

「えっ？　と言う事は、私がM大にいた時、辻岡先生もM大にいらつしゃったんですか？」

「そう言う事になりますね。こんな美人がいたのに気付かなかつたなんて、不覚でした」

「お上手ですね。先生方って皆さん口がうまいですねえ」

私が笑って返すと、「いやいや、正直者なだけですよ」とさらりと笑った。そんな私達を見て、岡本先生達がクスクスと笑う。

「辻岡先生って、相変わらずですね」

今まで聞き役に回っていた愛先生がクスクス笑いながら言う。

「相変わらずいい男ってか？　守谷先生のように」

辻岡先生は愛先生を見てニヤリと笑った。

ああ、この人も愛先生と守谷君の事を知ってるんだ。

「守谷先生って、あんなにイケメンなのに、毎年クリスマスイブにこんなパーティーに参加してるなんて不思議ですよね」

もう一人の吉田先生と言う男の先生が、愛先生と守谷先生の事を知らないのか、のんきな疑問を口にした。

「ああ、守谷先生なら、この上の常連でもおかしくないのにな」

辻岡先生が上を指差しながら、苦笑した。この上と言うのは1階のレストランの事だ。クリスマススイブの今日は、レストランは見事にカップルで溢れていた。

地下では負け犬のパーティと言う訳だ。

私は広瀬先生の負け犬発言を思い出して、又心の中で苦笑していた。

「広瀬先生が、守谷先生は女の先生の参加率を上げるための秘密兵器だって言ってたから、毎年クリスマスパーティは強制参加でしょうね」

「広瀬先生、そんなこと言ってるのか？ 秘密兵器って……バレーバレーな兵器だけだな……でも、愛先生、それでいいのか？」

私の言葉に辻岡先生は、私が思った事と同じような反応を示し、最後に愛先生に意味深に問いかけた。その言葉で、皆が愛先生の方を見る。愛先生は頬を染めて俯き「良いも悪いも、そんなんじゃないですから……」と答えた。

「またまた、愛先生は恥ずかしがりなんだから……守谷先生も罪な男だねえ」

辻岡先生はそう言ってまた苦笑しながら、温かい眼差しを愛先生に向けている。

「そうよ、守谷先生に群がる女性を蹴散らす勢いで積極的に行かなくちゃ！ だれにも遠慮しなくていいんだから。ねえ、本郷先生？」

ええっ？ 私？ 私に振らないでよ。

同意を期待して私を見つめる岡本先生に、愛先生が「香住ちゃん  
つたら……本郷先生もそんなこと言われても困るでしょう」と諫め  
ている。

それにしても、愛先生って皆に愛されているんだと思う。皆が  
愛先生と守谷君が上手くいくように、温かく見守っている感じで…  
…。

愛先生にはこんなに味方がいるのに、私まで美緒の恋を応援しな  
いなんて言って……急に美緒が不憫になってしまったのだった。



#49：本郷美鈴の苦悩の日々〈後編〉【美鈴視点】（前書き）

お待たせしました。

美鈴視点の後編です。

また長くなってしまうましたが、よろしく願います。

#49：本郷美鈴の苦悩の日々〈後編〉 【美鈴視点】

クリスマスパーティーは、飲んで食べて、いろいろな人たちともお喋りをして過ぎていく。

私は今臨時採用だけれど、いつかは本採用されて、この仲間に堂々と入りたい。皆何も言わないけれど、やっぱり自分だけ違うんだと言う卑屈な感情が心の片隅にあって、心底楽しめていない気がする。

それでも今日参加して良かったと思う。参加者の中には私と同じように、臨時採用として働きながら教員採用試験にチャレンジして、晴れて教師になった人がいて、働きながら試験勉強をする大変さや、心構え、勉強のコツなどを教えてくれた。

やはり、働きながら試験勉強は、想像以上に大変だと聞き、気を引き締めなければと改めて思いなおした。

婚活なんて言ってる場合じゃないって！

それにしても、今日初めてあった先生達殆どに「守谷先生の先輩なんだって？」と訊かれ、辟易とした。守谷君、いつたいあんたは何なのよ！ と言いたくなるぐらい、皆の気になる存在らしい。特に女性からは大学時代の守谷君の質問が多かった。芸能人じゃあるまいし……。

「守谷先生のおかげで、今日は沢山のひと話が弾みましたよ」

守谷君と広瀬先生が私達の所へ来た時、私はニツコリと笑って守谷君にそう言った。

このくらいの嫌味を言ったって許されるだろうと思うのに、肝心の守谷君にはその嫌味が伝わっていなくて、「えっ？」と驚いた表情をした。

「私、守谷先生のマナージャーとでも勘違いされたのか、大学時代の守谷先生の事を訊かれまくったんですよ」

自覚の無い守谷君に、ストレートに説明すると、彼は途端に顔をしかめた。

「それで本郷先生、何を言っただんです？」

「事実をありのままに……大学時代もモテモテで、でも女性には寄ってくるなオーラを出していたって……それ以上のプライベートは知らないしねえ」

私は意味深にニヤリと笑って返してやった。このくらいの意趣返しは可愛いものだろう。

彼は不本意そうな顔をして「ご迷惑かけたみたいで、すみません」と謝り、それ以上何も云わなかった。

岡本先生がさりげなく愛先生を守谷先生の隣へと押し出す。愛先生は遠慮がちに守谷君と話をしている。その様子を見て、先程守谷君達が傍に来る前の愛先生と岡本先生の会話を思い出した。

「香住ちゃん、他の先生の前で私と守谷先生が関係あるみたいに言わないで。そんなんじゃないんだから」

愛先生が岡本先生に釘を刺した。

「愛ちゃん、照れなくていいから……それに、守谷先生はモテモテだから、違う学校の先生には少し牽制しておかないと、ねっ」

岡本先生は、悪びれずにそんな事を言う。

「牽制って……守谷先生に迷惑かける事だけはやめてね。本当にお願いだから……」

愛先生は困った顔をして小さく溜息を吐いた。

なんだ……二人がいい感じだなんて、岡本先生の先走りだったの？

もしかしたら、岡本先生が友達の恋を応援するあまり、周りを巻き込んでいるのかもしれない。

私は、少し恥ずかしそうに頬をつつすらと染めて、遠慮がちに守谷君と話をしている愛先生を目の端に捉えて、そんな事を思っていた。

そして、改めて会話をする二人を見て、一瞬大学時代の美緒と守谷君の姿がダブった。

やはり似ていると思った。

守谷君は美緒に似ている愛先生をどんな気持ちで見ているのだろうか？

守谷君の態度は、他の先生に対するものとそれほど変わりはない。二人がいい雰囲気だなんて思えない。

彼らが去った後、岡本先生が「守谷先生、照れてるのか、なんだか素っ気無かったね」と言うと、愛先生は少し辛そうな表情をした。素っ気なかったって……いつもはどんな感じなのだろう。

二人が良い感じだと言うのを、私は見た事がないから分からないけど、今日の守谷君の態度はいつもと違うらしい。まあ、今日は周りに人が多いから、仕方ないのかな。

「本郷先生、少しお訊きしてもいいですか？」

いきなり愛先生が私を見て微笑んだ。私は戸惑いながらも「ええ、何？」と首をかしげた。

「あの……守谷先生は以前、『みお』という名前の女性と付き合っていますでしたか？」

えっ？

なに……どうして？

どうして知ってるの？

私はしばし言葉が出なくて、驚いた表情がきつと愛先生の質問を

肯定してしまったのだろう。

「やっぱり、そうなんですネ」

愛先生はそう言って、目を伏せた。

「愛ちゃん、どう言う事？ どうしてそんな事、知ってるの？」

岡本先生が愛先生の言葉に驚いて、問い詰めるように愛先生に向き合った。

「あ、あの……守谷先生に間違えてそう呼びかけられた事があつて……」

「えっ?!」

私と岡本先生は、同時に声をあげた。

やっぱり、守谷君、愛先生に美緒を重ねていたの？

「それは……いつ頃？」

「ほら、今年の夏休みの終わりに、皆で飲みに行つたでしょう？ あの時、守谷先生、いつもと違って酔いつぶれるまで飲んでいたじゃない？ 皆が私に眠ってる守谷先生を起こせつて言うから、私、守谷先生を揺り起してたら、気付いた守谷先生が私の腕を掴んで『みお』って呼んだのよ。私が何も言えずにいたら、守谷先生が我に返つて、夢を見て寝ぼけたつて謝ってくれたんだけど、その時呼んだ名前については何も言わなかつたし、私も何も訊けなくて……」

「愛ちゃん、そんな話、何もしてなかつたじゃない……」

岡本先生は、何も言ってくれなかつた事にシヨックを受けているようだった。

「ごめん。香住ちゃんが一生懸命応援してくれてるの知ってたし、私も少しい気になってたから、ちよつとショックで……余計に言えなかったの。ごめんね」

「でも……その時間違えて呼んだのが元カノの名前だとしても、大学生の頃付き合ってた彼女の名前でしょ？ 私、守谷先生が新任の時から知っているけど、最初から彼女はいないって言ってたし、途中で彼女ができた雰囲気もなかったよ。それよりも、守谷先生って誰に対しても優しいしフレンドリーだし、感じが良かったけど、やっぱりどこか女性に対して壁を作ってるようなところはあったの。」

それが去年愛ちゃんが赴任して来て、愛ちゃんに対する守谷先生の態度が今までと違ったのよ。それはどの先生も感じたと思う。守谷先生が先生になってから3年近く経ってるんだし、たまたま元カノの夢を見て寝ぼけて呼んだだけで、心配するほどの事じゃないんじゃないかな？」

「うん……そうかもしれないけど……私、いい気になってたなって思ってた……」

「そんな事無いよ。今までいろいろな女の先生が守谷先生を誘ったけど、皆断ってたのに、愛ちゃんの誘いには応じて二人で出掛けたでしょう？ 愛ちゃんは特別なんだって！」

「そんな事無いよ。守谷先生からは誘われた事無いし……やっぱり香住ちゃんの思い違いだよ」

「守谷先生って真面目だから、同じ学校の同僚の女性に近づくのをためらってるのかも知れないよ。それに、愛ちゃん、自分の気持ちを伝えてないんでしょう？ だから、守谷先生も愛ちゃんの気持ちかわからなくて余計に慎重になってるのかもしれないよ」

私は二人の会話を聞きながら、守谷君が本気で好きになつたら、ためらつたりしないだろうかと考えていた。たとえ同僚でも、仕事とプライベートは彼なら分けられるだろう。美緒と付き合っていたときだって、大学では二人が付き合っている事はほとんど知られていなかった。

岡本先生があんな風に煽<sup>あお</sup>るから、愛先生は現実以上に期待してしまっているのじゃないだろうか？

でも……愛先生の誘いに応じて二人で出掛けたりするのは、守谷君もその気があるのか……。

それに、愛先生にだけ態度が違うって……、まさか、愛先生に美緒を重ねてるって事無いよね？

私は胸の奥で何か苦いものを感じた。

目の前で恋に戸惑う愛先生を見ているのが辛くなつた。

「ねえ、本郷先生？」

私は二人の話を聞きながら考え事をしていたので、いきなり岡本先生に名前を呼ばれて慌てた。

「なに？」

「守谷先生の大学時代の彼女とは、守谷先生から申し込んだのか、彼女の方から申し込んだのか、知っていますか？」

えっ？

そんな事、きいてどうする？

「さあ、そこまではわからないけど……どうして？」

「守谷先生って、自分から告るタイプなのか、相手に告らせるタイプなのか……どうかなと思って……愛ちゃんも、自分の気持ちを伝

えたらいいと思って……」

「香住ちゃん！ 本当に、もういいから……本郷先生もすいません。変な事ばかり訊いて……」

愛先生は、岡本先生にくぎを刺すようにきつく言うのと、私に向かって謝った。私は首を横に振って「何とも思っただけから」と彼女を安心させるために微笑んだ。

岡本先生はいつにない愛先生の強い口調に、ショックを受けたのか、落ち込んだような顔をしている。

私は何となく岡本先生の気持ちができるような気がした。

自分の友達が、あのモテモテの守谷君の彼女になるかもしれない……それは他人ごとなのに、友達と言うだけで誇らしいような自慢な様な嬉しさがあるのだ。

そして、相手が誰であれ、友達の恋が上手くいって欲しい。友達の幸せな笑顔が見たい。そんな気持ちは今の私だつてあるもの。

それにしても、岡本先生がここまで自信を持って愛先生の背中を押すのは、守谷君の態度に愛先生への想いを感じたと言う事なのだろう。

それでも当事者の愛先生は、そこまで自惚れていないと言う事か……。

彼女は名前を呼び間違えた守谷君に何かを感じたのかもしれない。いったい守谷君はどう思っているのか……。

愛先生の誘いに応じて二人で出掛けるなんて……まるでデートだ。それなら、期待してしまってもおかしくない。今まで誰の誘いにも応じなかったのなら余計に。愛先生がいい気になっていたと言うのも頷ける。

守谷君、美緒が忘れられなくて、愛先生の誘いに乗ってしまったの？

それとも、忘れようとして、誘いに乗ったの？



その後、一人トイレへ行った帰り、廊下で守谷君とばったり会った。彼を見た途端、先程の愛先生と岡本先生の会話を思い出したからか、思わず睨んでしまった。

全ての元凶はこの男だ。

「あのね、守谷君」

私は先程までの同僚としての話し方なんて飛んでしまい、ちょっと説教してやらねばと先輩口調で話しかけた。

「あつ、本郷さん、丁度いい所で会った。本郷さんにお願ひがあるんです」

守谷君は私の睨みなど気付きもしないのか、いきなり彼も後輩口調で切り出した。彼の勢いの方が勝っていたのか、私の中の怒りはすぐに霧散して、彼のお願ひが気になった。

彼のお願ひと言うのは、このパーティの後で訊きたい事があるので時間を取ってほしいと言う事だった。とりあえず駅前夜の12時までやっていると言う喫茶店で落ち合う事になった。終わった後、一緒に行けばいいのだけれど、又余計な誤解を招きかねないと思い、絶対他の人に知られないようにと釘をさしておいた。

それにしても、訊きたい事ってなんだろう？

それを尋ねたら、その時に言いますと返され、しつこく訊けなかった。

やっぱり、美緒の事だろうか？ って、それ以外に考えられない。私の頭の中はいろいろな情報が絡み合って、フリーズしそっくうだった。

クリスマスパーティは2時間で終わり、午後9時には解散となったが、その後二次会のカラオケへと流れるのがいつものパターンら

しい。

二次会の誘いを用事があるからと断れば、クリスマススイブの夜の事、変な風に誤解されたようだったけれど、そんな事は構っていない。誤解されたおかげで、すんなり帰してもらえて良かったと、喫茶店へ向かいながら安堵の息を吐いた。

守谷君は抜け出せただろうかと心配しながら喫茶店に着くと、守谷君がもう来ていて驚いた。

「終わる前に抜け出して来ました。最後までいたら、抜け出すチャンスないから……」

驚く私に彼はそう言って苦笑した。

ああ、女性達の残念の悲鳴が……愛先生もきつと残念がつてるだろうな。本当の事が知られたら、きつと恨まれるだろう。でも今はそんな事より……。

「守谷君、訊きたい事って？」

私は守谷君の前の席に座り、注文した紅茶を一口飲んだところで本題に入った。

私が今一番気になっているのは、彼の本音だった。

愛先生の事が好きなの？ それとも美緒の事が忘れられないの？ それとも……。

「ああ、拓都の事なんですけど……」

「拓都君？」

「拓都は誰の子供なんですか？」

私は絶句した。あまりに想定外の質問に、驚くことしかできなかった。

これは、真実を言ってもいいのだろうか？

守谷君は担任として訊いているのだろうか？

「そんな事は美緒に訊いて」

やっぱり私の口からは言えない。

「美緒から言ってくれのを待ってたんですけど……担任としては必要以上のプライベートは訊けないから」

「どうして、知りたいの？」

彼は私の質問にしばらく逡巡した後、私を真っ直ぐに見た。

「拓都は美緒のお姉さんの子供だと言うのは本当ですか？」

「えっ？ どうしてそれを……」

私は思わず肯定を意味する言葉を発していた。目の前の彼は、やっぱりと言う表情をした。

私は自分の失敗にすぐに自分の口を手でふさいだけれど、時すでに遅し……けれど彼は安心したような顔をしている。

「それで、やっぱり拓都のご両親は亡くなったんですか？」

「ええ」

私はここまで来たら覚悟を決めて頷いた。

「じゃあ、美緒が拓都の面倒をみる事になった時、美緒が付き合っていた奴は美緒を突き離れたんですか？」

ええっ？

何を言ってるの？ 守谷君。

「何を……」

「聞いたんですよ。美緒がK市にいる時に友達だった人の子供が俺のクラスに転校して来て、その人から美緒は母子家庭でとても苦労していたって……独身でまだ若い美緒が、一人で子育てするなんて……どうして付き合ってたのにその人は美緒と結婚しなかったんですか？ 拓都がいるからですか？ 結婚して二人ならそこまで苦労しなかっただろうに……俺なら……」

「ちょ、ちょっと待ってよ、守谷君。何か勘違いしていない？」

「勘違い？ 美緒は俺と別れた後に、同じ職場の奴と付き合ってたんでしょ？」

「はあ？ 美緒が付き合ってたのは、守谷君以外にいないわよ」

あっ……そうだった。

美緒は、別の人が好きになったと言って別れたんだった。

でも、どうしてこんな事、訊くの？

「えっ？ 美緒が好きになった奴とは、付き合わなかったんですか？」

ああ……どう答えたらいいものか……

それより、肝心なのは守谷君の気持ちよ。

「美緒の事より、守谷君はどうなのよ。愛先生といい感じだったって聞いているわよ」

守谷君は表情をこわばらせた。そして私から視線を外して彷徨わせた。

「愛先生とは、皆で遊びに行ったりする仲間ですけど、それだけですよ」

「本当に？ 二人でデートしてるって聞いてるけど？」

「デートって……バスケの試合を見に行っただけです。俺は中学高校とバスケットをしてたし、愛先生も高校大学と男子バスケットのマナージャーをしてたらしくて……それで良く話をして、話の流れで愛先生の大学のバスケの試合を見に行く事になって……最初は皆で行くと思ってたから、待ち合わせの場所で二人だけだと知って驚いたくらいで……」

「でも、その後も二人で出掛けてたんでしょう？」

「まあ……でも、バスケの試合だけです。それに、それも今は断つてるし……」

守谷君はどこかバツが悪そうに話す。

「ねえ、愛先生って美緒に似てるよね？ だから？」

「本郷さん、もう堪忍してくださいよ。愛先生とはただの同僚なんだから……」

「守谷君、あなたはそれでいいかもしれないけど、周りの皆は守谷君と愛先生がいい感じで、上手くいけばいいと見守っているし、岡本先生なんか守谷君が愛先生を好きだと思っ込んで、一生懸命愛先生の背中を押してるのよ。それに、愛先生自身もどこか期待してると思うし……それは、今まで周りの皆に冷やかされても否定してこなかったからじゃないの？ それとも、本当は愛先生の事が好きなの？」

私の問いかけに、守谷君は驚いたような顔をしたけれど、その後俯いて大きく嘆息すると、真剣な表情になって私を見た。

「本郷さん。正直なところ、一時期は皆が思うように愛先生とそんな仲になってもいいかなって思った事もありました。でも、心のどこかで、美緒と愛先生を重ねているだけだって気付いていたから、自分から積極的になる事も出来なくて……愛先生の気持ちも何となく気付いていたけど、彼女が何も言っただけでこないから断る事も出来ないし、最近ではできるだけ二人きりで話さないようにしてるんだけど……」

愛先生がそんなじゃないって、守谷君との事を否定していたのは、最近の守谷君の態度に何かを感じていたからなんだ。でも、周りの皆にとっては、二人はいい感じだと思っただけで、守谷君が否定しない限り、軌道修正されないだろう。

愛先生の事を思うと辛くなる。

まだまだ守谷君に愛先生の事で言いたい事はあるけれど、本人も分かっているだろうし……。

私はもうこれ以上愛先生の事を言うのは止める事にした。

「そう、それなら、周りの皆にもはっきりと言って、誤解を解かないとだめだと思っよ。そうじゃないと愛先生が可哀そう過ぎるもの」  
特に岡本先生には分かってもらわないと、いつまでも愛先生の背中を押し続けるだろうし……。

「そうですね、誤解を解くように頑張ってみます。それより、さっき言っただけで美緒が付き合ったのは俺だけだって言うのは、本当なんですか？」

「守谷君、それを訊いてどうするの？　あなた達が別れてもう3年以上の年月が経って、美緒には拓都君がいるし……」

「分かっています。でも……美緒と拓都の力になりたいんです。今

更だけど……美緒はまだその男の事が忘れられないのかもしれないけど……今、美緒を助けてあげられる男性が傍にいないのなら、俺が何か力になれたらって……」

「美緒は別の人が好きになつたつて、あなたを振つてるんだよ。それでも許せるの？」

私の質問に又驚いた顔をした守谷君は、目を伏せて何かを考えているようだった。

「許すも何も、今更ですよ。再会してから今まで、少しづつ今の美緒の事を知るようになって、拓都の子育ても頑張っているのも知ってるし、仕事も、家の事も、それからクラス役員まで頑張ってくれているのをずっと見て来たんです。でも、美緒は肝心な事は何も話してくれないし、拓都がだれの子供なのかも分からなくて、ずっといろいろ考えてきました。拓都がお姉さんの子供だつて知らなかったから、拓都の父親の事を忘れられないのだろうかとか思つて、俺は近づいたらいけないと思つていました。だけど、お姉さんの子供だと分かつたら、美緒が付き合つていた奴は、美緒が一番大変な時に助けてやらなかつたのかと思つと悔しくて……でも、付き合つていないのなら、仕方なかつたんですね。お姉さんが亡くなったのは、付き合う前だつたんですか？」

守谷君は何か吹っ切れたように、勢い込んで話し続けた。

なんだ、二人とも思い合つてるんじゃないの。

でも今はそれは言わない方がいいだろう。お互いの気持ちは自分で伝えあわなきゃ、また変に誤解が生じてしまつては、元も子もないもの。

その代わり、彼の誤解だけは解いてあげよう。それは、美緒に守谷君を諦めるよう強く言つた事への、せめてもの罪滅ぼしかな？

今の守谷君なら、美緒が彼を巻き込みたくなくて嘘を言つて別れ

た事も、許せるだろう。

美緒が諦めてしまう前に行動に移しなさいと言っておかなくては。愛先生、ごめんね。あの二人の間には、やっぱり誰も入り込めないみたいだよ。

私は、心の中で愛先生に手を合わせながら、あの頃の幸せそうな美緒の笑顔を、脳裏に思い描いていた。



#49：本郷美鈴の苦悩の日々〈後編〉【美鈴視点】（後書き）

いよいよお話は、美緒の知らぬ間に大きく動き出しました。  
次回は又美緒視点に戻ります。

#50：クリスマスの朝（前書き）

お待たせしました。

又美緒視点に戻ってきました。

いよいよ、クライマックス直前！

## #50：クリスマスの朝

12月25日土曜日午前6時。電波時計は正確に時間を刻み、いつもの起床時間にアラームを鳴らす。

クリスマスの朝は、いつもの朝と同じように始まった。カーテンの隙間から見える外はまだ暗くて、冷たい朝の空気に、布団から出るのをためらわせる。アラームを止めるために布団から出した手が、枕元の携帯を掴んで目の前にかざした。

やっぱり何も来ていない。

私は小さく息を吐くと、携帯を放り出して、又布団の中に手をひっこめた。

今日は土曜日だから、もう少し寝ていよう。

そう自分に言い訳をすると、温かい布団の中で目を閉じた。昨夜はなかなか眠れなくて、結局3時ごろまで寝付けなかった。このままでは睡眠不足になってしまうと思うのに、一度目覚めた頭には、一向に眠気がやって来てくれなかった。

私もしかしてバカなことしちゃったのかな……。でも、これ以上誤解されたくないかった。

\*\*\*\*\*

私は目を閉じたまま、2日前の西森家でのクリスマスパーティーの時の事を思い出していた。

あの日、クリスマスのランチを食べ終えて、パパ達と子供達がテレビゲームをし出したので、私たち女性陣はダイニングテーブルでお喋りタイムとなった。

『美緒ちゃん、昨日の懇談でね、守谷先生に訊いてみたの、携帯の

待ち受けの虹の写真の事』

『えっ？ 虹の写真の事？』

『そう、【にじのおうこく】の虹の架け橋の真似して撮った写真ですかって訊いてみたの』

『そ、それで？』

『守谷先生、驚いてたよ。どうして分かったんだって雰囲気で、なぜ【にじのおうこく】が出てきたのかって訊くから、篠崎さんの待ち受けも虹の写真で、【にじのおうこく】の虹の架け橋を真似をして撮った写真だからって説明して、守谷先生も彼女からの写真ですからって訊いてみたの』

『ええっ！ 私の待ち受けも虹の写真だって言ったの？』

『そうだけど……言ったらダメだった？ 篠崎さんと守谷先生って折り紙と言い、虹の写真と言い、趣味が似てますねって言ったけど

……』

ああ……千裕さんは悪気はない。悪気はないけど……。  
私の頭の中は真っ白になった。

彼に知られてしまった。

こんな形で知られなくなかった。

まだ別れの本当の理由も言っていないのに。別の人を好きになつたと言つ誤解も解いていないのに……。

彼はどう思つたのだろう？

私は思わず、私と千裕さんの会話を黙って聞いていた由香里さんの方を見た。

由香里さんは苦笑して私を見返すけれど、何も言わない。でもその眼差しに「私は何もバラしてないからね」と言っているのが読みとれた。

私が茫然としてる間に、千裕さんは話の続きを話し始めた。

『それでね、守谷先生もはっきり答えないから、思い切って愛先生から送られた写真ですかって訊いてみたのよ。そうしたら、守谷先生が、興味本位にいろいろ訊かないでくれて、愛先生とは何も関係ないから、迷惑をかけるような噂を流すなって怒っちゃって……美緒ちゃん、どうしよう。守谷先生を怒らせてしまったから、3学期に合わす顔ないよ』

目の前で情けない顔をしている千裕さんを、私はぼんやりと見つめた。

『まあ、言っちゃったもの仕方ないじゃない？ 千裕ちゃんも美緒も覚悟しておくのね』

そう言って由香里さんはニヤリと笑った。

覚悟？

『由香里さんったら、他人事だと思っ！』

千裕さんが由香里さんを恨めし相に睨んでいる。由香里さんは笑いながら『他人事だもん』と返してるのを、私はただぼんやりと眺めていた。

その日の夜、由香里さんから電話があった。

『美緒、良かったね』

『えっ？ 何が良かったのよ？ 何にも良くないよ。私の待ち受けが虹の写真だって知られてしまったんだよ？』

『だから、良かったじゃないの。美緒の気持ちが守谷先生に伝わったんじゃないかな？ もしかすると、クリスマスのお誘いがあるかもよ？』

由香里さんの明るい声が、今は無神経な声に聞こえてしまう。

『ちつとも良くない。こんな形で知られなくなかった。まだ別れの本当の理由も言っていないし、別の人を好きになったって言う嘘も、そのまま信じているだろうし……』

私は怖かった。この事で、また彼がどんなふうに誤解して行くだろうかと思うと、気が気じゃない。

気が多い奴だとか、移り気な奴だとか思われていないだろうか……。

その誤解を解くチャンスはあるのだろうか？

『何言ってるの！ 美緒は余計なこと考え過ぎだよ。守谷先生の気持ちも分かったし、愛先生とも関係なかったし、千裕ちゃん言い突っ込みしてくれたよねえ』

私は由香里さんの物言いにますますイライラした。

わかっている。由香里さんは私を励まして背中を押そうとしてくれるのは。それでも、今は千裕さんの言葉も由香里さんの言葉も素直に聞く事が出来なかった。

『どうして彼の気持ちが分かるのよ。虹の写真だって、他の人と送り合った写真かもしれないじゃないの！』

これじゃあ完全に八つ当たりだと思いながらも、由香里さんにきつい言い方をしてしまう。

『へえ〜美緒、そんな風に思うんだ？ 虹の架け橋を真似て写真を送り合うなんて、あなた達二人の大切な思い出じゃ無かったの？』

守谷先生って、美緒と別れた後に、他の女性と同じように虹の写真を送り合うような人なわけ？ じゃあ、守谷先生だって、美緒の待ち受けの虹の写真は別の人と送り合った写真だって思っているかもしれないよ？ 美緒の場合、別の人を好きになっただって言ってる訳だし……』

えっ……そんな事……思いもしなかった。彼の虹の写真は疑っていたくせに、自分の虹の写真は疑われるかもしれないと言う事さえ思い浮かばなかった。

それまで私の頭の中を支配していた、真実を何も知らない彼が、私の気持ちを知って、どう思うだろうかという不安は、瞬時に私の吐いた嘘を増幅させる疑惑への嫌悪に取って代わった。

嫌だ！

あの虹の写真を、他の人からの写真だなんて思われたくない。ま

してや待ち受けにしてるほどの写真だ。確かに、別の人を好きになつたと嘘を吐いたのは私自身なのに、私は自分の気持ちを疑われるなんて、思いもしなかった。

せめて、あの虹の写真だけでも、彼からのものだと知らせたい。私は由香里さんの電話の後も、虹の写真の事ばかり考えていた。

その次の日はクリスマススイブだった。クリスマススイブもクリスマスも日本では特に祝日と言う訳でもなく、平日なら仕事も学校もある。しかし今年はクリスマススイブの今日は金曜日で、クリスマスは土曜日と言う、恋人たちやファミリーには良い曜日巡りで、今夜は市内のレストランは恋人達で溢れ返っているのだろう。

彼と過ごした最後のクリスマススイブを思い出す。

最初の頃は、初めて恋愛、初めての恋人に戸惑ってばかりで、恋人達にとつてのクリスマススの重要性が良く分かっていなかった。彼から24日の夜は空けておいてと言われても、その日は家族でクリスマスを祝うからと断ってしまい、呆れた美鈴に恋人達にとつてのクリスマススの意味をレクチャーされ、どうにか初めてクリスマススイブを、彼と過ごしたのだった。

最後のクリスマススイブもクリスマスも平日だった。私は社会人になつていたからもちろん仕事で、車で3時間と言う中距離恋愛をしていたから、当日に会うのはとても無理で、クリスマス直前の週末にその代りをしようと約束していた。しかし、週末直前になって私は急な仕事で休日出勤となり、泣く泣く次の週末へと約束を変更したのだった。

平日のクリスマススイブにどんよりとした気持ちで仕事をしていると、彼からメールが届いた。それは、あの日と同じ虹の写真付きの写メールだった。

『今から美緒の所まで虹の橋を架けるよ。いつもの公園でPM7:00に待ってる』

彼が私の方へ来てくれる時にいつも待ち合わせてる隣の市の海浜公園の駐車場。私は仕事が終わるとすぐに飛び出した。

私はここまで思い出して、大きく息を吐いた。

あの時送ってくれた虹の写真……今私の携帯の待ち受けにしている虹の写真と同じものだ。それを、別の人からの写真だと思われていたとしたら？

由香里さんに指摘されて初めてその可能性を考えた時、別の人を好きになったと言ったのだから、そう思うのが普通のような気がして来て、私は胸が苦しくなった。

嫌だ！

それだけは嫌だ。

彼の虹の写真が別の人からかもと言う不安より、自分の虹の写真が別の人からかも疑われる方がずっと辛いと思った。

そして、ふと思いつき、手の中の携帯電話に目を落とした。

この虹の写真をあの日彼が送ってくれたように、私から写メールしたら……？

彼なら気付くはずだ。自分が送った虹の写真だと……。

『この虹の向こう側にあなたはまだいますか？』

メールを送信した後、時計を見たら、クリスマススイブの夜は終わろうとしていた。

後数分でクリスマスになるデジタルの電波時計の数字を見つめながら、こんな時間にメールをして迷惑だっただろうかと心配になった。

恋人達のクリスマススイブ。もしも今、彼が誰かと一緒にいるのなら、このメールはとんでもなく間抜けだ。否、間抜け以上に迷惑で



しかない。

それでもこの虹の写真が彼からのものだと分かって欲しかった。

もしも、由香里さんの言う通りなら、こんな時間のメールでも、彼から何らかの返信はあるかもしれない。私はそう思いながら、まんじりとせず鳴らない携帯を見つめていた。

\*\*\*\*\*

25日午前6時半。

結局二度寝はできず、仕方なく起きる事にした。外はそろそろ明るくなり始めている。

のろのろと起き出し、厚手の毛糸のカーディガンをパジャマの上から羽織ると、リビングのファンヒーターのスイッチを押した。長年使ってきたファンヒーターがこの冬出してきたら動かなかったのだ、思い切ってポータスで新しいファンヒーターを買った。今までのファンヒーターはスイッチを押してから点火するまで5分ほどかかっていたのに、新しいものは数秒で点火する。

いつもならスイッチを押して、そのまま台所へ行きお湯を沸かすのに、今日はそんな気分にもなれず、ファンヒーターの前で膝を抱えて座り込んだ。数秒で温風が吹き出したファンヒーターが、まるで慰めるように私を優しく温めている。なのに、無意識に自室から持ってきた携帯は、まるで死んだように手の中で冷たくなっていた。

これが彼の答えなのかな……？

午前7時を過ぎた頃、毎年のクリスマスの朝のように、ドタドタと嬉しさを表す足音がリビングに近づいてきた。「ママ」と呼びながらリビングに飛び込んできたのは、嬉しそうな顔でプレゼントを抱えた拓都だった。

「おはよう、拓都」  
私はニツコリと笑って挨拶をした。

「ママ、おはよう。あのね、サンタさん来てくれたよ。これ見て見て」

拓都の手の中には、無造作に破って開かれた包装紙の上に乗せられているグローブとボール。

私はチラリと拓都の表情を窺う。

サンタさんにリクエストしたプレゼントと違っていているけれど、拓都はガツカリしていないのだろうか？

「わあ〜拓都、良かったね」

私は心の中で白々しいと自分に突っ込みながら、私の言葉に嬉しそうに笑った拓都の表情に安堵していた。

拓都が自分の手にグローブを嵌めているのを一瞥すると、私はリビングの収納から同じような包みを出して、拓都の所へ持って来た。

「拓都、ほら、ママもサンタさんに貰ったんだよ」

すでに開けられていた包みを開いて、中のグローブを見せる。拓都は大きく目を見開いて、グローブと私を交互に見ると破顔した。

「ママもいい子にしてたからサンタさん来てくれたの？」

ますます嬉しそうに私を見上げる。

拓都はこれで良かったの？

自分が望んだプレゼントじゃないのに……

それでも、拓都の笑顔は何の屈託もなく、私はこれで良かったんだと、自分自身を納得させた。

「今回は特別だって。拓都和キャッチボールができるようになって、ママにもグローブをプレゼントしてくれたんだよ。ママ、一生懸命

練習するから、一緒にキャッチボールしようね？」

私も同じように笑顔を向けながら言うと、拓都は元気よく「うん」と返事した。

それからいつもより遅い朝食を食べながら、後で公園へ行つてキャッチボールをしようねと約束した。そして、洗濯、掃除と家事に取り掛かっている時、玄関のチャイムが鳴った。

僕が出るねと玄関へ走つて行つた拓都がドアを開ける音がして、続いて「守谷先生」と言っている声が聞こえた。

えっ？ 守谷先生って……まさか……どうして……？

私は次第に早くなる鼓動を感じながら玄関に向かうと、そこには昨夜必死の思いでメールを送った相手が、穏やかに微笑んで立っていたのだった。

# 5 1 : 涙の後に架かる虹【前編】（前書き）

今回少しでも早く更新したくて、

本当なら1話で更新予定だったものを、前後編に分けて、

とりあえず先に前編を更新する事にしました。

ちなみに後編はこれから執筆予定です。

2つに分けたため、今回はいつもより短いです。

## #51：涙の後に架かる虹【前編】

12月25日土曜日午前9時半、その人は我が家の玄関に立った。

それは一瞬、余りにもその人からのメールを待ち望んだ私の願望が見せた幻かと思った。

「おはようございます。朝早くからすいません。拓都に話があつて……」

彼が会釈しながら、自分が訪れた用件を言いかけた時、それを聞いていた拓都が「僕？ 先生、僕に話があるの？」と目をキラキラさせて見上げた。

「おはようございます。拓都、先生に御挨拶をしたの？」

私は訳が分からないまま挨拶を返し、嬉しそうにしている拓都に何となくイライラしながら、注意をした。その言葉に促された拓都は「守谷先生、おはようございます」といつも学校でしている朝のあいさつのように、頭を下げている。

それにしても、拓都に話があるって？

なんだろう？

それより、昨日送ったメールには気づいていないのだろうか？

気付いていたら、何かしらのリアクションがあってもいいと思うのだけど……。

「ああ、サンタさんに頼まれた事があるんだよ。ちよつと拓都と二人で話をさせてもらえませんか？」

彼は拓都を見下ろして答えると、私の方を見て尋ねた。

サンタさんに頼まれた？

存在していないサンタさんが彼に何か頼む訳は無い。それは拓都用の返事だとは分かっていたけれど、私はわけがわからず、顔をしかめた。

「サンタさん？ 先生サンタさんとお友達なの？ あのね、僕の家にも昨夜サンタさんが来てくれたんだよ」

拓都がニコニコと担任に話をしているのを遮断するように「とにかく上がってください」と私はスリッパを出した。

リビングに彼を通すと、私はコーヒーを入れるためにリビングと続いている台所へ行った。背後で拓都がサンタさんに貰ったグローブとボールを見せているらしい声が聞こえる。「ママもグローブを貰ったから、後で公園でキャッチボールするんだよ」と得意げに話している。

「それじゃあ、私は座敷の方に居ますので、拓都をよろしくお願ひします。拓都、お話が終わったら、ママを呼びに来てね」

私は彼の前にコーヒーを出しながらそう言い、最後の方は拓都に向けて言った。

私は座敷へ入ると後ろ手に襖を閉め、その場に座り込んだ。

拓都になんの話があると言うのだろうか？

サンタさんに頼まれたと言っていたけれど……もしかして、拓都がサンタさんにリクエストしたプレゼントの事だろうか？

でも、その事をどうして彼が知ってるの？

その事を知っている由香里さんも千裕さんも、そんな事何も言っていないかった。

じゃあ、もしかしたら、拓都が宿題の日記で書いたのだろうか？

拓都は私には日記を見せてくれないのに、いろいろな事を書いていられるから、あり得る話だ。それで、担任として、クリスマス  
の今日、話をしに来てくれたのかも知れない。

クリスマスプレゼントにパパが欲しいなんて、ちょっと問題有りだものね。

私は溜息を吐いた。

彼がたずねて来たとき分かった時は、昨日のメールの事で来てくれたのだろうか、どこか期待してしまったけれど、玄関に立った彼は担任の顔をしていた。

私は立ち上がると、仏壇の前まで行き正座した。両親と姉夫婦の写真をしながら、独り言のように話しかけた。

「お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お義兄さん、私、どうしたらいいのかな？ やっぱり彼に拓都は姉の子だと言っべきだよね？」

そして、別れの本当の理由と嘘を吐いた事を謝るべきだよね？  
何の返事も返って来ない笑顔の写真を見つめながら、又小さく息を吐く。

拓都と話をするためだけに来たのだろうか？

私には用事は無いのだろうか？

やっぱりまだメールに気付いていないのかな……？

あれから30分ほど経った頃、リビングのドアが開いて足音がこちらに近づいてくるのが聞こえた。話が終わったかと又嘆息すると、私は立ち上がった。

「ママ、お話終わったよ」

座敷の襖を開けて、そう言いながら拓都が入って来た。拓都と目が合う。いつもならニコリ笑う拓都が、なんだか恥ずかしそうな、少し辛そうな顔をした。

「そう、先生は？」

拓都の表情が気になりながらも、彼の事も気になった。

「うん、向うにいるよ。……あのね、ママ」

拓都の真剣な表情に、私はしゃがんで拓都と目線を合わせた。

「先生はもう帰るって言ってた？」

「ううん、待ってるからって……あのね、ママ」

待ってる？

彼の事も気になったが、目の前でモジモジしながら、何か言いたげな拓都が気になって「なあに？」と拓都に微笑んだ。

「ママ、ごめんなさい」

「えっ？ 何がごめんなさいなの？」

「ママもサンタさんから聞いたんでしょ？ 僕が出した手紙の事」

手紙って、プレゼントのリクエストの手紙の事だろうか？

サンタさんから聞いたって……

「手紙って、拓都がサンタさんに出したプレゼントのお願いの手紙の事？」

「うん。僕、サンタさんにパパをくださいって書いたんだ。それを見たサンタさんが困って、パパはプレゼントできないって話して欲しいって、先生に頼んだんだって。ママもサンタさんから聞いているんでしょ？ 先生がそう言ってたけど」



「先生の話って、その事だったの？」

私は困惑した。どうなってるのだろうか？ 想像通りプレゼントの話だったけれど、どうしてサンタさんに頼まれただなんて……。

「うん。先生からどうしてパパはプレゼントできないかを教えてもらって、ママが悲しんでるから謝ってきなさいって……ママ、ごめんなさい」

拓都はそう言うと、私の首に手をまわして抱きついてきた。私は思わず拓都を抱きしめる。

「拓都、大丈夫だから、ママ、悲しんでないからね。だから、拓都は何も悪くないんだよ。気にしなくていいから……」

「いったい彼は拓都に何を言ったのか……？」

泣きそうになっている拓都を抱きしめながら、私は彼を恨めしく思った。

「あのね、先生がね、パパはキャッチボールしてくれるだけじゃなくて、特別な人なんだって」

「特別な人？」

私は腕から拓都を解放すると、もう一度拓都と目を合わせて訊いた。

「うん。パパはね、ママの大好きな人じゃないとダメなんだって。それでね、その人も僕とママの事が大好きで守ってくれる人なんだって。だから、サンタさんにはプレゼントできないんだって」

拓都はさつきまでの思いつめたような表情から、どこか得意気に担任から聞いた事を話す。

「そんな話をしてくれたんだ……」。

「ママの大好きな人……か。」

「そっか……ごめんね、拓都」  
私の謝罪の言葉にキョトンとした拓都を、もう一度抱きしめた。  
ごめんね。

空から見守ってくれているであろう、拓都の本当の両親であるお姉ちゃんとお義兄にいさんの事を思うと、申し訳なくなる。

本当のパパとママなのに、我が子を抱きしめる事さえできず、パパが欲しいなんて無邪気に言わせているなんて、本当に情けない。私自身が拓都に対して、こういう話題を避けていたせいなのかも知れない。

「ママ、……泣かないで。やっぱり悲しかったの？」  
拓都にそう言われて、初めて涙がこぼれていたのに気づいた。  
ああ、いけない。これ以上拓都に心配かけては……。

「ううん、違うの。自分が情けなかっただけ。拓都にごめんねなんて言わせて……ママの方が、ごめんね。……さあ、行こうか。先生を待たせちゃいけないから」

私は涙をぬぐうとニツコリと笑って、拓都の背を押した。  
さあ、気分を入れ替えて、彼の前では笑わなくちゃ。

リビングのドアを開けると、ソファーに座って窓の方を向いていた彼が、こちらを向いて一瞬心配そうな顔をしたが、すぐに穏やかに微笑んだ。

「せんせー、ママに謝ったよ」  
拓都は嬉しそうにそう言いながら、担任である彼の元へ駆け寄っていった。

「そうか、拓都、頑張ったな」

彼の方もニコニコと拓都の頭を撫でている。

心の中では、拓都に謝らせなくてもとか、拓都は何も分からない子供なのだからとか、いろいろな思いが込み上げてくるのに、彼の拓都を見る優しい笑顔に、私は何も言えなかった。

「それじゃあ、拓都、先生はお母さんと大事な話があるから、拓都は自分の部屋で待っていてくれるか？」

えっ？

大事な話？

私は期待に鼓動が早まるのを感じながら、いつもの癖で、きつと拓都の話だから期待するなと自分に言い聞かせている。後でがっかりするのが嫌で、期待はいつも打ち消してしまう。彼の事だから、余計に。

「うん、わかった。昨日図書室で借りてきた本を読んでるね」

そう言うと、拓都は先生に手を振って、さっきから茫然とリビングの入口の所に立ち尽くして、二人の様子を見ていた私の横をすり抜けると、二階の自室へと階段を軽い足取りで上がって行った。

私は拓都に声をかける事も出来ず、只々ぼんやりと拓都の去って行く後ろ姿を見つめていた。

# 51：涙の後に架かる虹【前編】（後書き）

又いい所で終わっていると、お叱りの声が聞こえそうですが、  
できるだけお待たせしたくなかったので、

前半部分を先に更新してしまいました。

後半も頑張って書きますので、もう少しお待ちくださいね。

# 5 2 : 涙の後に架かる虹【後編】（前書き）

お待たせしました。

どうぞよろしくお願いします。

## #52：涙の後に架かる虹【後編】

クリスマスの朝、リビングに二人きりで取り残され、彼が今ここにいるのだと思うと、又心拍数が跳ねあがった。

どうしてこんな事になったの……。

彼は私に何を話そうとしているの……？。

「美緒」

背後で彼が立ち上がり、こちらへ近づいてくるのが分かった。私は焦って振り返った。

「あっ、あの、拓都の事、ありがとございました」

とっさにお礼を言うのと頭を下げた。いつまでも保護者の仮面を取れない私に、彼は苦笑している。

「上手く言えたかどうか分からないけど……それより、美緒のご両親と拓都のご両親に挨拶させてくれないか？」

えっ？

一瞬彼が言った言葉が上手く呑み込めなかった。そして、その言葉の意味が分かってても、理解が追いつかない。

私の両親と言うのはわかる。でも、拓都の両親って……まさか……知ってるの？

私は絶句したまま彼の顔を見上げた。

「こっちだったよな」

そう言いながら彼は、私の横を通り過ぎてリビングを出ると、廊下を横切って座敷の襖を開けた。

私は我に返ると、慌てて彼の後を追いかける。

「ちょっと待って！」

私の呼びとめた声に振り返った彼は「大丈夫だから」と微笑むと、ずんずんと中へ入って行き、仏壇の前に座った。

どうなってるの？

彼は知ってるの？

混乱する頭は、すでに思考を停止させている。

私はただ呆然と、正座する彼の背中を見つめていた。

「美緒のお父さん、お母さん、それから拓都のお父さん、お母さん、ご無沙汰しています」

彼が仏壇に向かって頭を下げて挨拶をしている。さっきから座敷の入口の所で唾然と立ち尽くしていた私は驚いて、とっさに彼に何か言おうとしたけれど、混乱すぎて何も言葉が出てこない。その上、近づく事も出来ないような雰囲気で、私はその場に座り込み、彼の様子をただ見つめている事しかできなかった。

彼は付き合っていた頃、一度だけ我が家へ来た事があった。その時、両親の仏壇に手を合わせてくれたから、ご無沙汰していますなのか……。

私は混乱しながらも、過去を振り返った。

でも、そんな事よりも、やっぱり彼は拓都が姉の子だと知っているのだろうか？

いつから知っていたのだろうか？

知っていたのに、どうして何も言わなかったのだろうか？

私の頭の中は、ますます混乱して行く。

「美緒が大変な思いをしていた時に、何も力にも助けにもなれず、すいませんでした」

えっ……？

なに、何言ってるの？  
知ってるの？

何も助けになれずって……それを拒絶して突き離れたのは私なのに……。

「でも、これからは、私が美緒と拓都を守ります。どうか、私に、美緒と拓都を任せてください」

慧……。

何言ってるのよ……。

これじゃあまるで……。

いつの間にか彼の背中がぼやけ始める。

ここにいるのは、拓都の担任ではなく、いつか見た虹の向こう側にいた彼なの？

頬を熱いものが流れ俯いた私は、彼が立ち上がって傍まで来ていた事に、名前を呼ばれるまで気づかなかった。

「美緒」

私の前に正座した彼に、もう一度名前を呼ばれ、私は顔を上げた。涙の向こうに優しい眼差しの彼がいる。

「美緒、酷い顔してるぞ」

彼がクスツと笑って、ハンカチを差し出す。

こんな時いつもの私なら、天の邪鬼全開で「元々こんな顔ですう」と頬を膨らませて拗ねていたに違いない。けれど今の私は、言い返す元気も無く、差し出されたハンカチで、必死に涙をぬぐった。



「美緒、さつき美緒のご両親とお姉さん達に言った事は、本気だから……」

私は涙をぬぐう手を止めて、彼を見た。彼の真剣な眼差しが、私の心を射ぬいた。

本気って……？

まるで親に結婚の許しを乞うようなあの言葉の事？

どうして……もう何もかも知ってるの？

彼の視線から目が離せず、しばらく見つめ合っていると、彼がフツと笑った。

「美緒、擦り過ぎだよ。目が真っ赤になってる」

さっきの真剣な眼差しが、急に柔らかいものに変わり、私の手からハンカチを奪うと、目元にたまり始めた涙を、そっと押さえる様に拭ってくれた。

「本郷さんから、何もかも聞いたんだ」

「えっ？ 美鈴から？」

「ああ、昨夜、先生達のクリスマスパーティーがあつて、その後で時間を貰つて話をした。最初は拓都の事を確かめたかっただけなんだ。以前に拓都がお姉さんの子供だつて、同僚の先生から聞いていたから……本当は、美緒がその事を話してくれるのをずっと待っていたんだ」

知っていた？ ずっと前から？

私が話すのを待っていてくれたの……？

「う、ごめんなさい」

「いや、違うんだ。美緒を責めてる訳じゃないんだ。俺が勝手にいろいろ誤解してただけだから……。でも俺は担任と言う立場もあつたし、こちらからいろいろ聞く事ができなくて……。それに……。美緒の携帯の待ち受けが虹の写真だつて聞いて、美緒から話してくれるのを、もう待てなくなつて……。それで本郷さんに直接聞いてみたんだよ」

虹の写真！

私は思わず顔を上げると、彼と目を合わせた。

「あの虹の写真は、携帯の待ち受けにしてる虹の写真は、あなたが送ってくれた写真だから!!」

私は勢い込んで言った。又誤解されてはたまらない。

余りに焦つて言う私が可笑しかったのか、彼はまたクスツと笑う。

「そんな事、わかつてるよ。ちなみに俺の待ち受けは、美緒からの虹の写真だから……。なあ美緒、……。美緒の気持ちも俺と一緒に、あの頃と変わらないと思つてもいいんだろう？ あのメールはそう言う意味だつたんだろう？」

彼は私の顔を覗き込むようにして訊いてきた。その瞳に不安が混じる。さっきまでの余裕が消えて、彼の顔はどこか心配気だ。

俺と一緒に？

あの頃と変わらない？

そんな事、あるのだろうか？

あんなに酷い別れ方をしたのに、3年以上経つてるのに……。

「怒つてないの？ 私の事、恨んでないの？」

私の問いかけに彼は驚いた顔をした後、何かを考え込みながらゆつくりと話し出した。

「確かに、美緒と別れた時は、すごいショックだったよ。でも、怒

るとか恨むとかじゃなくて、自暴自棄になって……」

ええっ?!

自暴自棄!

「ごめんなさい。私……」

そんなにあなたを傷つけていたなんて……。

「いや、違うんだ。あの時は、だよ。でもあの後、義姉ねえさんに諭されたんだ」

「お義姉さんって、お兄さんの奥さんの?」

「そう、義姉さんに、慧君の想いってその程度のもだったのって怒られて、好きな気持ちは簡単に消せないから、無理に消す必要はないって、新しい恋ができるまで、相手の幸せを願って想い続けられたいって言われたんだよ。その後、教育実習や採用試験で忙しくなって、教師になってからも仕事の事で一杯で、恋愛なんて考えられなかった。そして、3年経って、もういい加減、新しい恋でもした方がいいかなって思っていた時だった。もう二度と美緒には会えないって思ってたから……この市で教師をしてたら、どこかですれ違う事もあるかもしれないって思ったりもしたけど、まさかこんな形で再会するなんて思わなかった。でも、会えてよかったよ」

彼は話しながら、記憶を手繰り寄せるように遠い目をしていて。そして、最後は私の方を見るとニッコリと笑った。

そんな風に、全てを許したように優しく微笑まれると、妙に居心地が悪くて、彼は美鈴から何もかも聞いたと言うけれど、別れの真実を知っても、腹が立たなかったのだろうか? それともまたショックを受けたりしなかったのだろうか?

「でも、でも、美鈴から別れの本当の理由を聞いたんでしょう?」

嘘まで言っただけだ……それでも怒らないの？」

私の再びの問いかけに、彼は又驚いた顔をした後、フツと笑った。

「美緒、もう今更だよ。それよりも、あの時、俺が実家へなんか帰っていなかつたらって悔やまれるよ。そうしたら、お姉さん達が亡くなった事も分かつただろうし、美緒がどんな決意をしたって、別れたりなんかしなかつた。俺の方こそ、ごめんな。美緒の辛い時に傍にいてやらなくて……」

彼が辛そうに話す表情が、次第に涙でゆがみ始め、遂には顔を上げていられなくて、彼のハンカチに顔を伏せた。そして、あなたは悪くないと伝えたくて、私は首を横に振った。

「ご、ごめん、なさい。ごめんなさい……」

ただ、謝罪を繰り返すことしかできない。でも、どんなに謝ったって、過去は覆す事が出来ないのに……。

「美緒は悪くないよ。学生だった俺を巻き込みたくなくてした事だつて分かつてるから……美緒の性格を考えたら、仕方なかつたって思ってる。きつと、俺達二人にとって避けられない運命だったんだと思う。きつと試されたんだよ。俺達の想いがどんなに強いものか、運命に……。だから、こうして又再会できたんだと思うよ」

彼の言葉に、また顔を上げて彼を見ると、彼は又柔らかく微笑み、そつとハンカチを握る私の手を両手で包み込むように握った。そして、優しく「美緒」と呼んだ。

「美緒、もう何もかも終わった事だよ。俺達はまたここから始めるんだよ。だから、美緒、返事を聞かせて欲しい」

「返事？」

いつの間にか真剣なまなざしで問いかける彼の言葉の意味が分か

らない。あまりの展開の早さに、頭が付いていけない。

「ああ、さつきご両親にお願いしたように、美緒と拓都を守りたいんだ。美緒と拓都の家族になって助け合いたいと思ってる。どう？俺も仲間に入れてくれるかな？」

家族？ 仲間？

それって……

「あ……あの、私なんかでいいの？ 拓都もいるし……」

「だから、美緒と拓都の家族になりたいって言ってるだろ？」

彼の言葉に、また涙が湧きあがった。私は出てこない言葉の代りに、何度も頷いた。

「ありがとう、美緒。……それにしても、今日の美緒は泣き虫だな。拓都が心配するぞ」

彼が嬉しそうに笑いながらそう言うと、私から又ハンカチを奪って、涙を拭いてくれた。

「なによ、慧が泣かすんじゃない！」

張りつめていた物が緩んだのか、いつもの天の邪鬼なセリフが自然に零れる。

その言葉を聞いて、彼がクスリと笑った。私も彼の笑顔を見て、クスツと笑ってしまった。

「美緒、抱きしめてもいいかな？」

いつの間にかにじり寄って、さつきよりも傍に来ていた彼が、耳元で囁く。その言葉に反応したように耳のあたりから熱を持ったような気がした。そして、私は小さく頷いた。

気がつけば彼の腕の中にいた。それはとても懐かしい、自分のい

るべき場所に、やっとたどり着けたようだった。そして彼が耳元で、ボソリと呟いた。

「美緒、虹の魔法は本当だったな」

#52：涙の後に架かる虹【後編】（後書き）

二人の間に架かった虹は見えましたが？

まだ、最終話じゃ無いので、この後も引き続きお付き合いください  
ね。

### #53：夢のような現実（前書き）

お待たせしました。

二人の心が通じ合った、その後です。

どうぞよろしく願います。



### #53：夢のような現実

今朝の事は、現実だったんだろうか？

クリスマスにサンタがくれた夢だったのだろうか？

自分の頭の中にある記憶は、陶醉しきった脳では、夢か現か判断しかねている。けれど……。

私は、人差し指でそつと唇に触れた。すると一気にリアルな感触と共に記憶が蘇った。

今朝の事。

私達は、いろいろな話をした。積もる話は、とてもじゃないけれど時間が足りなくて、けれど、拓都を待たせている。その事が気になって、心残りのまま私は、『そろそろ……』と腰を上げた。

立ち上がって彼に背を向け、襖に手をかけようとした時、名を呼ばれた。

振り返ると同時に手首をつかんで引つ張られ、よろけた私は次の瞬間彼の腕の中にいた。驚いて見上げると、彼の顔が近づいてきて、思わず目を閉じ、同時に唇に柔らかいものが触れる。

それが何か分かった瞬間、唇で生まれた熱が頭天边にかけ上り、蒸気となってボンと突きぬけたような気がした。そして一気に顔全体が熱くなる。

4年近くぶりのくちづけは、心拍数を跳ね上げ、呼吸困難に陥らせた。

『美緒、顔、真っ赤になってる。そんな顔、拓都に見せられないな』  
クスツと笑う彼を、恨めしげに睨むと、余裕有り気の彼の目元も赤くなっていた。

慧だつてと言う言葉を飲み込むと『知らない』と言い捨てて、彼の腕の中から抜け出すと、部屋を飛び出し洗面所へ駆け込んだ。鏡

の中の蕩けるようにのぼせ上がった赤い顔の自分を見て、小さく溜息を吐く。

ホント、こんな顔、拓都に見せられない。

今の私は母親の顔じゃない。

その事に酷く罪悪感を感じながら、冷たい水で思い切り顔を洗う。もう一度、鏡の中の自分を覗いた時初めて、自分がスッピンだった事に気づいたのだった。

母親の顔と女の顔……世のお母さん方は、どんなふうに使分け  
ていらつしやるのか。

慧と別れてから、自分の想いに蓋をして、拓都の母親として過ごしてきた数年。気持ちが溢れて泣く事はあっても、けして拓都の前では見せはしなかった。

再会してから、どんどん気持ちが膨れ上がって、母親としての自分よりも、女としての気持ちの方が凌駕してしまう事があつたけれど、それでも拓都の前ではまだ何とか母親の顔を保っていたられた。

でも、今日の私は、拓都といっても、ふと気付くと今朝の慧と  
の事を頭の中でリピートさせている。拓都に何度も「ママ」と呼ばれて  
やっと我に返ると言う、情けない状態なのだ。それと言うのも……。

『美緒、拓都にはまだ何も話さないで欲しいんだ。拓都はまだ1年  
生だから、公私の区別を付けるなんてできないし、拓都には俺の事  
意識しないで、普通に1年生を過ごして欲しいんだ。だから、俺が  
担任を外れるまで、1年生が終わるまで、拓都には黙っていて欲しい  
』

あの時慧は、家族になりたいと言った後、こんな風に言った。彼  
はいろんな事、きちんと考えているのだと、改めて思った言葉だっ  
た。だから、私も1年生が終わるまでは、せめて拓都の前では母親  
の顔を保たなくてはいけない。なのにこの体たらくぶり。

『そう言う事だから、3学期が終わるまで、プライベートで美緒や拓都と会うことはできないと思う。せつかく美緒にOKしてもらったのに……でも会えなかつた3年間の事を思ったら、お互いの気持ちがあつていて会えない3ヶ月なんて、あつという間だよ。できるだけメールも電話もするから、美緒もメールや電話をして欲しい』

拓都にまだ何も話さないと言う事は、担任と保護者としてでしか会えないと言う事で……。

それでも慧の言うように、別れた後の3年間を思えば、彼の気持ちも分かつた今、3ヶ月なんて大した事は無い……はず。

はあ〜ダメだね。

今日だけは許して欲しい。こんなに嬉しい日に、母親の顔で居続けれられない私を。

私は溜息をつくくと、壁の時計を見上げた。今はまだ夜の8時半を過ぎたところ。昼間、公園でキャッチボールやアスレチックで体を動かしたせいも、拓都は8時頃に眠ってしまった。

『今夜電話する』と慧は言っただけで、まだこんな時間にはかかって来ない。おそらく拓都が寝たと思われる時間になってからだろう。

そう言えば、美鈴に電話しなければ……。

慧は美鈴に全てを聞いたと言っていた。

『美緒の恋は応援しない』と言った彼女が、私と慧の間にあつた大きな壁を壊してくれた。彼女がいなくなったらきっと、私達はお互いにお互いの心が見えず、いつまでも担任と保護者のままだったのだろう。

やはり真つ先に報告と感謝を伝えたい。それは、慧と再会した事を黙っていた罪滅ぼしの意味も有るのだろうと思う。けれどそんな

事より、今は素直に彼女の友情に感謝したいと思った。

美鈴に電話をしようと思った時、携帯がメールの着信を告げた。それは慧からの写メールだった。

『この虹は、消える事無く二人を繋いでいるよ。これからもずっと』

彼が待ち受けにしていると、あの日私が送った虹の写真が添付されていた。そのメールを読んだ途端、胸の奥から込上げる物があり、一気に涙腺が緩んだ。

なによ、まだ私を泣かせるつもり！

心の中で慧に悪態をつきながら、それが私の送ったメールへの返事なのだと気付いた。

慧は何度私を嬉しがらせるのだろう。

お互いに形のあるクリスマスプレゼントは交換し合わなかったけれど、それ以上の物を、いいえ、何にも比べる事などできないものを、彼は惜しみなく私に与えてくれた。

私は彼に同じだけの物を返せているのだろうか？

『PM10時に電話するから、それまでに拓都を寝かせておいて彼のメールには続きがあった。私はすぐに『拓都はもう寝たよ』と返信した。するとまた携帯が鳴った。今度は電話だった。』

「美緒、今電話しててもいい？」

「うん。メール、ありがとう」

「ああ、昨夜、メールの返事、すぐに返さなくてごめんな。どうしても直接言いたかったから……」

「うん。わかつてる」

再会してから彼と電話で話したのは数回の事で、それもやはり担任と保護者の壁が常にあった。でも今は、二人の間にあった壁の事などすっかり頭の中から消え去っている。

「美緒、今日は何してたんだ？」

「拓都とおにぎり持って芝生公園へ行つて、キャッチボールやアスレチックして来たの」

「いいなあ。俺も拓都とキャッチボールしたいよ。拓都をいろんな所へ連れて行ってやりたいんだ。山登りやキャンプやスキーとか……」

「フッフ、慧は根っからアウトドアなんだね。きっと拓都も喜ぶと思う」

私は想像する。

キャッチボールをする二人、3人で行くハイキングやキャンプやスキー……。

「なあ、拓都は俺を受け入れてくれるかな？」

「大丈夫。拓都は守谷先生が大好きだもの」

「でも、先生としては好きでも、父親として、家族として、受け入れてくれるかなって事だよ」

私はいつも彼の言葉で現実を思い知らされる。

彼の申し出が嬉しくて、ただ夢中で頷いた私と違い、彼は拓都の事も担任と保護者と言う立場の事も、真剣に考えていてくれる。

私は目の前の事しか考えられなくて、情けない。

「拓都は本当の父親の記憶が殆ど無いの。だから、拓都にとって身近な大人の男の人って、慧なのよ。入学した頃は、毎日うるさい位守谷先生の話の話を聞かされたわ。それに今だって、私には見せない日記の作文を、慧だけには見せてるでしょ？ それは先生だからというより、女の私からでは与えきれなかった物を、慧に求めているよ。うな気がするの。拓都の心の中では、ある意味、慧は父親に近い存在なんだと思う」

私は4月から今までの拓都を思い返して、自分がずっと感じていた事を話した。

「美緒は拓都がする俺の話を、うるさいって思ってたんだ」  
突っ込むとこそこ？

「それは、そのくらい沢山話してたって言う事で……」

「ははは、わかってるよ。でも、拓都がそんな風に俺の事を感じてくれてるのなら、嬉しいけどな。……実は今、実家にいるんだ」

「えっ？ あれから実家へ帰ったの？」

慧の実家は、高速を使えばここから車で3時間くらいの距離だ。

「ああ、美緒の事、ずっと心配かけてた兄貴や義姉ねえさんに伝えたかったし、両親にも話したんだよ。美緒と結婚したいって」

ええっ！

今朝の話をもう話したの？

あまりの展開の早さに、啞然とする。

でも、独身とは言え、拓都がいる今の私は、受け入れてもらえるのだろうか？

「もう、ご両親にまで話したの？ それで、反対されなかった？」  
慧のご両親とは一度だけ会わせてもらった事があった。とても気さくな人達だった。

「息子の決めた事に反対するような人達じゃないよ。ただ、釘は刺されたけどな。拓都の事、自分の子供として、自分の本当の子供と分け隔てなく育てていく覚悟はあるのかって、そうじゃないと賛成しかねるとまで言われたよ」

私は慧の言葉を聞いて胸が詰まった。子供のいる様な女性なんかと反対されても仕方ないところなのに、息子の決意を真正面から受け止め、あえて苦言を呈している。

「そ、それで、慧は何と答えたの？」

「そんなのとづくに覚悟できてるに決まってるだろ。だから、親父達も喜んでくれて、今度は拓都の事を思ったら、早く結婚した方が良いつて……」

私が鼻水をすすったのが聞こえたのか、慧の言葉が止まった。

もう、今日は何度泣かせれば気が済むのか……。

こんなに幸せでいいのだろうか？

あまりに不幸な運命にもてあそばれ過ぎたせいか、すんなり幸せを受け入れるのが怖くなる。

「美緒？」

彼の心配気な声が、耳元で響く。

私は傍にあったティッシュで涙と鼻を拭くと、「ごめんね」と小さく謝った。

「ごめん。なんだか今日は泣いてばかりで……もう慧のせいなんだからね」

私は急に恥ずかしくなつて、最後は八つ当たりのように言った。

「馬鹿だな……あんまり泣くと、目が溶けるぞ。それに拓都も心配するだろ」

「拓都の前では泣かないようにしてるから……」

「あんがい拓都は目ざといから、美緒の目が赤かったりすると気付くぞ。大好きなママだしな」

そうかも知れない。

今まで二人きりで生きてきたのだから、拓都は私の様子をよく見ている。仕事に疲れて元気が出ない時なんか、「ママ、大丈夫？」と訊いてくる。それは年に一回ぐらい疲れがたまつて風邪をひいてしまい、寝込む事があるからだ。そんな時拓都は、自分が熱が出て寝込んだ時にしてもらっている事をしてくれる。冷蔵庫からアイス枕を出してきて、熱さましのシートを額にピタッと張ってくれる。

「そうだね……でも、もう寝たから、大丈夫だよ。……でも、もうあんまり泣かせないで、今日はいろいろあり過ぎて、信じられなくて、気持ちがついていけない感じなの」

そう、昨日までとあまりに違う今日の自分に境遇に、どこか現実感がなくて、不安の方が大きい。

「俺も同じだよ。こんな事、夢みたいなんだ。だから余計に現実にしよつと思つて焦つてるのかもな……美緒に相談もせず先走つた事、悪かつたつて思つてる。でも、誰かに言わずにいられなかったんだ。……美緒、本当に良いんだよな？」

もう、何度確かめれば気が済むのと聞きたくなるほど、今朝だつて、あの後何度も訊いた慧。あの時も、夢みたいだと何度もつぶやきながら、まるで私が幻のように消えてしまふのを怯えるかのこと



く、強く抱きしめた慧。そんなあなたを見て、私はとても酷い事をしたのだと思い知らされる。

「慧……慧こそ、いいの？ 私なんかで……あなたに酷い事をして、苦しめてきたのに……」

「美緒、その事はもう言わない約束だろ。とにかく、ウチの家族はみんな賛成して応援してくれているから、美緒は何も心配しなくていいよ」

頬をまた新たな涙が流れ、もう何も言えなくなっていました。電話越しなのに、ウンウンと何度も頷き、鼻声で小さく「ありがとう」と言うと、慧の嬉しそうな笑い声が聞こえた。

### #53・夢のような現実（後書き）

なんだか、今までと180度違う、糖度高めの二人でした。

## #54：幸せの報告と懸念（前書き）

お待たせしました。

今回もよろしくお願ひします。

## # 54：幸せの報告と懸念

「ええっ!! 守谷君、プロポーズしたの?!!!」  
美鈴の驚いて思わずあげた叫び声に、こちらが驚かされ、同じようにすつとんきょんな声をあげる。

「プ、プロポーズ?!!!」  
プロポーズ?

あれは、プロポーズだったの？

慧との少々現実味の無い夢のような電話を終えた後、ぼんやりとしながら、今自分が置かれている現実を把握しようと、今日起こった事を何度も思い返し、やっと美鈴に電話しなくちゃと思い出した。美鈴に電話をして、最初にお礼を言ったら、「えっ? もう守谷君、美緒の所へ行ったの?」と驚かれ、今日の事を話したら、さらに冒頭の驚きの声を上げられたのだった。

「そうでしょう? プロポーズじゃないの。家族になりたいと言う事は、結婚したいと言う事でしょう?」

あっ、そうだ。慧は結婚とか言っていた。なんだか慧の言葉は全て夢のようで、まだ頭が理解しきれていない。

「そ、そうだね。実家のご両親にも、私と結婚したいって言うたらしいから」

「ええっ?! もうそこまで話が進んでるの? 守谷君つたら……」  
美鈴はそこまで言うと、クスクスと笑い出した。

「な、なに？ 何か笑うような事言った？」

「ううん。守谷君も必死なんだなって思ってた……もう絶対に美緒を離さないって思ってるんだろ？ ……それにしても、守谷君って、ああ見えても、結構執着タイプなんだね」

美鈴はそう言うと、またクスクス笑い出した。

「執着タイプって……」

「守谷君ってさ、先生になってもやつぱりモテモテなのに、振られても美緒一筋でしょう？ 愛されちゃってるね、美緒」

愛されちゃってる？！

一筋？？！

自分の事とは思えない言葉ばかりで、絶句する。

そんな私の戸惑いに気付かない美鈴は、嬉しそうに言葉をつづけた。

「でも……良かったね、美緒。私もやつと肩の荷が下りた気分だよ。今度こそ絶対に離しちゃダメだよ。何があっても、守谷君と二人で解決していかないといけないんだからね。美緒、本当におめでとう」

美鈴の言葉に、私の脳裏を今までの辛かった想いが駆け抜けた。

そして、現実感の無かった私の心に、じわじわと幸せの実感が広がり始める。

すっかり緩みきっていた涙腺は、簡単に決壊して溢れだし、ずずずと鼻水をすする音と共に「うん、ありがとう」とどうにか答える事が出来た。

「ねえ、美緒、守谷君と結婚すると言う事は、守谷美緒になるんだよねえ。美緒と一緒に婚活しようと思ってたのに、先を越されちゃったなあ。おまけに、パパとママでもあるんだよねえ。3月までは

周りに黙っているとしても、4月から拓都君は守谷拓都になるの？  
父親が守谷先生だってすぐにはれちゃうだろうし、やりにくくないの？」

守谷拓都……その名前に何となく違和感を感じながら、私は美鈴の疑問に答えた。

「いつ結婚するか、まだ何も決まっていけないけど、慧ね、来年度は虹ヶ丘小学校を出るんだって。私と上手くいなくても、出るつもりだったんだって」

慧は、本当は、私に気持ちを伝えるのは、3学期が済んでからのつもりだったらしい。私がたとえ別の誰かを想っていたとしても、今誰も付き合っている人がいないのなら、私と拓都の力になりたいと申し込むつもりだったと言っていた。

それが、私の携帯の待ちうけが虹の写真だと知った事と、美鈴から聞いた話で、待ちきれなくなって行動に移したのだと言っていた。

「えー、守谷君、虹ヶ丘小学校を出るの?! それは、残念に思う女性が多そうだね」

来年度の勤務校の希望は、第三希望まで全て虹が丘小と違う小学校の名前をかいたので、おそらく出られるだろうと言う事だった。

ああ、そうか、千裕さんも残念に思う一人だろうな。

私は千裕さんに、私と慧の事を言おうかどうか、まだ迷っている。

「それで、結婚したらどちらに住むの？ 確か守谷君のマンションも分譲で、結構広いんでしょう？」

そうなのだ。慧の実家は地元では名の通った中小企業で、慧はそこそこのお坊ちゃん（本人に言うとは怒られるが）で、大学で一人暮らしをする時にも、家賃を払うなんてもったいないと、ポンとマンションを買ってくれたらしい。その代わり、実家の会社を継いでいるお兄さんが仕事でこの県へ来た時は、ホテル代わりという約束ら

しいが…。

そのマンションはファミリータイプの2LDKで、一人暮らしにはもったいないくらい、広い。

でも、私は今の自分の家から引っ越すなんて考えもしなかった。

「そんな事はまだ何も話していないから……でも、引越す事になったら、拓都は転校しなくちゃいけないし……」

私は何となく嫌な気持ちになった。

そんな、引越しなんてできない。この家には、両親や姉夫婦の思い出に溢れているのだ。ここから離れたくないし、拓都もこの家で育って欲しい。

慧はどう考えているのだろうか？

「ねえ、美緒。守谷君って、印象も強いし、皆の興味を引く人だと思うの。だから、守谷先生と結婚したのが、担任したクラスの保護者だって分かったら、結構な噂になると思うのよ。たとえ守谷君が転勤しても、噂は広がって、嫌な想いをするのは美緒と拓都君だと思うの。だから、引っ越すのも有りだと思う。その辺、守谷君とよく話し合わなきゃダメよ。美緒はすぐに自分一人で抱え込むから」

美鈴のいやに勢い込んだ言い方に怯んだ。

確かに噂にはなるだろう。でも、引越ししなくちゃいけない程、嫌な思いをするとはいえない。

「美鈴、オーバーだよ。噂にはなると思うけど、最初のうちだけだと思っし、引越しまでする必要は感じないけど……」

「そうだね。考え過ぎかな。まあ、モテる恋人を持った不運と思っで覚悟する事だね。なんにしても守谷君とよく相談するんだよ」

美鈴の言い分に乗って来ない私に気が抜けたのか、何となく美鈴のトーンが下がったような気がした。

まあ、美鈴自身も、過剰な心配だと気付いたのかもしれない。

私は初めて慧と付き合い始めた大学生の頃を思い出した。あの時も美鈴に注意されたっけ……。

『美緒、守谷君と大学内で一緒にいたり、付き合い合ってるのが知れ渡ったりしたら、守谷ファンに睨み殺されるよ。モテる恋人は辛いね』  
そう言う事に疎かった私は、美鈴に何度か脅されて、大学内では慧と二人になるのは避けた。そのお陰か噂になる事も無かったけれど……。

何となくもやもやした気分のまま美鈴との電話を切った。

守谷先生の結婚相手が私だなんて分かったら……役員の会議なんかで皆が集まった時、有る事無い事噂しているのが、容易に想像できる。そんな想像は、幸せな気分を一遍に萎ませてしまった。

私は小さく息を吐くと、所詮人の噂も75日、ましてや噂の当人は転勤してしまうのだし、気にするほどの事も無いと自分に言い聞かせ、気持ちを切り替えた。

そうだ、由香里さんにも報告しなくちゃと、思っただけを見上げると、もう夜の11時前で、また明日にしようと思ひ直す。こんな嬉しい報告を、今の微妙にテンションの下がった状態では、かえって聡い由香里さんには、心配かけてしまうだけだ。また明日、気持ちを新たに報告しよう、リビングの明かりを消して、寝るために自室へと向かった。

\*\*\*\*\*

週明けの月曜日は12月27日で、今年の仕事は今日と明日で終わりと言う年の瀬。この一年、とても早かったなと感慨深く思い返す。



慧と再会したときは運命を恨んだけれど、終わりよければ全て良しのごとく、今は再会できた運命に感謝している。

昨夜も慧と電話で話し、だんだんと今の自分の幸せを実感できるようになってきた。

もうそうなると、慧の事を思い出すたび、頬が緩むのが分かるのだ。

これは本当に母親の顔と女の顔を使い分ける技を習得しなければと、真剣に思った。

慧との電話では、美鈴に言われたような結婚したらどこに住むかという問題は、なんだか結婚を急かしているみたいで言えなかつたし、噂の件も本人の責任じゃないのに責めるみたいで言えない。

まずは、拓都が無事に1年生を終わらせる事が最優先だ。結婚の話はその後でゆっくり話し合えばいい。私の役員としての仕事もまだあるし、少し気を引き締めないと、彼の前で保護者の顔ができないかもしれない。

新たな悩みも、幸せな悩みだと自分で自分に突っ込んだ。

そう、あの苦しんだ日々の事を思えば、今の悩みは贅沢すぎる悩みだ。

同じく昨夜、慧との電話の後、由香里さんに報告をするために電話をした。

彼女は驚きの声を上げ、そして自分の事のように喜んでくれた。

私が苦しんできた日々を一番近くで見守ってきてくれた由香里さん。私は彼女に話しながら、なれない子育てと自分から離れた恋に苦悩した日々が、走馬灯のように頭の中を流れて行く。

あの日々があったからこそ、今の幸せを喜べるんだよと、由香里さんは少しかすれた鼻声で優しく言ってくれた。

電話の向こうとこちらで、お互いが鼻をすすりながら、嬉しい涙を流す。それは、悲しい記憶を押し流し、不幸な運命と戦ってきた私の心を癒していく。

ありがとう、由香里さん。

あなたがいたから、乗り越えられた。時に励まし、時に叱り、共に喜び、共に涙を流し、いつも私の心に寄り添ってくれた。

『せっかく想いが通じ合ったのに、まだ3カ月も会えないなんて可哀そう過ぎるから、たまに拓都君を預かってあげるよ。デートぐらいはしたいでしょう？ それにしても、あなた達は真面目だね。二人で仕事を休んでデートしようとか思わないの？』

由香里さんはそう言ってクスクスと笑った。あなた達は我慢強いとからかわれて、『私がしっかりサポートしてあげる』と、サポート宣言までしてくれた。

いつでも心強い味方でいてくれる由香里さんに、わたしはありがとうと繰り返すことしかできなかった。

先生も走る師走とは言え、年度末程の忙しさも無い仕事納めの前日、職場のお昼休みはいつものお弁当組の同僚との、のんびりとしたランチタイムを過ごしていた。

「穂波ちゃん、どうしたの？ 今日朝からため息ばかりついてるけど……クリスマスに彼と喧嘩でもしたの？」

皆のお母さんの存在で40代の南野さんが、いつもと様子の違う私より一つ年上の長尾穂波ちゃんに声をかけた。私も今日の彼女の様子が変だなと思っていたので、気になっていた事だった。

「もしかすると、彼との結婚ダメになるかもしれないの」

穂波ちゃんは、泣きそうな顔をしてポツリとそう言った。彼女には大学時代から付き合っている同級生の彼がいる。彼女の28歳の誕生日にプロポーズされたと喜んでいたのは、ついこの間の事だ。彼との付き合いは親公認らしく、親の方が早く結婚しろと言ってい

たぐらいただつたと嬉しそうに言っていたっけ。それなのに、どうして？

「ええっ?! いったい何があつたのよ?」

穏やかなランチタイムが一変して、驚きと緊張が走った。真つ先に声を上げたのは、30代子持ち主婦の速水<sup>はやみ</sup>さん。

「それが……私、一人っ子でしょう? 両親は私に後を継いで欲しいと思つていて、彼が次男だつたから喜んでくれたの。彼の方も長男が家を継いでいるし、いずれは私の両親の面倒をみるつもりだつて言つてくれてたから、婿養子に来てくれるものだと思つてたのよ。私も両親も。いざ結婚の話になって、両親と4人で相談している時に、彼が同居はしてもいいが婿養子になるつもりはないって言いだして、両親は長尾家を潰すつもりかつて怒るし、お互いが折れないから、父がこの結婚は無かつた事にしてくれって言いだして……」

そこまで言うつと、穂波ちゃんは泣きだした。そんな彼女を見て、私は啞然とした。

二人の気持ちを通じ合つていても、すんなり結婚できる訳じゃないんだと言つる事に驚き、今の自分の立場を顧<sup>かえり</sup>みた。

私には親も兄弟もすでにいないから、反対される事は無い。慧の方も、家族は賛成してくれているらしいから、私達には何の障害も無いはず。だけど、私は穂波ちゃんの話が心に引つかかつて、思い出した事があつた。

姉が結婚する時、母はお嫁に行つてもいいと言つていた。長女だからと言つても、財産の無いような家だから後を継ぐ必要はないと、二女の私もお嫁に出すからと、姉の結婚話が持ち上がった時、そう話していた。

だけど姉は、二人ともお嫁に行つちゃったら、父のお墓を誰が守

って行くのだと言い出し、同居してお母さんを楽にしておきたいのだと言っていた。三男であるお義兄さんも同じ考えだからと、婿養子に来てくれる事になったのだった。

そんな二人から預かった拓都を守谷拓都にしてもいいのだろうか？ 私がお嫁に行ったら、父のだけじゃない、母や姉夫婦のお墓も、誰が守って行くのだろうか？

子供が少なくなった昨今、跡取りのいない家は沢山あるし、お墓を守るなんて事を考える人も少ないのかもしれない。今時の結婚は家同士と言うより本人達の気持ちさえあればと言うのが主流だ。

だけど、姉夫婦の思いを拓都へ繋ぐのが私の役目ではないのだろうか？

「彼はどうしても婿養子になるのは嫌なの？」

速水さんは、少し興奮が落ち着いた穂波ちゃんに優しく訊いている。

「ええ、彼は結構プライドの高い人で、営業職と言うのもあって、姓が変わるのが嫌なんです」

落ち着きを取り戻しつつある穂波ちゃんは、そう言って答えた。

「やっぱり男の人って、姓が変わるのって嫌なのかな？」

私は思わず、皆に問いかけていた。

「仕事上の付き合いの多い男性は、姓が変わるのは抵抗があるんじゃないかな？ 女性だって最近は結婚で姓が変わるのが嫌だと言う人増えてるものね。夫婦別姓の制度もなかなか進まないし」

速水さんはため息交じりに答えてくれた。

「穂波ちゃん、二人の気持ちさえしっかりしていたら、必ずいい所へ納まるから、諦めちゃダメよ」

最後は南野さんが笑顔で穂波ちゃんを励まし、速水さんも私も「  
そうよ、そうよ」と元気づけた。

けれど、私の中には、あの時の姉の真剣な表情と言葉が渦巻いて  
いた。

## #55：不安募る年末（前書き）

長らくお待たせしました。

今回、とても長くなってしまったので  
2話に分けて、2話同時に更新します。  
どうぞよろしく願います。

## #55：不安募る年末

突然奇跡のように、私の人生を180度変えるような出来事が起こったクリスマス週の週末。願いながらも、もう夢でしかないとどこか諦めていた私を、諦めずに真っ直ぐな気持ちでぶつかってきてくれた慧。

それでも夢のようで現実感がなくて、一方でこの現実が幸せであればある程、どこかで又運命のトラップが潜んでいるかもしれないと、不安になる自分がいて……。

いきなりの大きなトラップよりも、小さな不安で心に免疫をつけようとするかの如く、自分で不安を引きよせているのかも知れない。

週明けの12月27日の月曜日は、『今日は先輩と飲みに行くから電話が出来ない』とメールが来ていた。別に毎日電話をすると約束した訳でもないのに、慧は律義にそう知らせてきた。

残念に思いながら、本当は、同僚から聞いた話で呼び覚まされた姉の記憶に、自分の中の不安を煽<sup>あお</sup>られ、慧の声を聞いて安心したかったのだ。きっと慧には話せなかっただろうけれど、慧の声を聞いて、この幸せは現実なんだと確認したかったのだ。

その時のメールに『明日も仕事納めの後、忘年会だからたぶん電話出来ないと思う』と綴られていて、なんだか見放されているような気になったのだった。

28日の仕事納めの日も、悩んでいた同僚は元気がなく、私も浮上できないまま、それでも拓都の前では、まだ母親としていられたのに、拓都が寝てしまった後の一人の時間は、たった3日で慧の声を聞かないと心の中に積み上がる不安を持って余すようになってしまった。

この得体の知れないモヤモヤとした気持ちは、現実感の薄い幸せ

をじわじわと蝕んでいく。こんな気持ちでいちゃダメだと思うのに、考えれば考えるほど悪い方に考える癖が付いていて、あんなに喜んでくれた友達にも言える訳がなかった。

彼の声が聞きたいと思った。

それだけできつと安心できる。この幸せが現実のものだと確信できる。

いつもこの時間は、一人きりのリビングで、母親の顔から素の自分に戻る。自分の好きな事をして過ごす癒しの時間。それなのに3日前からそこに慧が入り込み、彼が全てになっちゃった。

私は携帯を握ったままぼんやりと、この3日間の記憶の中を彷徨う。

きつと今日はもう電話はかかって来ない。

こんな気持ちの時って、考えなくていい事まで考えてしまう。

今日は、虹ヶ丘小学校の先生達との忘年会だと言っていた。

……愛先生も一緒なんだ。

その時不意に脳裏に浮かんだのは、文化祭の帰りに話をした時の愛先生の恥ずかしそうな、ばつの悪そうな表情だった。彼を思うがゆえに児童の保護者にプライベートな質問をしてしまった自分を酷く恥じながらも、その思いがこちらまで伝わってきて、私は彼女を嫌う事も恨む事も出来なかった。

今頃、愛先生も一緒にいるんだと思うと胸が苦しくなる。今の慧の気持ちを疑う訳じゃないけれど、彼女の一途な思いが分かり過ぎるほど分かっているから、切なくなる。

慧と愛先生って、噂通り付き合っていたのだろうか？

千裕さんの話では、愛先生は関係ないって言っていたらしいけれど……今はと言う事かも知れない。以前の事は分からない。

だけど、クリスマスの日の彼の話の中には、愛先生の事は出てこなかった。私の事を諦めかけた時に再会したって言うだけ……



…。

思い出す、PTA総会の時、愛先生と話す慧の柔らかい笑顔を。キャンプの時の二人の間にある特別な雰囲気……。

もしかして、私と再会したがために、愛先生と別れたのだろうか？  
もしかして、私は愛先生から彼を奪った事になるのだろうか？

彼に別れを告げてから、クリスマスの日までの彼の事で、私が胸を痛める権利など無いのに……。

そんな風に愛先生を思い出したのは、慧がこの年末から年始にかけて2泊3日でスキー旅行に行くと言う話があったから。

前回の電話の時、お正月の話になって、慧は申し訳なさそうに以前から決まっていたスキーに行くと話していた。『本当なら、お正月は一緒に過ごしたいけど、今は会えないから、ごめんな。来年は一緒にスキーに行こうな』と謝罪の言葉と共に優しくいつてくれた。

その時は、『他の先生も一緒だから、夜電話できるかどうか分からないけど、できるだけするようにするよ』と言う彼の言葉で、同僚の先生と行くんだと思っただけで、メンバーの名前とか人数とかまで詳しく訊かなかった。申し訳なさそうにしている彼に、それ以上訊く事が出来なかった。

でも後になつてから、キャンプの時の事や写真を撮りに紅葉の山へ行った事を思い出し、あのメンバーで行くのもかもしれないと確信してしまった。

彼にしたら、純粹にスキーを楽しむために行くのだろうけれど、愛先生も一緒かもしれないと思うと、何となく割り切れない思いに囚われてしまう。でもこんな気持ちを持つ事は思い上がりで、彼の気持ちを信じていれば、周りの誰かが彼の事を想おうと、気にしないでいい事なのに……。

こんな思いに囚われている自分が嫌で、余計に落ち込んでしまった。

年末年始のお休みに入った29日は、拓都とお正月の買い物に行き、午後から家の周りの大掃除をした。去年までは公務員宿舎だったお陰で、大掃除も部屋の中だけで良かったけれど、こちらは一軒家なので建物の周りや小さな庭の落ち葉や草、ゴミ等の掃除も追加された。

父がこの家を建てた時に植えた木々は、いつの間にか大きくなつたけれど、庭いじりの得意なお隣のおじさんが、庭の木々の選定をしてくれていて、伸びすぎないようにしてくれていた。

大掃除の途中で休憩のため、庭に面したりビングの軒下に置いたベンチに座り、拓都とおやつタイムをしながら、小さな庭を眺めた。母の作った小さな花壇は、今の季節は何もないけれど、春になったらチューリップやスイセンが芽を出すだろう。

フラッシュバックのようにこの庭で過ごした父や母や姉との思い出が蘇る。そしていつしか小さな姉と私の姿が拓都と置き換わっていた。

やっぱり拓都もこの庭で、この家で大きくなり、思い出を作つて行つて欲しい。

それが姉達の望みでもあり、私の幸せよりも優先事項なのだと思うた。

「ママ、さつきね、落ち葉の下に虫が一杯いたよ。冬ごもりしていたのかなあ」

拓都がおやつを食べ終わると、ポツリとそんな事を言った。『冬ごもり』なんて言葉が出てくるのは、この間読んだばかりの絵本のせいだ。いろいろな生き物の冬眠の様子が優しい絵と共に書かれていた。

「そうだね。落ち葉のお布団で眠っていたのかもしいね」

私はそんな風に答えながら、私もこのまま春まで冬ごもりしたいなあなんて考えていた。

そうしたら、慧に会えない3カ月間も、余計な不安に悩まされず、夢を見て過ごせるのに……。

その夜、三日ぶりに慧から電話があった。

待ち望んだ慧の声は、私の胸に甘く響いた。やっぱり現実だったんだと、今更ながら安堵している自分に情けないような気持ちになりながら、彼の声を聞かなかった2日間に溜め込んだ不安が、水が蒸発していくように消えて行った。それは消えたと言うより、それこそ水蒸気のように姿を変えて見えなくなってしまっただけで、又何かのきっかけで、雨のように心に降り積もってくるのだらうけれど……。

慧とは、その日の出来事や拓都の事など、たわいもない話しをした。そんな日常の取るに足らない会話に幸せを感じ、心は不思議と満たされていく。

「由香里さんがね、3ヶ月も会えないのは可哀そうだから、時々拓都を預かってくれるって言うってたよ」

「美緒は良い友達がたくさんいるな。でも、拓都を除け者にしてるみたいだよな」

慧の言葉に、私は単純に由香里さんの申し出を喜んでいた自分が恥ずかしくなった。慧はそこまで拓都の事を考えていてくれるのに、私は浮かれ過ぎている。

「そ、そうだよな。今度会う時は、3人一緒じゃないと……」  
私は大いに反省した。

「美緒、違うんだ。俺達が会うために拓都を預ける事に、少し後ろめたさを感じたんだ。でも、拓都の事は最優先だと思っているけど、俺達の事も大切にしたいと思うてる。本当は、美緒とこうして電話

してても、まだどこか現実味がなくて……いつもクリスマスの事は夢だったんじゃないかって思ってしまうんだ。だから、美緒の声だけじゃなくて、実際に会って、ここに美緒がいるんだって実感したって思ってる。だから、川北さんの申し出は、凄く嬉しいよ」

慧も私と同じように、実感できないのだと知って、なぜだかホツとした。彼だけがどんどん現実の中で先に行ってしまうようで、その事も不安だった。

私も同じように思っていたと告げると、彼は「俺達はバカだな」と苦笑した。

明日の夜スキーに出かける前に電話すると言って、慧は電話を切った。私はその後もしばらく余韻に浸って、クリスマスの日の慧を思い出していた。

会いたい。

3年会わなかったのだから、3ヶ月ぐらいあつと言つ間だと言っていたのに、慧がさっきあんな事を言うから、私も会って実感したくなってしまうた。

まだクリスマスから4日しか経っていたのに、夢のようで記憶が曖昧だ。

せめて慧の写真でもあつたら良かったのに……全て消してしまつたあの日の自分が恨めしかった。

12月30日は、朝から家の中の大掃除をした。昨夜の電話で少し心の余裕ができたのか、大掃除への意欲が湧き、朝早くから張りきっている自分が可笑しかった。

現金なものだなど、自分にツツコミながら、昨夜思いついたアイデアをもう一度思い返してニンマリとした。今夜の電話の時に、慧の写真を書メールで送って欲しいと頼もうと思いついたのだった。会えないのなら、せめて写真だけでも……。

「ママ、今度は何をしたらいいの？」

2階の自分の部屋の片づけをしていた拓都が階段を下りてきた。

「今度はねえ、窓ふきしてくれるかな？ ママが上の方をふくから、拓都は下の方をふいてね」

私はリビングの掃き出し窓を指差し、拓都に古新聞を渡した。拓都は嬉しそうに「うん」と返事をする。

熱いお湯で窓をひと拭きして、乾いてしまっ前に拓都和古新聞で拭きあげる。そうすると跡が残らずにピカピカになるのだ。

窓を拭きながら、外へ目をやると、冬晴れの青い空。朝は冷え込んだけれど、日中は日差しが温かい。

「今日はいいお天気だね。大掃除日和だよ」

私がそう言って拓都を見下ろすと、拓都は首をかしげて「おおそうじびより？」と訊き返してきた。

「そう、大掃除をするのに丁度良いお天気だつて言う事だよ」

拓都にニツコリ笑って説明すると、拓都はしばらく考えた後、「じゃあ、キャッチボールびよりつて言うのもあるの？」と訊いてきた。私は拓都のカワイイ質問に、思わず笑ってしまった。

「そうだねえ、キャッチボールするのに丁度良いお天気は、そう呼んでもいいかもね。今日もいとお天気だから、キャッチボール日和だけど、今日は大掃除日和だよ」

ニンマリ笑いながら拓都に答えると、「はい。でも、今度キャッチボールびよりになったら、キャッチボールしに行こうね」と、返してくる。私は拓都のその返しに驚きながらも、成長を感じて嬉しくなった。

「お休みの日ならね」

私はそう返事をしながら、春になったら3人でキャッチボールに行けるといいなと考えていた。

西の空に太陽が傾きだした頃、予定していた大掃除は無事に済んだ。汚れたバケツの水を庭にまいてしまおうと外に出ると、明日の晴れを約束するような夕日に、しばし見とれた。

これなら道は大丈夫だろうな。

今夜からスキーに出かける慧の道中の天気心配だった。雪に降られてチェーン規制がかかったり、高速道路がストップしてしまつたら大変だからだ。このところ晴れ続きで、スキー場のある県も大雪が降つたと言う情報も聞いていない。

私は空を見上げ、安堵の溜息を吐くと、頭に浮かんだ不安に胸がチクリと痛くなった。

……愛先生も同じ車で行くんだろうか？

いつまでも愛先生にこだわっている自分に嫌悪しながら、その思いに無理やり蓋をしたのだった。

**# 5 5 : 不安募る年末（後書き）**

この後、# 5 6 も続けて更新します。

**#56：つかの間の逢瀬（前書き）**

#55に引き続いての更新です。

ベタ甘なので、要注意です。  
よろしくお願いします。



## #56：つかの間の逢瀬

12月30日の夜、10時頃に慧から電話があった。約束通りスキーに出かける前に電話をくれたようだ。

「美緒、拓都はもう寝た？」

いきなりそんな事を問いかけられて「ええ」と答えると、「じゃあ、今からちよつと美緒の家に寄ってもいいかな？」と訊かれて、驚いた。

「えっ？　ここへ来るの？」

「ああ、まだ少し時間があるし、玄関先でいいから、美緒に会いたいんだ。着いたら携帯に電話するから」

慧は慌てたようにそう言うと、電話を切ってしまった。

私はしばらく携帯を持ったまま、慧の言葉を飲み込むのに時間がかかってしまった。

ええっ？！

今から来るの？

私、パジャマだし……。

スッピンだし……。

……そこまで思って、私は慌てて自室へ飛び込むと、普段着に着替えた。そして、洗面所へ行き鏡を覗き込む。

もう、化粧まではしなくてもいいよね？　この前もスッピンだったし……。

普段から薄化粧のだからと自分に言い訳して、リビングに戻った。なんだかドキドキしてる。まだこの間会っただけなのに……会いたいなんて言われると、妙に恥ずかしい。

その時握りしめていた携帯が、ありふれた着信音を鳴らした。

「美緒、今、家の前に着いた」

「あ、ちよっと待って、すぐに開けるから」  
携帯を握ったまま、玄関へ急ぐ。又心拍数が跳ねあがった気がする。

ドアを開けると、ダウンジャケットを着た慧が立っていた。

あ、前にもこんな事が……デジャブのように感じながら、それは家庭訪問の時だと思い出した。

あの時には想像もしなかった現実に戸惑いながら、彼を見上げると包み込まれるような優しい笑顔。

又心臓が跳ねた。

「こん、ばんは」

自分の戸惑いを知られたくなくて、慌てて挨拶をする。でも詰まった言い方に動揺はバレバレで……目の前の彼は肩を震わせて笑い出した。

「こんばんは、美緒。とにかく中へ入れて」

その時吹き込んだ冷たい風に、まだ慧が玄関の外にいる事に気付き、あわてて「どうぞ」と招き入れた。

「リビングの方が温かいから、上にあがって？」

私はつつかけを脱いで上にあがりながら、慧に声をかける。咄嗟とつさに慧が、先導するように中へ入って行くこととした私の手首を掴んだ。

「美緒、上にあがったら、帰りたくなるから……ここで」

慧の言葉に振り返ると、掴まれた手首を引っ張られ、いつの間にか慧の腕の中にいた。その事を自覚した途端、フリーズしたまま一気に心臓は跳ね上がり、頭へ向かって血液を送り出す。頭全体が発

火するんじゃないかと思うぐらい熱を持っているような気がする。  
低い上がり框かまちの上にいる私より、まだ慧の方が高くて、私を抱きしめたまま彼は息を吐き出した。

「良かった……」

彼は思わずと言う感じに呟いた。

「えっ？」

「美緒がドアを開けた途端、守谷先生なんて呼ばれたら、どうしようかと思ったよ。良かった……夢じゃ無くて……」

彼の安堵の言葉に、胸が苦しくなる。

長い間彼を苦しめてきたから、簡単にこの現実を信じられないの  
だろう。私だって信じられない思いでいるけれど、私の場合とは違  
う。

本当に彼にとって良かったのだろうか……。

私は我に返って、彼の腕の中で逃れようと身じろぐと、彼もハッ  
としたように「ごめん」と言って、その腕を緩めた。

「慧……ごめんなさい」

彼の腕から逃れた私は、俯いたまま彼に謝罪した。今更だけど、  
謝らずにいられない。

けれど、そんな私の様子に気付いた彼は、慌てた。

「美緒、ごめん。美緒を責めた訳じゃないよ。ああ、ごめん。美緒  
はずっと俺に対して罪悪感を持つてたのに、こんなこと言ったら、  
責任感じちゃうよな。違うから、美緒、違うからな。俺は嬉しすぎ  
て、夢のような気がしていただけだよ。だから、美緒、会わなかつ  
た3年間の事はもう忘れよう。俺達は今から始まるんだって、この  
前も言っただよな？」

俯く私の顔を覗き込むようにして慧が言い募り、問いかける。私は頷くと「わかってる」と視線を上げて彼の顔を見た。目が合った彼はニツと笑うと、「バカだな」と言いながら私の目元に手を伸ばした。

クリスマスの日から壊れた涙腺は、また涙を大量に製造していたようだった。彼を安心させたくて、一生懸命笑顔を作ったけれど、泣き笑いの情けない笑顔なんだろうな。

「美緒、寒くないか？」

家の中とは言え、暖房も何もない玄関だ。それにさっきドアを開けた時に冷たい空気が入り込んでいる。だけど、寒さなんて少しも感じていなかった。「寒くない」と答えたけれど、慧には寒そうに見えたのか、ダウンジャケットを脱ぐと私に着せかけてくれた。

ダウンジャケットは慧の熱が蓄えられているせいか、とても温かで、彼に抱きしめられているようだと思うと、恥ずかしさと嬉さでフツツと笑いが込み上げてきた。

「ありがとう。でも、慧は大丈夫なの？」

「俺は大丈夫。美緒を充電したから……」

心はポツカポカ……と彼が恥ずかしげもなく言うから、こちらが恥ずかしくて赤面してしまう。

そう言えば、私達が中距離恋愛をしていた頃、週末に会うとすぐに彼に抱きしめられ、美緒を充電しないと動けないなんて言われたっけ……。

「もうっ、慧ったら……」

私が苦笑すると、慧の真っ直ぐな熱のこもった眼差しが私を捉えらる。再び伸びてきた手が、ダウンジャケットごと私を抱きしめた。

それはまるで、私がここにいる事を確かめるように……。

また、さっきの熱がぶり返す。ドキドキと高鳴る胸の鼓動にうるたえていると、私の頭上で慧が息を吐いた。

「美緒、会いたかった……三ヶ月なんてあつと言う間だと思っただのに、まだクリスマスから五日しか経っていないのに……情けないよな」

「ううん。私も同じだよ。こんな日が来るなんて想像もしなかったから、まだどこか夢みたいで……」

「そうだな……でも、ごめんな。こんな形でしか会えないなんて……」

「それは、拓都と私の事を考えての事でしょう？ 私達はまだ担任と保護者なんだから、今は変な誤解や噂が立たないようにしていた方がいいと思うし……慧の立場が悪くなるような事になって欲しくないの。だって、守谷先生は前科があるし……」

顔を上げて彼を見上げると、私はクスリと笑った。

「前科って言うな。俺の方が被害者だよ」

拗ねたような、怒ったような顔をした慧に、「ごめんなさい」と言いながらも笑いが込み上げてくる。するといきなり鼻をつままれて「美緒って案外意地悪だよな。頑固だし……」と聞き捨てならぬ言葉を言われる。

なによ、慧の方がずっと意地悪じゃない！

私は彼の腕の中から抜け出そうと彼の胸に手を当てて押しながら「慧の方が意地悪」と言ってもがいた。慧は腕を緩めて私を解放すると、「そうやってすぐ怒るところが単純だけだな」と言って笑う。

誰が単純よ！

私はムツとしながら彼を睨みただけれど、心の中はあの頃に戻った

みたいで言んでいる自分がある。

「安心した。美緒が変わって無くて」

私の顔を覗き込むように見て、ニツと笑う彼の笑顔は、きつと多くの女性を惹きつけるものだろう。さつきまでおとなしくしていた心臓が、またドキドキと跳ね出した。

ずるいよ慧、そんな風に言われたら、怒れないじゃないの。

私はなんだかムズムズとした恥ずかしさに、話題を変えようと、彼に言おうと思っていた事を思い出した。

「ねえ、慧の写真を撮らせて」

さつきまで怒っていた私が、いきなりこんな事を言ったから、慧は驚いた顔をして「写真？」と訊き返した。私はポケットに入れた携帯を取り出すと、「今の慧の写真が無いから……」と答えた。

今のどころか過去のも無いのだけれど、その事は言えない。

「そっか……」

慧はポツリとつぶやくと、「携帯貸して」と私の手から携帯を奪うと、おもむろに私の肩を引き寄せ、携帯を持った手を前に伸ばすと自分達の方へカメラを向けた。そして、頬と頬をくっつけて、撮影ボタンを押す。携帯はカシャッと綺麗な音を立てて撮影を完了した。

私はその1分も経たない間になされた事に啞然としたまま、慧が撮れた写真を見て笑っているのに気付き、手元の携帯を覗き込んだ。

「いや〜！ 消して！！ 慧の写真だけでいいのに！！」

そこには、驚いて目を見開き、口をポカンと開けたお間抜け顔の私と、爽やかな笑顔の慧が、頬をくっつけて写っていた。

嫌〜！ 恥ずかしすぎる！！

「え、美緒がこんなに可愛く写ってるのに、消すのか？　じゃあ、おれが貰うよ」

慧はそう言いながら、携帯を操作している。しばらくすると彼のズボンのポケットから、着信音が流れた。

さっきの写真を自分の携帯に写メールしたのだと理解した頃に、「じゃあ、もう一回」と又肩を引き寄せ頬をくつつけられた。

「今度は笑えよ。はいチーズ」

息の吐く間もなく、慧は伸ばした腕の先の携帯のボタンを押した。再び携帯は、小気味いいカシャっと言う音をさせて、撮影を完了させたのだった。

私は言われるままに赤い頬に引きつった笑顔で、完璧な微笑みの彼ときこちなく写っていた。

彼は「まあまあかな」と言うと、その写真も又写メールしているようだった。

慧のペースで進められた怒涛の撮影会は口を挟む隙もなく、「はい」と携帯を返され、慧だけの写真を撮らせて欲しいと言おうと思ったら、「じゃあ、そろそろ行くよ」と告げられてしまった。

何となく心残りのまま、ダウンジャケットを返し、外まで見送ろうとつかかけを履こうとしたら、慧に止められた。

「外は寒いから、ここでいい。美緒、約束できないけど、できるだけ電話するようにする。二日の夜には帰って来るから、また連絡するよ」

「他の人も一緒だから、無理しなくていいからね。気を付けて行ってね。居眠り運転しないように」

「昼間しっかり寝てあるから、大丈夫だよ」

そう言って彼はクスリと笑うと、手を伸ばして私の頬をそつと撫でた。

私、心配そうな顔をしたのだろうか？

「来年は3人で行こうな。じゃあ、行つてきます」

そう言って彼は背を向けた。ドアを閉めるためにつっかけを履くと、その背に「いつてらっしやい」と言う。ドアの所で彼を見送ると、彼は門燈の灯りの中で振り返って笑顔を見せると手を振った。私も手を振って笑顔を返した。

結局、慧の車が走り去るまでドアの所で見送った。そしてドアを閉める前に、心の中でもう一度「いつてらっしやい」と言う。

誰と一緒にもいい。

私達の心は繋がっているのだから……。



#56：つかの間の逢瀬（後書き）

つかの間の逢瀬が、美緒に信じる強さを与えてくれました。  
でも、また、不安になるかもしれないけれど……。

## #57：終わり良ければ（前書き）

長らくお待たせしました。

季節外れの大晦日のお話です。

いろいろあった1年の締めくくり、

終わり良ければ……ですよね。

少し長くなりましたが、どうぞよろしくお願いします。

## # 57：終わり良ければ

大晦日の朝、電波時計のアラームが鳴りだす前に目が覚めた。いつもは寒くてなかなか布団から出られないけれど、今日はすくっと起きると、カーテンの隙間から外を見る。まだ薄暗い冬のこの時間、それでも起きだしている人が多いのか灯りが点いている家が多い。見上げた空には、寒々と星が瞬いている。ブルっと身震いして、脱いでベッドの上に置いておいたカーデイガンを羽織った。

「今日もいい天気になりそう」

頭の中で思った事が口を突いて出て、思わず苦笑する。頭の中は、慧は無事にスキー場へ着いただろうかと言う事。スキー場もいいお天気だといいな。

リビングのファンヒーターのスイッチを入れ、水を入れたヤカンに火にかける。炊飯器のスイッチを入れて、又ファンヒーターの前に戻って来た。点火5秒のファンヒーターは、すでに吹き出している温風で部屋を温め始めていた。

ファンヒーターの前で膝を抱えて座り、ポケットから携帯を取り出した。メールも電話の着信も無い。だからと言って、がっかりする訳でもない。メモリーから昨夜も散々見た画像ファイルを探して開き、お目当ての写真を見て、一人頬を緩ませる。

結局昨夜撮った写真は二枚とも保存されていて、自分の顔を見るたびにガツカリしてしまうのだけど、写真を撮った時の事を思い出すと、くっつけた頬の部分が熱を持つてくるような気がする。

「慧」

写真の笑顔に呼びかけると、こちらを見て微笑んだ気がした。

「ママー、おはよう。今日は何をするの？」

外が明るくなった頃、拓都が起きてきた。新しい年を迎えるための準備が、拓都にとっては楽しいらしい。それは去年までと環境も変わり、する事も少し変わったせいなのか、お手伝いできることが嬉しいのか、今日もニコニコ笑顔で起きてきた。

「今日はね、おせち料理を作ろうか？ 拓都の好きな栗きんとん」

「えー、本当！ 一杯作ってね。僕お手伝いするから」

嬉しそうな拓都の笑顔を見たら、私も嬉しくなった。

おせち料理と言っても、二人だけだし、全て手作りする訳じゃない。好きなものは手作りするけれど、市販のものも混ぜて重箱へ詰める。拓都のリクエストで、おせち料理と言えない唐揚げやウインナー等も仲間入りするのが、我が家流だった。

朝ご飯を済ませ、簡単に掃除洗濯を済ますと、おせち料理作りに取り掛かった。

エプロンを付けた拓都が、茹でて柔らかくなったサツマイモをマッシュシャーでつぶす。クチナシの実を入れて茹でたので、表面は綺麗な黄色に染まっている。それを裏ごしして、砂糖を入れて火にかけて良く練ると、滑らかな芋餡ができる。それにピン入りの栗の甘露煮を添えれば、拓都の大好きな栗きんとんの出来上がり。「味見する？」と訊くと、「するする」と嬉しそうに寄って来た拓都に、芋餡をスプーンにすくって渡してやると、美味しそうに舐めている。

「ママ、おいしい!!」

美味しい顔と言うのはこう言う顔だろうと思いつつながら、私は「そう、良かった」と笑い返した。

こんな時が、何とも言えない幸せを感じる。

もしもここに慧がいたら、きっとその幸せは何倍にも膨れ上がる

に違いない。私は1年後を想像して、フツツと笑った。

黒豆や昆布巻き、蒲鉾は市販品だけど、たつくりと出汁巻き卵、お煮しめは、母から教わった通りに作る。私がまだ高校生の頃は、女三人でワイワイ言いながらおせち料理を作ったものだった。

「ママ、メール来たよ」

そろそろお昼ご飯にしようと思いを始めた時、リビングのテーブルに置いた携帯がメールの着信を告げた。メールの着信音を覚えていた拓都が、携帯を持って駆け寄って来た。

「ありがとう」と受け取ると、携帯の上蓋の小さな窓に表示された送信者の名前を見た。拓都がそれに気付いたかどうかかわからないけれど、クリスマスその後、慧の登録名を守谷先生からアルファベットのKに変えた。着信時に誰かに見られてはいけないと思ったから……。

彼からのメールには、青空をバックに輝く雪山の写真が添付されていた。

「わあ、ママ、これはどこ？」

私は携帯の画面を見つめたまま、しばし意識は写真のスキー場へ飛んでいた。いつの間にか、拓都が携帯の画面を覗き込んでいた事に気が付き我に返る。

「スキー場だよ」

「スキー場？　スキー場って雪がいっぱいなんだね。ママのお友達は今スキー場にいるの？」

お友達、ね……。

そのお友達が守谷先生で、拓都和家族になりたいと思ってるなんて知ったら、どんな顔をするだろう？

守谷先生が大好きな拓都の事だ、きつと喜んでくれるに違いない。そんな想像をしながら、私はクスツと笑って「そうだよ。今スキーをしに行ってるんだって」と答えた。

「スキー？ スキーって雪の上を滑るやつだよな？ この前テレビで見たよね？」

そう言えばつい先日、お笑いタレントが初めて事に挑戦するって言う企画で、スキーをしていたのを拓都と見たっけ……転んでばかりだったけれど……。

「そうだったね。拓都もスキーしてみたい？」

「うん。してみたい！ 雪がいつぱいあるところへ行ってみたい！」キラキラの瞳で嬉しそうに言う拓都を見ながら、慧の言った『来年は3人で行こう』と言う言葉を頭の中で反芻する。

「じゃあ、拓都がもう少し大きくなったら……2年生になったら、スキーに行こうか？」

「ホント！ ヤッター！！」

飛び上がらんばかりに喜ぶ拓都を見ながら、来年のスキー旅行を想像する。

来年の事を言ったら、鬼が笑うぞと自分を諷める声が聞こえる。こんなに先の不確かな約束を拓都とするなんて、私らしくないと思いつつも、昨夜の逢瀬で浮かれる自分をいつの間にか許容していた。

\*\*\*\*\*

大晦日と言っても、拓都はいつもどおり夜9時過ぎに眠ってしまった。

った。本人はもう小学生だから、もう少し起きていてテレビを見ていたいと言っていたのに、体が覚えたスケジュールは時間通りに眠りを誘う。

拓都がいつも見ているアニメの主題歌を歌っているアイドルグループが紅白に出ているので、どうしても見るんだと頑張っていたけれど、コタツに入ったままコツクリコツクリと居眠りし始め、慌ててベッドで寝るように促した。けれど、起きていたい目的をきちんと主張するあたり、成長したなと実感する。

去年までは、シングルマザーの友達たちと年越しパーティをしていたっけ……。子供達は集まるとテレビよりもゲームや玩具で遊ぶ方が楽しくて、ひとしきり騒いだ後、電池が切れるように夜9時過ぎにはバタバタと倒れ、眠ってしまった。それから母親達の大宴会。お酒とおつまみで、あらゆる話題で盛り上がり、新しい年を賑やかに迎えていた。

今年の二人きりの年越しを少し寂しいなと思いつながら、来年へと思いを馳せる。それだけで心の中にホワツと暖炉の炎が燃え上がったように暖かくなった。

こんな幸せが待っているなんて、思いもしなかった今年の初め。再会したときには恨んだ運命も、今は感謝さえしている。でも一番は、友達のおかげ。彼女達がいなかったら、今の幸せは無かった事だけは断言できる。

私は今年の内にと、美鈴と由香里さんと千裕さんに感謝のメールを送った。

今年ありがとう。私はあなたのような素敵な友達を持って幸せです。来年もよろしくね。

メールを送った後、又昨夜撮った写真を開く。慧にもメールを送ろうかなと思つた時に、携帯が鳴りだした。上蓋の小さな窓には、『K』の文字。

「美緒、今いいか？」

何となく潜めたような声。周りに誰かいるのだろうか？

「うん。いいけど、慧の方はいいの？」

「飲み会から抜け出してきたから、あまり長く話せないけど……」  
「めんな」

「ううん。電話してくれただけで嬉しい。それからメールもありがとう。いいお天気で良かったね」

私は昼間貰ったメールに添付されていた写真を思い返していた。

「ああ、暑い位だったよ。思ったよりも人も少なく、リフト待ちもあまり無かったから、ガンガン滑れたよ」

「良かったね。拓都にスキー場の写真を見せたら、スキーをしてみたいって言ってたよ。来年はスキーに行こうかって言ったら、とても喜んでた」

私は拓都の喜んだ顔を思い出して、喜々として話す。慧も「3人で行けるのが今から楽しみだ」と嬉しそうに言ってくれた。なんだかそれは、今の幸せが1年後まで続く確証を貰ったみたいで嬉しかった。

以前慧と付き合っていた時に信じていた未来は、あっけなく崩れ去ったから、未来に期待するのが怖くなってしまっ。今の私は、一年後の約束を守る事が、精一杯の真実だった。

「美緒、今年はこの電話で最後になると思うけど……今年はいろいろありがとう。美緒が変わらずにいてくれた事が、一番嬉しかった。来年もよろしくな」



「慧……私の方こそ、拓都共々ありがとう。私も慧がクリスマスに来てくれて、嬉しかった。再会してからいろいろあつたけど、終わり良ければすべてよしだよ。こちらこそ来年もよろしくね」

そう、終わり良ければすべてよし、だよ。彼との電話を切った後、ほんわかと胸が熱くなった。

これは現実、そして未来へ続くと信じていいんだよね。

慧と電話をしている間に、由香里さんと千裕さんからメールが届いていた。

由香里さんからは、報告した電話の時のように、私と慧の事を自分の事のように喜んでくれている言葉と、3学期の間どんな協力もするからと、又サポーター宣言され、そして、『美緒の最高に幸せな笑顔を見られる日が早く来る事を願っています』とつつづられていた。

これって、もしかして……結婚式が早く来るようにと言う意味だろうか？

そう考えただけで、カツと頬が熱くなるような妙な恥ずかしさがある。結婚という言葉をあの日以来口にはするけれど、どこか遠い世界の話のようで、まだまだ自分の世界の話だと思えない。そのくせ、家族になると言う話の方には、現実味を感じ始めていた。

千裕さんからのメールには、もちろん私と慧の事なんて書いて無けれど、私と出会えて嬉しかったと書いてくれた。そんな風に言ってくれる千裕さんに、ありのままの真実を伝えていない自分が情けなくなる。でも……拓都にさえいわない事だから、これ以上知っている人を増やすのは、どこか怖いところがある。けして千裕さんが信じられない訳じゃないけれど……。

メールを読み終えるのを待っていたかのように、携帯が鳴りだした。それは美鈴からの電話だった。

「美緒、メールありがとう。返事打つより、電話した方が早いと思つて……誰かと電話中だった？」

「どうやら、慧と電話中にもかけてくれたようだ。」

「え？ うん。慧と電話してたから……」

「今年最後の電話だったのかな？ それにしてもあなた達は、この年末年始も会わないつもりなの？ せつかくよりを戻したのに、3月末まで会つのを我慢するの？」

美鈴はいつものようにズバズバと切りこんでくる。でも、私が本当に辛い時には、そつとしておいてくれたけれど……。

「そのつもりだよ。拓都の事が最優先だから……それに今、慧はスキーに行つてるし……」

でも本当は、昨夜会つたんだと言おうと思つたら、美鈴の驚いた声に遮断された。

「ええっ?! 守谷君、やっぱりスキーに行つたの?!」

「な、なに？ やっぱりつて？」

「え？ やっぱりつてスキーに行く事、知つてたの？ あっ、虹が丘小学校の先生達と行ったんだから、美鈴も聞いているの？」

「え？ あっ！ そ、そうなのよ、学校でスキーに行く話を聞いてたけど、美緒と上手くいったからスキーには行かないと思つて……」

「どうして？ どちらにしろ、今は私達会わないから、慧がスキー

に行ってもおかしくないと思うけど……」

「美緒は、スキーに行くメンバー聞ってるの？」

メンバー？

なぜそんな事を訊くの？

「先生達と行くとしたか聞いていないけど……誰先生と行くかまでは聞いていないの。私は1年の担任ぐらいしか分からないから、聞いても分からないと思うし……」

あつ、そうか。

やっぱりあのキャンプの時のメンバーで行っているんだ。

その事を美鈴が知っているから、女の人も一緒なのを心配してるんだ。

まさか美鈴が愛先生の気持ちまで知っているのだろうか？

もしかして……以前に愛先生と付き合っていたと言う噂を聞いたとか……？

「そうだよな。保護者からしたら、子供の関係で接する先生しか会わないから、知らないよね」

美鈴のどこかホツとした声に、まだ何か隠してるような気がした。何を隠してるの？

私に知られたくない事？

「美鈴がそんな事気にするのは、メンバーの中に女の先生もいるからなの？」

「えっ？ 守谷君がそう言ったの？」

「ううん。慧はそんなこと言っていないけど、仲の良いメンバーがいる事は知ってるの。夏休みに友達家族とキャンプに行った時、そ

の先生グループもキャンプに来ていて会ったのよ。そのメンバーで文化祭展示用の写真も撮りに行ってみたいだし……だから、スキーも多分そのメンバーなんだろうなって思ってた。慧には確かめなかったけど」

「そう……美緒は、知ってるんだ。守谷君が女性も混じったグループで泊りがけでスキーに行っても気にならないの？」

「気にならないって言ったら、嘘になるけど……女性が混じってるって言っても、同僚でしょう？ 女性とか男性とか関係ないんじゃないの？」

「そうかもしれないけど……守谷君はやっぱリモテるのよ。一緒に行ったメンバーの中に守谷君目当ての人がいるかもわからないし、泊りだし、皆でお酒を飲む機会もあると思うし……守谷君だって一応男だし……」

美鈴は酔った上での何かを心配しているのだろうか？  
それこそ……

「美鈴、女性と二人きりで行った訳じゃないんでしょう？ 他の先生もいるんだし、男だからってそこまで心配しなくても……」  
そこまで言っただけで思っ出した。

美鈴は10年近く付き合っていた彼に、たった一度の過ちの責任を取りたいからと、別れを告げられたのだった。

それこそ、私と慧よりも深い絆で結ばれていた二人だったはずだ。信じ切っていたはずだ。

だから、心配になるの？

「美緒、守谷君は一途だから心配ないと思うけど、女性も一緒だと分かってたのに、どうして誰と行くのか聞かなかったの？ 多少は

気になったのでしょうか？ 嫌だったら嫌だと言う気持ちだけでも伝えなきゃ。私ね、直也に言われたのよ。彼が仕事や出張であまり帰って来なくなつた時、本当に仕事だろうかって不安になりながらも、疑う事は彼を信じて無い事だと思って、口にできなかつたの。でもね、別れる時に、『美鈴は俺が帰って来なくても、仕事と言えば何も言わなかつた。詳しく聞こうともしなかつた。俺に関心が無くなつてきたんだらう？』って言われて、信じるってどういう事か分からなくなつたの。だから、気になったのなら、どんなに小さな事でも訊いた方がいいと思うのよ」

私は何も言えなかつた。美鈴が受けた傷が、こんなにも深いものだつたなんて……私に軽く婚活しようなんて言うから、もう吹っ切れているものだと思つてた。

そんな美鈴が自分の傷をさらけ出して、私のために注意してくれているのだと思うと、彼女の思いやりを胸が痛くなるほど感じた。

「美鈴、大丈夫だから。あのね、昨夜、慧がスキーに行く前に会いに来てくれたの。玄関先で少しの時間だつたけど、私達の気持ちはしっかり繋がつてるから、大丈夫だよ。美鈴にはいつも心配かけてるけど、慧にも同僚との付き合いがあるのは理解してるから、何も言わなかつたの。本当に私達は大丈夫だから」

「はいはい、しっかり惚気られたわね。ちゃんと守谷君とも会ってるんだ。それなら心配無いね。会える時にはできるだけ会って、不安な事は出来るだけ話して、気になる事は訊いて、お互いに誤解の無いようにしないとダメだよ」

美鈴はなんだか言つても心配性なんだから……。

「はい、わかっています。もう同じ失敗はしないし、慧と離れる辛さは嫌と言うほど体験したから、大切にします」

私は少し冗談ばくクスクス笑いながら、美鈴に宣言していた。

そして、私の心の片隅の小さな不安は、心の奥にしまって、自身自身に大丈夫と暗示をかけて蓋をしたのだった。

## #58：新しい年（前書き）

お待たせしました。

季節外れの……もしかしたら季節先取りの

お正月の話題です（笑）

急に寒くなってきましたので、温かくしてお読みくださいね。  
どうぞよろしく願います。

## # 58 : 新しい年

「あけましておめでとございます」

新しい年の元旦の朝、私は起きてきた拓都と共に仏壇の前で並んで座った。

両親と姉夫婦に新年の挨拶をして、心の中でそっと願う。

慧と二人で拓都を守って行きます。どうぞ、見守っていただきます。

新しい年は、穏やかに始まった。

生まれ育ったこの家で新しい年を迎えるのは、何年振りだろうか？  
法事以外で、戻る事の無かった実家。

この家には姉達の思い出が多すぎて、辛すぎて、帰って来れなかった。

でも、拓都のためにも、この家に戻らなきゃと思った。この家で拓都も大きくなって行って欲しかった。拓都の両親の思いの残ったこの家で、拓都の成長を見守ろうと決意して戻ってきたのだった。  
やっぱり私はこの家にずっといたい。慧は私の願いを受け入れてくれるだろうか？

私は横に首を振って、不安を振り払った。

今は結婚に関する事は考えない。3学期が済むまでは、いろいろな事に心悩ませない。いずれ、考えるべき時がやって来るのだから、今はこの甘い幸せに浸っていたい。

先案じしたって、ろくな事にならない事は、身をもって体験したのだから、今だけの事を考えてみよう。

私はもう二度と同じ間違いをしないと心に誓った。



今朝起きたら、千裕さんから新年メールが来ていた。

『あけおめ〜！ 今年もよろしくね。今年こそは美緒ちゃんの恋が成就しますように！』

千裕さんだったら……。

友の想いに胸が熱くなつた。けれど、そんな友に真実を告げられない自分が、酷い裏切りをしているようで辛い。

ごめん。ごめんね、千裕さん。

でも今の私には、拓都にまだ何も告げられない理由も、彼とプライベートで会わない理由も、上手くごまかす自信が無い。彼と想いが通じ合った事だけでも話したい気持ちはあるけれど、千裕さんの事だから、いろいろ訊きたがるだろうと思うと、それらを上手くやり過ごす自信がない。だから、待っていて欲しい。3学期が終わったら、真つ先に千裕さんに言うから……。

相手に伝えられない言い訳をしながら、ポツポツと返信のメールを打つ。

『明けましておめでとございます。今年もよろしくね。西森家にとって幸せな一年でありますように！』

メールを送信してから気付いたけれど、殆ど年賀状と同じ内容だったと思いついて苦笑した。

それでも、続けて良く似た内容で、美鈴と由香里さんにも新年メールを送った。そして、慧にも今年最初のメールを送る。床の間に飾ったお供え餅の写真を添付して、あけましておめでと……。

私はニンマリとして送信ボタンを押したのだった。

「拓都、お餅何個食べる？」

仏間での新年のあいさつの後、台所で朝食の準備をする。朝食と言ってもお正月の朝はお雑煮を作るぐらいで、前日に作ったおせち料理がメインだ。

「んかね、僕もう小学生だから、2個食べる」

去年まではお雑煮のお餅は1個しか食べられなかったのに、拓都の言い方に笑ってしまった。

「はい、それじゃあ、ママも2個にしようかな」

笑いながらそう言って、4個のお餅をオーブントースターに入れた。

お餅が焼ける間、リビングのテーブルの上に拓都がお皿と箸を並べる。いつもならダイニングのテーブルで食事をするが、今日はお正月なので、テレビを見ながらのんびりしたい。

2段の重箱に入ったおせち料理を並べ、お茶の用意をして、テーブルに並んだそれらを見て、去年までのお正月の朝を思い返して、小さく息を吐いた。

去年までの3年間は、実家に帰れない母子家庭3家族と一緒に年越しをして、持ち寄ったおせち料理等の食べ物を所狭しとテーブルに並べ、ワイワイ騒ぎながら新しい年を迎えていた。だから、淋しいなんて思わずに済んだのだ。それなのに、テーブルの上の並べた食器や料理の少なさに淋しさを感じてしまった。

「陸君達、どうしてるんだろう?」

陸君と言うのは由香里さんの次男だ。拓都と同級生で、去年までの3年間、イベント事はいつも一緒に過ごしてきた。拓都にしたら、陸君達もこちらの市へ引っ越してきたのに、一緒に年越しをしなかったのが寂しかったのかもしれない。

「陸君も今頃、おせち料理やお雑煮を食べてるんじゃないかな?」

一瞬、陸君家は新しいパパが来てくれたから、家族でお正月を迎えているんだよと言いきうようになって、思いとどまった。今の拓都にパパと言う言葉は禁句だ。クリスマスに担任から諭されて、泣きそ

うになりながら私に謝ってきた拓都を思い出すと、胸が苦しくなる。3ヶ月経ったら、春になったら、拓都は受け入れてくれるだろうか？

拓都が大好きな守谷先生を受け入れないはずが無い。そう思い直し、来年の3人で迎えるお正月を想って、フツと目を細めた。

「あー、早くみんなと遊びたいなあ〜」

お雑煮を食べ終わった拓都が、箸を置いてテレビの方を向いたまま声をあげた。年末の12月29日からずっと、私と二人きりで過ごしてきたから、そろそろ退屈になって来たのかも知れない。何となく申し訳ないような気持ちになって、慰めるように声をかけた。

「4日の日は、朝から陸君家へ遊びに行くよ。ママは仕事があるから、拓都は陸君達と一緒に留守番していてね」

私の仕事は1月4日が仕事始めだけど、学童は5日からのので、去年の内から由香里さんに頼んでおいたのだった。

「ホント?! 陸君ね、サンタさんに新しいゲーム頼んだんだったって、一緒にさせてもらおう」

拓都は嬉しくてたまらないと言う顔で笑った。ほんの些細な事で、喜びMAXになれる拓都が羨ましいなと思いつつながら、この笑顔をいつまでも守って行かなくてはと、改めて胸に刻んだ。

しばらくすると年賀状が届いた。いつもと同じ顔ぶれに、今年増えたのは千裕さんと新しい職場の同僚ぐらいだった。学生時代の友人、わずかな親戚、保育園時代のママ友、以前の職場の同僚……。

拓都には、毎年送り合っている陸君と保育園の年長の時の担任の先生、そして、今の担任からの年賀状。

慧の名前を見た途端、ドキンと心臓が跳ねた。思いもしなかった所から彼の名を見つけて、ドギマギとしてしまった。保育園時代だ

って担任の先生から年賀状をもらっていたのに、どうして考え付かなかったかな……慧もそんな事一言も言っただけ……。

「あつ、守谷先生から来てる！」

担任からの年賀状を目ざとく見つけた拓都は、嬉しそうに「ママ、見て見て」と私の前に差し出した。さっき私が見つけた時に、他のと一緒に拓都の前にさりげなく置いたのだ。

担任からの年賀状は、教室で撮ったクラス全員の写真で、『あけましておめでとう』の他に『今年もいっぱいえがおの花をさかせよう！』と文字が入っていた。おそらくクラス全員に出したのだろう。それでも宛名は手書きで、担任としての彼の想いが感じられた。

この後ものんびりとテレビを見て過ごし、午後から近くの神社へ初詣に行った。この神社へ来るのは何年振りだろうと思いつきながら、変わらぬたたずまいの神社の杜に、子供の頃ここで遊んだ思い出が蘇る。拓都に思い出話をしながら、高く伸びた杜の木々を見上げる。自分も周りもどんどん変わっていく中で、あの頃と同じ姿で迎えてくれるこの杜に、常に張りつめていた何かが、ゆっくりと解けて行くように、癒される思いがした。

鎮守の杜の神様に、拓都と慧と私の健康と幸せを祈る。笑顔で一年が過ぎますように……今年はいつもの年よりずっと真剣に願いを唱えた事に、私は自嘲気味に苦笑した。

元旦の一日は穏やかに過ぎて、日付が変わる頃まで慧からの電話かメールが来ないかと待ち続けたけれど、携帯はまるでお正月休業とでもいうかのように、ピクリとも音を奏でる事は無かった。

他の人も一緒にいるんだから、連絡できなくても仕方ないと思うのに、なんとなく面白くなかった。朝送った新年メールの返事さえ無い事が、今頃皆と楽しく過ごしていて忘れていたのだらうかと、蓋をしたはずの不安な思いまで飛び出して来そうになって、ハタと

気付いた。

私ってこんなに心が狭かったのか……。

昨夜だって、みんなの目を盗んで電話をして来てくれたのに、その前の夜は家まで会いに来てくれたのに……たった一日連絡が無かったぐらいで、ありもしない想像で不安になってしまっただけ。以前の私なら思いもしなかった不安や嫉妬の感情が、ネガティブな妄想に翻弄されてしまう。

それは、永遠と信じた関係でも、簡単に壊れてしまう事を知ってしまったから。

それでも自分の手で壊してしまった罪悪感があるから、もう二度と同じ間違いは繰り返さないともう一度自分に言い聞かせたのだった。

翌日は、風の無い穏やかな快晴で、朝晩は冷えるものの、今年は暖かいお正月だなと思っていると、拓都が「キャッチボール日和だね」と言い出した。私は笑って「絶好のキャッチボール日和だね」と答えた。早速にサンドウィッチと温かいお茶とスープを用意して、近くの芝生公園へ出掛ける。だんだんと上手に投げられるようになってきた拓都を頼もしく思いながら、暖かな冬の日差しを心行くまで堪能した一日だった。

昼間すっかり遊んだせいとか、拓都は早く寝てしまい、一人きりの時間を持て余してしまう。以前なら、自分の時間として楽しめたひと時だったのに、慧からの連絡を待ってヤキモキしている今の自分は、どこか余裕が無くて、嫌になる。

今日帰って来るって言うてたよね。  
でもスキー帰りは渋滞して帰り着くのが深夜になる事もあるらしい。

今夜も連絡は来ないかもしれない。

時計の針はもう夜の10時を回っていて、私は小さく溜息を吐いた。頭の中で彼が連絡できない理由をあれこれ想像して、仕方が無

い事だからと期待する恋心に言い聞かせる。そんな事をもう何度も繰り返した時、携帯が鳴りだした。

上蓋の小さな窓を見ると、『K』の文字。

発信者の名を確認した途端、さっきまでの鬱々とした思いは、すっかり霧散してしまった。

「もしもし」

焦ったように上蓋を開けて通話ボタンを押し、上ずった声で第一声を上げた私の慌てぶりが分かったのか、「美緒？ 大丈夫か？」と心配されてしまった。

「慧、おかえり」

「ああ、ただいま。昨日は連絡できなくてごめんな。あつ、メールもありがとう。」

「あつ、そうだった。慧、あけましておめでとう」

「あけましておめでとう。俺も忘れてたよ」

「そうそう、年賀状ありがとう。こちらからも拓都の顔写真入りの年賀状で自宅の方へ出しておいたよ」

慧からの年賀状は、学校の住所しか記載されていなかった。その上、慧と別れた時に慧に関するものをすべて処分したから、すぐには自宅の住所は分からなかった。でも、大掃除の時に、押入れの奥から大学時代のサークルの名簿が出て来たのを覚えていたので、その住所に出したのだった。住所が変わっていなくて良かった。

「エー、こっちにも年賀状を出してくれたんだ？ ありがとう。子供達からの返事は期待してなかったんだけど……嬉しいよ」

慧の声が胸に染み込んで行く。

何気ない会話なのに、頬が緩むのが分かる。

昨日声が聞けなかっただけで、こんなに渴望してたなんて……。自分のあさましさを嫌悪しながら、話題を変えた。

「帰り、渋滞しなかったの？」

「ん……渋滞する前に帰ってきたから……早い目に出てゆっくり帰ってきたんだよ。こちらに来てから夕食を食べたぐらいの時間だったから」

「へえ、そんなに早く帰ってきたんだ？ スノボは楽しめた？」

慧は子供の頃からスキーをしていたから、ずっとスキーばかりをして来たらしいけれど、去年一緒に行った人がスノーボードをしていて、少しさせてもらったたら面白かったらしい。それで今年はスノボを本格的に始めるのだと行く前から楽しそうに話してくれた。

「まあまあ滑れるようになったかな？ 楽しかったよ」

慧の話す声に違和感を感じた。

行く前はあんなにテンション高く、スノーボードの話をしてたのに……本当は楽しくなかったのかな？

「ねえ、慧、疲れてる？」

きつと長時間運転してきたから疲れているのかもしれない。

「えっ、ああ、そうだな。ごめん。疲れてるみたいだよ」

「ごつちごごめんね。疲れてるのに電話してもらって……ゆっくり休んでね」

「美緒、悪い。また連絡するから……本当にごめんな」

電話を切った後、いつもと違う元気の無い慧の声に、心配と落胆をしながら、私の気分もどっと疲れてしまった。こんなに疲れ切ったような慧は初めてだと、訳のわからぬ不安が又私の心を蝕み始めたのだった。



## # 59 : 感謝の気持ち (前書き)

長らくお待たせして、すいませんでした。

スランプに陥っていたので、やっとの更新です。

慌てて更新したので、誤字脱字があったら、教えて頂けると嬉しいです。

どうぞよろしくお願いします。

## # 59 : 感謝の気持ち

1月3日は、朝から冷たい雨が降っていた。暖かいお正月だと思っていたのに、陽射しが無いと途端に寒く感じてしまう。それでも雪では無く雨なのは、雪国の寒さに比べるとまだまだ暖かい方なのだろう。

雨と寒さで何もする気が起きず、リビングの石油ファンヒーターの傍に座り込んで、拓都と二人、昨日借りてきたアニメのDVDを見ていたけれど、心は昨夜の慧の事を思い返していた。

元気が無かったけど、そんなに疲れていたのかなあ。

慧はどうして、一緒に行くメンバーを言わなかったんだろう？

女性も一緒だったから、言い辛かったんだろうか？

キャンプの時のメンバーなら、まったく知らない訳じゃない。

美鈴があんな事を言うから、妙に気になってしまう。

うっん。美鈴が言う前から、愛先生も一緒だろうかと気にしていた癖に。

そんな自分の中の醜い感情を知られたくなくて、慧にもメンバーについて聞けなかったんだし、美鈴にも言えなかったんだ。

私が小さく嘆息すると同時に、アニメを見ていた拓都が笑い声を上げた。

その時不意に玄関のチャイムが鳴った。

まさか、もしかして……急いで玄関のドアを開けると、大学祭以来の友の笑顔があった。

「美鈴。どうしたの？」

「美緒、新年のあいさつに来たのに、どうしたのは無いでしょ。」

美鈴は私の反応を面白がるように笑った。

「新年のあいさつって……」

「あけましておめでと〜ございます」

私の言葉を絶って、うやうやしく頭を下げながら、美鈴は新年のあいさつをした。それを見て慌てて私も頭を下げながら、新年のあいさつの言葉を返す。

「ママ、誰？ ……あつ、保健室の先生！」

玄関へやってきた拓都が、美鈴を見て声を上げた。

「拓都君、あけましておめでと〜。これ、お年玉だよ」

美鈴は拓都に笑顔を向けると、鞆の中から小さな包みを出して拓都に渡す。

「あけましておめでと〜ございます。わあー、ありがとう」

拓都は頭を下げて挨拶をすると、差し出された包みを受け取って、ニコニコとお礼を言った。

「美鈴、拓都にお年玉まで用意してくれて、ありがとう。とにかく上にあがって」

暖かいリビングに美鈴を招いて、紅茶とお菓子を用意する。その間に貰った包みを開けていた拓都が、声を上げた。

「わあー！ してみたかったゲームだ！ 先生、ありがとう」

「ええっ！ ゲームって……美鈴、そんなに高いものを、買ってくれたの？」

「昨日ね、家族で初売りに行つて、兄のところの子にねだられて買ったのよ。それで、拓都君にも思つてね。でも、初売りで安く買ったから、気にしないでよ。又、私の子供が産まれたら、返してくれたらいいから」

私に気を使わせないように、少しおどけて言う美鈴に、何も言えなくてただ「ありがとう」としか返せなかった。

「ママ、今からゲームしてもいい？」

ゲーム時間を決めているからか許可を求める拓都に、笑顔で「いいよ」と答え、私と美鈴はダイニングのテーブルでティータイムをする事にした。

「美緒、この間は変な事言つてごめんね」

いきなり美鈴に謝られて、何の事が分からずに「えっ？」と首をかしげた。

「ほら、守谷君のスキー旅行の事で、女性も一緒なのに心配しないのかつて……」

「ああ、気にしてないから心配しなくてもいいよ。だいたい美鈴は心配しすぎなのよ」

「ごめんね。私ちよつと男性不信なのかもしれない。男の人つて、据え膳食わぬは男の恥みたいなさ言う人もいるでしょう？ それに酔った勢いとか相手に絆ほだされてとかありそうだし……でも、守谷君は振られても美緒一筋だったぐらいだから、余計なこと言つたなつて思つたのよ」

美鈴の申し訳なさそうな顔を見て、反対にこちらの方が辛くなつた。

男性不信つて……。

美鈴の傷の深さを思い知らされて、それでもなお友を心配してくれる美鈴の友情に胸が詰まった。

「美鈴……美鈴の心配してくれる気持ちは嬉しいけど、私達は大丈夫だから、ねっ」

心配ばかりかけている美鈴に、少しでも安心して欲しくて、私は笑顔で言った。そんな私を見て美鈴も安心したように笑うと、「わかってるわよ」と悪戯っぽい目をして答えた。

「クリスマスパーティーの後に守谷君と話したって言ったでしょう？あの時の守谷君を思い出したら、そんな心配要らなかったなあって、反省してたの」

「えっ？ 慧は、どんな風だったの？ 何を言ってたの？」

「美緒が心変わりした事を信じてるから、その人の事を忘れられなくても、今美緒を助けられる人が傍にいないのなら、自分が美緒と拓都の力になりたいって、そりゃーもう、必死で言うのよ。あのイケメンの守谷君が！」

慧……そんな風に思ってくれてたの？

きつと、拓都を預かってもらったあの時、頼りない母親だと思われたに違いない。

でも、私が他の人を想っていても、力になりたいって……。

慧の想いの大きさに、自分が恥かしくなった。

クリスマス以降の慧の態度や言葉を信じていなかった訳じゃないけど、愛先生の事を気にする自分が、酷く狭量に思えて、いたたまれない。

こんな風に他の人から彼の言葉を聞くと、今まで夢のようにふわふわして頼りなかったものが、急にずしりと現実味を帯びて感じられるようになった。

「そう……慧がそんな事を言ってたの……」

「そうそう、それにね、美緒がK市にいた頃の友達の子供が守谷君のクラスに転校してきたでしょ？」

えっ？ 由香里さんの事？

「うん、2学期から転入してきたけど、それがどうしたの？」

「そのお友達が守谷君に言ったらしいのよ。美緒が母子家庭で苦勞していたって」

「えっ？ いつ？」

由香里さん、そんな事一言も言って無かったのに……。

「さあ、いつ聞いたのかは知らないけど、守谷君はそれを聞くまで、美緒は心変わりした相手と付き合ってるとか、もしかしたら結婚してるか思ってたみたいで、美緒が一人で子育てしてたって聞いて、その付き合ってた相手は美緒をどうして突き放したんだって、とても怒っていたのよ。でも、まあ、それも誤解だってわかって、今度は余計に自分がつて思っただらうね」

慧、慧……

私は込み上げる熱いものに、思わず俯うつむいて両手で顔を覆った。

慧……慧はバカよ。自分を振った相手のために怒るなんて……。

『美緒は今、幸せ？』

私はふいに、キャンプの朝、私に尋ねた彼の言葉を思い出した。

あの時彼はどんな思いで私に訊いたのだろうか？

「美緒、守谷君ってモテるからもっと浮ついた人かと思ってたこと

るもあるんだけど、一途で健気なんだよねえ。なのに、美緒の不安を煽るような事を言って、「ごめんね」

何度も謝ってくれる美鈴の気持ちに申し訳なくなつて、私は傍にあったティッシュで目に溜まった涙をぬぐうと顔を上げた。

「うん。私の方こそ、いつも心配かけてごめんね。本当は、慧との事、まだまだ現実味がなくて、不安いっぱいだったの。でも、さっきの話を聞いて、不安がってた自分が恥ずかしくなった」

「守谷君もいろいろ葛藤があつただろうけどさ、美緒を想う気持ちはとても大きいと思うよ。美緒がずっと苦しんできたあの別れの事も、すべて受け止めて包み込めるぐらいに……」

美鈴の話を聞いていると、また涙が眼に溢れそうになつてきて、慌ててティッシュで目を抑え、うんうんと頷いた。

「良かったね、美緒」

そう言つて優しく笑つた美鈴は、自分の痛みを抑えて、私の幸せを心底喜んでくれる。「ありがとう、美鈴」と言いながら、私は彼女のために何かしてあげられるだろうかとぼんやりと考えていた。

その夜、いつものように拓都が眠つた頃、慧から電話があつた。

「美緒」

私の名を呼ぶ慧の声を聞いた途端、昼間の美鈴の話が蘇つて、胸が熱くなつた。でもきつと、慧は私には知られたくなかつただろうと思うから、ぐっところえて明るく「こんばんは」と挨拶をした。

「美緒、昨夜はあまり話せなくてごめんな」

「ううん。慧こそ疲れてたのに、電話してくれて、ありがとう。もう疲れは取れたの？」

「ああ、疲れは取れたけど、筋肉痛がね……」

「慧でも筋肉痛になるんだ……」

私はフツと笑うと、いつもと変わらぬ慧の声に、昨夜は本当に疲れていただけなんだと安堵の気持ちが胸に広がった。

「美緒も明日から仕事始めなのか？」

「そうだよ。慧も明日からの？ 先生も子供達と同じで来週からだと思ってた」

そう、今年は成人の日の関係で今週末が3連休となり、週明けの火曜日から新学期が始まるのだ。

「先生も子供と同じだと、準備も出来ないだろう？ それでなくても他の仕事や報告書なんかの事務仕事も多いのに」

「今、慧は本当に先生なんだなって思った。守谷先生、今年もよろしくお願いします」

ふざけてクスクス笑いながら言うと、慧はふてくされたように「美緒、4月からこっち、担任の俺はなんだと思ってたんだよ？」と言うので、「いやいや、良い担任でよかったなあーって思ってたよ」と余計に笑ってしまった。

「やっぱり美緒は、意地悪だよな」

慧もどこか笑いをふくんだ声で、あの頃のように言う。あの頃は



慧がそう言つと、すぐに怒つて「慧の方が意地悪でしょ」と言い返していたけど、今日は意地悪と言われた事さえ嬉しくて、「慧にだけ意地悪なの」と余裕有り気に返した。

「それは、小学生が好きな子にだけ意地悪をするって言う奴だな」

「私は小学生並みだつて言いたいなの？」

「間違つて無いと思うけど？」

自信ありげに突っ込んでくる慧に対して、天の邪鬼な私は瞬間湯沸かし器のように怒りが込み上げてきたけれど、大人にならなきゃとグツと堪えて返す言葉を探していた。すると彼は急に笑い出した。

「美緒、俺もそうだから、こんな風に天の邪鬼な美緒をいじめたくなるんだよ」

からかうように笑う慧の声に甘さを感じて、どうにも背中がむず痒い。

「慧、降参です。参りました」

恥ずかしいような、じつとしていられないようなむず痒さに居た堪れなくなつて、思わず白旗を揚げた。私の言葉を聞いた途端、笑い出した慧の声が余りに楽しそうなので、心がほぐれるように癒されて行く。

「あのね、今日、美鈴が来てくれたの」

「本郷さんが？」

「ええ、新年のあいさつだつて。それでね、いろいろ話をしてたんだけど、美鈴がいなかったら、今私達はこうしていなかったでしょ

う？ それは、由香里さん……川北さんや西森さんも同じで、私はずっと皆にしてもらえばかりで、何も返してこなかったから、彼女達のために何ができるのかわかって……」

私は今日美鈴と話してからずっと思っていた事を口にした。

「美緒、友達つてさ、してくれた事と同じだけ返さないといけないものかな？ 美緒は友達が困っていたら、力になりたいって思うだろう？ それに見返りなんて考えないと思うんだ。今はたまたま美緒の方がしてもらった事が多かったかもしれないけど、今の感謝を忘れずにいたら、いつか美緒が友達の力になる時も来ると思う。それに、美緒はしてもらえばかりで何も返して無いつて言うけど、返すものって具体的な行動だけじゃないと思うんだよ。きっと、美緒の何気ない言葉や笑顔に勇気を貰ったり、癒されたりすることだってあると思う。美緒が彼女たちに感謝と思いやりを忘れなければ良いんじゃないかな？」

「慧……そうだね。ありがとう」

私は慧が言ってくれた言葉に胸が震えだし、これだけ言うのがやっとだった。

「それから美緒、俺達が幸せになる事が一番の恩返しだと思うよ」

「うん。そうだね」

緩みだした涙腺に気付かれないよう短く返事をする、電話で良かったと心の中で嘆息した。

私は何を不安になっていたのだろうか？

慧と拓都と三人で、幸せに向かって歩み出す事が、今の私にできる精一杯の友達への感謝の気持ちだと、心から素直にそう思えた夜だった。



#60:ずっと一緒(前書き)

お待たせしました。

どうぞよろしくお願いします。

## #60: ずっと一緒

1月4日の仕事始めの日、学童は5日からなので、拓都を由香里さんに預かってもらった。仕事が終わって帰り道、由香里さんの好きな白子堂のみたらし団子をお土産に買い、拓都を迎えに行く。昼間、千裕さん親子も遊びに来ていたらしかったが、私が迎えに来た時にはもう帰った後だった。

「美緒、夕飯食べて行かない？ 旦那は帰り遅いから、気を遣わなくてもいいから」

保育園時代から、由香里さんは何か話がある時や私が落ち込んでいる時などに、こんな風に夕食に誘ってくれた。母か姉かと言っぐらいの甘えっぷりだと自嘲しながらも、私は「ありがとう」と頷うなずいていた。

「やっぱり、千裕ちゃんには言わないつもりなの？」

夕食の後、子供達がテレビを見ているのを横目で見ながら、私達はダイニングのテーブルで声をひそめながらお喋りを続けていた。今日の昼間、千裕さんとの間で私の話題が出たのだろう。由香里さんに知らない振りをさせてるのは申し訳ないなと思いつつも、その問いかけに、私は神妙に頷いた。

「本当はね、相手が誰かは言わないで、彼と上手くいった事だけ言おうと思っていたの。でも、拓都に春まで言わない理由も、プライベートで会わない理由も思いつかないし、上手く誤魔化せないと思うのよ。だからと言って、相手が誰かを言うのは……まだ役員活動もあるし、何となく言い辛くて……やっぱり、3学期が終わるまで

言わないでおこうと思ってるの。ただ、3学期が終わったら、真っ先に言うつもりではいるのよ」

「そっか。それで、彼はなんて言ってるの？」

「私の友達に言うか言わないかは、私の思うようにしたらいいって……一応、由香里さんに話した事は言ってるんだけどね」

「私も美緒の思うようにしたらいいと思うけど……あのね、以前千裕ちゃんが、美緒の想い人は守谷先生じゃないのかって言い出した時があつてね、その時は私も相手の事は知らないけど、それは無いんじゃないかって否定したのよ。そうしたら千裕ちゃん、ホツとして良かったって言うの。なんでもね、今まで美緒の前で守谷先生と愛先生を応援するような事ばかり言ってきたから、もし相手が守谷先生だったら、傷つけてきたのじゃないかって、心配していたんだって。千裕ちゃんって良い人だよ。だから、本当の事を言う時は千裕ちゃんが罪悪感を感じないように、上手く話してあげてよ」

千裕さん……そんな風に思っていてくれたんだ。心配や応援をしてもらってるのに、彼と心が通じ合えた事を報告しないのは、何だか酷く友達甲斐のない人間に思えて、胸がきゅつと痛んだ。

どうしよう……やっぱり言った方がいいかな？  
でも……。

頭の中で千裕さんの笑顔がグルグル回る。

「やっぱり、千裕さんにも早く話した方がいいかな？」

「まあ、3ヶ月なんてすぐに経つし、そんなに深刻に考えなくても他からバレる事は無いと思うし……それに、拓都君に守谷先生を意

識しないで3学期を過ごして欲しいと言うのと同じで、千裕ちゃんにも役員活動のある間は意識して欲しくないんでしょう？ だったら、役員活動が終わった時点で話したらいいんじゃないの？」

「そ、そうだよ。 役員の仕事が終わった時点で話せばいいよね」  
まだ担任と保護者という関係上、どんなに千裕さんを信頼していても、二人の関係を口にするのは憚<sup>はば</sup>れて、その上どこか気恥ずかしさもあって、千裕さんに本当の事を言う勇気が出ない私は、由香里さんの言葉にホツとした。 そんな私の心情が分かったのか、由香里さんはいつもの頼りになる笑顔を私に向けた。

「美緒はなんでも考え過ぎるのよ。 千裕ちゃんだって、後から話しても、美緒の言えない立場ぐらい分かってくれると思うし、そこまですべてに考えなくてもいいと思うよ。 千裕ちゃんも美緒が幸せなのが一番嬉しいんだから、言えるようになったら、彼と二人で一緒に報告して、千裕ちゃんを驚かせちゃえば？」

由香里さんと話していると、どんどん心が軽くなって行く。 私は彼女の言葉にうんうんと頷<sup>うなづ</sup>きながら、友情のありがたさを楽しみと噛みしめた。

「由香里さん、ありがとう。 なんだか気持ち軽くなったみたい」

「そんなお礼を言われるような事はしてないから。 でも、美緒の憂いが少しでも軽くなったのなら、良かった。 美緒にはやっぱり笑顔でいて欲しいから。 私も千裕ちゃんも美緒の笑顔に癒されてるし、美緒の頑張りに元気をもらっているんだよ。 それに、千裕ちゃんが今日言っただけ、美緒が拓都君を本当に大切に育てているのを見ると、自分の子育てが恥ずかしくなるって……私もその気持ち分かるよ」

「えっ？ 反対でしょ？ 私の方こそいつも、本当の母親にはまだまだ追いつけないなって思ってるのに」

「いいえ、私達は自分が産んだ子供だから甘えがあるのよ。手を抜いたり、適当に流したりする事はよくあるの。でも、美緒はいつもきちんと拓都君と向き合ってるでしょう？ そんな美緒を見ると、反省させられるのよ」

由香里さんは苦笑しながら言った。

二人の母親の大先輩からそんな風に言われて、くすぐったい様な気もするけれど、本当はそんな風に子供の前で気を抜いて、自然体でいられる本物の母親こそ、羨ましかつた。

自分の子育てをいつもこれでいいのだろうかと自問しながら、どこか気を張っているような気がする。だから拓都も、私の前でいい子でいようと無理をしているんじゃないかと不安になる。

「でもね、由香里さん。母親が子供の前で自然体でいる方が、子供もリラックスできるんだと思うよ。私は拓都にリラックスさせていないかもしれない」

「美緒、美緒もその内、拓都君の兄弟を産んで、自然体の母親になれるから、大丈夫だよ。子育てに正解なんて無いんだから、拓都君が毎日楽しそうなら、それで良し。いろいろ考え過ぎないの」

由香里さんの言葉はどうしてこう、私の気持ちを楽にしてくれるんだろう？

私は微笑んで、「そうだね」と頷いた。

「それより、彼とはその後どうなの？ やっぱり会って無いの？」

「年末の30日の夜にね、彼がスキーに行く前に寄ってくれたの。玄関先で話をしただけだったんだけどね。年が明けてからは会って



無いけど……」

「へえ、不器用な二人にしては、ちゃんと会っているんだ。でも、玄関先で話をしただけって、淋しすぎるよね。そろそろデートでもしたいんじゃないの？ 近いうちに拓都君預かるから、デートしておいでよ」

デート……。

由香里さんの言葉を聞いて、不意にある情景が浮かんできた。

庭で洗濯物を干す姉に、笑顔で話しかけている私。

『私がたつ君を見てるから、二人でデートしておいでよ』

それは、全ての不幸の始まりの切っ掛けの情景。

体が震えだす。

ダメだ。ダメだ。

どうして忘れていたんだろう？

『お姉ちゃんがずっと傍にいるから大丈夫だからね』

あの時、私は拓都和約束したじゃないか。

ずっと傍にいると……。

デートのために拓都を誰かに預けるなんて……もしも私に何かあったら、今度こそ本当に拓都は一人きりになってしまう。

「由香里さん、私……デートのために拓都を預ける事は、どうしてもできない」

「えっ？ どうして？ 私の方は気にしなくていいのよ。それに陸も喜ぶし……もしかして、拓都君を除け者にしてるなんて思ってるの？ 美緒、子供はね、ママが笑顔でいてくれる事が一番いいの。」

ママが我慢して笑顔が少なくなる事の方が辛いよ。拓都君だって、陸と楽しく遊んで、ママも笑顔でいてくれたら、こんなにいい事は無いんだから。そんなに深刻に考えなくてもいいのよ」

違う。違うのよ。

言葉に詰まった私は、激しく首を左右に振った。

そんな私の様子に気付いた由香里さんは、心配気な顔をして「美緒、どうしたの？」とさっきまでと違うトーンで私の顔を覗き込んだ。

「お姉ちゃんが亡くなったのは、私が拓都を預かるからデートしておいでって勧めたからなの。二人は車で事故にあって……」

由香里さんには以前に話した事があつたかもしれないけれど、今はそんな事は考えられず、私は胸に詰まっていた物をこぼした。

由香里さんはハツとしたように目を見開き、そして一瞬見せた悲しげな眼差しが、次第に自愛に満ちたものに変わって行った。

「美緒……美緒はさ、なんでも考え過ぎて気にするから、きちんと拓都君に認められて、なんの憂いも無く彼と会つた方がいいかも知れないね。さっきも言ったけど、3ヶ月なんてあつと言つ間だよ」  
由香里さんは私の目を見て話すとニツコリと笑った。由香里さんの言葉は、ゆっくりと私の心に染み込んで行った。

\*\*\*\*\*

慧から電話があつたのは、前回の電話があつてから5日後の土曜の夜だった。今回は仕事始めの前日の1月3日で、翌日から始まる仕事や、新年会等の付き合いでそんなに電話ができないかもしれないと話していた。だから、彼の声を聞けないのは寂しかったけれど、仕方ないとも理解していたし、時々彼と送り合う写メールが、二人の空白を埋めてくれるようで、もう以前のよう不安になる事は無

かった。

「美緒、なかなか電話できなくて、ごめんな」

「ううん。私の方こそ、電話かけてもらうの待ってるだけで、ごめんね」

「俺の方が時間が不規則なんだから、俺からかけるのは当たり前だろ。気にしなくていいよ」

「うん。ありがとう」

たわいも無い会話だけど、彼の声を聞くだけで彼と会えなくても、心が温かくなっていく。

「今、実家へ帰ってきてるんだ。お正月帰れなかっただろ？ だから」

「えっ？ そうなの？ 皆さん、お元気だった？」

「ああ。クリスマス帰ったばかりだから、もう帰らなくてもいいかなって思ってたんだけど、兄貴の所の子供達が、お年玉はまだかかってるさいんだ。帰ったら帰ったで、どうして美緒と拓都を連れて来なかったんだって怒られるし……」

「ええっ！ 私と拓都？」

どうやら慧の実家には、受け入れてもらっているようで、おまは面映ゆい。

「担任と保護者の間は、拓都にも言わないし、美緒ともプライベートでは会わないつもりなんだって、この前の時に説明したのに、そ

んな堅い事言うなって言われて、姉さんから美緒と拓都に会いたかったのにつて責められて……家族に言うの早まったかなあ」

彼は文句を言いながらも楽しそうだ。

一度会っただけだけれど、彼の家族は温かい人ばかりで、私と拓都を大きな気持ちで受け入れてくれた事は、感謝しきれないほどだ。

「嬉しい。私と拓都をそんな風に受け入れてもらえるなんて、思っ  
てなかったから……」

「そんな事、当たり前だろ」

慧には当たり前前のことでも、私には違う。

裏切った私の罪も、子持ちだというマイナス条件も、慧自身にさえ受け入れてもらえるなんて思いもなかったのだから。

「でも嬉しい。慧、ありがとう」

クリスマス以降、涙腺が弱くなってしまって、もう目頭が熱くなっている。

慧はそんな私に気づいたのかどうか分からないけれど、この話はお終いとばかりに話題を変えた。

「それよりさ、来週から新学期が始まるけど、拓都はもう冬休みの宿題はしたのか？」

教師らしい言葉に、慧は担任だったとあらためて実感し、なぜだか焦った。

「テキストやプリントはもう終わってるんだけど、日記はやっぱり見せてもらえないから分からないの」

いつの間にか宿題で書いている日記を見せてくれなくなった拓都に、成長の証だと思えど、淋しいものを感じていた。

「それは楽しみだな。拓都の日記を読めるのは担任の特権だな」  
自慢気に言う慧が、少し憎く感じる。

「ねえ、最近も拓都は日記に、やっぱり私の事を書いているの？」

以前、慧に拓都の宿題の日記は私が書かせてるのかって、訊かれた事があった。その頃はもう拓都は恥ずかしいからとその日記を見せてくれなくなっていたので、唯一その日記を読める担任である慧に、いったいどんな事を書いているのか尋ねると、私の事が書かれていると言うだけで、詳しい内容は教えてくれなかったのだ。

「うーん、そうだな……友達の事やゲームの事や食べ物の事やいろいろな事を書いてくれるようになったよ。でも時々ママも登場するけどな。公私混同しちゃダメだけど、日記を読んできると拓都の考え方や感じ方が少しわかって、これから拓都の父親として参考になるよ」

「父親!？」

その言葉に私の心臓は飛び跳ねた。結婚という言葉だけでもドキドキするのに、一足飛びに父親と言われると、それこそ現実味が無い。家族になると言う事はそういう事で、間違っではないのだけだ……。

「そうだろ？ 美緒が拓都の母親なら、俺は父親だろ？ でも、まだ拓都に認めてもらった訳じゃないから、父親候補ってところだけだな」

拓都に認めてもらう……その言葉で言わなければいけない事を思い出した。

「あ、あのね、話は違っただけど、前に由香里さん……川北さんが私達が会う時は拓都を預かってくれるって言う話があったでしょ

う?」

「ああ、でも……いいのかな?」

慧の声が少し低くなった。

「うん、やっぱり拓都に後ろめたいまま会うのは違うかなって思っ  
て、川北さんに断ったの。彼女も分かってくれて、拓都に認めても  
らうてからのの方が悩まなくてもいいねって言うてくれて……ごめん  
ね、勝手に断って」

姉の事は言えなかった。

あの時の事は美鈴が彼に話しているかどうかは分からないけど、  
口にするのが怖かった。

言葉にすると又不幸を呼び寄せる気がして、怖くなる。

それに、拓都に対して後ろめたさを感じていたのは事実だから…  
…。

「気にする事無いよ。俺も同じように思ってたから……美緒には会  
いたいけど、拓都にはきちんと認めて欲しいからな。前にも言った  
けど、俺達が離れていた3年間を思ったら3ヶ月なんてすぐだよ。  
それに、3ヶ月経ったら、それからはずっと一緒だから」

ずっと一緒……。

彼の言葉が優しく体を包み込んでいく。

彼と出会った二十歳の時から、もう7年。

長いようで過ぎてみるとあつという間だった。

だから、3ヶ月なんて、駆け足で過ぎてゆくだろう。

「そうだね。楽しみ待ってる」

電話の向こうの彼は、今どんな顔をしているのだろうか?

見る事も触る事も出来ないけれど、心はとても近く感じる。

ずっと一緒……なんて素敵な言葉。



## #60:ずっと一緒(後書き)

詳しくは書いていませんが、曜日は今年の曜日を使っています。  
お話は今1月なので、今年の1月の暦通りです。



#61：インフルエンザ【前編】（前書き）

お待たせしました。

季節先取りの話題ですが（季節外れとも言つ）

1月の頃を想像して読んでください。

どうぞよろしく願います。

## #61：インフルエンザ【前編】

「ママ、おはよう」

3学期が始まって、一週間がたった。毎日元気よく起きてくる拓都に笑顔で「おはよう」と返す。冬休みなどの長いお休みよりも、学校へ行ける方が嬉しい拓都は、朝は起こさなくても機嫌よく起きてくる。拓都の元気な挨拶の言葉が、私にとって今日一日の活力になるのだ。

「ママ、あのね、インフルエンザが流行ってるんだって。守谷先生が、手洗いうがいをしっかりしなさいって言ってた」

朝の食卓で、拓都が急にこんな事を言い出したのは、たった今テレビでインフルエンザの話題が出ていたからだろう。それにしても、突然彼の名前が出てきただけで、私の心臓は正直にドキリと跳ねた。

「そうだね、インフルエンザは高いお熱が出てしんどいし、何日も学校を休まなくちゃいけないから、守谷先生の言うように手洗いうがいをしっかりしようね」

毎年、インフルエンザの予防接種はしているが、3歳から集団生活の中にある拓都は、貰ってしまう事がある。それでも、酷い事にならないのは予防接種のおかげなのだろうと思う。だからと言って油断してはいけなと思うているので、手洗いうがいは普段からも言ってきたが、あらためてインフルエンザの予防のためにと言う事で、なおざりになっていた手洗いうがいを真面目にしなくてはと私自身思い直したのだった。

拓都には私の言葉よりも、担任の言葉の方がすっかり頭に入るよ  
うで、その辺は少し悔しい思いもあるのだけれど……。

その日、仕事が終わって拓都を迎えに行くために小学校へ向かっ

た。学童保育の建物は小学校の校庭の片隅にあるので、駐車場は先生達と同じところへ停める事になる。時々帰って行く先生と駐車場であつて挨拶する事もあるのに、慧とは会つた事がなかつた。

ちよつと出て来てくれたら会えるのに……。

そんな風に思つてしまふ自分を、慧は仕事が忙しいのと諫めながら、校舎の職員室の明かりの方を見つめた。

拓都を迎えに行き、駐車場に止めた車まで歩いていっている時、いつもの拓都のおしゃべりが始まる。

「あのね、今日、翔也君お休みだつたんだ」

「えつ？ 翔也君が？ どうしたの？」

翔也君というのは千裕さん所の次男だ。学校を休んでいるというのは病気だろうか？

「えつと、インフルエンザだつて」

なんとタイムリーな！ 今朝インフルエンザの話をしたばかりだつたのに。流行つていふと言つのは、学校でと言つ事だつたんだらうか？

それにしても、インフルエンザと聞くと、拓都が保育園時代を思い出す。たつた二人の家族だから、拓都が熱を出して寝込むと、買い物さえもままならなくて困つていた時、由香里さん達シングルマザーの友達が、何も言わなくても簡単にできるものやすぐに食べられる物などを見繕つて買つて来てくれた事が、涙が出るほど嬉しかつた。だから、すぐに千裕さんに電話を試してみた。

「千裕さん、翔也君、インフルエンザなんだつて？」

「そうなのよ。智也が先にもらつて来て、翔也にうつっちゃつたの

よ

智也君と言うのは、翔也君のお兄ちゃんだ。

「えー！ 二人続けてなの？ それは大変。千裕さんもうつらない様に気をつけなくちゃね」

「そうよ、私は手洗いとかいとマスクで防御してるけど、子供の世話をしなくちゃいけないから、危ないかもしれない。子供達は世話をしやすいようにリビングに寝かせてるんだけど、パパなんて隔離よ隔離。パパだけ2階で生活してもらって、家庭内別居って感じよ」  
よほど看護のストレスが溜まっていたのが、千裕さんは一気にまくし立てるように話した。

「やれやれ、どうやら今のところは元気らしい。子供が治った後が危ないのよね。張り詰めていた気が抜けると、抵抗力が弱まってしまつから……」

「千裕さん、子供達が寝込んでたら、外へも出られないでしょう？ 買い物とか、手伝える事があつたら、遠慮せずに言つて？」

「美緒ちゃん、ありがとうね。買い物はパパに頼んであるから、大丈夫だよ。心配かけて、ごめんね」

「そつか……じゃあ、うつらないよう気をつけて、子供達お大事にね」

家族の中に大人は自分だけしかいないと言うのが普通だったから、パパという大人がもう一人、家族の中にいる事に気づかなかつた。

電話を切つて、しばらく逡巡した後、やっぱりお見舞い代わりに何か買って届けようと、スーパーへ向かって車を走らせた。

スーパーで、熱がある時子供が欲しがるとゼリーやプリン、それから水分摂取のためにスポーツ飲料、その他には、リンゴやバナナなどの果物と、看病で思うように食事が取れない母親用に菓子パン等を買って、千裕さんの自宅を訪ねた。

「えー、美緒ちゃん、どうしたの？」

電話で話をしたから、まさか訪ねてくるなんて思っていなかったのだらう千裕さんは、玄関のドアを開けるとマスクから出た目が大きく見開いた。

「お見舞いだけでも届けようと思って……」

そう言っただけでニコリ笑うと、千裕さんはへんやりと情けないような顔で笑い「美緒ちゃんたら……」とマスクの中でもごもご言っている。

「じゃあ、お大事にね」

私はスーパーの袋ごと千裕さんに渡すと、長居をしては気を遣わせるので、すぐに帰る事にした。

「ありがとう。拓都君にもよろしくね」

いつも余裕有り気な千裕さんの疲れたような笑顔が、看護疲れのピークに来てる事を思わせた。でも、この後のフォローはご主人の役目。千裕さん達夫婦の醸し出す信頼関係に裏打ちされた確かな絆が、今の私には羨ましかった。

それにしても、小学校でインフルエンザが流行りつつあるのだからどうか？

慧は大丈夫なのかな？

私は自分がインフルエンザにかかって大変だった時の事を思い出

して、一人暮らしの慧を思った。

熱が出て動けない時、一人暮らしは辛い。

慧は私を頼ってくれるだろうか？

私は熱を出して苦しんでいる慧を想像して、思わず携帯を掴んだ。

『小学校でインフルエンザが流行っているみたいだけど、慧は大丈夫ですか？』

熱が出てしんどい時は、駆けつけるから、必ず連絡ください』

私は祈るような気持ちでメールを送った。

しばらくして携帯が着信を告げたのはメールでは無く、電話だった。

「美緒、メール見たよ」

「慧、大丈夫？」

私が思わずそう訊くと、突然彼は笑い出した。

「美緒、西森さんところの翔也がインフルエンザで休んだって聞いたんだらう？」

笑いながら訊く慧に、「そうだけど……」と答えると、「やっぱりな」と笑っている。

「えっ？ どう言う意味？」

「俺までインフルエンザになったって想像して、心配してたんじゃないのか？」

言い当てられて、急に恥ずかしくなって、返す言葉に詰まってしまった。

「美緒、大丈夫だから。美緒が心配してくれるのは嬉しいけど、まだなつてもいないのに先走りして心配されてもな」

慧はまだ笑いをふくんだ声で言い募る。

「なによ、慧が一人暮らしだから、高熱が出たら大変だろうと思っ  
て……」

私は慥然と言い返した。心配してるのに、迷惑みたいに言われても……。

「わかってるよ。でも、俺も毎日子供たちと接しているんだから気を付けてるよ。予防接種もしてるし、手洗いうがいはもちろんだし、食事も睡眠もしっかり取ってる。それでもインフルエンザになってしまったら、その時はその時だよ」

「だから、その時には私を頼って欲しいの。仕事の帰りに買い物や食事の用意ぐらいは出来ると思うから……」

「美緒……、わかった。その時は美緒に甘えるよ」  
急に甘くなつた彼の声にたじろぎ、私は「絶対だよ」と念を押した。

と言うのも、以前私にうつる事を心配して連絡してこなかった事があつたからだ。

彼もその事を思い出したのか、少し慌てた口調になった。

「わかった、わかった。大丈夫だから。それより、美緒の方が心配だよ。拓都もいるんだから。美緒の方こそ、困った時は俺に甘えるよ」

彼の言葉を嬉しいと思いつつも、素直に返事できず「守谷先生に個人的に甘えてもいいんですか？」なんて、シラっとして言った。

「みーお」と呼ばれて、私はクスクスと笑いだした。そして、「頼りにしてまーす」と笑いながら言うと、彼から「本気で言ってるんだからな」と少し怒った声で返ってきた。

ああ、調子に乗り過ぎてしまった。

すぐに素直に謝ると、彼はフツと緊張を緩めたような穏やかな声で「まあ、お互い様だな」と言うと言って続けて念を押すように言った。

「俺のクラスはインフルエンザ、翔也が最初だけど、他の学年はほとんど増えてる。もしかすると学級閉鎖とか学年閉鎖になるかも分からないから、拓都に気を付けてやってくれ。それに、美緒がかかったらもつと大変なんだから、しっかり予防しろよ」

少し担任モードの入った彼の言葉に、今度こそは素直に「はい」と返事を返したのだった。

\*\*\*\*\*

翔也君が休んだ二日後の木曜日、お昼休みがもうすぐ終わろうとしている頃、ポケットに入れた携帯が着信を告げた。子供がいるといつ連絡が入るか分からないと言う事で、携帯は常に携帯している。なんて洒落のようだが、私に連絡を取れない時は、お隣のおばさんの所へ連絡してもらおうよう届けてあるので、迷惑をかけたためにも、いつでも連絡が取れるように携帯電話を携帯しているのだった。携帯の上蓋の小さな窓を見ると「K」の文字。それだけで心臓がドキンと跳ねる。

こんな時間に……拓都に何かあったのか。

私は拓都がジャングルジムから落ちた時の事を思い出して、慌てて廊下へ出ると携帯を繋いだ。

「篠崎さん」

担任モードの慧の声に胸が震える。



「拓都に何かありました？」  
慌てて問いかけながら、私は覚悟をした。

「拓都君の熱が高くて、もしかするとインフルエンザかもしれない  
ん」

ああ、とうとう来たか……。  
翔也君と仲が良い拓都だから、もしかするとうつっているかもと、  
心のどこかで覚悟はしていた。

「インフルエンザ……今朝は元気だったのに……」

「午前中はいつもと変わりないと思っただのですが、給食の時間にな  
って気持ち悪いつて赤い顔をして言いに来たので、額に触ってみる  
ととても熱くて……すいません。早く気付かなくて……」

「いいえ、私の方こそ、ご迷惑をおかけしてすいません」

「彼が担任モードを崩さないのは、周りに人がいるのだろう。  
彼の担任モードに、私も保護者モードで話す。1ヶ月ほど前まで  
は、こんなに距離のある話し方をしていたのだ。」

「今、拓都君は保健室で寝ています。迎えに来れますか？」

「はい、すぐに行きます」

そう答えながら、私は頭の中で、今手掛けている仕事を誰に頼も  
うかと考えていた。インフルエンザなら、明日も休まなければなら  
ないだろう。

「それじゃあ、私は午後の授業がありますので、保健室の本郷先生  
に頼んでおきます。気を付けて来て下さい」

「わかりました。よろしく願いします」

電話を切った後、大きく溜息を吐いた。

彼に気を付けるよう言われていたのに……あれからたった2日で発症するなんて……。

泣きごととは言っていられない。

私は気を引き締めて、早退するための算段を頭の中に巡らせたのだった。

#61：インフルエンザ【前編】（後書き）

本当はもう少し先まで書く予定だったのですが、長くなりそうだったので、ここで切りました。

## #62：インフルエンザ【後編】（前書き）

おまたせしました。

そろそろインフルエンザの予防接種が行われる頃ですが、  
こちらのお話は、すでにインフルエンザが流行しています。  
現実には流行しない事を祈りつつ……

どうぞよろしく願います。

## #62：インフルエンザ【後編】

1月20日の木曜日、午後の業務が始まるうかと言う時間に拓都の担任である慧から電話があつた。担任モードの彼が告げたのは、拓都が高熱でインフルエンザではないだろうかと言う事だった。

仕事を早退して、小学校へ向かい、今保健室のスライドドアの前で一つ息を吐いた。ドアをノックすると、中から「どうぞ」と言う声が返り、ドアを開ける。

「あ、美緒、お疲れ様」

振り返った笑顔は、正月以来の親友の美鈴だった。虹ヶ丘小学校に勤務するようになってまだ2カ月弱だと言うのに、すっかりなじんだ様子の親友にぎこちない笑顔を向けて「拓都がお世話になって、すみません」と頭を下げた。

普段と変わらない態度で接する美鈴に対して、保護者モードを崩せないのは、もう一人女性がいたからだだった。

見覚えがあるけれど名前を知らない女性（おそらく先生だろう）に会釈をし、その女性がいるので美鈴に対してどんなふうに接したらいいかと思い巡らせた。美鈴はそんな私の葛藤など気付きもせず、普段と変わらない口調で話しかけてくる。

「美緒、拓都君、熱が高いからインフルエンザだと思うのよ。最近どんどん増えてるの。美緒も気を付けてよ」

美鈴はそう言うと、カーテンで囲ったベッドの方へ歩いて行った。

「拓都君、ママが来てくれたよ」

「拓都、大丈夫？」

高熱のためにうとうととしていたのだろう拓都が、うつすらと目を

開けた。「ママ」と弱々しく呼ぶ拓都の額に手を当てる。熱い。

「拓都、お熱高いから、今からママと一緒に病院へ行って、お家へ帰ろうね」

やさしく微笑んでそう言うと、拓都は安心したようにコクリと頷うなずいた。

「今日は木曜日だから、おやすみの病院が多いけど、かかりつけの小児科はどこ？」

美鈴の問いかけで、初めて今日が木曜日だと言つ事を思い出した。

「高尾小児科だけど……木曜日は確か、午前中だけだったかも……」  
どうしよう？ 他の小児科だつてきつとお休みだろう……

「高尾先生のところなら、かかりつけの患者さんはお休みでも診てくれる事が多いから、一度電話してみても？ たぶん大丈夫だと思うから」

美鈴は私を安心させるようにニコリと笑いながら言う。さっきまで友達同士の会話のようにタメ口で話していた美鈴が、急に養護教諭らしく見えた。

早速に電話をしてみると、先生がまだいらつしゃるからすぐに来てくださいと言われ、ホツとし、美鈴の方を見ると、「良かったね」と彼女もホツとしたように微笑んだ。

「拓都君、起きられるかな？」

美鈴が拓都に声をかけると、拓都はのろのろと体を起こした。けれど、高熱のせいでほんやりしている拓都は、やはりしんどそうだ。

「拓都、ママがおんぶして行ってあげるよ」

私はそう言うと、拓都に背中を向けた。美鈴が手を貸して、拓都

が背中から腕を前に回し、ピッタリとくっ付くと、湯たんぽを背負っているように熱い。美鈴が私の鞆を手に持つと、それまで黙って私達の様子を見ていたもう一人の女性の方を振り返って声をかけた。

「岡本先生、篠崎さんを駐車場まで送って行きますので、留守番頼みます」

「わかりました。篠崎さん、お大事に」

私に声をかけてくれたその女性の方を振り返り会釈すると、突然思い出した。

あつ、キャンプの時にいた先生だ。

岡本先生って言うのか……。

キャンプの時に千裕さんから聞いたかもしれないけど、全然頭に入っていなかった。

私は、甦りそうになったキャンプの時の先生達の映像をかき消し、背中の拓都に意識を集中させ、車へと向かった。

病院で診察をしてもらい、自宅へ帰りついたらもう午後2時半を過ぎていた。やはり、検査の結果、インフルエンザだと診断された。そうだろうと思っただけでも、確定してしまうとショックもあったが、ハッキリした事で開き直る事が出来た。

拓都は相変わらずぐったりとしていて、目が届くようにリビングに布団をひいて寝かせる。帰りにコンビニで買ったスポーツ飲料を枕元へ置いて、すぐに手洗いうがいをし、買い置きマスクを付けると、拓都の好きな卵おじや作りに取り掛かった。

午後5時過ぎ、拓都は薬のおかげか眠ってしまったようで、私は拓都の見える所で取り入れた洗濯ものをたたんでいた。その時、玄関のチャイムが鳴った。いつもなら留守にしている時間帯だから、

セールスマンだろうか？

「美緒、拓都君、もしかして、インフルエンザ？」

ドアを開けると、いきなりそんな問いかけをしてきたのは、由香里さんだった。

「あ、由香里さん、どうしたの？」

私は面食らって、彼女の質問にも答えず、問い返した。

「拓都君が早退したって聞いて……翔也君もインフルエンザで休んでるし、拓都君もそうかなって思って」

「そうなのよ。インフルエンザになっちゃって……寒いから中に入ってる？」

上にあがってもらおうと考えた時、拓都がリビングで寝ている事を思い出し、インフルエンザウイルスが蔓延している我が家へ上げるのはまずいかなと逡巡していると、玄関の中へ入ってきた由香里さんは、スーパーの袋を差し出した。

「私はこれ届けに來ただけだから、すぐに帰るよ。何か困ってる事無い？ なんでも言ってよ？」

K市時代と同じように、困っているだろう友人がいると、すぐに駆けつけてくれる由香里さん。何度そうやって助けられてきただろう。

「いつもありがとう、由香里さん。食料品は生協で一週間分頼んでるから、大丈夫。でも、買って来てくれたの、助かる。ありがとう」  
受け取った袋の中を覗くと、足りないかなと思っていたスポーツ飲料が入っているのが見えた。拓都の好きなプリンも……。



「それ、千裕ちゃんと私からのお見舞いだから。千裕ちゃん、美緒のお見舞いをすごく喜んでたよ。まだ、翔也君が休んでるから、私が代表で来たのよ」

「ええっ！ 千裕さんまで？ わかった。電話でお礼言っておくね」

「うん、そうしてあげて。じゃあ、美緒も気を付けるんだよ」

「ありがとう。由香里さんも子供達、気を付けてあげてね。もちろん由香里さんも気をつけてね」

由香里さんが帰った後、すぐに千裕さんに電話をして、お礼を言った。翔也君はやつと平熱まで熱が下がってきて、元気になっているらしい。それでも、インフルエンザは熱が下がってから2日経たないと学校へ行けないらしく、登校するのは来週からになるだろうとの事だった。

「ねえ、ねえ、子供が休んでると、守谷先生から毎日電話があるのよ。最初の日は家まで来てくれたし……まあ、子供の様子を聞くための電話だけだね。だから今日、美緒ちゃんの家まで来てくれるわよ」

千裕さんの嬉しそうな声と彼の名前に、心臓がドキドキと踊りだし、受話器を持つ手に汗がにじみ出した。

「わ、私は別に……それに、早退だったから……」

千裕さんに本当の事を言わないと言う事は、こういう突っ込みにも平静を装わなくてはいけない。

「まっ、美緒ちゃんは元カレしか眼中にないんだから、守谷先生ごときで喜ばないか……」

千裕さんは私の返事などお構いなしに一人で完結してしまつた。私は返す言葉も無く、金魚のようにパクパクと口を動かすことしかできない。

電話で良かった……。

目の前にいたら、この動揺ぶりは、隠しようが無い。

結局千裕さんは、私の動揺に気付かないまま「お大事にね」と電話を切つた。私は受話器を置いた途端、大きな溜息を吐いたのだつた。

その後、拓都の寝ている間に夕食の用意をしまおうと台所で調理をしながら、先程の千裕さんが言った言葉を思い返していた。

『だから今日、美緒ちゃんの家まで来てくれるわよ』

ここだけ聞くと、全ての真実を知っていて言っているようにも聞こえるけれど、千裕さんにしたなら『守谷ファンなら嬉しいでしょ』と言う暗黙の意味が含まれている。

本当に来るのかな……？

千裕さんの暗黙の意味は、大部分合っているとも言えて、なんだか複雑な気持ちになる。

早く言ってしまった方がいいかな？

それでも、嬉しそうに担任の話をする千裕さんの声を聞くと、真実を告げる勇気が萎しんでいくのだ。

やっぱり、役員仕事が終わってからにしよう。

改めてそう決意すると、ちょっと心が落ち着い気がした。

夕食の用意ができたけれど、拓都がまだ寝ているので、起きるまで待つ事にした。

……昼食が遅かったから、少しずれても大丈夫だよ。

拓都の傍で静かに本を読みながら時間を潰していると、突然玄関のチャイムが鳴った。飛び跳ねるように立ち上がると、拓都を思い出して見下ろす。

……よかった、よく寝てる。

私はそつとりリビングのドアを開けて玄関へと出て行き、ゆっくりと玄関ドアを開けた。

「やあ、拓都はどう？」

玄関灯の薄暗い明かりの下、担任が心配気な顔で、私を見下ろした。

千裕さんの予告通りとは言え、どう対応したらいいかとドギマギしてしまふ。

……今は担任モード？ それとも……？

対応を決めかねている私の態度が変わったのか、彼はぷつと吹き出した。

「美緒、今日は担任として来たけど、緊張しなくてもいいよ」

「あつ、ごめんなさい。寒いから入って」

私は、我に返ると慌てて彼を中へ招き入れた。

「それで、拓都はどう？ やっぱりインフルエンザだったって聞いたけど……」

私は家に帰ってから美鈴に診断結果を報告しておいたから、それを聞いたのだろう。

「今、薬飲んで眠ってるの。熱は病院で測ったら39度2分で、本当にぐったりして可哀想だった。気を付けてただけだな……」

「子供はどうしても大人より抵抗力が弱いから、流行ってる時は、どんなに気を付けてもうつってしまうのは、仕方ないよ。それより、美緒まで寝込まないように、気をつけるよ」

優しい言葉をかけてくれる彼に「慧こそ、気を付けてね」と返ししながら、彼の顔を見上げると心配そうな眼差しとぶつかつた。しばし見つめ合うと、お互いにフツと笑顔になり、彼が右手を伸ばして私の額に触れる。私は何事かと緊張したけれど、熱を測っているのだと分かると、そつと力を抜いた。

「熱は無いみたいだから、大丈夫だな。何か俺にできる事があつたら……って、買い物ぐらいしかできないけど、欲しいものがあつたら、言ってくれたらいいよ」

「うん、ありがとう。でも、さつき由香里さんが来てくれて、いろいろ買って持ってきてくれたから、今のところ大丈夫」

「そつか。美緒の友達は、いい人ばかりだな。類友か……」

「いや、そんな……私がいかに頼りないから、皆心配してくれているのよ」

「頼りないからじゃないけど、俺も心配だよ。美緒は一人で無理をするから……」

「慧……ごめんね。心配ばかりかけてるよね」

「何言ってるんだよ。そんな事はお互い様だろ？ それに美緒は、良く頑張ってると思うよ」

彼の優しい眼差しと褒め言葉に、急に恥ずかしくなって、私はう

つむいた。

「ううん。私は友達や慧に、甘えてばかりだから……」

私は僅かに首を横に振って言葉を吐き出すと、彼のつぶやきが聞こえて、もう一度彼を見上げた。

「そんな言葉が出るなら、安心だな」

彼の言葉の意味が分からず、「えっ？」と首をかしげると、彼は苦笑した。

「以前の美緒なら、人に甘える事を良しとしなかっただろ？」

そうだ、あの頃の私は変なプライドがあつて、人に甘える事はしなくなつた。だけど……

彼の言わんとしている事が、イマイチ分からなかつたけれど、昔の自分の思い上がつていたところを指摘されたようで、恥ずかしくなつた。

「以前は自分の事だけ考えていればよかつたから……」

私は彼から視線を外すと、恥ずかしさを隠すために言い訳をした。

「美緒、分かつてるよ。美緒には守るべき存在ができたから、自分一人ではどうしようもない時は周りに甘えてもいいと思うよ。俺にももつと甘えてくれてもいいと思うし……」

名を呼ばれて、もう一度彼の方へ視線を向けると、ぶつかった視線がやけに真剣で驚いていると、また彼が言葉をつづけた。

「これからは、二人で拓都を守つて行くんだから、お互いに助け合つていこうな」

まるで決意のように真剣な表情で言う彼に、少し違和感を感じながらも、私は同意するために頷いた。

「あつ、他にも寄らなきゃいけないところがあるから、そろそろ行くよ」

彼は急に我に返ったようにそう言うと、持って来たプリント類を手渡した。

「わざわざ寄ってくれて、ありがとう」

私はプリントを受け取りながら、彼を見上げ、感謝をこめて微笑んだ。

「何か困った事があつたら、いつでも連絡してくれたらいいから。

拓都の事、頼むな。美緒も気をつけるよ」

焦ったように言う彼の言葉に頷きながら、もう一度「ありがとう」と言うと、彼を見送るために後を付いて外へ出ようとしたところで、彼に止められた。

「外は寒いから、出てこなくていいよ。暖かくして、美緒も一緒に身体を休めるといいよ」

「うん、わかった。慧も身体に気を付けてね」

ドアを開けて外へ出た彼が、こちらを向いて「じゃあ、お大事にとドアを閉めた。

砂利を踏む音で彼が遠ざかって行くのを感じながら、おそらく門の前に車を停めているだろうから、もうすぐ車が動き出す音が聞こえるはずと、ドアの手前で息をひそめた。

見送れないのなら、せめて遠ざかる車の音を聞いてから中へ入ろうと息を詰めていると、いつまでたっても車の音が聞こえない。不思議に思つて、ドアを細く開いて覗くと、門の前には車は停まっていなかった。

えっ？ 車の音、しなかつたよね？

彼に対する心配と好奇心で、私は外へそつと出て門の所まで行くと、前面道路を覗くようにキョロキョロと左右を見た。

あつ、彼だ。

街灯の明かりと家々からこぼれる明かりだけの夜の住宅街は薄暗く、三軒ほど離れたところにある公園の街灯の下に停めた車に、ちよつと彼が乗るところが見えた。彼が車のドアを開けると、車内灯が点き、車内の様子を浮き上がらせる。後ろからでも助手席に誰か座っているのが分かった。僅かに見えるその後ろ姿は、男性では無い雰囲気とする。そして、彼が車に乗り込んでドアを閉めると、車内灯はゆつくりと消えて行つた。

私はすぐに家の中へ戻ると、ドアを閉めた。

あれは……きつと、同僚の先生と一緒に休んでいる子の所を回っているんだよ。

他にも寄る所があるって言っていたし……。

ざわつく心に言い訳しながら、私は不安を吐き出すように大きく息を吐くと、心に活を入れて、母親の顔へと戻って行つた。

## #62：インフルエンザ【後編】（後書き）

お話の中に出てくる「しんどい」と言う言葉は、

西日本を中心とした方言らしく、標準語に置き換える事が出来なかったので、そのまま使いました。

意味としては「苦しい」とか「疲れた」とか「辛い」とかを合わせたような意味になると思いますが、単体で言い表す言葉を思いつきません。

「しんどい」を使わない地域の皆様、何となくニュアンスを受け取っていただけたら嬉しいです。

また、最近私も家族もインフルエンザにかかっていませんので、最新のインフルエンザの治療薬について、良く分かりません。

いろいろ調べたりもしましたが、飲み薬だけでなく、吸入する薬もあるようで、その辺はあまり突っ込まないでくださいね。



### #63：揺れる心

拓都のインフルエンザは、土曜日には熱も下がり、月曜日にもう一度高尾小児科で診てもらうと、明日から登校してもいいと許可が下りた。

あんなにぐったりとしていた拓都も、現金なもので熱が下がった途端、元気が有り余って退屈していた程だった。

千裕さんの情報通り、担任である慧からは、あの日から毎日拓都の様子を尋ねる電話があった。その上、土曜日には、「欲しいものがあつたら買って行くから、家に寄るよ」とまで言ってくれたのに、うつるといけないからと断ってしまった。

気にしていないつもりだった。

でも、彼の声を聞くと、浮かび上がった車内の映像が脳裏にチラつくのだ。

どうして、人を待たせてるからって、言ってくれなかったんだらう？

取り立てて言うほどの事でもないからなのか、それとも、言いたくなかったのか……？

ああ、こんな事思うこと自体、ダメだよな。

こんな自分を知られたくなくて、今は会いたくなかった。

由香里さんに言えば、そんな思いを抱えてるぐらいなら、本人に訊いてみたらって言うだろうけど、寒いから外まで見送らなくてもいいって言ってくれた彼の手前、何も訊けない。

もしかして、見られたくなくて、外へ出るなっていたの？

こんな事まで考えてしまう今の私は、最低だ。

しかし、考えてみたら、私だって職場での事を何でもかんでも慧

に言う訳じゃない。たまに行くランチに同僚の独身男性がメンバーにいても、いちいち話はしない。もしも、ランチに行ったお店の話題を話したとしても、男性も一緒に行ったなんて、わざわざ話す事はしないだろう。それには、変に誤解されたくないと言う気持ちもあるから……。

そう考えると、たまたま彼の職場が、身近な場所で知っている先生がいても、職場での話題を何もかも話して欲しいとまでは思っていない。それに今回の事も、どこかで私の誤解を避けようと言う気持ち働いて、言わなかっただけなのかもしれない。

そんな風に考えると、まさしく彼が危惧したのである。誤解と言うのをしてしまった訳だ。

バカみたい。

寒いから外まで見送らなくてもいいと氣遣ってくれた彼の気持ち、小さな好奇心で無駄にして、その上嫉妬心に心を乱されるなんて……。

そのせいで、彼が拓都をお見舞いに来てくれると言う心遣いを断り、彼が電話をしてくれるたびに心ざわつかせる日々を送ったなんて……。

拓都のインフルエンザのために仕事を休んでいた期間、いつもよりのずっと思ひ悩む時間が多かったせいで、どんどんよからぬ方へと進んで行った思考も、拓都の全快によって、いつもの日常が戻って来ると、正常に動き出したのか、こんな風に一人反省したのだった。

「美緒、やっと元気が出たみたいだな？」

拓都が全快して登校した日の夜、電話をかけてきた慧がこう言った。どうやら声のトーンが違うらしい。自分ではいつもと変わらずに話していたつもりだったのに、彼にはバレバレだったようだけど、その理由が違っている。

心の中で信じきれなくてごめんなさいと謝りながら、「やっぱりいつもの日常が一番いいね」と答えた。

「そうそう、今週の金曜日の夜、3学期の広報の会議なの。7時からなんだけど、慧はまだ学校にいる時間？」

たわいもない会話をした後、私は金曜日の予定を思い出した。

毎日、拓都を迎えに小学校へ行っているけれど、校舎の中へ入る訳じゃないので、彼に会えた事が無い。せっかくの校舎の中へ入るチャンスだから、一目でも見られたら……。

心がざわついていた時は、彼に会いたくないなんて思ったくせに、モヤモヤした思いを自己完結させた途端、声だけじゃ無くて、やっぱり顔も見たいと欲張ってしまう。

彼の元気な姿をちらりと見るだけでいいの。

「いつも、夜の7時ごろはまだ学校に入るけど、何か用事あった？」彼の反応は当然の事で、一目見たいからなんて恥ずかしくて言えない。

「別に何も無いんだけど……私が行く頃に、居るのかなって思っただけで……」

焦ったように言い訳すると、彼はクスツと笑った。

「わかった。それで、美緒はその日、何時頃学校へ来るんだ？」

笑いをふくんだ声で彼に問いかけられ、自分の浅ましい心を見透かされたようで、私の心は途端に苛立つ。

「5分から10分前には着くように行くつもりだけど」

一目見たいと思っていたくせに、素直じゃない私は天の邪鬼全開の低いトーンで答える。

「じゃあ、10分前には着くようにおいでよ」  
彼の笑いを抑えたような声が、癪に障る。

「忙しいから、約束はできない」

自分でも可愛くないなと思いながらも、天の邪鬼を止められない。

「みーお、一目でもいいから会いたいんだ」

うっと、思わず言葉を飲み込んだ。

これだから慧には敵かなわない。

私の天の邪鬼を面白がってからかうか、こんな風に先回りして、私が何も言えなくしてしまう。

分かっているのに素直になれない私は、学習力が無いのか、私も彼にからかわれるのを喜んでるのか……。

「で、でも、他のメンバーも集まって来るし、西森さんだって……」

「担任からクラス役員さんに渡すものがあるんだけど……ダメかな？」

結局自分の望み通りの展開なのに、何となく慧の策略にはまっ  
ている気がするの、なぜ？

「もう、慧には参るなあ。……それで、10分前に行って、職員室へ寄ればいいのですか？ 守谷先生」

「いや、俺が時間を見計らって玄関の方へ行くよ」

「はい、了解しました。……でも、本当に渡すものなんてあるの？  
なんだか慧に上手く言い包められてるみたい」

彼は誤魔化すように、ハハハと笑った。でも、今度は天の邪鬼は退散してしまっただようので、私は嬉しさを隠しきれずに、フフフと笑

いがごぼれてしまったのだった。

\*\*\*\*\*

約束の金曜日、1月28日は、広報の3学期最初の会議の日だった。

広報の会議は夜なので、時間までに拓都を迎えに行つて、夕食を食べさせて、お隣に拓都をお願いして、それから学校へ向かわなければいけないので、時間との競争だ。職場を予定通りに出られればいいけれど、どんな事で遅れるか分からない。だから、こんな日は朝から夕食の用意のできる所までしておく事にしている。そして、こんな時の便利なメニューは、カレーだった。

朝の内に圧力なべで、ルーを入れる手前まで煮込んでおき、帰つてから、カレールーを入れて仕上げる。そうすれば、簡単なサラダとスープを付け合わせれば完了と言う時間短縮ができるからだ。

その日も、慌<sup>あわ</sup>ただしく夕食を済ますと、お隣りへ拓都を送つて行き、学校へと急いだ。今日は何としても、会議開始の10分前までには学校に着いていなければいけない。

私が学校の駐車場に着いたのは、6時42分……焦り過ぎたようだ。

少し車の中で校舎へ向かうタイミングを計りながら、車を降りて玄関へ向かつて歩き出した。

他の人は何時頃に来るだろう……？

いつも委員長と副委員長は先に来ている。千裕さんも私より早い。いつも私がギリギリだからだろうけれど……。

私が車の中で時間調節していた間、誰もやって来なかった。そして、灯りの点いた玄関に辿りつき、靴を脱いでスリッパに履き替える。

「篠崎さん」

顔を上げると、優しく微笑む担任が立っていた。

「……こんばんは」

驚いて、一瞬息をのんで、それからやっと挨拶の言葉を言った。分かっていただけなのに、やっぱり慧と対面するのは、まだドキドキする。

「こんばんは、お疲れ様です。……時間通り、来てくれてよかったよ」

担任口調で挨拶を返し、後半は声を潜めて話す彼。なんとなく、人目を忍ぶような感じで、変に焦る。

「うん。まだ誰も来てないのかな？」

彼は真っ直ぐに私を見つめているのに、私は恥ずかしくて彼の方へ視線を向けられない。

「ずいぶん前に、広報の委員長だと思っけど、図書室の鍵を借りに来てたから、もう来ているんじゃないのかな？」

「そっか、委員長達はいつも早く来てるみたいだから。もうすぐ他のメンバーもやって来るから、こんなところで話をしてもいいの？」

私はやっと彼の方を見上げて、問いかけた。

ああ、一週間ぶりか…彼の顔を見るのは。

「いいだろ？ PTAの仕事でやって来た役員さんに担任が声をかけるくらい。……ああ、そっか。忘れないうちに、これを渡しておくよ。来月にあるクラス役員会議のお知らせが入ってるから。本当は今日拓都和翔也に渡すつもりだったんだけど、忘れた事にした

よ

笑顔でそう言いながら、彼は手に持っていた二つの封筒を私に差し出した。

「守谷先生でも、忘れる事があるんですね？」

私は封筒を受け取りながら、クスツと笑った。彼も笑いながら肩をすくめて見せた。

その時、玄関のガラスドアが開いて、冷たい風が吹き込んだと同時に明るい声が響いた。

「こんばんは。あつ、守谷先生、こんばんは。美緒ちゃんも、もう来てたんだ」

振り返った私の目は、嬉しそうな千裕さんの顔を捉えた。その途端、身体の中を妙な緊張が走った。

「こんばんは、西森さん。さっき、篠崎さんにも話していたのですが、今日拓都と翔也に役員会議のお知らせを渡すつもりが、忘れてしまつて……ちょうど篠崎さんを見かけたので、渡せて良かったです」

彼は何の動揺も見せず、担任の顔をして声をかけている。私のこの緊張を半分分けてあげたい。

「千裕さん、こんばんは。これが、そのお知らせなの」

ちょうどスリッパをはいて上にあがって来た千裕さんに、封筒の一つを差し出した。

彼と千裕さんがいるだけで何だか冷や汗が出そうだ。

来月のクラス役員の会議の時、どうなってしまうのだろうか？

「二人揃っているからちょうど良かった。そのお知らせにも書いた

のだけど、3学期の学年行事は発表会と親子レクリエーションなんです。でも、会議の時間をそれほど取れないから、親子レクリエーションの内容をそれぞれのクラス単位で会議までに考えておく事になって……体育館の中で出来る、体を動かすようなレクリエーションを考えておいて欲しい。それで、申し訳ないけど、会議の日、30分早く来てもらって、教室の方で1年3組としての提案を話し合いたいと思うけれど、どうですか？」

彼はすっかり担任モードで話している。私も保護者モードにならなくては……。

「わかりました。私は時間の方は大丈夫だけど、美緒ちゃんはどう？ いつもより早く早退できる？」

「うん、大丈夫だと思う」

「では、詳しい日時は、そのお知らせに書いてありますので、よろしく願います。じゃあ、これで」

そう言つと、彼は踵を返して職員室の方へ歩いて行った。後ろ姿を目で追っていると、千裕さんに声をかけられ、我に返つた。

「美緒ちゃん、行こうか？」

「うん、そうだね」

「そうそう、さっき、玄関のドアを開ける前に、ガラス越しに二人が話しているのが見えてね。とても楽しそうに笑ってたけど、美緒ちゃんもやつと守谷先生に慣れてきたんだねえ」

図書館へ向かって歩きながら、千裕さんがのほほんと、何の意図も無く、突っ込む。

声は聞こえてないだろうけれど、見られていたんだ。



別にやましい態度は取っていなかったとは思っけれど、何となく後ろめたさを感じてしまう。

「慣れるって……？」

「だって美緒ちゃん、最初の頃、守谷先生の前では、すごく緊張してたでしょう？」

ああ、そうだった。今思うと、あり得ない程の緊張だった。何だか遠い昔のようだけれど……。

「そうだったね」

「美人は3日で飽きるって言うけど、イケメンに慣れるのは10ヶ月もかかるんだね」

そう言っって、千裕さんが笑うから、私もやっとな緊張を解いて「かかり過ぎだね」と笑っって返した。

図書室の引き戸を開けて「こんばんは」と入っって行くと、委員長と副委員長が振り返っって挨拶を返してきた。

「今、インフルエンザが流行っっているから、今日の会議も3人お休みなのよ。人数少ないけど、3学期の新聞は殆ど例年通りだから、決める事は少ないの。だから、今日やっってしまうおっと思っって……よろしくね」

委員長が申し訳なさそうにそう話している時に、もう一人やっって来て、これで5人。今日はこのメンバーでする事になった。

皆が6人がけの大机を囲むように座っって始めようとしていた時、図書室の戸が開き、また一人入っって来た。

「ごめん、3学期もやっぱり夜の部の方の仲間に入れてね」

そう言いながら、机へ近づいてきたのは、2学期も夜の部に来ていた本部役員の人だった。

「いいわよ。今日はお休みの人が多いから、助かる」  
委員長がそう言つと、皆も笑顔で会釈して歓迎した。

夜の部の担当はPTA新聞の1面と4面で、3学期の新聞は卒業特集となるらしく、1面は校長やPTA会長、そして6年生の担当教諭の卒業生へのはなむけの言葉で、4面は1学期の時に決めていた企画記事で、今回は学校のバリアフリーについてだった。

企画記事のバリアフリーについてどんな記事を書けるか相談し、学校の玄関と児童の昇降口の段差をスロープにした事と、車いす対応のトイレが出来た事を載せる事になった。

1面に載せるはなむけの言葉の依頼文の作成と4面の企画記事の担当を決め、私と千裕さんと最後に来た本部役員さんが依頼文を作成する事になった。

6人だけなので、和気あいあいとお喋りしながら、作業を進めていると委員長が本部役員さんに「そういえば」と思い出したように話しかけた。

「愛先生の骨折って、守谷先生達とスキーに行った時なんだった？」  
えっ？ 愛先生が骨折？ スキーの時に？

私は思わず手を止めて、顔を上げた。同じように千裕さんも委員長の方を見ている。

「そうらしいよ。年末からお正月にかけて先生7人でスキーに行っただって。その時に転倒して腕を折ったらしいのよ」

「それで腕を吊っていたのか……」

「そうそう、左腕だからまだましだろうけど、仕事には不便だろうね」

「それにね、愛先生、骨折してるから運転できないでしょう？だから、守谷先生が毎日送り迎えしてるらしいのよね」

愛先生が骨折している事を知っている人達が口々に言葉を挟むと、又本部役員さんが爆弾を落とした。

え……………送り迎え？

そんな事……………一言も……………。

そして一気に私の脳裏にあの夜の浮かび上がった車内の映像が蘇よみがえった。

あれは、愛先生だったの？

寄る所があるって、愛先生を送って行くため？

じゃあ、今日も？

私と笑顔で会った後、愛先生を送って行くの？

ただの同僚と言うだけで、そこまでするのだろうか？

もしかすると、他の先生達と交代で送り迎えしてるかも知れないじゃないの？

たとえ、彼が送り迎えしていたとしても、何か訳があるのかもしれない。

もしかすると、以前付き合っていて、別れても情のある人だから、送り迎えしてあげているのかもしれない。私と再会した後、困っていた私を助けてくれたように……………。

いろいろな思いが頭の中を駆け巡って、どう考えればいいのか分からなくなってしまった。

でも、私は、あなたを信じたい……………。

信じたいよ……………慧。



### #63：揺れる心（後書き）

1週間の間に、ジェットコースターのようにアップダウンする美緒の心。

相変わらず、噂に振りまわされそうな美緒。

分かっているけど、信じきる事の難しさ。

まだまだ危うい二人の絆は……？

そして、この後の西森さんの反応は……？

次話をお待ちくださいね。

#### #64：バレンタインの記憶（前書き）

お待たせしました。

季節外れのバレンタインネタで、すいません。

季節前倒しなのか、遅れているのか、わかりませんが、  
どうぞ、想像だけでも3ヶ月進めてください（笑）

## #64：バレンタインの記憶

「うそー!!」と声を上げたのは、千裕さんだった。

目の端に千裕さんの驚く顔が映った気がしたが、私の脳は、目と耳の機能を止めてしまったように、何も頭の中に入って来なくなつた。

ただ、慧の事がグルグルと頭の中を駆け巡り、思考は同じ事を繰り返すばかりだ。

だから、にわかに関心以外の人達が、彼の話題で盛り上がっているのも、どこか遠くでテレビがついているような感じがするだけだった。

「これは確かな情報筋からの話だから本当だと思うよ」

「確かな情報筋って……」

「ウフフ、秘密」

「でもでも、私、守谷先生に怒られたんだよ!」

「エー! 西森さん怒らせるような事したの?」

「いや、怒らせたつもりないんだけどね。あのね、2学期の個人懇談の時、雑談しながら、ちょっと愛先生の事で突っ込んでみたのよ。そうしたら守谷先生、愛先生とは関係ないので、変な噂を立てたら愛先生に迷惑をかけるので止めてくださいって、ちょっと怒った声で言われちゃって……」

「それは西森ちゃん、守谷先生のプライベートを暴こうとしたからでしょう? 怒られても仕方ないよ。いくら守谷先生でも、芸能人じゃないんだから」

「だって、不倫とかじゃないんだから……別に暴くとか、そんなつもりはないけど……愛先生と付き合ってるのなら、応援したいなって思っただけだよ」

「何だか西森ちゃんらしいねえ」

「でもでも、やっぱり守谷先生と愛先生ってお付き合ってるのかな？」

「最近、守谷先生は保健室に新しく来た養護の先生と仲がいいって噂だけど？」

「ええっ？ あのハデ美人の先生？ 本郷先生だっけ？」

「本郷先生は、守谷先生の大学の時の先輩だっけ話だよ。それで仲良く見えるんじゃないの？」

「そうだったんだ」

「じゃあ、やっぱり、本命は愛先生？」

ぼんやりしていると、千裕さんに「美緒ちゃん」と肩をたたかれ呼びかけられ、やっと我に返った。

「えっ？ なに？」

聞いていなかった事がバレバレな反応の私を、怪訝けげんな顔をして千裕さんは見つめた。

「美緒ちゃん、どうかした？ 大丈夫？」

「えっ、いや、あの……ちょっと仕事でし忘れた事を思い出して、どうしようかなくて考えていたから……」

咄嗟の言い訳だったけれど、千裕さんは信じてくれたようだった。

「もう、美緒ちゃんは真面目だから……」

「篠崎さんって、いつもおとなしいけど、守谷先生の話題に興味ない？」

委員長がこちらを見てニッコリと笑った。  
興味ないって……そんな事……。



「いやいや、興味ない事無いよねえ？ 美緒ちゃんなんか最初役員になりたての頃、守谷先生の前に出ると凄く緊張して、可哀想なくらいだったよ」

千裕さんは、私の代りに余計な事まで披露してくれる。

「あつ、何だか分かる。あんなイケメンの前に出ると緊張するよね。遠くから見てる分にはいいんだけどねえ」

副委員長が助け船のように口を挟んでくれたお陰で、皆口々に同意してくれ、私は心の中で嘆息した。

\*\*\*\*\*

翌日の土曜日、由香里さんと千裕さんが子供達を連れて、我が家へ遊びに来た。3人が揃うのはクリスマスパーティー以来だ。

昨日の今日で、何となくみんなと楽しくおしゃべりする気分になれなかったけれど、以前からの約束だったから、断る事もできなかった。

自分では一生懸命いつもと同じように振舞っているつもりでも、聡い由香里さんには気づかれてしまうかも知れない。

そんな事を思いながらも、昨日の事は頭の片隅に押しやって、皆でワイワイと昼食をする。その後、子供達はリビングでゲームや玩具で遊びはじめたので、私達はダイニングのテーブルで紅茶と別腹のスイーツやお菓子を並べて、いつものお喋りを始めた。

「ねえ、ねえ、由香里さん。昨日スゴイ情報を聞いたのよ。ねっ、美緒ちゃん」

ああ、ついに来たか……と思いつながら、言いたくてうずうずしている千裕さんの輝く目が、私の方を向いてニッコリと同意を求めた。

私は心の中で溜息をつき曖昧に頷ずくと、昨夜仕入れたばかりの情報を得意気に話す千裕さんを、甘受しながら見つめていた。

千裕さんは悪くない。本当の事を言っていない私の方が悪いのだから、私のこんな気持ちに気付かなくても、仕方のない事。

そうは思っていて、本当は余り由香里さんには聞かせたくなかった。やっと由香里さんを安心させられたと思っていたのに、又心配をかけてしまう。

その時、千裕さんの話を聞いて驚いた由香里さんが、思わず私の方を見た。私は大丈夫だからと目で伝えながら、笑って見せた。

「それにしても、どうして守谷先生は、愛先生と関係ないなんて言っただらう？」

千裕さんが不満げに言うと、由香里さんは「本当に関係ないからじゃないの」と素っ気なく答える。

「でも、一緒にスキーに言った先生は他にもいるのに、どうして守谷先生が毎日送り迎えしてるの？二人の間に何かあると思ってもおかしくないでしょう？」

「たまたま、守谷先生の通勤途中に愛先生の家があったのかも知れないよ？」

由香里さんが、私の事を思って、反論してくれているのは嬉しかったけれど、千裕さんの方もむきになって言い返している。私は居た堪れなくなつて、由香里さんに目配せした。

「まあまあ、由香里さんも千裕さんも、噂だからね？そんな事でもめないで？」

「でもねえ、美緒ちゃん。やっぱり気になるじゃない？それに、守谷先生を応援したいのよ」

間に入って話を終わらせようと思ったけれど、千裕さんは担任の話題から引くつもりはない様だ。

「千裕ちゃん、あまり詮索すると、今度こそ本当に守谷先生に怒られちゃうかもよ」

由香里さんは苦笑しながらも釘を刺す。

「もう、由香里さんの意地悪」

千裕さんは情けない顔をしてそう言うと、同じように苦笑し、その話題はそこで終わったようで、私は心の中で安堵の息を吐いたのだった。

私達はその後もいろいろな話題で盛り上がり、楽しいひと時を過ごした。最初は気分が乗らなかった私も、やっぱりこの二人と話している、気持ちも晴れて行った。

千裕さんつてば、担任の話題を出さなければ、もっといいんだけどなあ……なんて、勝手な事を思いながらも、二人が友達でいてくれる事に心の中でそつと感謝した。

そろそろお開きにしようかと思った頃、千裕さんがポツリと言った。

「ねえ、もうすぐ2月だけど、美緒ちゃんはバレンタインデーはどうするの？」

バレンタインデー……すっかり遠のいたイベントだったので、忘れきっていた。

「考えてなかった……」

私は正直に答えると、千裕さんは驚いた顔をした。

「美緒ちゃん、何言ってるの！ せっかくのチャンスだから、彼にぶつかってみなよ」

千裕さんは又眼を輝かせて、勢い込んで言う。どうにも彼女は人の恋愛事を応援したいらしい。

私が助けを求めるように由香里さんの方を見ると、彼女もまたニヤリと笑うと、「そうそう、バレンタインデーは外せないよね」と千裕さんに同意するように言った。

バレンタインデーと言って思い出すのは、付き合い始めて初めてのバレンタインデー。

慧と付き合うまでも誰かにバレンタインデーのチョコを贈った事も無く、バレンタインデーを意識した事も無かった。それに、バレンタインデーは女の子が好きな人にチョコレートと共に告白する日だと思っていたから、無意識に関係ないと思っていたのかもしれない。

バレンタインデーが近づいたある日、美鈴に「バレンタインデーはどうするの?」と訊かれ、恋人同士にとっては、変わらない気持ち伝えて、確かめあう日なのだと、諭された。

美鈴に引つ張られるように連れて行かれた、大学近くのデパートにこの時期だけ登場するチョコレート特設売り場で、女の子達がシヨーウィンドウに近づけない程ひしめいていた事に驚き、テンションの高い女の子達の雰囲気ひるに怯んだ。そして、そこで女の子達のお喋りに登場する彼の名前を聞いた時、改めて現実を思い知らされた。美鈴は「モテる彼を持つと大変だね」と苦笑しているけれど、私の心の中は複雑だった。

彼がモテる事は分かっていた。けれど、私と一緒にいる時の彼はとても自然体で、彼の傍にいる事の心地よさを感じ始めていた私はその現実を忘れていた。否、考えないようにしていたのかもしれない。

その頃の私達は、付き合い始めてまだ二ヶ月弱で、恋愛経験値の

無い私は、彼との距離感が分からず、自分の就職試験のための勉強を優先させていたけれど、彼はそんな私を受け入れていてくれた。

男女の付き合いがどういうものか、友人からの話でまったく知らない訳じゃない。それでも、それを自分の事として考えるのは怖かった。だから、私達のその頃の関係は、少し親しくなった先輩後輩と言う感じだった。

そんな時に付きつけられた現実、私を不安にさせた。

もしかしたら、私なんかよりもっと彼の事を思っている女性が、彼に告白するかもしれない。

私なんかよりもずっと彼好みの女性が、彼に告白するかもしれない。

そんな事ばかりを考えていると、普段考えないようにしていた事まで、頭の中に浮かび始めてしまった。

もしかすると、付き合いを試みてみただけで、なんの色気も面白みも無い私に愛想を尽かして、手を出す気にもなれないのかもしれない。

そんなどうしようも無い考えが、だんだんと彼への気持ちさえも自信を無くさせ、チョコレートを用意する事さえできなくなってしまったのだった。

そして、バレンタインデー当日、その日は今年と同じ月曜日だった。もう既に春休みに入っていたけれど、私は公務員講座があったので、毎日大学へと通っていた。特に彼とは約束はしていなかったし、もう一週間以上会ってもいかなかった。あのチョコレートを見た行ったのはその会わなかった間の事だった。電話では話したけれど、バレンタインの話題には一切触れなかった。

何となく彼に申し訳ないと思いつつも、早く今日と言う日が過ぎてしまう事を祈り続けていた。

私がチョコレートをあげなくても、彼はきつと沢山貰うだろうし

……。

そんな風に考えながらも、私の胸はじくじくと痛んだ。

公務員講座を終え、駅へと歩いている時、クラクションが鳴って振り返ると、彼が車の中から手を振っている。一瞬、逃げ出したくなかった。

何も今日と言つ日に待ち伏せしなくても。まさか、チヨコレートを貰おうと思つて来たとか？

それでも、笑顔で手招きする彼に引き寄せられるように助手席に座った。『こんにちは』と挨拶をすると、彼も挨拶を返しながら、後部座席に置いてあったものを取ると私に差し出した。

それは、優しい香りのするフリージアとかすみ草の花束だった。

私は啞然として彼の顔を見上げると、彼は恥ずかしそうに笑った。『本当はバラの花束にしようと思つただけ、美緒さんにはこちらの方が似合う気がして……』

どうして私に花束を差し出しているのか、彼の言葉からは分からず首をかしげると、彼はハツとしたように『バレンタインだから……』と言った。

バレンタインに男性から花束？

私が『えっ？』と訊き返すと、『日本では女性からチヨコレートが定番だけど、海外だと男性からもするらしいから』と、彼は答えた。私は急に居た堪れなくなった。

『わ、私はチヨコレート用意してないから……』

『そんな必要ないよ。それに俺、チヨコレートそんなに好きじゃないし』

彼は慌てたように言い募った。

『でも、守谷君、チヨコレート沢山貰ったでしょう？』

そう言つと、彼は驚いて一瞬こちらをチラリと見た。彼のそんな様子を見て、私はまずい事を言ってしまったと後悔した。

『もしかして……焼きもちやいてくれた？』

彼は前を向いたままそう言つと、又チラリとこちらの様子をうか

がうように見た。

……焼きもち？ この感情は焼きもちなんだろうか？

いつの間にか車は、海辺の公園の駐車場に停まっていた。冬のこの時期、車はほとんど停まっていない。海の方を向けて止めた車から、海が見える。ちょうど夕陽が沈む時間帯だけれど、空はどんよりとした雲が垂れ込めていた。

……まるで私の気分みたい。

さっき彼が買ってくれたホットココアの缶を両手で包み込むように持って飲みながら、その指先から伝わる暖かさが、彼の優しさのようで泣きたくなる。そして、さっき彼が言った言葉をもう一度頭の中で反芻した。

……焼きもち、嫉妬……そういう感情は知っているつもりだけれど、私の中にあるもやもやとしたこの気持ちこそそう呼ぶのだろうか？

バレンタインデーに必死な想いで彼に告白する女の子達。彼女達に嫉妬してるのだろうか？

うつん、そうじゃない。

私は自分が彼にそんな必死な想いで告白する事が出来ないから、彼のくれる想いや優しさと同じだけのものを返していない自分が情けないんだ。

でも、こんなふうに彼と過ごす時間や空間を失くしたくないと思ってる。彼が他の誰かとと考えるだけで胸が苦しくなる。

『美緒さん、俺、誰からもチョコレートは貰っていないから……全部断ったんだ。付き合っている人がいるから……』

『守谷君……ごめん。チョコレート用意できなくて……』

『いいんだ。さっきも言っただろう？ チョコレートは好きじゃないって』

『でも……他の物も用意してないから……』

『美緒さん。わかってるから。俺が無理を言っ、付き合う事を前

倒して許してもらって、こうして美緒さんの傍にいられるだけで、いいんだ。それに、美緒さんの気持ちがまだついてこれない事は分かっているから。これから少しづつ二人の気持ちが近づいて行けたらいいなって思ってる』

『守谷君……』

どうしてそんなに優しいの？

本当に私なんかでいいの？

心に浮かんだ疑問は、彼の眼差しの真剣さの前に口にする事が出来ない。

『でも、一つだけ、お願いしてもいいかな？ バレンタインだから

……』

彼の眼差しが優しく緩んで、私の顔を覗き込むように問いかけるから、私は操られるように頷いた。

『俺の名前、下の名前で呼んでくれないかな？』

えっ？ 下の名前って……。

『慧、君？』

『君を付けられると、年下って言われてるみたいで嫌なんだけど…

…実際年下だけどさ』

彼は照れたように笑った。

君を付けないって、呼び捨てでって言う事？

『呼び捨てなんて、レベルが高すぎるよ』

『レベルって……なんのレベルなんだ？ そんなに気負わなくてもいいから、友達の事も呼び捨てで呼んでるだろ？ 俺も美緒って呼んでもいいかな？ 名前を呼び捨てで呼び合うだけで、今までよりずっと近づけるような気がするんだ』

彼が美緒って言った時、心臓がドキリと跳ねた。

彼の言う通りかもしれない。『守谷君』と呼ぶよりも『慧』と呼ぶ方がずっと近く感じる。

そして彼が、優しい眼差しで『美緒』と呼ぶから、私も彼の名を



呼ばなければと口にすれば……『け、慧』と、いきなり噛んでしまった。

それでも、名前を呼び合っただけの事なのに、どうしてこんなにドキドキするんだろう？

この最初のバレンタインが、私達をぐっと近づけた。でも、今の私達は、あの時よりも離れているんじゃないだろうか？

## #65：友の照らす灯り（前書き）

長らくお待たせして、すいませんでした。  
もっと早く更新したいと思いながら、いつの間にか12月になって  
しまいました。

長くなってしまったので、2話に分けて更新します。  
どうぞよろしく願います。

## #65：友の照らす灯り

由香里さん達が我が家に遊び来たその夜、案の定、由香里さんから電話があつた。又心配かけてるなつて思うと辛かつた。

「ねえ、愛先生の事、守谷先生から何か聞いてるの？」

やはり由香里さんは鋭いところを突いて来る。

けれど、由香里さんには誤魔化しは効かない。

「ううん、何も……」

「じゃあ、単なる噂かもね」

「でも、火の無い所に煙は立たないし……」

「美緒は本当の事だと思ってるの？」

本当の事……。

あの夜見た、車の中の人影が愛先生だったとしたら、辻褃が合う。

「まあ……、彼は優しいから、同僚が困っていたら、放っておけないなつて思うの」

そう、彼は自分を振った元カノでも、困っていたら、手をさしのべる様な人だ。それだけじゃない。一度自分の懐へ入れた人間だったら、ずっと気にかけてくれる。幸せを願ってくれる。愛先生と彼が噂通り付き合っていたのだとしたら、彼は余計に放っておけないに違いない。

「そう。それで美緒は、その事を彼に確かめたりはしないの？」

由香里さんは、益々私の聞いて欲しくない所に切り込んでくる。

「彼が私に話さ無いつて言う事は、私を知る必要の無い事だと思うの。私だって、職場の事を何でも話す訳じゃ無いし……」

「でも美緒、この話を聞いて、動揺したでしょ？ 不安になったんじゃないの？」

「そんな事……」

「無いつて言える？」

私が否定しようとしたら、その言葉尻をとらえて由香里さんは益々突っ込んできた。

私が何も言えずにいると、彼女は声のトーンを落とした。

「ねえ、やっぱり千裕ちゃんに話した方がいいんじゃないの？」

「えっ？」

「ほら、前に千裕ちゃんに本当の事を話すのは、2、3ヶ月後でも彼女なら分かってくれるって、私、言っただしょ？ でも、今日の千裕ちゃんの妄想の暴走ぶりを見てたら、美緒も辛いだろうし、千裕ちゃんも後で分かった時辛いんじゃないかな」

由香里さんの心配はよく分かる。その通りだと思う。でも……。

「由香里さん……私、怖い」

そう、怖いんだ。

千裕さんと出会えて、本当に良かったと思ってる。とてもいい人だと思ってる。

でも……、そんな彼女だからこそ、怖いんだ。

千裕さんと出会ってから、彼女が語る担任への思い入れの強さが……。  
担任の事を自分の事のように自慢し、彼の噂にはいち早く飛び付くのに、悪い噂は心配しながらも、毅然としてはね除ける。そして、愛先生との噂を喜び、応援したいと嬉々としている。そんな彼女の彼への思い入れが……。

「怖い？」

「千裕さん、彼の相手が私だなんて、がっかりするんじゃないかな？ ううん。もしかすると、許せないかも知れない」

千裕さんが好きだからこそ、がっかりされるのが怖い。思い入れが強いからこそ、私では許してもらえないかもしれない。その事がずっと心の中で引っかかっていた。

「何言ってるの！ 千裕ちゃんがそんな事思うわけないじゃない。応援している先生の相手が自分の友達だなんて、大喜びするに決まってるじゃないの！」

由香里さんは興奮したように反論した。  
わかってる。分かっているんだけど……。

今日の千裕さんは、担任に愛先生とは関係ないって言われてから鳴りを潜めていた彼への思い入れが、また強くなっていた。そんな彼女を見て、私は以前、広報の集まりの時の彼女や他の人達の、彼に関する噂話を思い出したのだった。

『独身だって、子供もいるのに守谷先生に迫るなんて、身の程知らずだよ。教師と保護者なんてタブーでしょ』

離婚して独身になった母親が、PTAの執行部と先生達の文化祭の打ち上げの時、『私は独身だから不倫じゃないわよ』と彼に迫ったらしい噂話の中で、広報メンバーのお母さんの一人が言った言葉

だった。その言葉に、千裕さんも真剣に頷いていた。

「千裕さんがそんな人じゃないって、分かってはいるんだけど……今日みたいに彼に対する思い入れの強い言葉を聞いてると、千裕さんの中に守谷先生の理想の相手と言うのがあって、それは、子持ちの保護者じゃないと思う」

「美緒……あなた、まさか、拓都君の事、引け目に感じてるんじゃないでしょうね？」

「えっ!?! ……………」

由香里さんの言葉に一瞬驚きの声を上げたけれど、何も言えなかった。

言われるまで、そんな事、思いもしなかった。

拓都が引け目？

でも、そう言う気持ちがあるから、千裕さんに対して言い出せないのだろうか？

「美緒、千裕ちゃん理想なんて、あなた達二人には関係ない事でしょう？ 千裕ちゃんね、守谷先生が選んだ相手を受け入れられない程、了見の狭い人じゃないわよ。美緒が一番、保護者だって事にこだわってるんじゃないの？」

あ……とても痛いところを突かれた気がする。

確かに、こだわっている。

あの広報の集まりでの噂話じゃないけど、担任と保護者だなんて普通に考えたらあり得ない組み合わせだと思っている。それに、彼の去年の旦那怒鳴りこみ事件の件もあるから、彼と保護者と言うのは、周りも敏感になるだろう。

そう私は、彼が私のせいで誤解されるかもと思うと辛い。

で、でも、だからと言って、拓都の事を引け目に感じているなん

て……そんな事、無い。

「確かにこだわってるとは思っけど……でも、拓都を引け目になんて感じて無い」

私はきつぱりと言い切った。

言われた時は動揺してしまったけれど、拓都の母親になると決めた事に後悔も無いし、ましてや引け目なんて……あるはずが無い。

ただ、彼との関係が担任と保護者と言う立場だから、どこか後ろめたさを感じてしまっていたのだと思う。

「うん。ごめん。私も言い過ぎた。でも、本当に、千裕ちゃんには、早く言ってあげないと、彼女、美緒の事苦しめたって罪悪感を持つと思うのよね」

それを言われると辛い。

頭の中で千裕さんに真実を告げるシミュレーションを何度も繰り返すけれど、いつもしどろもどろになってしまう。

千裕さんの反応を思うと、やっぱり怖い。

「わかってる。でも……2月15日の学習発表会で役員の仕事はおしまいなの。その後に話そうと思ってる。だから、もう少しだけ話す勇気を貯めたいの」

由香里さんの言うように、千裕さんの理想なんて関係ないのだけれど、それでもやはり気になってしまふ。千裕さんの期待に添えないだろうと言う事が、辛くなってしまふ。

「そっか……あと半月、か……話し辛いだろうけど、頑張れ」

由香里さんはいつも敢えてきつい事を言っけれど、最後は励まして背中を押してくれる。

「うん、ありがとう。由香里さん」

「お礼言ってもらおうような事、何もしてないわよ。それよりも、美緒。彼の事で気になる事は話し合わなきゃダメだよ。あなた達は真実を言わなかった事で、3年も辛い思いをしてきたのだから……」

あ…………。

由香里さんの言葉が胸に痛い。

でも、あの3年間を乗り越えられたのは、由香里さんがいてくれたからこそだ。

「そ、そうなんだけどね……彼から話してくれるのを待ちたいの」  
そう、彼が話さないのは、私が聞く必要の無い事だから……と思  
いたい。

本当は、聞くのが怖い。

彼を信じていない訳じゃないけど……。

あの時、仕事のため拓都を迎えに行けない私を、昔の知り合いだからと手を差し伸べてくれた彼だから、元カノかもしれない愛先生の窮地を放っておけない彼の優しさは、分かり過ぎるぐらい分かっている。

でも……。

彼を信じていると思いながら、愛先生に対して嫉妬している自分が醜くて嫌だ。

そんな醜い自分を彼に知られるのが嫌だ。

「美緒、不安はね、猜疑心や誤解を招くのよ。そして、二人の心をすれ違わせてゆく。それでも、自分から彼に訊かないって言うのなら、二人にマイナスになるような事は考えたらダメ。ただ、今とこれからの幸せだけを見つめていないと。あのね、恋人同士でも夫婦でも、一緒にいると何度でも、こんな風にお試しが入るの」

「お試し?」



「そう、お試し。人の心は見えないから、大なり小なり誰もが不安を抱えてるものなんだけど、その不安を煽るような出来事は、二人の絆をより深めて行くためのお試しなのよ。』どうだ、これでもまだ相手を信じきれるか?」って試されてるのよ。私と元旦那もそう。そのお試しを乗り越えられなかった。夫婦でもそうなんだから、恋人同士だったら、二人を繋ぐのは気持ちだけでしょう? だから余計に強い気持ちでないと、簡単に不安に流されてしまうのよ。そんな時はやっぱり本音で話し合わないと、ねっ」

由香里さん……。

由香里さんはいつも、私の進む遙か先を照らしてくれる灯りの様な人。

そうだね、由香里さん。

たとえ恋愛事に疎くても、彼を想う気持ちは誰にも負けない。

運命や人生や神が与えた試練であっても、あの辛い3年間の日々を思えば、乗り越えられるはず。

「由香里さん、ありがとう。何だか気持ちが軽くなった気がする」

「美緒、さっきも言ったけど、お礼を言ってもらっような事は何もしてないよ。私はただ、美緒より10年長く生きて経験して来たっただけだから。でも、少しでも美緒の不安が解消されたのなら良かったわ」

由香里さんの声やさっきよりも明るくなったのが分かった。その声を聞いて、私の心はさらに軽くなった気がした。

ありがとう、由香里さん。

もう一度心の中で呟いた。

#66：今ここにある笑顔を（前書き）

本日二度目の更新です。

長らくお待たせした分、続けての更新です。

どうぞよろしくお願いします。

## #66：今ここにある笑顔を

いつの間にか2月になっていた。

あの時、3学期が終わるまで、プライベートで会わないと、拓都にも言わないと約束し、3ヶ月なんてあつと言っ間だからと言いな  
がらも、時の過ぎるのがとても遅い気がしていた。3ヶ月がまるで  
何年も先のような気さえした。それでも時間は、遙か昔から同じリ  
ズムで過ぎてゆく。

1年前では想像さえしなかった現実がここにある。

転勤、引越し、入学……そして、再会。

再会してから改めて、自分の中の彼が過去の人ではなく、現在も  
自分の心の真ん中に居座っている存在である事を思い知らされた。  
そして同時に二人の間にある3年間と言っ時間の壁を意識せずには  
いられなかった。それを作りだしたのは自分自身だと言っ負い目さ  
えも……。

それでも少しづつ近づいてきてくれた彼。そして去年のクリスマス  
スに、その壁を一気に乗り越えて来てくれた。

何を不安になる事があるのだろうか？

「ねえねえ、ママ。今日、僕、二重跳び跳べたんだよ」

仕事を終えて、拓都を学童へ迎えに行った時、飛び出してきた拓  
都の第一声がこれだった。

3学期に入ってから、体育で縄跳びをするようになり、すっかり  
ハマっている拓都だ。こここのところ毎日、縄跳びの話題ばかりで

君が二重跳び5回も跳べるんだ』とか、『 ちゃんは、綾跳  
びを20回できるんだ』とか、『 守谷先生は、何回でも二重跳びが  
できて、ハヤブサって言う跳び方もできるんだ』と、まるで自分の  
事のように自慢げに話す。お友達の話の中にさらりと彼の話題が語

られる時、私はドキドキする鼓動を抑えながら、『凄いね』と答えるのが精一杯だった。こんな時考えてしまうのは、拓都に彼の事をどんなふうに話せばいいのだろうかと言う事で、千裕さんに話す事はまた違う憂いがあった。

「拓都、良く頑張ったねえ」

拓都に笑顔を向けてそう言うと、拓都は一気に破顔した。よほど嬉しかったのだろう。「今度は連続して二重跳びができるようになる」と新たな目標を掲げた。

拓都の成長していく様を見てみると、自分も頑張らなくては背中がしゃきつとする。拓都に恥ずかしくない生き方をしなくてはと、拓都と共に生きると思ったあの日から、私を芯の部分で支えて来たのは、そんな思いだったのかもしれない。

その時ふと思った。

拓都の保護者だったから、再会できたのだと。

保護者である事を気にしてたら、再会できた事も間違いになってしまう、と。

帰り道に足りない食材を買うためにスーパーに寄った。いつもは週一回届く生協で食品のほとんどを購入しているけれど、時々足りなくなるとこのスーパーへ寄って行く。

拓都とかごを持って歩いていると、この時期だけ出没するお菓子のコーナーに気付いた。

そう言えば、バレンタインはどうしようかな？

「ママ、こんなハートのチョコレート、前に沙希ちゃんにももらったね」

拓都が去年のバレンタインに貰ったチョコレートを思い出したのか、そんな事を言った。

沙希ちゃんと言うのは、同じ母子家庭仲間の子供の名前だ。沙希

ちゃんは拓都と同級生で、保育園の頃から毎年バレンタインデーには、母親と一緒に作ったと言うチョコレートを、由香里さんのところの陸君と共に貰っていた。

拓都はバレンタインデーだと言う事も分かってはいなかったけれど、チョコレートを貰った事は、とても嬉しかったらしく、忘れてはいないようだ。「そうだったね」と相槌を打つと、「沙希ちゃん、どうしてるかなあ」と拓都は子供ながらに遠い目をした。

「拓都が小学校へ入って、たくさんお友達ができたように、沙希ちゃんも1年生になって、たくさんお友達ができて、楽しく遊んでいるんじゃないかなあ」

語尾を拓都と同じように伸ばしながら、拓都の方を見下ろした。

「そうだね、沙希ちゃんもお友達たくさんできたよね」

私の方を見上げた拓都は、安心したような笑顔になった。

保育園の頃、拓都和陸君と沙希ちゃんは、よく三人で遊んでいた。保育園にいる時は、他の子たちも一緒に遊んでいたけれど、母子家庭の会の仲間達で集まると拓都の同級生はこの3人だけだったので、必然的に仲良くなっていった。その仲良しから引越しと言う事で最初に離れたのは拓都だけれど、去年の夏に陸君がこちらへ引越してきたから、沙希ちゃんが一人ぼっちになってしまったと心配していたのだろうか？

拓都はまだ7歳だけれど、出会いと別れを経験して来た。そんな経験の積み重ねも拓都を成長させ、離れた友達を思いやる気持ちを持てるようになったのだと思うと、感慨深いものがあった。

私はどうだろう？

拓都のように成長できているのだろうか？

拓都和過ごしたこの4年近くの間、ただ一生懸命に過ごして来ただけで、離れた友や周りの皆を思いやる気持ちを持っていただろう

か？

自分の事だけ必死で、何も見えていなかったんじゃないだろうか？  
彼に対しても、罪悪感ばかりで、彼の事を想う事さえ罪のような気がして、彼への想いに蓋をする事ばかり考えて、彼が元気だろうかとか、幸せだろうかとか、どうしているだろうかと思いやつただろうか？

一方的に突き放して、彼との全ての事に目も耳も蓋して、背を向けていたんじゃないだろうか？

ただ、思い出しに縋りついて、まるで自分が悲劇に主人公のように涙を流していただけじゃ無かっただろうか？

拓都におやつを買ってあげるから選んでおいでと言って、私はしばらくチョコレートコーナーを見て回りながら、また彼の事を考えた。

彼も会わなかった3年の間、いろいろな出会いと別れを繰り返しただろう。それなのに、あの頃と気持ちは変わらないと言う。私の事を怨んだっておかしくないのに、私への想いをずっと胸に留めておいてくれた。そう言えば、彼も由香里さんが言っていたように、私達の別れと離れていた3年間は運命に試されたのだと、あのクリスマスの朝言っていた。やっぱり由香里さんの言うように、何度も何度も二人の気持ちを試されるのだろうか？

でもね、二人の絆が強いものになったら、そんなお試しなんて気付きもしないで乗り越えて行くのだろうかと思う。

彼は、私の嘘も3年間の時間も飛び越えて来てくれた。

けれど私は、私の知らない彼の3年間の間に、不安になって……私はまだ、あの別れも3年間の時間も飛び越えられずにいる。

私の中の彼への想いは、負い目と不安で動揺しっぱなしだ。

目の前の高級そうなチョコレートやキャラクターの形のチョコレ

ート、定番のハートチョコから一粒一粒が宝石のようなチョコレートと目を移しながら、彼が最初のバレンタインデーの時、あまりチョコレートは好きじゃないって言っていた事の原因を思い出して、私はクスツと笑った。

彼は小学生の頃、5歳上のお兄さんが毎年バレンタインデーに沢山チョコレートを貰ってくるのが羨ましかったらしい。それはチョコレートを沢山食べられる事が羨ましかっただけで、モテる兄が羨ましかった訳じゃないって、彼は言い訳していたけれど。そんな彼が、中学生になるとバスケットを始め背も伸び、バレンタインデーに沢山チョコレートを貰うようになった。その頃の彼は女の子に興味は無く、ただ色々なチョコレートを食べられる事が嬉しくて、一気に沢山のチョコレートを食べたら気持ち悪くなり、それ以来チョコレートを食べられなくなってしまったらしい。

そんなトラウマのようなチョコレートを、手作りして彼に贈ったのは、2回目のバレンタインだった。まだあの頃は、彼がチョコレートを嫌う理由を知らず、ただ甘いものが苦手なんだと言うぐらいにしか思っていなかったので、甘さ控えめビターなチョコレートを贈ったのだった。

私が『甘いのは苦手だろうけど、チョコレートしか思い浮かなくて……』と差し出すと、一瞬困ったような顔をした彼は、『美緒のチョコレートなら大歓迎』と言って、すぐにチョコレートを食べてくれた。そして、『チョコレートがこんなに美味しいものだった事を思い出したよ』と優しく微笑むと、チョコレートを食べなくなった理由を話してくれたのだった。

何だかいつも彼には敵わないって思わされてしまう。年下なのに、まるで私よりもずっと大人な対応をしてくれる。

『美緒さんの気持ちがまだついてこれない事は分かっているから。これから少しづつ二人の気持ちが近づいて行けたらいいな』って思っている。

不意に初めてのバレンタインデーの時に彼が言った言葉を思い出した。

そうだ、私はいつでも彼の隣に並ぶ自信が無くて、戸惑ってばかりいた。そんな私を彼は、いつも大きな心で待って歩調を合わせてくれた。

今も同じだ。

いいえ、あの頃以上に、自信が無い。

裏切った私が、のうのうと彼の隣にいていいのだろうか、常にどこかで考えている。

負い目が自信の無さを助長させ、そして不安を大きくさせて行く。千裕さんに言えないのも、自信が無いからだ。彼の恋人は私だと言えるだけの自信が無くて……。

今でも本当に私でいいのだろうかと思ってしまふ。

これじゃあ、あの初めてのバレンタインデーの時から、何も成長していない。

『慧』と心の中で呼んでみる。

あの時すぐに呼び捨てでは呼べなかつたけれど、彼の名を呼ぶと少し彼に近づける気がする。

彼に想われる自信は無いけれど、彼を想う気持ちは誰にも負けたくない。

でも、それだけじゃあ駄目なのだろう。

彼を想う気持ちだけでは、また同じようなお試しがあつたら、彼のためと思つて身を引いてしまふだろう。

「ママ、おやつ決めたよ」

拓都の声が私の思考を中断させた。声のする方を見ると、拓都が小さなかごを差し出している。お菓子コーナーに置いてある子供用の小さなかごの中には、10円ガムや20円のチョコなどの細かいものが100円分入っていた。おやつを買う時に100円分と言うのは暗黙の了解だ。100円という制限の中で、楽しみながらおや



つを選ぶのが拓都にとっては嬉しい事の一つだった。

「ねっ、拓都、沙希ちゃんに貰ったようなチョコレートをママと作るうか？」

今年のバレンタインデーは、沙希ちゃんからのチョコレートは無い。本当なら、こっそり買ってプレゼントした方がいいのかもしれないけれど、何となく拓都の嬉しそうな顔を見たら、ポンとそんな考えが浮かんだ。

「えっ？ ママ、チョコレート作れるの？」

カカオ豆から作る訳じゃないけど、チョコを溶かして形を変えたり、何かを混ぜたりするのも、作って事だろう。「もちろん」と笑うと「わーい、嬉しいな」と拓都も笑って返した。

拓都のそんな笑顔を見ていたら、あんまり難しい事、考えなくてもいいのかもしれないと思った。

今ここにある拓都の笑顔が、いつまでも続く事が一番の願いなのだから。

彼と二人でその笑顔を守っていく未来だけを、今は見つめていた。

#67：胸を満たす温もり（前書き）

お待たせしました。

今回もよろしくお願ひします。

## #67：胸を満たす温もり

もう暦の上では春だと言うのに、どんよりと垂れこめた雪雲が、いまにも白い溜息をつきそうで、私は空を見上げて、自分の方が先に白い息を吐き出した。この冬一番の寒波だと天気予報で言っていたなと思いつながら、寒さに首をすくめたけれど、心の中はほっこりと暖かいものがある。

節分の昨日は、4年ぶりの豆まきをした。K市では集合住宅だったと言う事と、拓都は保育園で豆まきをしていたので、自宅では豆まきをしていなかった。私の子供の頃から姉達がいる間は、毎年この家で豆まきをしていた。小さかった拓都は記憶にない様だけれど、我が家では恒例の行事だった。

『ママ、鬼は誰がするの？』

保育園での豆まきは、園長先生がいつも鬼の役をしていたからだろう。私はそんな拓都の問いかけに苦笑しながら答えた。

『我が家の豆まきは鬼はいないけど、病気とか怒りんぼ虫とか泣き虫とか……見えない悪いものを外へ出てけ！』って、豆をまくんだよ』

そう、私の中の不安もネガティブな想いも皆、私の心から追い出してしまおうべく、『鬼は外』と豆を投げたのだった。

今年は、初めて恵方巻きなるものを買って来た。これは、我が家では習慣が無かった事だ。

豆まきの後、7種類の具が入っていると云う太めの海苔巻を、1本づつでは拓都には多すぎるので、半分づつに分け合って食べる事にした。半分ではご利益は無いだろうかと、チラリと不安になったけれど、半分でも願いがかなえばと勝手に解釈する事にした。そして、恵方を向いて願い事をしながら、何もしゃべらずに食べきるの

だと拓都に説明し、二人で神妙に食べた。

『拓都は何をお願いしたの？』

私は、食べ終わって顔を見合わせると、嬉しそうに笑った拓都に興味を惹かれ、思わず尋ねていた。

『あのね、ハヤブサが飛べますようにって』

『ハヤブサ？』

『うん。綾跳びの二重跳びの事だよ』

『うわぁ、難しそうだねえ』

『すつごく難しいんだ。でも守谷先生は何回でも出来るんだよ』

ニコニコしながら話す拓都の口から、当たり前のように彼の事が語られる。その名を聞きたび、心臓がドキリとするのを押さえ込みながら、その憧れの先生がパパになりたいって言ったら、拓都はどう思うのだろうか、ボンヤリと考えていた。

『ママは何をお願いしたの？』

拓都に問いかけられて我に返ると、拓都のキラキラ輝く瞳が私を見ていた。

『ママはね、拓都がずっと笑っていられますようにってお願いした』

『の』

私が優しく微笑みながら言うと、拓都は大きく目を見開いた。

『僕も！ ママ、僕もママにずっと笑っていて欲しい！』

勢い込んで言った拓都の言葉に、驚きと嬉しさで胸が詰まった。

『拓都……ママは拓都がいたら、いつだって笑っていられるよ』

私は胸が詰まりながらも、頬を緩ませてそう言った。それなのに、拓都の笑顔が消えて行った。

『……でも、ママ、溜息吐いてた』

えっ……？

拓都の前では気を付けていたつもりなのに、どこかで拓都はまだ小さいから分からないだろうと高を括っていたのかも知れない。

拓都は私の溜息吐いている姿を見て気になって、だから、笑って欲しいって思ったのかな？

『ママ、溜息吐くと嬉しい事が減っちゃうんだって』

拓都の言葉に驚いて絶句していると、また拓都が思わぬ事を言い出した。

『あのね、ママ。守谷先生が、溜息吐いたり怒ったりすると、嬉しい事が減っちゃうんだって言ってた。それでね、笑っていると嬉しい事が増えるんだって』

私が何も言えずにいると、一生懸命に説明してくれる拓都。そして、当たり前のように出てくる彼の名。

慧……そんな話を子供達にしてるんだ。

まるで諭すように私に話してくれる拓都の成長を喜びながら、その向こうに拓都の成長を促し導く彼の存在を感じて胸が震えた。

『ごめんね、拓都。ママ、溜息吐いてたね。これからは、溜息吐かないで笑うようにするね。拓都も一緒に笑おうね。それで、嬉しい事、いっぱい増やそうね』

嬉しそうに頷いた拓都の顔に、また笑顔が戻った。

職場でのランチタイムの節分の話題に、昨日の事を思い出し、一人こっそりとほおを緩める。外は冷たい風が吹いていても、心の中はほっこりと暖かい。笑った拓都の顔と彼の温かい眼差しが私の胸を満たしていた。

「それでねえ、娘が恵方巻きを食べてる最中に笑いだしちゃってねえ……」

職場のお母さんの存在で40代の南野さんが、昨日の節分での事を面白おかしく話している。この後、ご主人も笑い出して喉に恵方巻きを詰まらせて大変だったのだと、南野さんの話は身振り手振りでコミカルに語られ、みんな箸を止めて笑い合った。

ひとしきり笑った後、私より一つ年上で独身の長尾穂波ちゃんが小さく溜息を吐いた。

「穂波ちゃん、溜息吐いちゃってどうしたの？ お父さんは相変わらずなの？」

穂波ちゃんの溜息に目ざとく気付いた南野さんが、心配気な顔をして声をかけている。穂波ちゃんは去年の年末に、恋人との結婚を父親に反対されていた。その後、何度も恋人が挨拶に来て、父親は会おうとはしないらしい。父親が反対する理由は、婿養子に来てくれないのなら結婚は許さないと言うもので、彼の方も彼女の親の面倒は見るけれど、婿養子にはなれないと言いきっている。

どこまで言っても平行線の二人の間で、苦しんでいる穂波ちゃん。二人とも穂波ちゃんを苦しめるのは本望じゃないだろうに……。

「なんだかね、南野さんの様な家庭を築けるのかなって思っちゃって……現実はその以前の問題なんですけどね。父は相変わらず以上に、私にお見合いするように言いだして……」

「何それー！ 穂波ちゃん、それはもうかけ落ちか子作りでもしないと先に進めないんじゃないの？！」

30代子持ち主婦の速水さんが声を上げた。この人はいつも騒々しい。

「速水ちゃん、穂波ちゃんのご両親を泣かすような事、そそのかさないの！」

南野さんが速水さんをピシリと叱る。途端にしゅんとする速水さん。

「南野さん、いいんです。私も同じ事考えてましたから。でも、彼がそれはダメだって言うの。きちんと両親に承諾してもらわないといけないって……」

「はあ〜いい彼だよねえ。そこのお父さんが分かってくれ

るといいのにねえ」

南野さんが溜息交じりに言う。私と速水さんが加勢するようにうんうんと頷いた。

二人が想い合って、結婚したいと思っているのに、先に進めない穂波ちゃん達。

裏切った私を許して結婚までしようと言ってくれる彼と、こんな私でも喜んで迎えてくれようとしてくれる彼の家族達。

比べる訳じゃないけど、自分は何をしているんだって情けなくなつた。

負い目や不安で戸惑ってばかりいる自分が嫌になつた。

「だけど、穂波ちゃん。絶対に諦めちゃダメだよ。お父さんに反対されて落ち込んで、彼との仲までギクシヤクしないように、二人の愛情に自信を持って胸を張っていなくちゃダメだよ」

南野さんの力強い言葉に、穂波ちゃんが少し涙目になって頷いている。

……二人の愛情に自信を持って胸を張っていなくちゃダメだよ。

南野さんの言葉が私の頭の中でリフレインしている。

私は二人の愛情に自信を持っているだろうか？

私はそんな事を考えながら、窓の外のチラチラと白いものが舞い始めた冬の風景を見つめていた。

\*\*\*\*\*

立春の翌日の土曜、由香里さんと電話で話をしてから、丁度一週間。その間にも彼から電話はあつたし、メールのやり取りもしていた。けれど、由香里さんに勧められていたような肝心な話は何もできなかつた。

いざ、彼の何の屈託もなく話す声を聞くと、愛先生の事を気にしている自分が酷く恥ずかしくなってしまったのだ。

それに、由香里さんの話を聞いてから、大切な事はそんな事じゃないと気付いたから。小さな不安に囚われるより、私にはもっと大切な事があつたのだと思いついたから。だから、もう彼が私に話さない事は、私が知らなくてもいい事なんだと、もう一度自分に言い聞かせた。

今夜もまた彼とのホットラインが繋がる。彼の声が耳から身体中へ、暖かさを伴ってじんわりと広がって行く。

「拓都に聞いたか？」

「何を？」

「縄跳び。あいつ、二重跳び、今日は5回もできたんだ。よく頑張ってるよ」

「聞ってる、聞ってる。今日学童へ迎えに行ったら、満面の笑みで報告してくれたよ。そうそう、ハヤブサって言う跳び方は難しいの？」

「うーん、練習すれば跳べるようになると思うけど、1年生にはまだ難しいかなあ。拓都も練習してるけど、まだまだかな？」

「拓都ね、節分に恵方巻きを食べながら、ハヤブサが跳べますようにってお願いしたんだって。よほど飛びたいんだね。それに、守谷先生は何回でも飛べるんだって自慢してた」

私は少し笑いのふくんだ声で、拓都が自慢げに話していた事を思い出して言った。



「拓都は今、縄跳びがマイブームだからな。それにしても、何自慢してるんだか……」

彼は苦笑して言う。

「それでね、私のお願いは拓都がずっと笑っていてくれる事って言うたら、拓都も私にずっと笑っていて欲しいって言うんだけど、ママは溜息を吐いてたって言われてしまって……溜息吐くと嬉しい事が減っちゃって注意されたの」

「あつ、それ、俺が言ったんだ」

「そう、守谷先生が言ってた……それで、笑うと嬉しい事が増えるんだって教えてくれたの。慧って、いい先生だね。私、感動しちゃった」

「ばーか。当たり前だろ」

彼はそう言ってクスクスと笑っている。また、じんわりと暖かいものが胸一杯に広がった。

「俺さ、拓都に俺を意識しないで1年生を過ごして欲しいって言うてたけど、俺も拓都を特別視しないようにと思ってるんだけど、最近、拓都を見る目が以前とは違うなって思うんだ」

「以前とは違う?」

「うん。父親の目って言うのかなあ。どこか心配気に見ている自分に気付く事がある。これってちょっとまずいかなあ」

「慧ったら……」

彼の言った父親と言う言葉にドキドキしてしまった。

彼と拓都と3人で家族になるうっていう話は、まだどこか現実味が無く、こんな風に不意に彼の口から聞かされるだけで、頭のことか「いいの？ 本当にいいの？」と問いかける私がいる。

本当にいつまでたっても、どこか及び腰の私。

『二人の愛情に自信を持って胸を張っていなくちゃダメだよ』

また、南野さんの言葉を思い出す。

見えない気持ちを信じる事は難しいけれど、彼がくれるこの胸を満たす温もりをずっと抱きしめていたいと思う。そしていつか、胸を張れる程の自信を持てる愛情に育てて行きたいと思った。

## #68：凍りついた時間（前書き）

長らくお待たせしました。

クリスマススイブの夜、癒しのお供にでもなれば……

でも、今回は癒しにはなりそうにない内容かも。

どうぞよろしく願います。

## #68：凍りついた時間

2月の第2週目が始まった。寒さは相変わらずだけれど、この短い2月が終われば寒さも緩むと思うと、何となく心もウキウキしてくる。春はもう、そこまで来ている。それでも今週の予定を思い出すと、溜息しかでなかった。

今週の水曜日にはクラス役員会議がある。慧と思いが通じ合ってから初めての役員会議で、今まで以上に平静でいられる自信が無かった。それも千裕さんの目の前で、どんな顔をしていけばいいのか。とても彼の顔をまともに見れそうにない。私は上手く保護者の仮面をかぶり続けられるだろうか。

先日の広報の会議の前に玄関先で彼と千裕さんの三人で顔を合わせた時も、かなり緊張してドギマギしてしまったけれど、今度は会議の前に3人で話し合いをしなければいけないのだ。

「それで、俺達の事、西森さんには話したの？」

2月7日の月曜日の夜、彼と電話で話している時、水曜日にある役員会議の話が出て、その流れで彼が私に問いかけた。

「まだ、言っていないの。クラス役員の仕事が済んだら、話そうと思ってるんだけど……」

「俺の事なら、気にしなくていいよ」

「そう言う訳じゃ無くて……恥ずかしいと言うか……何となく話し辛くて……でも、千裕さんには心配かけてるから早く話さなくちゃとは思ってるんだけどね」

「美緒の話し辛い気持ちも分かるよ。西森さんに話す時は俺も一緒

にしようか?」

「えっ? 一緒に?」

「ああ、西森さんって思い込みが激しそうだから、美緒が話しても信じてもらえないかもしれないだろ?」

確かに、千裕さんは思い込みが激しいかもしれない。

愛先生の事も思い込んでる感じだし……、でも……。

「そうかな? そんな事無いと思うけど……」

彼がいてくれたら心強いとは思うけど、いきなり二人して彼女の前に立つたら、彼女はどう思うだろう?

「それに、美緒は西森さんに対して、本当の事を話してこなかった事、申し訳ないって思ってるだろ? それは俺のせいでもあるんだから、俺からも謝りたいんだ」

慧……どうして……。

私は胸が詰まってすぐには言葉が出なかった。

「……け、慧、ありがとう。でも、私一人で話したいの。いきなり慧も一緒だと千裕さん驚くと思うし……」

「じゃあ、美緒が話した後で、俺からも話をさせてくれるかな?

西森さんに謝りたいと言うのと、お礼も言いたいんだ」

「お礼?」

「そう、俺達が再会してから、いつも間に西森さんがいただろ?

西森さんの明るさに助けられた事も多かったと思うんだよ。だから

……」

ああ、そうだったね。

千裕さんは、彼の前でいつも緊張して強張った私の心を、彼女特有の明るさで解ほくしてくれた。

「そうだね。千裕さんがいてくれなかったら、役員するのも辛かったと思う。私もお礼が言いたいから、一緒にお礼を言おう」

そして、私達は話し合い、15日の学習発表会の後、まず私が千裕さんに話し、その後に彼も合流して、二人で謝罪とお礼を言おうと言う事になった。

彼と一緒になら、もう何も怖くない。

恐れずに前に進めばいいんだ。

\*\*\*\*\*

2月9日水曜日、午後3時に早退して小学校へ向かう。とうとうこの日が来てしまった。今回はいつもの会議とは違い、4時からの会議の前に、1年3組提案の親子レクリエーションの相談をするために、30分早く集まる事になっていた。それも、担任と千裕さんと私の3人で。

午後3時20分頃に小学校の駐車場へ車を止め、私は自分に活を入れた。

保護者の仮面をかぶり続ける事。それが今日の私の課題だった。

もういつそ話してしまった方が楽だろうかと思うけれど、千裕さんの反応が想像つかなくて、やはり怖いと思ってしまう。心の中では、千裕さんなら喜んでくれるはずと思っているのだけれど、彼女の担任への思い入れを思い出すと、とたんに自信が無くなる。

やはり、全てが終わってから……たとえ後で怒られる事になっても……。

「美緒ちゃんお疲れ〜」

1年3組の教室の前の廊下の窓から外を見ていた千裕さんが、私の足音に気付いたのか振り返り、いつものほんわかした声で挨拶代わりの労いの言葉をくれた。

「千裕さんこそ、お疲れ様」

子供達は帰った後の人気の無い廊下で、いつもと変わらぬ千裕さんに安堵の笑顔を向ける。

「守谷先生、まだ来ていないのよ。もう教室の中へ入ってもいいと思う?」

千裕さんの言葉に教室の中を覗くと、誰もいないせいでひっそりとしている。その時、近づく足音が聞こえ、振り返る前に胸が震えた。

「あつ、守谷先生、こんにちは」

先に振り返った千裕さんの嬉しげな声が、静かな廊下に響き渡った。

「こんにちは。いつもより早く集まってもらって、すみません」

担任はそう言って私達に会釈すると、「どうぞ」と教室の中へ先に入って行った。

私は挨拶をするタイミングを逃してしまい、会釈するのが精一杯で、緊張のメーターがすでに振り切っている。

担任はファンヒーターのスイッチを入れ、子供達の机をいつものように向かい合わせにしてくっつけている。後から入って行った私達もそれを手伝い、それぞれの席に着いた。

「親子レクリエーションは、考えて来てもらいましたか?」

いつものように千裕さんの方を向いて声をかける担任が、こちら

へも柔らかい笑顔を向ける。もうそれだけでドキドキしている自分が、恥ずかしい。こんな事でドギマギしていたら、千裕さんにバレルのも時間の問題か……。

「親子レクと言っても来られない親もいるから、親子がペアを組んでするようなレクリエーションは避けた方がいいと思うの。上の子の時はね、『ころがしドッチ』をしたのよ。楽しかったから、それもいいと思うし、『玉入れ』なんかも面白いかも」

驚いた。やはりPTA歴の長い千裕さんは、私の気付かない所を押さえてくれる。私は親子レクリエーションと言うからには、親子で組んでできる二人三脚なんかを考えていた。

「『ころがしドッチ』と言うのは、ころがしてするドッチボールの事ですね？」

「そうそう、普通のドッチボールだと1年生では危なかったりするからね」

担任は、「そうですね」と返すとメモを取っている。その手元を見つめていたら、顔を上げた彼がフツと笑うと「篠崎さんは何かありますか？」と私に話を振った。

どうして彼はこんなにも完ぺきに担任と言う仮面をかぶりきれののだろうか？

私は緊張と早くなる心臓の鼓動とで、動揺しまくりだと言うのに。

「あ、あの、保育園の時にした『ジャンケン列車』が楽しかったからいいと思うんだけど……準備するものも要らないし……」

担任と千裕さんの視線を感じて、いきなり噛んでしまったけれど、どうにか意見を言えてホツとした。しゃべりだしたら、少し気持ちが落ち着いて、何とか保護者の仮面をかぶれているようだ。

親子で組む遊び以外だと、これしか思いつかなかったけれど、私の意見を聞いた途端、千裕さんが嬉しそうに私の方を見た。



「あー、それもあつたね。『ジャンケン列車』は面白いよね。確かに準備も要らないから楽かも……」

千裕さんはウンウンと頷いて、私に笑顔を向ける。私の動揺には気付いてなさそうもないいつもの笑顔に、私は密かに心の中で安堵の息を吐いたのだった。

「『ジャンケン列車』と言うのは？」

共通の話題で笑い合っている私達に、話題に入り込めない担任が問いかける。

「あー、それはね、誰とでもいいからジャンケンして、負けた人が勝った人の後ろに繋がるの。それで、先頭の人がどんどんジャンケンをするたびに、負けた方が後ろへ列車のように繋がって行って、最後は一本に繋がった列車になるのよ」

すぐさま説明する千裕さんの顔を見ながら、私は同意するように頷いた。

「それは、何も準備が要らない上に楽しそうですね」

担任は柔らかい微笑みを浮かべながら感想を述べると、他に意見があればと問いかけ、その後彼自身の考えて来たレクリエーション『ボール送り』と『ハンカチ落とし』について説明した。

そうして、話し合った結果、『ジャンケン列車』と『玉入れ』を1年3組の提案と言う事になった。

サクサクと話し合いは進み、予定していた時間よりも早く終わった。本会議まで時間があつたので、誰とも無く雑談が始まり、和んだ雰囲気になった。

「何だか守谷先生、役員活動を始めた頃はどこかピリピリして固い感じだったのに、最近落ち着いたって言うか、柔らかくなったって

言うか……プライベートでいい事がありました？」

いつもの千裕さんの突っ込みに、こちらがドギマギしてしまう。

2学期の個別懇談の時に、担任に怒られたと落ち込んでいたのに、立ち直りが早いのか、学習していないのか……それも、千裕さんらしいのだけれど……。

いかにも興味津々って顔でそんな質問をされた担任は、少し驚いた顔をして、チラリと私の方へも目線を向けた。私は居た堪れなくて目を伏せる。

「私も1年生の担任は初めてで、緊張していたんですよ。西森さんのお陰でどうにか慣れて、無事に終われるとホッとしているからじゃないですか？ 篠崎さんも小学校は初めてでいきなり役員になって、最初緊張してみえたみたいだけれど、最近は慣れたみたいで、それも西森さんのお陰ですよね？」

えっ？ 私？

いきなり会話に巻き込まれるように話を振られ焦る私は、優しい笑顔を向ける担任を見てしまい、またドキドキと鼓動が早まった。

「そ、そうなのよ。千裕さんのお陰で、この一年間何とか役員を務められたと思うの。本当にありがとう、千裕さん」

「何よ、みずくさいわね。私は役員になったお陰で、美緒ちゃんに出会えて嬉しいのよ。それに、守谷先生とも沢山話せたし」

「私もお二人との役員活動は楽しかったですよ。いろいろとご協力頂いて、ありがとうございます」

担任は優しく微笑みながら、頭を軽く下げた。それを見て、私と千裕さんも慌てて「こちらこそ、ありがとうございました」と頭を下げる。

「守谷先生にそんな風に言ってもらえるなんて、役員した甲斐がありました。それよりも、本当はプライベートが充実してるから、そんなに落ち着いたんじゃないですか？ 聞きましたよ、骨折した愛先生の送り迎えをしていた事。もう、先生、関係ないなんて言っちゃって、照れなくてもいいんですよ」

千裕さんはご贔屓ひんぎの担任にお礼を言われて、気持ちが緩んだのだろう。ニコニコと話す千裕さんとは対照的に、驚いて目を見開いた担任は、同じく驚いて固まっている私を一瞥いちべつした。その視線は、美緒も知っているのかと問いかけているようで、私は思わず視線を落とした。

「西森さん、何度も言いますけど、本当に大原先生は関係ありません。送り迎えしていたのも、骨折の原因が私だからです。それから、まだ一部の人にしか言っていないませんが、私には結婚の約束をした女性がいいます。その人は教師ではありません。ですから、もう興味本位に大原先生を巻き込まないでください。お願いします」

彼は、少し怒りとやるせなさを滲ませた低い声で、言い含めるように話した。

私の心臓は、千裕さんの言葉に驚いて暴走しだしたけれど、彼の言葉に瞬間冷凍されたような気がした。

一瞬凍りついて、止まった時間。千裕さんも驚愕の表情で止まっている。

彼はきつと、こんな形で、愛先生の事を私には話したくなかったのだろう。

私は、彼が結婚を約束している女性がいると、暗に私との事を話してくれた嬉しさよりも、私が千裕さんに真実を言っていないかったばかりに、こんな形で話させてしまった事が辛かった。

それでも、私の気持ちを思ってたか、私との関係までは言わなかった彼の思いやりは、苦にがい思いをしながらも有難かった。こんな状態で、千裕さんに知らせたくはないもの。

そして、彼の小さく吐いた溜息が、止まった時間を動かす合図と  
なったのだった。

#68・凍りついた時間（後書き）

#69：緩んだ心（前書き）

お待たせしました。

今回は少し短いですが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

## # 69：緩んだ心

「守谷先生、結婚されるんですか？」

我に返った千裕さんは、やっぱり今回も学習する気が無いのか、はたまた好奇心の方が勝ったのか、勢い込んで問いかけた。

そんな千裕さんの様子に、私はまた強張った。そして、そつと彼を窺い見る。

彼は懲りずに問いかけてくる千裕さんに、一瞬苛立った表情を見せたけれど、すぐに感情を抑え込んだのか、憮然としている。

私は心の中で彼にごめんねと謝りながら、この話題が早く過ぎるのを願った。

「その予定です」

「わー、おめでとーございます。こんなおめでたい事、本人の口から聞いて嬉しいです。今までいろいろ言ってます。もう守谷先生つたら、こんなおめでたい事は、早く教えてくださいよ。そうしたら、何度も守谷先生に怒られずに済んだのに。ねえ、美緒ちゃん」

千裕さんには、担任の冷やかな態度も効果が無かったようだ。さつきまでの凍りついた空気を蹴散らすように、否、本人は全く場の空気を感じてなかったかの如く、ニコニコ顔で嬉しそうに担任にお祝いの言葉を言うと、同意を求めるように私に笑顔を向けた。

千裕さんと言う人は、普段は決して場の空気の読めない人ではない。けれど、担任の事になると、好奇心が勝ってしまうのか、自分の知りたい欲求が最優先になってしまうのだろう。

「美緒ちゃん、驚くのは無理もないけど、ほら、美緒ちゃんもおめでとーって言わなきゃ」

私の神経は彼の様子を窺う事に注がれていたため、千裕さんの呼びかけに反応するのが遅れてしまった。

おめでとうって……ニコニコ顔の千裕さんにどう反応したらいいか迷っていると、完全に守谷フリークになっている千裕さんは、無意識のままさらに追い討ちを掛ける。

「美緒ちゃん、言葉が出ない程、ショックだった？」

「い、いえ、驚いただけ。……お、おめでとうございます」

千裕さんに急かされて、お祝いの言葉を口にしながら、自分の今の状況を思うと急に恥ずかしくなり、頭を下げる振りして視線を彼からそらす。

「ありがとうございます」と言う少し笑いをふくんだような彼の声が聞こえて来て、私はまた彼を見た。私の目に入ったのは、さっきまでの冷たさが緩んで苦笑している彼。

「もう、西森さんには敵かなわないな。恥ずかしいですから、この事は内緒にしておいてください」

千裕さんのマイペースな天然っぷりに彼も観念したのか、先程の凍りついた空気はいつの間にか霧散していた。

良かった。彼が平静を取り戻してくれて……これも千裕さん効果だろうか？ この前彼が言っていた言葉を思い出す。

『俺達が再会してから、いつも間に西森さんがいただろ？ 西森さんの明るさに助けられた事も多かったと思うんだよ』

でも、無意識に引っかき回すのも千裕さんなだけだ……。。



「わかりました。ここだけの秘密ですね。それにしても、守谷先生の本命の彼女ってどんな人なんですか？」

本命の彼女……私は心の中で繰り返すと、ワクワクしたような顔をして担任の返事を待つ千裕さんをぼんやりと見つめた。そして、私の方をチラリと一瞥した彼を目の端に捉え、能天気な千裕さんに舌打ちしたくなった。

千裕さん、調子に乗り過ぎ！

私は心の中で突っ込みを入れたけれど、口に出せる訳も無く、どうしたら千裕さんの暴走を止められるのかとオロオロするばかりだった。

「ご想像にお任せしますよ。それではそろそろ時間ですので、会議室の方へ移動してください」

笑い出したいのを押さえているような笑いを含んだ声で担任はそう言うと、立ち上がった。

それを合図に私達も立ち上がり、机を元に戻すと、先に教室を出て行く担任に続きながら、私はやっと安堵の息を吐いたのだった。

担任の後を追いながら、千裕さんが嬉しそうな顔で声を潜めて私に話しかけて来た。

「ねえ、ねえ、美緒ちゃん。驚いたね。でも、良かったよね。守谷先生が幸せになるのなら、ねっ」

そう言いながら、千裕さんは感激したように一人ウンウンと頷いている。私が「そうだね」と返すと、「お相手はどんな人なんだろうねえ」とか「きつと綺麗な人なんだろうね」と、ワクワクしたように呟くから、私はまた居た堪れなくなった。

こんな事言われたら、余計に言えないじゃないの。

その後、会議室で1年の担任と役員全員での話し合いで、親子レクリエーションは『ジャンケン列車』『ハンカチ落とし』『大玉こ

るがし』に決まった。どのクラスからもよく似た意見が出たので、思っていたよりも早く決まり、会議は終了した。

解散後、今度の学習発表会の時の終わりの挨拶の当番が当たっている私達は、挨拶の言葉を考えるため、そのまま会議室に残った。

「ねえ、美緒ちゃん。守谷先生、愛先生の骨折は自分が原因だつて言ってたけど、何があつたんだろうね」

挨拶の言葉を決め、帰り支度をしていると、千裕さんがまたさっきの話題を持ち出した。それは、私が敢えて考えまいとしていた事だ。

「そうだね、スキーでぶつかったんじゃないかな？」

私は千裕さんに心の動揺を気取られないように、さっき彼が自分の責任だと言った時、頭に浮かんだ原因を口にしてみた。

「やっぱり美緒ちゃんもそう思う？ それにしても守谷先生は責任感が強いんだね。……ねえ、愛先生と守谷先生って、以前は付き合っていたのかなあ」

千裕さんは問いかけるようできて、後半は独り言のように言った。やっぱり千裕さんは愛先生の事が気になるのかな？

彼の相手は愛先生が良かったとか、思ってるのかな？

愛先生の事は自分の中ではタブーだった。それでも、こうして言葉にされてしまうと、その事が頭の中をグルグルと回り出す。

「千裕さんは、守谷先生の相手は愛先生が良かった？ 二人を応援したいって言っていたし……」

自分の思考が良くない方向へ向かっているのを感じながらも止められなくて、千裕さんに問いかけていた。

「それは、相手が愛先生だと思っていたからだし……私はね、守谷

先生が選んだ人なら、どんな人でも祝福したいと思ってるの。去年の旦那怒鳴り込み事件の時ね、それまで守谷先生はいい先生だとか言っていた人の中にも、手のひらを返したみたいに非難する人がいてね。なかには、イケメンでモテると思つて人妻を誘惑したんじゃないかとか、女たらしで散々女性を泣かせてるんじゃないのかなんて、言う人までいて、それを聞いた何も知らない人まで、彼ならあり得るかもとか言い出すし……だから私、守谷先生のファンだつて公言して、守谷先生の良い所を広める事にしたの。実際に良い先生なんだから、あの事件の後、毅然とした態度で、それまでと変わらず子供達に一生懸命に接してくれているのを見て、いつの間にか酷い事を言う人はいなくなつただけだね。だけど、守谷先生は良い意味でも悪い意味でも注目されちゃう人だから、早くきちんとした相手が出来て、結婚するといいいのになつて思つていたのよ。だから今日、本人の口から、結婚を約束した人がいるつて聞いて、嬉しかったなあ」

千裕さん……。

そう、千裕さんはこう言う人だった。そうとは見せずに周りに気を使う人だ。

恥ずかしいよ。千裕さんの事、天然とか調子に乗つてるとか……私、とても酷い事考えてた。

「千裕さん……ごめんなさい」

私は居た堪れなくなり、思わず謝っていた。

「えっ？ なに？ 美緒ちゃん、何か謝るような事したの？」

「私……千裕さんが守谷先生の事に一生懸命になつていいる裏に、そんな深い思いがあつたなんて知らなくて……」

「美緒ちゃん。私、格好付けていろいろ言つたけど、結局は守谷先

生のカッコ良さにミスターになってるだけだから」

千裕さんは笑顔でそう言つと最後にフッフツと笑つた。

「千裕さんつたら……」

「私ねえ、愛先生の事も好きなのよ。だから、二人が付き合つてい  
るのなら応援したいと思つていたのは本当なの。キャンプの時は良  
い感じだと思つただけどなあ。でも、以前に付き合つていたのな  
ら、元恋人同士が一緒にスキーに行くと言つのは変だよな。やつぱ  
り、単なる仲の良い同僚と言つただけかなあ」

千裕さんの言葉を聞いて、ああ、そう言われたらそうだと、変に  
納得した。そう思いたいだけなのかもしれないけれど、彼女の言葉  
は私の中でわだかまつていた想いをいつの間にか静めてくれていた。

私達は校舎を出て、学童保育の建物の前で別れた。別れ際、千裕  
さんは「これで守谷先生の事はー安心だし、今度は美緒ちゃんか幸  
せになる番だね。バレンタインは頑張りなさいよ」と言つと手を振  
つて駐車場の方へ向かつて行つた。もちろん私は笑顔で「頑張りか  
らね」と答えた。

#70：あなたと歩いて行きたいから（前書き）

ずいぶんお待ちしてすいません。

新年最初の更新です。

今年もどうぞよろしく願います。

今回は2話分の長さがあります。

大変だと思いますが、どうぞよろしく願います。

## #70：あなたと歩いて行きたいから

「そっか……千裕ちゃんって良い子だとは思っていたけど、ただのミィハーじゃなくて、深い想いを秘めてたんだねえ」

役員会議のあった日の夜、由香里さんに電話してその日の出来事を話した。それはきつと、自分の中で懺悔ざんげの意味があったと思う。そんな私の心情を分かっているながら知らないフリをしてくれているのか、由香里さんは軽い銚子で感想を言った。

千裕さんの事は、とてもいい人だと思っっているし、知り合えてよかったとも思っている。彼女がいたから、辛いはずの役員活動も何とかこなせたのだと思う。それでも、彼女の担任への思い入れを、時には不快に思ったり、時には怖いと思ったり……どこかで受け入れられない自分もいたのだと思う。

それは、私が知らない彼女を知っている彼女への嫉妬だろうか？  
彼のファンだと公言できる彼女への羨ましさだろうか？

今日、千裕さんから聞いた真っ直ぐでいて懐の深い想いに、あさましい自分が恥ずかしくてならない。

「由香里さん、私、どうしよう……千裕さんの思い入れを怖いなんて思っ……どこかで、結局彼の外見だけで騒いでるんじゃないかって、千裕さんの事見くびっていたかも知れない……。由香里さん、私、千裕さんにどんな風に本当の事言えればいい？ どうやって謝ればいい？」

いつも由香里さんに甘えてばかりではいけないと思いつつも、自分の情けなさを今すぐ消してしまえたらと、電話の向こうの由香里さんに縋りついてしまう。

「美緒、大丈夫だよ。千裕ちゃんね、そんなに了見の狭い人じゃ

ないから。それに千裕ちゃんは美緒がそんな事を思っていたなんて知らないんだから、今更言わなくてもいいよ。全てをありのまま言う事が誠実だとは言えないと思うの。相手が聞いて嫌な気分になるような事は、言わなくても済むのなら、敢えて言わないと言う選択肢もあると思うのよ。美緒が千裕ちゃんに言うべき事は、美緒の恋が上手くいった事と、相手が守谷先生だと言う事、それから、報告が遅れたお詫びだけ。今日の千裕ちゃんの言葉で、ある程度気持ちも楽になったんじゃない？ 後は、彼と二人で千裕ちゃんに良くお礼を言うておくことね。彼女はある意味、二人のクッション役をしてくれたようなものだから」

由香里さんは、まるで全てを見通すように、私に指南する。彼女は敢えて私のために強い口調で言うてくれる。彼女の言葉は、私の中にある答えと変わらないのに、迷った時はとてもストレートに私の中に道を見出させる。

どうしてこんなに弱くなっちゃったのかな。彼の事になると、とたんに前が見えなくなって、弱くなってしまっ自分情けなかった。

「いいのかな？ それで……」

「いいのよ。美緒はもう千裕ちゃんの守谷先生びいきに対して、怖いとか思っていないんでしょう？」

「それはそうだけど……」

「だったら、千裕ちゃんに本当の事を話して、早く喜ばせてあげなさい。彼女の望みは守谷先生も美緒も幸せになる事なんだから。その二人と一緒に幸せになるんだから、絶対に喜んでくれるから……ねっ」

千裕さんは喜んでくれるのだろうか？

そう、喜んでくれるよね。彼が選んだ人ならどんな人でも祝福し

たいつて言つてたもの。

由香里さんの言葉で、少し心が軽くなった私は、今度は甘えていた事が恥かしくなった。

「うん。ありがとう、由香里さん。ごめんね、甘えてばかりで……」  
毎回、そう言つて謝るけれど、やっぱり甘えて頼つてしまう。もつとすっかりしなきゃ。

「何言つてるの。お互い様でしょ」

全然お互い様じゃないのに、いつもそう言つてくれる由香里さんに、甘えてしまう自分を、心の中でそつと叱つた。

電話を切つた後、千裕さんにどんなふうと話そうかと考えていた。一番伝えたい事は、私の恋が上手くいった事だけれど、やっぱり最初に報告が遅れた事を謝るべきだろうか？

彼の事はどんなふう言い出せばいいかな？

頭の中でシミュレーションしてみる。もう何度も繰り返して来たことだけれど、今日の千裕さんの話は、由香里さんの言うように、確かに気持ちを少し楽にしてくれた。

その時、こたつの上に置いた携帯が震えだした。さっきまでは固定電話で話していたので、携帯をまだマナーモードにしたままだった事を忘れていた。

携帯の上蓋の窓に浮かんだKの文字を見て、ドキリとする。今日見た彼の自嘲気味な笑顔が脳裏に浮かんだ。

彼はどんな気持ちであんな事を言ったのだろうか？

一瞬そんな思いが頭をかすめたけれど、すぐに通話ボタンを押した。



「美緒、もう拓都は寝た？ 今いいか？」

彼はいつも最初に確かめる。こんな風に尋ねられると、妙な背徳感にゾクリとする。別に何も悪い事なんてしていないのに、一番大切な存在に隠している事が、裏切っているように感じてしまう。それは、友に關してもそうだけれど……。

「うん、大丈夫だよ」

私は、自分の中にある重い感情を吹き飛ばすように、明るく言った。

「美緒、今から行ってもいいかな？」

「えっ？」

行くって？

もしかして、ここへ？

「実はもう美緒の家の前に居るんだ。電話じゃ無くて、どうしても美緒の顔を見て話したい事があるんだ」

彼の話したい事は、今日の事だろう。私に何も言わず、あんな風に千裕さんに言ってしまった事を、彼は気に病んでいるのだろうか？

「わかった。今玄関の鍵を開けるね」

私は電話を切ると、年末に彼が訪ねて来た事を思い出した。また玄関で話すのだろうか？

今日是由香里さんと電話をしていたから、まだお風呂に入っていないなかった。

良かった、パジャマじゃ無くて……。

それでも火の気の無い玄関を思っ、厚手のフリースを上羽織った。そして、足音を忍ばせて玄関まで行くとドアを開けた。

彼はもうドアの前に立っていて、私の顔を見ると、少し困ったよ

うな微笑みを見せた。私は「こんばんは」と言いながら、同じように微笑んだ。

「美緒、こんなに遅くにごめん」

彼は挨拶を返した後、困った顔のまま謝った。時間は午後10時過ぎ、年末に来た時と同じような時間だ。私は「ううん」と小さく首を横に振ると、彼を玄関の中へと招き入れた。

「今まで仕事していたの？」

「ああ、いろいろしているとすぐに時間が経ってしまうんだ」

「夕食は？」

「途中で軽く食べたよ」

「寒いから部屋へ入らない？」

まるで彼が話し出すのを邪魔するように、次々に質問を繰り出してしまった。別に彼の話を聞くのが嫌な訳じゃない。なのに無意識に避けようとしているのは、これから彼が話す事に恐れを感じているのだろうか？

「いや、ここでいい。本当はこうして会いに来るのも、いけないと思ってるんだけど、どうしても今日だけは美緒の顔を見て話したかったんだ」

彼も同じように背徳感を感じているのだろう。それは、拓都の存在を大切に考えていてくれるから。

私は頷くと覚悟を決めたように彼の目を真っ直ぐに見つめると、彼が話し出すのを待った。

「美緒、今日は美緒に相談せずに、西森さんにあんな事言って、ごめん」

やっぱり、と心の中で呟くと、私は首を横に振った。

「私の方こそ、千裕さんに本当の事を言っただけで無かったから……慧に嫌な思いさせてしまっただけ……ごめんね。でもね、千裕さんは好奇心や興味本位で言ったんじゃないからね。慧の事を応援したいって思っているからだからね」

私は彼が千裕さんの事を悪く思っていないか、心配になった。それでも彼はその事はいいと言いたいのか、首を横に振り、真っ直ぐに私を見つめた。

「美緒も……知ってたのか？ 大原先生を送り迎えしていた事」

心臓がドクリと跳ねた。

とうとう、彼の口から、愛先生の事が出た。

どう、答えればいい？

気にしていないフリできるかな？

私はゆっくりと頷くと、気にしていないと伝えるため彼の目を見つめた。彼は「そうか」と言うと、小さく息を吐いた。

「2学期の懇談会の時、西森さんに、俺と大原先生が関係あるような事を言われて、驚いたんだ。それ以前にも西森さんは、大原先生と美緒が似ているって言う話をして来たから、美緒から何か聞いているのかと思ったりしたけど、とぼけてたんだ。そうしたら、美緒との事じゃなくて、大原先生と関係あるように言われて……やっぱり、美緒もそう思ってたのか？」

以前、西森さんから慧に関する話をよく聞かされると話した事があったから、私は知らないとは言えない。じゃあ、何と答えればいいの？

いつそ、愛先生との関係をはつきり訊いてしまえば、この不安も解消されるのじゃないだろうか？

たとえ以前付き合っていたとしても、私が現れたために二人が別れる事になったのだとしても……。

本当に？ それでいいの？ 聞いてしまったら、また辛くなるのじゃないの？

でも、上手く誤魔化す事なんてできそうにない。

視線を落として考え込んだまま答えない私に、痺れを切らした彼が「美緒」と呼び掛けた。

「ごめん。俺が美緒に何も言わなかったから、美緒を不安にさせたんじゃないか？」

名を呼ばれて顔を上げると、心配気な顔で私を覗き込むようにして彼は謝った。

彼に謝って欲しい訳じゃない。

私は顔を上げると意を決して口を開いた。

「1学期の頃、慧と愛先生がデートをしてたって、二人は付き合っているって噂を聞いたの。その後、キャンプの時に二人の雰囲気を見て、やっぱり本当なんだって思った。ずっと……」

彼は驚いた顔をした。そして「そんな噂が流れてたのか……」と呟いた。

私はあの頃の辛い気持ちが進み上げて来て、一気に目が潤んだ。その途端、彼の胸に顔を押しつけられた。彼の腕が背中に回り、抱き寄せられている。

そんな事をするから、涙が決壊してしまった。彼のダウンジャケットの胸のあたりに染みを作って行く。

「ごめん。美緒、ごめん。そんな噂が保護者の方まで流れてるなん

て、知らなかった。大原先生とは本当に関係ないんだ。付き合ってもいない。でも……彼女が赴任して来て初めて見た時、驚いたんだ。以前の美緒と髪型が同じで、そっくりに見えた。だから、たぶん、彼女に対しての俺の態度が、他の女性に対するものとは違っていたんだと思う。だから、周りの同僚から二人はいい感じだと冷やかされても、なぜか否定できなかった。それに、彼女は大学時代に男子バスケのマネージャーをしていて、バスケの話で意気投合して……デートしてるのを見たと言うのも、バスケの試合を見に行った時だと思う。デートのつもりはなかったけど、周りには余計に良い仲だと思われたみたいで……それが、保護者の方まで噂になってるなんて……」

彼はわたしを抱きしめながら、一生懸命に説明してくれた。けれど、彼の言葉に引かかって、余計に考え込んでしまった。

他の女性に対するものとは違っていた？

バスケの話で意気投合した？

一緒に試合を見に行った？

周りから冷やかされるのを否定しなかった？

これじゃあ、周りも愛先生も、誤解してもおかしくない。本当に、誤解だったの？

胸の中で嫌な感情が湧き出した。

「もしも、私がこちらへ帰って来なかったら……」

私は彼の胸を押し、その腕から逃れると、心の中で渦巻きだした想いを口にしかけて、はっと我に返った。思わず彼の顔を見上げると、彼は眼を見開いて私を凝視すると、いきなり私の腕を強く掴んだ。

「美緒。美緒とたとえ再会しなかったとしても、噂のようになる事は無いよ。分かってしまったんだ。大原先生に美緒を重ねて見ている

事に……」

私と重ねて見ていた？

それは愛先生にとつて、あまりにも残酷な事……なのに、心のどこかで喜んでしまった自分に気付き、また自分に嫌悪する。

私の腕を掴んだまま、訴えるように強く言う彼を私は怯えたように彼を見上げた。私のそんな様子に彼は慌てて掴んでいた腕から手を離してくれたけれど、私は自分の中でドロドロと渦巻く嫌な感情を彼に知られたくなくて、また視線を落とした。

「……それに、今回の送り迎えしていたって言うのも、今日話したように俺の責任なんだよ。スキー場で凄いスピードで突っ込んで来た人を避けるのに、咄嗟に大原先生を突き飛ばしてしまったんだ。そのせいで腕を骨折して、運転ができなくなったから、送り迎えをしてたんだよ。他の先生も交代しようと言ってくれたけれど、俺の通勤途中に大原先生の家があつたから、俺が一番都合が良かった。それだけの事なんだ。……美緒に何も言わなかつた事は、悪かつたと思つてる。2学期の懇談会で、西森さんに大原先生と関係があるように言われて、初めて美緒もそんな風に思つてるかも知れないって、不安になつた。だから、言えなかつた。どんなふうにも言つても、美緒に誤解されそうで……」

慧……慧も不安だつたの？

クリスマスの朝、二人の想いを確かめ合つたのに、やはり3年と言つてブランクは大きくて、お互いに気を遣い合い、相手の出方を窺つていた気がする。

彼は私を不安にさせそうな事は知られたくなかつただらうし、私も不安な気持ちを隠していた。

結局私達つて、3年前の別れが何の教訓にもなつていない。又、同じ事を繰り返えそうとしている。

その時不意に由香里さんの言葉を思い出した。

『恋人同士でも夫婦でも、一緒にいると何度でも、こんな風にお試しが入るの。二人の絆をより深めて行くためのお試しなのよ』

そう、私達は試されてるんだ。そう思うと、なぜだか急に可笑しくなつて、クスツと笑つてしまった。

しばらくお互いに黙り込み、張り詰めた空気の中、急に私が笑つたからか、彼は怪訝けげんな顔をした。

「ごめんなさい。私達、まだまだ試されてるんだなつて思つたら、なんだか可笑しくなつてしまつて……由香里さんに言われたの。二人が一緒にいると何度でもお試しがあるつて。それは、二人の絆をより深めて行くための試練なんだつて……私、その話を聞いたとき、3年間の辛い日々のことを思つたら、乗り越えられるつて思つたの。それなのに、ぜんぜん成長していなくて……なんでも話し合おうつて言つたのに、慧に心配かけたり、愛想つかされるのが怖くて、不安な気持ちと言えなかつたの。本当にごめんなさい」

「何謝つてるんだよ。悪かつたのは俺の方だろ？俺が何も言わなかつたから……」

私は彼の言葉を断つように彼の腕に触れた。そして私は彼の顔を見上げて、微笑んだ。

「慧、お互い様だから、もうこれ以上言うのは止めよう？私達はまだまだつて事なのよ。だから、何度でも試されるんだと思う。でもね、強い体を作るのでも、負荷を掛けて鍛えるでしょう？それと同じで、今回の事も二人の絆を強いものにするための負荷だと思ふの。やっぱり慧と分かれた後の辛さを思えば、どんな事だつて乗り越えられると思う。今こうして慧の傍にいられる幸せを、私は大切にしたいの」

そう言つて笑顔を向けると、彼は酷く真剣な眼差しで私を見てい

た。

やっぱり怒っているのだろうか？

それとも、呆れてる？

急に不安になった私は、笑顔を保つ事が出来なくなった。怖くなくて視線をそらすと、彼が急に嘖き出した。

「美緒にはやっぱり敵<sup>かな</sup>わないな」

彼は自嘲気味に笑いながら言った。

私に敵わないって……？

私はもう一度彼を見上げると、彼はバツが悪そうに笑いながらも、甘く優しい眼差しを私に向けた。

ああ、慧は、どうしてこんなにカッコイイんだろう……どうしてこんな素敵な人が、私なんかを選んだのだろう……。

私は彼の眼差しに囚われたまま、見惚れていた。

多くの女性の関心を引く容姿を好きになった訳じゃないけれど、最初に彼に興味を持ったのはその外見だった。それでもそれはサークルにいる時だけの事で、その他の時には忘れていた存在だった。

その彼に本当の意味で関心を持ったのは、夏休みの公園で子供達に見せていた自然な笑顔を見た時からだ。だからと言って、その気持ちは恋愛感情に発展するとか、自分が彼の恋愛対象になるなんて思いもしなかった。

まさか、彼の一番傍にいる存在になるなんて……。

「まだまだ俺達が試されるなんて思いたくないけど、美緒の言う通り、俺達って成長が無いって言うか、学習してないよな。美緒はいつも強いなって思うよ。今だってもう気持ちを切り替えてる。美緒のそんな前向きな強さが好きだし、羨ましいよ」

何気に「好き」だなんて言われて、カッと頬が熱くなった。

でも、私はそんなに強くない。慧の事になると、とんに弱くなってしまうのに……。



「そんな事無いよ。今だって不安だらけだもの……慧の方がいつも自信にあふれて、前を向いて頑張ってるじゃない」

あの、クリスマスの朝、彼は不安な様子なんて少しも見せずに、一気に私の心に詰め寄って、二人の未来まで描いて見せた。なのに、羨ましいなんて……。

「美緒の前では虚勢を張ってただけだよ。本当は不安で怖くてしかたないんだ。本当に美緒は、もう一度俺と一緒にいてくれるのかって……」

彼は、私の言葉を聞くとさっきまでの微笑みが消えて、少し不安げな表情をして、自嘲気味に言った。

その時、私は不意に気付いた。彼の不安はあの別れのせいだと。二人で渡っていた虹の橋の上から、いきなり彼を突き落としたようなものなのだから。

私のした事は、こんなにも彼を追い詰めていたのか。

私は、どうやって償えばいいの？

このまま許されていいの？

私は後悔と彼への申し訳なさで、彼を見上げた。そんな私を見て、彼は慌てた。

「ごめん美緒。美緒を責めてる訳じゃない。こんな事言ったら、美緒が気にするの分かってたのに……俺は、美緒が負い目で俺の傍にいたくちやあって思うのが嫌なんだ。同情とか謝罪の意味で、俺の気持ちを受け止めるのなら、はっきりと断って欲しい。確かに、あの時の事を思い出すと怖くなる。でも俺は、あの別れは、俺たちにとって必要な事だったんだと思ってる。あの時は俺は学生で、美緒には拓都がいて、どうしようもなかったんだって納得している。だから、もう、俺に対して申し訳ないとか、負い目を持たないで欲しい

んだ。償いなんて欲しくない。俺は純粹にこれからの人生を美緒と歩いて行きたいと思ってるだけだから。拓都も一緒に」

彼はまた温かい眼差しを私に向けていた。私はどんと目が潤んで来るのが分かった。

私を責めずに、あの別れは必然のものだと言ってくれる彼。

彼の深く大きな想いの前で、不安になっていた自分が恥ずかしかつた。

そして彼にも、不安で怖いなんて思わせたくない。

「慧、ありがとう。確かに負い目や罪悪感はあるし、自分のした事を忘れちゃいけないとも思うの。同じ事を繰り返さないためにも。でもね、この気持ちはそんなものとは関係ないの。あの別れ以前と変わらない、いいえ、再会してからもっと大きくなってる。……慧、慧が好きだから、私もこれからの人生をあなたと歩いて行きたいと思ってるの。……本当にこんな私で、いいの？」

込み上げてくる感情を抑えつけながら、彼の不安を払しょくしたくて、いつもならなかなか言えない想いを口にした。

うるんだ瞳のまま彼と見つめ合って、この想いが言葉だけじゃなくて、瞳からも伝わればいいと願いながら、彼を見上げてみると、「美緒」と呟くように呼んだ彼が、そっと私の背に手をまわして抱きよせた。まるで涙を吸い出すように、目元に彼の唇が触れる。その唇が、頬に、耳元に触れると、「美緒、愛してる」と囁いた。彼の声に胸が震えた瞬間、涙は決壊した。そして、「私も」と返そうとした言葉をのみ込むかのように、私の唇に彼のそれが重なった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2967q/>

---

いつか見た虹の向こう側

2012年1月14日01時46分発行